文字通り絵に描いたような、あくまでドラゴンメインの高校生活

ぐにょり

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人間、神、悪魔、天使、堕天使、妖怪、龍。

この世界には様々な種族が居て、派閥があり、縄張りがあり、ルールがある。

煩わしい、馬鹿馬鹿しい。

どいつもこいつも、似たような姿をしている癖に、ご大層な区別をして。

この大地も、あの青い海も、あの蒼い空も、星も、月も、太陽も塵も糞も風も。

何一つ変わらない癖に。同じような作りで、同じような並びで。

気に食わない、目障りで、醜く、見難い。

でも、それは此方の主観でしかなくて。

大体の連中はそんな事を思ってもいない。

だから、目を瞑っていようと思う。

目に映る、気に食わない全てに目を瞑って。

目を瞑らなくてもいい場所と相手を作って。

そうすれば、ほら、この世も意外と悪くない。

あなたも、そうは思いませんか？

※話の筋が纏まりました！

※この物語は、世界に不満がある主人公が、それでも嫌な処は目を瞑ってやり過ごし、目に優しい巨乳美女とストレス無く生きようとする物語です。
※更にそんな主人公とユウジョウを結ぼうと貧乳美少女が右往左往したりします。
※話の展開に詰まったら打ち切り最終回をぶち込んで無理矢理終わらせます。

なお、後書きにはどうでもいい情報や本編を読む分には必要ない設定資料などが度々登場します
話を読んだ後は余韻に浸りたい、語りたいことは作品の中でだけ語って欲しい、という方は、設定とかをあれこれして後書きを消したりするといいかもしれません

目次

序　春に出会い ―― 1
一話　猫は見つめ ―― 7
二話　蛇は絡み ―― 19
放課後のディアボロス
三話　人は離れ ―― 28
四話　死を描き ―― 43
五話　龍は惑い ―― 56
六話　闇に紛れ ―― 65
七話　昼は備え ―― 77
八話　夜に集い ―― 88
九話　龍は駆け ―― 100
十話　翼を彩り ―― 112
十一話　猫の距離感 ―― 124
戦闘校舎のフェニックス
十二話　夜明け前には星を見て ―― 131
十三話　放課後にはお茶会を ―― 143
十四話　昼前には命懸け ―― 154
十五話　真夜中には踊り出し ―― 168
十六話　深夜、黄昏よりも昏く、血の流れよりも紅く ―― 182
十七話　綺麗な朧月夜に ―― 203
月光校庭のエクスカリバー
十八話　コンビニ帰りに見た神父 ―― 215
十九話　オカ研で見た聖剣使い ―― 226

二十話　展示会詐欺に遭っていた間抜け ―― 245
二十一話　夜の校舎に復讐者 ―― 261
二十二話　レイト・レイト・レイト・ショウ ―― 275
二十三話　胸は無くとも明日はある ―― 290
二十四話　忍者と聖剣が出て殺す ―― 298
二十五話　揺れる橋に座る猫 ―― 315
停止教室のヴァンパイア
二十六話　世は緩やかに動き出し ―― 324
二十七話　水の中で繋ぐ手 ―― 339
二十八話　楽しい楽しい授業参観 ―― 358
二十九話　肩透かしの教会 ―― 383
三十話　魔眼とメガネと、時々女装 ―― 397
三十一話　祭りの前、会議にて ―― 410
三十二話　共に立ち、共に歩く為に ―― 428
三十三話　唆す者、救う者、或いは一線の向こう側 ―― 445
三十四話　私と貴方の立ち位置 ―― 481
冥界合宿のヘルキャット
三十五話　夏の決心 ―― 493
三十六話　わたしのなつやすみ ―― 506
三十七話　それは祭りのエスコート ―― 520
三十八話　Ｋの懊悩／懐かしい繋がり ―― 543
三十九話　Ｋの懊悩／変化を望んで ―― 557
四十話　Ｓの本心／色褪せない心の華 ―― 577
四十一話　Ｓの本心／貫くこころ ―― 603
四十二話　打ち合い、交わる道 ―― 621

四十三話　素知らぬ顔の猫、冤罪の猿、囚われの鯖 —— 646
体育館裏のホーリー
四十四話　残暑、秋を待ちながら —— 655
四十五話　青春、度が過ぎて —— 668
四十六話　友人、意識する程度には —— 688
四十七話　観察、傍らより —— 709
四十八話　提案、多くを望めば —— 724
四十九話　蹂躙、するもされるも —— 743
五十話　覚醒、良くも悪くも —— 761
五十一話　虚剣、魂すらも打ち砕き —— 779
五十二話　疑問、答えは柔らかに —— 802
放課後のラグナロク
五十三話　かくも穏やかで平和な日常 —— 818

序　春に出会い

すう、と、小さく音を立てて息を吸う。
季節は春。
木々は芽吹き、虫や動物が目覚めるこの季節の空気は格段に美味しい。
冬ほどに寒くなく、夏ほどに騒がしく無く、秋ほどに寂しくもない。
暖かな気温に土から立ち上る水の気が、草木を巡り吐出される青臭い匂いが、どうしようもなく命の息吹を感じさせる。
普段は食事時にしか意識しないような感覚が、今が命の季節であるという実感を与えてくれる。
燦々と降り注ぐ日差しに空を仰ぐ。
瞼越しに目を焼く太陽光線に手を翳す。
「いい天気だなぁ」
季節が春なのは、まぁ、春だから当然としても。
空が晴れているのは良いことだ。
別に雨の日が嫌、という訳でもないが、やはり今日ばかりは晴れていて良かったと思う。
何せ、今日は楽しい楽しい入学式。
中学を卒業し、高校という新たなるコミュニティでの新しい生活、その初日ともなれば、やはりこういった爽やかな天気の中で迎えたいというのが人情というものだろう。
学校が近づくにつれ、徐々に通りには人の気配が増えてきた。
早起きという程早くもなく、遅刻する程に遅くもないこの時間にこの辺りを歩いているのは、大凡上とも下とも付かない、自分と同じく平均周辺を彷徨う極普通の学生達。
友と連れ立っているものは会話を交えつつ、一人で道を行く者もそこそこに。
そういう自分がどちらに分類されるか。
こんな事を延々考え続けている時点でお察しだろう。
朝の通学時に共に通える友人を作れるかどうか、というのはかなり

運の要素が強い部分であると思うため、それほど気にしている訳ではないが。

無いが……、共に登校できる相手が居るにも関わらず、一人で登校する、というのは、どうにも座りが悪い。

タイミングが合わないから仕方がない、と言ってしまえばそれまでだが、少し提案すればそのタイミングを合わせる事は容易い筈だ。

……でも正直、いざ話をする段階になってこの事を覚えているかは微妙だな。

たぶん、毎朝一緒に登校、となると、それはそれで煩わしく感じてしまうだろうし。

いやはや、我ながら勝手な話ではないか。

「まぁ、仕方がない」

それが個性だ。

およそ自分の個性を箇条書きにして表せば、幾つかの説明の中に複数回自己中心的である旨が記されるレベル故、致し方なし。

そういった部分と折り合いを付けて、それでも付き合ってくれる気のいい仲間を見つけるのを、取りあえずの高校での目標に――

「んー」

思考を止めて唸る。

知っての通り、ここは学校へと続く通学路だ。

だから、此方以外の学生も多く居る。

その中の幾らかは先程の独り言を耳にして、此方に視線を向けたりもした訳だ。

だが、たかだか二言程度の独り言、思わず口から漏れてしまった程度の言葉でしかない。

「……」

じぃっ、と、少しの距離を取りつつ視線を向け続けられる理由にはならないのでは無いだろうか。

感じる視線の元に居るのは、気配と、相手の心音、血流、筋肉の稼動音から察するに、此方と同じような年齢の、小柄なショートカットの少女のものだ。

視線から感じられる感情が好意的なものであれば、まぁ、嬉しいかどうかはともかくとして、納得はいくのだが。

猜疑心、いや、好奇心？　そんなものを主成分とした視線を延々と注がれ続けると、どうにも不安になってしまう。

「あの」

「あの」

声が重なる。

視線の発信者である少女と、視線の向かう先である此方の声。

やや、気不味い。

少女と共にどうぞそちらから、いえそちらからと数度に渡り譲り合いをした結果、とりあえずは此方から問を行う事に。

「先ほどから視線を向けて居ましたが、何か、おかしなところでもありましたか？」

春の陽気にあてられていたところが無いとは言えないので、少し変な振る舞いだったかも、とは思う。

だが、天気がいい日、しかも門出の日に空を仰いで『いい天気だ』と口走る程度の奇行、誰しも少なからず経験がある筈だし、そこまで注目を浴びる用な事も無い。

しかも此方は下ろしたての制服に袖を通したピカピカの一年生。

気分が高揚してしまうのも、登校時に友人と同行していないのも、仕方がない事ではないか。

そういう相手は、ほら、これからの高校生活で作るとか、手近な友人に登校時間を合わせるように提案してみるとか……あるじゃないか。

「おかしなところ、という訳ではないんですが……、なんで目を閉じて歩いているんですか」

首をかしげる、といった動作も無く、表情を動かす気配も無く真顔のまま此方の顔を覗きこんでくる少女。

「いやぁ、これは目を閉じてる訳じゃないんですよ。実は自分、糸目でして」

閉じていた瞼をほんの少し、目の前が見えない程度に開き、もはや

半ば定型句と化した言い訳を返しておく。
この少女、いきなり道行く男の顔をじっと覗きこんでくる不思議ちゃんかと思いきや、中々に目敏い。
大体の人間は、俺が目を閉じていても目が細い人だなぁ、くらいにしか感じないというのに。
ちゃんとしっかり見て確認すれば、糸目なのか目を閉じているのかなんて区別がついて当たり前だ。
だが、普通はそこまで道ですれ違った人の目元をじっくり見つめる事はない。
気配からして人間でない事は分かっていたが、人外の中にもこういう注意力に長けた連中も居るらしい。
「……」
そうですか、と、納得して去ってくれるのが理想だったが、そうもいかないらしい。
目の前の人外の少女は、先程までと同じく、表情一つ動かす事無く、じぃ、と此方を見つめている。
距離も先ほどまでよりも近く、何処と無く圧迫感を感じる。
何処と無く、虚空を見つめる猫の様だと思う。
だけど、ああ、わかってしまう。
こういう手合には、適当な嘘、というのは通じないのだ。
もう一つの言い訳として『武術の修行の一環で目を閉じてるんだ』なんてのも、たぶん通用しないだろう。
此方の肉体はそれなりに筋肉もあるが、格闘技をやっている様には見えない。
どこからどう見ても、誰が見ても何の変哲も特徴もない一般人にしか見えない筈だ。
更に、武術名は暗黒カラテです、とか言ったら、多分この真顔は崩れて胡散臭がる表情になり、何かしらの悪い印象を与えてしまうかもしれない。
特に、女子に悪い印象を与えるのはマズイ。
女子の噂は一夜にして千里を駆けるという。

輝かしい学園生活の第一歩を踏み外すわけにはいかないだろう。
……難しく考える必要はない。
ここで目を開いて見せて、納得させる。
学校についたらこの少女から離れ、そうしたらまた目を閉じればいい。
たった、それだけの話しだ。
自分に言い聞かせ、瞼を、開く。
「ほら、ちゃんと目が、あるでしょう」
開いた目瞼の下、瞳に、目の前に居た少女の顔が映る。
目の前、というより、目下。
小さな背丈の少女が此方を覗きこんでいる。
予想よりも近い距離。
だからだろう、余計に、

【氏名・塔城小猫／白音】
【元種族・猫？（猫系の妖怪の一種である。詳細は後述）】
【現種族・転生悪魔（ランク・下級。属性・ルーク、戦車を表す。物理攻撃、物理耐性特化。悪魔への転生システム詳細は別項を参照の事）】
【身体情報・身長：１３８ｃｍ：　体重：３１ｋｇ、３サイズ：６７／５７／７３、塩基配列、魂魄紋、その他バイオメトリクス詳細は別途記載】
【金眼、白髪、整った顔立ち、客観的に見ても平均以上の美少女と評価可能】
【小学生の様な体型だが妖怪で悪魔である事を鑑みれば珍しい話でもない。幾つかの内蔵は未発達であり、成長過程にある】
【駒王学園新入生、本日は入学式、高校一年の一日目、学園生活に対して不安は少なからずあるが、既にこの学園には頼りになる眷属仲間や王が居るため、それほど深刻には思っていない】
【現在の感情及び思考傾向・疑問、困惑。警戒は無し。戦闘警戒態勢への移行確率低】

良く見えてしまう。
「これ、目を見開いておくのって、けっこう気合居るんですよ」
目の前に居る『此方に視線を送り続ける人型の蠢く文章の塊』に対し、愛想笑いを浮かべる。
ああ、ああ、ああ。
せっかくよく晴れたハレの日だというのに。

――空には光輝き、延々とガスの組成、流れ、寿命といった情報を渦巻かせる太陽と思しき文字列の塊が浮かび。
大気組成と気流の流れが延々と、隙間なく蠢く空。
少しだけ為になりそうなコンクリの組成、工事日、内接された配管の役割が几帳面に敷き詰められて出来た壁と道路。
――そうして、目の前の少女と同じく、制服のデザインと素材、製造元と耐久年数その他で編まれた制服に身を包んだ、おぞおぞと蠢く文字の塊たち。
道行く文字の塊達が、恐らく、間違いなくこれから共に学生生活を送るであろう友人候補達が、楽しげに会話を楽しんでいる。
彼らの間を飛び交う、波のような【楽しい会話】という文字列を見れば、それが内容はどうあれ楽しい会話である事は間違いないだろうとわかる。
中身のある会話なのか、楽しい会話、というニュアンスを延々交換し続けているのかは、分からないが。
ああ、ああ、ああ。
実に楽しい学園生活になりそうじゃないか。
クソが。

一話　猫は見つめ

物心付いた時に、自分の見えている世界が人と違うという事を理解できていたのは、はっきり言って幸運だと思う。
それが前世の記憶とかいう、一昔前の少し方向性を間違った文学少年少女達の妄想じみたモノがあったからだとしても、だ。
そうでなければ、心の病院か頭の病院か、さもなければ、怪しげな宗教施設に連れて行かれただろう事は想像に難くない。
特に宗教は危険だ。
この世界には、天使も悪魔も妖怪も居る。
そんな世界での宗教施設など、メガテン世界で宗教にすがるのと同じレベルで危険過ぎる。
餃子にも世紀末覇王にもなるつもりもない此方からすれば、天使も悪魔も願い下げ。
妖怪は……まぁ、別にどうでもいい。
野生動物とそれほど変わらないから、危険性も高くない。
この世界は、文字で出来ている。
より細かく言えば、文字と挿絵でできている。
より大きな言い方をすれば、この世は一冊の本である。
少なくとも此方にはそう見える、なんて生易しい話ではない。
この世界は、ほぼ間違いなく文字の塊とそれに張り付く挿絵で構成されているのだ。
知識として、そういった精神病が存在している事は知っている。
音を文字で認識してしまう、なんていうのも似たような症例だろう。
実はこの世界は読者に読まれる文章の羅列ではなく、此方の目や認識が狂っているのだ。
世界は無数の色の連なりで出来ていて、文字の塊がどうの、なんてのは、狂人の戯言でしかない。
実際は、前に生きていた頃と同じく見えていなければおかしい。
奇妙なのは此方の認識だけで、正しいのは周りの人々の認識。

それが現実。
……それが現実である、と、思えたならどんなに素敵だろう。
素敵だろうと思うから、此方はあくまでそういう体で生きていこうと思っている。
だから、今では瞼を開けなくても生活できるようにしたし、逆に狭い空間ではあるが、瞼を開けてもそれほど嫌な気分にならないスペースも作り上げた。
目を開けて、姿を見ながら話せる人も、だ。
だから、こういった学業の場、公の場では、とりあえず目を閉じて生活するようにしている。
長くストレスを感じずに生活する秘訣は、自分には適度に甘く、だ。
見なくても済むものなら、無理に見るつもりは毛頭無い。
クラスの連中はそこら辺、わりと適当なタイプらしく、目を閉じているのか、と聞いてきた相手は全て細目であるという言い訳に納得してくれた。
さもありなん。
人の言うことは信じなければならない。
何でもかんでも疑うようでは大きくなれない。
つまりこのクラスの連中はたぶん将来大物になれる。特に保証はしないが。
逆に、表向き納得したようで、未だに此方の言葉を信じない相手も一人居る。
故に彼女は小さいし、たぶん後々も小さいままである。実際アワレ、スッゴクカワイソ。
「……」
アワレな小さい人の、いや猫の視線が背中に突き刺さる。
気のせいでも自意識過剰からくる幻覚でもない。
植えつけた六感七感がはっきりと向けられる視線を察知している。
クソの様な運命的神の思し召しか何かにより、奇しくも同じクラスに振り分けられた我が愛しの同級生共の一人にしてクラスメイト。
先日、無駄に無意味に此方の瞼を開かせ、栄えある登校一日目の爽

やかな気分を一発で土留色に染め上げた、少し無神経なところのある少女。

塔城某は、入学式を終えそれなりにクラスメイト同士が打ち解けたこの時期になっても、時折此方に視線を向けてくる。

どういった感情が込められた視線であるか。

そんなもの、わざわざ目を開けて彼女の精神状態を読まなくとも察することができる。

猜疑ではなく好奇に変わった視線。

ああ、彼女の元の種族が猫？――猫の妖怪である、というのも納得だ。

既成品でない手作りの奇妙なオモチャを目の前にした、好奇心旺盛で、しかし臆病さ故に手を出せない猫。

今の彼女はまさしくそれだろう。

関わりたくないなぁ、と、素直に思う。

あの有無を言わさぬ無言から来る強制力とでも言えばいいのだろうか。

あの視線で見つめられ、それでも彼女の欲するところを行わずに居た場合どうなる？

明らかに小学生にしか見えない（内臓の発達具合もその程度でしかないからあながち間違いでもないが）彼女の視線を無視した場合、周りは此方の事をどう思うだろうか。

彼女自身にも、彼女の知り合いである眷属仲間とやらにも、別に悪感情を持っている訳ではない。

入学式や全校集会で少しだけ目を開けて周りを見回した結果、それらしい連中は見つける事が出来た。

彼ら、というか、彼女らは、何かしらの害になる程危険ではないし、人格的に問題があるようでもない。

だが……重い。

塔城某を構成する文字列を全て熟読した訳ではない。

というか、目を開けさせられた初日に一度見たきりだ。

はっきり言って斜め読みも良いところだろう。

本で言えばぱらぱらっとめくって適当に中身の文章を拾った程度か。

その程度の読み込みの中で、たった一人の肉親である姉が力に溺れて主を殺して指名手配されて行方不明、なんて文章が交じるのはどうなのか。

明るい文章が隠れるレベルの密度でそのことに関する葛藤やら悲しみやら決意といった文章がズラズラと並んでいる。

なんとも重い。高校生が背負うべき重さではない。

そして、そんな重みを一緒になって背負ってやりたいとはどうしても思えないのだ。

薄情と言われる事になろうとも、此方は嫌だ。

ただでさえ世界を楽しむという一点に置いてデカ目のハンディを背負っているというのに。

これ以上、自分から負債を抱え込むつもりには断じてならない。

なりそうになっても断固として拒否する。

同じクラスになるのは良い。

目に関しては目を見せた後に無理くり細目という事で押し通した。

無理に瞼を開ける必要もない。

学校内、クラス内限定ではあるが、友人としての付き合いもいい。

お菓子が好き、というのは好感が持てるし共感できる。

餌付けでわりとあっさり警戒心が緩む当たりは可愛いとも思うし、そのことで話が弾む事もある。

きのこたけのこの戦（いくさ）に無理に参じようとしない独立心も好感が持てる。

此方はトッポ及びコアラのマーチ派閥なのであの戦には煩わしさしか感じないし。

だが、うん。

踏み込んできそうな雰囲気を漂わせるのはやめて欲しい。

距離を保って踏み込まない関係で居たいのだ。

此方は踏み込まれた瞬間、横か後ろに逃げる所存故承知して欲しい。

「なーなー、読手（よみて）は部活何処にするか決めたかー？」
前の席の男子、奇特にも此方の友人となってくれた山ノ内くんが話しかけてきた。
途端、視線の強さが弱まり途切れ気味になる。
彼が此方の方を向くと自然と塔城某が目に入る為、此方を見続けるのを妨害する事が可能になる。
無意識ながらナイスアシストである。流石高校におけるファーストフレンド。
「そうだなぁ……天文部とかあると良かったんだけど」
星は好きだ。
なにより夜の星空が好きだ。
できれば天体望遠鏡は無い方がいい。
真っ暗な空に粒のような星。
あそこまで行くと、集中しない限り文字だとは分からない。
連続で行くと慣れて見えてしまうが。
「そういうおしゃれ系は大学行ってからだろ。高校で望むもんじゃないぜ」
「大学にあったら新入生騙して囲うヤリサーと化してそうだけど」
「酷い偏見だな。事実かもしれんが」
まぁ、暗いところの方が星がよく見える、という、天文部特有の言い訳により、人気のない山奥に誘われる女子、というのも多く居るだろうし、それを利用して悪事を働く男子もそれなりに居るだろう。
そういった観点から見て、大学ほど生徒の自己責任という言い逃れが効きにくい高校ではそういった部活は行いにくいのかもしれない。
単純に天体望遠鏡が高く買えない、という理由かもしれないが。
「オカルト研究会、みたいのがあればそれでも良かったかもな」
「なんでさ」
はっきり言って、元から文字列だけで構成された怖い話でも無い限り、オカルト関係には関心が向かない。
幽霊だろうが妖怪だろうが都市伝説だろうがＵＦＯだろうが、一度目にしたら最後、神秘も謎もクソも無くなってしまうのだから、興味

を持てるはずもなく。
「や、ＵＦＯ呼ぶとか幽霊見に行くとかで夜に外出れるだろ。それで天体観測すりゃいいじゃん」
「ベントラー、ベントラー、って？　そこまでするくらいなら部活以外で見るよ」
他愛もない話は十分の短い休み時間が終わるまで続いた。
少なくとも、目を閉じて送る分には良い学生生活だと思う。
時折背中に当たるチラ見の視線を無視しながら、そんな事を考えた。

人は歩く時、普通は目を開けて歩きます。
……わざわざ口に出して説明するまでもない事ですが、これは大事なことではないか、と思います。
一部の妖怪の様に優れた感覚器官を持ち合わせていて、それが視覚の代わりを果たしている、なんて事がなければ、天使でも悪魔でもそれは変わりません。
当然、それは猫？から悪魔に変じた私にとっても言えること。
余程集中して音を聞きながら、というのなら出来なくも無いですが、それでもやっぱり歩くときは目を開けて歩いた方が楽です。
仮に目を閉じてそれなりに人通りの多い通学路を歩いている人が居たとしたら、それはたぶん、変な人か、変な凄い人、という事になるのでしょうか。
――彼に気付く事が出来たのは、はっきり言って偶然以外の何物でもないでしょう。
それは私の王、リアス先輩――今日からは部長と呼ぶべきでしょうか――と同じ学校に入学し、初めての登校日、入学式に向かう最中のことでした。
「いい天気だなぁ」
良く通る声、という訳でもなく、特別大きな声でもなく。
周りの喧騒に紛れて聞こえなくてもおかしくない、ちょっとしたつぶやき。

声の主に視線を向けてしまったのは、たぶん、その声が本当に嬉しそうだったから。
真新しい駒王学園の制服を着ているから、私と同じ新入生か。
光の加減で僅かに赤みがかった光沢の見える黒髪。
光を遮るように太陽に手を翳した、私よりも幾分背の大きな男の人。
……まぁ、ここまでの道で私より小さな人は居ませんでしたが。
春の陽気にあてられて、少し頭の中が温かくなっていそうなところを除けば、道行く他の人達と変わらない、極普通の一般的な人間。
でも、そこに違和感。
彼は立ち止まって太陽を見上げていたわけではありません。
他の人達と同じく、学校に向けて歩きながら、ほんの少しの間だけ空を見上げて。
空を仰いでいた時と同じく、目を閉じたまま、顔を下ろして、また前を向いて歩き出したんです。
はっきりと瞼を閉じて、間違いなく視界はゼロになったまま、なんでもない様に歩き始めて。
そして、何の問題も無く歩き続けていました。
道に落ちていた犬の糞を避け、目の前に歩くのが遅い人がいれば避けて追い抜き、後ろから自転車がやってくればそれも避け……。
（……ワザマエ）
なんという技術、磨けば光るものが有ります。
巷では、夜道で通り魔を成敗して回る謎の爆乳ツジギリストが居るという怪情報が出回っていて、部長も原因究明に頭を悩ましているそうです。
もしかしたら、彼もそのツジギリストと同じく、謎の野良タツジンなのかもしれません。
部長が見たら気に入って、眷属に欲しがるかも。
ところで、何故辻斬でも通り魔でもなくツジギリストなのでしょうか。
「あの」

「あの」
……声をかけようと思ったのは、ほんの少しの気の迷いから。
かばんに忍ばせていたチラシを渡して、予め興味を引いておこう、と考えたのは、本当にそれだけが理由で。
まさか視線に気付かれて出鼻を挫かれるとは思いませんでした。
「何か、おかしなところがありましたか？」
続く会話の流れで、おかしな所があるのか、と聞かれ、迷う。
別に、おかしな所があるから見ていた訳でもない、いや、おかしいと言えばおかしいのだけど。
タツジン、と思ったが、彼はどう見ても普通の一般人だ。
肉体的に鍛えてあるのだって趣味かもしれないし、目を閉じているのだって何か重要な理由があるのかもしれません。
人には——いや、人に限らず、悪魔にすらそれぞれ事情というものがある。
目を開けずに普通に歩けているのだって、その理由のために練習を重ねただけだとしても何も可笑しくはない。
「おかしなところ、という訳ではないんですが……、なんで目を閉じて歩いているんですか」
「いやぁ、これは目を閉じてる訳じゃないんですよ。実は自分、糸目でして」
なるほど確かに薄目を開けている。
でもそれは、私に言われてからほんの少し開けてみせただけ。
少なくとも目が見えないとか、そういう聞いたらいけない話では無いらしい。
そういう重い話なら、もう少しまともな嘘を言うか、はっきりと目が見えない事を口にして話を終わらせてくる。
じゃあ、彼の目に何があるのか。
……別に、道行く人に悪意を持って問いただしている訳ではないです。
最初から視線に気付かれなければ、おかしいところはあるか、と聞かれなければ、ここまで食い下がったりしませんでした。

ええ、もちろん、ただの好奇心で、どちらが悪いのかと言えば……聞いてきたあっちじゃないでしょうか。

催促するつもりは一切無かったのですが、そこで会話が途切れても彼の顔を見続けました。

見ていただけで、本当に細目なのか、とか、実は目をとじる事が修行の一環の隠れカラテユーザーなのか、と、そんな疑いをかけた訳でもないのですが。

一歩、二歩、三歩、と、多少近づいたのだって、偶然進行方向に進む過程で彼との距離が近づいただけの偶然です。疑いようもありませんね。

一分もしない内に、小さな溜息と共に、それは現れました。

ゆっくりと、勿体つけるように開かれた瞼の下に。

「ほら、ちゃんと目が、あるでしょう」

宇宙を押し込めた、黒い宝石。

そうと見紛う様な、綺麗な、いえ、深い、深い、宇宙の深淵の様な黒。

散りばめられた、というには大きすぎる、星の煌めきに似た輝き。

人の瞳は、ここまで美しいものなのか、と、そんな事を思ってしまう。

「これ、目を見開いておくのって、けっこう気合居るんですよ」

何より印象的なのは、それとわかる愛想笑いに僅かに滲む、複雑な色。

悲しんでいるのか、痛みを堪えているのか、何かを諦めているのか。

たぶん、分かる人にしか分からないその色に、私は――

「小猫。それはね、恋よ」

私の話を遮り、部長は嬉しそうに断定した。

普段は超然とした態度と美貌で学園の二大お姉さまとまで言われている、冥界に勇名轟くらしいグレモリー家の次期当主であるリアス・グレモリーの姿は見る影もなく。

それはもう、修学旅行の夜に恋話に花を咲かせる普通の学生にしか

見えない笑み。
言ってしまえば嫌らしいニヤけ顔だ。
「あら、あらあらまぁまぁ……！　あの小猫ちゃんが……うふふ」
同じくニヤける、それでも何処か母性を感じさせる優しげな笑みを浮かべる副部長。
なんだろう……凄く子供扱いを受けているというか、単純に副部長が母親視点過ぎるせいなのかもしれないけど。
「……違います。そういう話じゃありません……」
勿論この言葉に裏はない。
私は初日から色々と怪しかったクラスメイトに関する報告をしていただけなのに、何故そう取られてしまうのか。
……いや、思い返すと、最後の当たりは確かに言葉を選びすぎてそう取れなくもない表現があった気もする。
ただ、それ以外に表現の難しい部分だったのだからしょうがない。
お菓子を食べ、お茶を飲みながら、恋話にされてしまった私の報告によって、オカルト研究部の薄暗い部室の中は忽ち一般人の女子会めいた空間になってしまった。
主役……というか、生贄は私。
生贄を捧げて盛り上げるあたり、女子会は悪魔を呼ぶ古式ゆかしいサバトにも似ているのかもしれない。
そう考えれば私の末路は悲惨なもの。
視界の隅に居る祐斗先輩は居心地悪そうに一歩引いた場所で愛想笑いを浮かべている。
……いや、居心地悪そうにというか、単純に巻き込まれない位置に逃げているだけか。
「でも、少し気になるね。その、小猫ちゃんの想いび――冗談だよ」
つまらない冗談を交えた祐斗先輩をじろりと睨みつける。
前半だけを真面目に言ってくれればいいものを。
気を取り直し、真面目な表情で改めて口を開く。
「小猫ちゃんの言うその彼……読手くん。本当に、入学式の日以来目を開けてないのかい？」

「はい。……後ろの席からですから、授業中の話は人づてで聞いただけですけど」
入学式のあの日、私は確かに彼の目を見た。
だけど、それ以来彼が目を開いているのを見たことがない。
「授業中も？」
部長の言葉に頷く。
しかも、しっかりと板書は写しているのだ。
少し言い訳してノートを見せてもらったから間違いない。
「見られていない時だけ、薄目を開けている、とかではなく？」
副部長の言葉にも頷く。
「授業中に確認するのは難しかったので、他の時間に改めて確認しました」
「どうやって？」
祐斗先輩の言葉に、思わず拳を握りしめながら頷く。
あれは、悲しい出来事だった……。
「幸運のピノを、真っ先に取られました……！」
しかも素早く写メを取った上で、何の断りもなく……！
いや、向こうが買ってきたものを分けてもらったのだから、文句を言うわけにはいかないんですが。
「間違いないです。蓋を開けた瞬間に幸運のピノに気付いて、しかも素早く写メを取って迷いなく幸運のピノに楊枝を突き刺して、しかも目は閉じたままだったんです」
あまつさえ、『うぅん、味は何一つ変わらないのにお得な気分ですねぇ！　おや塔城さん食べないんですか？　半々ですよ？』なんて……。
あんな悪魔じみた人間は見たことがありません。
おごりに文句をいう筋合いは無いとはわかっているんですが。
「へぇ……、ところで、何で一緒にピノを食べてたの」
「？　おやつの時間でしたので、成り行きで」
買いすぎて余ったからわけてあげよう、などと言ってお菓子を置いて行ったり。

春の新作見つけたから一緒に試してケチつけてみよう、と言ってお菓子を分けてくれたり。

臨時収入入ったから景気付けに奢ってあげよう！　と言ってコンビニに連れて行って貰ったり。

貰ってばかりだと悪いから、少しお菓子を分けて上げたり。

「……少し根性悪くて怪しいですけど、……たぶんそこまで悪い人じゃないと思いま……何で笑っているんですか」

部長が再びニヤニヤと笑い、朱乃先輩は微笑ましそうして、祐斗先輩は困ったように苦笑している。

「大丈夫、大丈夫よ小猫。私は下僕のことなら何でも……ええ、勿論分かっているわ」

それは間違いなくわかってない系の人が言うセリフだと思います、部長。

相手をしても仕方がないので、部長の何もかも分かっているわ、と言いたげな視線を無視し、続ける。

「体育の授業の時も、普通に目を瞑ったままヒットエンドランしていました。それも当然、目を閉じたまま」

「へぇ……」

祐斗先輩が関心したように声を上げる。

そう、もうここまで来ると明らかに異常でしかない。

他のクラスメイトは本気で目が細いだけ、と見ているようですが、悪魔で猫?な私の目は誤魔化せない。

「その子、神器持ちかもしれないわね」

部長の目が、怪しく光った。

二話　蛇は絡み

神器（セイクリッド・ギア）とは何か。
特定の人間に宿る、聖書の神が作り上げた特殊な力を持つ遺物。
歴史上に名を残した偉人の多くは神器保有者である、らしい。
通常は人間社会の中で僅かに突出できるかどうか、という程度の力しか与えない、ちょっとしたおまけの様なものなのだが、中には人の身を悪魔や天使、神に届かせる程の力を与えるものも存在する。
……それなら、テレビで見た有名人の中に神器の持ち主が居ても可笑しくないと考えたのだが、残念ながら当たりを引けたことはない。
今は偉人が生まれにくい時代なのか、はたまた神器の力が無くとも偉人になれる程に人が進歩したのか。
後者だと嬉しい、とは思うのだが、もしかしたら、単純にこのシステムの根幹を成す聖書の神様が死んでいる事から来る悪影響なのかもしれない。
そうなら嬉しくない話だ。
だが、だからこそ人は自らの意志で努力する事ができるのである。
天は自ら助くる者を助く、と言うが、理想を言えば天が助けなくても自らの力だけで自らを助けられるのが一番いい。
何しろ今の御時世、天が助けてくれる可能性は微々たるもの。
信じるべきも高めるべきもまず自らの力から。
そんな訳で、今日も自助努力の時間である。
「魔剣創造（ソード・バース）に、黒い龍脈（アブソーション・ライン）ね。中々どうして粒ぞろいじゃあないか」
二年の木場祐斗先輩、同じく二年の匙元士郎先輩、ごちそうさまです。
校内散策で呆気無くこの二人の神器保有者を見かける事が出来たのは僥倖だった。
目を開けたまま長々とうろつくのはこれで気が滅入る作業だから、目立つ二人がそうだったのは嬉しい誤算だ。
できれば、もう少し日常生活で使えそうなのがあると良かったけ

ど、まぁ、無いよりはある方がいい。
制服をハンガーにかけ、椅子に座り目を開ける。
目の前に広がるのは、外よりは幾分安らげる光景、リラックスできるプライベートなスペースだ。
早い話が自室だ。
だが、ただの自室ではない。
ただの自室では無くしたのだから当然だが。
壁、天井、ドア、窓、机、椅子、本棚、ベッド、テレビ。
壁に掛けてある自作の風景画、ハンガーに掛かった制服。
それらは全て文字ではなく、三次元的厚みのある漫画絵で出来ている。
これらは、いわゆる挿絵である。
表面に手を当てて『捲れ』ば、その中にはいつも通りの文字の塊がうごめいているが、これらはそれなりに力を入れて捲らなければ剥がれない特別製だ。
何しろ、どれもこれも此方が丹精込めて何度も何度も重ね書きした特別製の挿絵である。
そんじょそこらの、稀に文字の上に現れる薄くて枚数の少ない挿絵と一緒にされては困る。
此方が重ね書きすると見た瞬間のインパクトというか、存在感が増すらしいが、そんな事は別にどうでもいいんだ、重要なことじゃない。
捲れず、一見して文字の塊には見えない。
これこそが重用なのだ。
「ふん、ふふーん」
適当なメロディの鼻歌を歌いつつ、机の中から金属の塊を取り出す。
別に、そこらから拾ってきたものでもいいのだが、こういうものはちゃんとした製品を利用したいと思うのが人情だ。
これには一切手を入れていない。
さて、ここに取り出しましたるは、何の変哲もないアルミブロック。
目に見えるのは何処で採掘されたボーキサイトか、来歴、分子構造

程度の単純な代物でございます。
これを、まずある適度のサイズに千切ります。
タバコの箱程度あれば十分です。
今回はこれを二つ。
できますね？
次に、ちぎり取った金属を一度平たく伸ばします。
面積を広げる事が重用なので、掌で適当に薄く広げてあげれば十分です。
そして、書き込みます。
適当なペンでもあればいいですが、無いなら指でも箸でもなんでもいいです。
先っちょが細いと書きやすいです。
【魔剣創造（ソード・バース）と同じ機能を持っている。魔剣創造の機能に関しては後述】
あとは、余ったスペースに元の持ち主からカンニングした機能を書きます。
来歴、材質、製作者に関しては省いて構いません。
とりあえず機能だけ書けば十分です。
何か不便な点があれば、その部分はこのように但し書きを付け足して補填してしまいましょう。
【伝説上の魔剣に匹敵するものは作れないと言われているが、これは魔剣創造そのものではないので、その縛りは存在しない】
【能力使用による負担は無い】
【また、持ち主は自在に魂の中にこれを格納する事ができる】
【羽のように軽く、壊れず、持ち主が外そうとしない限り外れない】
【盗難不可】
こんな感じです。
元の機能部分はオリジナルから完コピなので、機能不全は起こりません。
あとは、適当な形に纏めます。
やりやすいのはブレスレットでしょうか。

ある程度体積があっても形をまとめやすいです。
捏ねて円形にして、部屋にある家具と同じように、上から適当なデザインのブレスレットの挿絵を重ね書きすれば……。
「害のないのでいこう」
ブレスレットを腕にはめ、念じる。
すると、何の前触れもなくペティナイフ程度のサイズの剣が掌に現れた。
同時に部屋の中の光量が減り、薄暗くなる。
ナイフサイズの魔剣で何度か空を切り裂くと、部屋の中は闇に包まれた。
ただ、ナイフの刃にだけ、細い光が灯っている。
机の上に置きっぱなしだったアルミブロックに刃を当てる。
じゅ、という音と共に、アルミブロックはバターを熱したナイフで切り裂くように切断された。
「名づけて蓄光剣、でいいか」

さて、この世界が一冊の本である、世界は文章と挿絵で出来ている、と確信した理由に関しては、これで多少は理解して頂けるだろう。
少なくとも此方は認識している文字列に追記し、その存在を書き換える事が容易くできる。
何故できるのか、と言われれば、此方が知っている訳がないだろう、と答えるしか無い。
文字列なんだから書き足せるだろう、と、そんな思いつきがそのまま上手く行ってしまっただけなので、本当に、これぱっかりは推測でモノを言うしかないのが現状なのだ。
何しろ、此方の体を構成する文字列を端から端まで熟読しても、この力に関しては一切の記述が無い。
推測で語るとするならば、この、頭の中で思い浮かべているにも関わらず、何処かに語りかける様な思考と共に説明しなければならないだろう。
大前提として、この世界が本の世界、少なくともとある一冊の本か

ら派生した文字媒体の物語であろう、という確信がある。
そして、多少なりの『読者』が居るという事も。
例えば、此方の目は人や物を文章の塊と、極稀にそれを覆い隠すようにして現れる挿絵として認識している。
最近で言えば小さい猫……塔城某を見た時のあれだ。
ぱっと見ただけで読み取れてしまう表面的な個人情報に、文字を追うごとに見えてくる肉体の作りを時に無機質に、時に情緒豊かに無駄に説明する細かい文章。
だが、人の肉体とはそれだけで構成されているものだろうか。
人間の表皮に一体どれだけの細菌や微生物が張り付いて生きているか、考えた事は？
順当に考えれば、表面に張り付いた別種の雑多な微生物の文章に遮られ、此方の目は目の前に居る人間の文章を追うことすら出来ないだろう。
その考えに至った小僧は、愚かにもこんなことを考えてしまった。
『空から地球全体を見渡した場合、何処から何処までが地球の文章に組み込まれるのか』
時代が時代だけに、宇宙から見た地球の写真など、小学生に上がったばかりの此方でも簡単に手に入った。
今ではネットで写真・地球とでも検索すれば一発だろう。
より大きな地球の写真を求め、学校の図書館に足を運び……。
……目的の写真を一冊の本の中に、見つけてしまった。
あの時の衝撃をどう表現すればいいか。
確かに、地球もまた表面に生きる生物の事など殆ど省かれた、一つの無機有機の塊である惑星としての文章で構成されていた。
だが、その内容に詳しく目を通す事が出来たのは、写真を見てから暫くの期間を置いてから。
その文字の塊には、挿絵が張り付いていたのだ。
いや、挿絵と言うには語弊がある。
なぜなら、それは地球の姿を描いた挿絵では無く。
見覚えのある、昔々に死ぬ前に、生まれる前に見た、ライトノベル

の新刊を知らせるチラシに描いてあった一冊のライトノベルの表紙が、まあるい地球の輪郭を完全に無視し、しかしこれ以上ない形で重なっていたのだから。

地球に被さっていたのは、挿絵ではなく、表紙。

この世界は、この星は、一冊の本。

そして、その日の、それは突如として空に現れた。

巨大な、余りにも巨大な目。

他の誰にも見えず、ただ此方の目だけが確認した、空に浮かぶ目。

その目の動きには、覚えがあった。

上から下へ、一番下から少し左にずれながら一番上へ。

此方を、いや、地球を睥睨する目の動き。

それは紛れも無く『本を読む人間の視線』だった。

理解してしまった。

その目を見た瞬間、理解してしまったのだ。

此方の目が、そして、恐らく、指か手か、さもなければ書こうとする意志が。

未だ此方ではなく、あの目と同じく彼方にある。

少なくとも、此方の一部は、未だ彼方にあった頃と同じように世界を感じているのだ。

「書主（ふみぬし）さん」

肩を揺すられ、名前の最後の辺りが僅かに強い独特のイントネーションの、落ち着いた低めの女性の声で、名を呼ばれる。

かつての記憶から今に意識を引き戻し、肩に手を置く声の主に視線を向ける。

闇の中、いつの間にか開けられていた窓から差し込む月光が、声の主の瞳だけを輝かせていた。

闇の中、はっきりと姿の見えない窓から入ってきたその人物は、当然の様に文字の塊ではなく、三次元的な厚みを持つ絵の姿をしている。

「こない部屋暗くして、どないしたん」

「ああ、これ、ちょっと動作試験を」
ぱきん、と手の中のナイフをへし折ると、ドロリと粘液状に圧縮された光が中から溢れ出し、蒸発するようにして部屋の明るさが戻っていく。
部屋が明るさを取り戻し、侵入者である女性に視線を向ける。
ボブカットにした緑髪、一見して何を考えているのかやる気があるのか分からない気の抜けたサイダーの様な表情。
腿の半ばまでカバーする裾の長いサマーセーターに包まれた胸は実際豊満、なんと嬉しいEカップ。
更に奇跡の様なくびれ、そして尻は喜ばしい曲線を描く。
だがそれらの内の何よりも注目するべきは、目だ。
縦に入った亀裂のような瞳孔の色は金よりも黄に寄っている。
常人にはありえない、蛇を思わせる瞳は、眺めていると吸い込まれ絡め取られそうになる。
美しい瞳。
当然だ。
画竜点睛を欠くわけには行かないのだから、瞳を入れる時には特に気を使った。
はっきり言って『彼女を描いた』時以上に、何かに集中して力を込めた事は前世含めて一度もない。
「また工作か。ホンマに、こういうの好きやね」
呆れたように言いながら、此方の手首からブレスレットを抜き取り、天井の照明に翳してしげしげと眺める。
盗難防止が働いていない訳ではない。
これは元々彼女の為に作っていたものなのだから、盗難の範囲に含まれないのだ。
「まだ細工の途中なんですけど」
だが、プレゼントとして渡すにはデザインがラフ同然で荒過ぎる。
ここから少しずつ上書きを繰り返していい感じのデザインにしようと思っていたのに。
今のままだと細部が荒くて、人に渡すには恥ずかしい。

ん、と手を突き出して返すように催促する。
「そうなんか、なら、少し待たせて貰うわ」
あっさりとブレスレットを返し、ベッドに腰掛ける。
どうやら完成を待つらしい。
別に、今すぐ使う場面が出てくるような便利なものではないのだが。
「見てて面白いもんじゃないですよ」
「そう思とるんは、あんただけや」
「なら、いいですけど」
ベッドからの視線を体の側面に受けながら、芯の入っていないシャープペンをブレスレットの上になぞらせる。
大まかなデザインはあちこちから構想を得た適当なものだが、ここからはフィーリングだ。
大まかなデザインを示した薄く、荒い線、『文字列ではない、意味を持たない純粋な線』に、やや力を込め、強く上書きしていく。
色はやや光沢の薄い銀を主軸に。
そう願うだけで、芯の無いペン先から生まれる新たな線は思い浮かべた通りの色へと変わっていく。
緑の細くしなやかなライン、先端近くから赤で短くチロリと分岐させ、そのすぐ近くに黄を一点加える。
何の絵か連想できるだけで、絵にはならないギリギリのライン。
灰の森に潜む、舌を出した蛇。
割と自身がある。
「書主さん、自分の癖、知っとるか」
「なに？」
「親しうないやつと喋る時、敬語使うやろ。間違ったやつ」
「その何処弁だか分からない訛りも間違ってるとは思いますが」
「それは生まれつきや、しゃあない。……あんな」
のそり、とベッドから立ち上がり、しかし動きの一切に切れ目のない蛇の様ななめらかな動作で近づき、背後から頭を抱きしめてきた。
「何ぞ、暗い事考えて、勝手に落ち込んどる時も、敬語になっとる」

「……ん」
あまり温かくないのは、外から入ってきたばかりだからか。春先でも夜は冷える。
ほんの少し低めの体温が、柔らかな感触と共に頭部から熱を奪っていく。
「ほれ」
彼女の細く、長い指が、頬を、顎を、口を撫でる。
首に絡んだ腕が頭を少し引き寄せた。
この腕も、顔をなぞる指も、そのどれもが容易く命を刈り取る事ができる凶器でもある。
それは良く知っている。
彼女は、戦う人だ。
武器を使って戦うが、人の首を、顔を、握り潰して引きちぎる程度の事は容易い。
だが、見て欲しい。
いや、見ても此方にしか理解できないか。
顔をなぞる指も、抱きしめてくる腕も、頬にかかる彼女の毛筋の一本に至るまで。
文字ではない。
三次元的なイラストではある。
しかし、そこに居るのは、文字の塊ではない、人の姿。
温かみのある文字の塊ではなく、温かみが少なくとも実感できる、人の姿。
ぼやけること無く、文字に塗りつぶされる事無く、そこにあり続けている。
「わしは、ここや。見えるやろ」
「ええ、見えていますよ」
彼女の名は日影。
この世界からの逃げ場で、頼れる相手で、此方の多くを知る唯一の人で――
――此方の、『最高傑作』だ。

放課後のディアボロス
三話　人は離れ

部活、つまり悪魔としての活動を終え、一夜明け、
『それじゃあ小猫、読手くんを連れてくる役目は貴女にお願いするわ』
『仮に神器の使い手だとしたら、そこまで使いこなすまでに多少のトラブルには巻き込まれているでしょうし、警戒されたら困るもの』
『勿論言葉通りの理由よ。ええ、大丈夫、他意は無いのよ？　だから誘い方は任せるわ。……誘い方は任せるわ！』
そんな訳で、そういう事になりました。
わざわざ言わなくてもいい言い訳を何度も重ねている時点で怪しさしかありませんし、他意が無いのになんで『だから誘い方は任せる』に繋がるかはわかりませんし、何で二度繰り返したかもわかりませんが。
……壁を殴ったら、弁償ですよね。
部長の誤解はともかくとして、やること自体は簡単です。
登校するタイミングも同じで、クラスも同じなら、偶にお昼も一緒するわけですから、読み手さんと接触する機会は多く、その何処かのタイミングで部室へと誘えばいいだけの話なので。
それこそ放課後にでも、部長が呼んでます、とでも言えば来てくれるでしょう。
リアス・グレモリーの名は学園内でも有名で知らない人は居ない、という程。
目を閉じている以外は普通の学生である読手さんなら、いきなりの呼び出しで怪しむ事はあってもそう無碍に断ることはない筈。
部長の名前を全面に出して……オカルト研究部、という名前は伏せておけば、たぶん来るでしょう。
人避けも込めた名前なんでしょうけど、こういう時は不便だと思います。
そう考えながら登校していると、曲がり角の向こうから、すっかり

鼻に馴染んだ読手さんの匂いが近づいてきた。
彼の密かな趣味を想起させる、絵の具や墨の匂いが微かに香る特徴的な匂い。
折角なので、今のうちに声を掛けてしまいましょうか。
声をかけるまでの間に、放課後の予定が入ってしまうと面倒です。
「読手さん、お早うご――」
声をかけようとして、とっさに声を止めてしまう。
何故か？
それはまだ少し遠くに居た読手さんが、今まで見たことが無い程に自然体で笑っていたから？
それとも、今まで一度しか見開いていなかった瞼が開かれ、美しい黒曜の瞳が惜しげも無く開かれていたから？
いや、それとも……
「いい天気だねぇ」
「せやな、いい天気や」
彼と並んで歩き、カップルを通り越して老夫婦の如き和やかなオーラを滲ませている、緑髪の美女を見てしまったからか。
……誰でしょうか。
特徴的な緑髪の、部長たち程ではないけれど優れたスタイルを駒王学園の制服に包んだ、ぼんやりとした無表情な女性。
衝撃が抜け切らない頭で思い出せる限りでは、今まで学園内で見かけた覚えのない顔です。
「ああ、塔城さん、お早うございます」
「……おはよう、ございます」
此方に気付いたのか、ニッコリと絵に描いたような笑顔で挨拶をしてくる読手さんに、改めて挨拶を返します。
先までの頬を緩めるような自然な笑みでなく、文字通り、絵に描いたような笑顔です。
いわゆる、目が上向きに弧を描く一本線になる感じの。
珍しく開かれていた瞼は閉じられ、口調も聞き覚えのある余所余所しい口調になりました。

……それがいつも通りなので、そうならなければおかしいんですけど。

「書主さん、この子ぉは？」

独特なイントネーション、関西とか、そういう地方の人でしょうか。

表情は一見して無表情で、でも……警戒されている。

歩きながら自然と私の方に近寄り――読手さんと私の間に体を割りこませ、体捌きも何か武術をやっている様に見えます。

何より、その視線。

蛇の様な瞳、眠たげに見えた目元は僅かに鋭さを増している。

「同じクラスの子だよ。塔城さん。前に言わなかったっけ」

読手さんは軽く手の甲で女性の胸元を叩き、僅かに瞼を開いて視線を向ける。

明らかに害あるものに対する警戒を見せていた女性は、ほんの数秒読手さんにじっと視線を向けると、目元から鋭さを消しました。

分かり合ってる人特有のやりとり。

恋人か何かでしょうか。

「ああ……、あの猫の子やね」

ぴく、と、一瞬体が反応する。

猫、正体がバレていた、という訳では無いと思うのですが。

「そうそう、ぱっと見猫っぽいし、行動も猫っぽいし、しかも名前に猫が入ってる。レアケースだよね、ここまでくると」

図らずして、読手さんが私の事をどう見ていたかがわかった。

いえ、悪口を言われている訳ではないから、怒りはしませんが。

どう反応するか困っていると、隣に並んでいた二人は前に進んでいて。

歩幅の違いから来る速度の差で取り残され、今から追いついて、二人の間に割って入って要件を伝える気にも何故かなれず、私は遠ざかっていく二人の背を眺める事しか出来ませんでした。

……部長に伝えたら、また騒ぎ出しそうだから、今のは見なかった事にしてしまいましょう。

「日影さん？　普通に隣のクラスに居ますよ？」
お昼休み、食事を終えて寛いでいる読手さんに尋ねると、女性の正体はあっさりとわかりました。
なるほど、まともに回るようになった頭で考えてみれば、私だって同学年の全員の顔と名前を知っている訳じゃないから、知らなくてもおかしくはない。
でも、あの容姿ならもう少し話題になってもいい気がします。
「まぁ、出席日数計算して、結構休んでいますからね。見かけないのも仕方がないでしょう」
「いいんですか、それ」
「別に学校が嫌い、って訳ではないみたいですよ。気まぐれな部分がある人ですから」
出席してる時の授業態度は評判良いみたいですしね、と少し嬉しそうに語る読手さん。
クラスで友人（数は少ない）と話している時の笑みとも違うその表情。
今まで見た笑みの全てが自然で無かった、という訳ではないけど。
「……恋人ですか？」
こんな顔で笑うのか、と関心する程には、良い笑みでした。
なら、そんな顔をさせる事ができるとすれば、やはり友人以上の関係、という事になるのでは無いでしょうか。
「恋人……ですか？　ううむ……難しい問題ですね」
腕を組み、軽く唸り始めてしまう。
不思議な反応です。
恋人であるか無いかの返事なんて、照れているので無ければ、はいかいいえで済むものだと思うのですが。
というか、今朝のあの空気を出しておいてそういう関係で無いとしたら何なんでしょうか。
……何なのでしょうか、とは思うのですが、じゃあ恋人同士というのが、どういう雰囲気を発するのか、正直私にはわかりません。
部長と副部長は私が恋をしていると思っているようでしたが、これ

は別にそんなのではありません。
もしかして、私は男の人の友人ができる度に疑われなければならないのでしょうか。
それというのも、部長も副部長も異性との付き合いが極端に少ないからではないか、と思います。
狭い私の交友関係の大半を占めるオカ研、というか、グレモリー眷属関係者の女性陣がそんな感じなので、恋人同士の空気、というものを知る機会は殆ど無いのです。
「まぁ、あれですね。大きなものの見方をすれば、恋人でもある、といった感じでしょうか」
「そういうものなんですか？」
「そういうものなんです。人と人の関係性をそんな短い単語で記号化しようなんて、烏滸がましいとは思いませんか」
なるほど、なんだか含蓄がある言葉のようにも聞こえます。
流石、恋人が居る人はモノが違います。
独り身しか居ないオカ研の部員ではこうはいきません。
世に言うリア充というやつなのでしょうか。
全校生からの憧れの的という名の独り身と、なんだか異性にトラウマを持ってるらしいイケメンなら良く部室で見ますが、これは初めて遭遇する人種です。
そんなリアルを生きるリア充、つまりリアルリア充を、これからオカルト研究部とかいう、今は使われていない旧校舎に居を構える半端無く怪しげな部の部室に誘わなければならない、と。
……こうしてマイナス要素を列挙してみると、二大お姉様二人の勇名が何処まで通用するか怪しい。
というか、恋人が居る人に通用するんでしょうか。
部活の名前を伏せると言っても、間違いなく話の流れで途中で聞き出されてしまうでしょうし。
そもそも何の前触れもなく『学園のアイドル二人が待ってますよ』と言われて付いて来るものでしょうか。
最悪、美人局と思われるのが落ちかと思うのですが。

「難しいですね、人間関係って……」
思わずつぶやく。
しかも新しく人間関係を繋げようとすると、余計に難しくなります。
流れで任されてしまいましたが、これなら祐斗先輩にお願いする方が簡単なのではないでしょうか。
「そこまで面倒な話では無かったと思いますが……、まぁ、これからの三年間で学んでいけばいいじゃないですか。此方も塔城さんも、クラスメイトの皆さんだって、まだ学生なんですから」
此方も人付き合いが得意、という訳ではありませんしね。
そう言葉を絞め、読手さんは立ち上がりました。
何処に行くのか、と視線で追えば、教室の入口で今朝見た女性――読手さんの恋人であるらしい日影さんの姿が。
……見れば見るほど、どうして他の人達の話題に上がらないのかが不思議なくらいの美人。
ああいう美人が他のクラスに来て男子一人に手招きして呼び寄せれば、もう少し周りが騒いでもいいんじゃないでしょうか。
連れ立って歩いて行く二人。
日影さんは去り際さりげなく振り返り、私に視線を送り、読手さんに見えない角度で、口の動きだけで言葉を伝えていきました。
『手ぇ出したら、あかんよ』
……口の動きだけで伝わると確信している視線。
私の、悪魔、妖怪としてのポテンシャルを見越しての行動に動揺するべきか。
それとも、恋人に手を出そうとしていたと勘違いされたことに憤るべきか。
リアクションに困りながら自分の席に戻った私が、読手さんを部室に誘うタイミングを逃したと気づいたのは、午後の授業が半分終わった辺りになるのでした。

そんな訳で、放課後。

今日の間中に部室に誘うのだとしたら、ここが最後のタイミングになります。

……別に、部長からは部室に連れてくるように、としか頼まれていない訳で。

逆に考えれば別に今日を逃しても明日に、言葉尻を捉えて曲解すれば、来週だろうと来月だろうと一向に構わないのでは無いか。

そんな逃げの思考に辿り着いてしまう程度にはインポッシブルなミッションだと思うのですが、そうも言っていられません。

今は別段部活に入っているわけでも無いようですが、これから何らかの部活に読手さんが入部したなら、放課後に部室に連れてくる難易度は高くなります。

今でさえ朝に誘おうとしたのが昼に、昼に誘おうとしたのが放課後にずれている訳で。

ここで逃したら最悪、『部長も副部長も卒業、でも、二年に上がる前に連れて来いとは言われていませんでしたので』と、ＯＧと化した部長に言い訳をする羽目になりかねません。

いえ、流石に私もそこまで無責任になるつもりは無いんですけど。

さて、放課後ともなると、誰も彼も思い思いに動き出します。

部活動へと向かう人、家路を急ぐ人、教室に残って友人とだらだらと過ごし続ける人。

読手さんがどれに分類されるかと言えば、どちらかと言えば家路を急ぐ人、になると思います。

稀に教室に残る時もあれば、校内をぶらついて様々な部活を見学していく時もある、まぁ、平均的な1年一学期の行動で、おかしなところはありません。

ただ、今日は恋人さんが学校に登校している関係上、色々切り上げて早めに帰る可能性があるので、早めに声を掛けてしまいたいところです。

恋人さんとの楽しい帰り道を邪魔する形になってしまうのは申し訳ないと思うのですが。

実際、何かしらの神器持ちである可能性を考慮すれば、そうも言っ

ていられないのが現状で。
神器持ちの人間を危険視している堕天使に、人の都合を無視して力のみを求める類の悪魔、神器持ちの人間はそれだけで命の危険に晒される可能性が高い。
眷属に加わる、とまでは行かなくても、何らかの対価を払って庇護下に入ってくれると助かります。
……数少ない友人でもありますし、裏に巻き込まれて命を落としてしまうのは忍びないのです。
「読手さん」
友人（多くはない）と談笑しながら帰り支度をする読み手さんに声を掛ける。
声をかけた瞬間、クラス中の注目が此方に向き、直ぐ様見て見ぬふりというか、見ていないアピールが始まります。
当然、視線で丸わかりです。
……何やら前々から思っていたのですが、私が誰かに話しかけるのはそんなに珍しいのでしょうか。……そういえば珍しいんですね。
「どうしました、塔城さん。パックンチョの新パケデザの話ならもう結論出たんじゃないですか？　此方は正直ウルトラエッグシリーズみたいで好きですよ」
「そうですね、あれはエッグ型とパックンチョ型という二重の意味が隠された良いパッケージだと思います。……いえ、そうではなくて」
いつもの癖でつい普通に答えてしまいました。
ですが、今回ばかりはそうはいきません。
一呼吸置いて、要件を端的に、余計な要素――彼女持ちだから、部長と副部長の話は無し、それと部活名も怪しがられる――を抜いて、遮られないように手短に伝える。
「（ちょっとそこまで）付き合って下さい」
これで完璧。
何故かクラスの中が一瞬静かになってから一斉にざわめき始めましたが、騒がしいのはこのクラスに限らず駒王学園ではよくあること。

一々気にしていたら身が持ちません。
「ごめんなさい。でもこれからもいいお友達でいましょう」
……？
いきなり何を……。
……!?
「……ち、違います。そうい、そういうのでは無くて」
端折り過ぎた自分の台詞の意味を理解する。
しかも余りの衝撃に口が回らずどもってしまい、直ぐ様訂正することができません。
落ち着きを取り戻そうとしている間に、男女を問わないクラスのざわめきが強くなっていきます。
「ちょっと読手くん！　もうちょっと言い方ってものがあるんじゃない!?」
「いやぁ、すっげぇテンプレだけど成否はよく分かるいい返答だよ」
「ド直球からのピッチャーライナー、ていうか、ピッチャー強襲？」
「せめてもう少し考えない？　考えるフリして時間を少し置くとかさぁ。小猫ちゃんがあんんまりっていうか」
「でも曖昧に返すよりはいいと思うよ？　濁さないだけ誠実じゃん」
「あのやり取りを教室のど真ん中でとか、二人共強心臓過ぎる……」
「そもそも読手って恋人居るだろ」
「まじかよ意外過ぎる」
「ていうかあの二人、昼休みにそのことで話して無かった？」
「恋人居るの知ってて、ていうか確認した上で突撃とか勇者か何か？」
「悪女、いや、小悪魔、略奪愛……ＮＴＬ！」
……人が必死に落ち着こうとしている脇で、コロコロコロコロと私と読手さんの印象が二転三転しているのが聞こえます。
言い間違い一つで、よくもまぁここまで話を広げられるものです。
というか、好きでもないのに告白扱いにされたり、告白でも無いのに振られたり、普通ここまで好き勝手に憶測で……だんだん腹が立ってきました。
机ぐらいなら割っても事故じゃないでしょうか。

「はいはーい！　みんな塔城ちゃんで遊ばなーい！　ほら散った散ったー」

いっそ部長の命令とか無視して帰ってしまおうかと思い始めた辺りで、先程まで読手さんと談笑していた男子が手を叩いて場を纏めると、騒いでいた人達は一斉にわらわらと散って行きます。

まるで示し合わせていたかの様な潔い散り様。

狐に摘まれた様な、とはこういう感じなのでしょう。

「あーあ、もったいな……いて」

目を閉じたニコニコ笑顔のまま、ぼそっ、と呟いた読手さんの頭に、騒ぎを収めてくれた男子（確か、山ノ内さん）がチョップを落としました。

「お前もさー、わかっててボケるのやめろよなー」

お前の冗談分かり難いんだからよー、と、山ノ内さん。

「いやぁ、うちのクラスってこういう時ノリが良いから、つい……」

あっはは！　と、悪びれる事もなく頭を掻きながら声を上げて笑う読手さん。

……段々、話の流れがわかってきました。

つまり、読手さんも、クラスの人達も、わかっていてからかった、と。

なるほど。

なるほど、わかりました。

「山ノ内さん」

「んー？　ひぇっ……！」

山内さんは私に視線を向けるとビクリと肩を竦め一歩身を引きました。

が、ええ、何でかはわかりません。知りません。それより優先するべき事があるので。

「少し読手さんをお借りしていきます」

「は？」

頭の上に疑問符を浮かべて首を傾げる読手さんの袖を掴み、確保。

「どーぞどーぞ！　お好きなだけ持ってってくださいなー！」

「あ、ちょ、なんかわかんないけど此方今もしかして見捨てられてんの

!?　待って、塔城さん待って、謝りますから！　表面上は謝りますから！」

読手さんの言葉を無視して教室を出ながら、ふと思いました。

ああ、最初からこうするのが一番早かったんだな、と。

読手さんの制服の袖を引きながら校舎裏を通り、旧校舎へと向かいます。

木々に囲まれ、今では表向きは使われていない、という事になっている建物は、言ってしまえばグレモリー眷属の根城、という事になるのでしょうか。

昔学園で本当に使われていた校舎ではありますが、見た目は木造、趣があるというよりは、はっきり言って不気味と言っていい外観です。

七不思議なんてものまで囁かれるほどですが、実際にオカルト研究部――グレモリー眷属の活動に使用しているだけあって、細々としたところまで整備は行き届いています。

まぁ、そんな事を知るよしも無い人からすれば、どう見たって不気味な廃校舎でしか無い訳ですが。

「ちょっと、ちょっと待って下さいって、ば！」

するり、と、握っていた制服の袖が手の中から逃げてしまいました。

……不思議です。千切れるか千切れないかで言えば、千切れてもいいかな、くらいの力で握っていたので、抜けられる筈が無いのに。

「今日は何なんですか、塔城さん。からかったのは謝りますけど、あそこであいう言い間違いする方にも問題はあるでしょうに……こんな如何にもうらぶれた場所に連れてきて」

眉をハの字に倒し、困ったように文句を言う読手さん。

……そういえば、勢いと怒りに任せて連れてきてしまいました。

あのまま連れていければその必要も無かったんですが、説明するべきでしょうか。

「……部長が読手さんを連れて来い、と言ったので」

「部活入ってたんですね」

「意外ですか？」
「貴女が何かに打ち込んでいる、というイメージが湧きませんよ」
お菓子食べてるイメージしか沸かないので。
そう言いながら肩を竦める読手さんに何か反論しようとして、できない。
確かに彼の前では、というか、部活の外ではそういう姿しか見せていない。
……ぼっちじゃないですよ？　眷属の皆さんが居ますので。
「とにかく、部長が呼んでいるので、ちょっと付き合って下さい」
「別に部活見学くらいならやぶさかじゃありませんがね。部活名も知らなければ部長さんの名前も知らないんですが、此方、何か、目をつけられる様な事、しました？」
した、というか、している。
ここに至るまで、入学式と日影さんなる恋人さんと一緒に居る時以外、ずっと。
そこら辺も含めて部室で説明するのが手っ取り早くていいんですが、ここまで来たら名前くらいはいいでしょう。
「三年のリアス・グレモリー先輩、聞いた事ありますよね。うちの部長です」
まだまだ部活の名前は伏せます。
部活の名前よりは、まだ部長のお姉様補正の方が信じられますし。
「……あー」
読手さんの表情は芳しくありません。
これが彼女持ちの実力ですね。二大お姉様（）ではどうにもなりません。
……と、冗談を言っていられる雰囲気では無さそうです。
無言でくるりと踵を返し、足早に旧校舎から離れようと歩き出してしまいました。
同じく無言で腕を掴もうとして――――手の中に収まる筈の読手さんの腕を取り逃す。
「待って下さい。大事な話なんです」

冗談でもなんでもなく、彼の命に関わりかねない。
読手さんは私の呼びかけに応じたのか、一度立ち止まり、振り向く。
常に無い、不機嫌そうな表情。
目を見ればわかる。
瞼を開いている。
「此方、あなた方『悪魔だの堕天使だの天使だの』の、ややこしい仕組みの中に入りたいとは、どうしても思えないんですよ」
じろり、と、僅かに開かれた瞼から覗く、夜の空にも似た瞳に睨め付けられ、読手さんの言葉の内容と、その平坦な響きに体を竦める。
何時もと変わらない余所余所しい丁寧語。
しかし、何時もなら少なからぬ友好的な温かみのあったその言葉からは、明確な拒絶の意志しか感じ取れない。
知られていた、という驚きよりも、先程までとは明らかに異なる温度のない言葉の響きに追う足が止まる。
これまで接してきた中で、一度も聞いたことのない、温かみも優しみも無い、平坦な、意志を伝えるだけの記号としての言葉。
まるで紙に書かれた文章の様に平易な、言葉通りの意味しか込められていない言葉。
これを聞くだけで、これまで学校で話している時、彼がどれだけ感情豊かに話していたかがありありとわかる。
その時、ひゅる、と風が砂を巻き上げ、反射的に僅かに目を閉じてしまう。
文字通り瞬きする程度の僅かな時間。
たったそれだけの間、目を離しただけなのに、読手さんの姿が無い。
「そっち方面では、此方から言える言葉はさっきと変わりません。『ごめんなさい、でもこれからもいい友達でいましょう』ってね。……また明日、学校で会いましょう」
声はすれども姿は見えず。
何処から聞こえてくるかも分からない読手さんの声。
最後の方には、いつも通りの、気持ち程度の温かみが言葉に戻っていて。

「……読手さん！」

叫ぶ。

何か、決定的な何かが、私と読手さんの間に、私と友達との間に置かれたのが分かってしまったから。

私は居てもたっても居られず、彼の姿を探す。

元来た道を走り抜け、教室を突っ切り、土足のまま廊下を駆け、下校中の生徒が溢れる正門を通りぬけ、いつもの帰り道に辿り着く。

朝、何時も読手さんと遭遇する通学路。

これ以上は、追えない。

そうだ、これ以上、これから先、ここから先、読み手さんはどう帰るのか分からない。

入学式のあの日に出会ってから、ずっと観察していた。

目を閉じ続ける不思議なクラスメイト。

いつの間にかお菓子を分けあって、軽い冗談を言い合える程度にはなった人。

たぶん、高校に入ってから出来た、初めての友人。

でも、それだけ。

目を閉じ続けているのは知っている。

何かを隠しているのも知っている。

でも、彼が何処に住んでいるかも、ここから何でどう帰るのかも知らない。

私は、彼のことを見ていたつもりで、彼の、人間としての彼を、禄に見ていなかった。

聞けばあっさり教えて貰えそうな事を。

知ろうともしなかったのだ。

「そうそう、二年の有名な変態さん、兵藤一誠さんでしたっけ。彼はレア神器持ちで既に堕天使に狙われてますね。部長さんの新しい眷属として保護してあげるといいですよ。ああ何、お礼はいりません。部長さんとやらのお願いを無視してしまった詫びですので」

それでは。

そんな素っ気ない別れのあいさつと共に、声は途絶えた。

なんてことのない別れの挨拶。
決別を意味している訳でもない、普段通りの別れの言葉。
きっと明日になれば、彼はいつも通りに振る舞って、いつも通りに挨拶を交わしてくるのだろう。
心の中に一本、超えられない線を敷きながら。
「……私は」
私は。
口を突いて出た言葉に新たな言葉は連ならない。
空を見上げる。
放課後の空は未だ青く、しかし遠くに夕焼けの赤を滲ませていた。

四話　死を描き

夕暮れ時、夕食前の腹ごなしに近所の公園に散歩に行くと、何故だか死体ではないがもうほぼ死体と言ってもいい半死体が落ちていた。
死因は刃物に依る刺し傷からの出血多量、といったところだろうか。
『最近はこの街も治安悪ぅなっとるから、気ぃ付けて』
母さんと共に台所で料理をしていた日影さんの言葉を思い出し、納得する。
普段は割と人気のある公園、そのど真ん中で、こんな胸骨を破ってそのまま脊椎を割り裂きながら貫通させるような、いっそ思い切りが良すぎて爽やかさすら感じる猟奇殺人が起きてしまった。
この街で目立った活動を行ったはぐれ悪魔が長く存在できない以上通り魔的犯行ではないのだから、これはトリック一切なしの直情型計画殺人であると見ていいだろう。
直情型計画殺人とは、計画的に殺害対象をおびき寄せ、特に隠蔽工作を行うこともなく真正面から殺すタイプの殺人を指す。別名アチョー型殺人。
そして恐らくは、何処かの派閥に属している、もしくは所属しているつもりになっている悪魔か堕天使の仕業と見て間違いない。
流石に、心臓前後の骨を一撃で打ち抜き、その衝撃が周辺の肉をえぐり取るような真似を通りすがりの人間の通り魔ができる訳がない。
こういう雑な殺し方をして、なおかつ後始末は所属している組織がしてくれるだろう、とでも勘違いしている頭の中が春の日差しに数時間当て続けられた剥き出しの生肉の如く温かく熟成の進んだタイプの犯行だ。
「というか、よくもまぁこの状態で生きてる」
ちょっと感心する。
指紋が着くと面倒なので触ってこそ居ないが、視覚除く嗅覚聴覚及び六感七感その他もろもろの感覚が、彼の肉体が完膚なきまでに平凡で何の細工も施されていない並の男子学生レベルのものである事を

伝えてきている。
普通ならこうしてしゃがみ込んで観察するよりも早く、この半死体は死ぬ筈だ。
だというのに、この半死体、まだ一、二分は死に切らないだろうと思えるほど活力に満ちている。
まぁ、常人にはそう見えるだろうというだけで、実際はあと三十秒持てばいいいかな？　という程度か。
恐らく、中に封じられた神器から、ドラゴンの生命力が計測できるかできないか、というレベルで漏れだし、意味があるか無いか程度の延命になっているのだろう。
だが、肉体が平均的な日本の高校生男子のそれでしか無い為に受けきれず溢れ出し、数十秒分の延命と誤差レベルの見た目の余命を演出してしまっている。
まぁ、こんな状態になった人間を死ぬ前に治療できるような存在にとってみれば、さして意味のない誤差なのだが。
「ちょっと直しとくか」
グーグルアースでよく見る表紙の男――兵藤一誠。
彼には一方的に借りがある。
正確には彼自身ではなく、彼の神器の中身に借りがあるのだが、とりあえず宿主を治療すれば返したという事にしてもいいだろう。
まだ無事な全体骨格から正常時の全体像を類推、懐から取り出したスコップで土を掬って胸の傷口に流し込み、類推した破損前と同じ素材に転換。
派手に流れだした血液は面倒なので無視、代わりに、目を開いてスコップの先端で兵藤一誠という文字列の塊に一文追記。
【肉体的にドラゴンの影響を受け入れ易い】
血液を増やすよりこっちの方が手っ取り早い。死ににくくなるだろうし。
以上、九割九分死人な怪我人の簡単治療法でした。
全工程合わせて二秒弱。まだ遅い。
思考時間は短く済むが、懐からスコップを取り出して振るうまでの

時間が長い。
父さんや日影さんに教わっていなかったら倍は掛かっていただろうとは思うのだが、まだまだ未熟だ。
「しかし、しっかり伝わってなかったのかね」
瞼を閉じ、スコップの土を払い落として懐のホルダーに収め、その場を後にしながら首を捻る。
彼、兵藤一誠が有力な神器の持ち主であり、過激派の堕天使に命を狙われている、というのは、数日前に塔城さんに伝えたのだが。
眷属にするしないはともかくとして、彼の中に神器があるか、堕天使が彼の周りを彷徨いているか、堕天使に何処かに誘い出されていないかどうか、程度の事は片手間にも調べられる。
……情報源が、塔城さんの誘いを断って逃げた怪しい奴だったから、という事も無い筈だ。
調べるだけなら殆ど無害なのだから、調べない筈もない。
「……怪しすぎたかなぁ……」
隠蔽は完璧だ。
此方は誰がどう見ても普通の何の変哲もない一般人にしか見えない。そういう風にしてある。
……だから逆に、露骨に一般人ではありえない行動を取ってしまえば、そのギャップを怪しまれてしまう。
例えば、瞬きする間に匂いを消しながら少し離れた位置にある新校舎の屋上に飛び上がり気配を消したりするのはアウトだったろう。
例えば、塔城さんの耳元の空気だけを震わせて声を伝え、塔城さんが何やら必死な形相で土足で廊下を駆け抜けて校門を飛び出していくのを確認した後、ゆったりと教室に戻って荷物を纏め、何時もとは別ルートで帰ったりするのも、後から証言を拾われたりしたらアウトになる。
そもそもグレモリーの名前を聞いた時点で拒絶反応を示し、悪魔や堕天使、天使などの事情を知っていると仄めかしてしまうのも当然アウト。
我ながら見事なスリーアウトチェンジではないか。

だが仕方がない。
人の心はままならないものだ。
最適解を考えてみても、恐らく何処かで破綻していた。
あのまま大人しく付いて行けば、塔城さんとその主、及びその眷属の方々は自らが悪魔である事をカミングアウトしただろう。
自分達は人の世の常識に当てはまらない異常な存在である。
だから、貴方の異常性についてどうこう言うつもりはない、だから、庇護下に入ってはどうだろう、と。
我々のコミュニティの中であれば貴方の異常性は受け入れられる、と。
生憎と、リアス・グレモリーの人格についてはグーグルアースで見た時にある程度読み込んでいる。
眷属でなくても、庇護下にあれば身内の一部として扱うだろう。
露骨に言葉にする事は流石に無いにしても、『目を閉じている事』について、ああだこうだと理由を付けて触れてくるだろう。
触れられたくない部分を迂遠に気長に聞き出し、解きほぐし、優しく受け入れようとするだろう。
その慈悲深さ故に、彼女は身近に傷ついたままの誰かが居ることを許容しないのだ。
それは駄目だ、そして嫌だ。
何処かで此方の我慢は限界を迎えるだろう。
誰にだって触れてほしくない部分はある。
触れない、受け入れる、と言われたところで拒絶反応を示してしまう部分は絶対にあるのだ。
塔城さんの面倒くさい重い部分と同じだ。
あちらに面倒で重くてどうしようもない部分があるのと同じく、此方にだってそういう部分がある。
土足で踏み込んで欲しくない、なんて言わない。
たとえ靴を脱ごうが裸足だろうが、或いは浮遊して地に触れていなかろうが、嫌なものは嫌なのだ。
父さんが、母さんが、この異常を詳しく知ること無く、しかし無限

なのではないかと思う程の親の愛故に受け入れてくれているとして。
何もかもとまでは行かなくとも、知られたくない、知っていてもらいたい多くの事を知っていて、受け入れて、傍らに居てくれる日影さんが居たとして。
詳しい事など知ること無く、しかし明らかにバレバレな此方の細目だという言い訳を、あるがまま受け入れて変わらず接してくれるクラスメイト達が居たとして。
此方の目に、視覚に、認識に、感覚質（クオリア）に、無神経に触れて欲しくない。
どれだけ心許す相手が増えたとして、それは決して譲れない一線だ。
「だから、まぁ」
遠く背後に離れた公園、発動した召喚陣の魔力を感じながら、思う。
その人で満足してくれ。
エロいところもある、というか、かなりエロい部分に比重が置かれているが、それでもその人は『この世界の主人公』だから。
十分だろう。
君達の面倒くさそうな、読者人気が出てかなり長続きしそうな此方の知らないストーリーは、その人が居れば十分に進む筈だ。
塔城さんの面倒くさそうな部分も、恐らく彼女の同胞たちも多く抱えているだろう重い重い過去も。
そいつにどうにかして貰って欲しい。きっとどうにかなる筈だから。
ならなくても知らんが、少なくとも、面倒そうな部分には巻き込まないで欲しい。
「……あぁ、いやだいやだ」
我ながら心の中まで愚痴っぽい。
せっかくの散歩だというのに気分が暗くなってしまった。
少しコンビニに寄って、気晴らしになりそうな本かおやつかジュースでも買って帰ろう。

やはり、誰とでもコンビになってくれる緑のコンビニは良い。
タピオカ系飲料はあそこで買うのが一番良い。
今日は夕食前なので買わなかったが、ホットスナックも何だかんだであそこが一番手頃で無難でなおかつ美味しい。
アニメコラボ系では青色が並んで、ホットスナックではちっさいところに劣るが、それでもバランスが取れていて安定感がある。
しかし、それは全国に展開するその他同系列店全てに言えることだ。
この家から少し離れた町外れのコンビニ、実は更に隠された良い点がある。
「いい廃屋だ」
目を開け内装を眺めながら、しみじみしてしまう。
絵に描いたような廃屋。
それも当然、実はここ、自室程ではないが多少手を入れ、外観、内装共に多少厚めの挿絵が張り付いている。
この中だと少しは目を開けても気にならない。
そして、廃屋として存在感を増したこの廃屋は、色々な物を呼び寄せる。
廃墟マニアが来る程ではない。
だが人気のない町外れの廃屋という好条件から後ろ暗い連中が集まり、後ろ暗い取引をしていたりする。
世に言う堅気ではない連中だ。
だが、基本的に彼らは此方には直接関係ない。
「そう思いませんか、貴女も」
――――――ケタケタケタケタケタケタケタケタ！
廃墟の奥、構造上どうしても影になる部分から、けたたましく耳障りで不快な笑い声が響く。
不穏な気配を感じたから来てみたが、大当たりも大当たりだったようだ。
「いいなぁ、美味そうな匂いだ。不味そうな匂いだ。お前は甘いのか

い、苦いのかい？」
ぞわり、と、影になった部分から女性的輪郭を持った文字の塊が溢れ出る。
不自然に高い所に現れた文字の塊、次いで、奇妙な獣のような体が現れる。
【氏名・バイサー】
【種族・転生悪魔（はぐれ）】
【元種族――】
見るまでもない、どうでもいい文字列。
流し読む事もない。あまりにもどうでもいい。
必要最低限の部分だけ読み、頬に手を当てて溜息。
「これぞ駄文、といった感じですねぇ……」
うっとり。
いい悪魔だ。
ここ最近はそれほど多くない、完全にコミュニティから抜け出し、誰の庇護下にも無く、身よりも友も、親しい者も惜しむ者も遺される者も無い。
絵に描いたような、主を殺して欲望のままに生きる典型的なはぐれ悪魔。
これぞ正しく此方が許容する、面倒でない、簡単な事情と簡単な生き方をした、後腐れのない悪魔。
「どおしたぁ？　怖くて怖くて頭がイカレでもしたかぁ？」
薄い挿絵を背景に、文字列の塊の表面が挿絵で包まれる。
四足の獣に近いシルエット、しかし、四足の大まかな作りは人に似たつるりとした肌。
独立して動く蛇形の尻尾。
一糸まとわぬ女性の上半身、作り物地味て美しい典型的な美女の顔。
そして見よ、両手には槍めいた凶器を一本ずつ構えているではないか。
――これが世に言う、ドヤガオ・ダブルランス・スタイルであ

る。
「ブッフォっ」
思わず噴出す。
基本的に、挿絵は意味もなく挿入されるものではない。
それは、本人が、或いは周囲が『これだ！』と定めたとしか思えない、いわゆる人間で言うキメ顔に相当するタイミングで現れる場合が多い。
故に、自己紹介や運動時の気合を入れる場面などでは挿絵が挿入される機会が多くなる訳だが……。
ドヤ顔で両手に槍を構えた全裸美女の姿をいきなり見せられたら、それはもう、口の中が吹き出してしまうのも仕方がない事ではないだろうか。
「カカカカカ！　恐怖の余り笑うしか無いか！　なぁぁに、安心しろぉ。折角の獲物、ゆっくりと甚振りながら……」
だが話はつまらない。
典型的で、テンプレで、変わったことを口にする訳でもない。
挿絵も消え、後に残るのは『誰にとってもどうでもいい、死んでも誰も困らない』見るに耐えない文字の塊だ。
キメ顔を精一杯利用した一発芸は面白かったが、別に好んで生かしておく程の事でもない。
飲み物などが入ったコンビニの袋を、内装を上書きする時にこっそり設置したフックにひっかける。
恐怖を煽っているつもりなのか、文字列の塊はじりじりと勿体つけるように此方に歩み寄ってくる。
逃げ出せば即座にその四足からくる高速機動で捉え、その手の中でじわじわと傷めつけながら獲物を食いちぎる、そんな思惑が見て取れる。というか、書いてある。
まずはそのありきたりな文字列からだ。
足元から拾った小石を投げつける。
ジャイロ回転しながらバイサーなる文字列目掛けて飛んだ小石は一瞬で音の数十倍の速度を超え、強靭であるらしいはぐれ悪魔の肉体

を貫通する。
本来なら大気との摩擦で石は熔け蒸発し、更に音速の壁を破った衝撃で廃屋や此方の服もどうにかなっている筈なのだが、そうはならない。
熱や衝撃波が着弾時にしか発生しない特殊な投法なのだ。
速度は段違いだが、これは父さんもできる。
マキウ・ジツ。
古くから父さんの故郷に伝わる伝統的かつ現実的な暗殺用凶器投擲法なのだそうだ。
何もおかしくはない。
もう一度言う、現実的でおかしなところは一切無い。
「ギ、」
聞くに堪えない悲鳴。
これから此方がこの文字列に行う事に対して何の意味も持たない無駄な音声。
いわゆるノイズだ。
だが時刻は夕暮れ、まだ一般家庭はご飯を作っているような時間帯。
とりあえず空気の音の伝わり方を調整し、音を出せなくする。
無音のまま、表情を苦悶と屈辱に歪めているらしい文章になった文字列が蠢き、此方に目掛けて動き出す。
穴が開いただけで、その文字列の塊には大きな変化は無い。
それが許せない。
のそのそと、恐らく高速で此方に突撃してくる文字列。
手の中に先日追加した機能で魔剣を作り出す。
片手に三本、両手で六本。
此方の気分次第で切れ味を変えられ、折れない。
たったそれだけの機能を込めた刀のような魔剣を手に、歩き出す。
目の前の文字列の塊目掛けて。
見難く、目障りで、不快だ。
何故分かりやすい形をしていないのか。

何故文字の塊にしか見えないのか。
実に不快で、愉快だ。
目の前にある、動き喋り生命活動を行っている理解不能な文字列の塊。
こんな不愉快で不気味で許しがたく許容しかねどうしようもなく慣れる事のない物体ですらない見難く醜く好きになれず嫌いなこれを。
思う様、叩き潰し、刳り潰し、斬り潰し、磨り潰し、動かなくして、死なせて、殺して、文字列ですら無い細切れの文章にして。
『見れる程度の死体』に『描き潰す』事ができるなんて。
「ああ、ああ」
すれ違い様、右腕相当の文字列を刻む。
傷の状態を、材質を、死んだ細胞の数を、生きている細胞の数を、生命オーラの形質と残量を、魔力量を、それまで蓄積したありとあらゆる情報を示した肉片相当の文字列が宙を舞う。
二度三度四度五度――――文字通りの塵、血霞となるまで斬りつける。
目を凝らさなければ読むことも出来ない程に細かく刻み続ける。
幸せだ。
至福の時だ。
どうしようもなくシンプルで、難しい事がなく、意味も無く、八つ当たりでしかなく。
でも、実に気が晴れる時間だ。
適度な運動で夕食前には持ってこいだ。
日影さんが伝え教えてくれた、父さんが細かい体捌きの指導をしてくれた六爪流で。
他の誰もが望まない誰かを、誰に咎められる事もなく、消し去る。
「――――――――――――――――――――――――――――――――!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」
一部を切り落とされた蠢く文字列が体をうねらせ何かを絶叫している。
無意味。

どうでもいい。
そんなものは無価値だ。
六本の刀、その先端からは既に此方にしか見えないインクが滴っている。
地面に液体の様に散った文字列に向かってインクを飛ばす。
散らばった文字列を塗りつぶし、無数の色のインクが入り混じったサイケデリックな水たまりが出来上がった。
先程まで満ち溢れていた血臭は消え去り、インクの涼しい匂いが廃屋内に溢れかえる。
心地よい匂い。
しかし、匂いよりも何よりも。
「ぁ、ああ、ああ、いい、実に、綺麗だ」
分かりやすい絵だ。
単純にインクをぶちまけただけの、アートとも言えない、落書き。
だがそれでいい。
文字の塊が蠢くのに比べれば、何倍も良い。
口の端が釣り上がる。
目尻が垂れ下がる。
頬が熱く紅潮するのがわかる。
幸せを感じた時、人は意識せずとも笑うことができるのだ。
「む、こら、逃げないでくださいよ」
此方の姿を見て、大きな文字列の塊が踵を返して逃げていく。
まぁ、逃げないで、とは言ったが、逃げようはない。
此方も振り向く。
するとどうだろう、逃げてきたのとは反対側から、先程の文字列が現れたではないか。
辺りを見回し、此方の姿を見て、錯乱する様に無音で蠢く文字列。
「ここの物理法則、建物の端から端をループ構造にしてありますから。終わるまで外に出られませんよ?」
その言葉に、体を僅かに震わせ、胸部表面に魔法陣を浮かべてビームの様な何かを射出してくる。

だが、当然ながら正面から撃たれた狼狽え弾などが当たる理由もない。
体を逸し、すれ違い様にビーム的な何かにペン先――刀の切っ先を当て、塗りつぶす。
極限まで薄くした赤。
市販のレーザーポインタの光程度に収まったそれは壁や床を焼くことすらしない。
この廃屋を派手に壊される訳にはいかないのだ。
折角、お前みたいなのが寄ってくるようなベストプレイスにしたのだから、繰り返し使って行きたい。
【その表情は屈辱から恐怖を経由し、ついには絶望と呼べるそれへと変化していた】
文字列が更新されている。
見れば四足の獣の股間相当の部分から、アンモニアや水分を主体とする文字列が異臭と共に地面に流れ始めている。
ああ、臭い。
描き直さなければ。
ああ、嬉しい。
描き潰せる文字列が増えた。
「さあ、掛かって来て下さい。もしくは、大人しく斬られて下さい。さもなければ、抵抗して殺されて下さい。そうでなければ、逃げて後ろからすり潰されて下さい」
歩み寄る。
この文字列の反応速度でも十分に歩いている様に見える速度で。
目まぐるしく文字列の感情や表情、細かな仕草を表す部分が更新されていく。
そして再び浮かび上がる挿絵。
涙に、鼻水に、涎に、よくわからない体液が顔の穴という穴から溢れ出し、美しい顔面構造は極まった感情によって歪みきっている。
整った顔立ちをしていただけに殊更に醜い。
だが、文字列よりはマシだ。ずっとずっとマシだ。

だから、どんな形であれ、

「今よりは、見れるラクガキにしてあげましょう」

跡形も遺さず、塗り潰してしまおう。

五話　龍は惑い

つまるところ、この世には悪魔や天使が居て、人間の中には神器とかいう凄い力を秘めている奴らが居る、らしい。

爽やかなイケメン野郎の木場に案内された旧校舎にの一室、オカルト研究部の中に通された兵藤一誠ことイッセーはその説明を聞き、曖昧に頷いた。

「はぁ……それで、それが俺に何の関係が？」

教室に迎えに来た木場祐斗にムカつき、部室で出迎えてくれた姫島朱乃に喜び、シャワー上がりのリアス・グレモリーを見て盛大に鼻の下を伸ばして鼻血を噴出した。

悪魔の羽を生やすオカルト研究部部員の姿を見て、顎が外れんばかりに驚愕してもみせた。

だが、その上で説明を受け終えた今、内心にあるのは戸惑いのみ。

言い換えれば、酷く冷静な精神状態にあった。

イッセーは、駒王学園の生徒として見れば学力は決して高くはないが、頭の回転が遅い訳でもない。

普段の、常に興奮状態にあり、下半身にある第二の脳に思考の六割を任せているような状態であっても、話の流れとして自分に何かがある、程度の推測はできた、かもしれない。

「貴方の中にも、それが眠っているの。だから、命を狙われた」

ぴらり、と、リアスが一枚の写真を取り出す。

イッセーはその写真を見て、初めて目を見開いた。

「この子、見覚えが無いかしら」

写真に写っていたのは、艶やかな黒髪を伸ばした、清楚そうな美しい少女。

見間違えるはずもなかった。

天野夕麻。

いつの間にか誰もが忘れてしまっていた、居たという証拠すら遺さず消えてしまった、イッセーの生まれて初めての恋人。

携帯の写真からすら消えていた彼女の写真を何故この人が。

そう混乱するイッセーに対し、リアスは申し訳無さそうに顔を俯かせる。
「ごめんなさい……、いえ、謝るのが筋なのかどうかは分からないのだけど」
「君が彼女に命を狙われている、という話は、少し前に僕らの耳に届いていたんだ」
もしかしたら、予め手を出されない様にしてあげる事もできたかもしれない。
リアスの言葉を引き継ぎそう告げた祐斗の言葉に、イッセーは頭に疑問符を浮かべる。
「待ってくれよ、俺は別に襲われてなんて……」
そうだ、そんな記憶はない。イッセーはあの日の事を思い出す。
初めて出来た恋人との生まれて初めてのデート。
事前にバッチリ調べて決めておいたデートコースを周り、最後、夕日の公園で……。
「覚えていない？　……本当に？　イッセー、貴方、自分がどんな状態だったか、本当に覚えていないの？」
リアスの声が何処か遠くに聞こえる。
イッセーの意識はこの場から離れ、過去へと向かう。
襲われたなんて記憶はない。
そうだろうか。
いや、そんな筈はない。
だが、それはイッセーにとって襲われた、と認識できない程の早さで行われ――
『ちょっと直しとくか』
――より強いイメージによって、薄れていた。
「う、ぐ」
ざり、ざり。
存在しない欠損を削る感触が蘇る。
空いた穴に、失った大事な何かの代わりに、無造作に放り込まれた硬い粒の感触。

ざり、ざり、ざり。
異音と共に詰め込まれる土の感触。
動く事も出来ず、声を上げる事すらできない。
感触がリフレインする。
音すら無く、体内に注ぎ込まれた異物が、音すら立てずに、失われた肉に、臓腑に、噛み合い、融け合い、補填していく。
自分でない何かが自分に溶けていく感覚。
勿論幻覚だ。
だが、あの時身動き出来なかったからこそ、体が反応する。
どさり、と、ソファから滑る落ち、その場に蹲るように倒れこむ。
体に力が入らない。
苦痛、異物感、異物が異物でなくなる、自分でない何かに神経が通って行く、形容する言葉すら知らない悍ましい未知の感覚。
精神を削られる様な感覚のフラッシュバックに、意識が遠のく。
「イッセー!?」
自らを呼ぶ声が遠くに感じる。
ストレスから心を守るための強制遮断。
だがそれも一時的な物だ。
イッセーは知らない。
だが、肉体はそれを受け入れている。
襲われたという事実を、傷口に異物を詰められる痛みも、傷口が信じられない速度で塞がれていく感触も。
兵藤一誠の肉体は受け入れる。
そのどれもが、取るに足らない、ありふれた感覚であるが故に。
例えば『ドラゴンであれば』その程度の感覚は、日常的なものに過ぎない。
イッセーは受け入れるだろう。
魂魄という概念を除いて考えれば、精神は肉体の延長線上にも存在する。
故に次に目覚めた時、イッセーは普段の通りに、混乱する事はあれど、すんなりと受け入れる事ができるのだ。

悪魔も、天使も、神器も、これからの境遇も。
――気に食わんな……。
地の底から響くような、低く、迫力のある声。
聞き覚えのない、だが、自然と違和感を覚えない声。
親しみではない。
だが、受け入れられない理由も、誰だ、と思う事も無い。
解らないが、大丈夫だ、と、イッセーは朦朧とした、ブラックアウトする寸前の意識で受け入れる。
それが、彼の肉体にとっては当たり前だから。
彼にとっての当たり前になる。
――糞餓鬼、聞こえているのだろう。
――聞こえていなくとも、目覚めと共に忘れても、今だけは覚えておけ。
――黒曜の瞳、夜天の瞳、深く沈み込む黒の瞳だ。
――気を付けろ。
――まともではない。今の貴様では……。

なんだかんだあって、俺はオカルト研究部に入部する事になった。
体には怪我一つ無かったにも関わらず、全身の血液の大半を失い死ぬ寸前だった俺は、悪魔として生まれ変わり、部長から魔力を分け与えてもらう事で生き長らえたらしい。
人間で無くなってしまった事は少し残念に思わないでもないが、聞いた話では、出世すれば部長と同じように眷属悪魔というのを集めてハーレムにする事も可能らしい。
ハーレム、男の夢だ。
言っちゃなんだが年頃の男の頭の中なんて女の子と如何にエロいことするかしか詰まっていない訳で。
『出世すれば』『眷属を女性ばかりにすれば』『下僕だからエロいことし放題』
なんていう、冷静に考えてみれば背表紙をホチキスで止めるタイプの青年誌の巻末エロ広告バリに怪しく、それでいて実際にやったらタ

ダの外道でしかないという事実に目を逸しつつ、釣られてしまうしか無かったのだ。

だが、悪いことばかりじゃ無い。

悪魔の社会は実力主義、力とパワーとストレングスを身につけた強者である事がもてる男の条件であり、それ以外の部分に関してはある程度目をつむって貰えるという。

更に、悪魔の絶対数自体が少なくなっている昨今、性欲が強い、というのも、煙たがられるどころかむしろ歓迎される要素であるらしい。

実に俺向きだ、と思う。

主に性欲が強いのが歓迎される、という下りが。

喧嘩の一つもしたことがないので腕っ節には自信がないが、今から慌てて鍛える必要はない。

何せ今の俺は悪魔稼業を始めたばかりの初心者。

まずは小さな事からコツコツと積み重ねていこう。

……まあ、そう思わないとやっていけない、というのもある。

何せ、初心者とはいえこれまでの悪魔活動で禄に契約を取れていない。

契約は取れず、しかし召喚者からは気に入られ、アンケートの結果のみ上々。

アンケートの内容を聞いた時は何かこみ上げてくるものがあった。

何だかんだ言って、仕事をしてその結果を良い方向で評価される、というのが心に来るものだ、というのは分かった。

だけど、契約自体は一件も成立していない、つまり、実績は上げられていない。

部長が言うには前代未聞らしい。

色んな人から聞く話じゃあ、社会人一年目なんて失敗の連続で上手くいく事の方が少ない、なんて言うけど。

じゃあ実際同じ立場に立って、失敗の連続で、それで『他の人も失敗してるから』と納得する事ができるやつはどれくらい居るだろうか。

今の俺はまさにそんな感じで、考えれば考えるほどにドツボにはまっていくのがわかる。
「しかも、二人共変態だしなぁ……」
だけど、それに文句を言える立場ではない。
小猫ちゃんを呼んでコスプレして欲しかった一人目の人。
何でもいいので不思議な力で魔法少女になりたかった筋肉モリモリマッチョマンの変態な二人目。
結果的に俺はこの二人の望みを叶えることができなかった。
何せ俺は小猫ちゃんの代わりにコスプレして映える美少女でもなければ、筋肉で何もかも解決出来そうなクリーチャーを魔法少女に変える力もない。
仕方がないではないか、と、心の何処かが弱音を吐く。
でも、頭の何処か、もっと冷静な部分が言うんだ。
『お前には何ができる』って。
誰に、どんな人間に召喚されたら、願いを叶える事ができるんだろう。
溜息を付き、空を見上げる。
考えれば考えるほど悪い方向に向かっていくのに、考えるのをやめられない。
――ああ、ちょっとエッチで美形過ぎない男子が好みの綺麗な女の人が召喚してくれねぇかなぁ……。
いい考えだけど、この美形過ぎない、というのは、つまり美形の事を言うらしい。
つまり木場だろう。お姉さん系からの依頼が多いらしいし。
きっとエロい依頼だろう。間違いない。きっとエロ依頼に違いない。
……斬ったエロ衣類!?　いや、違う。
ともかく、やっぱりイケメンはクソだ。
おのれ木場めぇ……！
「おおい、そこの人、ちょっといいですか」
突然の声。

声の聞こえてきた方に視線を向けると、そこにはまるで瞼を閉じているように見えるほど目が細い男と、その男の前でオロオロとしている、修道服の金髪美少女の姿があった。

悪魔を治療した罪により異端とされ、教会を追い出された悲劇の聖女、アーシア・アルジェント。

彼女には兵藤一誠と同じく一方的に借りがあり、もしも会う機会があれば何か手助けでもしてやろう、と、常々考えていた。

何せ、彼女がこの世界の表紙に居てくれたお陰で、小さい頃から家の救急箱の中には必要最低限の、本当に本当の非常時に使うものしか補充されず、地味に家計の助けになってくれている。

父さんも単身赴任先でちょっとした怪我をした時に便利だと言っていたし、その恩恵は計り知れない。

「いやぁ、でもなんですね、実際会ってみて思う印象というのは、遠目に表紙で見るのとは少し違うというか」

『うぅ、助けてくれようとしているのはわかるのですが……』

さっき感知した、荷物を抱えて人混みの中をあっちへウロウロこっちへウロウロとしている気配。

下手に根性の曲がった堅気でない人に見つかったら、いいように連れ去られて事務所に連れ込まれ、話の流れで何らかの書類にサインさせられ、数日後には大人が大好きな映像作品の新人としてデビューさせられていたのではないか、と思う程の無防備さ。

なるほど、これが可愛い、という事なのだろう。

嗜虐心をそそる、と言い換えてもいい。

片言英語で『ＴｈｉｓＷａｙ……』『Ｆｏｌｌｏｗ Ｍｅ……』と言って手首を掴んで、とりあえず人混みから引っこ抜いてはみたのだが……この始末である。

ついつい意地悪をしたくなるリアクションは、これも一つの芸術品と言っていいのではないだろうか。

この身の不具合の為、その姿を素直に映像として捉えることはできないが。

日本料理が無形文化財として認められるのと同じように、ああいういじめてオーラというものからは一種の美を感じる。
「教会へと送り届けるのは、もうちょっと解らない振りしてからでいいんじゃないですかね、うん」
『私がもっと日本語の勉強を頑張っていれば……申し訳ありません……』
この自罰的思考！
確かに言うとおり、異国の地に訪れるのにその土地の言語を満足に操れる様になっていない、というのは旅行者として見ても致命的な失敗だ。
だが、異国で自らの国の言葉が通じないとなると『何で英語が通じねぇんだよ！　英語は国際語だろが！　クソックソッ！』と逆ギレするナチュラルボーンヤンキーが多い昨今、このリアクション。
つまりこの娘天使ではあるまいか。
あ、でもこの世界天使とか堕天使とか小悪魔とか、そういう比喩表現での賞賛が上手く機能しないな。
天使だってどうせ碌な物では無いことは間違いない。
『ええと、「教会」、「私」、「イカセてくらしゃひぃぃ」で、伝わって下さいぃ……』
ボディランゲージ付きで片言ながら途中まで上手く此方に意思表示を行っている。
でもちょっと最後の辺りが淫靡、誰の仕込みかこのエロ日本語。
シスターさんが教会でおねだり……つまり主が見ていますＰｌａｙである。
……よし、帰ったら日影さんにリクエストしてみよう。忍び転身でどうにか出来る筈だ。
流石に教会は用意できないが、此方の部屋、つまり何の変哲もない普通の部屋でシスターさんと、というシチュは中々に背徳的ではないだろうか。
と、まぁ、我ながらフルで口に出したら日影さんからも呆れた視線を貰えそうな馬鹿思考は置いておくとして。

もうそろそろタイムアップである。
実はそもそも夕飯の食材が足りないから、母さんに買ってくるように言われたところなのだ。
簡潔に言うと、このアーシアさんを送り届けると夕飯が遅くなる。
恩返しと夕飯の時間を両立させようと思ったら、流石にこれ以上は言葉通じてないごっこを引き伸ばせない。
ここはこの少女の必死のボディランゲージが通じた、というていで教会に連れて行ってあげよう。
教会、家からもスーパーからも遠いけど。
……人混みから引っ張りだした、というところで、恩返し終わりって事じゃ……ダメかな？
瞼の裏に「せやな」と曖昧に頷く日影さんと、笑顔で重圧をかけてくる母さんの顔が浮かぶ。
賛成1，反対1、父さんなら……駄目だ、答えを保留にして此方の成長度合いを図ろうとするに違いない。
そもそもこういう時に人の意見を参考にしてばかりでは駄目になる。
ゆっくりと今ある材料と周囲にあるものを吟味して、そこから答えを見つければいい。
手持ちの材料は何もない、自力で送り届けると時間もかかる。
では周囲は……居た。
少しどんよりとしているが間違いなく覚えのある気配。
「おおい、そこの人、ちょっといいですか」
ドラゴンの混じった悪魔の気配。
この必死で意思疎通を図っているアーシア・アルジェントと表紙で腕を組んでいた男。
赤龍帝、兵藤一誠その人であった。

六話　闇に紛れ

「二度と教会に近づいちゃ駄目よ」

俺は部室で部長に強く強く念を押されていた。

今までにない程に部長の表情は険しい。

念を押されているというより、はっきりと怒られていると言ったほうがいいかもしれない。

「教会は悪魔にとって敵地、踏み込めばそれだけで問題になるし、常に監視している天使から光の槍が飛んできてもおかしくない危険な場所なの。今回は、シスターを送り届けてあげた貴方の厚意を素直に受け止めてくれたみたいだけど、本来なら……」

ここまで真剣に俺の事を心配してくれている、という事に感動すると同時に、何か申し訳ない気分になってくる。

部長の説明によれば、教会もシスターも、聖なるものは全て悪魔にとって危険な存在であるらしい。

下級悪魔ともなればそういった聖なるものへの耐性は無いに等しく、聖書を朗読されれば耳と頭が痛くなり、十字架を見れば酷い忌避感と拒絶反応を起こし、教会に近づこうものなら、体中が震え上がる。

これは聖なるものが致命的な弱点になる悪魔の体が起こす防衛本能というものらしいんだけど……。

俺は、そういう悪魔としての本能が薄いのか、どうしてもそういう危機感を抱けなかった。

十字架を見ても少し『嫌だな』としか思えなかったし、教会に近づいても少し空気が悪くなったな、程度にしか感じられなかった。

強い悪魔なら聖なるものにもある程度の耐性ができて、これくらいはおかしくないらしいんだけど、今の俺は駆け出しの下っ端悪魔。

しかも魔力不足で召喚陣も使えない様な味噌っかすだ。

耐性がある訳じゃなく、悪魔としての本能、防衛本能まで弱すぎる、という事なんだろう。

我ながら情けなくて涙が出そうだ。

「人間としての死は悪魔への転生で免れる事もあるわ。でもね、エク

ソシストや天使に悪魔祓いを受けた悪魔に、そんなチェンスは絶対に遺されない。どれだけの寿命が残されていようと、跡形もなく、魂の一欠まで消え失せる。……絶対の無、何も考えられず、何も出来ない。それがどれほどの事か、わかる？」

正直、解らない。

何故、『あんなものにそこまでの危機感を得なければならないのか』が、俺には理解できない。

だけど、それが悪いんだろう。

危険なものに、危機感を抱けないという危うさ。

きっと部長は、俺のこういった未熟で不出来な部分を見越して心配してくれているんだ。

それがわかるのに、実感できない自分が悔しい。

沈み込んで反応も出来ずにいる俺を見て、部長はハッと気付いたように首を振った。

「ゴメンなさい、熱くなりすぎたわ。ともかく、今後は気をつけてちょうだい」

「はい」

はっきりと返事をしたつもりが、少し声が沈んでいるのがわかる。

「そう落ち込まないで。次から気をつければいいんだから。……でも、はぁ……ダメね、私。熱くなると言い過ぎる、いえ、行き過ぎるところがあるから」

いつもの、超然としていたずらな、自信に満ち溢れた部長らしくない少し悲しそうな顔。

たぶん、俺を眷属にする前に勧誘しようとした相手と、小猫ちゃんの事だろう。

部長は恥として、そして終わった話として詳しく話してくれなかったけど、部活の合間に朱乃さんや木場の野郎から事情は聞いていた。

余り人に興味を持たない小猫ちゃんの数少ない友達。

俺と同じように何かしらの神器を持っているかもしれない、という事で、友達である小猫ちゃんに連れてくる様に頼んだけど、大失敗に終わった。

以前と同じようにクラスでは振舞っているけど、その友達とは何処か余所余所しくなってしまったのだとか。
それ以来小猫ちゃんは何処か塞ぎこんでしまっている。
俺は以前の小猫ちゃんを知らないからどれくらい塞ぎこんでしまっているのかは知らないけど、それなりに長い付き合いになる眷属のみんなからすれば一目瞭然。
みんなに愛される学園のマスコットの様な小猫ちゃんを悲しませるなんて、と、俺なんかは思った訳だけど、どうも一方的にあっちが悪い、なんて話でも無いらしい。
俺は死にかけのところを悪魔に転生させてもらう事で助かったけど、勧誘された誰もが悪魔になることを望む訳じゃない。
むしろ世間にはレアな神器持ちの人間を無理矢理転生悪魔として自らの下僕にするような悪魔の方が圧倒的に多く居る。
神器の力をある程度意識して使いこなしていて、今の今まで人間のままでいるという事は、悪魔に対して悪い印象を持っている可能性が高く、そして、その印象は決して間違いじゃないんだとか。
むしろ、多少余所余所しくなっただけで殆ど前と同じように接しているだけ、まだ悪くない対応じゃないか、なんて言ったのは木場だ。
あいつはイケメンだけど、同じように神器持ちなだけあって説得力がある。
あいつもあいつで過去に何かしら神器のせいで嫌な目にあったのかもしれない。
俺の神器もドラゴン波のものまねに役立つだけで使い道が無いし、そもそも持ってたせいで堕天使に殺されるし、生き返ってからも狙われるし。
本当に、神器っていうのは持ち主にも周りにも碌な影響を与えない。
正直不本意だけど、逆に、友人だと思っていた相手から悪魔の巣窟に連れて行かれそうになったそいつは同情されてもいいのかもしれない。
だけど。

オカルト研究部に始めてきた時に見た、小猫ちゃんの姿が思い浮かぶ。

俯いて、もそもそと美味しく無さそうにお菓子を頬張る小猫ちゃん。

余りにも暗いその雰囲気に、可愛らしさよりも先に空気の重さを感じる程だった。

（もうちょっと、どうにかならないもんなのか？）

どうにか、でも、どうすればいいのか。

勧誘された相手がどうにかするのか。

小猫ちゃんがどうにかするのか。

俺や部長、朱乃さんや木場がどうにかするのか。

全く関係ない誰かや何かが現れて、よくわからない方法でどうにか解決してくれるのか。

俺がそれを考える意味はあるのか。

「あらあら、お説教が終わったら次は自己嫌悪の時間ですか？」

「おわっ」

いつの間にか背後に朱乃さんが立っていた。

いつものニコニコ顔だけど、あの状態の部長にああいう事を言う辺り、意外とこの人も悪魔っぽい部分があるのかもしれない。

「そんなんじゃないわ……。それで朱乃、どうかしたの？」

部長の問いに、朱乃さんは少し表情を曇らせて答えた。

「大公から討伐の依頼ですわ」

何故、と思う私が居ました。

何故そんな目を向けるのか、と、平坦で温度のない声を聞きながら、悲しく思った私が。

でも同時に、やってしまった、と、何処かであなる可能性を予感していた私も居ました。

同じ立場で、ああいう態度を取らないで居られるか。

悪魔や堕天使の事情を知っている相手を悪魔の巣窟に連れ込もうとしたら、どんな感情を抱かれてしまうのか。

少し考えればわかる話、と、そう考えるのは、今になったから思う事ですけど。

私は不幸だったけど、運命のイタズラか幸運か、部長のお兄さんに救われて今ココに居ます。

待遇もしっかりしていて、頼れる仲間も居て、学校にも通えて、……友達も出来て。

……不幸だったけど、ひどい目にも会ったけど、たぶん私は、幸福である事が当たり前になっていたのかもしれません。

私が悪魔である事はバレていました。

これはあの日に聞いただけじゃなく、後日、読手さんに改めて聞いた話です。

……不思議な話ですが、あんな事があった次の日、読手さんはいつもの様に学校で挨拶を交わし、いつもの様に少しだけお菓子や勉強について話をしました。

人の耳が無くなるのを見計らって、私は聞きました。いつから私が悪魔だと気付いていたのか、と。

……最初から、初めて入学式の日に出会ったあの時から、私が悪魔である事は知られていたそうです。

『そんなの、見ればわかりますよ。当たり前じゃないですか』

普段通り、感情豊かとまではいかなくても、自分の心を隠さない普通の声。

でもそれを口にした時、何処か忌々しげで。

その話が嫌だったのか、すぐに読手さんは別の話題に切り替えました。

だから、私は、本当に聞きたかった事を聞けていません。

あそこまで眷属に誘われるのを嫌って、悪魔の事情に巻き込まれたくない、と言っていたのに。

なんで私が悪魔と知って、それでも他のクラスメートの皆と同じく接していたのか。

……一線を引かれた、と思っていたのに。

私の方も、読手さんを避けている様に思います。

学校で話していても、何処か会話は不自然に途切れがちで。
肝心の話は聞くに聞けない。
あの日の別れを思い出す度に、問を発する口が閉じてしまうから。
「ここが、依頼にあったはぐれが出る廃墟らしいんですが……」
副部長の言葉に、物思いに耽っていた思考を現実に引き戻す。
部長、つまり、リアス・グレモリーの活動領域に逃げ込んだはぐれ悪魔を討伐し、撃滅する。
それが今回私達に与えられた依頼。
ここからはアンニュイな気分で居られる時間ではありません。
時刻は深夜、暗黒に満ち、はぐれにとっても私達にとっても力溢れる時間帯。
背の高い草木が生い茂る中、その廃墟はありました。
夜目の効く悪魔の視覚だからか、その廃墟は嫌にはっきりとその姿を見せています。
悪魔の私が言うのもなんですが、何処か不気味な建物。
まるで絵に描いたような郊外の廃墟。
逃げ込んだはぐれは、主を殺してはぐれになった後は各地を転々としながら人を誘い出しては食い殺して生活をしているらしい。
典型的な、欲望に負けた悪魔の末路。誰かを思い出し更に気分が重くなる。
でも、少し不思議なのは、匂い。
そういった人喰いのはぐれは、大概『食べ残し』に対しては無頓着で、パッと見の破片は片付けても、匂いを念入りに消したりはしない。
「おかしいです……血の匂いがしません。」
簡単に言えば、はぐれが根城兼食事場にしている場所には、普通なら鼻が潰れる様な濃い血の匂いが満ちている筈。
なのに、ここからはそういった匂いが殆どしない。
代わりに鼻に付くのは……学校の美術の授業で良く嗅ぐ匂い。
インクの乾いた匂いだ。
「せっかくだし、イッセーに悪魔の戦い方を教えてあげようかと思っていたのだけれど」

部長はそう言いながら、躊躇なく廃墟の中に足を踏み入れていきます。
風で草木が揺れる音だけが静かに響く、無音。
はぐれが居るならある筈の無差別な敵意と悪意、それすらも感じられません。
警戒を保ったまま、全員が廃墟の中に足を踏み入れます。
「なん、だ、これ？」
兵藤先輩の戸惑うような声。
部長も、副部長も、祐斗先輩も、もちろん、私も、その問に答える事は出来ませんでした。
色、色、色、色、色……。
郊外に放置されている廃墟には似つかわしくない、鮮烈な色彩。
規則性も無く、何かの法則がある訳でもなく、ただただ乱雑にぶちまけられた色。
夜の闇に包まれてなお存在感のある廃墟の内装を、更に強い存在感で文字通り上塗りしている。
インク？　ペンキ？
何ともつかない多量の塗料が、油絵の様に厚みを持つ程にぶち撒けられ、塗りたくられて。
床、内装、柱、壁は言うに及ばず、天井にまで荒々しく塗料が走っていました。
撒き散らされ、混ざらず、極彩色に染め上げられた廃墟の光景は、異様としか言いようがありません。
はぐれ悪魔討伐の依頼は、これまでに何度かこなした事がありした。
その中には特殊な嗜好から奇妙な棲家を作ろうとしたはぐれも居ましたが……。
これは、常軌を逸しています。
「……魔力の残滓。少なくとも、ここにはぐれ悪魔……バイサーが居た事は間違いないみたいね」
「それにこの傷……、刀傷ですよ。戦闘が行われている」

空間の魔力の残り香を感じた部長、そして塗料の厚みが薄い部分を剥がし、壁に手を当てた祐斗先輩がそんな事を言いました。
はぐれ悪魔は居た。
そして、はぐれ悪魔が持っていなかった刀剣による傷が壁に刻まれていて、はぐれ悪魔は居なくなっている。
「エクソシストでも来たのかしら」
「でも、そんな気配無いです。嫌な感じは、全然……」
首を傾げながらの副部長の言葉を否定する。
エクソシストが主に悪魔祓いで使う武器は、加護の力で起動する光の剣や退魔の力を射出する銃。
悪魔に対して致命的な毒になり得るそれらを使って倒したというのなら、少なからず今この場にも何かしら残っている筈です。
ここは、ただ傷つき塗料で塗られているだけで、浄化された感じでもありません。
何より、この大量の塗料が何のためにここにぶち撒けられたのか、それを誰も説明することが出来ないのです。
「なんや、こんな夜更けに揃いも揃って」
気怠げな声。
廃墟の入り口から聞こえたその声に慌てて振り向く。
脇目で見れば他の皆も同じように驚きながら振り向いていました。
時間は夜、悪魔にとって、最も力を発揮できる時間で、感覚も鋭敏になる時間で。
そんな時間に、薄い月明かりしか無い廃墟の中に居る私達を見つける事ができ、なおかつ、私達の誰も接近を察知できなかった。
明らかに堅気の人間ではありません。
「……ウチの学校の連中か。なんやあんたら、こんな時間に、肝試しかなんか？」
駒王学園指定のジャージに身を包んだ、緑髪の女性。
手に下げたバケツの中には、新品未開封の市指定ごみ袋と、スコップ、ブラシ。
そこに居たのは、私にとっても印象深い、見覚えのある人。

「で、でかい……！」

他の人よりも遅れて振り向いた兵藤先輩がありえない程鼻の下を伸ばし、さっきまでの緊張感を捨て去った嫌らしい顔を晒しました。

そう、でかい。何がなんていうのは、兵藤先輩が反応しているという時点で説明する必要もありません。

「なんてな、冗談や。あんたらが廃墟で肝試しぃ、なんて、まるであべこべやしのう」

表情一つ変えずに言い放つその言葉の内容に、私と兵藤先輩を除く皆の警戒心が膨れ上がります。

「あべこべ、っていうのは、どういう事かしら」

声と表情からは警戒心を消して、余裕たっぷりといった風を装った部長。

その言葉に、女性は――日影さんは、何でもない事のように答えます。

「悪魔が夜中に廃墟で肝試しなんぞ、人間が昼間のコンビニで怪談話するようなもんと違うか？」

「あらあら、じゃあそんな夜中の廃墟にそんな格好で来た貴方は何者で、何を目的にしているの？　……肝試しには、丁度いいかもしれないわよ？」

笑顔のままの副部長。無言で魔剣を構える祐斗先輩。

動かない私と、未だ状況を把握しきれずに鼻の下を伸ばしている兵藤先輩を置き去りに、日影さんを取り囲み、逃げ道を塞ぐ皆。

明らかに不審者、という意味では他人から見た私達も似たようなものですが、私達の側から見た日影さんはそれ以上に不審です。

戦闘が起こり、結果として塗料まみれになったと思しき廃墟に、ひと目のない夜更けに掃除用具を持って汚れてもいい格好で現れた、悪魔の存在を知る、同じ学園の生徒。

しかも、相手の事を此方は把握していない、となれば、警戒せざるを得ません。

「ツレがちょっとはしゃいで散らかしたのが、お義母さんにバレてなぁ。片付けてきなさいて言われとったから、付き添いで来ただけ

……なんて、これじゃわかるわけ無いわな」
「そうね、それじゃあ、わかりやすく話せる様に、ちょっと一緒に付いてきてくれない？」
「遠慮しとく。……ああ、ツレも帰ったみたいやし、そこ通してくれんか」
やる気なさげに携帯を弄り何かをチェックした日影さんは、三方に散って出入口になる部分を全て塞いでいる私達に、顎をしゃくって道を開けるように促してくる。
悪魔の群れに、光もない夜に襲われて、助けを呼んでも来ない様な廃墟なのに、焦りの色は一切無い。
気が狂っている？
そうじゃない、彼女は、この状況に脅威を感じていない。
そして気付く。
彼女の言うツレ、という言葉の意味。
日影さんは、誰の何だ。
読手さんの何だ？　なら日影さんにとっての読手さんは？
この廃墟の有り様は、彼女の『ツレ』が創りだした。
頭の中でパズルのピースが組み合わさり、一つの結論へと到達する。
「読手さんが、やったんですか？」
口にしてはいけないかもしれない。
部長には彼を誘うように言われた。
それは延期になっただけで、未だに部長は私が彼を連れてくるのを待っているのかもしれない。
悪魔の事情に関わるのを嫌がっていた彼からすれば、自分の印象は薄ければ薄いほどいいのかもしれない。
だけど、聞いてしまった。
恐らく真相を全て知っている人を目の前にして抑えを効かせるのは難しく、私には無理だった。
否定が欲しかったのかもしれない。否定されると思って、願って、聞いたのかもしれない。

だって、この廃墟の中の有り様は、異様で異常で、正常でなくて——激情で染め上げられている。

この光景は、どうしても私の中の読手さんに繋がらない。

何が起こったか、何をどうしてこうなったかはわからないけど、そうであって欲しくない。

「そこも含めて、聞かせてくれないかしら。……そのお連れさんも、来てもらっても構わないわよ？」

「せやなぁ……わしはそれでもええけど……」

その言葉に、部長が、副部長が、祐斗先輩が、そして私も、少しだけ、警戒を解く。

少なくとも日影さんは悪魔に対してそれほど隔意があるわけではないのかもしれない。

そう考え、

天井が、目の前に迫っていた。

「……え」

わけがわからない。

体も何故かあちこちに小さな痛みが走り、首もまともに回らない。

目だけを動かし周りを見れば、私は天井近くに吹き飛ばされていた。

部長も、副部長も、祐斗先輩も同じく、仰け反りながら吹き飛ばされて滞空している。

兵藤先輩が天井にめり込んで人型のくぼみを作っているのは胸元を凝視していたからか。

僅かな浮遊感と共に落下、地面に受け身も取れずに墜落すると、頭上から聞こえてくる日影さんの声。

「けどまぁ、書主さんは嫌がるやろ。やめとくわ」

それとな、と、日影さんは部長の制服のポケットに手を差し込み、あるものを取り出します。

悪魔との契約のチラシ。

部長のポケットから抜き取ったそれを地面に敷き、持ってきたバケツをその上に置き、

「契約。願いはここの掃除。対価も入れといた、バケツとブラシとスコップもおまけや。しっかり頼むな」
そう言ったきり振り向きもせず、倒れ伏す私達の間をすり抜け、悠々と去っていく。
私達はそんな日影さんに声をかける事すら出来ず、痛みに呻きながら、後ろ姿を見送るしかありません。

……数十分後、皆が起き上がれるようになり、バケツの中を覗いたら、掃除用具以外にはスポーツドリンクが二本入っているだけで。
しかし、何故かそれで対価が足りてしまったようで、その日は全員で廃墟の清掃を行って帰る事に。
部長は何かを考えながら黙々と清掃を熟していましたが……。
「……何なんでしょう」
学校から取ってきたスコップで塗料を剥がしながら思う。
廃墟の有り様も。
日影さんの力も。
読手さんの思惑も。
私には何一つわかりません。
何がどうなっているのか、私が知る材料ではどうにも理解できない。
だけど、いや、だから。
「……」
空を見上げる。
天井に空いた穴から、半端に欠けた月が見える。
明るすぎない月に、暗く、僅かに星が散った夜空。
誰かの瞳を思い出す色の空。
何がどうなっているのかは、わかりません。
でも、どうしたいかは、なんとなく、わかってきた気がします。

七話　昼は備え

恥ずかしいので余り口にする事はないのだが、此方は学校という場所が好きだ。

知らない知識を学べる場所だから……という訳ではない。

一応前世の記憶を持っている身としては、授業で教えてもらえる知識というのは既に一度習ったところでもあるし、それほど学習意欲が高い訳でもない。

勿論、前世で習った知識を全て忘れること無く覚えているから今世で学ぶ意味は無いぜ！　などと馬鹿げた考えも抱いていない。

記憶力は『良くしてある』が、生まれ変わる過程で抜け落ちたか、前世の内に完全に抜け落ちた知識だってある以上、授業で学び直せるのは良いことだ。

一度社会に出た事もある身としては、知識を身に付けるのに一日八時間も九時間もかける事が出来るというのは贅沢な時間の使い方だと思う。

まぁ、だからと言ってウキウキしながら勉強する程の意欲はない。

では何故好きか、と言えば、うん、まぁ、あれだ。

友達作れたり、遊んだり、下らない話したり、できるじゃない？

仕事の合間にそういう事すると怒られるけど、学校なら一時限ごとに自由にできる休み時間もあるし、社会人ほど放課後の帰宅を急いだりもしない。

学校に集まる学生というのは、大半が実家暮らしであり、自分が自由に過ごすことのできる時間を多く持っている訳で。

例えばそう、授業の合間のちょっとした会話も好きだし。

開いた窓から聞こえてくるグラウンドで体育やってる連中の掛け声だって好きだし。

昼休みに弁当を広げて誰かと一緒に食べたり、偶に学食に行ったり、購買でパンを吟味したりも好きだし。

放課後に教室に少し残って駄弁るのだって好きだし。

帰り道が途中まで同じ奴と一緒に帰ったりするのも好きだ。

なんというか……そう、学校に行かない理由とかあるの？　と聞きたくなる程度には学校が好きだ。

何かしらの理由で登校拒否になっている方々からすれば嫌味に聞こえるかもしれないが、これが偽らざる本音なのだから仕方がない。

学生時代をやり直している今の状況は、この視覚その他の異常を抜きにして考えればかなり嬉しい。

だから実際、塔城さんが悪魔系のコミュニティに此方を誘った時はキツイ言い方をして断りもしたけど、それ以外では普通に友人として付き合って行きたいな、と思っている。

勿論、彼女の主であるグレモリー某の眷属になったり、悪魔関係のコミュニティに所属するつもりは欠片もないというか、普通に嫌だ。

だけど、そういった異常な部分を抜きにして、共に普通に学生生活を送るという点では塔城さんとの付き合いには何一つ問題ない、と思っている。

悪魔……というか、人間以外というか、世界の裏側の勢力図というのは、基本的に面倒くさいしがらみばかりが溢れている。

基本的に横にも縦にも何処かしらに繋がりがあり、完全に孤立した『後腐れ無く塗り潰せる』相手が少ない以上、そんな連中に関わりあうメリットは無い。

別に隔意があるわけではないが……特殊な力と見れば追求せずには居られない、使えるなら取り込んでこき使わずにはいられない、というような連中の寄り合いだ。

レアな神器や能力持ちを見つけたら手元に引き入れてラベル貼って説明書き作って他の悪魔に見せびらかしたがる品性やら知性やら慎みに欠ける連中が年中ふんぞり返りながら自慢話と嫌味を言い合うような世界。

基本的に人が嫌がってもあれこれ口八丁手八丁で秘密を暴こうとするデリカシーの欠片もない糞文字列……じゃない、人外や超人など、相手をするどころか同じ空間に居る事すら憚られる。

要は、彼女の所属する悪魔の隠れ蓑として機能しているであろうオカルト研究部とやらに関わらなければいいのだ。

あの日にはっきり断ったからか、塔城さんから再び誘いを受ける事はないし、他のオカルト研究部員からの誘いも無い。

なんだか塔城さんと話していて、稀に何かを言いかけて途切れさせる場面が増えもしたが些細なことだ。

言いかけて止める、という事は、彼女の側に何かしら言わずにおこうと思いとどまるだけの材料があるという事だろう。

最終的に、多少ぎこちなさはありつつもコミュニケーションがとれているのだから、さしたる問題はない。

……無かった、筈なんだが、人生とはままならないもので。

自分で問題を起こさなかったとしても、周りで起きた問題が巡り巡って此方で問題になる、という状況はいつでも発生し得るのだ。

例えばそう、今回の様に。

今日は日影さんが登校日数を加算する日だったので一緒に登校したのだが、何時も塔城さんと合流する地点の直前で立ち止まり、

『ちょっと今日一緒にサボってくれんか？　今行くと、少し面倒になるかもしれん』

と、割と真面目な表情で提案してきたので、気配を消しつつ通学路から逸れ、忍び転身で適当な私服に着替えて街のファーストフード店に移動したのだが……。

「グレモリー眷属を、ふっ飛ばした？　な、なんで？」

「ちょっと押して退かそ思たら、こう……飛んでてなぁ」

あそこまで軽いとは思わんかったわ。

低価格でお馴染みなバーガー店の中、長めのポテトを人差し指と中指で挟んでぷらぷらと弄びながらそんな事を曰う日影さんだが、本当に悪気は無かったのだろう。

だが逆に反省も無いのがよく分かるので困る。

いや、反省するべきかどうかで言えば、今回に限って言えば仕方がなかったんじゃないかな、と思わないでもない。

思わないでもないが、せめてそういう事をしたならその次の日とかに言って欲しいものだとも思う。

こんな、数日経過してから注意した方がいい、とか言われると凄く

困る。
　此方、学校行って普通に塔城さんと挨拶しちゃったんだけど。
　なんか最近挨拶に返事を返す前に一瞬肩をビクッと跳ねさせておかしいなとは思っていたが、それが原因だったのか。
「……やっぱり、此方も行って対応するのがよかったかな」
「せやな」
　もそもそとパサついたポテトを口に運びながら頷く日影さん。
　あの日、日影さんを先に向かわせて、少しコンビニのトイレで用を足している間に避けたい連中の気配がしたから、今日は中止して帰ろう、と伝えたのだが。
　どうにもすんなり帰して貰えそうに無かったのだとか。
　日影さんなら例え連中が巧みな連携で逃走を妨害しても余裕で抜けて逃走できるのだが、一度ターゲッティングされた以上、単純に逃げるのでは意味が無い。
　それこそ学校でなんやかや難癖付けて呼び出される可能性だってあるし、連中を無視しても生徒会の方にも悪魔の群れは存在する。
　生徒会、学校という枠組みの中における公権力だ。一生徒を呼びつけるくらいは訳ない。
　健全な学園生活を送ろうと考えれば、生徒会という権力に真っ向から歯向かう、というのはよろしくない。
　こちとら、将来は表側の悪魔とか天使とか関係ない真っ当な仕事に就いて、余暇の隙間で塗り潰してもいいはぐれなどを塗り潰しつつ、健全に一生を終えるつもりなのだ。
　生徒会の権力を利用して『来ないと内申下がるような申告を教師にするぞ』とかやられたら地味に嫌だ。
　……日影さんはその辺、いざとなれば日雇いで仕事しつつ洞窟で暮らしてけばいい、位に考えているので、今回の対応は、ベストと言えないまでもベターな対応だと思う。
　逃げよう、追求を逃れよう、と考えるならば、相手に『自分達ではどうにも出来ない』と教えなければならない。
　つまり、罪に問われたり、相手が勝手に貸しとか負い目とかにカウ

ントしたりしない程度に殴りつけて追ってこない様にするのは、たぶん悪手ではない。
　数日経過した今になっても呼び出しとか食らってないのは、少なからず効果があったという事だろうし。
「でもまぁ、うん、あれでしょ？　おっきな怪我とかはさせなかったわけだし」
「……あー、結果的には、ほぼ無傷やな。飛んだあと、ちょう首とか手足が曲がらん方に曲がっとったり千切れかけたりしとったけど、すぐ治しといたから」
「ううんんん……」
「腹抱えて、どないしたん。腹痛か、さするか？」
「いや、ちょっと、こう、判定ギリギリかなー、って」
　治癒に関しては、日影さんが大丈夫だ、と言うなら、間違いなく完璧に治してある筈だ。
　だから、連中の主観的には吹き飛ばされて記憶が一瞬飛んで、後には少し全身に痛みが残る程度。
　日影さんは、知覚できない速度で自分達に怪我をさせないように手加減しつつ行動不能にするだけの能力がある、と認識されている筈だ。
　使い魔とか、そういうので客観的に自分達がやられている姿を見ていなければ、うん、大丈夫だろう。
　一息付き、トレイの上に乗っていたけち臭いアップルパイを口に運ぶ。
　安いなりにざくりとした食感が心地よいパイをコーラで流し込み、ふと思いつく。
「塔城さんには、なんか、補填しとこうかな。お菓子で」
　他の連中は付き合い無いからいいけど、登校日には毎日と言っていいほど顔を会わせる相手だ。
　こっちの都合で首やら手足やらクシャっとしてしまった友人相手に、何の負い目もなく付き合える程器用ではない、と、思う。
　もしかしたら意外と此方が薄情で、次に会っても何の負い目とか引

け目とか感じないかもしれないけど、あの日にきつい言い方してしまった事に関しては何も謝ってなかったし。

ああ、でも明らかに警戒していたな……。距離が少し離れたというか、対応に困っているようにも見えた。

「なんや、あれやな」

「ん？」

見れば、日影さんは備え付けの椅子に凭れ掛かり、シェイクに刺さっていたストローを口に咥えたまま、やや目を細めて此方を見つめている。

「書主さん、あのちっこいの、気にし過ぎと違うか？」

「数少ない友人だし、多少はね」

「さよか」

ぷっ、と、口からストローを勢い良く離してそれを手でキャッチし、それきり黙り込んでしまう日影さん。

椅子の形に纏まった文字列に座り、テーブルの形の文字列の上に肘をつき頬杖をついて、もう片方の手の中で細長いストローの文字列をくるくると回しながら、ぼうっと焦点の合いきっていない瞳を此方に向ける。

自室でなく文字列飛び交う外の店であるため、此方の視線も文字列を避けながら日影さんの姿だけを追う。

さて、此方からすれば、日影さんの姿は何時間だって見ていられるのだが、日影さんがどうかは解らないのでそろそろ移動しよう。

移動しようとは思うのだが、その前に確認してみたい事がある。

日影さんは特別製なので、何処をどうしたって外から文字列を読み込んで思考を読むことができない。

なので、こうして眺められていても『日影さんの半眼は相変わらず可愛いなぁ』くらいの事しか普段は思いつかないのだが、今回は少し違う。

「もしかして、と思うんだけど」

「？」

文字通り頭の上にクエスチョンマークを飛ばし、ぱっと見では解ら

ない程に小さく首を傾げた日影さんに、少しだけ期待を込めて確認する。
「……嫉妬してる？　あんまり塔城さんの事気にしすぎるから」
「……おお、嫉妬しとるんか、これ」
僅かに目を見開き、掌に拳を落として遅いテンポで驚く日影さん。
「でも嫉妬って感情とちゃうんか。わし感情無いで」
無いんだろうか。
でも感情あるんじゃない？　って言うと『あんましつこいと怒るで』と言われてしまうので、少し言い回しを考えてみよう。
……ふと思い出すが、感情は無いがこころはあると主張していた気がする。
「嫉妬は感情でなく『こころ』の一部だって誰かが言ってたよ」
「あぁ、そんならしとるなぁ」
あっさり納得。
ちょろい訳ではない、彼女は素直なのだ。
「なんや、最近書主さんあの猫の話ばっかで、ずっこい」
ぷい、とそっぽを向いて、声にも僅かに不機嫌そうな色が見える。
あぁ～、いい、日影さん可愛い。そして可愛い。
「別にそれほど話題には上がってないと思うけどね。でも、日影さんが嫉妬してくれるなら、もうちょっと塔城さんのネタ仕込んでみるかなぁ」
「別にええけど、ちょい、こっち来てみぃ」
「何々？」
隣の座席をポンポンと掌で叩く日影さん。
促されるまま隣の席に座る。
体がくっつく程に近くはない絶妙な距離。
そしてそのまま流れるように倒れこみ此方の太ももに頭を乗せる日影さん。
「よし。ほんじゃ猫の話しよか」
「これ、普通は逆じゃない？」
「逆やと書主さん、顔埋めたまま寝てまうやろ。胸が邪魔で顔も見え

んし」
「あれは寝てるんじゃなくて匂いと感触を堪能してるだけ」
「変態」
「日影さんにだけだから大丈夫」
「なら、ええわ」
少しだけ重力に逆らう緩いウェーブがかった髪に指を通し、そのまま特に会話も無く時間が過ぎる。
既に注文したメニューに関しては食べ終えているのだが、まぁ、そんな客は結構居るし、平日の昼前、微妙な時間帯であるためか人も少なく、席を独占していても問題は無さそうだ。
あー、もう今更学校行くのもあれだな。
流石に衝撃の真実を知った直後では顔合わせづらいし、今日は日影さんとゆっくり一緒に時間を潰そう。
「日影さん、今日、何処行きたい？」
「何処でもええよ。書主さんは？」
「んー、別にノープランでぶらついても、適当に昼寝して過ごしてもいいけど」
視線を日影さんから外さず、幾つかの感覚を店内のある一点に向ける。
覚えのある気配、神器の波動。
「お、おいしいです！　ハンバーガーっておいしいんですね！」
今日びこんな低価格が売りのバーガーショップでは聞けないような、喜びも顕なバーガー賛美。
バーガーを食べたことが無いにしても、ここまでこの味に感動するとかこれまで本気でどんな生活をしていたのか。
やはり日本は平和で生き易い国なのだな、と再認識させてくれる幸薄そうなシスター。
「ハンバーガー食べたこと無いの？」
余りのシスターの健気さと穢れ無さから、普段のエロスマスターっぷりを欠片も発揮できないまま、この後死ぬ使い捨てヒロインと順調に交流を深める少年誌主人公の如き無垢な親切心を発揮している高

校生と思しき男子。
言わずもがなの聖女アーシア・アルジェントと赤龍帝兵藤一誠である。
シスターはともかく、今日は平日なのに何を私服でバーガーショップに居るんだろうか、という疑問は置いておくとして。
「なんや、おもろいもんでもあった？」
「うん」
此方の返事に、日影さんは僅かに起き上がり、座っている椅子から顔の上半分を出して少し離れた位置に居る二人に視線を向ける。
「ああ……あれか」
「そうそう、あれ」
神器の波動が二つ。
そして、シスターの気配には違和感が混じっている。
普通の生物からは発せられない波動、チャクラ、気、ヴリル、オルゴンなどと呼ばれる生体エネルギーのどれにも似て、紛れ込むように差し込まれた違和感。
発信機、首輪、マーカー。
言い方は何でもいいが、要するに見失わないように、『無くさないように』と付けられた目印だろう。
目印を付けた相手以外に発見されないように微弱で、知らなければ余程勘に優れていなければ気づけないような代物。
シスター・アーシアは異端の癒し手として教会を追い出された悲劇の聖女、いや、教会に取ってみれば破門して、あとは勝手に野垂れ死んでくれればいい、とさえ思われている様な少女だ。
悪魔を癒やす、教会にとって奇妙で悍ましい力を持つ神器は、とても利用しようとは思えない様な力である筈。
そんな相手に、首輪？
下手な相手に神器が渡らないように、死なないように監視している、とは考えにくい。
そんな回りくどい真似をするくらいなら、大々的に魔女や悪魔憑きとして公表し、大義名分を作った上で何処か教会関連の施設の地下牢

にでも寿命を迎えるまで閉じ込めておくのが安牌だ。
そこまで原始的な処置でなくとも、殺さず、封印しておく程度の技術は教会にだってあるだろう。
わざわざ手元から離した上で監視するのは余りにも効率が悪い。
「気になる、気になりますね。なんとも不思議な話じゃあないですか」
気分が高揚する。
視界に映る日影さん以外の場所、ざわざわと蠢く文字列が目につく。
頭の中でちりちりと何かが弾け始める。
ストレスと開放の予感。
先程まで日影さんと話していて得ていた幸福感、満足感が霧散していく。
目を逸らしていたものに目が吊られ、無いふりをしていた気持ちが、ずるりと這い出してくる。
わざわざ、わざわざ、だ。
教会から見捨てられた、貴重な回復系神器の持ち主に、首輪を付けて飼っている相手が居る。
純粋な善意からか？
それならそれでいい、だけど、だが、でも。
きっと、そうじゃない。
不幸と悲しみ、いや、不幸と悲しみを生み出す、手前勝手で、『孤立した臭い』を感じる。
社会との繋がりを失いかけ、今まさに失おうとしている臭いだ。
「面白い、つまらない、良い、良くない影を感じますよ。碌でもない事情も。ねぇ、日影さん。一日連中を覗き見して損は無いと思いませんか」
根拠はない。勘だ。
だが、間違い無いと確信している。
此方の中の七感その他が、そう教えている。
自然に口の端が釣り上がる。
「そないなこと言われても、わしには感情があらへんからな、ようわか

らん。でも、まぁ、それで書主さんが楽しいなら、ええよ」
わしへの口調が戻るまで、あんたの事を見張っといたるわ。
日影さんの言葉を耳に受け入れながら、苦々しく甘く楽しい時間へと思いを馳せ、一方的に知るだけの二人の追跡を始めるのであった。

八話　夜に集い

「次に邪魔をしたら、その時は本当に殺すわ。まぁ、そんな気を起こすほど馬鹿ではないでしょうけど。じゃあね、イッセーくん」

アーシアを腕に抱え、嘲笑いながら空の彼方へと消えて行く堕天使。

この場に残されたのは堕天使の翼から抜け落ちた黒い羽と、取り落とされて地面に転がるラッチュー君人形。

そして、何も出来ずに居た俺。

友達なのに、友達が危ないのに、何一つできない俺だけが残された。

今日初めて友達が出来たと喜んでいたアーシア、俺なんかと友達に成れたことを泣いて喜んでくれたアーシア、俺の命を助けるために、あんな危ない奴に身を預けてしまったアーシア。

行ってしまった。手がとどかない場所へ。

「待て、待ってくれ、アーシア、アーシアぁッ！」

連れ去られ、空を行かれて追いかける事すらできない。

悪魔の羽も上手く使えない飛べない悪魔だから？

何故飛べない、飛べない筈がないのに、下級悪魔だからって、■が飛べない理由もないのに。

俺の手は彼処に届かない。

あの堕天使に、アーシアに、友達に届かない。

守ると言ったのに、守ろうと思ったのに、今日に見たあの笑顔を、あんな綺麗で、可愛くて、楽しそうに笑うあの子を、守らなきゃって思ったのに。

神様にできなくたって、友達ならできるって、一緒に居られるって、彼女の願いを、ほんの小さな、ささやかな願いを叶えてやれるって。

「アーシアァァァァァッッ!!」

返事はない、声も届いていないだろう。

喉が震える、涙が溢れる、目の前が赤い。

悔しい、力が無いのが、今、彼女を助けるだけの力が、俺に無いのが。

何時かじゃない、仕事を熟して出世する為なんかじゃない。
今、今この時に、必要なのに！
離れていく彼女を追い掛ける翼が！
《大気を引き裂き空を制する翼が！》
堕天使に捕まった彼女を助ける為の力が！
《あの憎い堕天使を引き裂く爪が！》
彼女を、アーシアを守るための力が！
《忌々しい羽虫を食い千切る顎門が！》
足りない！
《欲しい！》
天を呪う、神を呪う。
アーシアに与えられた過酷な運命を呪う。
あの堕天使の薄汚い儀式とやらを呪う。
そして何よりも、己の非力を呪う。
今までにない事だ。力が無い事を呪うなんて、真っ当に生きてきて、考えもしなかった。
だからだろうか、体が熱い。
怒りに頭に血が登りすぎたのか。
全身の細胞が余さず怒りに震えている。
体の感覚がおかしい。
手が、指が、俺のものではないように強張り。
背は今にも何かが皮膚を突き破り飛び出さんばかりに痛み。
叫びすぎたのか、顎が、口が、歯がみしみしと音を立てている。
おかしい、いや、おかしかった。
そうだ、何を不思議に思う事がある。
願うなら、彼女を、アーシアを助けたいのなら。
そんな事を考えている場合じゃない。
助けなきゃ。
《殺してやる》
俺の命に代えても。
《俺のこの身を変えても》

『アーシアを助け出す／レイナーレをぶち殺す』
何かがおかしい。
喉から出した声は俺の声か？
何かおかしな事を言わなかったか？
おかしかった、おかしくなくなった。
不自然に足りなかったものが足りた。
そうだ、おかしいことなどなにもない。
受け入れただけだ。これがあるべき形なんだ。
鱗に包まれた空を飛ぶ翼。
固く厚く長い引き裂く爪。
食い千切るべく長く、鋭い牙を並べた顎門。
頭を支配する赤い赤い感情。
俺の姿で、俺の心だ。
驚愕する『人の心』は遠く、ただ願うままに翼を広げ、『アーシア／レイナーレ』目掛けて空へ――
【その腕は龍に寄りながら人の形に纏まり】
【龍翼は未だ開く時でなく収まり】
【龍の如き顎門は人の姿を保ち】
【心は燃えても龍の激情に飲まれず】
【兵藤一誠の思考は龍に侵されない】
【今起きた事を怒りと現実逃避から来る幻覚と思い、深く考えない】
空へ……空へ？
空を飛ぼうと思ったのか、飛べないのに。
そうだ、そんな妄想をしている場合じゃない。
助けに行かないと。
だけどどうやって、奴らの行きそうな、儀式とかいうのが行われる場所は、助けられそうな人は。
「おやおや、何やらお困りのようで」
声が聞こえる。すぐ後ろからだ。
振り向くと、そこには俺と同じくらいの年齢だろうか、嫌に目の細い、まるで目を閉じているかの様な男。

手には何故かマジックペンを持っている。
「よろしければ、事情を教えて頂けますか？　何か、力になれるかもしれません」
【読手書主という人間への警戒心が薄い】
うっすらと開いた瞼から、気遣わしげな視線が向けられる。
心配そうな表情でペン先を揺らしながらそんな事を言う男が悪魔や堕天使の事情を知っているかはわからない。
普通に考えればそんな事を通りすがりの男が知るはずもない。
だけど、俺は不思議と目の前の男の言葉を疑えなかった。
話してみれば、本当に力になってくれるかもしれない、と、そんな考えが頭に浮かんだ。
「あんたは、一体……」
男は細い目をしならせ、僅かに笑みを浮かべながら告げた。
「ただの学生ですよ、自主休校中のね」

ぱしん、と、乾いた音が部室の中に響く。
広めの部室にこだましたその音を立てたのは、兵藤先輩の頬と部長の掌。
兵藤先輩が部長に頬を叩かれました。
部長の顔は何時になく険しく、それに相対する兵藤先輩の表情は真剣そのもの。
「何度言ったらわかるの？」
「何度言われてもわかりません」
部長が二の句を告げる前に、兵藤先輩が口を開きます。
今まで部長の言葉に素直な、それこそ噂通りのスケベ全開な素直さで頷いてきた兵藤先輩とは思えない反抗。
話を聞けばそれもわからないではありません。
でも、副部長も、祐斗先輩も、私も、二人の話に口を挟むことができません。
副部長は、たぶん、悪魔としての立場と、部長の本心を知っているから。

祐斗先輩も部長の性格は良く知っている筈ですから、きっと最後には兵藤先輩の熱意に押されてしまう事を予感しているから。

私も似たようなものです。

でも、それだけじゃなくて、私は、兵藤先輩の言葉に惹かれる物を感じていた。

「俺はアーシア・アルジェントと友達になりました。アーシアは大事な友達で、見捨てるなんてできません」

「それは立派ね。そういう事を面と向かって言えるのは凄いことだと思うわ。だけどね、悪魔と堕天使は何百年、何千年と互いに睨み合ってきたの。あなたが考えている以上に悪魔と堕天使の関係は複雑で、隙を見せれば殺される。彼等は敵なのよ」

「アーシアは堕天使じゃありません。堕天使に利用されてるだけじゃないですか！」

「そういう事を言ってるんじゃないのよ。いい、イッセー。彼女は元とは言え聖女、神側の存在なの。私達とは根底から相容れない存在なのよ。例え追放され堕天使に飼われていても、それは変わり様が無いわ」

「友達に！　……友達に、そんな立場なんて、関係ないじゃないでしょう」

そうだ、と、思う。

兵藤先輩はまだ悪魔と天使、堕天使の関係をよく知らない。

でも、兵藤先輩が全てをしっかり学んで覚えていたとして、最初から、アーシアという女の子が敵の側の存在である事を知っていたとして、友達にならずに居ただろうか。

きっと、それでも彼は彼女と友達になった。不思議とそう思える。

それは馬鹿だからとかそういう話じゃなくて、さして付き合いがある訳でもない私でも察する事ができる彼の人柄故に。

友達だから助ける。

友達だから立場も種族も関係ない。

そんな事を、心の底から信じて口にしているから。

――じゃあ、彼は？

一瞬だけ浮かんだ疑問を振り払う。
彼は今、この問題には関係ない、一々考える必要もない。
そして私も今、何かをする必要はない。
きっと部長は表向き兵藤先輩の提案を却下して、祐斗先輩にフォローを頼む筈。
私はそれについていくだけでいい。
「もういいです。部長達には頼みません」
兵藤先輩が部長に背を向けて歩き出し、部長がそれを呼び止めます。
「待ちなさい。そんな勝手な真似が許されると思っているの？」
「みんなに迷惑はかけません。俺の事は眷属から外しておいて下さい。それでいいでしょう」
「いいわけないでしょう!?　落ち着きなさいイッセー！　待ちなさい！」
部長の声が届いていないかのように振り向きもせずに部室の外に出て行く兵藤先輩。
許す許さないの話が終わる前に決裂してしまいました。
その背を追おうとする部長に、副部長が耳打ちします。
副部長の顔は険しく、最初は邪魔をされて苛立たしげだった顔が別種の険しさに変わっていくのが見て取れます。
「祐斗、小猫。イッセーのフォローをお願い。それと、プロモーションの事も伝えておいて」
そう言ったきり、部長と副部長は魔法陣を使って何処かへ消えてしましました。
……少し、予想外です。
兵藤先輩はもう少し粘り強く部長に交渉すると思っていたし、あそこまで躊躇いなく一人で行くとは思ってもいませんでした。
兵藤先輩を追い掛け、さして離れていない廊下で追いつくと、祐斗先輩が呼び止めました。
「行くのかい？」
「行く。アーシアは友達だ。行かないわけがない。俺が助けなくちゃ

ならないんだ」
「殺されるよ。いくら神器を持っていたとしても、悪魔と戦い慣れたエクソシストの集団が相手じゃ分が悪いなんて話じゃない、それも、たった一人でなんて」
「一人じゃない」
断言。
勿論、私達の事ではない筈です。
あそこまで啖呵を切っておいて、私達が力を貸してくれるだろうと考えていたとは思えません。
でも誰が？
「手を貸してくれるって通りすがりの奴が言ってたんだ。途中で合流する」
「もしかして、生徒会の人？」
「なんで生徒会が出てくるんだよ。たぶん、違う。学生だって言ってたけど、1年らしいし、同じ学校だったとしても生徒会には入ってないだろ」
「それは……」
「どんな人でした？」
訝しむ、というか、明らかに顔を顰めて怪しんでいる祐斗先輩の言葉を遮る。
1年で、学生という話しか出ていないのに、妙に胸騒ぎがした。
通りすがりで、いきなり攫われた少女の救出を手伝ってくれるという、明らかに怪しい人。
男ではなく女かもしれない。
学年は1年ではなく生徒会の役員でシトリー眷属の誰かかもしれない。
そもそも学生というところから嘘かもしれない。
単純に、悪魔を教会に誘い込む為の嘘を吐いた神父かもしれない。
何一つ繋がるところがないのに、頭に知った顔が思い浮かぶ。
気のせいであればいい、と思いながら兵藤先輩の返答を待つ。
「こう、口調が丁寧語でさ、『邪魔になるエクソシストとかを退かして

おく程度の事はできますよ』って。赤っぽい黒髪の、目が細い野郎だったな。名前は聞いてない」

「……そう、ですか」

「小猫ちゃん……？」

祐斗先輩の気遣わしげな声が、嫌に遠くに聞こえる。

「大丈夫、です。……祐斗先輩は、プロモーションの話を」

答えながら、頭の中が真っ白になっている。

何故？　ただそれだけが頭の中を占めて、他の事をまともに考えられそうに無い。

祐斗先輩が兵藤先輩にプロモーションについての説明をしている声を聞きながら歩き続ける。

……この先に、居る。

私の知らない、私の友達が。

教会の見える位置で祐斗先輩の用意した図面を見て、突入後にどうするかを話し、いざ聖堂に近づいた時点で、ふと違和感を覚えた。

目的地である聖堂はある。

だけど、目的地から外した宿舎が見当たらない。

見当たらないというより、無くなっている。

少し注意して見れば、宿舎の跡に細かく刻まれた建材が積み上がっているのがわかった。

それに、もう一つ明らかにおかしな点がある。

「これ、この間の」

ペンキか何かの塗料が、あちこちにぶち撒けられた跡。

はぐれ悪魔の討伐依頼で向かったあの異常な廃墟と同じ状況。

教会の入り口を中心に、放射状に広がるように、まるで入り口から外目掛けて塗料の入ったバケツを振り回して撒き散らしたかのよう。

あの時程にくまなく塗料で染められてもいなければ、乾いて分厚くなってもいない。

でもその分、液体のまま散乱した塗料はより強く匂いを放ち、歩く度にびちゃびちゃと音を立てる。

そして、その只中に、彼は居ました。
学校指定のジャージに身を包み、何かが入ったズタ袋を無造作に手に下げた、赤みがかった黒髪の男性。
手から下げたズタ袋は塗料の水たまりにその底面を浸され、呆けるように空を見上げている。
「やあやあ、遅かったですね兵藤先輩。……後ろのお二人は？」
顔を下ろし、振り向いたのは、見覚えのある、いや、殆ど毎日見ている、今日は学校を休んでいた――
「読手、さん」
私の声に応えるように、にこりと微笑む読手さん。
「なあんだ。ちゃんと頼りになりそうなお仲間さんが付いてきてくれているんじゃあないですか」
瞼を開け、これまでにないほどにはっきりと瞳を見せながら、見たこともない程に晴れやかに笑みを浮かべ、兵藤先輩に冗談めかして言う。
夜の中にありながらなお黒く暗く、月の光を浴びながらそれを打ち消すように爛々と煌めく星を散りばめた瞳。
初めて見た時と変わらない不思議な、ともすれば魅力的だとすら思える瞳。
だけどそこに初めて見た時の様な複雑な色は見当たらない。
愛想笑いの中にあり、どこか痛ましさすら感じた悲しい色を秘めた瞳は今、今まで見たこともないような苛烈な感情を宿している様に見える。
咲き誇るような喜び。燃え盛るような楽しみ
まるでそれしか無い様な、酷く印象の異なる瞳だ。
「君が、読手君かな？」
いつも通りの穏やかな口調で、でも警戒心を滲ませた祐斗先輩の確認。
読手さんは警戒されている事に気付いてもいないような楽しげな態度で、目尻を下げて笑みを深くしながら応える。
「ええ、ええ、はじめましてですね、悪魔の方、リアス・グレモリーの

騎士、魔剣の創り手にして操り手、二年の木場祐斗先輩。此方の名は『読手　書主（よみて　ふみぬし）』と申します。覚えておく必要もない、何の変哲もない人間で、そこの塔城さんのクラスメート。一応、友人なんてのをやらしてもらっています」

「……はは、ちょっと、謙遜が過ぎるんじゃないかな」

より深くなった祐斗先輩の警戒心を意にも介さず、読手さんはズタ袋を肩に担ぎ直し、私の方に視線を向けてきました。

……酷く、酷く透き通った視線。

悲しみも痛みも迷いも無い、ただただ楽しげな瞳。

何もかもを見透かし、何もかもを見据えずに見抜き見捨てる、そんな瞳。

見たこともない、この人がこんな目をするなんて、想像したこともない目だ。

その瞳を、瞼が覆い隠す。

「塔城さん、この間はすみません。少し言い過ぎました。もう少し、柔らかい断り方もあったとは思うんですが、ついカッとなってしまって」

瞳を隠し、いつも通りの声で、いつも通りの口調で謝る読手さん。

眉を八の字にしての謝罪の言葉、それを紡ぐ読手さんは、何時も学校で話している読手さんと変わらない様に見えた。

「……いいです。私も、私達も、読手さんの気持ちはあまり深く考えていませんでしたから」

「そうですね、そう思います。じゃあ、今日此方が塔城さんと木場さんの作業分を負担する、という事で、チャラにしてしまいましょう。そしたら、明日から何時もどおり、ということで」

そう一方的に告げると、最後に兵藤先輩に向き直ります。

「それじゃあ兵藤さん、心の準備は出来ましたか？　此方の言った手順と分担は覚えていますか？」

「あ、ああ、大丈夫だ。でも、今は木場も小猫ちゃんも居るし、分担は少し変えたほうがいいんじゃないか？」

「分担って？」

祐斗先輩の言葉に、まず兵藤先輩を指差し、
「彼、シスターさんを助ける役」
そして、と、自分を指差す。
「此方、邪魔な方々を退かす役。ね、簡単でしょう?」
確かに簡単だ。
簡単で単純、策も何もない、やることを決めただけの、本当にただそれだけの役割分担。
「馬鹿ですか、読手さん」
「あっはっはっは! 甘党なのに辛辣ですねぇ、塔城さんは」
上を向き、顔の上半分を掌で多いながら大仰に笑う読手さん。
でも本当に、笑ってなんていられない程無謀だ。
読手さんが何かしらの戦う力を持っているのは、もうなんとなく察している。
あの日のあの夜、日影さんが言っていた言葉から考えれば、はぐれ悪魔を一人で一方的に殺してしまえるだけの力ではあるんだろう。
でも、たった一匹のはぐれを殺すのと、戦い慣れ、統率のとれたエクソシストの相手をするのはわけが違う。
余程の事が無い限り、数の力は跳ね除けられない。それは悪魔でも変わらないし、まして人間ともなれば言わずもがなというもの。
シスター……アーシアさんを助ける途中で兵藤先輩がいくらかエクソシストの相手をするとしても、読手さんが相手をする数が圧倒的である事は変わりない。
まして、敵の中にはエクソシストだけでなく、堕天使まで混ざっているのだ。
こんな策とも言えない役割分担、ただ死ににいくようなものでしかない。
「いいんですよ、馬鹿で。馬鹿になれる、馬鹿なままに馬鹿をやれる今、この状況がいいんじゃあないですか」
顔から手を退け、黒曜の瞳を惜しげも無く晒す。
死ににいく悲壮感も、気狂いの様な異常性も見えない、澄んだ瞳と微笑。

楽しみにしていた映画を見に行くような、休みの日に遊園地に行くような気軽さすら見える。
「でも、今は僕も小猫ちゃんも居る。どうするんだい、役割分担とやらは」
祐斗先輩の問いかけを聞きながら、読手さんは無造作に聖堂への入り口を押し開く。
見えるのは、一見して普通の聖堂と変わらない内装。
長椅子があって祭壇があって、安っぽい作りのステンドグラスから薄く明かりが差し込んでいる。
一目でわかる普通の聖堂との違いは、内装の至る所に刀傷が走り、電灯と燭台が砕かれ、外と同じく荒々しく極彩色に染め上げられているという事。
迎撃は、まだ来ない。
すぐに来てもおかしくない筈なのに。
「何にも、何も変わりません。彼が助けて、此方が退かす。潰して、刻んで、殺すだけ。たったそれだけの話なんです、今日のこの場は。簡単で単純で、ややこしいことは一つも無い」
お二人は、兵藤さんの護衛でもしていてくださいな。
そう言いながら迷いなく聖堂奥へと歩いて行く。
余りにも余りな物言いに絶句して立ち尽くしていた私達に振り向き、呆れるように告げる。
「目当てのシスターさんはこちら、祭壇下の隠し階段から行ける地下の祭儀場に居るそうです。……早く行かないと、死んじゃいますよ？」
まるで買い物に出かけるように気楽に、目当ての品が無くなる可能性を示すように気軽に。
慌てるようにその背を追う兵藤先輩、読手さんへの警戒を維持しながらそれを追う祐斗先輩に並びながら、私は普段と余りにも変わらないその態度に軽い目眩を覚えた。

九話　龍は駆け

大前提として、リアス・グレモリーという悪魔は情の深い女である。
基本的に余程のことがあっても眷属とした悪魔を見捨てる事はないし、眷属とまでは行かなくとも、身内の一人である、と認識した相手に対しては厳しく接しているようでいても甘い判断を下す事が多い。
そしてそれは、ごく最近眷属入りした、未だ戦力としてカウントも出来ず、神器の詳細も解らない未熟で未知な下僕が相手であっても変わりはしない。
力も知識も足りず、欲望だけを糧に日々を過ごしていた何処にでも居る男の子。
それが、友人の為だと、立場なんて関係無いんだと、自分に反抗までしてみせた。
自らの足りない力も、主従関係の強さも理解した上で。
となれば、主である自分が手を尽くさない訳にはいかないだろう。
反抗は成長の証、主の命令に従うだけでなく自分の意志を持って動いてみせたとなれば、それを喜ばない訳がない。
リアス・グレモリーという悪魔には、それだけの度量があった。
ある意味で言えば、自らの身内に対する偏愛と言ってもいい。
だが、それは確かにリアスを動かす原動力となった。
堕天使の勢力そのものが相手であれば、それでも動くことは無かった。
だが現実、今この街で動いている堕天使、下僕である兵藤一誠が敵対すると決めた堕天使達が悪魔で言うはぐれに近い可能性がある。
堕天使総督は神器狂いの数寄者で享楽的な部分もあり冷徹さを兼ね備えて居るが、被害者とも言える側の人間を無闇矢鱈と食い物にするほどに無情という訳でもない。
無法を働こうとした部下を庇い、討ち滅ぼされたからと言って戦争に発展させたり問題にするほど狭量ではない。
つまり、この街の堕天使が堕天使全体から外れた独断で動いている

かどうかの確認が取れれば、気兼ねなく下僕に力を貸してやる事ができるのだ。
「だっていうのに……」
歯噛みする。
独自の動きをしている堕天使達の目撃情報がある場所に来てみたものの、本人たちどころか手がかりすら見つからない。
いや、手がかりはある、居る。
目の前、学園と教会の中間地点にある、木々の生い茂る小さな森の中。
その森の中を通る道で、通る者を確認する様に、木の太い枝の上に腰掛ける者が居た。
緑髪、半開きで虚ろな目、気怠げな表情、形の良い唇からちろりとはみ出した赤い舌。
ダメージジーンズに、胸元に蛇の柄があしらわれたシャツ。
柔らかく女性的なボディラインは一見して戦いを想定していないようにも見えるだろう。
だがそうではない。
そうではないことは、リアスも、朱乃も、十分に理解させられていた。
「なん、よくよく夜中に会うもんやのう。あれか、あんたら不良かなんかか」
「それを言ったら貴女も不良って事になるんじゃないかしら。こんな夜中に、何をしているのかしら」
軽口に軽口で返しながら、背には冷や汗が浮かんでいた。
はぐれ悪魔バイサーのねぐらで出会った謎の少女、駒王学園1年、日向日影。
あの日、戦う事すら許されずに敗北した相手が、目の前に居る。
何故、ここに彼女が居るのか。
「何、言われてもなぁ」
視線をちら、と、遠くへ向ける。
視線の先にあるのは、一誠達が向かっている筈の堕天使のアジトで

ある教会だ。
　嫌な予感が頭を過る。
　この少女のツレ……読手書主が、堕天使側に居る、という可能性は無いだろうか。
「無いで」
「……人の心を読まないで貰えるかしら」
「読まんて、んなもん。けど、あんたみたいのが考えるんは、まぁ、そんなとこやろ」
　どうでもよさそうにそう口にして、教会から視線を戻す。
　月の光を受け、闇の中で僅かに金に近づく日影の瞳孔がリアスと朱乃の姿を映し、暫くして何かに気付いたような表情で掌に拳を落とす。
「ここらでうろついてた野良の堕天使なら、書主さんが教会に持ってったで」
「……そう、それで、貴女がここで何をしてるかは教えてもらえないの？」
　言葉のニュアンスに内心で首をひねりながら重ねて問う。
　イッセー達が突入する前に確認できなかったのは痛いが、どちらにせよ下僕を堕天使の好きにさせるわけにはいかない。
　教会に居るというのなら、下僕達を助けに行くついでに今回の計画が堕天使全体のものかどうかを聞き出してしまえばいい。
　今重要なのはそこではなく、この場を抜けて教会に迎えるか、という事だ。
　道なりに教会に行く訳ではないにしても、魔法陣でジャンプするなら少なからず時間がかかる。
　それができるかどうかは、目の前の少女の目的次第。
「なんも。わしは書主さんが朝帰りせんよう、用事済んだらまっすぐ帰らせるように頼まれとるだけやし。好きに通ったらええ」
「ふうん……。じゃあ、その書主君の用事がすぐに終わるといいわね」
「せやな」
「それじゃ」

踵を返し、教会へと向かうリアスと朱乃
リアスは言葉通りに受け取った訳ではない。
だが、反駁して真実を追求できる相手でも無ければ、そんな事をしている暇もない。
堕天使も、彼女のツレ（恋人、という意味でリアスは受け取っている）である読手書主の目論見も。
全ては教会にある。ならば行くのみ。
「あ」
立ち去るリアス達の背から視線を外し教会を見る日影がふと思い出す。
「今行ったら、諸共斬られるんと違うか」
まぁ、ええやろ。
そう呟くと共に、日影はまた、ぼうっと教会を眺め始めた。

祭壇の下に隠されていた隠し階段を降りていく。
地下まで電気が通っているようで、途中途中に電灯が設置されている。
階段を降り切ると、そこには奥へと続く一本道。
道の途中には幾つかの扉があり、人間の延長線上の感覚しか持たない人間からの転生悪魔である祐斗やイッセーにはわからなくとも、猫？という猫の妖怪の上位種から悪魔へと転生した小猫にはわかるものがあった。
通路の途中に点在する部屋の幾つかからは、不快な想像をさせるには十分な悪臭が漂っていた。
勿論、悪魔と敵対しているからといって、普通の街の教会にあっていい設備ではない。
堕天使を始めとする人外特有の物理的な作業工程を短縮させる様々な技術をもってしても簡単に出来上がるものではない。
それとも、期間の短さを補う程の非道外道が堕天使やはぐれエクソシスト達の手によって行われていたのか。
最後尾を歩く小猫が眉を顰めたのを、他の同道者は気付かない。

「こっちで合ってるのか？」
　臭いに気付かずとも不穏な空気は感じたのか、イッセーが途中の扉を脇目に、先頭で迷いなく足を進める書主へと声をかけた。
「合っていますよ。さっきここのエクソシストに確認しましたから」
「それはどうやって？」
「玄関をノックして、出てきた人から誠心誠意説得して聞き出しましたよ。いや、意固地なもので、中々に骨が折れました。まぁ、折れたのは相手の骨なんですがね」
　くつくつと声を抑えて笑う書主。
　黒いジョークに辛うじて苦笑を返せたのは教会やエクソシストに対して個人的な恨みを持つ祐斗だけで、イッセーは余裕無く通路の先を見据え、小猫は戸惑いの中に居た。
　普段通りの慇懃な口調、慇懃な態度のまま、普段通りの雰囲気で物騒な事を言う友人。
　それは既知のものでありながら、想像もしていなかった未知の存在だ。
「それで、その災難なエクソシストはどうしたんだい」
「ええ、いい情報を教えてくれましたから、『そいつは』逃してあげました。その他はまぁ、片付けて……いや、散らかした、と言うのが正しいんですが」
　散らかして、という言葉に悪魔三人が揃って首を傾げると、タイミングよく目の前に大扉が現れた。
　如何にも、という雰囲気の扉に、イッセーは知らず固唾を呑む。
「これか」
「そうですね、この奥に、結構な数のエクソシストと、あと、シスターさんを捕らえている堕天使が一匹。堕天使は位置的にも因縁的にも兵藤先輩に任せるのが妥当ですか。木場先輩も塔城さんも居ますし、余裕でしょう」
「……だから、どういう勘定ですか。……私達の話、聞いてなかったんですか？　馬鹿ですか？」
「現実的に考えるなら、兵藤君がシスターを助けている間に、僕ら三人

で協力して、って形かな。みんな、覚悟はいい？」
祐斗の言葉に、イッセー、小猫、書主が頷く。
「それじゃあ、扉を……」
祐斗とイッセーが両脇から扉を開け放とうと手を添え、それよりも早く扉が自ら開きだし――――
書主が、ドアを蹴り破った。
木材を金属で補強した大扉が、頑丈な蝶番を引きちぎりながら部屋の内側へと飛んで行く。
軌道上に居た数名のエクソシストを押し潰し、大きな音を立てて扉が倒れた。
石造りの神殿の様な広間、その中にひしめくエクソシストと、奥の巨大な祭壇の上に磔にされたシスター――アーシアの傍らに立つ堕天使が、予想していなかった状況に一瞬だけフリーズする。
そしてそれはイッセーや祐斗、小猫にも言える事だ。
そんな中、ただ一人動き続ける、この事態の元凶――読手書主が動く。
「ふん、ふん、なるほど、なるほど」
蹴り足を戻し、武器を構えるでもなく、呪文を唱えるでもなく、拳を振りぬくでもなく、異能を発現するでもなく。
広間の中、エクソシストの群れを、祭壇の上、アーシアを磔にする堕天使を、頷きながら視線を滑らせる。
まるで雑誌をぱらぱらとめくりながら内容を流し読む様に。
「……悪魔が来たかと思ったら、随分と礼儀を知らない人間が紛れ込んでいるわね」
堕天使レイナーレがまず正気に戻り、突然の闖入者に対して不機嫌そうに眉を顰める。
対し、不機嫌そうな視線を向けられた人間――書主はレイナーレに視線を向け、憐れんだ様な表情を浮かべた。
「それはそうでしょう。礼儀を持って対応するべき相手も居ないのに、どうして礼儀を弁えられるというんですか。……そんな馬鹿な儀式をしているヒトに言うだけ無駄でしたね、すみません」

「あら、下等な人間の癖に、この儀式の事を知っているのね。でも、もう儀式は終わるの、残念だったわね」
不機嫌そうな表情から一転、煽りに反応もせず、上機嫌に見下し蔑む視線を送るレイナーレ。
「アーシアァッ！」
思考をフリーズさせたままだったイッセーが、貼り付けにされているアーシアを視界に入れた瞬間、叫びと共に駆け出す。
歴戦とまでは行かないまでも、それなりの実戦経験のある祐斗や小猫よりも早い再起動。
叫び声に磔にされていたアーシアがイッセーの存在に気付く。
「……イッセーさん？」
「ああ、助けに来た！　今そっちに行くから、待ってろよ！」
プロモーションは騎士。
早く、とにかく速く、アーシアを取り戻す為に。
弾き飛ばされた扉の残骸によって開けられた道をイッセーは駆ける。
「邪魔をするな！」
「悪魔め！　滅してくれるわ！」
動き出した状況に、エクソシスト達が次々に動き出す。
光剣を振り上げ、走るイッセーを滅さんと斬りかか……れない。
イッセーに斬りかかろうとした最初の二人は、肘から先を光剣ごと地面に落とし、一拍置いてから声にならない絶叫を上げることとなった。
「ああ、勘違いをしてはいけない。貴方方の相手は、此方で致します」
ズタ袋を背負い、手には何処から取り出したのかも解らない刀を指の間に六本挟んだ書主が、広間の中央に陣取る。
追うように駆けつける魔剣を構えた祐斗と、拳を握りファイティングポーズを取る小猫。
「お二人共、邪魔です。この方々は此方が先に唾を付けておいたんですよ？　なんですか、横取りですか」
読手は心底嫌そうな顔で、迷惑がっているのを隠そうともせず、片

手三刀を無造作に振るい手近なエクソシストを光剣ごと膾切りにし、
「……そういう文句は後で聞きます。……あと、少し私からも話があります」
小猫は仏頂面のまま、苛立ちを叩きつけるようにして拳を振り抜き、エクソシストの顔面を陥没させ、
「悪いね、僕だって神父は憎いのさ。それに、獲物は盗られる方が悪いって言うだろう？」
祐斗は爽やかな笑顔で、しかし笑顔に似つかわしくないどす黒い殺気を纏わせた光喰いの魔剣でエクソシストを幹竹割りに。
瞬く間に三人減らされたエクソシスト達はしかし、戦意を失うこと無く襲い掛かる。
「チッ……クッソ、クソですね。クソクソ＆クソですよ、これじゃ。……兵藤先輩！　出来る限りそっちは生かしておいてくださいね！」
「任せろ！」
書主の言葉をアーシアを無事に助け出せという意味で捉えたイッセーが駆ける。
速い。
騎士にプロモーションしただけでは至れない速度。
異常な脚力は、ただの下級悪魔のそれと同じく見ていいのだろうか。
運良く三人の作った壁を避けてイッセーに近寄ったエクソシストも居た。
だが、イッセーは視線を動かす事すら無く、ただ拳を振るうだけでそれを無力化する。
いや、走る腕が偶然にエクソシストに当たっただけだ。
だというのに、エクソシストは意識消失し倒れ伏し、呻き声一つ上げる事ができずにいる。
そんな真似を、騎士にプロモーションしたままの新米下級悪魔の腕力で可能なのか。
異常な速度、異常な腕力。
それら謎を全て置き去りにイッセーは駆け、アーシアとレイナール

へと肉薄する。
「……なんで、なんでよ。いい加減儀式は終わってもいい筈でしょう!? なんで出てこないの！」
対するレイナーレの表情からは徐々に余裕と蔑みの色が薄れ、焦りの表情へと変わりつつあった。
レイナーレがアーシアに施していた儀式とは、魂に融合するようにして存在する神器への干渉、いや、強制分離術式と言っていい代物だ。
そしてその儀式はアーシアを連れ戻した直後から行っており、本来ならば既にアーシアは光に包まれ、持ち主の命を引き裂きながら神器が体外へと排出されていなければおかしい。
儀式は成功する筈だった。
下級悪魔の餓鬼がやってきた程度で揺るぐはずのない計画だった。
揺るぐはずのない完璧な計画だった。
後ろ盾を無くした聖女を取り込み、神器を抜き出すだけの簡単な計画。
たったそれだけで、自分は堕天使を癒やすことの出来る至高の存在へと昇華し、誰からも認められる、愛される存在になるはずだったのだ。
だが、現実はどうだ。
見下ろす儀式場の中、兵隊として集めたエクソシスト達は次々と薙ぎ払われ、血霞へと変わり、何の役にも立たず。
殺した筈の人間の小僧は悪魔へと変じ、計画の要であるアーシアを戒めから解き放とうとしている。
「この、糞餓鬼ども……！」
特に、この餓鬼が、兵藤一誠が気に食わない。
こいつを殺したのは私だ。こいつが友だというアーシアを連れ去ったのも私だ。
憎む筈で、怒る筈で、しかし、その目はただアーシアしか写していない。
アーシア・アルジェントを助ける事だけを考えている。
自分の事など眼中にない。

その姿勢に、レイナーレは自分を見下していた他の堕天使の嘲笑を幻視した。

こんな、取るに足らない元人間の、下賤で汚らわしい悪魔の小僧すら、私を嘲笑うのか。

「お前のような、下級悪魔風情がぁぁぁぁぁぁっっ！」

煮え滾る憎悪のままに、過剰なまでの光力を込めた槍が生み出され、投擲される。

標的は、今まさにアーシアの元に手を伸ばすイッセー。

彼の視界にはレイナーレなど写っておらず、音を置き去りに迫る光の槍は、死角からの完全な不意打ち。

避けられる道理もなく、下級悪魔、いや、下手をしたら中級の悪魔すら一撃が直撃し、イッセーは一瞬で消滅する。

それが道理だ。

何の取り柄もない下級悪魔であるならば抵抗の術はない。

レイナーレという堕天使の打ち出せる最高の一撃。

文字通りの必殺必中は――

『五月蝿いぞ、羽虫が』

視線すら向けず、神器も顕現させず、拳すら握らず無造作に振るわれたイッセーの左手に、粉々に打ち砕かれた。

いや、その動きが真実槍を迎撃する為の動きだったのかすら怪しい。

槍を打ち払った後、イッセーの両手はすぐにアーシアの手足を縛る戒めを解くのに使われている。

空気を震わせず放たれた龍声、それを聞くことができないのならば、それは戒めを解き放つ動作中のイッセーの腕が、偶然にレイナーレの光槍に当たったようにしか見えない。

「な……、なん……!?」

理解できない。

理解したとしても許容できる事態ではない。

感情の爆発からくる偶発的なものとはいえ、その光槍はレイナーレの短くないこれまでの生の中で最高の一撃だった。

放たれた次の瞬間には自分でも呆気にとられ、冷静な部分が、これならこのイレギュラー達を殺し尽くして儀式をやり直せる、と、そう確信できる程の威力。

劣等感に捕らわれていたレイナーレが僅かに自信を取り戻す事すらできたかもしれないその光が、下級悪魔に呆気無く砕かれたのだ。

「馬鹿な、ありえない……。下級悪魔でしょう？　神器も力を倍にするだけの『龍の手』で……。そんな、子供よりも小さい魔力で、なんで」

魔力は低い。

肉体的に鍛えてあるようにも見えない。

だというのに、目の前の下級悪魔から感じる圧は何なのか！

まるで『巨大な龍にでも対峙しているかの如き』此方を押しつぶさんとする存在感！

「俺が知るかよ。でも、アーシアは返してもらった。後は――お前だ」

アーシアは十字架から解き放たれた。

ぐったりとしたアーシアは、既にこの場に駆けつけた小猫に支えられ、その前を魔剣を構えた祐斗が守るようにして遮っている。

アーシアに向けられていたイッセーの視線も意識も既にレイナーレのみに向けられ、まるで現実に形と質量を持っているかの様な敵意を露わにしている。

こうして見てみれば、三人の下級悪魔は汚れこそすれ怪我一つ無く、疲労もまるで感じていないように見える。

対するレイナーレは奪えていた筈の神器も無く、同調し協力してくれている堕天使も近くに居ない。

苦し紛れに儀式場をもう一度見渡せば既にエクソシスト達の姿は無く、血痕すら無く、ただ冷たい匂いの液体塗料が石造りの床を隠すように隙間なく撒かれている。

「そう、後は、この後は」

そして、レイナーレは見た。

祭壇へと続く階段をゆっくりと登ってくる、六本の刀を手に下げた人間の姿。

この場に似つかわしくないジャージを着こみ、何故か儀式場を濡らす色取り取りの塗料で斑に染め上げられた姿は滑稽な戯画染みている。

しかし、薄暗い照明で輪郭を暈され、長過ぎる三本爪にも見える刀の存在もあり、異形の怪物のようでもある。

「――楽しい楽しい、メインディッシュのお時間です」

戯画の如き、怪物の如き、しかして只の人間である筈の男。

読手書主の言葉は、これから起こる出来事を、端的に表していた。

十話　翼を彩り

「秘伝忍法」

最初に動いたのは、この場で最も三大勢力にもアーシアにも関わりの少ない、人間の書主であった。

「魁ぇ！」

獲物に飛び掛かる肉食獣を思わせる低いフォームから、光剣を構えたエクソシストの群れへ飛び込む。

停止状態から瞬き一つするよりも速くトップスピードに乗り、臨戦態勢であったエクソシスト達に反応すらさせず、広間の端へと到達。

後に残るのは獣の爪染みた片手三刀左右合わせ六刀による斬撃と、それに切り裂かれたエクソシストだ。

真っ先に反応したのは斬られたエクソシストではなく傍から見ていた祐斗、そして小猫。

斬られる側でも斬る側でもない傍目だからこその反応。

祐斗はその人間離れした瞬発力と足力に、子猫は人を斬ることへの躊躇いの無さに驚愕する。

次いで気付く事ができたのはエクソシストの中でも反射神経や動体視力に優れた者達。

しかし、気付き、反応できたのが幸運であったかはわからない。

獲物である悪魔の協力者らしき者が自分達の間をすり抜けた事に気づき、振り向いた彼等を待っていたのは、先の焼き直しの様に、それでいて更に加速した斬撃だった。

光剣を振り回せる常識的範囲に収まらない低空を通り抜けていた男が、まるで自分達の首を刈らんとしているかの如き上昇軌道で跳ねる姿を見てしまった。

確かに見える。弾より速い訳でもなく、人間が出しうる限界速度からそれほど逸脱もしていない。

だが、捉えきれない。

停止状態から加速を経ずにトップスピードに乗る書主は、人間の眼球の性能では追いすがる事ができない。

来る、とわかったエクソシストにできたのは、致命傷になり得る首や頭部への一撃を防ぐために光剣を構える事のみ。
「いい反応です」
光剣の柄への強い衝撃と共に、耳元には嬉しそうな囁きが残った。
反応できなかった周りのエクソシスト達は肩口を、腕を、耳を頬を無残にも切り裂かれ斬り飛ばされている。
運良く、首を跳ね飛ばされたものは居ない。
全員が全員、何処かしら肉体の一部を欠損させられながら、それでも致命傷を避ける事ができた。
更なる追撃。
書主は空を蹴り更に加速、元来た軌道をなぞるように、それでいて上昇するように跳んだ。
これを多くのエクソシストが回避。
速度に慣れたのか、軌道が単調だから読めるのか。
速く、強いが、戦慣れをしていない。
勝てない相手ではなく、殺せない程でもない。
二撃目に反応したエクソシストはニヤリと笑う。
腕を斬り飛ばされたエクソシストの後頭部を狙い拳を振りぬく小猫は、書主の単調な攻撃軌道が何を狙っての物かを、傍から見て確信していた。
致命傷を意図的に避けている。
しかし、それでいて相手を気遣っての事ではない。
悪魔である前に猫?である小猫には、猫という生物の本能の記憶を併せ持つ小猫には理解できてしまった。
「……遊んでる」
猫にも似たような習性がある。
すぐにでも殺せるネズミを、あえてギリギリのところで生かしたままに傷をつけ続ける、無邪気で残虐な遊び。
狩りの練習という意味こそあれ、平和な日本を生きる一般的な男子高生が人間相手に、歴戦のエクソシスト相手に行える事ではない。
力量的にも、精神的にも、行える筈がないし、行えるべきではない。

「しかも、執拗だ」
祐斗が近場のエクソシストの光剣を無力化し、そのまま正面から心臓を貫きながらつぶやく。
祐斗自身、敵対するエクソシトを殺害することに躊躇いはない。
だがそれは敵を排除して味方、仲間の安全を確保するのに必要であるから、という前提があっての話だ。
何もエクソシストを、教会関係者を一人残らず殺してしまいたい、と思っている訳でもない。
だが、エクソシストの間を駆け続けている彼はどうか。
目に憎しみが宿っている訳でもなく、多少の苛立ちは感じられても、憎悪の様な感情は感じられない。
だというのに、彼の斬撃の軌道は何処をなぞっているのか。
斬り飛ばしたエクソシスト達の腕や耳、肉片、衣服の切れ端に武器の欠片。
それら全てに対し、執拗なまでに攻撃を繰り返している。
エクソシスト達は攻撃を回避できた訳ではない。
そもそもエクソシスト達を狙っていない斬撃の余波に耐えただけなのだ。
「あは、あははは、ははははは！」
快活に笑い、エクソシストの間をジグザグに駆け抜けながら、エクソシストの肉を装備を斬り飛ばしながら、斬り飛ばされた肉片すら許さぬとばかりに刃を振るう。
そして、肉片を切り刻む斬撃の速度は、明らかにエクソシスト達に振るわれるそれを凌駕する速度で行われていた。
斬り飛ばされた腕は弧を描いて飛び、落下するよりも早く切り刻まれ血風となり、血風血霞すら余さずその一滴に至るまで切り刻まれる。
後に残るのは生命細胞という単位すら保てなくなるほど切り刻まれた何かのみ。
薄赤い液状の何かが地面に水たまりを作った。
「あぁ、少し、邪魔は入ったけれど」

一通り広間中を駆け抜けた書主が動きを止めた。
もはや足元の大半を覆い尽くす血液は踏まず、書主の手にかからず小猫や祐斗によって始末されたエクソシスト達の死体を足場に着地。
鳥の翼の如く両腕を、六刀を広げる。
「これだけ居るなら、もっとざっくり塗り潰しても、いいかな」
ぎち、と、何かが軋む音が響く。
それが筋繊維の放つ音であると小猫が気付くと同時。
破裂音。
それは空気の壁を引き裂いた証であり、足蹴にされていた死体が爆散した事を知らせもした。
そして、その音を皮切りに、一瞬にして広間の光景が切り替わる。
エクソシスト達の上、広く高い広間の天井との間を埋めるように散らばる、人間の欠片。
集めてくっつければそのまま繋がるのではないかと錯覚するほどの断面を見せる生き物の破片。
その破片はしかし、これまでと違い、生き残りのエクソシスト達へとそのまま降り注ぐ。
十数人分の人間から作られた、人間の切り身。
血と臓物、糞尿に塗れたそれが、未だ致命傷一つ負っていない軽傷のエクソシスト達の黒いローブを汚していく。
「あ？」
一部のエクソシスト達が、ローブの上から染み込んでくるそれらの感触に、呆けたように声を上げる。
実践慣れしていない、新参のはぐれエクソシスト達だ。
彼等は、意図的に標的から外されていた。
彼等の視線も、最初の数撃の内に調整されていた。
悪魔の協力者であるジャージ姿の少年。
彼が足蹴にして立っていたエクソシストの死体があった辺りから、一直線に空白地帯が生まれている。
幅は約三メートル、丁度、少年が両手を広げ、刀の切っ先までを含めた長さ。

「あ、うあ、うわぁぁぁぁぁぁっ！」
新参達が、自分達に降り注いだものが何なのかに気づく。
ざわめき、徐々に上がり始める悲鳴。
狂乱する一部のエクソシスト達の間を縫うように、風が疾走る。
「は」　　は　　は
「は」　　は
は
「は」
は
は
「は」
『何か』が通りぬけ、笑い声を残していく。
声なのか風の音なのか幻聴なのか聞き分けることも難しい程にささやかな笑い声。
頬を擦るような、頭を撫でるような、服の埃を払うような、肩を叩くような感触と共に。
だが、実戦経験のそれほど無い新参達には気づけ無い。
故にそれを目撃したのは、生き残らされた歴戦のエクソシスト達と、標的から外されている悪魔の二人。
仲間の肉片を纏いながら狂乱するエクソシスト達。
そのローブを汚していた肉片が、血が、中から零れた糞尿が塵と化していく。
羽音にもノイズにも似た連続する破裂音、いや、斬撃音から、それが最初と同じく切り刻まれた結果だとわかったのは悪魔の二人のみ。
恐るべきはその精度。
ローブに染み込んだ血液こそ布ごと切り裂かれているが、それ以外、エクソシストの肉体そのものには傷ひとつ付いていない。
理解できたのはそこまで。
そこから起きたことを、真に理解できる者は、エクソシストの中にも、悪魔二人の中にも居ない。

異変が起きる。
「これは」
冷静に、安全地帯でもある悪魔二人に向かってきていたエクソシストを捌きながら、祐斗はそれを見た。
色。
色。
色。
血液に糞尿に肉片ですら無い塵に塗れていたエクソシスト達の姿が、雑多に、乱雑に、無規則に、無軌道に染め上げられていく。
いや、違う。
悪魔の視力がそれを捉えた。
変わっている。
血や糞尿や肉塵が何かに染め上げられたのではない。
まるで、それらを塗り潰すようにして、得体の知れない塗料が生まれ、エクソシスト達を染め上げているのだ。
理解の範疇の外にある光景。
しかし、祐斗には、小猫には、生み出される光景に見覚えがあった。
廃墟で、教会の入り口で、聖堂で。
そのどこにも彼の影はあった。
廃墟には彼と関係の深い日影が居て、教会の入り口には彼が待っていて。
『ツレがちょっとはしゃいで散らかしたのが、お義母さんにバレてなぁ』
小猫の脳裏にあの日に聞いた言葉が浮かぶ。
はしゃいで、散らかした。
『その他はまぁ、片付けて……いや、散らかした、と言うのが正しいんですが』
つい数分前に聞いた言葉が脳裏を過る。
あの光景を創りだしたのは、目の前で同じ光景を作り出しているのは。
間違いなく、彼、読手書主だった。

「ははは、はははは」
染め上げられたエクソシストを笑う声が響く。
陰湿さも狂気も感じない、ただ面白いマンガを見て笑うそれと何ら変わらない笑い声。
声を上げているのは、天井に近い壁に刀を突き刺してぶら下がっている書主。
刀を挟んだままの片手で腹を抑え、目尻に涙さえ浮かべて笑っている。
「ああ、おかしい。貴方達、なんて顔をしているんですか。ははははは」
屈託なく笑うその姿に狂気を、そして脅威を感じたエクソシストが、出口へ向かって逃げ出す。
逃げ出そうとしていた。だが、居ない。
振り向き、一目散に逃げ出したその一歩目が地面を踏む前に、そのエクソシストは塵と化し、そのまま塗料へと化け、地面にぶち撒けられる。
その傍らに、壁にぶら下がっていた筈の書主が立っていた。
水たまりを作る塗料を足蹴に、靴とズボンの裾を汚しながら。
「駄目じゃないですか、逃げ出したら。貴方達は神の戦士でしょう。神に裏切られ外道に落ちようとも悪魔を滅ぼそうとする、意識の高い選ばれた戦士なら、ここから逃げ出すなんて、するべきじゃない」
刀を振るう。
見える軌道、見える速度。
範囲内に居たエクソシストがそれを躱す。
「戦ってくださいな」
避けたエクソシストが、避けた先で解けるようにしてバラバラに、塵に、塗料へと変わる。
書主の姿が霞む様に消え、同時に数人のエクソシストの姿が崩れる。
「そうしてくれたら、お礼代わりに」
ばしゃり、と、人間数人分の質量を持った塗料が飛散った。

逃げるエクソシストに、武器を構え迎撃しようとするエクソシストに、祐斗と小猫に標的を絞るエクソシストに、バケツで水をかけるようにして塗料がかけられる。
黒のローブすら塗り潰し、ローブの下の頭に顔に、無秩序に色が塗られていく。
染め上げられたエクソシストの顔は千差万別。
恐怖に怯えるもの、怒りに震えるもの、冷徹に反撃の目を伺う静かなもの。
その全てを視界に収める様に、書主が立ち止まる。
溶けるような笑顔。
三日月よりも細い亀裂の笑み。
虫の足を千切る子供の笑み。
純粋であるだけの、慈悲も躊躇いも無い笑みを浮かべている。
「もう少し、見れるラクガキにしてあげますよ」

数十を超える数居た筈のエクソシスト達は、私達に一太刀も浴びせる事無く、読手さんによって蹂躙され、一人残らず死んで、終わり。
単純な結果を生み出したのは、単純な力の差でした。
結果として、兵藤先輩はアーシアさんを取り戻し、私達は無傷のままに首謀者と思しき堕天使を取り囲む事に成功。
取り押さえてもいない、まだ堕天使も十分反撃を仕掛けてくる可能性がある。
だけど、それに何の意味があるのか。
「さぁさぁさぁさぁもうそろそろ終わりの時間ですよ。いい夢は見られましたか？　哀れな哀れな下級堕天使のレイナーレさん」
元人間の塗料をジャージのあちこちに染み込ませた読手さんが、暗い瞳を煌めかせながら堕天使に向かって歩いていく。
堕天使はその異様な風体に僅かに身を竦ませ、次いで顔を歪めながら紅潮させます。
堕天使である自分が人間に怯えた事も、わざわざ堕天使の前に下級と付けられた事も、彼女にとって耐え難い事なんでしょうか。

「人間と、下級悪魔風情が、私を仕留められるとでも思っているのかしら」

「なんと、それは凄い！　ではレイナーレさんは、この状況から勝てる程度の力はあると。あ、それとも、他に協力者の堕天使さんでもいらっしゃるので？」

刀を手にしたまま、両手のひらを顔の前で合わせて関心しているようなジェスチャーをする読手さん。

知らない人が見れば、単純に場の空気を読まずに感心しているようにしか見えない。

でも、さっきの戦いを見た私と祐斗先輩にはわかる。

これも、彼の遊びだ。

あそこまで容易く人間を粉微塵に斬り刻む力があれば、悪魔の動体視力でも捉えきれない速度を持ってすれば、今話す間に十回は堕天使を殺せている。

仮にこの場に読手さんが居なくても、下級堕天使一人が相手なら、私と祐斗先輩が連携すればさして苦戦もしないし、逃がす事もない。

それが分かっているのか、堕天使は私達に攻撃の一つもしようとはしない。

状況的に、あの堕天使はもう詰んでいる。

あの堕天使が本気で私達全員を倒せる、もしくは全員を出し抜いて逃げ切れると思っているので無ければ、援軍が来ることを期待してか、さっき言っていた儀式が完了するのを待っての時間稼ぎなんでしょう。

「そうよ。この計画は上には秘密にしてあるけど、私に同調して力を貸してくれている堕天使も居るわ。今頃、儀式が妨害されてるのを察してここに向かっている筈よ。そうすれば、貴方達如き」

堕天使の言葉を遮る様に読手さんが何かを堕天使に投げ付ける。

それは、教会に入ってからずっと読手さんが背負っていたズタ袋。

さほど早くもない、放物線を畫くように投げられたそれを、堕天使は不機嫌そうに避ける。

「ああ、受け止めてあげないなんて、そんな情のない事を」

悲しげな声で、口元には堪えるような笑みを浮かべたままの読手さん。

「……何のつもりかしら」

「何って、折角連れてきてあげたんじゃあないですか」

「あなた、何を言って……、――！」

堕天使が、地面に落ちたズタ袋を、その中身を見て絶句する。

……正直、ここまでの読手さんの戦い方を見て、少し想像は付いていました。

ズタ袋の中からはみ出しているのは、翼。

ベッタリと赤、青、黄色と単純な色に染め上げられ、半ばから切り落とされた、鳥のそれに似た巨大な翼。

それこそ、目の前でわなわなと震えている堕天使のそれと同じ大きさの。

「堕天使の皆様は、確か羽を見れば個人が特定できるんですよね。どれくらい判別に必要なのか解らないので、擦り潰す前に大きめに切り取っておいたんですよ。……それで、援軍の方々って、今から来られます？」

返事を返すこと無く、背中の翼を羽ばたかせて飛び立とうとする堕天使。

私と祐斗先輩が背中から羽を出して追い掛けるよりも早く、堕天使の黒い翼が半ばから霞と消える。

塵が変じたインクが白いのは何の皮肉でしょうか。

翼を広げて飛び立とうとした中途半端な姿勢から、次いで肉体の一部を切り落とされた激痛に絶叫しながらその場に倒れこむ堕天使。

いっそ哀れ、と思えるほど、彼女の状況は絶望的です。

助けようと思う要素も無いのですが。

「ああ、一応聞いておきますけど、兵藤先輩はこの堕天使、どうします？」

「えっ、ど、どうって」

唐突に問われ、目の前で行われていた世界残酷劇場染みた光景に息を呑んでいた兵藤先輩が驚いたように聞き返しました。

「どうも何も、一応貴方の仇で、そこのシスターさんを付け狙う悪党ですよ？　殺したいとか、殺して欲しいとか、死ねとか、消え失せろとか、血霞になれとか、暗黒の炎に抱かれて消えろとか、美しく残酷にこの世から逝ねとか、あるでしょうに」

「いや、俺は……」

戸惑いながら、兵藤先輩は地面に倒れ伏す堕天使に目を向ける。

翼を失い、完全に地に落ちた堕天使は、ガタガタと震えながら読手さんを見上げています。

翼を切り落とされた事で、初めて読手さんを脅威として認識して、完全に逃げ場がない事に気がついてしまったのでしょう。

知らない人がみれば庇い立てしても仕方がない程の怯えよう。

騙されていたとしても、一応は元恋人という事もあって、兵藤先輩が向ける視線は複雑です。

「助けて、イッセーくん！　この、この化け物が私を殺そうとしているの！　貴方の事が今でも好き、愛してる！　だから、この化け物を一緒に倒して！」

目に涙すら浮かべて懇願する堕天使の声は、先程までの傲慢さが滲み出ているそれとは別物の、男の人に受けの良さそうな上品な声。

私達が眼中に無く読手さんだけを脅威として認識していても、まだ人を騙して助かろうという頭は残っているようで。

それを見た兵藤先輩は、悍ましい物体を目撃してしまったような顔をした後、呆れ、諦めの表情を経て、視線を背けた。

「正直、もうどうでもいいです」

「そうですね。誰も気にしないでしょう、こんなの」

あはは、と笑いながら答える読手さんに、恐怖に震えていた堕天使が耐えかねる様に叫ぶ。

「何よ……何なのよ！　どいつもこいつも！　本当なら、今日は私が、堕天使を癒やす至高の堕天使になる筈だったのに！　儀式は上手くいかない！　お前らみたいなのは湧いてくる！　私が、私が何をしたっていうのよぉ！」

「冥土の土産にネタばらしすると、儀式は最初から此方の魔法で妨害

していたんですよ、教会の外に妨害用の陣を引いてね。こんな結果に至った理由は……まぁ、偶々目について、死んでも誰も悲しまない感じだったからってのが、一番の理由ですね。ほら貴女、別に誰からも大事にされてないみたいですし」

余りにもあっさりとした、余りにも理不尽な答え。

「そ、んな、私、は、至高の存在、に」

「そもそも儀式で神器が抜き出せるなら、貴女に預けておく理由も無いじゃないですか。持ち帰っても、また抜き取られて他のマシな堕天使に移植されて、貴女はぽいー、でしょう。常識的に考えて。最初から芽が無い話だったんですって、愛され系になるなんて」

それを聞いた堕天使の顔からは、とうとう表情という表情が抜け落ちてしまいました。

「……うん、いいですね、いい顔です。その顔が見たかった。それ以外に見たい部分も無いんですけど」

満足そうな笑みを浮かべ、両手を広げてくるりと回り、堕天使に背を向ける読手さん。

「それでは」

その背後で、もはや何も写していない瞳で虚空を見つめていた堕天使が、はらりはらりと、紙束から紙が抜け落ちていく様に解けていく。

表面から薄切りにされた堕天使は数秒後には赤い霧に。

読手さんが振り向きもせずに片手の刀を霧に向かって振るうと、赤い霧はその色を変え、広間を染めるものと同じ塗料へと変わる。

……ゆっくりと見ても、何が起こっているかがわかりません。

「はー……、さて」

一度天を仰ぎ、目元を手で覆って溜息を吐き、振り向く。

既に瞼は閉じられ、手の中に在ったはずの刀は六本全て消え、見た目の上では元通り、何時もどおり。

「今日はこれでお開きですね。帰りましょうか」

十一話　猫の距離感

……そうして、イッセー先輩の死から始まった、この街での堕天使に関係する事件は、一応の幕となりました。

あの堕天使たちが独自に動いていた為にきついお咎めはありませんでしたが、私達は先走ってしまった事を部長に少しだけ怒られ、それで今回の話は終わり。

少なくとも、私達の王である部長はそういう事にしておきたいそうです。

部長とイッセー先輩は、あの教会から帰る途中でどうにか仲直りできたようです。

細かい話は聞き流していたのでわかりませんが、たぶん、転移に失敗して、空を飛んで必死で教会に向かっていた部長の姿に心を打たれたとか、そういう話なんでしょう。

部長が元から手助けする気満々だったことがわかっていた私達からすれば今更な話ですが。

アーシアさんを取り戻し、冷静になったイッセー先輩は申し訳無さそうに謝っていました。

正直、あんな周りくどい言い方で、結論から話さなかった部長もどうかと思いましが、まぁ、あれで部長もイッセー先輩も納得しているなら、いいんじゃないでしょうか。

祐斗先輩は何時もどおりのようでいて、前よりも少し鍛えなおしているみたいです。

あの教会で殆ど何もさせてもらえなかったのが悔しかったのでしょう。

表面上は平静を装っていますが、何処か、何時もよりもやる気があるように見えます。

人当たりのいい柔和なイケメン、といったキャラで通っているけど、この人も中々に熱い、少年漫画的な情熱があるとわかりました。

イッセー先輩が助けだしたアーシアさんは、部長の眷属になるそうです。

信仰を失ったわけでもない敬虔なシスターが悪魔に転生するなんて前代未聞の話ではありますが、本人は納得しているようです。

教会を追い出されて堕天使に囲われていたアーシアさんですが、その堕天使が居なくなり、後ろ盾が無くなった今、何処から同じように神器を狙われるかわかりません。

だから、保護する意味も込めて、というところなんでしょう。

部長が割と熱心に勧誘していたとか、堕天使やエクソシスト達にひどい目に合わされたからとか、そういう理屈っぽい理由だけで転生した訳ではない事は、アーシアさんのイッセーさんを見る視線を見ればわかります。

いい人なので、同じ悪魔として、これからいい付き合いをしていけたらな、と思います。

朱乃先輩は……まぁ、置いておくとして。

とにかく、この短い期間で二人も眷属仲間ができたりしたけれど、グレモリー眷属は安泰です。

堕天使の策略に巻き込まれそうになったとしても、それは変わりません。

では、今回の事件に関わった、もう一人はと言えば……。

ひんやりとしたドアノブを回し、ドアを開く。

あまり開かれる事がないからか、金属製のドアは甲高い軋みを上げながら開く。

新校舎の屋上。

悪魔とは余り相性の良くない太陽の日差しも、放課後の時間とあって適度に弱く、人気も殆どありません。

そんな屋上で、ベンチに座ってぼうっと校庭を眺めている人が、一人。

「……あれ、塔城さん？　どうしました？」

振り向き、でも閉じた瞼から視線を向けずに首を傾げるのは、クラスメイトの読手書主さん。

「……少し、お話があって」

教室で、机にかばんを置いたまま早々に姿を消してしまった読手さんを探すのに、少し手間取りました。
クラスメイトに話を聞き、聞いた行き先で見つからずにまたその場に居た人に話を聞き、校舎をぐるっと一周して、ようやくです。
何故だか途中から道行く人から応援の声が聞こえた気がしますが、心当たりが無いので無視して、でも、少しだけ支えにして。
こうして、教室以外で改めて読手さんと向き合って話すのは、数日ぶり。
あの教会以降、こうして彼と向き合った人は、グレモリー眷属の中では私しか居ません。
以前に眷属に誘おうか、と考えていたらしい部長は、祐斗先輩から教会での顛末を聞いてから、彼に積極的に接触を持とうとは考えていないようです。
副部長も同上で、祐斗先輩はもう少し鍛えなおしてから、アーシアさんはお礼を言いたいからと接触しようとしましたが、部長が直々に止めていました。
イッセー先輩も助けてくれた礼を言おうとしていましたが、これも部長にやんわりと止められています。
部長は『彼は悪魔や堕天使、天使に対して良いイメージを持っていないみたいだから』と言っていました。
もちろん、建前です。わからない程間抜けでもありません。
部長は今、明確に読手さんの事を警戒しています。
踊るようにして歌うように、弾丸のようにしてギロチンのように、楽しげに心のままに、早く迷いなく人も堕天使も斬り刻む。
彼の言葉を信じるなら、殺した理由は、殺しても誰も悲しまないから。
騎士の祐斗先輩の動体視力を持ってしても追いつけない速度で動き、複数の堕天使をあっさりと殺害する力量。
更には、神器を抜き出す儀式を妨害し、転移まで防ぐ独自の魔法陣を設置する魔術に対する造詣の深さ。
これで警戒しない方がどうかしています。

間違いなく、近く彼の身辺への調査が入るでしょう。
でも、それは私には関係の無い話で。
「……」
話易くするために、何時かの様に逃げられないように、ベンチの隣に腰掛ける。
「……あー、っと、何か、悩み事ですか？」
とりあえず聞いてみた、といった風の、それほど真剣ではない声。
彼は、大体の場合はこんな感じだ。
クラスメートと話もする、友人と呼べる相手も多少居て。
でも、悩み事を相談している姿も、相談されている姿も見た事がない。
私ともそうだ。
いや、そもそも私と彼は、それほど深い付き合いの友人という訳でもない。
お菓子の話をしたり、授業で習った内容を話したりもするけど、互いの内面に一歩踏み込む様な関係ではない。
友達といえるけど親友という程でもない。
気心のしれた仲と言うには離れた関係。
それでも、話を聞かれたそうにしていれば、一歩踏み込む素振りを見せてくれる。
だから、それに少しだけ、乗っかってみる。
「……読手さん、私、悪魔なんです」
隣に座る彼の顔は見ない。
「ええ、それはもちろん知っています」
「じゃあ、どれくらい知ってますか」
即答からの、沈黙。
沈黙は多分、考えている証だと思う。
目の前の校庭からは運動部の掛け声が、校舎のあちこちから吹奏楽部や音楽系の部活の練習音が聞こえ、沈黙を埋めていく。
「……そうですね、こうして、面倒な問答を仕掛けてもおかしくない、面倒な生い立ちだ、という程度の事は」

「……どこで、その事を？」
「前にも言ったでしょう？　見れば、わかるんですよ」
別に好き好んで見た訳じゃないですけどね、と、傲慢な嫌味を飛ばされる。
なんだそれは、と思いながら、あの時に目を開かせたのは私なので、どうとも言えない。
たぶんそれが彼の力の一端で、目を開かない理由なんだろうとわかるから。
でもそうすると、もう一つ疑問が浮かぶ。
「じゃあ……、なんで、私と、友達になったんですか」
一般的な視点から見れば、私は面倒臭いタイプになると思う。
弁が立つ訳でもないし、愛想があるわけでもない。
悪魔だというだけで体質も立場も面倒な上に、元の種族や姉のことで殊更に面倒でややこしい立場でもある。
彼は面倒が嫌いだ。
それは、初めて彼を旧校舎に案内しようとしたその日に分かっている。
でも、それならなんで、私が面倒くさい立場に居ることを知りながら友達付き合いをしているのか。
「そこまで塔城さんのプライベートに踏み込むつもりもありませんでしたから。浅い付き合いなら、種族も立場も、それほど気にしたくないんです」
「そう……ですか」
種族は関係ない、そう言った人と似ているようで、まるきり正反対な答え。
気にしないわけでも関係ない訳でもない。
気にしたくない、自分の側の都合しか考えていない、エゴ丸出しの理由。
たぶん、それが彼の中に引かれた一線。
彼の、あの戦い方に、淀みなく楽しげに人を殺してみせる彼の内面に踏み込もうと思ったら、どうしても避けて通れない一線だ。

「……そう、ですね」
「？」
その一線を、私は、
「いいと思います、その距離感」
越えない。
それは彼の中の決定的な一線。
他人と身内を、他人と自分を分かつ程の重要な一線だ。
ただの、一介の高校生があれほどの戦闘力を持ち、躊躇いなく命を奪えるようになるほどの秘密が隠されている。
きっと、誰に話したい訳でもない、抱えたまま人生を終えたいと思うほどの内面。
「読手さん」
空気を介して伝わる体温が、気配が、今も僅かに残る塗料の涼しい香りが、彼の存在を伝えてくる。
彼に視線は向けない。向き合わない。
それを彼は望まないし、私だって望まない。
越えて欲しくない一線、知られたくない内面。
そんなものは、私にだってある。
生まれが珍しい種族だって事も、姉が主殺しの罪人である事も、好き好んで知られたいと思える秘密じゃあない。
誰にだってある防衛線。
「私達、まあまあいい友達になれると思いませんか」
彼は、読手さんは恐ろしい人だ。
何処か常人とは違う、狂った部分のある人で。
でも、理性の強い人だ。
殺しても良さそうな相手を見繕える程度には理性的で、学校で普通に過ごせる程度には社会的で。
誰か、犯罪者になって姿を消した誰かを思い出す。
きっと共通するところなんて無い。
でも、目を離したら、いつの間にか消えてしまう所が、似ているようにも思う。

「そうですね、まぁまぁ、いい友人だと思いますよ」
その答えに、少しだけ頬が緩む。
「でしょう。……普段は話せない事も、話せますし」
だから、隣に居ようと思う。
「……今度、部活を見に来ませんか。悪魔活動じゃなくて、ただのオカルト研究部の方を」
「部長さんが面倒くさそうなのできっぱり断ろうかと思うんですが」
「……大丈夫です。確かに部長は割と面倒臭い人ですけど……何度も勧誘するほど空気が読めない訳でもないので。……いざとなれば、私が止めますし」
「ああ、それならいいですね。悪魔社会ネタ抜き、お茶菓子ありなら、まぁまぁ楽しそうだ」
深く踏み込まずに、互いに越えられたくない一線を敷いて。
何時か、こうして学校で会うような縁が消えて、彼が目の前から消える時、せめてお別れを言える位置に居よう。
互いの一線を重ねて出来た距離で、嫌いではない彼と、他愛のない話をしていよう。
それが多分、この不可思議な友人との、適度な付き合い方だから。

戦闘校舎のフェニックス

十二話　夜明け前には星を見て

春眠、暁を覚えず、とは言うが、朝に布団から体を起こし難いのは別に春に限った話じゃない。

そもそも、春夏秋冬なんてのは人間なり神様なりが勝手に決めた括りでしかなく、地球の気候は絶えず変化を続けている。

春っぽい時期を少し過ぎたからと言って、すぐに梅雨になるわけでなし。

入学式を終え、新入生気分が抜け、桜も散って木々が緑に染まり始めたこの時期だって、朝は眠っていたい。

微睡みの中に居るのは心地よく、体温で程よく温まった布団の中に、本能に縛られた肉体は否応なく留まりたがる。

「……あふ」

そういう諸々の未練を欠伸と共に噛み殺し、体を起こす。

たっぷり睡眠時間を取ったとしても、朝に布団から体を起こすのはどうしても未練が残ってしまう。

だけど、この感覚だって体があって、生きている証ではないか、と思えば、まぁ、許せる。

こういう時、稀に自分の記述の中に【滅茶苦茶目覚めが良く朝は気持ちよく起きられる】みたいな事を書きたくなってしまうが、それは我慢だ。

唯でさえ若気の至りから色々追記してしまっている以上、これ以上人間らしさというか、此方が此方であるからこそ発生し得る個性を潰してしまいたくはない。

時計を確認する。

早朝、四時。

未だ春と梅雨の間、春寄りの時期である今の季節、太陽は顔を見せず、空には僅かに星が光る様な時間だ。

布団を退け、ベッドから立ち上がる。

パジャマからジャージに着替え、幾つかの荷物を袖の中に暗器の要領で仕込み、瞼を閉じて部屋から出る。

この時間は流石に母さんも日影さんも眠っている為、なるべく音を立てずに洗面所で顔を洗い、運動靴を履き、外へ。

早朝の冷たい空気を吸い込むと、僅かに目が覚める。

瞼の上から透けてくる光が少ない。

上を向き瞼を開くと、うっすらと明るくなり始めた空。

まだはっきりと文字に見えない、まるで星空の様な星空。

雲ひとつ無い。本日は晴天なり。

黒から紺に変わり、だいぶ白み始めている東の空に一際大きな光の粒。

明けの明星だ。

ちょっと得をした気がする。

凝視せず記憶にだけ留め、瞼を閉じる。

軽く準備運動。

全身の筋を伸ばし、関節の調子を整える。

地面を蹴り、手近な塀の上へ、更に跳んで民家の屋根の上へ。

足音を出さずに着地するのが嗜み。

そのまま、隣の隣の家の屋根へと跳ぶ。

視界はゼロ。だからどうだという話だが。

一つ所に留まらず屋根から屋根、電信柱の上と姿勢を変えながら連続で飛び続ける。

刀と同じ重量バランスの鉄棒を手に。

飛びながら振り回し、ふと六本に増やす。

実質手が伸びた様なものだ。六本の金属棒を着地点に当て、そこから跳躍。

見られたら実際不審者呼ばわり間違いなしの奇行。

だが目立たない動きではいけない。

目撃される場所を目撃されやすい動きで移動し、それでいて目撃者が出ないように立ちまわる。

それも鍛錬の一つ。

公園が近いので、やや速度を上げる。
前まではここの公園が目的地だったが、今この公園はグレモリーさんとその眷属である兵藤さんが使っているので使えない。
まぁ改めて考えれば、ここで修行、というのも、よくここまでばれなかったと思うほどに不用心だった気もする。
学園のお姉様とかいうのを乗せて、腰とか腕をカクカクしている兵藤先輩の気配を無視し、気取られない内に通り過ぎる為に加速。
郊外に出て、乗り移れる建物が無くなった辺りで小規模な忍び結界を張りながら移動。
通り過ぎた辺りの結界を解除しつつ、目的地へ到着。
県境を通り過ぎ、グレモリーの領地から少し離れた辺りの山中。
周りを見渡せば、本当に木々しかないような辺鄙な場所。
監視の目は……無い。
根拠は勘と感だ。六感を越えた先の七感があればこれくらいはできる。
瞼を開け、ロール紙を数本取り出す。
端を持ちざっと広げながら放り投げる。
手の鉄棒六本を振り抜き二メートル幅に切り出す。
もう一度鉄棒を振り、切りだされた紙に、のっぺりとした修行用の傀儡を描く。
一筆書き、書き損じ無く当然成功。
後に残るのは傀儡の描かれた紙――ではなく、傀儡そのもの。
完成と同時に襲い掛かってくる傀儡をいなしながら以下、ロール紙が無くなるまで繰り返し。
木々の文字列の間、まぁまぁな動きの傀儡が此方に向けて拳や蹴りを、或いは投げを、そこらにある石などを投擲しつつ追い詰めようとしてくる。
まぁまぁな動き、まぁまぁな連携。
見習い忍用の修行道具がモデルなだけあり、あまり苛烈な動きはしてこない。
既に傀儡の絵の姿は無く、まぁまぁな動きで襲い掛かってくる、人

間や悪魔に比べればかなり簡素な文字列の塊。
構成材料に、行動パターン、四肢を動かす内部機構の説明文。
あとは使用される木材のＤＮＡパターン位だろうか。
見やすいが、それだけに動きは見切りやすい。
まぁまぁな攻撃をすり抜けながら、鉄棒六本を振るう。
傀儡の表面に棒の先端を滑らせ、更に細かく描き込んでいく。
肌、髪、顔の、体の輪郭、衣服、手指細部、顔。
今まで見てきた悪魔や堕天使、妖物の類の顔を片端から傀儡に描き写していく。
全ての傀儡に描き終えた所で誘導。
傀儡がおおまかに一直線に並ぶように仕向け、一閃。
全ての傀儡に、描かれた顔に瞳を入れ、追記。
【読手書主を全力で殺しに掛かる】
【殺されない様に身を守る】
瞳を入れてからの僅かなタイムラグを経て、夥しい数の悪魔や堕天使、妖物が現れる。
傀儡を術で化けさせた訳ではない、正真正銘の『本物』だ。
見たままを描いたのだから間違いない。
全能力全思考全記憶完全に、肉体魂魄共にオリジナルと同等。
少なくとも、此方が記憶している姿をしていた頃と同じ、オリジナルと区別する方法は追加した文章を見る以外では一切存在しない。
描き上がって動き始めた複製達の姿が文字列に置換されていく。
何度か確認した通り、オリジナルと一字一句変わらない文字列の塊が出来上がった。
彼等、彼女等の敵意はまちまちだ。
此方と敵対し結果的に死んだ相手も居れば、此方が一方的に知っているだけで敵対関係になるどころか顔見知りですらない相手も居る。
だが、そんな彼等の意志とは関係なく、彼等は全力で此方を殺しにかかる。
そう書き足された以上、彼等にはそうするしか道はない。
実のところ此方にもそれ以外の道はない。書く事はできても消す

事はできないのだ。
「では殺しますので、抵抗して下さい」
慣れた作業、とは行かない。
毎回、描き出す相手の順番は異なる。
場所も違うし、周りに居る連中を見て思考にはどうしたってブレが出る。
そのブレがいい経験になる。
同じ人間、同じ悪魔、同じ堕天使が、いったいどれだけの引き出しを持っているのかを確認するのにいい。
秘伝忍法は使わず、加速もせず、人の目に写る速度、常識の範囲内の動きで対応し、新たな手筋を考えていく。
翼を持つモノ、多脚で木々の間を飛び回るもの、決まった形を持たない不定形なモノ、人と大差ないもの。
だがどれだけ居ても一斉に此方を攻撃できる数は決まっている。
こいつら同士は顔見知りなど皆無であり、各々が勝手気ままに攻撃を行っているだけ。
勿論周囲の動きを見てそれを利用するものも居るが……。
「はい、折り返し」
数分で半分を殺し終える。
斬り刻む手間を省き、単純に殺すことだけを考えれば、野良の悪魔や堕天使などこの程度のものだ。
そこで残った野良で無い連中、学園で見かけた二つの群れの内の一つに期待したい。
基本的に此方の行動範囲で見つけられる連中なので、相手も此方の事を知っている。
彼等というか比率的には彼女等は、此方の事を知っているだけに、此方を殺さなければならない、という自らの中にある強迫観念に疑問を抱き全力を出しきれない。
これが全力で殺しにかかる、という一文とかち合って、その場で様子を見る、という選択肢を与えることになっている訳だが。
彼女等を動かす方法は簡単。

少しばかり情に訴えるだけでいい。
「黒妖陣（ブラスト・アッシュ）」
まともな聴覚なら聞き取れない速度で詠唱を完了し、『力あることば』と共に呪文を解き放つ。
黒い何か、本当に、文字列にも『なにか』としか書かれていない黒い何かが、前面に出ていた不良学生風の男と、その近くに居た数名の女学生を包み込む。
誰一人反応できていないのは、事前にリアス・グレモリーから連絡が行っており、教会での此方の情報があった為だろう。
攻撃面では六刀メインで、直接攻撃的な魔法を使うとは思わなかったのかもしれない。
「便利な術でしょう?」
数秒せずに『なにか』が消え、後に残るのは数名分の学生服と、中に居た男女の肉体が変じた塵のみ。
彼等の姿は跡形もなく、アストラルサイドからも同じ効果が発揮されている為、霊的な痕跡すら残っていない。
輪廻転生の輪に乗ることもなく、魂を回収されて再利用される事もなく消え失せる。
手加減も何もない、完全に殺すことだけが目的の魔法だ。
何が起きたか理解出来ずに呆ける残りのメンバーに対し、口の端を上げ、仰々しく笑ってみせる。
「大きなゴミも、これで纏めて塵にできるんですよ」
群れの中の数名が何事か叫びながら激高して躍りかかってきた。
文字列を読めばわかるが、この流れを作ってくれる彼女は、先の学生服の男に好意を寄せていた。
周りのほぼ全員がそれを知っているし、此方の行動にも物言いにも敵対の意志しか記されていない以上、止める事無く彼女の創りだした流れに乗ってくる。
的確な駒の動かし方を知っているブレインも居る、カウンター系の神器使いも居る。
前半で突っ込んできた連中よりはマシで、傀儡よりはマシで。

全員を殺すのに少し手数が多めに掛かった。

「さて」

群れのボスの女性の頭を片足で踏み潰し、それを阻止しようと背後から放たれた滅びの力を身を捻り避け、懐から時計を取り出して時間を確認する。

時刻は四時半、死体を片付けて戦闘の痕跡を消して、となると、五時には終わらせるべきだ。

そう考えると、今回は少しばかり早く早くと急ぎすぎたか。

「冥魔槍（ヘルブラスト）」

距離を取るために空に上がり、木の枝の影に隠れ魔力を使い何かしようとしていた黒髪の女学生を暗黒の槍が貫く。

聖邪問わずあらゆる生命エネルギーを奪う槍が、一瞬にして堕天使上がりの悪魔の生命力を枯渇させる。

残り五名。

死んでいると気付いていないのか、金髪の少女が治療しようと落下してきた死体に向かって走って行く。

そちらに意識を向け直すより早く魔剣を構えた剣士と、怒りから肉体を半ば以上龍へ変じさせた兵士が同時に向かってきた。

左右に別れられたら範囲攻撃しか届かない。

でも後片付けが面倒なので範囲系は使いたくない。

鉄棒で相手をするのは少し心もとない。

とりあえず六本の鉄棒を手放す。

「ていっ」

右手と左手の中に魔法の源となる『海』の一滴を呼び出し剣状に固め、振るう。

魔剣使いは魔剣ごと、半龍の兵士は龍鱗ごと真っ二つ。

……あ、呪文詠唱忘れた。まぁいいや。これは失敗しようがない、ノーカンだ。次はちゃんと唱えよう。

ともあれ、残り三。

一瞬で終わった攻防に気付かず、死体に向けて治癒の力を注ぎ続けていた金髪の少女に視線を向ける。

庇うように赤髪の、群れのボスが滅びの力を漲らせながら立ちはだかる。
丁度二人、手の中の混沌の欠片を二つ握りつぶし、それぞれの体内に転移。
此方の感覚で言えば、混沌とは虚無とあまり変わらない。
そんなものが体内にあれば生きていられない。当たり前の事だ。
残り一。
鉄棒は手放し、呼び出した混沌は使いきり、無手。
測ったように残り一人も無手。
無手とは即ち空の手、つまり、カラテだ。
やはり最後にモノを言うのはカラテ、ノージツ・ノーニンジャだが、ノーカラテ・ノーニンジャでもある。
最後は素手で〆て、後片付けに入ろう。
「……何で」
残り一人、白髪の小さな戦車がつぶやく。
残り人数が減り、騒ぐ声も少なくなったので聞き取りやすい。
「何で、こんな真似を……！」
涙混じりの声だ。
感情にも怒りと共に悲しみが混じっている。
何しろそう文章で書いてあるのだから間違いない。
この状態なら全力を出すのに支障はないだろう。
本日最後の標的となる文字列に、これまでと同じ、テンプレートと化した言葉を返しておく。
「軽いジョギングみたいなものですよ。健康維持の為のね」
春が終わり、梅雨に届かない、入学したての新鮮さを失いがちな時期。
今日も今日とて、此方は何時もと変わらぬ日々を過ごしているのであった。

「は、ふぁ、ふ」
放課後、旧校舎への道を歩いていると、隣から大きな欠伸が聞こえ

てきた。
「……寝不足ですか？」
欠伸の主は、片手に学生鞄、片手にコンビニのビニール袋を手に下げた読手さん。
今日はコンビニで梅系の新しいお菓子が出ていたので、登校途中に鞄にしまえる量だけ買い占めて、オカ研で他の皆さんと一緒にお茶会をすることに。
いつもの通学路から少し外れた位置にあるコンビニで一緒になった読手さんにも買い占めを手伝って貰ったので、今日の獲物は大量です。
「いやぁ、夜更かしして天体観測した上に、早起きしてジョギングなんてしたものだから、今更ながらスイマーが襲ってきまして……ふぁふ」
水泳帽に海パン、そして何故か真っ赤なネクタイを付けた細マッチョなイケメンスイマーに壁際に追い込まれる読手さんが一瞬頭を過り、その無意味なビジョンを即座にかき消す。
隣を見れば、閉じた瞼の端から涙を滲ませ、再び小さく欠伸をする読手さん。
そのだらけた姿からは、あの日に教会で見せた狂気は微塵も感じられない。
というか、彼は大体の場合こんな感じである為、今ではオカルト研究会で彼の事を明確に警戒しているのは部長だけ。
副部長は一応部長に追随して警戒する姿勢を取ってはいるようですが、部室である程度の交流を繰り返す内に、副部長個人からの受けはまぁまぁ良くなっているみたいです。
「……今日の授業は、特に眠たくなる内容だった……」
「そうなんですよ、内容はともかく、あの先生のもったりとした声が子守唄にしか聞こえなくて」
「……あれは、純粋に聞き取りにくい。何言ってたわからない」
「これは、テストは板書と教科書頼りですね」
こうして読手さんを伴って部室に行く頻度はそれほど多くはない

けど、来た時は悪魔としての活動よりもお喋りやお遊びの割合が多くなります。

悪魔としての活動に不満があるわけでもないけれど、それでも、私も他の眷属の人たちだって高校生、たまにはそういう日があっても良いでしょう。

部長だけは複雑そうですが、それ以外の人達は稀の客をそれなりに快く迎えてくれ、部室の空気も少し賑やかになります。

「そういえば塔城さん、トレーニングってどんなのしてます？」

「普通のトレーニングです」

「ボクシングとかも参考にするといいかもですよ。拳の引きもうちょい速い方が反撃食いにくくなりますから。今の速度だと腕掴まれてそのまま首を取られます」

「……考えておきます」

眷属仲間でもない相手とこういう血なまぐさい話をするのもどうかと思いますが、割と参考になる意見を言ってくるので、軽く聞き流す程度に頷く。

実際に組手をしたりフォームの確認をしたりする訳ではない以上、コレも結局は他愛のない世間話の一つだ。

……まぁ、まるで実際に組手でもして見つけたかの様に少し気にしていた癖や欠点を指摘してくるので、少しどきりとさせられる時もあるんですが。

「トレーニングといえば、この間イッセー先輩がアーシアさんと……」

面倒な事にならない範囲でなら、悪魔活動の中身も世間話。

特に最近は新しく入った二人が色々と頑張っている為、話の種には困らない。

あまり話をしない私が自分から話を振るのに困らない程度には、最近の日常は変化に富んでいる。

勿論、読手さんもそんな変化の一つだ。

良い意味でも、悪い意味でも。

「……ところで、天体観測なんてするんですね」

ふと、先の読手さんの言葉を思い出し、呟く。
普段から目を閉じて生活して、それこそ授業の板書すら目を閉じた状態で写しているらしい彼が、自分から目を開ける場面は非常にレアだ。
私が知る限りでは、恋人である日影さん（今日は運動部の部活に助っ人に行っているらしい）と話している時か、教会で堕天使やエクソシスト達を切り刻んだ時だけ。
この二つの場面に共通するものは見い出せないけれど、天体観測というのも意外だと思う。
「長々とはやりませんけどね。遅くになるのを待って、それから少し空を見る程度で、望遠鏡も使いませんし……っと、塔城さん待った」
旧校舎の入り口に差し掛かった辺りで、読手さんが私を手で制しながら立ち止まった。
「部室に誰か知らない方が居るんですけど……来客の予定があったりします？」
難しそうな、というより、少し面倒くさそうに眉を顰める。
この場所から部室の中は当然見えないけど、そこは読手さんなのでスルー。
言われた言葉に、ふと思い出す。
「……そういえば、今日は部長のご家族の方が来るとかどうとか」
適当に聞き流していたからはっきりと覚えてはいないけど、確かそんな話があった気がする。
「それって、部外者が居たら不味くないですかね」
「さあ？　……一回行って、部長に聞いてみて、駄目なら帰るって感じで」
「いや、塔城さんは残らないと」
「……そうですね」
渋々頷く。
自分の顔の眉の間が寄っているのがわかる。
どうにも気持ち悪いというか、嫌な予感しかしない。
これは面倒臭くなりそうです。

「……はぁ……、とりあえず、行きましょう。……はぁ」
「二回も溜息吐きましたよこの娘」
読手さんのツッコミを受け流しながら、とても良いことが起きそうにない予感を胸に、私達は旧校舎の中へと足を踏み入れる。
……桜の花が散り、緑の葉が生い茂り始め、でも、梅雨には遠いこの季節。
まだまだ私の学生生活は新鮮な変化に溢れていて、まるで飽きる気がしない。
そしてたぶん新しい変化は、今日この日も、碌な前触れも無しに現れるのです。

十三話　放課後にはお茶会を

そんな訳で、様々な問題をひとまず棚上げし、梅系お菓子の時間である。

察しのいい客は気付いているだろうし、此方もわりと慣れたものなので気付いているが、これは所謂季節もののお菓子に分類される。

季節ものとはその名の通り、特定の季節にのみ限定的に製造、販売されるお菓子の事を指す。

ここで注意したいのだが、季節ものと期間限定ものは似ているようでやや違う、という事だ。

基本的に季節もののお菓子はその時期に大量に収穫される、良く言えば旬の果実や野菜などを利用したものである。

期間限定ものはそれら旬に拘ること無く、普段のノーマルな味から逸脱したもの、或いは高級志向でややグレードを上げたものなどを提供する場合が多い。

自然、期間限定ものは余程上手く行かなければ再販される事もなく、世の珍お菓子ハンター達の記憶に僅かにとどまるだけの存在に成り下がる。

対して、季節もののお菓子には周期があり、マイナーチェンジされようとも、毎年時期が来れば似たようなものに巡りあう事ができる。

これは長所でもあり短所にもなり得る特徴ではないか。

「ワグナス!!　この梅チョコ去年と中身変わってない！」

「……ダンタークめ……、パケだけ変えて同じお菓子の再販を新製品と偽って見せるなど……って何やらすんですか」

もう二人居ればオチまで持っていけたのだが、残念ながら今こんなお遊びに付き合ってくれるのは目の前の塔城さんしか居ないのでここでおしまいだ。

四人居ればできるエコロジーな七英雄ごっこは置いておくとして、パケを少しだけ変えてレシピは同じ、というのは余りにも悲しい。

味もまぁまぁというか、妥当な感じで無難に纏めているのが良くない。

「せめてペプシソとか、あれくらいの遊びは欲しかった」
「……そういえば、ぷっちょの塩鮭味が出るという噂が」
「ハハッ、ナイスジョーク。……と言えないのがキャラメル業界の怖い所……。ジンギスカンの前科がありますし」
「それじゃあ……とりあえず、全種摘んでいく」
「そうですね。余ったのはオカ研の冷蔵庫に寄付しておきましょう」
塔城さんと頷き合いながら、買ってきたお菓子を少しずつ開けて吟味していく。
梅チョコ、梅ポッキーは基本、梅飴は通年商品、梅サイダーは……あ、いいなこれ、通年でやって欲しい。
む、サイダーではないが、またドリンク系が……。
「しまった、これ梅酒だ」
梅っぽい反応の商品を片っ端からカゴに入れて買ったからわからなかった。
レジで引っかかんないとか、あそこのコンビニ店員ザルだな。
「……やっちゃいましたね。ちょっと生徒会にチクってきます」
「待った待った、今うまい言い訳を考えるから待って下さいな」
要は此方が消費する流れがあるのが問題な訳だから……よし。
振り向き、空気がピリピリしている方角で平然としているメイドさんに声を掛ける。
「メイドさん、この梅酒、魔王さまへの献上品です」
「好きにしなさいとは言ったけど、限度というものがあるでしょう！」
メイドさんがリアクションを起こす前に、グレモリー先輩がいきなりヒステリーを起こしてしまった。
「まだ開けてませんよ？」
「そういう事を言ってるんじゃ無いのよ！」
じゃあなんだというのだろうか。
さして親しくない、それでいて周囲から人気も人望もある人間（悪魔だが）からのヒスというのは処理が面倒くさいし難しい。
とりあえず、同じ女性で色々属性と立ち位置が被っている、小説とかで同じ場面に居たらいまいち見分けがつかなそうな姫島先輩に表

情でそれとなくヘルプを求める。
が、返答無し。
頬に手を当ててアラアラうふふと笑っている。
あれは一種の識別信号だと思うのだが、それが今役に立つ訳でもなく。
「読手さん、読手さん……ラッピング」
「ああ」
向かいから小声で塔城さんが助け舟を出してくれた。
なるほど、確かに余り物――献上品を剥き出しのまま持ち帰ってもらう訳にもいかないだろう。
「でも塔城さん、今手元の紙っていうとコンビニのおにぎり百円セールのチラシと授業で貰ったプリントしかないですよ」
「大丈夫……この板チョコの外紙を綺麗にはがせば、裏側は白い紙になる」
「なるほど……じゃあそれに包装紙っぽい模様を書けば」
「……しかも丁度、美術の授業で使ったポスカが」
なんだ今日の塔城さん用意良すぎる、気遣いの淑女か。
「小お猫おおっ!!」
凄いなグレモリー先輩、床に膝付いて頭抱えて天を仰ぐとか、リアルにやってる人初めて遭遇した。
でも瞼開いて見て挿絵になってなかったらがっかりするし、とりあえず写メだけ撮っとこう。
ついでに学校の友人に一斉送信だ。
「申し訳ありませんが、正式な手続きを踏まない献上品を届ける訳には参りませんので……」
「ちょっと待ちなさい読手くん、今ナニを撮ったの。あとグレイフィア、そういう問題でも無いわよ」
優雅に一礼してこちらの提案をやんわりと断ってみせるメイドさんことグレイフィアさん。
常に優雅であるべきらしい貴族らしからぬ慌て方をしているグレモリーさんとは対照的な、大人の余裕と気品が感じられる。

このグレイフィアさんなる女性の事は、グーグルアースで見たこの世界の表紙に写っているグレモリー先輩のプロフィールから多少知ってはいるが……。

流石、悪魔の王の妻ともなると、未熟な学生の身であるグレ森さんとは一線を画する洗練された余裕のある立ち振舞だ。

「それもそうですね、無茶を言ってすいません」

「……これが終わったら生徒会に自首しにいきましょう」

「何言ってるんですか塔城さん、これは元からオカ研の冷蔵庫に入ってたものですよ。勘違いしてはいけません」

「そんな馬鹿な。……ところでその冷蔵庫何時から置いてあったんですか？」

「この間此方が送りました。所謂お詫びの品って奴ですね」

「読手さんナイス。自然と使ってましたけど、結構便利」

「最初送られてきた時は、何事かと思ったわよ……」

脱力した声でそんな事を言いながらグレモリー先輩が立ち上がる。

半眼の視線が向かう先は此方だ。

「それで、貴方は何時までここに居るつもりなのかしら」

「そろそろ帰りますよ。今日は駄弁りながら菓子食べに来ただけですから。……正直、ここまで立て込んでいるとは思いませんでした。すみませんね、面倒な時に来てしまって」

軽く頭を下げる。

実家の人が来るとかいうから、隠していた授業参観のプリントが見つかって、家族の方が授業参観前の下見に来たのか、くらいに考えていたのだ。

だが、このグレモリー先輩のピリピリした態度には、授業参観のプリントを隠すお子さん特有の身内のはしゃぎっぷりに恥じる嫌と言い切れないしこの部分が好きとも言えない、みたいなツンデレ成分が微塵も含まれていない。

「……別に、謝らなくてもいいわよ。あんまりはしゃがれても困るけど、こういう日で無ければ、そうね……歓迎するわ、私の下僕達が」

でも、ぷい、と、そっぽを向いてそんな事を言う処には微粒子レベ

ルのツンデレを感じる。
　更に、五感やそこを越えた六感しか持たない者には解らない細かな機微、グレモリー先輩の張り詰めたピリピリとした雰囲気は気持ち和らいでいるし、それを見るグレイフィアさんの視線も心なしか優しげな雰囲気を滲ませている。
　最初の遭遇時にグレイフィアさんから向けられていた警戒心も、僅かに低減しているのがわかる。
　目を開けるまでもなくわかるのは、あちらが此方の行動を『部室内の空気の悪さを吹き飛ばそうとわざと巫山戯てみせていた』みたいな勘違いをしているという事だ。
　それも仕方あるまい、と思う。
　こうして大はしゃぎするのは、このオカルト研究部の部室内では初めての事、普段と違ったノリに、何かしら思惑が有ってのことと思われるのも仕方ない。
　まぁ、別にその勘違いで此方が被害を受けることもないのでわざわざ訂正しようとは思わないのだが。
「ちわーっす」
　緩み始めた空気を更に緩めるかの如く、兵藤先輩の崩れた挨拶が部室内に響き渡る。
　後ろには木場先輩も居るようだ。
　だが、彼等が部室に入ると、先程までの緩みかけていた空気がまた硬くなり始めた。
　部員……というより、眷属が全員揃ったので、グレイフィアさんが今日この部室に訪れた理由と、悪魔側の面倒くさい話が始まるのだろう。
　そろそろ頃合いか、日影さんも助っ人を終えている頃だろうし。
　冷蔵庫に残りの菓子を詰め、帰り支度をする。
　同じく塔城さんがこっそり帰り支度を初めて、無言で姫島さんに止められているのを置き去りに、部室の出口に向かう。
「それでは、此方はこれで失礼させて頂きますね。あ、冷蔵庫の中はお好きにどうぞ」

「なんだ、帰っちゃうのか？」
　他の部員から挨拶を返されていた兵藤先輩に声をかけられた。
　少し残念そうなその言葉が正直、意外だ。
「ええ、良かったですね先輩、比率的にほぼハーレムですよ」
「木場が居るだろ」
「世間的には木場先輩もハーレムメンバーらしいですし」
「やめろ、マジやめろ」
「僕も、流石にそのケは無いんだけどなぁ」
　心底嫌そうな兵藤先輩と困り顔の木場先輩に、態とらしく意地悪く笑い返し、部室を出る。
　去り際、一度だけ振り返り、部室から退避し遅れた塔城さんと、他の部員に手を振る。
「それでは皆さん、また今度。塔城さんはまた明日」

　しかし、その明日が訪れる事は無かった。
　翌日、普段通り日課の軽い運動をこなした後に登校した学校に、塔城さんの姿は無かった。
　何時もの様に別れ、何時もの様に出会えていた筈の友は、今、姿を消してしまった。
　再会の約束が果たされる事は無かったのだ。
　いったい、何故こんな事に……。
　なったのかの説明を、その夜に塔城さんが電話で教えてくれた。
「フェニックスとの決闘ですか、これはまた、面倒極まり無さそうな話で」
　なんでも、グレモリー先輩の婚約者である貴族（フェニックスらしい）が気に食わないので結婚を断ろうとし、話し合いでは解決しないので、レーティングゲームなる最近流行りの戦争ゲームで決着を付ける事になったのだとか。
　しかし、実際問題相手はそのレーティングゲームの経験がある程度あり、眷属の力も含めて総合的に考えても、現状のグレモリー眷属では敵わないらしい。

で、今は学校を休んで山ごもりをして修行中。
学校に許可は取ってあるのだろうか、とも思ったが、そもそもうちの学校は悪魔に支配されているどころか悪魔関係者が経営しているんだったかと思い直す。
『極まり無さそうではなく……極まりない。面倒極まりない』
「そんなに」
改めて言い直す程とは。
塔城さんの口調から遠慮が消えつつある。
それとも、口調に気を使える程の体力も残らない程のハードなトレーニングだったのか。
声に疲労は見られないが、状況が状況だけに、精神的に疲労しているのかもしれない。
「というか、たった１０日、山に篭って修行しただけで勝てる程度の相手なんですか？」
山篭りで修行、などというと、一昔前の物語ならパワーアップイベントとして持て囃されていた時期もあった。
だが、考えて欲しい。
例えば部活、文化部でも、運動部でもいい。
それまで大会で活躍する事を考えるでもなくなんとなく活動していた連中が、大会１０日前になって猛練習を始めたとしよう。
さて、何ができるか。何が変わるか。
何かできるようにはなるだろう、何かが変わりもするだろう。
たかが１０日、されど１０日。
だが、それが結果に結びつく程のものに成り得るか？
絵はどうだ、音楽はどうだ、陸上はどうだ、剣道はどうだ。
まして、死にはせずとも、集団で相手と殺し合う戦争ごっこに、何がどれだけ反映される？
『勝てる。……と、思いますか、私達』
「此方に聞かれても困りますって。グレモリーさんの方はともかく、相手陣営がどんな連中なのか知らないんですから」
フェニックス自体は有名だ。

それこそ昔からあるファンタジー系の物語に限らず、ゲームや漫画、アニメ、多岐にわたって登場し、さほど詳しくない者ですらそれがどういう存在か知っている。

属性があるとすれば炎、そしてなにより不死だ。

だが不死というのも色々ある。

そもそも攻撃が効かずに死なないのか、攻撃は通るが絶対に死には至らないのか、死にはするが即座に復活するのか。

復活回数はどうだ、弾数制か根性制か、リスクはあるか、復活場所を選べるか、復活する際はどの時点から意識があり体を動かす事ができるか。

一般書籍によれば、生まれ変わる為に死ぬらしいので、死んでも蘇るというタイプなのだろうが、実際の悪魔がどうかはわからない。

……まぁ正直、相手のフェニックスが余程弱っちく、再生能力が実戦レベルで使うものにならないレベルでも無ければ、今のグレモリーさん達の勝ちはありえない。

オカ研の連中は才能こそあれ、それほど経験を積んでいない。

一部死に物狂いで鍛えた時期があったんじゃないかな、と思わせるのも居るが……、誤差の範囲だろう。

何せ、相手は自分の不死性を理解した上である程度レーティングゲームの経験があり、しかも現時点では総合力に劣る程に力のある眷属を率いている。

『……こういう時、気休めでも「君達ならやれるさ」みたいな事を言うものじゃないんですか』

「良い台詞です、感動的ですね。でも無意味でしょう。気休めでリラックスした程度で勝てる相手なら、そもそも修行しようなんて思いつきませんし」

『……』

黙りこんでしまった。

少し言い過ぎたかな、と思うと同時、ふと疑問に思う。

そもそも、勝てる勝てない以前に聞いておくべき事があった。

「勝ちたいんですか？」

『……ん』

言葉にもなっていない、よくよく耳が良くなければ聞こえないような単音の肯定。

理由はわからないし、別にどうでもいい。

グレモリー眷属というコミュニティに対して強い執着と愛着を持っているのは知っているし、彼女がグレモリーの血族（たぶんグレモリーさん本人ではない、普段のやり取りでわかる）に多大な恩義を感じているのもわかる。

もしかしたら、好きでもない相手と結婚する、という状況に憤りを感じるという割と乙女な理由かもしれない。

これらの理由のどれでもないかもしれないし、どれもが理由なのかもしれない。

だが、別にそんな事はどうでもいい、重要なことじゃない。

今言えるのは二つ。

今の肯定が嘘ではないこと。

彼女は勝ちたいと思い修行に励み、しかし気休めが必要になるほど手応えを感じられていないということ。

「そうですか……」

塔城さんの気配を探り、壁に貼り付けてあるカレンダーを確認する。

試合は１０日後、当然ながら間には学校が休みになる土曜日曜のに二連休が挟まっている。

修行が行われているらしい塔城さんの気配がある位置は、近くではないが国外という訳でもない。

自然も豊かな良い場所にあるようだ。修行や静養には持ってこいといったところか。

「塔城さん」

『……なんですか』

「今、どんな修行を？」

『……普段どおりのメニューを、重めにしたものを』

答えるまでに時間がかかった辺り、本人にも自覚はあるのだろう。

ステゴロで殴る蹴る投げる、周囲のオブジェクトを凶器として扱う、格闘技術に載せた腕力にものを言わせる塔城さんのバトルスタイルだと、たった10日で目に見える向上は見込めない。

無茶なトレーニングで筋肉を痛めつけて聖母の微笑で治癒して強化、という手も無いではないが、実際に体を動かすのに適した筋肉が付くかは賭けになるレベル。

今回の修行合宿、塔城さんに実りはない。

「勝ち筋を拾える様になる手があるって言ったら、どうします」

『……やってみたい。いえ、やりたい』

「そうですか、では、今週末にそちらにお伺いしますので」

『え、あ、ちょっと』

電話を切る。

即座にあちらから再び電話がかかって来ない辺り、塔城さんも困惑しているのだろう。

正直此方も、自分の事ながら少し戸惑っている。

「いやぁ、びっくりしたわ」

此方の心を代弁するかの様に平坦な声で告げたのは、ベッドの上でグルメ誌を読んでいた日影さん。

大きめのワイシャツでとりあえず肌の露出だけを隠し、しかし隠し切れない恵まれた曲線を惜しげも無く晒しているセクシーな姿とは裏腹に、その目元は何時もよりも鋭い。

これが日影さん渾身のジト目だ。向けられると少し体が縮こまる様な強さを感じる。

「なんや、こう、あれやろ。もう、なぁ」

「いや、落ち着いて日影さん、言いたいことはわかるけども」

一切意味を成さない、具体的な単語が含まれていない言葉を口にしながらゴロゴロとベッドの上で転がる日影さん。

同じベッドの端に座り、転がる日影さんの背に手を当てて動きを止める。

背を向けた日影さんが、そのままぐるりと首を可動域ギリギリまで使用して此方を向く。

ジト目では無くなっているが、機嫌は良くもない。
「気に入っとるんやな、あの子」
「そうでなきゃ、友達になんてなんないじゃん」
「せやろか」
「そうだよ」
実際、塔城さんが特別である、という訳ではない。
実のところを言えば、悪魔や堕天使といったファンタジーな話ができる相手は、多少なりとも居るのだ。
駒王学園には居ない、というだけで、電話やメール、各種ＳＮＳなどで連絡を取り合う事ができる相手だ。
たぶん、無理に親密度とも言える部分を数字化すれば、そっちの相手の方が高いだろうと思う。
塔城さんを分類するなら、紛れも無く只の友達に分けられる。
「友達が頑張ってて、こっちもそれを応援する暇があって、だから応援する。それだけの話」
「それだけなんか？」
疑いの言葉と共に身を起こし、体を寄せ、じっと此方の瞳を覗きこんできた。
「なんか、温泉もあるっぽいからね、ドサクサで使わせて貰おうかなって。……来てくれるよね」
応えるように寄せられた体を抱き寄せ、ベッドの上で壁に寄り掛かり、髪に唇で触れる。
「ん……しゃあないな、一緒に行ったるわ」
少しだけくすぐったがる様に身を捩り、小さく声を上げた後に此方の胸元に唇を当て、仕方無さそうに、やる気無さそうに頷いてくれた。
他と違い、彼女の感情は見えないし、読めない。
だけど、そんな彼女の小さな表情や動きの変化から内心を察する事ができるのはとても素敵なことだ。
塔城さんをダシにした形になるけど、この日影さんとの温泉旅行、しっかり楽しめるようにしよう。

十四話　昼前には命懸け

「え、あ、ちょっと、読手さん？」

名前を呼ぶよりも早く一方的に切られた携帯電話を手に、私は立ち尽くしていた。

愚痴っぽくなるだろうと考えたから場所を変え、他の皆に聞かれないようにしておいたのは幸いだったと考えていいのか悪いのか。

「……意外」

ふと思っていた事が口に出た。

悪魔関係の話が出来て、この時間に電話をしても怒らない、それでいて愚痴を少しは聞いてくれそうな相手となると、私の交友関係では限られてきます。

これで生徒会辺りともっと交流があれば他の選択肢も浮かんだのでしょうが、少なくとも今の私がそんな真似をできる相手は一人だけ。

ただ、それでも私と彼の仲は普通の友人程度の関係でしかなくて、そこに彼の性格を加味すれば、こんな事になるなんて想像もできません。

「……勝ち筋を拾えるようになる手、ですか」

勝てる方法を教えるとは言わなかった。

勝てるよう鍛えるとも言わなかった。

そもそも勝ち筋を拾える手というのも、教えてくれるのかどうなのかわからない。

あるならどうするかと聞かれ、私はやりたいと答えた。

話の流れから考えれば、今週末にこっちにやってきてそれを教えてくれる、という風に聞こえる。

「……」

携帯を持っていない方の手を、じっと見つめ、拳を作る。

細い腕、小さな手、一見頼りなく見えるこの手が、大地を、今はロフトの石材を踏みしめる脚が、我ながら肉付きが良くないと思うこの身体が、私の武器。

猫？としての素質の一部、悪魔の駒からの恩恵である頑強性と怪力。

私の手札はたったのこれだけ。

これを磨けばいい。私は、これだけで、いい。

そう思えたならどれだけいいか。

昼に、イッセー先輩と組手をした時の事を思い出す。

素人同然の大ぶりで隙の多い攻撃。

しかし、不自然なまでに硬い腕、顎を鋭く撃ちぬいても意識を飛ばさない頑強性。

単純な攻撃に宿る戦車に迫る腕力。

神器の力を未だ使いこなせていないにも関わらず、一番の新入りである筈の彼は強くなりつつある。

潜在能力の高さには部長も目を見張っていた。

彼は間違いなく強くなる。それこそ、私よりも遥かな高みに立つだろう。

そしてそれは、遠い未来の話ではない。

私はどうだ、私だけが持つものはなんだ。

私を強くするものは、私の中にあるか。

彼はそれを知っているのではないか。

私の知らない手段で、私の使えない何かを引き出そうとするのか。

そうしたなら、私は、どうなる？

力を手にし、狂った誰かの事を思い出す。

そして、その姿に教会で見た光景が重なる。

イカれている、狂っている、異常をきたしている。

だけど、言い訳のしようもない強さが確かにあった。

傍から見ているだけで恐怖を感じる狂気。

それを微塵も見せる事もなく、平和な日常を送る姿を目の当たりにした。

暴力の快楽に囚われている様で、それを飼いならしている。

少なくとも、私の目にはそう映った。

「大丈夫……」

彼は、違う。
力を制御できている。
だから、彼に教えてもらえるのなら、私は、強くなれる。
狂う事無く、堕ちること無く、強さを手に入れられる。
携帯を空に登る欠けた月に翳す。
「読手さん」
唇が、舌が、喉が、不思議と彼の名を刻んでいた。
私は待ち望んでいるのだろうか。
私は、何を待ち望んでいるのだろう。
手助けしてくれる友達か、敵を打ち倒す為の力か。

「そんな訳で、到着」
明くる日の休日、日影さんと共に早朝に家を出て人目を人力で避けつつ走り続け、約1時間。
車で行ったら何時間掛かったかわからないが、ニンジャ脚力を持ってすればこの程度の距離は近所のコンビニに行くのと変わらない。
もちろん嘘だ。家の近所には常人が歩いて数分の距離にコンビニがある。
だが通常存在する移動手段よりも余程速いのは変わりない。
「思ったより、近いなぁ」
「別荘は異界に存在する、とかやられなくて良かったよ」
木々に囲まれた山々が連なる、所謂田舎、というよりは、避暑地と言った方が雰囲気的には近いか。
未開の地という訳ではなく、それなりに人の多く居る登山道も存在している。
こんな場所で悪魔が修行？　と思うが、此方も朝の運動や日影さんとの修行の時には適当な森で結界を張って済ませているのだからとやかく言えない。
というよりも、こんな普通の山の中に別荘を構えて居てくれたのは嬉しい誤算だ。
ぱっと嗅いだだけでも、森の中からは結構な種類の食用の山菜やキ

ノコの香りが漂ってくる。
綺麗な空気の中で自然の中で、軽い運動を楽しみ、友人と交流し、日影さんと温泉に入り、帰りには山菜やキノコを取って帰ることができる。
塔城さんの不安につけ込んで計画したちょっとした温泉旅行のつもりが、中々に充実した休みになりそうではないか。
「そういえば、日影さんの元が居た世界だと、焔さんが竹やぶの中で竹を斬り刻む修行してたけど、あれってどんな意味があったんだろ」
「さぁ？　わしはああいう、ずばっと行く修行はやらんかったからのう」
「ここらの木でやったらわかるかな」
「私有林かどうか確認した方がええんと違う？」
他愛のない話をしつつも人目を避け、森の間を駆けながら、修業の場であるグレモリーさんの別荘に向かう。
そういえばグレモリーさんに許可は取っていないが……まぁ、最悪契約書でぱぱっと許可を取ってしまう事も不可能ではないし、修行を拒否されても温泉だけは使わせて貰おう。
途中途中で見える登山道をガン無視し、木々を飛び移りながら森を突っ切って、目的地らしき建物まで数分もかからず到着。
「……大丈夫やで、書主さん」
日影さんの声に、瞼を開く。
余りの豪華さ、周囲の風景との一種芸術的とも言える調和から、大型の建造物は最初に大写しの挿絵として見える場合が多い。
目の前にあるのは、まさに白亜の豪邸、といった威容の建物。
それをかき消すように文字と入れ替わるのを見終える事無く瞼を閉じ、気配を探る。
塔城さん、兵藤先輩の気配はここからやや離れた森の中、開けた場所でにあった。
その他四人の場所はまちまちで、この場ですぐに遭遇するという事もないだろうと推測できる。
気になる所があるとすれば、この山に脚を踏み入れた時から此方に

視線を向け続けていた、余り馴染みのない薄い気配か。
「お久しぶりです、グレイフィアさん」
「お久しぶりです、読手様。本日はようこそいらっしゃいました」
薄めだった気配が濃くなり、いつぞやのメイドさんがハッキリと現れた。
挨拶と共にぺこりと一礼する様は豪華な別荘の外観と相まって、恐らくは非常に絵になるのだろう。
先程まで常人では気付かないレベルで気配を消し、此方に声を掛けることもなく視線を送り続けていた所に目を瞑れば、何の変哲もないよく出来たメイドさんにしか思えない。
「もしかして、此方が来る事って、もうグレモリーさんに話通ってます？」
「いえ、不審な影がお嬢様の別荘へ向かっていると報告がありましたので、様子見に」
そんな程度の事で、恐らく魔王城とかそういう場所から、わざわざこんな場所まで転移してきたのか。
暇、という訳ではないだろうから、過保護なのか、それとも、それだけ此方の印象が悪く、危険人物として伝わっているのか。
ただ、伝わってくる意思は警戒ではなく、薄い疑惑と期待といった方向性を持っている。
この人は立場的に中立でなければならないはずだが、もしかしたら内心ではグレモリーさんの方に肩入れしているのかもしれない。
ただ、解せない部分もある。
「警戒とかしないんですね」
無論、このメイドさん単品で相対しているというのであれば解らない話ではない。
如何に此方の情報をある程度得ていたとしても、こうして相対した以上、あちらからは此方の事が何処にでも居る一般的な高校生男子にしか感じられない筈だ。
最強の魔王の眷属、女王であるこのメイドさんからすれば、危険視するに値しないと感じるだろう。

だが、未熟なグレモリーさんの修行場に入り込み何かしら行おうとしているとなれば話は変わってくる。
ハッキリ言って、荒事の場での言動や行動は、他の誰かに警戒されても仕方がないくらいにはどうかしているという自覚はあるのだ。
更に、此方側からの冷静な戦力分析を行えば、万が一此方が彼等をふと殺そうと思い立ったなら、彼等が抵抗に成功して生き残れる可能性というものはゼロに等しい。
それとも、報告されたであろう此方の所業及びそこから推測できる能力では害しきれない程にグレモリーさんの潜在能力は高かったりするのだろうか。
「お嬢様の眷属、そのご友人を無碍に扱うほど、グレモリー家は無粋ではありませんので」
「ほー」
「はー……、感服しました」
思わず溜息が出るほど控えめで、しかし堂々とした宣言。
言葉が真実であるか、込められた意思が真意であるかはともかくとして、そこまで堂々と言われてしまえば関心するしか無い。
これが悪魔の粋、というものなのか、それとも何かしらの思惑があるのかどうなのか。
とりあえず言えることは、ややこしい話にならなくて済んだのは良いことだということ。
「それでは、此方はささっと用事を済ませてしまいますので」
「はい。お嬢様達の事、宜しくお願いします」
優雅な一礼。
宜しくされる程深く手助けするつもりはないけれど、ここでそれを言うのも無粋だ。
とりあえず、罪悪感無く温泉を借りれる程度には手助けさせて貰おう。

「これは大前提として理解して貰いたいのですが、現時点でのグレモリーさんチームには勝ち筋がありません。何故か分かりますか」

グレモリーさんチームって、なんだかかわいい感じがします。
という感想は置いておいて。
「……実戦経験の不足、総合力での敗北、後は……」
「あの焼き鳥野郎か」
宣言通り、学校が休みの土曜日の午前中に現れた読手さんは、私とイッセー先輩の格闘訓練を中断させ、勝ち筋を得るための講義を始めた。
読手さんは切り株に座った私達の答えに一つ頷く。
「塔城さんの言った事もそうですが、その二つは今は気にしなくても構いません。大事なのはこのゲームの勝利条件です」
勝利条件……つまり、相手のキングであるライザー・フェニックスの撃破。
これは多分、私達の中の誰もが気にしつつ目を背けていた事だと思う。
ライザーのレーティングゲームでのこれまでの戦績は実質的にはほぼ無敗と言っていい。
つまりこれは、フェニックスの蘇生能力が働いている限り、何度殺されようとも撃破された事にはならないという事だ。
「此方が知る限りの貴方方の現状の戦力だと、そうですね、全員で取り囲んで集中攻撃を繰り返して、ようやく降参させられるかどうか、というレベルです」
「それは無理」
「現実的じゃないよな……」
前に電話で話してから、部長にライザーの蘇生能力がどれほどかを聞き出し、読手さんにメールで概要を送った結果出た結論がこれだというのだから困った。
イッセー先輩が言った現実的でないというのも、彼我の戦力差から来るもので、よくよく最善手を選び続けて動いたとしてライザーの元に辿り着くまで半分以上の仲間が撃破されてしまうという予測が簡単に立ててしまう。
「ですが、言ってしまえば致命的な問題になるのはその部分だけとも

言えます。総合力で負けているだとか、経験が足りてない、なんていうのはさして問題になりません」
「人数差とか、そもそも兵士が俺しか居ないのは……」
「ある程度は戦術で補えます。敵も人数差と未熟さに油断してくれているでしょうし。まぁそれでも劣勢である事は間違いないんですけどね」
「やっぱり、問題は火力……」
「そこで、お二人の出番となります」
ぱちん、と指を鳴らすと、読手さんの手の中に一本の剣が現れた。
禍々しい造形の片刃の黒い長剣。
明らかにまともな雰囲気ではないそれを手の中で弄ぶ読手さんに、イッセー先輩が手を上げて続きを制した。
「待ってくれよ。火力の話しなら、それこそ木場とか朱乃さんとかの方が向いてるじゃないか」
「お二人は、現状である程度以上の活躍が見込めますから。火力機動力文句なし、とまでは言いませんが、確実に障害である眷属を排除していける筈です。お二人はどうですか？」
「……私もイッセー先輩も、そこまでの火力はない」
そう、私は格闘全般である程度戦えるけれど、それだけに戦っている最中の遠距離から敵と纏めて排除される可能性がある。
そしてそれはイッセー先輩だって変わらない。
走力も腕力もあるけれど、敵の眷属を相手にしながら、範囲攻撃に気をつけて動きまわる、なんて器用な真似は出来ないだろう。
理想としては相手の眷属を可能な限り排除してから複数でライザーを囲みたいけれど、ライザーの元に辿り着ける人数は限られる筈だ。
そして、真っ先に堕ちる可能性があるのは、厄介な回復役であるアーシアさん、機動力に劣る私とイッセー先輩。
「そうです。だからこそ、お二人に火力を持たせたい。というか、現状のメンバーではそうするしか道がない。何故か」
「……部長を真っ先に矢面に立たせる訳にはいかず、確実に眷属を潰

して、生き残れる可能性があるのが祐斗先輩と副部長だけ。私達は……」

「倒しきれるか解らない眷属と相打ちになるか、眷属を無視して火力不足なりにライザーのもとに向かうか、か」

「グレモリー先輩の作戦次第ですがね。……そこで最終確認になりますが」

くるり、と、手の中の剣を逆手にし地面に突き刺す。

「お二人は、どうしてもこの戦いに勝ちたいですか？　その為なら、生死に関わるような試練も乗り越えられますか？」

空気が変わる。

たぶん、これが今回の最後の一線。

ここでやらない、と言えば、これまでの説明が何だったのか、と思えるほどあっさりと引き返すだろう。

説明を始める前に対価として温泉使わせて貰いますね、などと言っていたが、やらないならやらないであっさりと諦めて帰る筈。

何故か。それは、この人にとって、今回の戦いが心底どうでもいいから。

ここに来て手を貸してくれているのだって、休日に温泉旅行に行くついでに、友達の宿題を見てあげる程度の話でしかないのだろう。

強制されている訳ではなく、選択権は、あくまでも私達にある。

「……俺は、やる。貴族がどうとか、血筋がどうとかはわかんないけど、でも、部長は、本当に嫌がってた。部長の夢を叶えるのが眷属の、俺の役目だ」

イッセー先輩は、僅かな躊躇いの後にそう言って立ち上がった。

部長の夢、というのはよく知らないが、彼は部長のお気に入りだから、何かしらそういう事情を説明されているのだろう。

真剣な、決意をかためた表情からは何時もの、食事時ですら人の服の下を妄想する下卑た姿は想像もできない。

「よくぞ決断しました。貴方の主も鼻が高いでしょう」

そう言ってイッセー先輩に向けてにこりと笑うと、周囲の景色が一変した。

幾つかの山をまるごと覆う暗い色の半透明の膜、所々に『忍』の文字に似た紋章がある。
　コレが読手さんの作る結界なのか。
「空間の位相をズラしました。半ばアストラルサイドに移動したこの場所なら、まあ、多少大暴れしても問題ないでしょうし、横槍も入りません。では」
　詠唱。
　朗々と紡がれる聞いたことのない、何処の言葉ともしれない呪文。
　発音は明確に、しかし高速に行われた詠唱は一つの呪を完成させた。
「石霊呪（ヴ・レイワー）」
　大地が揺れ、山が砕ける。
　山を構成してた土が、岩が浮かび上がり、轟音と共にぶつかり合い一つの形を作り上げる。
　土塊の丘と化した山の上に立つ。
　巨木を幾重にも束ね捻じり上げた様な太い脚。
　車程にもなる巨大で無骨な爪。
　見上げれば、いや、見上げなければその全身像を視界に収めることすら難しい巨大なそれが、叫ぶ。
「――――――――――――――!!!!!!」
　声にならない声
　絶叫、怒号、咆哮。
　どんな言葉でも表現しきれない音の濁流に、思わず耳を塞ぐ。
　一目見た印象は『怪獣』、だけど、その姿を、翼を持つそれを、正確に表現するのなら――
「ド、ドラゴン!?」
「いえ、土塊と岩で作った身体に龍の魂を乗せて作った、何処ででも普通に作られている何の変哲もないゴーレムですよ」
「普通とはいったい……うごごご」
　見上げながら辛うじて突っ込むも、声に張りがないのが自分でもわ

かる。
　なんだろう、もしかして世の中の常識、普通という概念は私達が修行をしている数日の間にこんなに変わってしまったとでも言いたいのか。
「もしかして……」
　恐る恐る、と言った風情で、イッセー先輩が何の変哲もないゴーレム（山を潰して作ったドラゴン）を指さす。
「はい、あれと戦ってて下さい。あれを倒した時、兵藤先輩は新たな力に目覚めていることでしょう……たぶん」
「たぶんってなんだぁーっ！　死ぬ！　絶対死ぬか――」
　見えたのは壁、感じたのは、髪を乱れさせる程の強風。
　今さっきまですぐ隣で、真剣な表情を吹き飛ばして抗議していたイッセー先輩は消え、そこには土塊でできた壁が高速でスライドしていた。
　数秒の時を持って通り過ぎたそれは、たぶん、ゴーレムの脚。
　慌てて通り過ぎた脚を目で追うと、空には『四枚の翼』を生やして空を跳ぶイッセー先輩の姿が。
「つ、翼？　そっか悪魔の……なんだこれ！」
「ドラゴンの翼ですよー！」
「あ、え、あ、そっか、ドラゴンの翼なら、別におかしくないか」
　腰から悪魔の翼を、背からは赤い龍の翼を生やしたイッセー先輩。
　ドラゴンの翼を何の疑問もなく受け入れ、四枚の翼を器用に動かして高く舞い上がる。
　だけど、それでどうにかなる程の戦力差ではない。
　ゴーレムもまた背に翼を背負っている。ここまで作って、飛べないという事もないだろう。
「こんなの、どうやって戦えば……」
　空から見下ろし、改めて敵の巨大さを理解したのか、イッセー先輩が怯む。
　そんなイッセー先輩に向けて、読手さんは両手でメガホンを作り、叫んだ。

「この修業を乗り越えたら、それはもうレーティングゲームで大活躍できちゃうんだろうなー！　ライザーとかも倒して、グレモリー先輩から、すっごいご褒美が貰えるんだろうなー！　なんでも言うこと聞いてもらえるかもしれないなー！」
「読手さん……いくらイッセー先輩でもそれは」
「今なんでもって言った!?」
「そりゃもう、悪魔の貴族ともなれば、活躍した部下に相応のご褒美を用意するでしょうしー！」
「ご褒美！」
そのゾクゾク美みたいな言い方やめません？
と、突っ込む気力もなく単純単細胞さに閉口している私の目の前で、イッセー先輩は芸もなくドラゴン（もうドラゴンでいいと思う）に突っ込んでいく。
……まぁ、流石に死にそうになったら読手さんも止めるだろう。戻ればアーシアさんも居ますし。
「さて、塔城さん」
「私は無理ですよあんなの」
振り向いて私の名を呼ぶ読手さんにすかさず断りを入れる。
怪我をするしない、死ぬ死なない以前に悪魔にも限界はある。
今の私にあれの相手は無理だ。
よく考えてみれば部長の相手だってそんなに悪い相手じゃないんじゃないかと思えてきた。
そんなに無理をして力を手に入れてどうするというのか。
「いやいや、塔城さんはああいう方法じゃパワーアップできませんので」
苦笑しながら一歩後ろに下がり、地面に突き刺した黒い片刃の長剣を手で指し示す。
「塔城さんの場合は、至って簡単。この魔剣を持つ。それだけで、貴女は新たな力を手に入れる事ができます」
「……私、長物はちょっと」
「使う必要なんてありませんよ。一度これを持ってしまえば、後は手

放してしまっても問題ありません」
……怪しい。
彼が友人に、というか、真っ当に生きている相手に対して害を与える事がない、というのは知っている。
だけど、それは本人からの自己申告であって、本当に害がないかは別問題だ。
彼が無害だと考えていても、それがその実酷い害のあるものである可能性は十分にある。
そもそも手段が簡単過ぎるのも怪しい。
「副作用とか」
「ありません」
「強化後の反動が」
「来るわけないでしょう」
「都合が良すぎませんか」
「まぁ、裏ワザ的なものですからね。でも、それも塔城さんのポテンシャルあっての事ですよ」
ポテンシャル。
そう、猫?でもある私は、仙術を使うための様々な素質を持っている。
そして読手さんは、恐らくそれを知った上で言っているのだ。
「私、仙術は……」
「仙術?　……ああ、そっちは門外漢なので違いますよ。力に飲まれて暴走する様なものではない、理性で持って御するタイプの力になりますかね。詳細は、持ってみればわかります」
仙術ではない、即ち、妖怪としての力ではない。
理性を持って御する力。
余りにも都合がいい、正しく望んでいた通りの力だ。
裏がないと言ったのは本当だろう。
危険性がないというのも嘘ではないと思う。
彼は嘘を好む性格ではないのだ。
だから、手を出しても、問題はない。

一歩、また一歩と、地面に突き刺された黒い魔剣へと踏み出す。
私に道を譲る様にその場を退いた読手さんは嫌に楽しげだ。
「さぁ、塔城さん。この魔剣『ドゥールゴーファ』を手にして、新たなる魔導への道に踏み出すのです」
……とりあえず、『新たな力』を手に入れたら、それで読手さんを殴ろう。
一発、いや、二三発。
さっきドラゴンの蹴りが通りすぎた時から感じていた股間の湿り気とぬくもり。
それを丁寧に無視しながら、私は件の魔剣へと手を伸ばした。

十五話　真夜中には踊り出し

日向日影はこの春駒王学園に入学したばかりの何の変哲もない女子校生だ。
心身ともに健康で、経歴にもおかしなところはない。
あえて人と違うところを上げるとすれば、生まれと記憶。
彼女には両親が居ない。
これは捨てられたとか、遺伝子だけを採取して勝手に試験管の中で培養されたという話でもなく、単純に両親に当たる人間が存在しない。
だが、一応の親に当たる人物からも、親の親であり、その内に義理の親にもなるだろう人達からもそのことは気にしなくてもいい、と言われている。
彼女には記憶がある。
今現在の彼女の性格の支柱ともなっている、オリジナル、モデル、そういうものに当たる人物の記憶がある。
生まれた時からの記憶がわりとはっきり残っているのは、そのモデルになった人間の理解力が働いていたからだろう。
彼女はまっさらな状態でこの世に生を受けながら、既に訓練を終え、デビューすれは一流の忍になり得るほどのカラテとメンタリティを備えている。
彼女は一般的な女子校生が持つべきものを持たず、持っていないものを持っている。
表面上の特異性はその程度のものだ。
そして、その程度のズレを持った人間はそこらに幾らでも居る。
能力的な面の事は考える必要はない。
普遍的な女子高生も、それ以外の一般人も、持ちえる能力全てを開示して生きている訳ではない。
つまり、上級悪魔を指一本動かす事無く無傷で無力化できる程の能力を持っていたとしても、彼女はあくまでも極一般的な女子高生と変わりない存在なのだ。

「わしは、面倒が嫌いや。まぁ、面倒が好きな奴なんぞ、そうそうおらんけどな」

そう、多少、平均値よりも面倒を嫌う傾向にあったとしても、彼女のそれは異常ではない。

好き好んで無駄な苦労をしたがる人間が居るだろうか。

まして女子高生だ、遊びたい盛りの思春期（彼女がそこまで活動的かは別として）ともなれば、やりたくないことに労力を割くなどもっての外だ。

……そういった意味で言えば、彼女のメンタリティは多少平均値から外れているとも言える。

活動的でなく、休日になれば親しい者の近くでゆったりと時を過ごす様は、番いと共に微睡む大型の猫科動物のようであり、木陰で身を休める大蛇のようでもある。

先の『面倒が嫌い』という言葉もそうだ。

彼女は確かに面倒が嫌いだが、人から押し付けられた面倒を、自分に余裕がある場合に限り、消極的に付き合って解決を試みたりもする。

自分にさして興味のないもやし料理の話を延々と聞き続け、ある程度相槌を打ち続けることもする。

彼女は面倒が嫌いだ。

だが、それを覆してしまうほどに『お人好し』でもある。

律儀で、付き合いがいい。

口下手ながら、可能な限りの気遣いすらしてみせる。

この世界に生まれ落ちた彼女の前に『悪忍』の道はなく、一般人としての道が開けている事は、恐らく誰にとっても幸運なのではないか。

例えばそう、彼女の前で、意味もなく破滅の魔力を漲らせて待機させている上級悪魔や、その眷属、雷を纏う『女王』や、魔剣を携える『騎士』は、その幸運があってこそ無事で居られるのだ。

「そうね、私もそこは同意するわ。面倒は避けたい。互いにそう思っているのなら、そこは素直に通してくれてもとは思わない？」

軽口を叩き、薄く笑みすら浮かべるリアスも、その事実を薄々実感し始めている。

彼女が強い事は知っていた。

上級悪魔でもある自分とその眷属を、不意打ちとはいえ纏めて一瞬の内に無力化できるだけの力を持っている。

だからこそ、彼女が自分達の身を気遣ってすら居る事にも気付けた。

彼女が、日影が本気で自分達を厭い排除しようと思っているのなら、ここで会話に依る時間稼ぎなどという真似をする事もなく、会話すらできない程に、それでいて後遺症も怪我も残らない程度に傷めつけて黙らせる事も容易いだろう。

それをしないという事は、本格的に此方に害を与えるつもりがないという事だ。

だが、だからといって看過できることとできない事がある。

「そら無理や」

「私は、私の下僕の安全を保証し、管理する責任があるわ」

勿論言葉通りの意味ではない。

彼女は純粋に情を持って下僕、眷属と信頼関係を結んでいる。

リアス・グレモリーにとって眷属とは、下僕であると同時に掛け替えの無い家族でもある。

それはグレモリーという一族特有の愛の深さでもあり、彼女自身の持つ善性でもあった。

愛と情を軸にする悪魔である彼女は計算高く、それでいて衝動的、いや、直感的でもある。

「管理云々言うなら、後で確認すればええやろ。安全なら、こっちで保証したる」

「その保証が信じるに値するとでも？」

成る程面白い冗談だ。

表向き、表面上これまで起こった事件を辿っていけば、もしかしたら信用に値するのかもしれない。

一人で暴走して教会に突っ込んでいたかもしれない下僕を誘導し

安全を確保し、教会から、堕天使から向く矛先を悪魔から自分に傾ける為に積極的にエクソシストや堕天使をみずからの手で葬った。
現場の証言をそのまま耳にせず、起きた事象の端々を省略した簡易なあらすじだけなら、彼女は、彼女のツレである彼は信用できるかもしれない。
彼、読手書主は危険だ。
彼が普段の生活で常人と同じく、一般人と同じく平和に平静に正常に日々を過ごしている事はリアスも理解している。
その素行がむしろ平均よりやや良い方に傾いている事も、生徒会のメンバーや小猫から伝え聞いてもいた。
部室で多少の交流を経た上で、リアス自身も彼に対して警戒心を抱き続けるのは難しいと結論付けていた。
彼は戦闘の場に現れない限り、彼の定義する殺しても構わない相手として認識されない限り、何処にでも居る平凡な一般人と変わらない危険性しか持たない。
彼は平和に、日常に溶け込む事ができている。
「せめて彼の常識と、暫く分の正気を保証して貰いたいわね」
だが、それは正気でも平凡でもない。
狂気を飼いならしている訳ではない。
偶々、狂った造形物の一面だけを見て、誰も彼もが正常であると見做しているだけに過ぎない。
一つ歯車の歯がズレれば、一瞬にして何もかもを台無しにしかねないそれが、しかし、誰が見ても平凡な学生にしかみえない。
何よりも恐ろしい、警戒『できない』という脅威、それが読手書主の持つ危険性だ。
その危険性を、リアスは理屈ではなく本能で悟っていた。
目の届く場所なら良いだろう。
学校の、一般人の中に紛れている時も良いだろう。
どちらもある程度保証がある。
恐らくは理性的に、常識的に、表面的な部分だけでも社会に馴染もうと努力する必要性がある場面ならいい。

部室に予告なく小猫と共に遊びに来るのだって、問題はない。
だが、今は駄目だ。
学友としての小猫ではなく、常識の外に居る悪魔として存在している小猫とは、駄目だ。
読手書主の認識する常識の外にある、日常、平穏の外にある存在に対するアプローチ方法が如何なるものであるか解らない以上、手を出させる訳にはいかない。
「別に、どっちが足りん訳でもないけどな。ようは使い分けや」
「今は使っていると？」
「まぁ、程々には。それに、あれや」
日影が振り返る。
振り返った先にあるのは、何の変哲もない緑溢れる山々。
だが、魔法や魔術に精通した者であれば、そこに広大な結界が展開されているのがわかるだろう。
まして悪魔ともなれば、近場にこんな大規模な結界が展開されて気付くなという方が難しい。
強度や術式の複雑さはともかく、わかる相手に隠すつもりはまるで無いのだろう。
「この忍び結界は書主さんのアレンジが強い。わしに突っかかれても困る」
「……小猫ちゃんとイッセー君は、本当に無事なんだろうね」
構えていた魔剣を下ろし、祐斗が問う。
実際、ここで日影に当たっても意味が無い。
結界の中で起こっている事――――書主による小猫とイッセーへの特訓が無事に終わるかどうか、祈るしかない。
「書主さんは、そんな無体をする人やないよ。それに……」
「それに……何？」
朱乃の目の前で、結界がゆっくりと崩壊を始める。
風化するように解けていく結界の向こうに一瞬だけ、崩れた山々と胴を貫かれて崩折れる巨大なドラゴンの姿が見え、残りの結界が弾けて消えた。

後に残るのは、何事もなかったかの様にそびえ立つ山々と、三つの人影。

「これが……」

龍翼を羽撃かせゆっくりと降下しながら、腕に展開した神器と装甲を呆然と見つめるイッセー。

「私の、私だけの……」

膨大な魔力の残滓を身に纏い、中空に向けていた掌を拳に変え胸元に引き戻し、手の中の何かあるかの様に抱きしめる小猫。

「そう、貴方達の、新たなる力です」

瞳を閉じたまま、ドヤ顔で二人のやや後方に立つ書主。

小猫が足早に書主に駆け寄り、極自然な動作で鳩尾に拳を叩き込むのを眺めながら、何でもないことの様に呟いた。

「きっと助けなんぞなくても乗り越えられる、まずは仲間のあんたらがそう信じてやらな」

そんな訳で、約束通り、グレモリーチームに勝機を与える事に成功し、見事温泉の仕様権を獲得した訳だが。

「ちょっとだけポンポンペイン……」

鳩尾をさすると、普段とは僅かに感触が違う部分があるのがわかる。

何一つ防御手段を使わずに受ける悪魔の拳というのは中々に痛い。

悪魔の拳でなく女性の拳だから痛い、という可能性も無いではないが。

「見事に青くなってるね」

隣から聞こえる木場先輩の声には僅かなエコーがかかり、しかしそれでいて苦笑しているだろう事は容易に想像できる。

昼の修行を終え、グレモリー眷属も纏めて一旦別荘に戻って来た為、こうして温泉を共にしているのだ。

いるのだが、この先輩は何故に態々こんな広い温泉で、しかも無駄に洗い場の数も揃っている場所で、すぐ隣に座っているのか。

ホモでない事は神器を見た時に流し読みして知っているから別に

不安は無いのだが、少し距離感がおかしいと思う。
「まぁ、こればっかりは仕方ありませんよ」
普段なら、というか、理由のない暴力なら一切ダメージを受ける理由も無いのだが、今回ばかりはダメージを受けざるを得ない。
塔城さんは、例え悪魔であったとしても、元が猫であったとしても、今は高校に通う思春期の少女なのだ。
強くなるための過程で必要な事であれば仕方がないにしても、不慮の事故であれは流石に可哀想だと思うし、此方も反省せざるを得ない。
……これが、最初にゴーレムのキックとすれ違った時に出た、誤魔化しようのあるものだけであれば過剰だと憤るところなのだが。
「不可抗力、の一言で済ますには、ええ、ちょっと……ええ、これ言葉にしない方がいいですよね」
なんというか、そう、彼女に与えた勝ち筋が問題だった。
現状出し得る彼女の最大火力。
山1つ分の土砂と岩を使って作り上げた即席のドラゴン型ゴーレムの胴体に容易く風穴を開ける、この世界でも中々に凶悪な部類に入るだろう火力を誇る切り札。
それに一番驚いたのは、誰あろう塔城さんその人だった。
自らの放った一撃の余りにも過剰な威力を、彼女は想像しきれていなかったのだろう。
更に言えば、切り札が放つ轟音が収まった後の静寂の中だったから、此方には発射音まで聞こえてきた。
言い訳になるが、様々な要因が重なった上での不幸だったとは思う。
練習前に事前に水分を取り過ぎていなかったかだろうか、とか。
直前に少し、ちょろりと出ていた為に、何時もよりも、こう、ゲート（可能な限り優しめの比喩表現）の閉じ方が緩くなっていたのではないか、とか。
ただ一つ言えるとすれば、湿り気で済んだ被害が、明確な決壊へ悪化し、靴下にまで被害を及ぼす結果に至ってしまった直接的な原因

は、やはり此方にあったのだろうという事だ。
「そうだね……本人が居ない所での行いも、信頼に繋がるって言うし……」
恐らく遠い目をしているだろう、しみじみと同意を返す木場先輩。
木場先輩は気付いた側だが、気付かなかったふりをしてくれた紳士だ。
尊敬できる先輩というのはこういう人の事を言うのかもしれない。
というか、気付いていないのは兵藤先輩だけだろう。
初めて味わう力の解放に舞い上がっていた部分もあるし、位置的に塔城さんの下半身に目が行き難い場所に居た。
何より、日影さん、グレモリー先輩、姫島先輩がさり気なく塔城さんを隠す陣形になったのが大きい。
とりあえず、今日この日の塔城さんの尊厳は守られたのだ。
尊厳は命と同じく尊ばなければならない。
それは、人であれ悪魔であれ変わることのない真実の一つであると此方は思う。
「此方を殴ってチャラ、とは、行かないんでしょうね……」
ジャイロ回転の効いた実に理想的なフォームの一撃を甘んじて受けはしたが、塔城さんはそっぽを向いてそのままオカ研女性陣と共に離れていってしまった。
それは当然の事だと思う。
そもそも仮に此方に原因が無かったとして、学校の友人にそういう場面を見られて平気で居られる女子というのは希少だ。
しかも、原因は此方が教えた切り札なのだから始末に負えない。
下手をすれば絶交ものではないだろうか。
まさか休日に温泉旅行を計画しただけなのに、友達を失う可能性が出てくるとはお釈迦様でもわかるまい。
「ふふっ」
身体を洗いながら悩んでいると、同じく自分の身体を洗っていた木場先輩が笑い出した。
「何がおかしいんですか埋まりたいんですか」

「ごめんごめん。いやね、君でもそういう事を悩んだりするんだなと思って」
「そりゃ、悩みますよ。友達作りは得意じゃないんですから、大事にしたいじゃないですか」
正直、クラスの中の交友関係は今でもそれほど広くない。
中でも悪魔関係の話もできて趣味も合う塔城さんは個人的なクラス内好感度ランキングで1～3を争うほどの友人。
何せあの危険な要素も面倒な要素も無く気さくで話しやすい、クラス内好感度ランキングでトップ5の中をうろちょろしている山ノ内君と、此方の中では熾烈なトップ争いを行うレベルでは友人なのだ。
彼女との交友が絶たれると、こう、嫌だ。
しかも原因が不慮の事故、浸水とか余計に嫌だ。
「嫌われた訳じゃないと思うよ、うん。根拠はないけどね。君よりは長い付き合いだから、信用してくれていい」
「そうですかねぇ……そうだといいんですけど」
何処か面白げに気休めを言う木場先輩に適当に返事をし、身体と頭に付いた泡を流し、温泉に浸かる。
どういう効能があるのかは解らないが、身体に染み入る暖かさだ。
「ところで読手君、イッセー君は元に戻してあげないの？」
女湯と男湯を隔てるように存在する壁に張り付く形で凍りついている兵藤先輩の方を向いているからか、声は少し遠回りをして反響を強めている。
神器の力やドラゴンに変じた身体能力を駆使しても、此方の渾身の覇王氷河烈（ダイナスト・ブレス）からは逃れられるものではない。
見て確認するつもりは毛頭ないが、兵藤先輩の姿勢は、温泉に入ると同時に女湯を覗こうと突撃した体勢のまま、白く霜が降りている以外は一切変わりないだろう。
覇王の魔力による冷気は、温泉の温かい蒸気だけで溶けるほど優しくはないのだ。
「その内熔けますよ。そういうアレンジにしてありますから」
本来なら氷の霧と化してから消滅させる工程が最後に来る、文字通

り必殺の威力を誇る魔法だ。
　此方の目の前で日影さんの裸を覗こうとして、生きているだけありがたいと思って貰わなければ。

夜。
夜の修行も終えてベッドに横になり、目を瞑る。
自慢ではないけれど、寝付きはそれなりに良い方だ。
しかも、昼の間の修行は中断してしまったけれど、夜の修行はフルでやり遂げた。
いや、むしろ私とイッセー先輩の強化分を考慮して連携や攻防のバリエーションも増えて、夜の訓練は昨日までよりも増えたくらいで、昼の修行を中断した分は十分に補填されている。
身体には温泉では抜ききれない疲労が蓄積し、筋肉に溜まった乳酸も脳に対して休め休めと言っている気がする。
これで眠れなければ嘘だろう、そう思いつつ、意識は嫌にハッキリとして、眠りに向かう気配がない。
ベッドから身体を起こし、パジャマの上から部屋のクローゼットに入っていたフリースのガウン（サイズもぴったりでデザインもいい、流石だと思う）を軽く羽織り、テラスに出る。
辺りはすっかり闇に包まれ、最低限の照明がうっすらと庭や玄関を照らしているのを除けば、光源は空に散らばる星の光くらいしか見えない。
いや、むしろそれを狙って照明を少なくしているのだろう。
見上げた夜空は、何時も住んでいる駒王町ではここまで見えないだろうという満天の星空。
星明かりの下、ふらふらと歩き、手摺に乗り、転がるように身体を回しテラスから飛び降り、足音を立てないように着地。
振り返ると、時間が時間だからか、外から見た別荘はほとんどの部屋が明かりを落としている。
くるくると身体を回しながら、別荘から遠ざかるように歩き出す。
眠気はない、いや、眠らないといけないのはわかっているのだけれ

ど。
浮ついている、と、自覚はあるけれど、自覚があっても自制できないのだから仕方がない。
胸の中がふわふわしている。
いや、ふわふわというのが正確かはわからない、でも、普段には無い感覚に、意識が冴えてしまっているのだ。
くるくる、くるくると、まわる景色を見ながら歩く。
自分の歩く脚が浮ついた心をリズムにして刻んでいるのがわかる。
我ながら浮かれている、そういう冷静な思考が頭の隅から中央に移動できない程、私の心はぷかぷかと浮かぶ雲の如く浮かれていた。
「～～♪」
小さな声で、言葉にもならない鳴き声の様な声で、歌が喉から溢れてくる。
声を出せば、夜の森を行く獣に見つかるけれど、そんなものは気にもならない。
ほら、熊も野犬も此方に近付いてこない。
野生の獣は狙っていいものか悪いものか、そういう感覚が敏感にできているのだから、私を狙わないのは当然の事なのだ。
森の中、ガウンに草や土がつかない様に歩き、昼間の訓練で使っていた開けた場所に辿り着く。
思い出すのは、巨大な龍、それと殴り合うイッセー先輩、そして――

掌を見る。
手に残っている訳でもない感触を思い出す。
脳に刻まれた言葉を、術理を思い出す。
掌を握り、胸に抱く。
紛れも無い、私の力。
「ご機嫌ですね」
声に顔を上げる。
「読手さん」
そこには私と同じく寝間着姿の読手さん。

この間言っていた天体観測でもしていたのだろうか、でもそうなると、何処から見られていたのか。

ご機嫌ですね、と、そう言うからには、そう見える場面を見ていたのだろう。

いや、見ていた、というのは正確じゃない。

空を見ていて、それでも私に気付いたというなら、歌っていたのが聞こえたのかもしれない。

……とんだ失態だ。

ノリノリでハミングしているのを聞かれたら、何時もならそう考えるところだけれど。

「読手さん」

「はい」

「読手さん、読手さん」

「はいはい、なんですか？」

名を繰り返し呼んでみる。

律儀に返事を返す読手さんがおかしくて、私はついつい笑い出してしまった。

読手さんが対応に困っている姿も何処かおかしい。

「本当に、ご機嫌ですねぇ。……昼はもしかして殴られ損でしたか」

「あ、いえ、……ええ、ちょっと、昼間は動転してて。すみません」

呆れるように嘆息した読手さんに軽く頭を下げる。

思えば照れと混乱からおもいっきり殴り抜いてしまった。

読手さんが少しアレだから良かったものの、普通の人間ならお腹から真っ二つになっていてもおかしくない威力だった気がする。

今更こんな事を言うのもあれなので言わないけれど、何でこの人あれ食らって生きているんだろう。

「いいですよ、別に。気にしてないならそれで」

「……気にしてます」

そう、私は気にしている。

勿論、読み手さんが言っていることとは別の事だ。

「あー、それは、そうですよね、気にしますよね、普通」

「だから、反省してるなら……、そうですね……ちょっと手を出して下さい」
「それで気が済むなら、何本でも出しますとも」
差し出された右手。思ったよりも大きな手。
それを両手で掴み、一歩踏み出し、掌を胸に当てさせる。
思えば意図的にこの人の手に触れるのは初めてかもしれない。
いや、男の人相手にこうすること自体、今まで考えたことも無かった。
別にやましい理由も嫌らしい意味もないけれど。
こうして読手さんが呆気にとられている顔を見ることができたのは、なんだか面白い。
「……高鳴ってるの、わかりますよね」
読手さんの掌を押し当てた部分の感覚がより強く感じられる。
心をふわふわとさせる鼓動、血が熱く燃えているような熱。
私の中に秘められていた力は、ちっぽけな自尊心を守り、新たな可能性に胸を高鳴らせてくれた。
目覚める事ができたのは、この人のおかげだ。
「……この感覚を教えてくれて、ありがとう」
頬が熱い、顔が溶けるように笑みの形になっているのがわかる。
きっと、寝て起きて、冷静になったらこんな言葉は言えないだろうと思うから。
今の私だから言える言葉を、今の私が消える前に伝えておこう。

カーテンから差し込む少しだけ不快な光を浴びながら、ベッドの上で毛布にくるまれた私の意識は覚醒する。
朝日と共に目覚め、たぶん正気を取り戻したであろう私は、両手で顔面と頭を抱え、
「う、あ」
冷静に昨夜の事を思い出すと共に、顔面が火を噴くほどに熱を帯びるのを確認した。
ベッドから文字通り跳ね起き、がつんがつんと備え付けられ

た高級そうで頑丈そうな机に額を繰り返し叩きつける。
「私は、私は何を……！」
なんですか、なんなんですか、なんなんですか昨晩の私！
ごろごろと毛足の長い絨毯の上を転がる。
次に会う時、どんな顔で挨拶しろというのだろうか。
「にゃあああああああもおおおおおおおおお!!!!」
悪魔である私が何に願えばいいかはわからないが、願わくば、悪魔の願いを聞く誰かに願いたい。
どうか、読手さん達が私と出会う前に、早朝の内に家に帰っていてくれますように……！

十六話　深夜、黄昏よりも昏く、血の流れよりも紅く

「見に行かんでええの？」

宿題を片付け、明日の準備をしていると、デフォルメされた大蛇型のクッションに埋もれながら日影さんがそんな事を言い出した。

初見を済ませたグレモリーチームと、絶滅危惧種を除けば十把一絡げの雑兵しか居ないフェニックスチームの試合。

瞼を開く必要性を欠片も感じないチンケな見世物、見に行く、というのも語弊があるが、言いたいことはわかる。

今日は塔城さん、というか、グレモリー先輩が婚約解消の為にレーティングゲームとかいう戦争遊戯を行う日なのだ。

実のところ此方自身は今日の今日まで忘れていたのだが、夕食前にメイドさんが招待状を持ってきてくれたお陰で思い出せた。

「日影さん、少し常識的に考えよう。明日は平日で授業があるよね？」

対して、レーティングゲームは今日の夜十一時開始で終了時間は最長で明け方まで伸びるらしい。

はっきり言って付き合っていたら明日の授業に差し支えてしまう。

というか、一応温泉を借りるついでに力を貸しはしたけれど、試合の結果自体はグレモリー先輩が勝とうが負けようがどうでもいいので勝手にやっていればいいと思う。

あと、招待状に召喚用の魔法陣が見えないように加工して仕込んであるのも気に食わない。

夜更かしも深夜徘徊も早起きも早朝散歩も大好きだけれど、此方の意志によらない外出はすこぶる嫌いなのだ。

偏屈と言われても仕方がない、しかし、誰だってそんなものだろう。

どうせ、この家の敷地内で他所製の転移陣なんて発動しないから渡される分にはいいけど。

予告なくこういう小技を仕込む小狡さはマイナス評価に値する。

「なんや、あの娘がどう戦うか、気になっとるもんかと思った」

「それはあの後確認したの。まぁまぁ使いこなせてるみたいだから、ベストを尽くせば勝てるんじゃない？」

なんでーなんでーと泣き喚かれるとどれくらいやれるようになったかが分かり難いのでそこら辺の思考パターンを弄りはしたけれど、戦闘時の機転はあれくらい利けば十分戦えるだろう。

少なくとも今現在、塗り潰し無しのニンジャスタイルで戦う此方相手に、グレモリー眷属の中で一番長生きできるのは彼女だ。

きっかけ無しでの著しい成長が見込めない三人はともかく、兵藤先輩と比較しても長生きできるんだから結構なものだと思う。

「後は塔城さんの頑張り次第、真剣さ次第だよ。ほら、日影さんも風呂入る準備してー」

「めんどいのぉ……脱がしてくれん？」

「せめて風呂場まで行ってからね」

此方に向けて両手を広げた日影さんににべもなくそう返しながら時計を見る。

開演まであと二時間。

……こうして時間を気にしてしまう辺り、気にならない、というのは嘘なのかもしれない。

招待状の形をした文字列をゴミ箱から拾い上げ、一文書き足す。

【五秒後に煙も出さずに燃え上がり一瞬で灰になる】

そのままゴミ箱へ戻す。

似たような処理を度々行うので元から陶器製にしてある為危険性はない。

ぼしゅ、という点火と鎮火の音を聞きながら、此方は携帯を手に取った。

午後十一時五十分、レーティングゲームの開始を前に、部室には部長も眷属仲間も全員が集まっていた。

アーシアさんの気合の入ったシスター服を除けば、私達のチームは全員が学生服。

違いがあるとすれば、私の指ぬきグローブに、祐斗先輩の手甲に脛当程度のもの。

多少の付属品はあれど違和感はない。

何時もの格好、何時ものメンツで、何時も通りに戦うだけ。
読んでいた小説をテーブルの上に置き、指ぬきグローブをしっかりと付け直す。
ギチギチと音を立てて絞られる頑丈な生地に満足し、深呼吸。
吸って、吐く。
イッセー先輩が部長の家族関係の話を聞いて驚いているのをＢＧＭに、心と身体を整える。
胸の高鳴りは不安か期待か。
不安は何処から来る？
負けたら部長が望まない結婚をさせられるから？
いや違う。満足に力を出し切れずに撃破されたら、そう考えると不安になる。
それは考えるだけ無駄、とにかく、撃破されないように頑張る。
期待は何処から来る？
勝てば部長が自由になるから？
それもいいけれど、とにかく、全力を出し切りたい。
見つめなおして見つけたこれが、嘘偽り無い私の心。
ふと、ポケットの中に入れていた携帯を取り出す。
開くのは一通のメール。
ゲーム開始直前でもない、それこそあちらの時間的都合だけで出された受信時刻。
タイトルすら無く、本文はたったの三行。
『ネイチュアは多弁です』
『奥ゆかしさを忘れずに行きましょう』
『ノートは取ってありますので、後で複写ドーゾ』
余りにも色気のないメールを眺め、頬が少し緩む。
「大丈夫」
携帯を机の上に置き、グレイフィアさんに促されるまま魔法陣へ。
大丈夫、そう、大丈夫だ。
気取らず、気負わず、出せるものを出して戦おう。
それしか無い、とは言えない程には、出せる手があるのだから。

転移した先は、さっきまで寛いでいたオカルト研究部の部室の中。
だけど同じ場所じゃない。
見た目、材質がほぼ同じステージを用意したんだろう。
次代を担う純血悪魔の今後を決める戦いだけあって手が込んでいる。
皮肉というか、揶揄している部分もあるのかもしれない。
未だ成人していない未熟な学生のレーティングゲームであるという意味と、定まっていない未来に方向性を与える場所であるという意味。
ここをステージとして設定した人が部長に贔屓しているというのでなければ、とんだ皮肉屋だと思う。
ミーティングはスムーズに進む。
ルールがルールなだけあってやることは非常にシンプルだ。
少し変則的な形になるけれど、自陣に罠を設置して、敵陣への道を作り出す。
そして、出来る限り早急に敵の兵士を叩き潰す。
その、早急に兵士を叩き潰す為の策を告げる部長の顔は笑顔だった。
「巣穴の中に居るアリを殲滅しようと思った時、貴方ならどうする？誘き出す？」
余談だけど、部長の笑顔は男子受けがいいらしい。
普段なら流石学園のお姉様（笑）だ。でも少し判定を待って欲しい。
本来笑顔とは攻撃的な意味を持つもの。
さっきの部長の笑顔は正しくそれだ。
部長が私と副部長に下した命令の内容を聞いて、それでもお姉様と呼べる根性のある人はどれくらい居るのだろうか。
「恐ろしい……」
「将来がかかっているんだから、仕方がないわ」
副部長が久しぶりに大人だ。
体育館の入り口、旧校舎側の外側に並び立つ。

体育館には既にイッセー先輩が突入して、敵の眷属を引き付けている。

本来なら、私もそっちに行くはずだった。

いや、そっちに行くしか無かっただろう、戦車の私にできるのは、前に出て戦う事だけ、本来なら。

だけど、今の私なら……。

「今だ！」

中央口から、背と両腕に赤い装甲を纏ったイッセー先輩が飛び出す。

時間ピッタリ、とはいかない、けれど、十分に余裕はあった。

呪文を詠唱しきるだけの時間は。

今日のために、一夜漬けもいいところだけど早口言葉の練習だってしたのだ。

間に合わない筈もない。

後ろに立っていた副部長が天に向かって手を翳し、それに応えるように巨大な雷槌が体育館に突き刺さる。

ここだ、この瞬間、このタイミングでこそ意味がある！

混沌（カオス・ワーズ）のことばによる詠唱を終え、低い姿勢を保ったまま地面に指先を添え、紡がれた式を呪と共に解き放つ。

「地撃衝雷（ダグ・ハウト）！」

身体から何かが抜けていく感触と共に地面がまるで地震でも起きたかのように大きく揺れた。

それはまるで、雷槌の威力が余りにも巨大過ぎたが故に起きた地響きのようにも感じられただろう。

私の呪文すら雷の起こす轟音でかき消された筈だ。

雷槌で砕かれた体育館の残骸から奇妙な程に土煙が漂っている事に気付ける人がどれだけ居る？

あの雷槌が見た目ほどの威力を備えていない見掛け倒しである事を見抜ける相手は？

戦車である私が護衛の様に女王である副部長の近くに控えている事に不信感を抱ける相手は？

『ライザー・フェニックス様の「兵士」三名、「戦車」一名、戦闘不能！』

此方の先制、一度に四名の撃破という快挙が誰の手によるものか。

兵士で敵を引きつけてから、戦車に守られた女王、雷の巫女の高火力で一網打尽にしたのだと。

そう考えられない相手が居るだろうか。

実は、私達の女王はそれほど消耗していない、と、わかる相手は居るだろうか。

この大破壊がその実、知る人ぞ知る女王ではなく、取るに足らないと思っていた戦車が引き起こしたものであるとわかる者は居るだろうか。

（わからないでしょう）

たった１０日、されど１０日だ。

注目していなかった、副部長とイッセー先輩以外は脅威とも見なしていなかった相手が、この変化に気付けるか。

土煙に紛れ、新たな魔法の詠唱を行う。

何もかもが思い通りに行くとは思わない。

されど１０日、しかしたった１０日。

それどころか、この力は手に入れてからまだ五日も経っていない。

付け焼き刃もいいところで、今現在も効率的な運用が出来ているかは怪しい。

早口言葉で詠唱時間を短縮するのだって言うほど簡単じゃない。

今回のゲームで鍵となる幾つかの呪文だけを集中的に練習してきたからこそ実になっているようなもの。

新しい力を得たと言っても、結局はそんなものだ。

だけど、それでいい。

勝利への道は薄氷を踏むが如き危うい道筋の上にある。

この前までは無かった勝利への道、強度に文句を付けるのは贅沢というものだ。

渡りきって見せれば、それが薄氷でも舗装された道でも変わらない。

『みんな、聞こえる？　最高の一撃が決まったわ。でも、ここからがキモよ。小猫、手筈通りにね』

返答を期待はされていない。返答してしまえば部長の言う『キモ』は台無しになってしまう。

予想されるタイミングは近い。

早口でない詠唱、それを更にゆっくりと遅延し、身体に力を入れて待ち構える。

それでいて、遠目には敵騎撃破を喜んで気が緩んでいる様な素振りで……。

『小猫、今よ』

通信機から聞こえる部長の声、同時に、身体を焼く熱と衝撃。

呻き声は上げない、叫ぶなんてもっての外。

替わりに、声を落として小さく、呪文を完成させた。

「地精道（ベフィス・ブリング）」

「小猫ちゃん！」

目の前で爆発と共に消えた小猫ちゃんに、俺は演技ではなく半ば以上本気で叫ぶ。

俺の目は確かに小猫ちゃんの口が呪文を唱えていたのを捉えていた。

だけど同じくらい鮮明に、爆発に飲まれていく姿も見ていた。

知り合いの、仲間の、しかも幼気な美少女がそんな目になって平気で居られる程俺は冷血には出来ていない。

それを隠す必要はないと部長は言っていた、その方がリアリティが出ると。

でもそれだけじゃ済まない。

叫ぶと同時に、今だ不自然に土煙に覆われている地面を蹴りつけ、小猫ちゃんの居た場所に空いた少し小さめの穴を崩す。

角度を考えて開けたからか、その穴は俺の蹴りで崩れた土で呆気無くふさがり、まるで爆発で地面が抉られたようにしか見えない。

これで、第一段階は成功。

小猫ちゃんも一先ずは大丈夫な筈だ。
「撃破（テイク）……とは、いかなかったみたいね、しぶといこと」
声に見上げれば、そこには翼を広げて浮遊しているフードを被った魔導師風の格好の女性。
ライザーの下僕、部長の予測通り、そこに居たのは最強の下僕である『女王』だった。
「獲物を狩るときは、獲物が何かを成し遂げた瞬間が一番狙いやすいの。それに、私達は多少『犠牲（サクリファイス）』しても痛くも痒くもないわ。わかるでしょ？」
数で劣る俺達は、一人減るだけでも大打撃。
それも、俺達では最終的にライザーを倒せないと考えているなら、こんな大胆な戦法も有り得る。
互いの下僕が全滅しても、王同士の決戦になった時点で勝負は決しているのだから。
気に食わない、実に気に食わない話だ。
部長ならそんな策は使わない。仲間を只の駒として扱うような真似は、絶対に。
「てめぇっ！　叩き落としてやる！」
背中の翼に力を込め、拳を握りしめて空に叫ぶ。
作戦だ。細かい台詞なんかは指定されていなかったけど、ここで怒って叫ぶところも纏めて作戦。
だけど俺は本気だ。
制止の声が無ければ今すぐにでもあの女を殴り落とす（そしてひん剥く）為に飛び出せる。
できればそうしたい。
別にやましい気持ちしか無い訳じゃないから安心して欲しい。
あくまで怒りに震えるからこそ一発殴って撃破して（でも消える前にとりあえず服は剥きたい）やりたいという思いを抑えきれないのだ。
「ふふふ、貴方がリアス様のお気に入りの『兵士』ね。厄介そうだし、貴方もここで爆発してみる？」

魔導師の腕がこちらに向けられる。
撃たれるという理性と、だからどうしたという本能を、俺を庇うように間に割って入った朱乃さんが遮った。
「貴女のお相手は私がしますわ。ライザー・フェニックスの『女王』、『爆弾王妃（ボム・クイーン）』のお力、見せて頂きましょう」
ちら、と向けられた視線に頷き、翼を収めて走り出す。
迷わない、振り向かない。
小猫ちゃんは最初の役割を果たし、今も新たに動き始めている。
俺だけが遅れる訳にはいかない。
「朱乃さん、頼みます！」
振り返らず、叫び、後方から聞こえて来る雷音と爆音を背に受け、そのまま木場の待つ運動場へ駆ける。
さぁ、中盤戦、露払いの時間だ。

リアス・グレモリーの眷属、『兵士（ポーン）』の兵藤一誠は、高い潜在能力を備えていた。
下級から中級程度の堕天使が放つ光の槍を容易く砕く防御力、一般的な『騎士（ナイト）』に勝るとも劣らない機動力。
元から戦士としての才能があったのか、悪魔への転生で異常な変化を遂げたのか、それとも覚醒した神器の影響で変質しているのか。
理由がわからないなりに、そのままに運用してきたリアス・グレモリーを責める事は出来ないだろう。
イッセーの能力は確かに平均的な兵士を上回るものであったが、そのどれもが有り得なくもない程度に収まっていた。
『ライザー・フェニックスさまの「戦車」一名、リタイア』
兵士の駒を八つ全て使わなければ転生できなかった、神器は龍の籠手の亜種だった。
そう認識した時点で、彼女の中で兵藤一誠という元人間のポテンシャルが極めて高い、という結論に至ったのは仕方がないだろう。
『ライザー・フェニックスさまの「兵士」二名、「騎士」二名、「僧侶」一名、リタイア』

だから、鍛えた。
剣術や格闘術の才能まで備わっているかは未知数だったが、恵まれた身体能力を活かす為に、対人戦の経験を積ませ、身体の動かし方を覚えさせた。
『リアス・グレモリーさまの「女王」一名、リタイア』
有り余る潜在能力を引き出させる為に、過酷な運動を課して、その肉体をより強靭なものに作り変えた。
実際、イッセーはリアスの求めに応えるようにひたむきに鍛え、その身体能力を異常な程に発達させた。
『リアス・グレモリーさまの「騎士」一名、リタイア』
それらが間違っていたとは思わない。
イッセーは確かに強くなった。
剣を振るう相手の間合いを理解し、自らの肉体を凶器として戦う相手の立ち回りを覚えた。
とても戦い方を覚えた、と言えるようなレベルではないが、戦いの場で動けない、という事もない程度には鍛え上げられた筈だ。
だが、それは最良では無かったのだろう。
「しつ、こいっ！」
声が近づいてきている。ライザーの女王の声。
爆弾王妃の名を持つ、上流階級では名の知れた悪魔は今、たった一人の下級悪魔を相手に苦戦していた。
しかし、それを責めることを誰ができようか。
見よ、追いすがる下級悪魔、リアス・グレモリー唯一の兵士である兵藤一誠の、その姿を。
「逃げんな！　朱乃さんと小猫ちゃんの仇だ！　あとついでに木場のも！」
言動こそ常のエロ小僧であるイッセーのままだが、今の彼を見て、人間であった頃の兵藤一誠を思い浮かべることができる者はどれほど居るだろうか。
まず、籠手とは言えない程に肥大化、拡大し肩口までを覆う神器の装甲。

龍の如く変容した頭部、獲物を噛み砕かんと打ち鳴らす歯と顎こそ神器の装甲と同じものだが、明らかに生身の部分までもが変形している。

更に、神器の生み出した装甲と同じ色を持つ、真紅の翼。

悪魔の翼ではない、鱗を持った龍の翼に、まるで機械的なパーツを無理矢理生き物の身体で再現しようとでもしたかの様なブースター。

極めつけは、尻尾。

制服を突き破りイッセーの尾てい骨から生えているそれは、恐らく制服の下を通り背中の龍翼と繋がっているのだろう。

太く長く、赤く滑るような色味の鱗に、鎧の如き神器の装甲が斑に噛み合い覆われている。

明らかな異形、いやさ、龍（ドラゴン）。

この試合で初めて見せる、イッセーの本気の姿。

これを見て焦ること無く冷静に対処できるような相手であれば、万が一の勝ち目は更に薄くなるだろう。

「いい加減に――落ちなさい！」

女王がイッセーに腕を向け、爆発が巻き起こる。

下級悪魔なら一撃、少なくともリアスのこれまでの眷属でこの爆発を無防備に受けてリタイアしない眷属は居ない。

それほどの威力。通り名というのはそれほどまでに極まった者にこそ付けられる。

だがどうだ、イッセーはどうだ。

装甲はところどころひび割れ凹んでいる、鱗が剥がれ血が滴り落ちている。

しかし止まらない。

飛翔するのに必要な部分が傷付いていないから？

いや、そんな説明が必要だろうか。

巻き起こった爆炎を突き破り現れるその姿。

火を噴く山に住まう古の龍が如き姿を見て何故焦らずに居られようか。

「洋服崩壊（ドレス・ブレイク）！」

装甲に覆われた腕がかするように振りぬかれ、込められた魔力は正しい形で結実する。
粉々に砕け散る女王の衣服。
洋服破壊の魔術は呆気無く布と金属で作られた衣服を奪い去った。
次いで叩き込まれる拳が美しい裸体を、肉の創りだす曲線の下にある骨を粉々に打ち砕く。
『ライザー・フェニックスさまの「女王」一名、リタイア』
光の粒子となって消えて行くライザーの女王。
成し遂げたのは鼻の下を伸ばしながら口元はにやりと笑うという器用な表情を仮面に隠したイッセー。
表情が見えないからか、その異形も相まって、まるで凶悪な魔獣にも見える。
強い、絶対に強い！
――惜しむらくは、あの力がリアスの特訓の成果ではないところか。
共に積み重ねた努力もまた無意味ではなく、確実に身にはなっただろうが、このイッセーの力を引き出したのは自分ではない。
リアスの心にあるのは嫉妬か負い目か、だが、今は、この状況こそが全てだ。
満身創痍のリアスが不敵に笑う。
「……これで、形勢逆転ね」
三対一。
正確に生き残りをカウントすれば、後方でやる気なく兄の勝利を信じて動かずに居るライザーの妹レイヴェル、ダメージを負ったまま隠れたリアスの戦車である小猫で一人づつ増える。
だが今、この場で対峙しているのはこの四人。
滅びの力を扱うリアス、ライザーの女王を真っ向から打ち倒す膂力を持つイッセー、そんな二人を回復できるアーシア。
布陣としては申し分ない。
だが、ライザーの表情からは未だ余裕が伺える。
「まぁ、数の上ではそうなるんだろうな。そこのドラゴンの小僧の活

躍も想像以上だった。それで、君はどうやってこの俺を倒すつもりなんだ？」

「こうするのよ！」

頬を掻きながら問うライザーの頭を、リアスの放った魔力弾が消し飛ばす。

跡形も残らずに消えた頭部の位置を、所在なさげにライザーの指先がすり抜ける。

シュールな光景、だが、消失したライザーの頭部の辺りに炎が吹き出し、徐々に新たな頭部を形成し始めた。

フェニックス、不死鳥特有の再生能力、これこそがライザーの自信の表れ。

数の上では不利だろう。

だが、だからどうしたというのか。

如何に数が多かろうが、自分を殺しきれる力を持たなければ意味が無い。

元より勝ちの決まっていた勝負に何かしらの感慨を抱くこともない。

「リアス、投了（リザイン）するんだ。君も、君の眷属も良く戦った。実戦経験のある俺の眷属達を相手に、俺以外の全員を撃破（テイク）してみせた。それで十分じゃないか。君と君の眷属の名誉は守られた、これは誇っていい結果だよ」

諭すように、優しさすら含んだ声で語りかけるライザー。

間違いなく、これはライザーの本心からの言葉だった。

いや、この時ライザーは、以前には見下していたグレモリー眷属の事を認めてすらいた。

少数精鋭を目指す今の冥界の方針に則した、模範となるような眷属構成。

雷の巫女だけではない、ドラゴンの小僧も含め、自分の自慢の眷属を凌駕する逸材。

フェニックス家とグレモリー家の婚儀が成った暁には、正式なバックアップを行ってもいいとすら考えていた。

だからこそ、自分を相手に無駄な努力を重ね、敗北を無様な形にする事を嫌ったのだ。

「随分な高評価だけど、それじゃあまだ足りないわ」

頭部を完全に再生させたライザーの目の前で、僧侶（ビショップ）であるアーシアがリアスとイッセーの傷を癒していた。

無意味な足掻きだと、ライザーは溜息を吐く。

哀れみと悲しみの滲んだ吐息。

闘志の消えていない、燃えるような輝きを秘めた瞳。

今までのレーティングゲームで戦ってきた相手も、似たような目をしていた。

だからこそ、リアスの美しい瞳が、打ち負かしてきた相手と同じく絶望に濁る事を避けたかったのだ。

「ならリアス、君はこれ以上何が欲しい。これ以上、このゲームで何を手に入れられると？」

勝てると思っているのか、と、言外に言い放つライザー。

自信の再生能力に絶対の自信を持つが故の傲慢とも取れる発言に、答えたのはリアスでは無かった。

「……未来だ。この戦いで、部長は未来を手に入れる」

イッセー。

人の形から大きく逸脱し、その声も何処かエコーが掛かっているように聞こえる。

だが、その言葉に込められた意思はどうだ。

獣のものではない。

恐らく、悪魔のものでもない。

「未来ならあるだろう。輝かしい、純血悪魔の繁栄という未来が」

「違う。悪魔の世界に必要な未来でも、それは部長の望む未来じゃない。部長が欲しい未来じゃない。部長の夢は、そこには無い。だから」

どこまでも青臭い、小さな、少年が少女を思う心。

あくまでも、兵藤一誠の意思。

龍の本能でもない、ちっぽけな一つの意志。

「だから、応えろ！　赤龍帝の籠手（ブースステッド・ギア）アアアッッ!!!」

叫びに込められた思いこそが、神の創りだした神器に力を与える。

『Ｄｒａｇｏｎ　ｂｏｏｓｔｅｒ!!』

『ｗｅｌｓｈ　ｄｒａｇｏｎ　ｅｘｔｒａ　ｌｉｍｉｔｅｄ　ｂｏｏｓｔｅｒ!!!!!』

イッセーの異形化した肉体を、神器から溢れ出す赤光が包み込む。

夜天すら赤く染める光。

籠手の宝玉に現れた紋章は、正しく伝説に残る赤龍帝の証。

全身を包み込む赤光は次第に輝く装甲と化し、イッセーの肉体を更に変化させた。

光が晴れた後に現れた姿。

人間と龍を無理矢理に組み合わせた異形の姿は何処にもない。

そこに居るのは、正しく『半龍』と言うべき存在だ。

ツギハギで作られた人と龍のモザイクではない、緩やかな融合の果てに生まれたとしか思えない、完全なる統合。

人型と龍型の見事な調和が完成したその姿は、それが神器の真の力なのだと見る者に一瞬で理解を与える程の衝撃を持つ。

「バカな、赤龍帝の籠手（ブースステッド・ギア）、しかも、これは」

「そうだ！　これが、俺の、禁手（バランスブレイク）！　部長の、夢を、掴み取る為の、力だ！」

この試合が始まって初めて怯むライザーに、区切るように叫ぶイッセー。

全身にみなぎる力を押さえ込みながらの叫び。

抑えずに溢れさせたなら、イッセーは意識を保ちつつも人の言語を発する事すら出来なかっただろう。

制御、という意味では不完全にも程がある、ただ強いだけの禁手、いやさ、禁手のなりそこない。

だがそれを知る由もないライザーからしてみれば余りにも予期せぬ脅威。

『ＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔ』

『ＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓ
ｔ』
『ＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓ
ｔ』
『ＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓ
ｔ』

腕部宝玉から響く、間を置かない連続２４回もの倍加を知らせる電子音声。

身体が張り裂けるかと思える程に漲る力を、シンプルな突撃の形に整え、

「いく、ぜぇ！」

『ｉｇｎｉｔｉｏｎ!!』

アーシアから身を離し、翼を羽撃かせる。

これまで飾りも同然だった推進器を模した生体器官は神器の装甲に覆われ、宿主の王の髪にも似た赤い光を放ちながら主を空に押し出す。

過剰出力から来るＧが装甲を軋ませる。

軋みを、痛みを物ともしない突撃、避けきれずにライザーは半身を抉られた。

爪でも牙でもない、翼の先端に発生したソニックブーム。

高速の当てないぶちかましを受け質量を軽減されたライザーが、しかし自らに背を向けるイッセーを半分に成った顔で不敵に笑う。

制御できていない。動きには無駄が多く隙だらけもいいところだ。

そして、勘違いしてはいけない。これはあくまでもルールのあるゲームなのだ。

馬鹿正直に伝説の龍の相手をする必要はない。

尾を振り空中で無理矢理に姿勢を制御したイッセーを見ながら、やはり自分の勝利は揺るがないと確信した。

再生の炎を纏いながら、視線はイッセーからリアスへと向かう。

魔力弾を作り出しているリアスに、その背後に庇われる回復役のビショップの少女。

背後に居るビショップの少女を狙う必要すらない。
スマートではないが、あの二人を纏めて撃破してしまえば、このゲームは終わる。
予定外の出来事も多く在ったが、結局終わりは想定の範囲内。
伝説の龍の力とて、自分を倒しきる事は出来ないのだ。

――とでも、思っているんだろう。
ライザーの余裕の表情は、この距離からでもよく見える。
それもよく分かる。そう考えて当たり前だから、そう考えるのは仕方がない。
屋上を遠くに望む、ゲームの範囲ギリギリ、校庭からすら離れた、旧校舎の更に奥の茂みに、そんな事を考えながら潜む少女、塔城小猫が居た。
伝説の再来、神滅具『赤龍帝の籠手』の覚醒を目の当たりにしながら、しかし視線は標的へ。
位置を確認し、気配を覚え捉え、目を閉じる。
精神を集中し、体内の魔力を練り上げ、朗々と詠唱を始めた。
詠唱と共に待機状態に入った一部の魔力が大気に渦を作り出し、ふわり、ふわりと、小猫のスカートと上着の裾を閃かせ、輝く魔力光が逆立つ白い髪と肌を照らす。
《黄昏よりも昏きもの、血の流れより紅きもの》
目の前に伝説の赤龍帝が居てもそれを倒す必要はなく、部長を倒すのなら何時でも出来た。
自分はスマートにケチの付けられない勝ち方をして、見事に部長を手に入れる予定だったが、こうなっては仕方がない、と。
勝てる事を前提として考えている。
目の前の脅威こそが全てだと、禁手に至った神滅具という、とっておきの切り札を目の前にして、それを回避できるのだから、やはり自分の勝利は揺るがないのだと。
《時の流れに埋もれし、偉大なる汝の名において、我ここに闇に誓わん》

そうかもしれない。
イッセー先輩がライザーを殺しきる前に部長は撃破されてしまうかもしれない。
ことレーティングゲームのルールにおいて、ライザーは、フェニックスは無敵なのかもしれない。
今、ここで私がこうしている事も無駄なのかもしれない。
《我等が前に立ち塞がりし、全ての愚かなるものに》
だけど、それは止める理由にならない。
今ではハッキリと理解できる、この呪文の詠唱の様に。
優雅を気取っても何処かぱりっとしない部長が王様で、真っ当な集い方もしていない、碌でもない出生ばかりだろう私達が眷属。
こんなどうしようもない私達の目の前に立ち塞がるというのなら！
《我と汝が力もて、等しく滅びを与えん事を！》
グレモリー眷属は、立ちはだかる敵を、絶対に叩き潰す！
「竜破斬（ドラグ・スレイブ）！」

文字通り、血の流れよりも紅い赤光が小猫の両手の間から解き放たれた。
猫？上がりの悪魔が一度に放つことの出来る、人間とは比べ物にならない最大魔力を込められたその一撃は、以外な程に大人しく、余波すら無く一直線に標的であるライザーへと伸びていく。
意識の外から行われた完全な不意打ち。
迫る魔力の強大さから来る威圧感によって察知した時にはもう遅い。
「退避よ！」
タイミングを測る事が出来たのは、耳に付けた通信機越しに小猫の詠唱を聞いていたリアスとアーシア。
一目散に脇目もふらずに翼をはためかせてその場から離れる二人。
リアスが一騎打ちを受け、見晴らしの良い屋上で戦っていた事。
真正面から戦い、リアスではライザーを倒せないという事実を改め

てライザーに確認させる事。
助太刀に来たイッセーがここで初めて神器を明かし度肝を抜き注目を集める事。
そして、そのイッセーの神器が制御しきれておらず、リアスを撃破するには十分過ぎる程の隙があるとわからせる事。
それらは全て、ライザーを遠距離から狙い撃ちする為の策だ。
伝説の神滅具すら囮にした、最大級の切り札を打ち込むための策。
理想としては眷属が全員この場に揃えばより強固に足止めできただろうが……十分すぎた。
ライザーは確かに反応しきれなかった。
だが、反応できたとしても回避を試みたかは五分五分だろう。
フェニックスは不死身だ。
そしてその不死性を破るほどの攻撃がある事を、若く、本当の戦場を知らないライザーは知識として理解していても、心から意識することができない。
攻撃に対して、咄嗟に『避ける』という意識を持つことができないのだ。
振り返ったライザーに突き刺さる赤光。
それは魔力のガイドラインだ。
タイムラグ無く送り込まれる魔力が生み出すのは、アストラルサイドに潜む赤眼の魔王シャブラニグドゥ（ルビー アイ）の力を借りて放たれる大魔術。
ただの一撃で山を吹き飛ばし、小さな都市すら壊滅させる程の威力を誇る。
が、それはこの呪文の本質ではない。
この魔術に限らず、混沌の言語を用いて唱えられる黒魔術はすべからくアストラルサイドに潜むものたちの力を借りて発動する。
その為、実際に物質的に現れる効果は全て余波に過ぎない。
都市一つ、山一つを消し飛ばす爆発が余波でしかない攻撃の本質。
それはアストラルサイド――精神に対する絶対的な破壊を意味する。
尋常な精神の持ち主であれば一瞬にして精神が崩壊する程の精神

攻撃こそが、この極大呪法の正体。
そう、精神を砕く魔法。
肉体的な不死しか持たないフェニックスに対して、余りにも都合のいい魔法だ。
与えられる精神への破壊はどれほどの結果を齎すか。
繰り返し殺されるだけで心を病む程度の精神であれば、結果は見るまでもないだろう。
叫び声すら残すこと無く、ライザーの精神は破壊され、
『ライザー・フェニックスさま、リタイア』
勝利が確定した。
――故に、ここから先に起こることは全て余分だ。
「ぶ、部長さん！　爆発、光がこっちにぃ！」
迫る爆発にアーシアが涙目で叫ぶ。
全速力で逃げるリアスとアーシアをあざ笑う様に、そもそも変身によって通信機を失ったイッセーを意にも介さず、精神攻撃魔法の『余波』が広がる。
繰り返し説明しよう。
竜破斬（ドラグ・スレイブ）とは、異世界の魔王の力を借りて発動する魔術である。
その威力たるや戦略兵器に匹敵し、一撃は街も山も消し飛ばす。
この術を使える術師が二、三人居れば周辺諸国に対して大きな顔ができる、国交に影響するレベルの規模の破壊魔法。
――ではこのフィールドは、少し大きめの高校と変わらない敷地面積を持つこのフィールドは、ちょっとした街よりも大きかったりするのだろうか？
「ちょっと小猫！　これ何処まで逃げれば――」
「いやぁーっ！　イッセーさ――」
勿論、そんな事は有り得ない。
街一つを破壊する規模の爆発に飲み込まれリアスの叫びが、アーシアの悲鳴が途絶える。
被害はそれだけに留まらない、留まるはずもない。
ライザーを、リアスとアーシアを、イッセーを飲み込んだ爆発は当

然の様に新校舎を、旧校舎を粉砕し、基礎を破壊し、校庭で放置されて不貞腐れていたレイヴェル・フェニックスを飲み込み――――

瓦礫と土砂の山が生まれ、その端で佇むのは、ライザーの女王の爆発によって服を焦がし、しかし回復魔法によって怪我一つ無い白い少女がただ一人。

「つまりこの試合……私の勝ち、ですね。ぶい」

グレモリー眷属、戦車、塔城小猫。

無人の荒野に立ち一人Ｖサインを作る彼女の顔は、薄いながらも誰が見てもそれとわかる、たまらぬドヤ顔であった。

十七話　綺麗な朧月夜に

何時もと変わらない朝。
少し前までの何時もと同じ様に、塔城さんは現れた。
いつもの様に軽く朝の挨拶を交わし、いつもの様に何となく並んで歩く。
いつもの様に、とは言っているが、何だかんだと一緒に登校するのは十日くらいぶりなだけあって、少し新鮮味があるような気がする。
「……勿論、反省はしてます。でも正確な威力を調べずに作戦に組み込んだのは部長なんだから、あそこまで怒る必要はないと思うんですよ」
「正確な威力を実践して見せてあげないのもどうかとは思いますがね」
世間話の内容は、先日に行われたらしい、非公式レーティングゲームの内容だ。
結果だけを見れば大金星。
元からある程度強かったらしい木場先輩や姫島先輩だけでなく、回復役のアーシアさん、修行の成果を見事に発揮した兵藤先輩に加え、塔城さんも大活躍。
これが公式のレーティングゲームであれば、他の貴族たちからスカウトが殺到してもおかしくないレベルの試合だった、というのは塔城さんの言葉だ。
だが世の中というのは良くも悪くも結果だけを見ていればいい、という訳ではない。
いや、この場合、見られたのは勝利とは別の部分の結果とも言えるのだから、ある意味ではやはり結果しか見られていないのか。
塔城さんは確かに、不死性を持つフェニックスを撃破するという結果を残した。
しかし、その代償としてレーティングゲーム用に用意したステージは完全に崩壊。
挙句の果てに、敵どころか攻撃範囲から逃げようとした味方すら容

赦なく巻き込んでしまったらしい。
　時間差での撃破であった為にゲームの結果は勝利で終わったが、実戦であれば許されざる戦法だ。
「……でも、結果的に撃破数はトップなのに」
「内訳は？」
　此方の問に、ええと、とつぶやき空を見上げ、指折り数える塔城さん。
「ライザー、ライザー妹、ライザーの兵士三に戦車一、うちの部長、アーシアさん、イッセー先輩。ほら単騎で九人ですよ九人」
　心なしか嬉しそうなのはいいとして、撃破しちゃいけない対象が含まれてるんですがそれは。
　まぁ、又聞きした話だとレーティングゲームでは味方を犠牲にして勝負に勝つ戦法は普通に使われているらしいので、そこまでおかしくはないのかもしれない。
　そもそも、元の使用者からして結構な割合で標的以外を巻き込んで撃ってたし、ある意味教えずとも辿り着いた由緒正しい使用方法に則っただけとも言える。
　別に塔城さんが味方に誤射しても此方は欠片も困らないし、そういう事にしておこう。
　面倒だし。
「撃墜数は置いておくとして、祝勝会とかはやらないんですか？　殆ど間を置かずに戻ってきましたけど」
「どうなんでしょう。部長からはやるともやらないとも……」
「そりゃ寂しい話で。部長さん的にはめでたい話なんでしょうに」
「……まぁ、親の決めた婚約を好き嫌いだけで解消してパーティーというのも……」
「そういえばそんな話でしたか、今回」
　なんというか、この前は廃教会をステージにスプラをトゥーンにする感じの運動会だったからはっきり覚えているのだが、今回は印象が薄い。
　気付いたら終わってた、というか……。

別荘の温泉借りて、オカ研メンバーが昼間の特訓で出払ってる間に日影さんと混浴した所が今回のハイライトだと思う。
「……正直、こうなるのは目に見えてた」
「何だかんだで巻き込まれてたけど、部長さんの私闘も同然でしたしね」
「とほほ……ですね」
このですねの取ってつけた感。
うわぁーん、もうレーティングゲームはこりごりだぁー！（画面収縮からの右下「おわり」表記）みたいな七十年代アニメみたいなオチも期待していたのだが、わりと真面目に落ち込んでいるのかもしれない。
とはいえ、落ち込んでばかりも居られない。
現実とは常に絶え間なく流れ次の問題を運んでくるものなのだ。
「で、メールで知らせといた今週中にやるらしい物理の抜き打ちテスト、自信あります？」
「……こ、今週中に抜き打ちするなら、理論的にはテストは実施されない筈……」
「……？　……ああ、予言のパラドクス。それ抜き打ちテスト宣言した時に言われて論破されてたから使えませんよ」
言った方も冗談で言っただけだったけど。
ああいうやり取りが教師との間に成り立つ辺り、割とうちのクラスは和やかな方なのではないだろうか。
いじめも無く、此方の様なコミュ能力に劣る人間が孤立する事もない、良い人間が揃った素敵な場所だ。
……まぁ、塔城さんは割と本気で絶望のオーラを纏っているが、個人の学力からくる問題まではどうにもならない。
「……あ、あの、ノートは」
「勿論、欠席してる間のコピーは用意してありますよ。はい」
「心の友よ……！」
鞄から取り出して手渡したノートのコピーを手渡すと、コピーごと手を両手で掴まれて感謝された。

これまで見たことのないレベルの感激具合だ。
しかしこの感激具合、山に篭もり過ぎて曜日感覚も消え失せてしまったらしい。
「因みに今日は金曜日でして」
「……物理は」
「……間に、昼休みがありますよ」
暗に午後には抜き打ちテストがあると告げつつ気休め程度に慰めの言葉も入れてみたが、塔城さんはコピーの束と此方の手を掴んだまま、崩れるようにその場に座り込んでしまった。

私、塔城小猫は転生悪魔だ。
転生悪魔というのは、事情はともあれ、それまでの生を捨てて悪魔としての生を生きる関係上、基本的には神に背いて生きている。
「神は死んだ……」
だから机に顔面から突っ伏してこんなロックな発言をしても当然許されます。
祈れば頭痛がしても、呪ったり流言をばらまいたりする分には大丈夫な悪魔ならではの反逆、貧弱な一般人ではこうはいかないでしょう。
むしろ許されろ私、テストの点は許されざる点数になりそうだからこそ今許されろ私。
休み明けに戻ってくるであろう血の流れよりも紅い点数を想像するだけで、時の流れに埋もれて消えてしまいたくなるから。
「あと一日休んでおけばこうはならなかったでしょうに」
頭上から聞こえる読手さんの呆れ混じりの声。
「……これ以上休むのは、流石に」
唯でさえ真っ当な理由で休んだわけではないのだから、出席できるなら出席するのが学生の義務というか。
直接補修とかに繋がるわけではないから、受ける授業を受ける為に出席するのは当然というか。
「まぁそこは個人の自由だから別にいいですけど。……部活の先輩が

お呼びですよ」
顔を上げ、視線を教室に向ければ、そこには男子に言い寄られてオロオロしているアーシアさん。
私と視線が合うと、目をこう、マンガ表現で言う『〉〈』こんな感じにして助けを求めてきた。
……ここで呼び出してきたのが副部長でも祐斗先輩でも無くアーシア先輩という辺り、部長は実に卑劣だと思う。まさに悪魔。無論賞賛しているんですが。
これじゃあ直ぐに付いていかなければならない。
「それじゃあ、私はこれで……」
アーシアさんを救出すべく、気怠すぎる気分に鞭打って立ち上がる。
「ええ、また来週お会いしましょう」
小さく手を振る読手さんに手を振り返す。
単純な祝勝会のお誘いならいいのですが。
そうはいかないのだろうな、と思いつつ、鞄を手にアーシアさんの元へと向かった。

そうはいかないだろうな、という予想は当たった。
でもめでたいというか喜ばしいというか、オカ研での祝勝会も行われるらしい。
といっても、部長の貴族力を利用しての豪華絢爛なパーティーという訳ではなく、適当に何処かのファミレスに行って、部長のおごりで騒ぐ程度のものになるのだとか。
色々な事情が咬み合って、実家の力をあまりおおっぴらに使えない現状では仕方がないと言っていたけど、正直、それくらいが今回の締めには丁度いいと思います。
さて、祝勝会の話は一先ず置いておいて、今は複雑かつ面倒になりそうな話から。
「赤眼の魔王（ルビーアイ）シャブラニグドゥ、ね」
部室で何時ものソファに座りながら、部長は悩ましげに呟く。

それも仕方がない。
魔王という称号は悪魔にとって当然ながら特別なものだ。
勿論、現状でも非正規に魔王を自称する悪魔が少なからず居るけれど、それはあくまでも古い悪魔、世代交代する前の旧魔王に連なる血筋の悪魔が名乗っているだけ。
でも、こちらは違う。
何処の誰とも知らないぽっと出の魔王。
所在ははっきりとアストラルサイドだとわかるけれど、そもそもそんな呼び方をされる異世界を私達は知らない。
無論、アストラルサイド、という言葉から単純にどんな場所を示しているかは理解できるけれど、異世界と扱うかどうか、となると少し難しい。
そも、そんな力のある存在が今まで誰にも確認されていない、認知されていない、というのもおかしい。
「普通なら、ありえない、と一蹴されるような話だけど、少なくとも、『力を借りる先』としては、間違いなく存在しているのよね」
部長が悩んでいるのはそれだ。
誰が名乗ったわけでもない、報告すらしていない。
でも、間違いなく魔王と呼ばれる存在に力を借りる術式は成立し、それに相応しい威力の術が発動してしまった。
ほぼ万全の状態だったフェニックスを、一撃で復活不可能なまでに精神を破壊する魔法など、普通に考えれば主神級の力を借りなければ不可能だ。
「小猫ちゃん自身は、その存在を感じ取ったりはできるのかい？」
祐斗先輩の問いに首を振る。
「……力を借りる術式を理解できれば、そういう感覚は必要ないらしいです」
もしかしたら、この魔法を正式な手順で学んだ場合は何処かで感じ取る工程があるのかもしれない。
でも、私の知識は読手さんが貸してくれた魔剣から刷り込まれたものでしかない。

車の運転と同じ、運転の仕方を知っていても、車の構造を理解して一から作れる訳じゃない。

「未知の魔王に、混沌の言語（カオス・ワーズ）ね、大した隠し球だわ」

「実際凄いですよこれ。俺にも使えますし」

言いながら、イッセー先輩が拙いながらも呪文を唱え、掌を上に向ける。

「明かり（ライティング）……ほらほら！」

掌の上に生まれた電灯くらいの明るさを持つ光球を嬉しそうに見せびらかしている。

子供のようなはしゃぎように部長なんかは可愛いものでも見るような優しげな視線を向けているけれど、問題はイッセー先輩がこの呪文を発動させられた事だ。

この呪文は丸暗記できれば混沌の言語やそれを使用した魔術の知識を持たなくても発動することができる簡単な魔法。

どれくらい簡単か、と言えば、生まれたての子供よりも情けない貧相な魔力しか持たないイッセー先輩が、発音の単純で短めな呪文を一つ覚えるだけで簡単に発動できてしまう程。

そして、この魔法は副部長やアーシアさん、祐斗先輩に至るまで習得に成功している。

つまり、この呪文は特殊な才能ありきで発動するものではなく、ほぼ万人が覚えることができる、体系付けられた『技術』なのだ。

考えようによっては、禁手のような状態（正確には違うらしい）で覚醒した神滅具である赤龍帝の籠手よりも危険だと言われた。

それもそうだ。

神滅具は一種一つしか無いけど、これはあくまでも技術。

学んだ全員が全員最強の呪文まで習得できるとは限らないにしても、母数が多ければ習得者もそれだけ多くなる。

悪魔に広まるだけでも、下級に留まっている立場の弱い転生悪魔による下克上が乱発しかねない。

それどころか、万が一この魔法が人類や他の神話勢力に広まりでもすれば……。

「小猫、とりあえず、竜破斬だけは使用を禁じるわ。余程の事が無い限り、ね」

どうせ直ぐにお兄様から使用禁止の知らせが来るでしょうけど、と続けた部長に、不承不承ながら頷いておく。

使えるようになった力を使うな、と言われるのは少し嫌だけど、それだけ危険な魔法である事は私にも理解できる。

他の呪文に関しては特に何も言われていないけれど、今後は小声かつ早口で口元を隠して詠唱する練習を行っていく必要もあるだろう。

……それに、最大の切り札はまだ残してある。

これぱっかりは私も滅多なことで使うつもりは無いけれど、少しくらいは手札を伏せていてもバチは当たらない筈だ。

「さて、難しい話はここまで」

ぱしん、と両手を叩いて話を終わらせたのは、色々な場面でとりあえず前に出ない事に定評がある副部長だ。

「ちょっと朱乃、話はまだ……」

「折角ゲームに勝ったんだから、難しい話ばっかりじゃあんまりじゃない？」

「む……」

副部長の言葉に、反論を封殺され唸る部長。

副部長の口調から察するに、今は女王や副部長ではなく、リアス・グレモリー個人の友人である姫島朱乃として接しているんだろう。

部長は貴族としては気位が高いが、個人としては友人を大切にするタイプだ。

しかも、副部長は部長の個人としての交友関係とか、そういう部分を考慮して、あくまでも部長自身の事を思って言ってくれている。

「それじゃあ、祝勝会の話でもしますか？」

副部長に続けて追撃を入れたのは祐斗先輩だ。

話が仕切りなおしに成った所ですかさずインターセプトしてくるタイミングの良さは流石だと思う。尊敬する。

別にこれ以上魔法関連での説教が面倒だから有りがたかった訳ではないので勘違いしてはいけない。

私は大体の場合誠実に生きているのでそんな事を考えたりはしないのだ。

「はい！　はい！　俺ア○ナミラーズ行きたいですア○ナミラーズ！　もしくはフー○ーズ！」

ここで食欲とは別の欲求全開でイッセー先輩が手を上げて主張します。

なんというか、ここまで狙いが見え見えだと逆に感心しますね。

「ああ、そういうことなら僕は馬○道かなぁ」

「ブルータスお前もか」

まさかのタイミングで再びノッてきた祐斗先輩に呆れる。

二人が上げた店の制服でなんとなく趣味嗜好がわかってしまうのがなんだか嫌だ。

イッセー先輩は分かりやすいけど、祐斗先輩はインビジブルむっつりスケベなのかもしれない。

「せめて市内にある店にして頂戴……」

米神に指先を当てて頭痛を堪えるように溜息を吐く部長は、そのポーズに反してなんだか嬉しそうだ。

……なんやかんやと言って、身分に縛られる事無くオカ研で部長として振る舞い続ける事ができているのが嬉しいのだろう。

正直、勝っても負けてもとりあえず全力が出せればいいくらいの感覚で戦ったけど、こういう姿を見れたなら、純粋に勝つことができて嬉しいと思える。

やはり勝負は勝ってこそ、だ。

「ああ、それとね、小猫ちゃん」

「はい？」

「一人二人なら追加で呼んでもいいから、相手側の予定も予め聞いておくといいですよ」

「……はい」

一人でなく、二人、という所に心憎い副部長の気遣いを感じる。

仮にここで一人、と言われたら、私は間違いなく今回の影の功労者である読手さんの事を思い浮かべ、

『……高鳴ってるの、わかりますよね』
思いうか、うかべ、うか、かかか……
「セイハァァッ!!」
テーブルを額で叩き割る。
痛みが頭蓋を突き抜け少し冷静になった。
真正面から話す、というか、普通にクラスメイトとして接する分には問題ないけれど、悪魔関連の話の後となると、どうしても記憶がふとリフレインしてしまうから困る。
ときめくな私の心、揺れるな私の心、あれはあくまで感謝の心が高揚感でおかしくなってしまっただけなんだから。
こういう時は、心が落ち込むような事を思い出して気を静めなければ。
そう例えば今日の抜き打ちテスト……。
「神は死んだ……」
真っ二つに折れた机は私の頭が下がるのを妨げる事無く、身体を折る私はまるで貝のようだ……。
私は貝になりたい。
響きが似てるから攻撃力もある蟹でもいい。蟹になりたいね……。
いけない、なんだか自分でも何を考えているのかわけがわからなくなってきた。
「あらあら、重症ね」
「小猫、つまりそれは恋よ！」
「恋というか、変だよね、ここまでくると」
「くっそ、やはりあいつもまたリア充……いやでも恩人だし……」
頭上で好き勝手言っている声も、私の鼓膜を上滑りしている。
読手さんに連絡を入れるのは、少し間を開けてからにしよう。

今回、読手さんは嫌に此方に協力的だった気がする。
温泉を借りるため、と言っていたけれど、それだけでここまで此方の事情に深入りするものだろうか。
彼は面倒が嫌いだ。

正直、一時期はそれで此方がマジ凹みしてしまうレベルで濃く一線を引かれるレベルで面倒が嫌いな筈。

だけど今回、彼は此方に手を貸す事で大きな面倒を背負う事になるかもしれない。

明らかにイッセー先輩の神器が何なのかわかっていたフシがあるというのも怪しすぎて追求を受ける可能性があるし、何よりも私に教えた魔術がいけない。

あんなもの、ヘタな人間が知っていたら、そのまま口封じに殺されてもおかしくないレベルの危険技術だ。

出処を知るために捕まえられて拷問にかけられたり、脳みそをかき混ぜられてもおかしくはない。

彼は、その危険性を理解した上で、私にこの魔術を教えたのだろうか。

だとしたら、何故？

それだけ私に肩入れしてくれた、というのなら、少し嬉しい。

だけど、もしかしたら。

誰が自分を狙ってきても、残さず返り討ちにするだけの力を持っているのだとしたら。

それこそ、神話勢力を、纏めて相手取れる様な……。

ぞわり、と背筋に寒気が走る。

ふと手に振動。

手の中の携帯を覗きこむと、先ほど送った祝勝会のお誘いに対する返信が届いていた。

『それならロイホ行きましょうよロイホ。今パンケーキタワーフェアやってるからパーティーにはうってつけですよ！』

楽しげな文章。あまり比率は高くないが絵文字まで使っているから中々のはしゃぎぶりだと思う。

何故だろうか、こうして彼の打ったであろう楽しげな文章を読んでいるだけで、自分の頬が緩んでいるのがわかる。

ベランダの手摺に身体を預けながら、ポチポチと返信の文章を打つ。

そうしている内に背筋の寒気は消え、梅雨前の少しぬるい夜風が身体を包む。

送信し、空を見上げる。

見上げた空には、薄ぼんやりとした輪郭の、美しい朧月が浮かんでいた。

月光校庭のエクスカリバー
十八話　コンビニ帰りに見た神父

かくして、球技大会は特に見どころも無くあっさりと終わりを告げた。

オカ研と生徒会で魔球合戦なんてものが行われたとかどうとか聞いたが、悪魔同士なら特におかしな話でもない。

というか、出さなかったら逆に何をしているんだ貴方達は、と問い詰めかねないだろう。

何しろ魔力を持った悪魔がする球技なのだから、魔力を使用した特殊な投法があるのは当たり前だ。

仮に魔球を出さないとしたら、それは他の全力で試合に望んでいる連中への侮辱に他ならない。

何も、切り札となる魔球を仕込んでいたのはオカ研と生徒会だけではないのだから。

「ど・れ・に・し・よ・う・か・な」

帰り道のコンビニ、ワンコイン本を物色しながら思い出すのは、今回人数合わせで参加した美術部・漫研連合のやる気のない試合だった。

球技大会に向け、とりあえず球技大会といえば野球だろうと当たりを付けた連合は、その持てる技術を全て導入して、彼等なりの、彼等らしい努力を積み重ねた。

カラーモールを貼り付け、まるで投球の軌跡に謎の光が残っているかのように演出する魔球を開発し。

腹部に偽の内臓と共にボールを仕込み、投球時に自分の腹の中から臓物ごと新たなボールを取り出す命を引き換えに放たれる一球を演出し。

更には投球と共に筋肉が断裂し関節が砕け骨が皮膚を突き破り飛び出し、最後には爪が五枚纏めて剥がれる、という演出を行う為の偽の腕を付けて自然に振る舞う練習……。

結局、魔球や再起不能ネタを仕込んだ連中がクラス対抗種目で尽く野球に当たり、部活対抗がドッヂボールだったために部活対抗は惨敗したが、それでも漫研はその発想力を、美術部はその造形力を思う様発揮して悔いのない球技大会になった。

特に惨敗した部活対抗試合、男女対抗戦を棄権した魔球使用済みメンバーが晒した、偽臓物や偽ひき肉腕を引きずりながらのズンビーめいた戦いぶりは多くの人の記憶に残ったのではないだろうか。

「これとこれとこれ、と」

カゴの中に三冊程に放り込む。

こういう安いコンビニ本は、一度買い逃がすと古本屋に流れるのを待つしか無いので一期一会感があって好ましい。

つまり何が言いたいのかと言えば、どのような形であれ力を尽くすという事は大切だ、という事だ。

連合は球技大会に勝つ、という意思は一切無かったが、それぞれの部活らしさを全て出し切るつもりで臨んだ。

オカ研と生徒会の悪魔チームもまた、魔球という本来なら公共の場では使うことを控えた方がいい力を使ってでも勝利をもぎ取ろうとした。

これは間違いなく見習うべきところだと思う。

全力で取り組む、というのは、持てる全ての力を出し切るのではない。

目的を達成するのに必要な方向に、必要な時のみ必要な種類の力を振り絞る、というのが全力なのだ。

そうでない時は、力を抜き、リラックスして過ごす。

張り詰めたままでは肉体的にも精神的にも異常を来してしまう。

こと、人生を楽しむ、という面において、これを勘違いしてしまうと困ったことになる。

ハンディキャップがあれば尚更だ。

「ふむ……みたらし、惹かれるな」

梅雨に入って夏が近づくこの時期に、和のスイーツは何処と無くマッチしている気がする。

母さんや日影さんの分も買っておきたいが、財布の中身も心配だ。
本も思えば三冊は買いすぎな気もしてくる。
だが、この三冊からどれを外すか……。
……オーパーツ図鑑と、ＵＭＡ図鑑はまたの機会にしよう。
似たようなの、確か母さんが持ってた気がするし。
そう考えると、この『世界の聖剣、魔剣図鑑』が中々の良本に思えてきた。
ぱっと表紙だけ見てみたが中々に美麗だ。
内容も薄く、絵に込められた情報量も少ないから重ねて上書きすれば良い画集にもできそうじゃないか。
レジで会計を済ませ、傘を差して少し遠回りしつつ家路に付く。
球技大会があったから、何時もより余分に寄り道する時間があるのが嬉しい。
コンビニ袋に雨が入らないよう気をつけながら、何時もとは違う道を歩く。
いっそこのままＣＤショップにでも行ってしまおうか。
ラクロスプラスの新譜がそろそろ発売されてる筈だし。
「……ん？」
雨音に混じり、市街地ではそう聞けない鋭い金属音が聞こえてきた。
夏場の雨の匂いに混じって漂ってくるのは、血臭だろうか。
どちらも、日常生活の中では中々に感じることのない非日常の感覚。
学生鞄の中にコンビニで買った本とデザートをビニール袋ごとつっこみ、音の発信源へと近付いて行く。
気付けば少し早足になって、口元がニヤついているのが自覚できた。
ああ、今日が球技大会で本当によかった。
何時もどおりの日程だったら、精々が動かない死体を一つ見つける程度に留まってしまっただろう。
それは何の得にもならない。

「木場先輩に……おお、あの時の神父さんではないですか」
雨に混じっていた金属音は既に雨音を切り裂き鼓膜を傷付けるように激しく鳴り響き、血臭は激しい雨に薄れ甘い匂いへと変わっていた。
瞼を開ける必要もない。
そこにはオカ研に所属する悪魔の人と、新たなはぐれエクソシストを誘引するためにリリースしておいた少し頭のおかしい神父さん。
二人は悪い気配のする剣と、そこはかとなく神聖な雰囲気を漂わせる剣をぶつけ合って戦っている。
薄く血の匂いと、悪くなり始めた臓物の匂いを微かに漂わせているのは、たぶん神父の死体か何かか。
「?!　読手君、なんでこんな所に」
こんなところとはいったい。
普通の通学路で路地裏でも廃墟でもない、今この瞬間に一般人が通りかかってもおかしくない場所で剣を振り回してる方が明らかにおかしいと思うのだがどうだろうか。
「いやですね、ただの帰り道ですよ。それで、そちらのいつぞやの神父さんは」
瞼は開けず、顔だけ向けて視線を向け、注目しているという意思を向ける。
此方は無手どころか片手は学生鞄、片手は傘で塞がっており、一目見て隙だらけ、非戦闘状態と理解できる筈だ。
だというのに、何故この神父はここまで怯んでいるのか。
「あら、あらあらあらぁ？　あの時のクソキチガイさんじゃあありませんかぁ！」
「貴方にキチ呼ばわりされる筋合いはありませんが」
「どの口がそんな事を言いやがるんでございますかねぇ……！」
木場先輩を警戒しつつ、手に持った神聖そうな剣の切っ先を油断なく此方に突きつけてくるが、それほどの事をしただろうか。
ただ、死んでも誰も悲しむ相手の居ない、別に死んでも誰も困らない、そんな方々を少し減らしただけなのに。

「まぁ、別にそちらが此方をどう見ていても構いはしませんが、お一人で？」

そう、問題はそこだ。

別に神父を斬り殺していようが、木場先輩と斬り合っていようが、それは何の問題にもならない。

彼ははぐれエクソシストであり、教会から離れて悪魔を狩り殺すという趣味を実行し続ける以上は、何処かの堕天使の下につかなければならない。

そうなると、同じ堕天使の元に居る他のエクソシストと徒党を組んで、ある程度の安全マージンを作りながら狩りをする。

つまり、はぐれエクソシストを一人放流すれば、しばらく間を置くだけで、更に大量のはぐれエクソシストと遭遇する事が可能になる。

……と、思ったからこそ、彼をすり潰して塗り潰したりせずに生かして逃がしたのだが。

「なんで、お一人なんですか」

無防備に一歩踏み出す。

少し語気が強くなっていたかもしれないが、それを抑える積りはない。

なんだか裏切られた気分なのだ。

しいて例えれば、椎茸栽培キットを湿らせて衝撃を与えて、それでしばらく放置して生えてきたのが一本だけ。

そんな感じの気分故に、語調を抑えるつもりにはとてもなれない。

「ひゃ、はは、それはね、俺ちゃん一人でも十分にクソ悪魔どもを殺して回れるからさ、この、エクスカリバーの力でねぇ！」

「それで？　お仲間は？」

椎茸がしめじになった、そう言いたいのか。

だが違う、此方が求めていたものを椎茸栽培キットに例えれば、大量の椎茸を見てうほう凄い！　と感激した後に、あの手この手で多量の椎茸料理をつくる事なのだ。

更に一歩踏み出す。

既に神父さん側から見て、一足一刀で届く必殺の位置だろう。

瞼を開く。
空から延々と、世界を塗りつぶす様に降り注ぐ大量の【雨】の弾幕。
その向こうに居る、廃教会で見た文字列。
いや、今この時だけは挿絵だ。
奇妙にささくれた、通常の刀剣では有り得ない趣味的なデザインの剣を構え、左右非対称の大げさな程に嗜虐的な笑みを浮かべている、白髪の神父。
注目すべきは手に構えた剣だろう。
中々に楽しげなデザインの剣だが、こう、不可思議な印象を受ける。
何処かちぐはぐというか、完成されていないというか。
首を傾げようとした瞬間、無拍子でエクスカリバー?の切っ先が目の前に迫っていた。
「おっと」
学生鞄を傘の外に出ないように小さく投げ、手に籠手を呼び出し刃を掴みとる。
火華を散らしながらも顔に刺さる前に止まった白銀の刃が、目の前で文字列に置き換わっていった。
【天閃の聖剣(エクスカリバー・ラピッドリィ)】
【かつての大戦により砕けたエクスカリバーの欠片から錬金術によって生み出された聖剣】
【オリジナルのエクスカリバーに備わっていた機能の一つを劣化状態で保持】
【使い手のスピードを底上げして高速の攻撃を繰り出せる。全てのＡＧＩ判定で成功率を3倍にする】
【聖剣の定義、かつての大戦、核となるオリジナルの組成、錬金術により補われている部分の組成、修復に使われる錬金技術の技法のついては以下を参照】
全文読み切る前に瞼を閉じ、滞空中の学生鞄を傘の取っ手に引っ掛けてキャッチ。
成る程、早い割に違和感を覚える程に重みのない一撃にはこういうからくりがあるのか。

「今のを避けちゃうとかさぁ、空気呼んで欲しいんだよねぇ普通ここはさぁ、パワーアップした力でずばぁぁーっっていけちゃうもんなんじゃないのぉねぇねぇねぇぇぇぇ!!!」

繰り返される剣撃を、全て籠手で刃筋を逸らして避ける、避ける、避ける。

だが、遅い。籠手の力を使うまでもなく、素のニンジャ神経で避けられてしまう。

エクスカリバーの能力を使って加速している訳ではない……、いや、そうか。

加速の能力を備えた剣を使う為に、専用に動きを最適化しているのか。

長年使って、いや、前は真っ当なオールラウンダーだった。

そもそも何処からこんな貴重品を、短期間で最適な戦法を……。

「ああ、そうか」

「何を一人で納得してんですかねぇ!?」

斬りつける声は喜色に溢れている。

ここから加速するなら、それは余裕も持てるというものだろう。

だがそれだけではない。

「いえね、貴方がまだ怯えてる割に余裕がある理由について考えが至りまして」

ぴたり、と、斬撃が止む。

「誰が、怯えてるってんですかぁ?」

勢いがない。

怒りに震える声。

だが残念な事にその程度の声色でごまかせるものではない。

文字列の並ぶ感情は実に分かりやすい。

「バックに、前よりも大掛かりな仕掛け、大きな組織があるんですね」

さらっと見たこの神父さんの思考の中に、誰かに頼る、更に強力な力を求めるという選択肢。

つまり、この規模の武器をこの神父さんに与え、更に追加で力を与えられるだろう何かが、居るのだ。

「てめ、」
激昂しかけた神父さんが大きく宙に跳ぶ。
背後から斬り付けてきた木場先輩の斬撃を避けるためだろう。
「僕も居ることを忘れて貰っちゃ困るな」
すいませんどうでもいいので忘れてました。
しかし余計な真似をしてくれる人だ。
確か、ええと、神父とか教会に恨みがあるとかどうとか、そんな人だったかな。
ああ、しかし、邪魔をした事に関しては、許しましょう。
今日はいい日だ。実にいい日だ。
亀を逃したら、そのまま竜宮城から鯛や平目を引き連れてきた様な、そんな目出度い状況で、些細な横槍に目くじらを立てる程、此方も気が小さい訳じゃない。
「それで、そのオモチャをくれたのは教会の裏事に通じるお偉いさん？　格の高い堕天使とかだと、より嬉しいんですが、どうです？」
ああ、怒りに震える神父さん、貴方はなんていい人なんだ。
そんな大きなバックを引き連れて戻ってきてくれるだなんて。
しかも貴方はそこの罪もない、碌な武装も持たず血の匂いもしない、限りなく堅気に近いだろう神父さんを殺してみせた。
しかもこんな町中で。
それはつまり、貴方を操るバックの方が、偉くとも社会に適合できていない、大きな騒ぎを起こせる面倒な立場に居る、殺されても誰も困らないタイプの方々だという事だろう。
「今度の脛はどんな齧り心地ですか？」
にこり、と、我ながらここ最近で最高の笑顔ではないか、と思える笑顔を向ける。
「殺す。目の前でてめえの女も犯し殺して、その気持ち悪い薄ら笑いひっぺがして、その上で殺す」
帰ってきたのは、これまでの狂乱ぶりが嘘の様に冷たく静かな憎悪。
これが余計な部分を取り払ったこの神父の本性だろうか。

「おやおや、やれますか？　あなた一人で大丈夫ですか？　怖いのなら早く後ろの方々に全面協力を頼んでいいんですよ？」

まぁどう振る舞おうがこの屑は一番惨たらしく潰すが。

日影さんはあの聖剣程度では薄皮一枚傷付ける事はできないが、日影さんにそんな事をしよう、と考えた次点でこいつには惨たらしく死ぬか永遠に死ねない苦しみが与えられる権利を得た。

……と、セルフコントロールセルフコントロール。

折角自分から塗りつぶされに来てくれるのだから、此方も楽しくやらなければ損というものだ。

「……」

挑発に対して帰ってきたのは無言。

懐から取り出した、何らかの術式が刻まれたアーティファクトを地面に叩きつけ、溶けるようにその気配が消えた。

別にあんなものを使わなくても、もう単品であの神父さんを潰す積りはないのだけど。

たぶん、向こう側で消えた神父さんに対して、というか、エクスカリバーに対して威容な憎悪を燃やしている木場先輩に追われない為か。

「逃したか……」

「いやぁ、災難でしたねぇ」

「そうでもないさ」

手に下げていた悪そうな剣（たぶん魔剣）を消し去り首を振る。

ふと気付くのだが、この先輩、なんだか妙にさっぱりとした出で立ちをしている。

そう、下校時刻、制服でこんな場所に居た割に、鞄も傘も持っていないのだ。

そりゃ、土砂降りの中で雨に打たれながら歩くイケメン、というのは、間違いなく挿絵になるレベルで絵になるだろうけれど、何も自分の体を張ってまで再現しなくても……。

「長年探していた獲物が、自分から現れてくれたんだ。運がいいくらいだよ」

その僕の言葉に、読手君は不思議そうに首を傾げた。
全く毒気を抜かれる程に自然体で、このままだと普通の学生にしか見えない。
目を閉じているのだって、こうまで堂々と振る舞われると、本当に目が細いだけだと信じそうになる。
でも、僕は知っている。
彼は恐ろしい力を持ち、常人とは異なる理屈で人を殺す人でなしに分類される人種だという事を。
そして、一度自分が殺すと決めた相手を誰かに取られる事を非常に嫌う。
恐らく、彼はあの神父の事もターゲットに入れたのだろう。
そうすると、自然に奴の持っているエクスカリバーも標的に含まれてしまう。
それでは駄目だ。
あれは、あの聖剣は、エクスカリバーだけは僕の手で破壊しなければ。
「聖剣とは、少し、因縁があってね」
泣き落とし、とまではいかないが、多少事情を話す。
それで素直に標的を譲るとは思えないが――
「んー……ああ、いいですよエクスカリバーは。好きにしちゃってくださいな」
「……いいのかい？」
思えないが、なんて考えている間に、あっという間に譲られてしまった。
事情を話して同情を誘うとか、そんな話の前に、因縁がある、というだけで譲られるとは。
小猫ちゃんと遊んでいる時とはかけ離れた戦闘時の戦闘への強い執着から、そう簡単にはいかない、と勝手に思っていただけに拍子抜けを通り越して少し疑わしく感じる。
「いいんですよぉ。昔からの先約だって言うなら、それを横取りする

程野暮じゃああありません」
笑顔でそう告げられ、安堵の溜息を吐く。
万が一、一戦交える事になったらとハラハラしていただけに、この気まぐれは嬉しい。
とりあえずは、これで心配事の一つは消えた。
あとはあのエクスカリバーを持った神父の居場所を探る事だけだ。
……流石に、部長に対して不義理過ぎるから、学校には行かなければならないだろうけど。
「でも、此方が譲る譲らない以前に、結構大きな問題が残ってると思うんですよね。先輩、気付いてます？」
「どんな問題があったって、やってやるだけさ」
そうだ。その為に、その為だけに、僕は生き残った。
あの地獄を生き残った僕は、皆の無念を晴らすためにも、エクスカリバーを破壊するんだ。
「まぁそう言わずに聞いて下さい、と言っても、聞いてはくれないんでしょうね。……じゃあ、明日、オカ研で改めて説明させて頂きますので。今日はこれで」
言うなり、ぺこりと頭を下げて元来た道を戻っていく読手君。
その、これまで接してきた誰とも違う反応に戸惑いを覚える。
そんな事に、僕にも聖剣にも関わりない相手の事を気にかける余裕なんて、持っていていい訳がないというのに。
何故か彼の言葉が頭に残った。
「大きな問題、か」
気付いていない訳じゃない。
聖剣を破壊する、言葉にするのは簡単でも、現実にするには難しい問題だ。
でも、わかっていても、止めるわけには、止まるわけにはいかない。
僕が、僕だけが生き残った。
だから、僕が砕く。破壊する。
僕達の、命の価値を証明する為に。

十九話　オカ研で見た聖剣使い

「塔城さん塔城さん、ちょっとお尋ねしたい事があるんですがいいですかね」

放課後、帰り支度を済ませてからオカ研の表向きの活動に向かおうとする私に、読手さんが声をかけてきた。

「……内容にもよります」

まぁ、私と読手さんはそれなりに深すぎない程度に深い付き合いがある以上、聞いてはいけない内容も、聞かなくてもわかるだろう内容も把握している筈だ。

では、なんでこんな予防線を引いているのかと言えば、原因は読手さんとは別のクラスメイトに起因する。

相手はさして私と交流があるわけでもない、友人というよりは知り合いか。

昼休み、学食へ向かう私に声をかけた彼女は、食事を奢るので少し教えてもらいたい事がある、と言い出してきた。

別にお金に困っているという訳ではないけれど、少し話をするだけで一食ただになるというのなら断る理由も無いと思い、快く承ったのだが、その質問の内容というのが、如何せんどうしようもないものだったのだ。

『二年の兵藤先輩に手を出されてるって噂、本当じゃないよね？』

思わず問い返しの言葉があ行一段目を濁音にしたものになってしまったのも、それで相手が涙目になってしまったのも不可抗力ではないだろうか。

いや、勿論、聞き方からもわかるように、彼女もその噂を信じている訳ではなく、あくまでも確認の為に聞いてみたのだという事を涙目で弁明してくれたからいいのですけども。

……なんでも、二年を中心にして、オカ研のメンバーは男女問わずイッセー先輩に弱みを握られて肉体関係を強いられている、という噂が不自然な早さで広まっているらしい。

酷い屈辱だ。

私はイッセー先輩に身体を許すつもりは毛頭無いし、仮に襲われたとしても容易く返り討ちにできる。

というか、本当にオカ研のメンバーに手を出すだけの気概というか度胸があるのなら、まずアーシアさんに変化が無ければおかしい。

とりあえず、噂の発信源は発見次第重めに〆ておこうと思う。

「あ、二年から流れてる変な噂の話じゃなくて」

「……把握してるんですね」

「一応噂話程度は聞こえてきますから。あ、塔城さんに関してはなんだか別の噂と干渉して信憑性が低いものとして扱われているらしいですよ」

「別の噂？」

「同学年の別の相手に対して大恋愛中だとか、略奪愛を狙ってるとかどうとか、まぁ此方も詳しくは聞いてないのですけど」

「なんですか、それ」

それはまた、さっきのものとはまた別ベクトルで根も葉もなく面倒極まりない。

こういう曖昧な噂話は、不特定多数の他愛無い証言が組み合わさって、聞いていて面白い内容に変化して広まっていくものだと聞いたことがある。

つまり、悪意ある発信源、犯人が存在しない。

犯人を締めあげて吊るしあげて叩いて伸ばしてボタンを掛け違えて折りたたんで謝罪会見させればいい、って訳ではない辺りがとても厄介だ。

しかも噂の張本人である私が否定しても、恥ずかしさなどから隠している、と思われてしまい、積極的に噂を根絶することが難しい。

この噂に関しては、自然と風化していくのを待つしかないだろう。

「まぁそんな事はどうでもいいんですよ些細なことです。それでですね、もしかして、今オカ研って空気悪くなってたりします？」

「そう、ですね……。悪いと言えば、悪いと思います」

先日の球技大会後の部活で、何日か前から様子がおかしくなっていた祐斗先輩が、とうとう部長と喧嘩してそのまま部室を出て行ってし

まったのだ。
しかもその後、夜の悪魔活動までサボる始末。
悪魔としての活動に関しては部長も祐斗先輩の様子がおかしい事を察して多めに見てくれるかもしれないけれど、あの悪い空気を全く引き摺らずに今日の部活が始まるか、と言えば絶対にＮＯだろう。
仮に始められたとしても私がなんか駄目だ。
ああいう、そのまま仲違いに発展しそうな、別離に繋がりそうな空気の悪さは軽く吐き気がするレベルで駄目だったりする。
ああ、ここ数日は祐斗先輩がメールで許可を取って部活を休んでいたから忘れていたけれど、よくよく考えたら今日の部活はそんな空気の中で行わなければならないのか。
「なんていうか、もう、前情報無しでデビルマ○実写版を見てしまった原作ファンを詰め込んだタコ部屋みたいな」
「それ悪いって言わなくても悪い空気ですよ？」
「むしろ空気死んでるというか……サタンだからですかね？」
「サタンじゃ仕方ないですね……」
いや、勿論私があの空気をネガティブに捉えすぎているというのはわかるのだけど。
たぶん、祐斗先輩も落ち着いていると思うし、部長も注意こそすれきつく叱責を飛ばしたりはしないだろう。
だからこそ私の胃酸が大量放出なんですけど。
表面上は何時もどおり、というのが逆に凄く違和感を感じるんですよね、ああいうのって。
「……客が居れば多少空気良くなると思うんですよ」
「生贄になれと……？　まぁ、どっちにしろ用事あったから行こうとはしていたんですけど」
「あ、もしかして天使か何かですか」
「いや、サタンだからな……、もしかしてこれってそっちでは侮辱罪になったりします？」
「訴えられるのは実写版の監督かと……わかりました、もう実写版の話は止めましょう、はい、やめやめ」

両手を広げてストップのジェスチャ。
本題から逸れているので強引に修正だ。
「そもそも、今日はなんでオカ研に？」
「木場先輩と部室で会う予定入れてたんですけど、なんかここ数日は部活休むとかどうとかメールを頂きまして」
メアド交換してたことの方が驚きの事実なんですが、それは一先ず置いておくとして。
何の用事があって祐斗先輩と会う予定が出来たのかはわからないけれど、それだけ多めに祐斗先輩と絡んでくれるなら、部室の空気も急激に悪くなる、という事も無くなるでしょう。
なんというか……渡りに船、というやつでしょうか。
流石は平時における適度なタイミングの良さに定評がある気がする読手さん。
「じゃあ、行きましょう」
今日は何故だか普通の部活動にも全員強制参加するようにメールが届いていたから、間違いなく祐斗先輩も来るはず。
読手さんには、場を和ませるよりも先に部室の空気が悪くなっていた時に盾になって貰おう。

そんな訳で、塔城さんに連れられて旧校舎にあるオカルト研究部の部室にやって来たのだ。
来たのだが、何やら今日はやけに物々しい雰囲気で、室内の空気も何処か張り詰めている様な気がする。
が、此方ははっきりと部外者なので彼等の空気を乱さなければ過剰に空気を気にする必要もない。
来客の用事が済むまでの時間つぶしに、先日コンビニで買ってそのまま鞄の中に突っ込んであるワンコインブックを読む。
勿論、余計な物を目に入れない様に瞼は少し空ける程度。
……うん、この説明文の適当さが、また味があって素晴らしい。
特に聖剣魔剣の所持者が担当したイラストレーターの気分次第で何の脈絡もなくＴＳして美少女化している辺りが実に俗っぽい。

しかも本文ではちゃんと所有者が男である旨を記載している辺りが心憎いではないか。
説明文なぞ知った事か、という、安い料金で絵を描かされるイラストレーターの魂の叫びが聞こえる気がする。
「ところで……さっきからそこに居る彼は何者？」
しかし、イラストレーターの趣味の問題なのかもしれないが。
どうにもこの本のエクスカリバー、実物よりも豪奢に過ぎるというか。
選定剣とは別に新たに与えられた説を取らないにしても、こんな派手派手な剣がそこらに突き刺さってたら、剣の刺さってる地面なり岩なりを刳り貫いて、引き抜かずにそのまま持ち去る不埒者が現れてもおかしくない。
「……読手さん、読手さん、呼ばれてますよ」
「いや別に呼ばれてはいませんし。それより見て下さいよこのアーサー王、ＴＳな挙句にロングスカート付きのビキニアーマーですって。聖剣使う女性は痴女、みたいな決まりでも出来たんですかね」
やはり青はオワコン、時代は赤……と見せかけて、白と黒のユニットというのはどうだろうか。
円卓の騎士という名のリリィちゃんファンクラブを率いる白と、それを圧倒的なカリスマで攻撃的な方向性に持っていく黒、みたいな。
赤？　赤はエクスカリバー持ってない、というか聖剣持ってないし。
やっぱり聖剣はビーム撃てないと。
ビーム出ない聖剣とか、鳥取砂丘の緑化待った無し。
「待て、落ち着けイリナ、一般人相手にそれは不味い」
「こんな悪魔の巣窟に一般人が居るわけ無いでしょ、あの発言からしてもう間違いなく悪魔の手先か何かに――」
「そこのお二人」
瞼を閉じ、本を閉じ、溜息を吐き、聖剣を掲げて騒いでいる女性とそれを抑えている女性を指さす。
「別にこの部屋を壊すのは構いませんが……読書してる人の脇で、刃

物を振り回して騒がないで下さいますか。非常識な」
「――――――」
「……」
「ごめんなさい、その子は部外者だけど、そういうところ以外は無害な筈だから、置物か何かと思ってて頂戴」
「……時計機能が狂ったファービー的な」
「小猫、お口チャック」
怒られてやんの。
と、口にも出さず閉じた瞼からは目に出した分も察せられない筈なのに塔城さんに脇腹を抓られた。
基本的に人肉くらいは気軽に千切れる怪力なんだから、気軽に摘もうとするのはやめて欲しい。
むしろニンジャ耐久力のある皮膚でなければそのまま千切れている気がする。
……と、閉じた本を改めて開くのもなんだか間抜けなので、ＢＧＭ代わりに聞き流していたオカ研とお客さんであるはぐれてないエクソシストさん達の会話にちゃんと耳を傾ける。
傾けるのだが、当然と言えば当然、何かしらの面白みのある話でもない。
彼女たちは狂信者、しかも、対悪魔用にしっかりと規格に添って染められたエクソシストなりの信仰を持つエクソシストだ。
こういう連中の発言というのは、本物でもにわかでも、総じて胡散臭い。
……個人的に、アーシア先輩を含め聖書系の神様を崇めて居る連中の事を、此方は密かに尊敬すらしているのだが。
何しろ彼等、彼女等は、実在するかどうかもわからない、自らに備わる感覚器官にて認識する事ができない神を信じ、言葉に過ぎない聖書の内容を心の底から信じているのだ。
そういう意味で、彼等、彼女等は此方にとっては見習うべき相手とも言える、と、思う。
彼等、彼女等は、言ってしまえば須らく盲目で、聾唖だ。

しかも自らの欠損に対する自覚がなく、その為に何処かや誰かに衝突しても気にならない。
目や耳だけでなく、脳や感覚神経に至るまで破損している。
だというのに、世界には愛が、神から等しく与えられる愛があるという。
何も見えていないのに見えていると思い、聞こえていない音を聞こえているという。
思い込もうとしている訳ではなく、彼等にとってはまさにそれが真実なのだ。
素晴らしい事だと思う。見習えればな、とも思う、のだが。
「神は愛してくれていた。何も起こらなかったなら、それは只の信仰不足だ」
「ぷっ、く、く、く」
吹き出してしまった。
喉から笑い声が出るのを抑えられない。
彼等の盲信に対する憧れは確かにある。
あそこまで根拠なく何かを信じる事ができれば、どれほど生きていくのが簡単か、とは思う。
だがしかし、あえてその様を外から見てしまうと、どうだろう。
鈍感力とでもいうのか、少しくらい頭の血の巡りが悪い方が生きやすいのだろうなぁ、とは思うのだが。
「……何がおかしい？」
「え、ああ、だって、ははっ、貴女達、ぷふぅっ」
余りにもおかしくて、少し、ほんの一瞬、瞼が開く。
【信仰受諾者・大天使系列Ｆライン】
【祝福付与者・大天使系列Ａライン】
【※本来の受諾、付与を担当する神は――――】
一瞬だけ見えた、断片的な彼女たちを形成する文字列を見て、声も出なくなる。
笑いすぎて声が出せない。
膝をバシバシと叩いて痛みで笑いを堪えようとする此方に向く奇

異の視線も気にならない。
別段、この類のシステマチックな文字列を見るのが初めてという事も無いけれど。
あそこまで狂信的な態度を取られた後にこの文字列を見ると、どうしても、
「ゆ、愉快すぎ……面白すぎて、おなかいたい……」
彼処までの狂信を受け止めるのが、全能の神ではなく、大天使とかに繋がる機械的なシステムでしかないというのは如何なる皮肉であろうか。
しかも、祈るべき対象、縋る対象である神は、既に――
「神は、愛してくれて、あはははははは！」
ソファの背もたれに全開で身を預け仰け反り、脚をバタつかせながら堪える事無く笑う。
此方に向ける奇異の視線を敵意に変え始めた彼女たちは、所謂敬虔な信徒という事になるのだろう。
けれど、だからこそ、彼女たちの信仰は悲劇的で、傍から見ている分には非常に滑稽だ。
散々アーシア先輩とその信仰を罵って見せた辺りなんか、もう、天丼芸の前振りにしか思えなかった。
この世界の教会というのは、聖剣を使うエクソシストに芸人の心得まで仕込んでくれるのだろうか。

「君の様な人間が、信徒でない者達の間には少なからず居るという事は知っている。信仰を持たない、という事はそういう事だ。哀れにも思う」
球技大会の練習で使用していた場所に立つエクソシストの片割れ、髪に緑のメッシュが入ったゼノヴィアという聖剣使い。
彼女はアーシア先輩に対する暴言や神に対する狂信を想起させない程に穏やかな口調で、眼前の相手に語りかけている。
手に封印の布を取り払ったエクスカリバーを下げていなければ、教会で説教をするシスターにも見えたかもしれない。

「そうですね。彼処まで露骨な言い方は少ないでしょうけど、普通にある意見でしょう。ああ、別に貴女方の信仰を否定した訳ではありませんよ。実際効果はあるわけですし」

何でしたら謝罪もしますが、と、まるで反省した風には見えない返しをしているのは読手さんだ。

彼は学生服のまま、手に獲物である刀を構える事すらせず、軽く手を握っただけの無手。

相対しているのが聖剣を構えたエクソシストであるというこの状況を無視すれば、そのまま全校集会の列に並んでいてもおかしくない程の自然体。

「いや、謝罪は必要無いさ。悪魔に魂を売り渡さなければ、その内に心を改め主の導きを知る事もできるかもしれない。……だから、これはやめても構わないんだぞ？」

向き合う二人は驚くほどに自然体で、争い合う必要は無いようにも見える。

闘志という意味で言えば、読手さんに説得されて選手交代させられたイッセー先輩の方が断然高い。

では何故イッセー先輩がそこまで闘志を高めているのか、読手さんとエクソシストが如何にも戦い始めそうな状態になっているのか。

イッセー先輩はまだわかる。アーシアさんの事を侮辱されて、挙句言葉の上だけでの話とは言え殺害を仄めかされた。

これで怒らないのなら、それはイッセー先輩のようでとてもイッセー先輩とは呼べない別の何かだ。

でも、読手さんが戦う理由は本当に存在しない。

読手さんが突然狂ったように笑い出しながら教徒達の信仰をバカにしたけれど、それに対して露骨に反応を示してみせたもう一人は、最初から部室の隅で怒りを滾らせていた祐斗先輩と相対している。

しかも、読手さんは相変わらず瞼を閉じたままで、教会で見せたような表情でもない。

少なくともあの時のようにエクソシストを殺そうとしている訳ではない、と思いたい。

「いやぁ、正直、このタイミングで無ければ別に此方も戦う必要は無かったんですけどねぇ。あとほら、兵藤先輩の代わりに一発叩いておこうかな、とも。此方結構善人なのでそういうとこ気が利くんですよ」

……確かに、イッセー先輩をこのエクソシストと戦わせたら不味い、というのは理解できる。

弱いからでも、聖剣が天敵だからでもない。

逆に、イッセー先輩がこのエクソシストを殺害して、悪魔と天使の間で問題になりかねないからだ。

神滅具である赤龍帝の籠手と体質レベルで相性がよく、神器を発動していない状態でも下級とは思えない程に頑強で力もある。

反面器用さは無いに等しく、神器を使って戦った場合は火力過多で相手をうっかり殺してしまいかねない。

だからといって神器を使わずに戦えば、必脱の脱げ魔法も発動させられず、攻撃も当てられず、無残にボコボコにされて終わってしまうのは目に見えている。

だけど、それは読手さんには関係ない。

関係ないどころか、読手さんが一番キライな悪魔や天使の面倒くさい事情に関わる部分、何時もの読手さんなら代打を買って出るどころか、言葉一つ挟む事無くスルーする筈。

そもそも、何らかの代償を払えそうにも無いイッセー先輩に読手さんが力を貸す理由も無い。

善人だから代わりに殴る、なんて、ここが悪魔としての部活動をしている最中で無ければ指さして失笑している場面だと思う。

……つまり、読手さんはそういった悪魔とか天使の事情や、イッセー先輩の立場をダシにしてまでこのエクソシストと闘いたい理由がある、という事になる。

解らない。

付き合いもそろそろ数ヶ月にもなるというのに、やはり読手さんのこういうところは予想も理解もできない。

不理解への不安を胸に、止めなければならない訳でもないこの状況

を前に、私は静観を決め込むしかなかった。

真っ直ぐに相手を見据え聖剣を携えたゼノヴィア。
瞼を閉じ何も見ること無く無手の書主。
向かい合う二人は開始の合図すら無く、ほぼ同時に動きを見せた。
僅かに早く動き出したのは書主。
何も持っていない手を自らの身体の影に隠すように後ろ手に構え、ゼノヴィアの懐に潜り込む。
ゼノヴィアが後手に回ったのは躊躇いもあったのだろう。
書主は悪魔でなく、あの場で見るには不自然だと思える程に一般人に見え、挙句に獲物らしい獲物も持っていない。
服の上からわかる筋肉量から見ても拳撃だけでゼノヴィアにダメージを与えられるわけもない。
「むっ」
そう、頭で理解しつつも『それ』を防げたのは、正しく本能の成せる技といったところか。
無手のままの拳を、拳打として放つでも無くアッパー気味に振り上げて外したその延長線上の軌跡に、ゼノヴィアは咄嗟にエクスカリバーを差し込んだ。
金属音。
固くしなやかな金属同士を全力で打合せた様なそれは、ゼノヴィアの目の前に映る光景を裏切りつつも、間違いなく真実を示す音色。
付随するように一陣の風が巻き起こる。
何かに巻き上げられた訳でもなく音をたてる風。
「それっ」
書主が振り上げた拳を更に振り下ろす。
ゼノヴィアが半歩下がりながら先ほどと同じようにエクスカリバーを構えると、同様の金属音が響く。
ゼノヴィアは、手の中の柄に走る感触に覚えがあった。
その覚えは疑問へと変わり、疑問を確信へと変えるために更にエクスカリバーで横薙ぎに切りつけた。

破壊の聖剣の名を持つエクスカリバーの一撃、当たれば当然の如く強大な破壊を撒き散らす。

地面に当たれば軽くクレーターが出来上がり、並の刀剣は軽く当てただけでも砕け散る聖剣の特殊能力だ。

もはやゼノヴィアの中に相手が一般人に見えるからという躊躇いは無い。

破壊の力を込められた一撃は一歩深い踏み込みと共に放たれ、防がれる事無く避けられる事無く通れば書主の身体を胸元から真っ二つに分断し、直後に原型を残さぬ肉塊へと変えるだろう。

一歩背後に跳ぶ書主。

しかし斬撃の範囲から逃れ得る程には離れていない。

滞空中のその身体に破壊の斬撃が迫る。

次に響く音は肉が弾け骨が砕け散る音か。

いや、やはり響くのは金属音だ。

エクスカリバーは書主の身体を両断する事無く、前に突出された両拳の間で止まっていた。

一瞬の拮抗、構うこと無く振りぬかれるエクスカリバー。

斬撃に込められたエクソシストの中でも類を見ないゼノヴィアの過剰な膂力が、滞空中の書主の身体を押し込む。

次いで破壊の聖剣の特性が発動し、ゼノヴィアと書主の間の空間が爆発した。

発生する衝撃波に逆らわず書主は飛び、ゼノヴィアは宙を舞う書主に油断なく視線を送る。

「なるほど、『それ』が君の神器か」

「そんな贅沢品は持ちあわせていませんよ。これはただの拾い物です」

時間にして数秒、打ち合ったのは数合、たったそれだけでゼノヴィアはトリックを看破した。

何の事はない、目の前に居る少年は『見えない武器』を使っているだけなのだ。

解せない部分は確かにある。

破壊の聖剣の力に耐え切るだけの頑強性を備えた武器を、こんな極東の地方都市に済む、明らかに一般人としか思えない少年が所持し、使い熟している。

これは明らかに不自然だ。

だが不自然だと思うのは彼が一般人であると考えているからだ。

悪魔とつるんでいるのであれば、一般人に見えるのは巧妙な擬態なのだろう。

神器ではない、というのも単純に嘘だとすれば問題ない。

つまり、彼は神器を持ち、悪魔の眷属に加わってこそ居ないものの、悪魔に手を貸す異端者、という事になる。

殺すのは不味いが、加減は無用だろう。

ゼノヴィアの思考は極めて単純な結論だけを導き出した。

戦闘時、余分な思考はノイズにしかならない。

エクソシストとしてゼノヴィアが大成した理由は、聖剣に対する適正以外にも、思考の取捨選択の潔さにあった。

彼女は相対する相手の武器が何処で手に入れたものか、如何なる由来を持つものであるか、何故武器を使い慣れ戦い慣れているのか、という思考をバッサリと簡略化した。

テンプレート化してあるエクソシストが敵とする相手か敵としない相手か、という分類に落とし込み、大幅に思考時間を短縮しているのだ。

故に、気になるのは相手の武器性能のみ。

体術に関しては打ち合いながら察していけるが、相手の武器は知らぬままに相対するには厄介な特性を持っている。

目に映らない武器、というのは、戦闘時には極めて単純な脅威となる。

「その神器、剣か？」

聞いて答えるとも思えないが、反応を見るために聞いてみる。

一言二言言葉を交わした程度で隙が生まれる程に未熟ではないという余裕の現れでもあった。

隙無く構えを保ったままもゼノヴィアの問に、書主は目を閉じたま

ま不敵に笑みを浮かべる。
構えは既に拳を軽く握っただけではなく、明らかに何らかの長物を構えているそれだ。
両手で柄を握りこむ構えは一見して両手持ちの剣を構えているようでもあるが、見えない以上はそれだけで断定する訳にもいかない。
「さて、どうでしょう。戦斧かもしれないし、槍剣かもしれない、いや、もしかしたら弓かもしれませんよ？　エクソシストさん」
「ぬかせ、剣使い」
書主とゼノヴィア。
相対する二人は互いの獲物を構えながら、共に顔に深い笑みを浮かべていた。
単純な喜色と獰猛さを備えた笑み。
種類が違うながらも、共に何かに対して楽しみを見出している。
数秒の間。
僅かな沈黙と共に再び鳴り響く剣戟の音。
ゼノヴィアの振るう一見して恐ろしく破壊力のありそうな巨大な破壊の聖剣を、書主の持つ見えない何かが打ち払う。
音と共に生まれる衝撃波さえ無ければ、出来のいいパントマイムのようですらある。
傍から見ている者達にとっては奇妙に映る光景。
だが、一番驚愕しているのはゼノヴィアだ。
破壊の聖剣の名は伊達ではなく、壊れる事無く真っ当に打ち合える武器はそうそこらに落ちているものではない。
破壊できなかったとしても、激突の度に発生する衝撃波は鍛えていない者であればあっさりと体制を崩す程の威力を持っている。
「惜しいな、君が悪魔の仲間で無ければ、教会へと招いているところだ」
死んでも構わないではなく、半ば以上殺すつもりで聖剣を振るいつつ、ゼノヴィアはそう溢す。
言葉と行動に矛盾は無い。
本気に近い攻撃を繰り返してもしのいで見せるその神器と使い手

の技量を惜しんでいるのだ。
仮に彼と出会い、彼の力を見たのが悪魔の巣窟の中で無いのなら、直ぐに教会のスカウト担当に連絡をつけていただろう。
戦闘中にも関わらずそう考えてしまう程には力がある。
「悪魔の仲間になった覚えはありませんよ。ただ、友達の一人が悪魔だった、というだけのお話です。教会に招かれても困りますけどね」
クリスチャンになる日なんて、年に数日あれば十分です。
日本人の宗教イベントに対する節操の無さを良く知らないゼノヴィアはその書主の言葉に内心で首を傾げ、考えても仕方がないと即座に思考を放棄した。
無心で、相手を倒す、斬り殺す事だけを思考し剣を振るう。
生まれるのは無言と、無言の沈黙を埋める剣戟の金属音と炸裂音。
「実はですねぇ、もう此方のやりたいことは終わってまして、ここらで分け、という事にはできませんか」
「断る。……と言いたいところだが、任務の最中に無闇に私闘を長引かせる訳にはいかんか。だが良いのか？　代わりに私を殴るのだろう？」
間合いを離し、剣先と剣先を掠らせるような距離での打ち合いを続けながら、既に二人の戦いは終わりに近づいていた。
そもゼノヴィアにはさほど目の前の少年に対して武器を振るう理由がない。
悪魔の仲間であろう事は明白ながら、完全に悪魔の側に付いている訳でもない。
エクソシストとしては裁くなり説法を説くなりするべきかもしれないが、聖剣奪還任務の最中に無理に行う事でもない。
戦士としての技量に恵まれた相手との試合は良い経験になるが、嫌がる相手に無理強いするのを良しとする程に傲慢でも無かった。
宗教に絡めることの無い事柄において、ゼノヴィアは一定の物分かりの良さを有しているのだ。
「あ、そんな事も言いましたか。どうせ誰も真に受けてないでしょうけど。じゃあ後でしっぺさせて下さい。形だけでいいので」

「君と魔女アーシアは友人ではないのか……？」
「え？　うーん……よくよく考えると、アーシアさんとも付き合いは少ない方なんですよね。学年違う共通の話題も無い異性って、中々親しくなる事は無いものですよ」
「そういうものなのか」
「ゼノヴィアさんはもう少し一般常識も学ぶべきかもしれませんね」
言葉を幾つか交わす間に徐々に剣戟の間隔は長くなり、最後には双方武器を下ろし、構えを解く。
戦いを遠巻きに見ていたギャラリーは、そのなんとも言えない雰囲気で終わった模擬戦に、どう反応を返せば良いのか戸惑うことしか出来なかった。

いや、いい試合だった。
今回はぐれさんが持ってきた武器がこの世界のエクスカリバーの成れの果てだとわかったから急いで用意してみたのだが、大成功だ。
今回のＭＶＰは間違いなくはぐれてないさん――ゼノヴィアさんで間違いない。
ボディライン剥き出しのボディスーツにマントを羽織るという痴女感丸出しの格好だと聞いた時には流石にドン引きしたが、瞼を開けなかったのでさほど気にならなかったし。
試合中にあの掛け合いをさせてくれる辺りは本当に間がいいというか、空気に愛されているというか。
エクソシストで無ければ知り合いの通っている忍者学校に推薦したいくらいだ。
「それで」
「はい？」
部長さん、グレモリー先輩が此方を向いて声を掛けてきた。
声の調子からして困惑九割感謝一割という感じだろうか。
感謝の意図が読めないが、困惑の理由は解らないでもない。
「イッセーの代わりに戦って、貴方の目的は果たせたのかしら」
「いいえ？　別に彼女たちは此方の用事とは関係無いですし」

正直、この世界のエクスカリバーの成れの果ての強度とか威力を少し測っておきたい、という理由が九割。

一割は、説得力を出す為か。

腹部に聖剣を掠らせて、アーシア先輩の治療を受けてよろよろと立ち上がった木場先輩に近づき、肩を抱きながら耳元で囁く。

「どうです？　此方の提案、乗ってみる気になりました？」

「……君の力を借りなくても、僕は……」

顔を背け、僅かな沈黙の後にそう拒絶する木場先輩。

だがその沈黙は迷いと見た。

もう一人のはぐれてない人と戦い、そして此方とゼノヴィアさんの戦闘の顛末を聞き、彼の中には迷いが生まれた。

ゼノヴィアさんをテストの相手に選んだのはこの迷いを作り出す為でもある。

スピードとテクニック主体のもう片方と戦えば、彼が戦闘法を間違える事はない。

戦闘中に木場先輩ともう一人の動きも感じていたが、彼の動きは怒りに依って多少力みはすれど、何時もどおりの柔軟性のある立ち回りだった。

つまり、彼は全力で戦った上で、あの聖剣使いに負けたのだ。

これで相手がゼノヴィアさんであれば、彼の中にある原因不明のエクスカリバーへの対抗心から自分の長所を捨てた戦いをしたかもしれない。

そうなれば負けても、心の何処かで言い訳をしてしまう。

何時もどおりに戦えていたなら勝機はあった。

そんな言い訳が心の中にあれば、誰かを頼ろう、という発想は生まれ難い。

そして、彼はそういう言い訳をする目を全て潰された上で敗北した。

彼もまた何かの理由で戦いを重ねて力を磨いてきたようだが、仮にも聖剣を預けられるエクソシストが相手では勝ち目が薄く、使う武器の強度の関係でどうしても一枚上を行かれる。

「最初に言ったでしょう？　エクスカリバーは好きにしていい、って。でも、今の貴方じゃあ、好きにする前にあのエクソシストさん達に先を越されてしまうでしょうねぇ……」

「……場所を、変えよう」

ゆっくりと立ち上がる木場先輩。

うん、これで引き込めたも同然だろう。

別段、彼に力を貸す理由も無いけれど、これも一つのおすそ分け、というやつだ。

沢山釣れた魚、一匹二匹分ける程度に拘泥していては人生は楽しめない。

しかも彼のメインターゲットが器物、しかも剣七本程度、それくらいなら此方もそれほど気にならない。

この暗い暗い態度はオカ研の空気も悪くしているらしいし、所謂一つの人助けにもなる。

我ながら、中々に人道的ではないか。

しかも面倒な事になった時は、グレモリー眷属というネームバリューから彼の方が目立ち、此方の隠れ蓑にもなる。

まさにＷｉｎ―Ｗｉｎ。

「何処に行くつもり？」

歩き去ろうとする木場先輩の前にグレモリー先輩が立ち塞がる。

あの流れで負けた木場先輩がこの場を去ろうとしたなら、それは当然王として止めるだろう。

でも大丈夫、何しろ木場先輩は別に眷属を抜ける訳でも、エクスカリバーを探す訳でもない。

一々そこら辺を説明するのは面倒なので、此方が簡易に言い訳をしておくという心遣いも忘れない。

立ち塞がるグレモリー先輩と進もうとする木場先輩の間に割って入る。

「すみませんね。ちょっと此方、放課後に木場先輩に付き合ってもらう約束をしてまして」

「本当なの、祐斗」

「……ええ、少し、彼と話をする約束を、先延ばしにしていたので」
「……エクスカリバーを追う訳ではないのね？」
「少しファミレスで食事をして、お話するだけですよ。ほら、剣を使うから、結構共通の話題はあるけど、じっくり話した事は無いので」
嘘ではない。
話をした結果どうなるかは今のところ決まっていないのだから、少なくとも現状では一切の嘘偽りはないのだ。
別に、共通の話題で話すとも言っていないし。
もしかしたらの話ではあるが。
話がこじれにこじれたり、此方が彼のエクスカリバーに対する熱意にほだされた結果として、街で神父を殺して回る凶悪な殺人犯を追うという名目で、悪魔の彼に無辜の一般人である此方が引っ張られる形でエクスカリバーを探す羽目になるかもしれないが。
それはこれからの話し合い次第だ。
「……わかってると思うけど、私のかわいい下僕に手を出したら」
「大丈夫ですって、此方は巨乳好きのノンケで、素晴らしい彼女も居るんですよ？」
軽い冗談にグレモリー先輩は反応を示さない。
信用しきれないけれど、止める理由も見当たらない、という事か、身体を退けて道を開けてくれた。
此方を見る幾つかの視線を感じるが、声を掛けてこないのなら反応を返す必要もない。
去り際に少しだけ振り返り、別れのあいさつをだけを残して、一人で先に進んでいる木場先輩を追い掛けた。

二十話　展示会詐欺に遭っていた間抜け

昼休み、昼食をつまみながら、ふと頭の中に思い浮かんだのは昨日の光景でした。

昨日の光景、と言っても、別にエクソシストと祐斗先輩や読手さんが戦う場面ではありません。

悪魔が聖剣使いに負けてしまうのは想定の範囲内だし、読手さんなら正直あれくらいはやって見せても別に驚く程の事でもないので。

私達は強いがとても強いというほどで無く、たぶん読手さんはかなり強いのだろうと思います。

だから、重要なのはその後。

読手さんが祐斗先輩の肩に手を回して、耳元で何かを囁いていました。

読手さんは何時もよりもニヤニヤしていた気がするし、あれほど近い距離で誰かに何かを話す事はそんなに無かった。

似たような距離を取っていたのは、街で日影さんと歩いているのを見かけた時か。

「……まさか」

いや、それこそまさか。

日影さん相手にしかしない様な距離で祐斗先輩と話していた。

たったそれだけで、こんな変な考えを断定するのも口にするのも不味い。

余りにも短絡し過ぎている。

冷静になって考えよう。

少なくとも、読手さんが日影さんという露骨に女性らしい女性と付き合っているのは間違いない。

偶に日影さんと読手さんの体臭が交じり合っている時があるけれど、たぶんあれがリア充の匂いというもの。

万が一影さんがカモフラでしかないとしたらあんな匂いがする訳がない。

少なくとも、女性と肉体関係を持つ程度には女性に興味がある、と

いうのは保証される。
「……バ」
天啓を反射的に口にしかけて、慌てて首を振る。
……そういえば、恋愛対象が二倍になるから人生をより楽しむ事ができるとかどうとか深夜番組で……。
いや、いやいや、いやいやいや。
待とう、一つ待とう。
ここは教室、時間は昼休み。
普通はこんな考えを持つに至る理由は無い。
たぶん、昨日見た光景の中の何処かが、私の第六感的な何かに干渉して警鐘を鳴らしているに違いない。
冷静に、冷静に……。
冷静に考えれば、昨日の読手さんの挙動は明らかに不自然で怪しい。勿論真面目な意味でだ。
それは昨日、エクソシストと戦う前にも一度考えた。
その疑問は晴れていない。
あえて結びつけるならそこだろうか。
主義を曲げてまでエクソシストと戦ってみせた。
これが、木場先輩と会う用事と合わさる。
……そうだ。
不自然な点が、もう一つ。
何故あの時読手さんはよくわからない武器を使った？
単純にエクソシストと模擬戦をしたいというのなら、あの六刀流で戦ってもいい。
聖剣に耐えられる武器ではないから？
それなら魔法で戦う手もある。
私が知っている魔法ですら、並の剣にかけるだけで一流の魔剣相当の性能にできるものがある。
そもそも、『あの聖剣を正面から叩き切る』魔法だって存在するのだから、叩き伏せるのが目的ならそのほうが手っ取り早い。
……武器で、対向する必要があった？

魔法という技術ではなく、持ち主を簡単に変えられる、聖剣に対抗できる武器があると。

誰にそれを知らせたかった？

決まっている、祐斗先輩だ。

でも祐斗先輩は自分の神器で戦う事に拘っていた。

簡単に頼る筈が無い。……聖剣使いに、完全敗北していなければ。

祐斗先輩に勝てる武器を与える為に？

いや、武器である必要は無い。

仮に、聖剣の攻撃を防げる防具か何かがあれば。

……仮にあるとして、それを祐斗先輩に使わせる理由はなんだろうか。

本気の本気で祐斗先輩を手伝う為に？

まさか、と、笑い飛ばそうにも、笑い飛ばすだけの根拠も無い。

面倒くさくならない範囲なら、無理の無い程度には人助けもするタイプだ。

普通に考えれば、エクスカリバーを盗んだはぐれエクソシストと正式なエクソシストの追いかけっこなんて面倒でしか無い。

でも今回の一件、冷静に一つ一つ要素を分解して考えれば、面倒は殆どと言っていい程存在しない。

二つの教会からそれぞれ聖剣使いのエクソシストが、強奪されたエクスカリバーを回収しにやってきた。

最低限の目標は、強奪されたエクスカリバーが他勢力に渡る前に破壊し、利用できなくすること。

この時点でエクスカリバーは面倒に含まれなくなる。何しろエクソシストにばれないように破壊するか、エクソシスト達に破壊させれば丸く収まる。

更にそのエクソシスト、持ち込んだ聖剣は強奪されたものと同じくエクスカリバーで、これも他所に渡らなければ破壊してしまっても問題ない。

挙句の果てにこのエクソシスト二人、文字通り命を賭けてこの任務に挑んでいて、死んだとしても何処からも追求は来ない。

そして堕天使コカビエルとかいうのがどんなタイプなのかは解らないけれど、ある程度の均衡を保っている三つ巴の中で、エクスカリバーを強奪して我が物にしようというのは、少し、常識を外れた思考をしている。

この騒動……名付けるならエクスカリバー強奪事件、現場に関わる人員も、軸となるエクスカリバーも、その全てが全て、失われても誰も困らず誰も文句を言わないもので構成されている可能性がある。

そう、規模は大きくなっているけれど、大暴れして全てをまっ平らにしても問題にならない、という点で言えば、正しく読手さんが好む騒動だ。

彼が何故、そういう対象を狙った、暴力とも殺害とも破壊とも言えない非日常的行為に耽るのかは解らない。

けれどもしかしたら、彼は日頃はぐれ悪魔を相手にする様な気分で、このエクスカリバー強奪事件に手を出そうとしている可能性が高い。

「どうしたんですか、そんな何考えてるんだか解らない真顔で」

「失礼ですね、名推理の途中に」

……。

「にゃっ!?」

今まさに思案の対象にしていた相手から声をかけられ、その唐突な登場に喉の少し奥の方から変な声が飛び出した。

一昔二昔前の漫画だったら口の中から心臓が飛び出していたんじゃないでしょうか。

いや、そうじゃなくて。

「よ、読手さん?」

「他の誰かに見えますかにゃ?」

「……」

「謝りますから無言で箸を振りかざさないで下さい」

不意を突かれた挙句に変な声を聞かれてしまった上にそれを誂われた。

頬が熱い、たぶん傍目には見事に紅潮している。

彼が常から目を閉じていて良かったと思うのはたぶんこれが初だ。
振り上げた箸を下ろし、深呼吸して努めて早めに心を落ち着かせる。
ついでにお弁当の中の卵焼きに箸を突き刺し、口元に運ぶ。
……うん、甘い、美味しい。
コンビニのお惣菜で気になったから入れてみたけど、これは単品買いでおやつにも有りな甘さじゃないでしょうか。
「その食べ方は行儀が悪いですよ」
「うっさいです……」
もっちゃもっちゃと態と音を立てて荒っぽく食べる。
口の中の罪もない卵焼きに八つ当たりを済ませたところで、いつの間にか目の前に立っていた読手さんの手荷物に気付く。
「なんですかその大荷物」
それはパンパンに膨らんだ購買部のビニール袋、しかも購買部に置いてある中では一番大きいサイズのものだった。
中身は……少し溢れているから直ぐにわかった。全部購買で買えるパッケージングされているタイプのパンとおにぎりだ。
一緒に昼食を取る機会もまぁまぁあるから知っているけれど、読手さんは普通よりも食べる方だけれど、決して大食いという程でもない。
「あはは、冷蔵庫借りようと思ったら、保健室のも用務員室のも使わせて貰えなくて……」
自分の頭を平手の先で軽く叩きながらそんな事を言う。
むしろ何故使わせてもらえると思ったのか、という問いは置いておくとして。
私が聞きたいのはそんなことではなくもっと根本的な事だ。
「それ、全部食べるんですか？」
袋を内側から圧迫しているパンやおにぎりは多種多様で、それこそ購買で売っているものをとりあえず全種類買ってみました、というレベル。
全部食べようと思ったなら、それこそ数日は全食購買という半ば罰

ゲームなのではないか、という苦行になると思う。
「いえ、今日は、日影さんがお弁当を作ってくれたので一緒に食べてきました」
感慨深げにそう言い、食料が詰まった袋を適当な机の上に置く。
「日影さんのお手製弁当を一緒に食べてきました！」
ぐっ、とガッツポーズを決めながらとびきりの笑顔で力強く宣言する読手さん。
周囲からの舌打ちの一切を聴覚から遮断しながら、大事な事だからこそ二度繰り返しての宣言。
強い愛を感じる……、これがリア充ですよ部長、未だに手を出されていない部長、聞こえていますか誘い受け処女の部長？　聞こえたら困りますけど。
私？　そういうの、まだ解らないので。安売りするつもりも無いですし。
「じゃあそのパンは」
「今日の市街探索で必要になるので。スーパーに寄るよりは早いし、コンビニで買うよりは安いですからね」
市街探索。
ぴくりと全身の筋肉が反応を返してしまった。
彼はエクスカリバーを探すつもりなのだろう。
学校を休んで探索に励むでもなく、学校帰りの寄り道レベルの感覚で。
……放っておいて、大丈夫だろうか。
ふと、一抹の不安が頭を過る。
彼は強い。それは間違いない。
たぶん。今の私では一対一では間違いなく勝てない。
神器を完全展開したイッセー先輩でも勝てない。
部長、副部長は論外、祐斗先輩もわからない。
下手をしたら、私達グレモリー眷属が束になっても敵わないだろう。
だけど、私は彼がどれくらい強いのか、どういう強さを持っている

かをあまり知らない。
騎士を凌駕する速度で動ける。
堕天使やエクソシストを紙切れの用に容易く切り刻める。
山の様なサイズのゴーレムを短い詠唱で作り上げてしまう。
……はっきりとわかっているのはこれくらい。
もしかしたら、耐久力は低くて打たれ弱いかもしれない。
もしかしたら、精神に作用する魔法に耐性が無いかもしれない。
もしかしたら、何かしらの魔法や道具で拘束されたら抜けられないかもしれない。
一人で、祐斗先輩と一緒に戦うと仮定してもたったの二人で戦って、相手がもしも読手さんの弱点を突いてきたとしたら。
フォローする人が居なければ、その力を発揮しきれないとしたら。
彼は今度こそ死んでしまうかもしれない。
私の知らない何処かで。
「市街探索ですか」
「ええ、ちょっとブラブラしてこようかなぁと」
それは、嫌だ。
祐斗先輩が死ぬかもしれない、という考えは、私の中で消えていた。
彼が一緒に行くのなら死ぬことは無いだろうと、教会での事から無闇に信用していた。
だけど、読手さんだって万能じゃない。
一緒に行く祐斗先輩も死ぬかもしれないし、当然読手さんだって死ぬかもしれない。
眷属仲間と、友達が死ぬ。
それは、とても悲しい。泣いてしまうかもしれない。
「私もご一緒します」
言い切る。
許可を取るのでもなく、付いて行く事を決めた。
断られても無理矢理にでも付いていこうと決めてしまった。
別に、読手さんが心配な訳じゃない……とは言わないけれど。
これは私のための選択だ。

二度と、私が動かなかったせいで誰かが居なくならないように、私が泣かずに済むように。

「え、いいんですか？　いやぁ、ありがとうございます！　たぶん、大人数の方が捗ると思うんですよね今日の探索！」

過去を振り返って自分自身を殴り飛ばしたいと思った事はそれなりにある。

それ以上に竜破斬をぶち込んででも止めたい肉親も居るけれど、やっぱり過去に戻ってどうにかしたいと思う回数は自分に対するものの方が多い気がする。

それは過去が薄れたということではなくて、きっと過去に戻りたいなんていう空想で挙げられる失敗なんていうのは、軽々しくて猥雑な方が頭に浮かびやすいから。

口の中の焼きそばパンを咀嚼し、ほんの数時間前にシリアスな思考をしていた自分の手を引いて帰宅を促す妄想を頭の隅で行いながら、私は目の前で繰り広げられているしょうもない光景を半目で見つめている。

「もっしゃもっしゃ、おやエクソシストの人と、もっしゃもっしゃ、ゼノヴィアさん、昨日の今日で奇遇ですねぇもっしゃもっしゃもっしゃごくり」

「君は昨日の……た、食べながら話すのは、行儀が悪いぞ……」

行儀を注意しながらも、エクソシストの人は決して短くない沈黙の中で生唾を飲み込む。

エクソシストと直接話している読手さん以外、放課後に合流したイッセー先輩、シトリー眷属の匙先輩も、一言も発する事無く黙々と、しかし可能な限り美味しそうに味わいながら購買で買ってきた食料を貪っている。

私もその内の一人、まぁ、悪魔が前面に出て交渉するよりは、人間であり悪魔と契約をした訳でもない読手さんが出る方が良い、というのはわかる。

でもこのやり方はどうだろうか。

いや、効果があるのは、もう、読手さんと話ながらも指先が読手さんが手に下げている食料満載の幾つかのビニール袋に向けてワキワキと動いているところから見てもわかるんですが。

無意識の内に食料を求めて蠢いているであろうエクソシストの指の動きに一切の興味を示さず、読手さんが再びビニール袋の中からパンを二つ、三つと纏めて取り出す。

「そうですねぇ、でもほら」

焼きそばパンの包を片手で器用に外し上に放り投げる。

あっ、とエクソシストが声を上げながら宙を舞う焼きそばパンに指先を伸ばす。

が、目の前で弧を描いて落下した焼きそばパンは、上を向いて口を開けていた読手さんの口の中に消えて行く。

そして、焼きそばパンは数回噛まれただけで碌に味わう間もなく、ごくりと嚥下されて読手さんの胃の中に飲み込まれていった。

「あぁ、ああ」

伸ばした指先が行き場を失い頼りなく揺れる。

その指の先、二つのパンを片手で弄んでいる読手さんの表情は邪気のない笑み。

「賞味期限もそんなに無いから、早めに食べちゃわないといけないんですよ。夕飯もあるから食べ過ぎるのもあれでしょう？　友人と先輩にも手伝ってもらっているんですけど、中々減らないんですよねぇ」

「そ、そうか。……なんなら、手伝ってやっても」

「いやぁ、敬虔な信徒である、しかも年頃の女性に道端でパンを立ち食いさせるなど……。あ、なんでしたらそこの公園に行きませんか？　丁度良く座れそうなベンチもあった筈ですし」

一も二もなく頷くエクソシスト二人には、祐斗先輩を圧倒した時の力強さも、読手さんと剣戟を繰り広げた時の迫力もまるで存在しない。

やり方は実に卑劣だけど、効果は抜群だ。

でも、こう、こんなマヌケな演出をする為に力を貸す、というのは、

数時間前の私の決意的に、違うというか。
いえ、最初に提案された、『お布施を乞うエクソシストに善人が近づかない用にさり気なく妨害して三日ほど放置して飢えさせてから目の前でゴミ箱に食べかけのパンを投げ捨ててゴミ箱を漁るか確認する』とかに比べればまだ意図が読めるだけマシですけど。
もしかして今回、それほど真剣に考える必要、無かったりするんでしょうか。

「いや、助かった。悪魔を友とするような異端にも、君のような善人は居るものなのだな」
「だからといって、悪魔とつるむ事を許容した訳ではないけれどね。どう？　今からでも真人間の道に戻ってみたら」
と、公園でビニル袋2つ分の食料をぺろりと平らげてしまったエクソシスト達は見事に調子を取り戻してしまった。
少し前までは勢いで強盗やカツアゲくらいは平気でやらかしそうなレベルで追い詰められていたというのに、回復が早い。
しかも此方や知り合いのニンジャ連中と同じく特殊な消化訓練を行っているのか、食べ過ぎた事による思考能力や認識能力の鈍化は見られない。
遠い空の下で今日も頑張っているであろう女子高生ニンジャ達が、教官がトスしたパフェやアイス、牛乳やうな重を次々と口でキャプチャーして胃の中に押し込みながら忍務をこなすのと同じように、聖書系エクソシストも補給と活動を同時進行で行う場面が多いのかもしれない。
こう、十字教的には神の肉と血であるパンとワインをかっ喰らいながら悪魔をバッタバッタとなぎ倒すような感じで……。
あれ、一周回って逆にワイルドで格好いい気がしてきた。
探せばそういうアクションゲームがありそうだ、パンで体力回復、ワインで術ゲージ回復みたいな。
「いえいえ、此方むしろ善人過ぎるほどなので、悪魔と友達なくらいで丁度いいバランスになるんですよ」

軽口で返しながら周囲の気配に気を配る。
生憎と、食事時という如何にも隙が多そうなタイミングで此方を狙おうという輩は居なかった。
態々人気の少ない夕暮れ時の公園に招いて、両手で同時のおにぎりやパンを持って手が塞がるようにして食事を取らせたというのに、拍子抜けもいいところだ。
「君が善人かどうかは置いておくとして、本当に助かった」
「ああっと、十字と祈りはやめて下さいね。悪魔系の方も居ますので。日本では食事を終えたら『ごっつぁんです』と唱えながら手を合わせるんです」
「ｇｏｄ　ａｎｄ　ｄｅａｔｈ？　深い言葉だな」
ゼノヴィアさんのポエットな言い間違いに頷く。
外人に会ったら嘘日本作法を教えるのは誰しもが通る道ではないだろうか。
隣のエクソシストさんが何か言いたげな視線を向けているが何も言わない辺り、来日する途中で自分も嘘を教えこんだりしたのかもしれない。
「それで、私達に接触してきた理由はなんだ？」
先程までのどうでもいいやり取りと同じトーンでゼノヴィアさんが本題に踏み込んで来た。
背後で寸前までのやり取りに呆れていた悪魔の三人が僅かに身構えたのは、ゼノヴィアさんの後ろでもう一人がひも状に変化させたエクスカリバーに手を添えているからか。
だが何故そこまで警戒されるのだろう。
確かに兵藤先輩なら戦い方次第でこの二人を圧倒できるし、塔城さんなら遠距離から周囲の一般人を巻き込む覚悟で行けば二人に完勝できる。
だがこの二人の現時点での能力が、鉄砲玉扱いされるような人達に通達されるものだろうか。
そもそも二人が今の実力になったのはつい最近だから、悪魔系の方々でなければ実力は知り得ないと思ったのだけれど。

「ちょっとお手伝いをね」
「お手伝い？」
「エクスカリバーをぶっ壊したくて仕方がないっ！　……ていう先輩が一人居まして。まぁ、此方も少し目的が被るから手伝ってるんですけど、ほら、元の持ち主は貴女方の組織じゃないですか」
「あの悪魔か……ふむ、いいんじゃないか」
「ちょ、ゼノヴィア、もう少し考えて返事しなさいよ！　相手は悪魔の味方なのよ？」
　別にＩｔを完成させるつもりはないのだけれど。
「彼が手伝うというのなら、此方にとっても心強い。少なくとも、聖剣相手に悪魔を肉盾にするよりは余程勝率が上がる」
「それはわかるけど！」
「まぁ聞け。彼は難航する任務中に突如現れた異国の善良な腕の立つ剣士、彼の力を借りて、私達は見事使命を果たした上で無事に帰還。……ほら、何処にも悪魔は関わっていない」
「詭弁よそれは！　エクスカリバーを探しているのは悪魔の方なんでしょう!?」
　さっきからこの人声がでかいな。
　しかも大声でこんな日も沈みきっていない時間帯にボディスーツマントで身振り手振りを加えながらエクスカリバーがどうとか連呼してるし。
　知り合いと思われるのは恥ずかしいし、少し距離を取ろう。
「だが助力を嫌って命を投げ打つよりは、多少の恥を晒しても生きて戻る事こそが信仰だろう。信仰を通す為には時に柔軟性が必要だとは思わないか？」
「……やっぱり、貴女の信仰心は、変だわ。新派とか旧派とか関係なく」
　遠巻きに二人のやり取りを聞きながらも周囲の気配を探るも、やはり何処からも敵意や害意の類は感じられない。
　やはり、聖剣使いが重点的に狙われるという訳ではないらしい。
　惜しい話だ。ここで二人を襲いに出てきてくれれば、そこを捉えて

バックに誰が居るかを聞き出すか読めるものを。
あれだろうか、キャッチアンドリリースされた魚は釣り針で出来た怪我から、それ以降は人の気配を避けるようにコソコソと生きていくという習性と似たようなものか。
……だとすると、此方が表に出てこいつらにくっついている間は姿を表さないか。
面倒な習性をもったはぐれエクソシストさんだ。
「あと、そこのエクソシストさんの幼なじみらしい兵藤先輩、悪魔というよりはドラゴンに近いですから。そっちを言い訳にするのもありだと思いますよ」
「何？　どれどれ、『主と精霊のご加護を』」
聖句を唱えながら十字を切るゼノヴィアさん。
背後では二人、塔城さんと匙先輩が苦痛を堪えるように頭に手を当てている。
が、兵藤先輩はノーリアクション。
僅かに片方の眉毛がぴくりと動いた程度か。
それ以外の部分は十字を切る時に腕の動きで僅かに歪んだゼノヴィアさんのオパーイの動きに合わせてするすると鼻の下が延長して目尻がとろりと垂れ下がったくらいだがこれは明らかにダメージではない。
龍化が進みすぎて、悪魔の弱点が意味を成していない証拠だ。
仮に兵藤先輩が聖剣で斬り付けられたとしても、対ドラゴン属性でも付いていない限り、今の彼の肉体は通常の刃物としてのダメージしか負うことは無いだろう。
「へぇ、不思議ね。もしかして神のご加護……って事は無いか。神器？」
先程までの不満気な雰囲気を消して面白げに問うエクソシストさん。
背後の三人は即座に返答する事無く口ごもっている。
仕方あるまい。
兵藤先輩の肉体が徐々に龍化しているのは此方の救急救命の結果

ではあるが、彼等は神器の影響であると理解している。
しかもその神器は世界に一種一つしか存在しない神滅具。
兵藤先輩の神器が赤龍帝の籠手である事は少し前にあった模擬戦で悪魔の一部に知れ渡っているけれど、それを教会側に知られていいのかどうか、という点に関しては指示されていない可能性が高い。
「赤龍帝の籠手とかいう神器らしいですよ。エクスカリバーの探索に力を貸すのが赤い龍だなんて運命的ですよわぁ凄い」
まぁ悪魔の事情なんて此方の知ったことではない。
これ以上このはぐれてない人らの周りをうろちょろする必要性も無い以上、此方は此方で独自に動かせて貰わなければならないのだ。
「なるほど、赤龍帝か。倍加を続ければ魔王に匹敵する力を得る事ができると聞いているが……」
「魔王様というのを見たことが無いのでどうとも言えませんが、そうですね。貴女方二人が連携するよりも、兵藤先輩が神器を全開で戦った方がまだ強いのは間違いないでしょう」
「ほう、そこまでのものか。まさに伝説に相応しい力という訳だな」
「……ゼノヴィア、さっきから貴女、ちょっとこの男の言うことを素直に信じすぎじゃない？」
もう一人の方が不審そうにゼノヴィアさんに問う。
さっさと一時的協力を取り付けたいから黙っていたけれど、それは此方も少し思った。
大体の場合、暫く力を示していなかった伝説の武器や力なんてものは軽く扱われるものなのだが、何故ここまで素直に信じるのだろう。
「何、剣を合わせた者であれば感じるところはある。彼はこういう場合に嘘を言うタイプではない」
「そうなんですか」
此方はゼノヴィアさんが天然でキノコ調のセリフを台本なしで返してくれる楽しい人としかわからなかったが。
「そうだ」
此方の問にもっともらしく頷くゼノヴィアさん。
正直、剣を合わせたくらいで相手の人格なぞそう解るものでは

ないと思うけれど、それで信じてくれるなら面倒が少なくて済む。
「なら、この場はこれで終わりですね。それでは、ここからは探索範囲を広げる意味でも別行動という事で」

唐突にそんな事を言い出した読手さんは、私達の目の前で音も無く跳躍した。
空に向けてゴムボールを投げたような気軽な放物線を描き、電信柱の上に着地。
……した、のだと思う。たぶん、そこに居るのだろう。
普通に考えれば電信柱の上に乗った人間というのは目立つ。
だけれど、電信柱の上で夕日に照らされている彼の姿はうっすらと霞でも掛かっているかの用にぼやけている。
仮に彼の姿を誰かが目撃したとして、見間違いかと一度目を離してから見なおしたなら、次にはそこに居る、と認識する事は難しいだろう。
視覚的に、というよりは、感覚的に彼の姿を認識する事が難しい。
まるで蜃気楼か、白昼の月のように存在感が朧気だ。
これが、彼が以前に言っていたニンジャのジツなのだろうか。
「塔城さんか兵藤先輩は木場先輩に連絡をお願いしますね。話は通してあるので」
大声でもなく、まるで耳元で喋っているかの様に読手さんの声が聞こえた。
この感覚には覚えがある。
思い返されるのは一時的な、それでも決定的な別離になるかと思われたあの日の放課後。
あの時の事は今でも時々思い出す。
思い出し、でも、それで思い悩む事はない。
「わかりました。読手さんも気をつけて」
あちらの声が聞こえても私の声が届いているかはわからない。
それでも、聞こえているものとして返事を返す。
あの時は返さなかった、返せなかった返事。

今は躊躇いなく返す事ができる。
追い掛ける必要すらない。
彼が何を考えてこんな事をしているかははっきりとはわからない。
でも、何処に向かっているか、何を目指しているのか、今はそれがわかっている。
彼の目的はわからない。
でも、結果として、祐斗先輩が私達の目の前から消える事はなくなる。
私達がしっかりとやれるのなら。
そして、今の私には、それをやり遂げられるだけの力もある。
電柱の上から読手さんが消えるのを確認して、振り返る。
「……行きましょう」
まずはメールで、それで反応が無ければ電話で祐斗先輩を呼び出す。
公園で延々話しているのも間抜けだから、適当なファミレスに集まるのもありかもしれない。
少なくとも、もうこの公園に屯している理由は無くなった。
「行くって、何処へ」
イッセー先輩の問いに、ファミレス、と言いかけて、それも間抜けだな、と口を閉じる。
ファミレスに行くのはあくまでも祐斗先輩と合流して、事を荒立てずに話を纏める為。
だから、あえて私達の向かう先が何処かと言えば。
「エクスカリバーを……ぶっ潰しに」
助けたい人が居る。
障害があって、それを叩き壊す力がある。
協力してくれる仲間も、友達も居る。
なら、あとは行くだけだ。

二十一話　夜の校舎に復讐者

放課後、家に帰る前に、目的も無しに街をぶらぶらと歩く。
歩く場所は何処だっていい。
民家しかない様な静かな住宅街、駅周辺の繁華街、店も家もまばらな郊外、何故か点在する森。
何処を目指している訳でもない、何の変哲もないただの散歩だ。
途中に気の利いた店で買い食いをする事も、適当に土産を買っていく事もある。
何をするのも自由。
歩きながら、恵まれているな、と思う。
何が恵まれているのか、と、誰かに問われたなら、彼女はしばし考えた後、全部、と答えるだろう。
この街は恵まれている。
平和で満ち足りた街だ。
それは善人にとってだけでなく悪人にとっても。
決して全てが健全という訳ではない、一般的な社会悪も存在する平凡な都市だ。
都市機能も充実しているけれど、自然も無い訳ではない。
住みやすい土地だ。
比較対象は多くないけれど、それでもこの街は居心地がいい。
そして、そこに住むことのできる自分は恵まれている。
そう考える程には、今の境遇に満足している。
住んでいる場所は言わずもがな。
いや、いい街だと、そう思えるからこそ、思うのだ。
「……そろそろ帰ろか」
口にして改めて思うのだ。
こんなに歩いていて飽きない街で、抜け忍を始末する為の刺客も気にしなくていい平和な街で、ふと沈む夕日を見て帰ろうと思える事実。
帰る家の、そこに待つ人の持つ暖かさを思い、ぱっと頭のなかに浮

かぶ『帰ろう』という思い。
そして、それを阻むものの居ない、今の生活。
彼女のものであり、しかし彼女のものでない『かつて』の記憶と似て、けれど決定的に違う生活。
特定の大きな組織に日常的に命を狙われる事のない、平和な生活。
しっかりとしたバックボーンがあり、将来に何をしようか、いくら思い悩んでも時間が足りない程の自由。
何もかもが有り過ぎる、足りすぎる生活だ。
不満も不便も少なからずあるけれど、それでも文句を付ける気にならない。
沈む夕日に手を延ばす。
掌に遮られて、橙色の夕日が欠ける。
満ちた姿も欠けた姿も美しい。
美しい、好ましい、と、はっきりと思える。
彼女『日向日影』には、モデルとなっている『日影』には欠けていたものがある。
彼女は、自らの感情をはっきりと自覚できる。
普段から無い無い言っているが、あれはあくまでもポーズの一つなのだ。
一種の照れ隠しと言っても良い。
彼女は喜びも怒りも哀しみも楽しみも知っている。
モデルとなった『日影』としての記憶があるからこそ、その事実を幸福である、と感じる事が出来た。
理解できない、自覚できない、というのは、悲しい訳でも不幸な訳でもなく、勿体無い。
理解出来なかった記憶があるからこそ、彼女はそう確信している。
暖かく輝かしい太陽も、様々な姿を見せる空も、種々様々な形態を見せる建築物も、力強い原色の自然も、そこで笑う人々も、人でないものも。
それを見て、何かを思える、何かを感じることが出来るのは、間違いなく幸福なのだ。

それが怒りであれ、喜びであれ。

「ん」

網膜を焼く太陽の光に目を細めていると、携帯が鳴り出した。

「なん？　……うん、ええけど、なんか手伝う？　……ええよ、そんなん。ほんじゃ、なんか買ってくわ」

言葉には飾り気もなく最低限、口調も平坦だ。

平坦な声で、それでも、聞く者が聞けばそれとわかる程に親しみや温かみが感じられる。

薄っすらと優しげな笑顔も浮かべている様は、彼女のモデルと日常的に付き合いのあった者からすれば僅かな驚きすら与えるだろう。

勿論、モデルとなった『日影』が笑わなかった訳ではないが……。

「うん、せやな。でもええやろ？　こないだＴＶでやってたヤツやし、失敗は……」

言葉が途切れる。

笑顔が溶けるように消え、ぼうっと、先の定まらない視線が遠くを見据える。

獲物を狙う蛇の視線だ。

元となった『日影』としては、此方の表情をよくしていたのだろう。

血液からすら温度が抜けたような冷たい表情、戦士の貌、忍者の面がよく馴染む。

視線の先に見えたのは異物だ。

それなりの平和とそれなりの不幸が入り混じった、平凡で平均的で満ち足りた街には居ない異常。

「見つけた」

彼女の主の、彼女の親の、彼女の恋人の敵だ。

優しい人に、して欲しくない笑顔をさせる敵。

彼女に与えられた日常の破壊者。

ハッキリと憎しみと嫌悪を感じさせる相手。

言い訳の余地すらない彼女の敵だ。

「……うん、……大丈夫や」

釘を刺されると共に心配され、僅かに憎しみが薄れる。

同時に湧き上がるのは哀しみと哀れみか。
平和に生きられる筈なのに、自ら異常と危険に踏み込んでいく。
そうでなければ、真っ当で居られないという異常。
自分という存在を作り出し、それでも未だ修羅の道から抜け出せない。
「ええよ。場所は探しとく。ついでや、ついで」
ならば、と思う。
抜け出せないのなら、共に居よう。
かつての『日影』が、紅蓮の少女達と共に在ったように。
共に修羅の道に在り、日向として照らし温め、休む為の日影となろう。
「わかっとるよ。殺さんように、死なんように、やろ」
鞄を手に下げたまま、もう片方の手にはナイフを構える。
平和と平穏を手に、捨てない為に、捨てさせない為に刃を持つ。
それが、日向日影という忍の、自らに課した唯一の忍務だ。

助けを求めた。
今にも失われるかも知れなかった自分の命。
永遠に無為に失われてしまった仲間。
何もかもが流され、傷付くままに途絶えようとしている自分の人生。
只々救いを求めた。
求めても求めても足りないと思う程、救われていなかったと思っていた。
生きたい。
失いたくない。
死に蝕まれ、命という命を損なっていた僕が思えるのはそれだけだった。
願い、力、才能。
失われる全てが恐ろしかった。
仕方のない事だ。そう思いながら、今でもふと思い出し、自覚する。

僕は、浅ましい男だ。
救いのない人生の果てに集められ、神の齎す救いを信じることでしか希望を得ることの出来ない場所で育った。
同じ場所で育った彼等は、友で、仲間で、家族で、そして何より、鏡を使わずに見れる自分自身だった。
誰もが相手の中に自分の欠片を見ていた。
誰が欠けても、全てが失われる事はない。
誰かが生き残れば、その誰かの中に失われた友を見る事が出来た。
数少ない慰めだった。
そんな慰めすら不要な、満ち足りた生活を送る自分が、酷く汚れた存在に思えた。
きっと、最初からわかっていたんだ。
復讐なんて、誰も望んでいなかった。
でも、それを、復讐を諦めてしまえば、自分の中の彼等を忘れてしまうようで。
でも、違った。
自分の愚かさにようやく気付く事が出来た。
「――――」
堰を切るように、喉の奥から歌が零れ落ちる。
人間だった頃の残滓。
ただただ神に救いを求めていた時代、聖歌は、歌は、僕の希望だった。
だけど、本当の救いは別にあった。
歌が救いじゃあない。
共に歌う事が、共に在れる事が、救いだった。
『そうさ、僕たちは、いつだって共にあった』
声が聴こえる。
聖歌に混じった、実体の無い、空気を震わせる事も出来ない声。
彼等の残滓が伝えようとする本当の遺志。
きっと、僕の中にもあった、彼等の本当の思い。
『僕らは足りていなかった。一人一人じゃあ聖剣を扱えない』

「でも、僕は一人じゃない」
共にあった。友は常に側に居た。
それを改めて自覚する。
青白い霊魂、残留思念とも呼べるそれが、形を崩していく。
崩れていく友の、家族の、かつての僕の欠片達。
だけど、それは別れじゃない。
『そう、僕たちは独りじゃない』
『だから恐れないで、憎まないで、憐れまないで』
『聖剣も、自分も、僕らの事も』
満ちていく。
欠けていた物が、失われていた物が、忘れていたものが、空の器が満たされていく。
『神も悪魔も関係ない』
『僕たちは共にある』
『僕たちは一つだ』
『君も、僕達も、どちらが欠けても、どちらも欠けない』
僕は覚えている。
忘れる訳がない。
失われる訳がない。
僕が居るのなら、僕は、僕の中に彼等が見た彼等の事を、決して失わない。
「バルパー・ガリレイ」
空の手で空の柄を掴む。
魔剣を生み出す。
今までのそれとは比べ物にならないほど確かなイメージを持って。
「二度と、僕や、僕達を作らせない為に――」
満たされた器を、僕の中の彼等を。
「お前を、討つ！」
僕『そのもの』を、鍛造する。

私は見た。

部長も、副部長も、イッセー先輩も見た。
祐斗先輩が生み出した『それ』を。
常の先輩が使う魔剣創造にはない、稲妻の如き力の迸りを伴った『鍛造』を。
虚空から創り出される一振りの剣。
それは変わらない筈なのに、まるで違う。
世界の法則を破壊し、新たな法則を力尽くで引きずり出すかの様な。
ありえないものを有り得させる奇跡。
「ばかな、そんな、バカな、それは」
バルパー・ガリレイが驚愕している。
驚いているのは私達だけではない。
いや、でも、驚かずには居られないのに、私は何故か納得していた。
「黒い、エクスカリバー……？」
ゼノヴィアさんの呆気に取られたような呟き。
そう、白と黒の稲妻が入り混じった力の奔流と共に祐斗先輩の手の中に現れたのは、誰がどうみてもエクスカリバーだった。
恐らく、誰も見たことのない、オリジナルと比べても恐らく異なると思われる、シンプルながら高貴な装飾の施された長剣。
本来鋼の銀が在るべき所が黒く染まり、その中を赤い装飾が血管の如く貫いた、禍々しさすら感じる黒の聖剣。
「ハハハハ！　何？　戦場のど真ん中で幽霊ちゃんと歌い出したと思ったら、そんな聖剣のパチモノ作っちゃって。寒い寒い、お寒いったらありゃしない。その歌も俺好きじゃないしさぁ。もうホント気分悪いからぁ、この四本纏めた聖剣ちゃんでぇえ、纏めて気分よくバラバラだぁ！」
四本のエクスカリバーを統合して出来たそれを振りかぶって斬り掛かるフリードとかいう神父。
その動きは早く、前衛として動いている私でも下手をしたら見逃してしまう程のスピード。
だけど、こんなシリアスな場面だからあえて言わないけど、そのタ

イミングでその発言とその飛び方は死にフラグ……！
「僕は」
流れるままの涙を拭いもせず、祐斗先輩が黒いエクスカリバーを振るう。
見えない動きじゃない。
分かり難い軌道でもない。
ただ飛びかかってきたフリードを迎撃する為の一撃。
だけど、
だけど、その一撃は、余りにも『様に』なっていて。
「あぁ……」
誰かの溜息が聞こえる。
剣の軌道に描かれる黒い輝跡。
それは余りにも美しく、荒々しく、力強い。
古の時代を思い起こさせるその軌道は、エクスカリバーがかつて真の持ち主に振るわれていた頃のそれなのだと、はっきりと理解できる。
「剣（つるぎ）になる。部長の、仲間たちの、友の為にある、ただ一振りの剣に」
それは、一撃を受けたフリードにもわかったんだと思う。
迎撃の一撃で受けた威力に目を見張り、弾かれる勢いのままに宙を舞い距離を取る。
「本家本元だぞこっちは！　なんでそんな糞パチもんが斬れねぇんだよっ!?」
言いながらも自棄にならず間合いを取る姿は正しく歴戦なんだろうと関心させられる。
剣を振るう、その所作に合わせずに、フリードのエクスカリバーの剣先が枝分かれし鞭の様に伸び撓り繰り出された。
剣士同士の戦いだと思っていれば思っている程に予測しきれない筈の一撃いや連撃。
だけど、無数の剣先は祐斗先輩が振るうただ一振りの黒い聖剣によって打ち払われる。
悪魔としての、『騎士』としての特性を使わない戦い。

それは多分、自分だけじゃない、剣に込められたかつての友との戦いだから。
だからこそ、黒いエクスカリバーの強さが輝く。
「それだけ、僕と、同士達の想いが強いのさ。聖剣なんかじゃ、砕けない程に」
「そんな理屈でぇぇぇぇ！」
枝葉の如く伸びた剣先は既に神速。
この速度には最大まで倍加したイッセー先輩でも対応しきれない。
この場でこの剣に応えられるのは、迷いを断ち切り一振りの剣と化した祐斗先輩ただ一人。
祐斗先輩に決着を付けて欲しいという願いだけが原因じゃない。
誰も追いつけない神速の戦場だからこそ成り立つ決闘。
援護を届かせる事が出来ても、狙って敵を討つ事は出来ない。
見ているだけしかできないその戦いに胸がざわつく。
見守るべきだ。
でも、何かをしたくてたまらない。
何をすればいいか解らないのに。
「木場ぁぁぁぁぁぁッッ！　その糞神父とエクスカリバーをぶっ壊せエエエエエエッ！」
その答えをあっさりと出した人が居た。
幾つかの戦場を共に駆けた仲間で、ここ数日はエクスカリバー探索の為に祐斗先輩と共に過ごしたイッセー先輩。
イッセー先輩は難しい事を考えない。
エロくて直情的で、でも、だからこそこの場で祐斗先輩に届けるべき物を知っていた。
「お前はリアス・グレモリーの眷属で、俺の仲間で、俺達のダチだ！　だから、だから、あいつらの想いを、魂を、無駄にすんなぁぁぁぁぁぁぁ！」
言葉をまとめも取り繕いもしない、心に浮かんだ言葉をぶちまけるだけの声。
イッセー先輩に続き、部長も、副部長も、思いの丈を吐き出す。

「先輩！　ファイトです！」
無くてもきっと祐斗先輩は勝つだろう。
でも、それでも、抑えることが出来ない衝動が喉を舌を震わせる。
「そんなクッサイクッサイ友情ごっこに、負けるわけがねぇでしょぉおおおツツ!!」
天を覆わんばかりの聖剣の斬撃の群れ。
避けることも受ける事も出来そうに無い。
だけど、その場の誰も心配はして居なかった。
祐斗先輩の姿が掻き消える。
風に乗っているかの様な速度、何処に居るかは砕かれた無数の斬撃だけが教えてくれる。
雲の裂け目から青い空が覗くように、砕かれた聖剣の隙間に先輩は居た。
「これが僕の、僕達の」
砕けた聖剣の欠片は全身に裂傷が走っている。
そして、その傷に構わず黒い聖剣を振りかざす。
「エクス（約束された）――」
ありえない姿。
聖剣に切られた悪魔としては明らかに軽傷過ぎるその姿にフリードが目を見開くのが見える。
「――カリバー（勝利の剣）――――！」
一閃。
フリードは振り下ろされた斬撃を確かに受け止めていた。
だが、それは全くの無意味。
受け止めた側のエクスカリバーは砕かれすらせずに断ち切られ、その持ち主は、
――――――斬線から発生した極太ビームによって、跡形もなく消滅した。
「はぁ!?」
誰かが声を上げ、声も出せなかった誰かが驚愕する。
祐斗先輩とかつての仲間の感動の再会とか、そういうのの余韻を纏

めて消し飛ばす極太ビーム、紛れも無い破壊光線だ。
どれくらい破壊光線かと言うと、グラウンドに表面が溶解した巨大なクレーターが出来た挙句、その向こう側の校舎が半分砕け散る程破壊光線だった。
恐ろしい威力、でも、聖剣の脅威って、こういうのじゃないと思う。
対悪魔とか、関係ないし……。
「見ていてくれたかい、僕らの力は、エクスカリバーを凌駕したよ……」
あ、そんな感じのでもいいんですね……。
その言葉を辛うじて飲み込みながら、私は天を仰ぎ見る祐斗先輩の何処か吹っ切れた姿に安堵していた。

だが、当然ながらそこで話が終わる訳ではない。
一連の流れを、空の上から睥睨していた、今回の一件の首謀者が残っていた。
その目下で、砕かれたエクスカリバーと、木場祐斗の手によって生み出された黒いエクスカリバーを目にし、顔面を掻き毟りながら錯乱する狂信者が居た。
「黒い……いや、魔の属性を持つエクスカリバーだと？　……ありえない、反発する属性が交じり合う事も、貴様の様な出来損ないが、高々禁手に届いた程度の神器がオリジナルに迫る聖剣を作り出すなど……」
強張った表情のまま、目の前の危機に対応するでもなく、ぶつぶつと呟きながら思考に没入していくバルパー・ガリレイ。
祐斗はそんな相手でも油断なく黒いエクスカリバーを構えながら近付いて行く。
全ての元凶に止めを刺す為だ。
復讐に囚われての事ではなく、未来に目を向けて、新たな自分達を生み出さない為に、バルパー・ガリレイを殺害する。
決意を込めた一刀が振りかざされ、その刃の先でバルパーが何かに気付いた様に顔を上げる。

「……いや、まて、そうか……。そもそも聖と魔が交じり合う程にバランスが崩れているなら、均衡を取る存在の不在、つまり、魔王だけではなく、神も――――」

その目は気付いてはならない事実だけを見据え、目の前に迫る凶刃には反応すらできていない。

あとほんの一息で刃は振り下ろされ、バルパーの罪を断罪する。

しかし、それに先んじてバルパーの命を摘んとする一撃が天から落ちてきた。

人間一人を丁度即死させられる程度の光の槍。

今この場を支配する堕天使コカビエルの創りだしたそれは、バルパーの言葉を封じる為に投げ放たれたものでは無かった。

言ってしまえば『つい出てしまった』程度のものでしかない。

白熱した格闘技の試合を見た観客が手を振り上げ殴るモーションをしてしまうのと同じように。

ただその矛先に、元から利用価値の無かった、火種にできれば上等程度の感覚で連れてきた下僕が居ただけの話。

恐らくはその槍が突き刺さり、木場祐斗が自らの手で復讐を完遂出来なかったとしても何一つ変わらなかっただろう。

今この場にコカビエルが居る。

戦意を滾らせた気狂いの古強者が居る。

最初の目的であるエクスカリバーの打倒を成し遂げ、それどころか自らを真のエクスカリバーであると定義した木場祐斗は即座に臨戦態勢に戻り、バルパー・ガリレイの事など思い出しもしない。

故に。

光の槍が逸れたのは、逸れる原因となる一撃を繰り出したのもまた、有り得ざる闖入者の気まぐれに過ぎない。

それなりの高度から放たれた光の槍は、中空で横からの衝撃を受けてその矛先を僅かに逸らす。

地面に到達する頃には光の槍はバルパーを貫く事もなく虚しくグラウンドに突き刺さり、木場祐斗の一撃は過たずバルパー・ガリレイの命を刈り取った。

異界のエクスカリバーの模倣から繰り出した破壊光線ではない、手に感触の帰ってくる明確な殺人。

忌避感は無く、ただただ『成し遂げた』のだという達成感を与える一撃。

だがそれは一瞬。

グラウンドに突き刺さった光の槍と、それが本来狙っていた相手を察し、木場祐斗もその仲間も気を引き締める。

そして、この場でその結果を創りだした闖入者に気付けたのは、幾度の戦を越えた古強者である堕天使のコカビエルのみ。

「何者だ」

喜悦を隠しきらない低く静かな恫喝。

闖入者はこの期に及んで姿を見せず、そして、横槍が無ければコカビエルすら気付け無い程の隠行を駆使している。

コカビエルは優れた戦士だ。

彼の探知能力は特別優れている訳でもないが、並大抵の戦士が潜り抜けられるほど甘いものでもない。

「何者(なにもん)や言われてもな」

問いに応えるように、闖入者が姿を表した。

何もない空間から、水に絵の具を滲ませるように、その姿が顕になる。

それは、赤。

暗い暗い、闇よりも尚暗い深淵の赤。

しかし同時に、これ以上ない程に鮮烈な、血の流れにも似た紅。

「ただの、通りすがりの、善良な、名無しの忍者や」

結界をすり抜け、物質世界と精神世界の狭間を潜り抜け、世界観という分厚い壁をぶち抜いて、それは現れた。

紅の忍び装束に身を包み、赤い髪を靡かせ、顔の下半分を覆うメタルレッドのメンポから、細長い蛇に似た瞳孔を持つ紅玉(ルビー)の瞳(アイ)を覗かせた、ステレオタイプの女忍者。

「悪の定めに……いや、忍ぶどころか、暴れるで」

蛇の舌の如き艶めかしい赤の短刀を構え、校舎の屋上に音も無く降

り立つ。
着地と同時に震える胸は、実際豊満であった。

二十二話　レイト・レイト・レイト・ショウ

「にん、じゃ？」

突如として虚空から現れた何処か、明らかに見覚えがあるのに誰であるか思い出せない真っ赤な巨乳の女性の発言に、小猫を始めとしたオカ研メンバーは首を傾げる。

いや、忍者という言葉自体は知っている。

だが何故この場面で、こんな場所に現れたのか、何者なのか、敵か味方か、諸々の疑問は一切解決しない。

「く、く、はははははは！　そうか、貴様、ニンジャか！」

諸々の疑問を無視して飲み込み最初に納得を得たのはコカビエルだった。

歓喜の哄笑と共にその手の中に細く、しかし頑強な光の槍を数本纏めて作り出し、赤い忍者に向けてノーモーションで投擲する。

明らかな殺意と僅かな遊びの含まれた攻撃。

全力ではない、しかし、ある程度の実力が無ければ避けることは出来ない、そんな速度で槍が忍者に迫る。

通常の投擲の手順を省略した僅かに不意打ち気味のタイミングで投げ付けられた槍。

並の戦士であれば避ける素振りすら出来ずに貫かれていただろうその槍を、手にした赤い短刀で斬り飛ばした。

切り飛ばされた光の槍が校舎の上で爆発、その爆発に押されるようにして忍者は校庭に身を投げだした。

宙を舞う忍者目掛けて容赦なく光の槍を投擲するコカビエル。

柱の様に太い槍ではない、細く鋭く硬い槍による弾幕。

翼なき者では身動きの取れない筈の中空にて、忍者は文字通り空を蹴り槍の射線から離れ、通り過ぎていく光の槍に向けクナイ・ダートを投擲。

砕ける事も溶ける事もなく、光の力の塊である光の槍に当然の如く突き刺さったクナイ・ダートは、その威力を持って光の槍の軌道をねじ曲げた。

音速の数倍の速度で移動する光の槍は、減速しながらグラウンドに残る生存者を避ける様に突き刺さった。
「あのニンジャは君達の味方なのか?!」
一瞬の攻防の中、ゼノヴィアが見たのは屋上に立っていた忍者の視線だった。
光の槍を切り捨てる一瞬前、避けるために飛び出そうとした忍者の視線が光の槍の軌道と校舎の位置を見比べ、校舎に被害が出ない様に槍を斬り飛ばしたのを。
今の槍に対するクナイ・ダートにしても、忍者が攻撃を避けるだけならもっと余裕を持って避けられた筈だ。
忍者は明らかにオカ研を守る動きをしていた。
「まって！　あれは本当に忍者ってことでいいの!?」
対するリアスは未だ忍者が何の脈絡もなく現れた事の戸惑いを捨てきれていない。
常の彼女であれば、とりあえずは第三軍として考えを纏める事も出来たのだろうが、木場祐斗の見せた黒いエクスカリバーとその破壊光線による混乱、更に忍者の装束に施された認識を阻害する術法により思考を鈍化させられている為に対応しきれていない。
仕方があるまい。
こと日本において、日本に派遣される悪魔の、しかも貴族の子女ともなれば、忍者に対してこのリアクションを取ることは仕方がないのだ。
忍者、それも超人的な身体能力と超能力染みた術を使いこなす忍者。
それは彼女たちに取ってはフィクションの中の存在でしかない。
だが、一部、上層部の中でも極限られた者達にしか知らされていない事実がこの日本には存在している。
この日本では、かつて半神として崇められ恐れられていた超常の存在が居る。
それこそが――――ニンジャ。
現代に伝わる金閣寺のモデルともなったと言われている古の時代

の建築物、キンカク・テンプルにて一人残らず謎の死を遂げたと言われる伝説上の存在だ。

現代においては純粋な生き残りは居ないと言われ、一部その血と技を受け継ぐニンジャの末裔――忍者（にんじゃ）や忍（しのび）が密かに群生しているのみと伝えられている。

そして、その末裔程度であれば脅威でなく、逆にその祖先の存在を知る事で無用な恐慌を起さぬようにという配慮から厳しい情報規制が敷かれているのだ。

現実に存在するニンジャという超常現象の体現者を目撃した悪魔の若者としては一般的な戸惑いだと言えるだろう。

「赤龍帝、力を限界まで上げてこいつに譲渡しろ」

宙に浮いたまま、コカビエルがイッセーの方を見ることもせずに告げる。

赤龍帝の籠手の持ち主であるイッセー自身の力は一切考慮せず、眼下に居る忍者に対してのみ向かう敵意。

激高し叫ぼうとするリアス、調息と共にコカビエルに全力を持って黒いエクスカリバーで斬り掛かる準備を整える祐斗、全体を見渡し状況の推移を見極めようとしている朱乃。

エクスカリバー・デストラクション地面に突き刺すゼノヴィア、今にも竜化せんと試み、しかしきっかけを掴めずに赤龍帝の籠手を開放し損ねているイッセー、その背後に周り呪文の詠唱を始めた小猫。

一丸になりコカビエルに立ち向かわんとしている対エクスカリバー同盟とも呼べる集まりに先んじて動いたのは、やはり赤い忍者だった。

リアスが何かを叫ぶよりも早く、祐斗が調息を終えるよりも早く、赤い忍び装束が霞と消える。

残像だ。

実体は即座にコカビエルの目の前に姿を表し、赤い刃を見せつけるような速度で振りぬく。

ギリギリでコカビエルの喉を掻き切るかどうか、という位置への斬撃。

見える速度で放たれたその一撃をコカビエルは瞬時に生成した光の剣で受け止める。
コカビエルが咄嗟に、無意識の内に身体を一歩分だけ引いていたのは戦狂いの身に染み付いた条件反射からか。
その条件反射は、光の剣をあっさりと切り裂き迫る赤い刃を既の所で避けきらせた。
口元の笑みを深くしながらの反撃。
既に切り裂かれた光の剣は再びその姿を表し、しかし、振るうべき相手も目の前から消えている。
コカビエルから見て、グレモリー眷属と聖剣使いの居る方角とは反対側。
そこに消えた忍者は悠然と佇んでいた。
「わしはいらん。あんたが受けたらええ」
指先で短刀ではない何かをくるくると弄び、忍者はなんでもないように、胸部の盛りとは正反対な平坦な口調で告げた。
手の中には赤い短刀と、一本の黒い羽。
見れば解る、それはコカビエルの羽だ。
ゴウランガ！
謎の赤い忍者は、あの一瞬の攻防の内に、コカビエル本人に気取られぬ様に、背の翼から一本だけ羽根を引き抜いてみせたのである。
貴様は攻撃を受けきったのではない。あくまでも見逃されただけなのだ。
殺そうと思えば何時でも殺せた、そう言外に言っているに等しい。
「ふ、ふふふはははははははははは！　成る程、これが貴様らの言う『ワザマエ』というものか！　聞きしに勝る、血が滾る！」
普通の堕天使であれば激昂しただろう。
だがコカビエルは違う。
コカビエルにも確かに誇りはある。
だがそれは心躍り血が沸き立つ戦場においては何の意味もないという事を知っていた。
誇りだけを胸に生きていく事が出来ない、許容できないからこそ戦

争を求めたコカビエルにとって、この状況はまさに自らが臨んだものだ。

怒る道理があるだろうか。喜ばぬ道理があるだろうか。

喉が裂けんばかりに哄笑を上げるコカビエル、その姿を見れば答えは一目瞭然。

「そいつはどーも。けど、ええんか？　わしにばっかり気ぃ割いて」

校庭のど真ん中、羽根と短刀を手に堂々としたニンジャスタンディングを晒している忍者がそう言うのと、調息を終えた祐斗がコカビエルに斬り掛かるのは同時だった。

何時跳んだか解らない程に流れるような跳躍と、空気を切り裂く音すら生まない刃筋の通った美しい振り。

一本の剣になるという言葉に相応しい、無駄なく躊躇の無い必殺に最も近い一撃。

だが、精神が狂ったとしてもコカビエルは歴戦の戦士だ。反応できない訳がない。

「エクスカリバーの紛い物、いや、禍き物のエクスカリバーか！」

鋭く速く、優れた技術によって裏付けされた優れた斬撃。

その一撃一撃がほんの少し前までの木場祐斗のそれとはかけ離れた威力と速度を伴う正しく必殺剣だ。

見る者が見れば、いや、相対するコカビエルこそが誰より先にそのカラクリに気が付く。

一撃一撃が祐斗の肉体的限界を超え、その度に全身の細胞が再起不能にまで破壊されている。

「そうだ！　僕の、僕達の力、王に勝利を捧げる剣（つるぎ）だ！」

しかしその度、祐斗の肉体は驚くべき速度で超再生を繰り返しているのだ。

この現象は今この時、真正面から祐斗の連撃を捌いているコカビエルにしか気付け無いだろう。

この戦いが終わった後、仮に木場祐斗が生きていたのであれば、そこには正しく木場祐斗が頭の中で思い描く最高の速度と力を再現し得る肉体を得た新生木場祐斗が生まれているのだから。

「だが、貴様等だけの力で無いのならなぁ！」

ただ魔剣創造という劣る力でエクスカリバーを砕けるまで、幾らでも戦いを続けられる様に、と、そんな程度の理由で埋め込まれたエクスカリバー（ヴァロン）の鞘による護りの力。

それは聖剣の因子と禁手に至った魔剣創造という神器を鞘の内側に合わせて新たな異端の聖剣を作り出し、一人の剣士の肉体を高みへと導く。

しかし、それを振るうのは決意を新たにした『だけ』の木場祐斗の心でしかない。

剣を振るう才能に優れ、師に恵まれたとはいえ、その鍛錬の期間は高々十数年。

コカビエルが剣士でなくオールラウンダーの戦士であるという事実を鑑みても、その戦闘技術には埋め難い差が存在する。

「付け焼き刃の力がぁっ！　この俺に通用するものかぁ！」

叫びと共に、技術を置き去りに力と速度だけが肥大化した祐斗の剣を、コカビエルの光の剣が押し込んでいく。

真正面から打ち合えばヒビ割れ砕けるはずの光の剣はしかし、狂気的なまでに研ぎ澄まされた戦闘技術によって弾き返される。

力のベクトルを一瞬で見切り逸し放たれる、距離を空けるための突き飛ばしを祐斗の技術は防ぐことも避けることもできない。

「ぐぁっ！」

距離が空く。

剣は届かず、しかし投擲武器であれば十分に射程距離内。

コカビエルの手には光の剣が変じた短槍。

見せつけるように一瞬勿体つけてから投げる。

祐斗は吹き飛ばされながらもそれをエクスカリバーで切り払う程度の事しかできない。

仮に、木場祐斗という悪魔の中に龍のそれと同列の魔力炉が存在すれば、真名開放による破壊光線でコカビエルを焼く事も出来たかもしれない。

しかしそれは仮定の話だ。

祐斗の魔力は常人よりは優れているが、真名開放を短時間の間に繰り返せる程ではない。
「雷よ！」
しかし距離が開いた為に今まで躊躇われていた遠距離からの援護も入る。
リアス・グレモリーの女王である姫島朱乃の雷。
更には密かにイッセーの倍加を受け力を増したリアスの魔力弾。
そのどちらもが並の堕天使を一瞬で蒸発させうる威力を備える。
「ああ、面白い、面白いなぁ！　魔王の妹！」
コカビエルは天から降り注ぐ雷を翼の一振りで容易く打ち消し、迫る魔力弾の豪雨の中を突き進む。
全てを受けている訳ではない。
迫る弾幕を、両手に構えた光剣で切り払いながら突き進む。
その身で受ける魔力弾は最小限のものだ。
仮に、ここまでの戦いで見た物が不足していたなら正面から受けただろう。
だが、コカビエルはリアス・グレモリーの眷属達を高く評価していた。
龍のモザイクと化し不安定ながらも高いレベルで神器を使いこなす赤龍帝、格闘戦を熟しながらも未知の魔法を用いて戦う戦車、挙句の果てに神器からエクスカリバーの修復品をも超える真に迫ったエクスカリバーを生み出した騎士。
リアス・グレモリーとその眷属は、コカビエルにとって真に闘争に相応しい『敵』となったのだ。
「受けて見せろ」
弾幕を掻い潜り、服の端をボロボロにし、全身に傷を負いながら、それでも急ぐこと無くゆっくりとグラウンドのリアスに、朱乃に近付いて行くコカビエル。
見ように依っては聖母の元に降臨する天使の図に酷似しているのは如何なる皮肉であろうか。
その手に握られた光剣が狙うのはリアスか、それとも朱乃か、はた

また二人に守られる様に立つアーシアか。
だがそれを遮るように、今まで沈黙を保っていた聖剣使いが横合いから斬り掛かる。
「くたばれ！」
「！　ほう、貴様、デュランダル使いか！」
聖剣使い――ゼノヴィアが手にしていたのは破壊の聖剣ではない。
今に至るまで砕かれる事無く現存していた聖剣の内の一振り、破壊の力に特化した聖剣であるデュランダルだ。
触れるものみな斬り刻むその威力は、人工因子に頼らない天然の聖剣使いであるゼノヴィアにすら制御しきれず亜空間に封印されていた。
周囲の被害を考える必要のない今だからこそ全力で振るう事ができる。
その太刀筋も破壊の聖剣を使っていた時とは比べ物にならない程に鋭く早く、何より重い。
「だが、使い手がそれではなぁ！」
鋭く、早く、重く。
しかし、それでもコカビエルに届かない。
数万の時を生き、その生の全てを戦に傾けたコカビエルを打倒するには至らない。
だが、それを理解できない程に判断力が無いのであれば、ゼノヴィアは聖剣を預けられるエクソシストにはなれなかっただろう。
故に、全力を込めた初撃すら囮。
「知っているとも！　我が身の未熟など！」
鍔迫り合いをする事も無く通り過ぎたゼノヴィアが叫ぶ。
その対角線上にはエクスカリバーを構え直した祐斗。
伝説の聖剣の新たな担い手達による連携攻撃。
だが、二人の担い手はそれでも足りないと感じていた。
即席の連携であるというだけではなく、単純にコカビエルの戦闘技術が優れているから。
二人で斬り掛かったとして、同じようにいなされるだけではない

か。

僅かな躊躇、そこを突かないのは、敵と認めながらも未だに遊び気分の抜けていないコカビエルの油断の現れ。

いや、余裕と言うべきか。

この場にその隙を突くことの出来る実力者は居なかった。

――――本来であれば。

「妖影縛（シャドウ・ウエブ）」

静かに呪文を解き放ったのはイッセーの背後に隠れていた小猫。

未だ乱戦時の呪文選択速度と精度に自信の無い小猫が、とりあえず迷う状況で最初に唱えようと決めていた呪文だ。

それが如何なる術であるかは足元を見れば解るだろう。

月明かりと燃え盛る校舎に照らされて生まれた小猫の影から、コカビエルの影を貫く針の様に伸びた影。

呪文習得から今に至るまでの期間、独自に習得した新術である。

術者の影に貫かれた相手は動きを封じられる、単純でわかりやすい拘束魔法だ。

「喰らえ！」

力を込めれば振りほどけ無いでもない拘束。

だが、力を込めるまでの一瞬で済まない隙は目に見える好機。

視線を交錯させた祐斗とゼノヴィアはコカビエルに同時に仕掛ける。

動けないコカビエルをただ斬り付ける、最速最高の一撃。

喰らえばコカビエルとてその身を両断され死に至るだろう。

死を予感させる一撃。

戦に明け暮れる日々を思い出させる一撃は、長い平穏に鈍っていた勘を、錆び付いていた闘争本能を取り戻させるには十分であった。

「な、ん、とぉぉぉぉおっっっッ!!!」

生み出される光剣は三本。

二本は前後から迫る黒いエクスカリバーとデュランダルの斬線を逸らすように配置され、一本は頭上に生み出された。

二刀が到達するよりも早く頭上の光の剣が砕け、破壊力を失ったた

だ眩いばかりの光が校庭を照らす。
照らされた影が消え戒めは解かれ、光に目を焼かれた二人の剣士は僅かに狙いを逸らす。
光の剣によって僅かに逸らされていた斬撃が更にズレ、コカビエルはそれを身を折りたたみ回避する。
斬撃が捉えたのはコカビエルの黒翼のみ。
決して軽いダメージではない。
「はは、ははははっははあっは!!」
十枚あった羽根を減らされ、しかしコカビエルは笑う。
予想外の、想定外の強さ。
魔王を呼び寄せる為の餌程度に思っていた相手が見せる予期せぬ強さは、コカビエルの闘争本能に火を付けるに十分すぎた。
半ばから切り落とされた黒翼数枚。
未だ赤い血の流れ落ちるその断面を、自らの光で焼き潰す。
瞳にはより濃くなった狂気が宿り、手負いの獣染みた危うさを見せている。
その目は見えているのに見ていない。
目の前の光景を認識しながら、コカビエルは何時かの血沸き肉踊る戦場の中に居た。
純粋な神の戦士だった頃に立ち戻ったのだ。
両の目は連動せずぎょろりと二人の剣士を捉え、残身中のその背に向けて光の剣を射出。
同時に残りの羽根で空へ上がり射線を確保。
まるで出鱈目に、そう見える程に光の力を乱れ撃つ。
「お、おぉおおおおおおお!!!!!」
悪魔を消し去る光の雨の中、雄叫びと共に赤龍帝の拘束衣を発動させ、半竜と化したイッセーがコカビエルに迫る。
剣を振るう度に揺れるゼノヴィアの巨乳、突如現れた赤い忍者が見せて巨乳の揺れ、より危険度を増したコカビエルと来て、ゼノヴィアに向けて射出された光の剣がそのインナースーツを切り裂きバストトップを露わにした事で、神器の力を開放するに至るまでにテンショ

ンが上昇したのである。
怒涛の連続倍加により限界まで強化された半竜の爪が、無数の光の剣を砕きながらコカビエルに振り下ろされた。
工夫の欠片もなく、ただ速さと重さだけは今までで一番と言える一撃。
光の剣をばら撒きながらでも避けられる。
「霊呪法（ヴィ＝ヴラィマ）」
だが、避けようとした先に巨大な土塊の巨人が立ち上がった。
これもまた小猫が発動した呪文によるものだ。
土の精霊に語りかけ形を成し、低級霊を憑依させることでゴーレムを作り出す魔法。
死霊を扱う関係上天使などの聖なる力を使う相手には相性が悪いが、単純に時間を稼ぐだけなら打って付けだ。
小猫は安全地帯を求めて走りながらこの術を連発し、砕かれる先からゴーレムを補充し、コカビエルの回避を妨害していた。
ゴーレムを打ち砕き、既の所でイッセーの爪や尾による攻撃を躱しながらコカビエルは苛立つ。
……これが、ほんの少し前、全盛期に立ち返る前のコカビエルであれば、笑いながらゴーレムとイッセーを同時に相手取っていただろう。
だが今のコカビエルに喜びはあっても遊びはない。
遊ぶ必要が無い程に、彼は彼の求めた戦場（いくさば）にのめり込んでいた。
故に彼の脳細胞は瞬時に最適解を導き出し、その通りに動いた。
「邪魔だ。死ね」
激しくなく、しかし粘性を持つほどに濃い喜びと殺意を込めた宣告。
足止めでしかない光剣のばら撒きではない、確かな殺意を込めて、特大の光の槍が小猫に迫る。
それも、光剣とは比べ物にならない速度で。
無数の光の柱が小猫を押し潰さんと飛来する。
「小猫！」

「小猫ちゃん！」
「小猫さん！」
リアスは、朱乃は、アーシアは叫び、しかし動けない。
リアスは倍加無しには光の剣群を潜り抜ける程の魔力は出せず、子猫との距離は離れすぎている。
朱乃も同上、アーシアに至ってはこの場面でできる事がない。
「小猫ちゃん！」
叫び、騎士の速度を駆使し、アヴァロンの護りを駆使し、光の剣群を抜ける。
だが、目の前に立ち塞がるのは背を向けた無数のゴーレム。
小猫が戦うために、イッセーを助けるために呼び出したゴーレムが仇となり、その手は届かない。
木場祐斗は小猫に届かず、助けられない。
「小猫ちゃん！」
半竜と化したイッセーが叫ぶ。
しかしその身体はコカビエルに向き、爪を振り下ろした体勢のまま小猫に身体を向ける事すらできない。
龍の耐久力に任せた過度な倍加は、身体を蝕む事はなくとも万全の制御を許さない。
兵藤一誠はその力の余り小猫の危機を視界に入れる事しかできない。
リアス・グレモリーとその眷属が動けない中、胸元も隠さずにデュランダルを構えたゼノヴィアは見た。
叫ぶこと無く、助けに動く事もなく。
それは未だ教会の一員として動くゼノヴィアだから、助けるべきか、そう逡巡したゼノヴィアだからこそ見ることが出来た光景だ。
この戦場で、誰もが忘れ、しかし、恐らく確実に小猫を救えたはずの、赤い忍者の挙動。
いや、挙動は見ていない。
赤い忍者は動かない。
ゼノヴィアの様に、自分側の戦力として助けるべきか、などという

逡巡すら無く、赤い忍者は降り立った時とさして変わらないニンジャ・スタンディングのまま。

視線は僅かに小猫を向く。

余りにも、余りにも冷たい視線。

冷たい、という表現が適切かどうか。

冷たさすら感じられない虚無の視線。

一瞬だけ向けられた情の無い視線が、興味を失ったかのように虚空へと逸らされた。

冷たいな、と少しだけ思い、自分もそう変わらないと思い直す。

せめて一時は共闘した仲間の死を看取ろうと、赤い忍者から、視線は再び小猫へ向かう。

誰もが、その視線を小猫に、その最後の瞬間を捉えるように向けていた。

故に、その場の誰もが、それを見た。

迫る光の柱。

視界を文字通りに埋め尽くす、悪魔を殺すだけの聖なる暴力の塊。

脳裏に今までの長いようで短かった人生が一瞬で過り、私は目を閉じる。

諦めとか諦観とか、少し前までは木っ端悪魔だった自分にしては良くやった、だとか。

そんな言い訳がましい思考は一切無かった。

あったのは、恐怖。

目の前に突きつけられた、輪廻転生すら許さない悪魔に対する絶対否定の力を前に、私はただ反射的に瞼を強く閉じるしかなかった。

痛みは一瞬だろうとか、そんな都合のいい楽観は無い。

痛くないからどうだというのか、死んでしまえば、それで全ては終わり。

楽しいことも苦しいことも無い、死後ですらない『無』への恐怖。

それに、身につけた力は、一切関係なく、私は恐怖するしかなかった。

姉はどうなっただろうか。
狂った姉でも、自分が死んだら悲しむだろうか。
……どうにか、したかった。
捕まえるのか、私自身が決着をつけるのか、どうするのかはわからないけれど。
そんな後悔ばかりが頭に浮かんだ所で、私は、私の思考が未だに続いている不思議に気付く。
「……生きて、る？」
呟き、気付く。
必死で走り回りながら、最大限魔力を込めてゴーレムを生み出し、魔力が度々枯渇しかけていた反動でぼやけていた感覚が、ゆっくりと元に戻る。
温かい。
温かい何かに、自分ではない体温に気付く。
私の身体を抱き抱える誰かの体温。
「ええ、生きてますよ。塔城さんは本当に運が良い」
声に、瞼を開く。
視界に最初に映ったのは、星空。
いや、星空を、宇宙を押し込めたような深い深い黒。
その中に、煌めく星を散りばめた、黒い宝石じみた瞳。
「遅刻、ですよ」
誰より乗り気で動いていた癖に。
一番遅れて、こんなタイミングで来るだなんて。
文句と共に抓るつもりで、頬に手を伸ばし、
「すみません。では、ここからは此方の番という事で。……お疲れ様でした。ゆっくり休んでいて下さい」
伸ばした手を握られながら、薄い笑みと共にかけられた言葉を聞き、私は今度こそ、本当に意識を投げ出した。

混沌、虚無。
一目見た印象はそれだろうか。

あらゆる色を、あらゆる光を混ぜ込んだ様な、一言で言い表すことの出来ない色彩の何かが、光に埋め尽くされた駒王学園のグラウンドにぽつんと現れた。

人一人を包み込める程度の球体。

それは叩きつけられる光の柱を飲み込みながら微動だにしない。

小猫の居た場所から、動かない。

「遅かったなぁ」

赤い忍者が、街で出会った知人にそうするようにのんびりと声をかける。

「ごめん、ちょっと準備に時間がかかって」

混沌球の中から、そんな声が上がる。

その場の誰もが、いや、コカビエルを除く誰もが聞いたことのある声。

その声もまた、光の剣が暴風雨の如く荒れ狂っている現状を意にも介していない。

「何だ、貴様は」

剣の射出を止め、コカビエルが改めて数本の光の剣を手元に作り出しながら問う。

問いに応えるように球が解ける。

中から現れたのは、赤みがかった黒髪、黒い瞳の、何処にでも居るような男。

「何、名乗る程のものではありません」

両脇に肩掛け鞄を下げ、目を閉じてぐったりした小猫を腕に抱いたまま、男――――読手書主の視線は、真っ直ぐにコカビエルを貫いた。

「ただの部外者ですよ。奉仕活動中のね」

二十三話　胸は無くとも明日はある

遂に探し人、いやさ、探し黒幕を見つける事ができた。
実に気分が良い。
ここ数日、放課後の自由時間を削って行っていた探索がまるきり無駄になった、なんてのは最早些細な事だ。
「部外者だと？　……なるほど、この場に居合わせるだけの力はあるか」
空でわさわさと無駄に多い翼状の文字列を蠢かせた黒幕が一人で何かを納得している。
「此方は只のジツとカラテが使えるだけの一学生なのですが、ええ、この場に限り、そちらの印象通りという事でいいですよ」
兎にも角にも、今日のこの日、この文字数多めの文章に出会えた事に感謝したい。
感謝の後、引き出せる物を全て引き出させた後に塗りつぶすのだとしても、今は感謝するばかりだ。
ちら、と、辺りを見渡す。
メンツは予想通り、オカルト研究部に、頑丈で愉快な方の聖剣使いゼノヴィアさん。
話の解るメンツだ。
「木場先輩、無事に目的は果たせましたね？」
「あ、うん、僕は、僕達は、勝った」
呆然と、グラウンドと同じ文字列で出来た大きな無数の人型の隙間から、普段先輩と定義している文字列が頷く。
手の中の獲物の文字列を確認する。
【エクスカリバー・カラムッド（勝利導く絆の剣）】
【ランク：A】
【種別：対城宝具】
【レンジ：1～70】
【最大捕捉：600人】
【この世とは異なるルーツを持つ異世界のエクスカリバー】

【その鞘から逆算された構造を、純化されきっていない聖剣因子の残留思念を材料に魔剣創造の禁手亜種が組み上げた異端聖剣】
【構成物質の関係で劣化複製と化しているが、その強度だけは残留思念と担い手の絆の強さに比例しオリジナルに匹敵する】
【因子及び残留思念の魂魄構造は以下――】
成る程。
なんだか、見ていない所で凄くドラマチックな話が始まって終わっていたらしい。
少し話の流れを聞いてみたくもあるが、彼の過去に関わる話なら部外者の此方が聞くのも野暮というものだ。
何はともあれ、彼が一番果たしたかったという目的は達成した、という事で良いのだろう。
「それじゃあゼノ」
この騒動に関わりのあるもう一人の方に顔を向け名を呼ぼうとすると、黒幕の方から光の槍が飛んできた。
まぁまぁ速い。
速いが、空気を無理矢理に引き裂いてこの速度を生み出すのは無駄が多いのではないだろうか。
予兆が丸わかりで迎撃が容易い。
手に刀を呼びだそうとして、腕の中に塔城さんを抱えているのを思い出す。
軽いから忘れていた。
まだ表に出していた『海』の一滴を膜として広げる。
光の槍は膜に触れると溶けて消えた。
危ない真似をする黒幕だ。
当たったら痛いかもしれないじゃないか。
「ゼノヴィアさんの目的もクリアでいいですか？」
「そうだな。エクスカリバーは砕けた、後は……」
意味ありげな沈黙と共に僅かに文字列が蠢く。
【睨みつけるような視線を空へと向ける】
【確かに第一に果たす使命は達成した。悪魔の手によるものとはい

え、結果が伴っている以上は大丈夫だ、言わなければ誰がやったかなんて些細なことでしか無い】

【しかし、元凶である堕天使のコカビエルがまだ残っている以上、ここで逃げ出しても何時か同じことを繰り返すだろう】

【それに、バルパーの残した街を破壊する術というのも問題だ】

【悪魔が影から支配する街とはいえ、この街には多くの無辜の民が居るのだ】

【彼等はその多くが異教徒ではあるが、信仰を同じくする愛すべき隣人も居れば、何時か改宗し愛すべき隣人になるかもしれない者も多く居るだろう】

【彼等を見捨てて、しかも、この場を悪魔に任せて逃げ出すなどという事ができるだろうか】

大体わかったけど、この人異教徒が異教徒のまま死ぬならオッケーなのか。

愉快な言語チョイスのセンスに騙されそうになるが、これでも一端の狂信者という事なんだろう。

地面を凝視する。

街を破壊する為の術式……成る程、土の地面ではなく、地殻に施されているのか？

見てみても読めないという事はそういう事なのだろう。

エクスカリバーを砕いたにも関わらず無駄に戦っているのはそういう理由か。

「ご安心下さい」

西瓜ほどの体積の『海』を引きずり出し、地面に落とす。

落着と同時に弾ける事もなく染み込んでいく。

薄く広がりながら地面の中を探り、それらしい物を発見。

そのまま飲み込ませ、裏側に戻す。

間違った解釈とはいえ『海』の知識を持つ塔城さんが起きていたらこうは行かなかった。

「ほう、面白い真似をするな」

「それほどでも。……皆さん！　街を破壊する術式は解除しました！

結界の外に逃げて下さい！」
黒幕に聞かれて困る話でもないので大声で全員に伝達する。
後は腕の中の塔城さんをどうするか。
……ふと思うのだが、こうしてオリジナルの塔城さんと広範囲の肉体的接触をするのはこれが初か。
模写した塔城さんの首とか頭とか眼下の中とか内臓なら何度も触ったり曲げたり貫いた事があるが、こういう何でもない害のない接触となると感じ方が変わってくる。
膝裏と背の下に通した腕から伝わる感触は如何にも女の子女の子している。
見た目が文字列だとしても、触った感触はこの腕の中の文字列の塊が、紛れも無く此方の友人であるという事を教えてくれる。
だから、機会が無いのでカミングアウトする事も無いが、肉体的接触は嫌いではない。
膝裏の汗ばみしっとりとした感触、ふくらはぎと太腿がしっかりと柔らかく、筋肉で過剰に硬くなっていないのが好印象。
背中から通し脇腹上辺りを抑えた手が……ｓｏｒｒｙ、ちょっと胸だという認識が遅れた。
悲しい。なんと、なんと分かり難い膨らみだろうか。
哀れに思う。
でも大丈夫、前押し当てられた時も思ったけど、僅かなだけで決して無い訳じゃない。
塔城さんには未来がある。
それも悪魔ともなれば、肉体の一部を強化する不思議な道具の一つ二つあってもおかしくはない。
悲嘆にくれる必要はないのだ。本人に言うと間違いなくセクハラなので言わないけれど。
何より、触って確かに生き物の感触がしている。
腿や臀部には確かにしっかりと肉が付いているし、胸が小さくて何が悪い。
「馬鹿言うなよ、こんなヤツ放置してたらろくな事にならないだろ！

協力してぶっ倒すぞ！」
「君の力は知ってるけど、ここでは協力して確実に倒すべきだ」
「え？　ああ……」
数少ない友人の肉体的未熟を弁護していると、無駄に体積が広くなり、全身に広がる肉体的不整合とそれを補佐する神器の機能解説が長々と繰り広げられている兵藤先輩と、所々にアヴァロンにより修正入った半ば騎士王みたいな感じの文字列になった木場先輩が此方の近くに寄りながら余計な事を言い出した。
なんというか、邪魔だ。
でもそんな空気の読めない彼等が、やっぱり仲間を大事に思っている事を此方は知っている訳で。
「ハッキリ言うと邪魔だしこれから始まるお楽しみの邪魔をされると邪魔で仕方ないけど、邪魔であるという本音を脇に一先ず置いてあえて邪魔なそちらも納得できる言い方するとですね」
「つまり邪魔って事でしょ!?」
外野からグレ森先輩が何か叫んでいるけれど命中低い火力の無い固定砲台は無視だ。
「主力二人に唯一まともに援護できる塔城さんがこの様な訳ですけど、それでも戦えるおつもりですか？」
一応、赤眼になった日影さんなら余裕で塔城さんを超える援護ができるけれど、援護する義理は無いし。
「三人がかりなら――――」
「やらないんだよね」
「もちろんやりませんよ。あれは此方の獲物と決めてます。ここからは此方一人の時間です」
至極面倒な上に此方に欠片もメリットのない案をあげようとした兵藤先輩を木場先輩が遮る。
木場先輩は何気に人との距離感を掴むのが上手く、空気を読む事にも長けているように思う。
決して兵藤先輩が空気読めないという訳ではないのだ。
たぶん、此方を警戒できなくしているのも影響しているのだと思う

から余りそこらへんを強く指摘できない。
対して、木場先輩は肉体的に聖剣の鞘を組み込むという雑な改造を施しているとはいえ、精神面では一文字も書き込んでいない。
教会で見せた此方の動き方とスタンスはわかっている筈だ。
態々文字列を余計に読むつもりは無いので二人の文字列を確認するつもりは無いけれど、だいたいそんな感じだろう。
「じゃ、お二人は向こうで棒立ちしてる女性陣でも守ってて下さい。でもできれば邪魔なので結界の外に出てて下さい。あ、あと」
腕に抱えた塔城さんを、なるべく二人を見ないように差し出す。
半竜と化した兵藤先輩が手を伸ばし、腕の長さが足りず、木場先輩が受け取る。
「怪我は無いけど魔力が枯渇してます。処置は必要ないけど、安静にさせておいて下さい」
腕から離れた塔城さんの姿が、文字列から挿絵に切り替わる。
言った通りほとんど怪我はない。
が、身にまとう制服はあちこちが飛礫か何かでほつれ、全身土埃に塗れている。
走り回りながら魔法を連打し続けた、と言ったところだろうか。
怪我は無くとも、挿絵になるほどに見て解るレベルで健闘したという事か。
頬と髪の毛にわかりやすく付いた土埃を指先で払う。
「……危なくなったら手を出すけど、いいよね？」
挿絵状態の塔城さんを抱えたまま、人型の文字列の頭が横に傾く。
【冗談めかした口調だが、その視線は真剣な眼差しを向けている】
実に、実に下らない問いだ。
空が落ちてきたらどうするか、なんて、心配するだけ無駄だろうに。
振り返り、天を仰ぐ。
「お喋りは終わったか」
外界との繋がりを遮断する術式の構成解説に阻まれた、夜空の星よりも遥かに読みやすい文字の敷き詰められた見難い醜い星空の文字列。

炎と気化した化学物質を表す温度や化学式を解説した文を吹き出す、半ば砕けたコンクリや鉄骨の組成や製造年月日がはみ出した、築何年か、総生徒数や総卒業生数や校風、校歌までが記された校舎の文字列。

それらを背景に空に浮かぶは黒幕、今回の獲物。

「律儀に待って頂かなくても、纏めて吹き飛ばすくらいでも良かったんですよ？」

文字列の中には喜悦や期待を表す長々とした文章、戦歴もちょっとした戦記小説くらいありそうだ。

種族は堕天使、だけど、そこはどうでもいい。

黒幕だ、事件の黒幕、どうにも、戦いとか戦乱とか、戦争が大好きだとか、そんな文章ばかりが目立つ。

戦いを避ける腑抜けた上司に対する装飾過多な愚痴で構成された腕が、光の力で編まれた剣の形をした文字列を生み出した。

「それも悪くはないなぁ。魔王の妹はともかく、その眷属は中々良かった。だが、そんな連中が、お前に道を譲った。明らかに只の人間であるお前に。わかるか？」

【極上の料理を前にしたかの様に、舌舐めずりと共に口角を上げる】

文字列を読む。読み続ける。

彼は戦いを求めている。

彼の所属する組織において、それは今の時代にそぐわない考えだと思われている。

時代遅れだ。時代錯誤だ。

空気が読めていない。現代文化に馴染めていない。

彼は孤立している。

必要とされていない。

生きていればいい、とは思われているが、何かを求められている訳ではない。

死んだとしても、心から誰かに惜しまれるという事はない。

最も、孤立していないと断言できるほどの繋がりがあるのなら、戦なんてものに狂いはしないだろうけれど。

「貴方が面倒なタイプだという事は」
だからこそ、此方の事を見抜いてきた。
初見の印象では何処にでも居る一般人にしか見えない、言ってしまえば、誰しもが油断せざるを得ない認識を潜り抜けてみせた。
これが、仮に殺してはいけないタイプの、誰かに大事に思われているタイプであれば面倒だったかもしれない。
幸運だと思う。
塗り潰しても良い相手が、同時に塗りつぶさなければ面倒になる相手なのだから。
「ははは！　面倒か！　だが俺は嬉しいよ！　お前の様な者を見つけられた！」
「奇遇ですね。此方も嬉しく思っているんですよ。貴方の様な輩が来てくれて！」
表に出していた『海』を全て引っ込め、両の手に六刀を展開する。
この身は只の忍者、人の延長線上にある、何の変哲もない忍者。
手にある獲物は何の変哲もない、折れないだけの刀。
一撃で殺すには明らかに不足。
だがこれでいい。これがいい。
即座に殺して塗りつぶすのでは意味が無い。
持つもの全て、隠しているもの全て、出さねばと思わせる様に、高揚させる。
お楽しみの時間は、もうすぐそこだ。

二十四話　忍者と聖剣が出て殺す

天から降り注ぐ光剣の弾幕と、その中を跳ね続ける鋼色の球。
傍から見たなら常人にはそうとしか見えないだろう。
否、常人ならずとも特に優れた動体視力を持たない限りは。
「す、凄い……」
この場に居る存在、その光景を見る存在は現在六名。
リアス、朱乃、アーシア、祐斗、イッセー、ゼノヴィア。
赤い忍者はいつの間にかその場から消え失せ、小猫が気絶したままである以上、この光景を目にしているのは正真正銘この六名だけだ。
だが全員が同じように見えている訳ではない。
「前よりは遅い……？」
「あの剣を全て撃ち落としながらだからね」
超高速での接近戦を熟す三名、祐斗とイッセー、そして熟練の聖剣使いであるゼノヴィアには見えていた。
鋼色の球に見えているのは闖入者、読手書主の六刀による斬撃の残像。
しかも只逃げ回りながら光の剣を受け続けている訳ではない。
跳ねる軌道の頂点には、必ずと言っていい程に弾幕の発射元、堕天使幹部のコカビエルが居る。
「何だぁ!?　なんだお前は！　面白いなぁお前は!!」
驚愕と喜色がたんまりと乗せられた絶叫と共に、絶えず光の剣を打ち出し続けるコカビエルが光の槍と剣を振るう。
堕天使の振るう一刀一槍と打ち合うのは、空を飛ばず跳ねるしかない人間、書主の六刀だ。
下手な魔獣であれば容易く貫き切り裂き、そこいらの聖剣魔剣とならば互角以上に渡り合える光の力で編まれた刃と、只の鉄と鋼で鍛えられた様にしか見えない刀。
一方的に片方が砕け散るとしか思えないその打ち合いはこれで何度目になるだろうか。
光と金属がぶつかり合いこすれ合う度に、有り得ざる火の華が鳴り

散らす。
「そうですか、まだまだ隠し玉はありますが、この程度で満足ですか」
応える書主は剣戟に意識を向け、そこに至るまでの光剣の弾幕など意に介していない。
並の悪魔であれば貫かれた瞬間消滅する程の光、それが雨あられと降り注いでいる。
人間の用いる護りであれその威力は変わらない。
消滅こそしなくとも、魔術や科学の護りは紙切れのように引き裂かれるだろう。
だがそんな破壊力、貫通力の雨は、六刀の一振りで容易く砕き散らされている。
まともに打ち合う事が出来ているのは、手元の槍と剣が常にコカビエルから光を継ぎ足され続けている特別製だからに他ならない。
つまり、素で作り上げた光の武器は、あの六刀の強度と人間の腕力だけで打ち砕かれている。
技量が格別高いわけでもない。
純粋な剣士としては木場祐斗と比べるまでもない。
しかし現実として、技量だけで受け流し切る事が出来ずにいる。
その事実に驚嘆しているのは誰あろうコカビエル本人だ。
驚きと共に喜びが現れているのは、これが彼の望んだ生死を賭けた戦いだからか。
コカビエルは手を抜いていない。
少なくとも正々堂々、敵を打ち倒すという点では間違いなくベストを尽くしている。
何も宙にぷかぷかと浮かびながら戦っている訳ではない。
高速戦闘に馴染みのない者では瞬間移動にしか見えない動きで飛び回り、時に地に降り脚力までもを駆使した機動を用いても、目の前の人間は食らいついてくる。
「面白い事を言う小僧だ！　ああ、惜しい、実に惜しいな！　お前があのエクソシストや悪魔の様に、聖剣を使えていたらと思うよ！」
速さも力もある。

あの刀も相当な強度だ。
だからこそ惜しい。
あれが、あの刀がせめて神器か何かなら、これまでにない戦いになったろう。
まさに神話の時代の英雄に並ぶ事もできたろう。
攻撃を通すだけの力がないという一点だけが、コカビエルに僅かな不満を与えていた。
「ふぅ、ん。なるほ、ど！」
弾幕が途絶える。
途絶えさせてしまうほどの衝撃。
戦の中でありながら、目を見開き驚愕に言葉と動きを失う。
明らかな隙。
しかし、書主はそれを突かない。
「ああ、あぁ……。なんだ、それは、はは！」
手を抑える。
折れない筈の剣が、槍が、両断された。
勢いでその向こうの手まで浅く切り裂かれた。
だがそんなのは問題じゃあない。
光の武器を切り裂いた獲物。
それは六刀ではない。
「なんだ、お前、天使どもの使いだったか」
そうとしか思えなかった。
書主が手にした獲物。刀の代わりに指の間に挟み込まれていた獲物。
明らかに見覚えがない。
だというのに、見た瞬間に、本来なら誰が使うものかが理解できてしまった。
光り輝く白銀の剣。
余計な装飾も無い、サバイバルナイフほどの長さの、槍の穂先の様な剣（つるぎ）は――
「天使どもの剣、下賜されるなど、どれほどの信仰だ」

もちろん、天使であった頃に見た覚えは無い。
だが、その剣から伝わる気配は明らかに天使の、それも大天使達の気配。
人の世で創り上げる事は叶わない、神の使いに寄る属性を持つ剣。
「まさか。此方は多宗教ですよ。ともかく……わかるでしょう？　此方に信仰が無くても、この剣は貴方を切り裂く」
獲物が短くなった、重量バランスも明らかに違う。
だが、そんな事は関係ないと言わんばかりに構える。
そんな書主をコカビエルは凝視する。
人や悪魔に見えずとも、天使は人の信仰を知覚する。
コカビエルはその知覚能力で書主の言葉に嘘が無い事を確認し、天を仰いで笑い出した。
「は、ハハハハハハハハハ!!　なんと、なんともまぁ、本当に!?　は、げはっ、くくくくく」
身を折り笑い続けるコカビエル。
笑いすぎて目尻に浮かんだ涙を拭いながら、笑いをどうにかこうにか抑えこむ。
「はは、ああ、なんとな。信心もクソもない人間にそんなものが渡るとは。神の死はそこまで世界のバランスを崩していたか」
「別にそこは関係ないんですけどねぇ。どうです、そっちも出し惜しみは……」
「……ちょっと待ちなさい。神の死ですって？」
コカビエルが発し、書主が何でもない事のように流した発言に、リアスが待ったを掛けた。
リアスの問に、書主が怪訝な顔を浮かべ、それを見てコカビエルがまたもや堪え切れないといった風に笑い始める。
「フハハハ、何、この話は『普通の』下々の者には伝えられておらんのよ。貴様の様に神も悪魔も『知った事か』と言わんばかりの者とは違ってなぁ」
その答えは問いを放ったリアスではなく、相対し表情だけで疑問を表した書主へのものだ。

勿論、この場に居る全ての者に聞こえる様に言ってもいるが。
「じゃあ言っちゃ不味いでしょ。信仰捨てきれなかったり、それどころか狂信者も居るじゃないですか。此方はどっちでも良いけど」
「そうだなぁ。だがまぁ良かろう、秘している理由もまた平和と平穏の為だ、守る義務も無い。人間は神無くして法も守れず心の平穏を保てないから、などと、下らない言い訳をする者も居るが……ハハッ！」
笑い、遠巻きにしているグレモリー眷属やゼノヴィアを睥睨する。
その反応は様々だが、神の死に強い反応を示しているのは、やはり教会に深く関わってきた者達に限定される。
対して、神にも教会にも関わりの少ない者達のリアクションは薄くはないが深刻さは無い。
悪魔である、という事実を鑑みたとしても、つい最近まで元人間であったという赤龍帝、イッセーの反応は特に薄い。
「先の大戦で、魔王と共に神も死んだ。残されたのは神を失った天使、魔王と上級悪魔の大半を失った悪魔、幹部以外がほとんど死に絶えた堕天使。疲弊などと生易しい表現で表せる状態ではない、滅んでいないだけの残党どもだ。どこもかしこも、人間を利用して力を蓄え数を増やすしかないような状態だった。だからこそ、自分達に擦り寄ってくる、神の救いを求める程に『救われていない』連中を絶望させる訳にはいかなかったのさ」
告げられる真実に、神を信じていた者が、神を信じている者が打ちのめされる。
特に、現役で神の信徒であるエクソシストのゼノヴィアの精神的なダメージは計り知れない。
何処か浮世離れしつつ、しかし戦いのさなかに在っては常に冷静さを失わなかった姿は見る影もなく、剣を取り落とし、その場に膝をついて『嘘だ、嘘だ……』と譫言の様に繰り返している。
すでに立場上神とは決別していると言っていい祐斗やアーシアですら、歯噛みし、身を震わせ、明らかに戦意を失っていた。
「ああ……こうなると、何処かに縋ろうとも思えなくなる、と」
白けたような表情で、譫言を繰り返しながら膝をつくゼノヴィア

に、歯をガチガチと鳴らしながら震えるアーシアに視線を送る書主。
正直な話をすれば、彼はこの話に興味が無い。
彼は神に縋る理由がない。縋ろうという発想がない。
ある意味では、宗教に馴染みのないイッセーに近い感覚でこの話を聞いていた。
話を聞かずに殺す訳にはいかないというそれだけの理由で、彼はこの話を聞き流す。
その足元では、苛立たしげに爪先が地面を叩き続けている。
「そういう事だ。当然、そんな状況で戦争なぞ出来るはずもない。そしてそれが改善される見込みもない。将来を見通しても、大きな戦争なぞ誰かが故意に始めなければ再び起きることはないだろう。前の戦争の最後も呆気ないものさ。どこもかしこも戦争の大元の原因である神も魔王も死んだ以上、戦争を続けても無意味だと抜かしやがった。挙句の果てに！」
そして、そんな書主の内心も周りの聴衆の内心も気にならないのか、コカビエルは次第にヒートアップし、神の死から離れた現状への不満をぶち撒け始める。
聞き入っているのは現状の冷戦状態が保たれている裏事情を知ってしまい愕然としているリアスと朱乃程度か。
「アザゼルの野郎！　部下の大半が戦争で死んだ程度で！『二度目の戦争は無い』などと宣言をして！　ふざけるなよ！　ならこの力は何処へ向ける!?　振り上げた拳を何処に落とせばいい！　あのまま戦争が続けば俺達が勝ったかもしれないというのに！」
唾を撒き散らし、血管を浮かび上がらせながら憤怒の形相で喚き散らすコカビエル。
衝撃的な事実にその場のほぼ全員がショックを受け動けずに居る。
特に、悪魔になってまでも信仰を捨てられなかったアーシアの受けた精神的なダメージは計り知れない。
彼女は震える声で問う。
「主は……主は、天に居られぬのですか……？　主は、死んで、では、私達に与えられる愛は……」

アーシアの縋るような、絶望しながら否定を求める疑問に、コカビエルはおかしそうに答え――

一際強く地面を蹴る音と共に、遮られた。

「ありませんよそんなもん話聞いてたんですか貴方。馬鹿か難聴の類ですか」

吐き捨てる様に告げたのは、しかめっ面で六本の天使剣を指に挟んだまま腕を組んで話が終わるのを待っていた書主だった。

「な……お前！」

余りにも余りな物言いに、震えるアーシアを支えていたイッセーが激昂する。

だがイッセーが何か告げるよりも早く、思いやりなぞ全て捨てたと言わんばかりに面倒くさそうな視線をアーシアに向けた書主は続けた。

「もうちょっとで黒幕さんの話が終わりそうだってのに、一度説明した事をぐちゃぐちゃぐちゃぐちゃと聞き返して……。貴女いっぺん自分が悪魔に生まれ変わるまでの人生思い返して、現状振り返れば解るでしょうが。なんで悪魔になってんですか。結局人間だった頃は決定的な救いも神の愛も無かったからでしょうが、馬鹿じゃないなら学習してくださいよ。時間押してんですから時計見ろ時計！　明日平日でしょうが通常通りに授業があんですよこの調子で同じ問答ぐるぐるぐるぐる回したら余裕で夜が明けるわド阿呆が！」

「おま、お前なぁ！　アーシアはショック受けてるんだぞ！　そんな言い方があるかよ！」

「んなもん結界の外に出ろって言ったのに出てなかった貴方方の自業自得でしょうが。そも言い方じゃなくて今更神が死んだのどうこうでショック受ける方がどうかしていますよ。神が何時死にました。ここ数年とかここ数日の話ですか？　違うでしょう？　この場で神が生きている頃に生まれていたのなんて黒幕さん程度ですよ。元から居ない者を勝手に居ると信じこんで、ネタバレされたらショックだわーとか、馬鹿かって」

「そういう話をしてんじゃねぇ！　思いやりを持てっつってんだ！」

「貴方が、先輩が思いやっているじゃないですか。じゃあ少なくともアーシア先輩には神なんぞ要らないでしょう」
「はぁ？　なに言ってんだよお前」
思いやりの欠片もない、それこそ、一定の距離感を保ちつつも多少の、社交辞令程度の見せかけの思いやり程度は見せて話していた書主とは思えない程の物言いに反発していたイッセーが、頭の上に疑問符を浮かべる。
そんな事も解らないのか、とでも言いたげな呆れ顔で、やれやれと大げさに両腕を広げて首を振る。
「神は特に救いも与えなかったし愛も与えなかった。結果アーシアさんは人間としての生を諦めて悪魔になりました。仮に悪魔にならなきゃその内似たような連中に浚われて神器引きぬかれて死んでたでしょ。あー残念やっぱり救いも愛も無いですねこの世。でも今は生きている。悪魔としてね。それは神のご加護か何か？　神は死んでいるから当然違う。堕天使に利用されてそのままボロクズになる予定のアーシアさんは誰に救われました。右も左も解らないアーシアさんを助けた方が居ました。アーシアさんは確かに救われた。まさか忘れたとは言わないでしょう兵藤先輩」
「そりゃ、忘れる訳、無いけど」
何が言いたいか、耳を塞ぎたくなるような罵詈雑言から、自分とアーシアの馴れ初めに言及した辺りでようやく察し、しかし、導かれるだろう結論への照れから僅かに口籠る。
見れば、アーシアの身体の震えは止まり、傍らで自らを支えるイッセーへと視線を向けている。
神に縋る信仰者の視線では断じて無い。
だが、傍らに立つ誰かに向けるには十分すぎる、信頼と親愛の篭った眼差し。
「人間、アーシア・アルジェントは神に愛されず救われず終わった。でも、死なせたくないと願う兵藤先輩の愛で新たな生を与えられ救われた。今じゃ二年の愛され系って聞いていますよ。愛され系なら愛も溢れているでしょう。これまで積んだ善行も神の国も神もないなら

無駄ですか？　百度に一度は巡り巡って戻ってくるでしょう。ほら、神が居なくて誰が困ってるいんですか」
「あ、愛ってお前、なぁ……」
既に、アーシアとイッセーの間には絶望の気配は無い。
「じゃあ、あの施設で死んでいった仲間たちは何を信じて」
「木、場、先輩その手の中は何ぃぃぃ!?　見てないけどその仲間とか救う下りたぶんさっきやったんでしょぉぉぉぉもぉぉぉぉおおおおお!!!!」
手のひら側の剣の柄でがりがりと頭を掻きながら地団駄を踏み、とうとう堪忍袋が破裂したかのように絶叫する書主。
その様子を見ていたコカビエルが嘲る様に口を挟んだ。
「ならばあのデュランダル使いはどうだ？　未だ世界にあふれる信徒どもは、その青臭い理屈で……」
「知りませんよんなもん！　代わりに救済してんのは大天使とかそこら辺でしょうが完全に此方の管轄外ですよ！　まだ信じてる奴らは信じたまま死にゃ気分的に救われるでしょうが！　神は無くとも事もなしって名言を知らないんですか！　ていうか！　貴方も！　話を！　脱線させてるんじゃないですよ！」
言い終えて、はぁはぁと荒くなった息を、ゆっくりと整える。
懐から時計を取り出し、舌打ち。
「ほら、余計な話挟んだせいで三分ちょい余計に時間食っちゃったじゃないですか。アーシア先輩と兵藤先輩と木場先輩は海より深く反省して、あとは隅っこか結界の外で静かにしてて下さい」
「……人間って、ここまで自分勝手が言えるものなのねぇ……」
頬に手を当て、呆れを通り越して関心した様に呟く朱乃に、書主の剣幕に押されて口を挟めなかったリアスがうんうんと頷く。
「さて、話を戻しますが。このまま再開すれば、貴方は一分以内に即死するでしょう。……さて、どうします？」
「無論、戦うとも」
ずらり、と、同時に武器を構え直す書主とコカビエル。

最早余分な弾幕を展開する事もなく、挑むのは実力勝負だ。
清々しい、と表現するには凄みの有り過ぎる凄絶な笑みで光剣を構えるコカビエルに、挑発するように書主は語りかける。
「またまた。さっきの話から推察するにグレモリー先輩で魔王釣って戦争再開させるのが真の目的なんでしょう？　此方を倒してグレモリー先輩らを手に掛けるのは、一人じゃ難しいんじゃないですかねぇ……？」
「ふむ、何が言いたい？」
試すようなコカビエルの問いに、一度そっぽを向き、チラッ、チラチラッ、と、期待の視線をコカビエルに向ける書主。
「あー、この場になー、足止めの雑兵が大量に現れたらなー、さしもの控えめに言ってアーチ級の此方もリアス先輩らまでカバーしきれないだろうなー。……さしあたって完全武装のはぐれエクソシストが数千、いや、数百人も現れたら、とっても、とっても難しいと思うんですよねー」
一度言葉を区切る度に、チラッ、とコカビエルに期待の視線を向ける。
その視線と言動から、書主が何をやりたいか、何を狙ってこの場にいるかを完全に理解したイッセーと祐斗は『うわぁ……』とでも言いたそうな表情でその場で一歩後ろに引く。
対峙するコカビエルはその真意こそ掴みきれないものの、ふん、と鼻で笑い、応える。
「肉盾にもならぬ雑兵なぞ要らん。貴様をこの場で殺し、やがて来る魔王の首を土産に！　あの頃の続きを始めるのだ！　我等堕天使こそが最強だと、俺一人でも、証明して、ミカエルにも、アザゼルにも見せつけてくれるわ！」
「いやいや、そう言わ……ん？」
自信満々に言い切るコカビエルの言葉に、チラチラと期待の眼差しを送り続けていた書主が、首を傾げて固まった。

今、この黒幕さん、なんて言った？

いや、聞き間違い、いやいや、言葉の綾かもしれない。
「あの、黒幕さん。……戦争、するんですよね」
「そうだ！　あの時代、勝てる筈だった戦いに、勝ったという結末を齎す為に……」
自信満々に、何かに酔うように目を閉じ思いを馳せる黒幕さん。
回想シーンにすら入りそうな動きに掌を差し出しつつ遮る。
「いえそういうのはいいです。……一人で、やるわけじゃ、無いですよね。だって、戦争するんですから、兵隊くらい」
「人間の戦と一緒にして貰っては困る。勿論居たほうが良いが、アザゼルの元に集うような弱兵ならば俺一人の方がよほどマシだ」
う　ん　う　ん
………………………………………………………………うん
？
「じゃあ、一人で、戦うんですか。この場も、この後も」
「当然だろう！」
……………………………………………………………………
……………………………………………………………………
……………………………………………………………………
……………………………………………………………………
……………………………………………………………………
……………………………………………………………………
……………………………………………………………………
……………………………………………………………………
……………………………………………………………………
……………………………………………………………………
……………………………………………………………………
……………………………………………………………………
……………………………………………………………………
……………………………………………………………………
……………………………………………………………………
……………………………………………………………………

……と、

「当然じゃないわこの糞ハグロトンボオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！　そりゃ戦争じゃなくてカチコミが特攻でしょうがぁぁぁぁぁあああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

絶叫。

込められた感情は、激怒、と呼ぶ他に表現のしようもない。

叫びと共に放たれた衝撃波が校舎の辛うじて無事だったガラスを残らず粉々に粉砕し、炎上していた区画の炎を纏めて吹き消した。

天が、地が、叫びに釣られるように鳴動する。

「……もう、いい」

静かな口調。

しかし明らかに怒りを湛えたままの声は恐ろしい程に熱を感じられない。

極自然に宙に浮かび、光の剣を構え、臨戦態勢のコカビエルに向けて、冷たい視線を送る。

まさに家畜を見るような冷たい目。

その視線に耐え切れなくなった訳でもなく、極自然にコカビエルは飛び出した。

好機ではない。

だが、コカビエルの直感が告げていた。

最早相手に一秒とて与えてはならない。

仕留めなければ、殺される。

最低限の堕天使の自尊心は備えていたコカビエルだが、自らの生存本能に逆らう理由は無い。

超常の力を備えるだけの、脆弱である筈の人間に向ける、長い生の中で最速最高の一撃。

「この場に貴方しか居ないというなら」
受けられる。
六刀でなく、武器ですらなく。
光の剣の刃は、書主まで数十センチという所で、分厚い空気の膜に受け止められ、前に進めない。
蹴りを入れる、新たな光の剣を生み出す。
そんな選択をする間もなく空気の爆発に弾き飛ばされた。
空を自在に飛ぶ堕天使であれば本来ありえない程に、大きく距離を離される。
「用意した分、全部受けていきなさい」
書主の赤みがかった黒髪がざわめくように蠢く。
手に刀は無く、先の戦闘中も決して開かなかった鞄が開き、中から何かがふわりと浮かび上がる。
大きめの肩掛け鞄に限界まで敷き詰められていたもの。
それは、３００㎜×５０Ｍの安いロール紙。
左右五本づつ、合計十本のロール紙がたわむ。
巻物の如く広がり続けるロール紙に囲まれ、書主は背に手を延ばす。
何もない筈の背、そこに、一本の刀があった。
何の変哲もない筈の刀。
それを引き抜きながら、地の底から響くような声で、告げる。
「秘伝忍法」
冷たい宇宙空間の闇を連想させる黒い瞳。
その瞳に浮かぶ煌き――星が、明確に一つの紋章を作り上げた。
異なる宇宙、異なる世界の、地球を総括する軍の紋章。
「紅」
赤みがかった黒髪が一際強く輝き、燃え盛る炎の如き橙混じりの紅に染まる。
見た目の変化はそれだけ。
だが、決定的な変化だ。
コカビエルが突撃、に見せかけ、周囲に漂うロール紙に光剣を投げ

付ける。
何らかのギミックになるであろうロール紙に手を出す事で隙を作ろうという言わば小手先の手。
ほぼ同時にコカビエル本人も動き出し、しかし、止まる。
見れば投擲した筈の光の剣も空中で静止し、間を置かずに大気に溶けるようにして消えて行く。
壊された訳でもなく、何らかの魔法を使われたわけでもない。
それが、まるでそうなるのが自然であるかの様に、溶けて消えた。
身動きがとれないのもまた、それが当たり前の現象であるかのように感じられてしまう。
「逃げないで。……と言っても逃げようもないでしょうが」
そう、コカビエルは逃げられない。
少なくともこの場から飛んで、空間の中を動き移動して逃げる事は決してできないだろう。
この場の物理法則は既にそれを許さない形で作り変えられている。
「さぁ、さぁ」
手に持つ一刀を振るう。
書主の目に映るのは、ロール紙を構成するパルプの出生地やＤＮＡ情報、製造年月日、使用期限諸々の文字列と、その上に薄く描かれた描きかけの絵。
その未完成部分に、一瞬にして筆として刀の切っ先を走らせていく。
「一つ残らず、一つ余さず受けていきなさい」
３万平方メートルにも及ぶ広大なロール紙の白地に、薄っすらと、しかし、欠けること無く描き上げられた『それ』が、次々と実体化していく。
空中で実体を得たそれらは、重力に引かれグラウンドに堕ちること無く、その場に浮かんでいた。
浮かんでいた、いや、その場で静止している。
まるで、見えない手によって握られている様に、見えない奏者に操られる様に。

「……何なの、何なの、あれは」
信じられない光景だった。
傍から見ているだけで、それを向けられているわけでもないのに、絶望的である、としか思えない。
結界から出ず、いざという時に加勢しようとしていたグレモリー眷属が、未だ絶望に捕らわれていたゼノヴィアが、唖然とした表情で見上げる。
そこには聖剣があった。
木場祐斗は自らの手の中を確認し、そこにあるものを確認し、再び空を見上げた。
瓜二つの、しかし、黄金の輝きを放つエクスカリバーがあった。
僅かな細部の異なるエクスカリバーが幾本も並び、自らのエクスカリバーと同じ黒いエクスカリバーを見た。
ガラティーンと呼ばれるエクスカリバーがあった。
プロトと呼ばれるエクスカリバーがあった。
モルガンと呼ばれる黒いエクスカリバーがあった。
イマージュと呼ばれるエクスカリバーがあった。
カリバーンと呼ばれる聖剣があった。
カレトヴルッフと呼ばれる聖剣があった。
エスカリボールと、エクスカリボールと、キャリバーンと、コールブランドと、カリブルヌスと、カレドヴールッハと呼ばれる聖剣があった。
どれも似た姿をして、しかし残らず聖剣だった。
明らかに剣ではないものがあった。
バールの様な形をした聖剣があった。
火かき棒の形をした聖剣があった。
ベーブ・ルースのバットが堂々とエクスカリバーの列に並んでいた。
もはや只の木の棒にしか見えない何かが聖剣として並んでいた。
未来的な可変戦闘機が並んでいた。
似た名前の響きの乱杭歯付きニッケル合金製バットの様なものも

とりあえず聖剣として並んでいた。
王賜剣一型と呼ばれる、二刀一組の機械的な機構を持つ聖剣があった。
王賜剣二型と呼ばれる、カリバーンともエクスカリバーとも呼べる機械的な大剣があった。
エクスカリバーという名を貰いながら明らかにデザインラインが異なる聖剣が無数にあった。
当然の様に、エクスカリバーですらない聖剣もあった。
その方が多く、しかし、間違いなく数えきれない程の聖剣があった。
どれもこれも、誰ひとりとして見覚えが無く。
しかし、見た瞬間に、誰もが聖剣エクスカリバーであると確信していた。
悪魔はその場から一歩足りとも動けず、いや、身動ぎ一つできる気がしなかった。
例えそれが、それら無数の聖剣が、たった一人の堕天使にのみ向けられているのだとしても。
全ての聖剣と思しき物達が、まるで一つの意思によって統率される軍隊の如く、空に在る光景に、心を射すくめられていた。
「は、はは、そうか、そうだったのか、魔王が、神が死に、世界のバランスが崩れると、ここまで、狂うのか！　ふは、あは、はははははははははははははははははは！」
全ての聖剣の切っ先を向けられたコカビエルが、狂ったように笑い出した。
最早その身体はピクリとも動かない。
抵抗していない訳ではない。
今この瞬間も必死にこの窮地から抜け出し逆転の一手を打たんと思考し、しかし、その意思に反するように身体を動かす事も、光の力を生み出す事もできない。
今まで当たり前の様にできていた事が、まるで全てのルールが変わってしまったかのように出来ずに居る。
許されているのは、目の前の死から目をそむけずに、瞼を閉じずに

居ることだけ。
「絶・秘伝忍法」
静かな声と共に、ゆっくりと刀を振り上げる。
掲げられる刀を追う様に、全ての聖剣が天に切っ先を向け……回転を始めた。
太陽を中心に自転と公転を行う惑星の如く、回り、踊る。
古代日本において混沌漂う大地をかき混ぜ整えた天魔返戈（あまのまがえしのほこ）を想起させる破壊力の渦は――
「蓮」
一片の慈悲無く、狂ったように笑い続けるコカビエルに、振り下ろされた。

二十五話　揺れる橋に座る猫

骨折り損の草臥れ儲け、という言葉がある。
良い意味で使われる言葉じゃない。
使われる言葉を順番に読んでいくだけで意味がわかる初歩的なことわざ。
骨を折った上に草臥れただけ、という、まさに踏んだり蹴ったりという意味の言葉だ。
あえて草臥れ『儲け』と、プラスになっているように見える言葉をチョイスしているあたり、この諺を作った人はウィットに富んでいると思う。
塩チョコの塩の様にカレーに一欠のチョコの様に、この儲けという言葉の空回りっぷりが骨折りと草臥れという嫌な現実に対する実感を強く感じさせてくるのだ。
事件解決から数日。
全ての授業とＨＲを終え帰るだけの放課後の教室。
「つだー」
ごつん、と、頑丈さだけが取り柄の学校机の天板に額をぶつける。
非常に、非常に疲れる事件だった。
というか、ハッキリ言って関わらなければ良かったと思うことしきりだ。
いや、勿論、すり潰して塗り潰してもいい相手が居る以上、どうせ戦いはしたのだろうけど。
「とーじょーさーん」
何故だかこっそりと近づいてきていた塔城さんに声をかける。
「……なんですか、そんな気の抜けたコーラみたいな声で」
「羽付いてる連中ってーのは、偉くなる程馬鹿になったりするもんなんですかー？」
「……それ、所属的にどう思っててもはいとは言えないんですけど」
「そーいやそーですねー」
顔も上げずに問いかけて、塔城さんのつれない答えに同意しながら

思い出すのは忌々しい怪人ハグロトンボの間抜けさだ。
彼は戦争を起こす事を目的とする、堕天使の幹部であったらしい。
実のところ、此方もその程度の情報は途中で掴めていた。
だからこそ、探索に割いていた時間を更に分割し、無数に押し寄せる殺しても殺しても殺しても文句の出ない兵隊を、どうやってすり潰して塗りつぶすか考えて、専用の筆まで自作したのだ。
多めに見繕って数百、一本につき数人の割合で使い分けるつもり満々だった。
エクスカリバーが事件の軸になっていると聞いたから、思いつく限りのエクスカリバーを描いて作り、空いたスペースで種々様々な聖剣を描いた。
だが、そんな手間が、まるで意味のない事だと言われた此方の気持ちが誰にわかるだろうか。
絵を描くのはそれなりに体力が居る作業なのだ。
単純な線の少ない剣は少ない、なにしろエクスカリバーだ。
大げさだと思うなら、ネットで数百種類の聖剣画像を収集しそれを全て実物大で模写してみるがいい。此方の苦労が僅かにわかるだろう。
勿論、全ての聖剣を一本一本細かく制御する為に、母さんに頼んで久しぶりに分割思考の練習だって再開した。
これはまぁ、表面上割りと淡白なところのある母さんとの親子の交流にもなったからいいのだが……。
結果として、期待していた身寄りも親類も友達も居ないような、挙句人に迷惑をかけてもどうとも思わない様な人非人連中の群れなどというものは無く。
そこから作られるインクで駒王町を色取り取りに染め上げるビッグラクガキチャンスは夢と消えた。
人の夢と書いて儚いとはこの事か。
「……此方も馬鹿だった、ってのは、わかってるんですけど」
何が問題だったか。
取らぬ狸の皮算用、はっきり言って期待し過ぎた此方にだって結構

非がある。
エクスカリバーなんてものを持ちだして来るんだから、大きな組織に着いたに違いないとか、そういう期待は、少し重すぎたとも思う。
ここは文字の世界……恐らく、ラノベとか、その二次創作とか、そんな雰囲気の世界だ。
言わば、言ってしまうなら、創作物の世界なのだ。
もう部下なんて知らんゾイ！　一人でも戦争するゾイ！　なんていう、軽々しいエアロインな脳味噌でも戦争に生き残り、幹部としてやっていけるような無茶な組織がある、という予測を立てられなかったのはある種の甘えだろう。
「わかってるからって、ねー。草臥れた、って、思うのは、どうしようも、無いじゃないですかー」
相手が気が大きくて力持ちなだけのスーパーぼっちであるのなら、それ相応の、無駄に凝らない適度な仕掛けで相手をした。
でも仕方ないじゃないか（渡鬼的発音で）
ここは確かに創作物の世界かもしれないけど、大概の組織は元の世界と同じような普通の構成なのだ。
そんな組織としてちゃんと成り立つのか怪しい組織の事、常に想定していられる訳がない。
つまり、此方が『期待する人間』であるという一点が、今回の無駄な疲労の原因という訳だ。
しかも途中でイライラして、人間関係を構築する上で発するべきではない荒々しい発言をしてしまった。
割りと普通に接していた人達からも避けられてしまうかもしれない。
実に救いがない。
流石神が死んでいるだけの事はある。
誰か、他の連中は良いから、此方をこの伸し掛かる徒労感から救って欲しい。
「……よ」
「よ？」

顔を上げず、単音に単音で問い返す。
「よ……よし、よし……」
……数秒の間を置いて、ぎこちなく、本当にぎこちない手つきで、頭を撫でられた。
「……ええと、塔城さん？」
「……待って、待って下さい、ちょっとでいいので」
「はい」
思わず素直に頷く。
そりゃ、焦りやら何やらが恐ろしく伝わってくる震え声で待てと言われたら待たざるを得ないだろう。
しかもこんな状況では。
「あの、ですね」
「はい」
「あの時、助けてくれた、お礼を、と、思ったんですが」
「はあ」
「……たぶん、これ、お礼じゃない、ですよね」
「そりゃそうじゃ」
思わずＣＶ石塚運昇な博士のものまねで返してしまった。
しかし、なんだ。
くすぐったい。
頭が、というのもあるが。
撫でている側の動揺とか、羞恥心とかが手の動きから如実に伝わってきて、撫でられているこっちは二重に恥ずかしい。
そう、だから、何処がくすぐったいのかと言うと。
「　　心か　　」
「再現度凄いけどどうやってるんですそれ」
渾身の一発芸に対するツッコミと共に、塔城さんが何時もの調子を取り戻してくれたようだ。
……頭を撫でる手は、まだ動いているが。
「しかしお礼ですか」
「ひゃっ」

がばりと身を起こす。
ふとした予感から瞼を空けると、目の前、早々に主が部活に向かう事で空席と化した前の席に座る塔城さんの姿。
文字列でない、挿絵だ。
最近、塔城さんは妙に挿絵づいていると思う。
此方の頭の上に載せていた手を胸元に寄せ、驚きと慌ての混ざった表情で頬を赤らめている姿が見える。
こうして挿絵で見る機会が増えて改めて思うようになったのだが、塔城さんは本当に美少女に分類される側なのだなぁと関心する。
「お礼と言うなら、少しお耳を拝借しても」
「……変な事は」
「しませんよ」
「……まぁ、そうですよね」
何故か渋い声で納得しながら、机越しに頭を寄せて耳を差し出して来る塔城さん。
耳を貸せ、と言ったからか当然耳を突き出す形になっているのだが、此方に頭を近づけた時点で挿絵が剥がれて文字列になった。
少し勿体無いな、と思いつつ、寄せられた耳元の髪に触れる。
「！」
びくぅっ！　と身体を震わせて、文字列が再び挿絵に上書きされていく。
目を見開き、わずかに髪の毛がぶわっと浮いた。
次いで、眉根を寄せ、頬を羞恥からか紅く染め、ジト目で口を開いた。
「……何、してるんですか……！」
「いえ、お礼に耳とか髪を触らせて貰おうかなと思ったのですが、駄目ですか」
「……」
ぷい、とそっぽを向き、口を真一文字に結んで、真っ赤に染まった頬を微かに膨らませ、しかし、顔を遠ざけはせず、されるがままで逃げずに居る。

さらさらと髪を梳いても、耳を指先でなぞっても、その度に身体を震わせるだけで逃げようとしない。
挙句の果てに、未だ挿絵のままだ。
ここぞという見どころで出てくるものと思ったが……まさか、塔城さん限定でラノベ配分だった挿絵がイラストノベル配分くらいになったという可能性が微粒子レベルで存在している……？
と、考えていると、塔城さんの身体から緊張が抜けてくったりとリラックスしていく姿を最後に、挿絵が文字列に入れ替わった。
残念、そううまい話は転がっていないらしい。
だけど、なんというか、言っておくべきだろうと思う事が出来た。
「塔城さんは、可愛らしい人ですねぇ……」

優しげな『視線』を向けながらそんな事を言う読手さんに、私はうまい返しも思いつけず、口を噤み続けるしかない。
「……」
変だ。
勿論、瞼も閉じずに楽しげに笑いながら、助けたお礼にかこつけて私の髪や耳を弄り倒した読手さんが今までに無い程に変なのは言うまでもない事だけど。
撫でられた箇所が熱い。
髪ばかりを触られて、耳は何度か触れる程度だったのに、触れられた辺りがやけに熱い。
触られた髪も、髪に、神経なんて通っている訳がないのに、熱い気がする。
「触りすぎ、です。……嫌らしい」
「ああ、すみません。ちょっと調子に乗りすぎましたね」
指を離しながら閉じられていく瞼に、隠れていく黒曜の瞳に、『勿体無い』と思う。
……だけじゃない。
指が離れていく時に、少しだけ、たぶん、気付かれてはないだろうけど、身体が指を追ってしまった。

指が離れる時、少しだけ、嫌だな、と思ってしまった。
……なんだか、変だ。
たぶん、読手さんよりも、ずっと、ずっと、私の方がおかしくなっている。
自覚はある。
原因も、一つ、特大のものが思いつく。
思いつくと同時に、その場面が思い浮かび、抱きかかえられる感覚と、黒い瞳を見せて薄く笑う顔を思い出して……。
……吊橋、どう考えても吊橋です。
本当にありがとうございました。
言い聞かせる。
それで間違いない。
一度助けられるだけで意識するとか、どれだけ安っぽくなれば気が済むのか。
彼はそうじゃない。
彼とは、そういう関係を望む仲じゃない。
だって、彼は、友達だ。
「失礼する。このクラスに読手書主という男は居るだろうか」
ほんの数秒の思考、同じ時間だけの沈黙を破る様に、人もまばらな教室内に響き渡る声。
声の元に視線をやれば、緑のメッシュが入った青髪の女子――ゼノヴィアさんが、教室の入口に立っていた。
何時ぞやの、アーシア先輩が迎えによこされた時の事を思い出す。
あまりに堂々とした姿に逆に誰も声を掛けられずに少し遠巻きにされているゼノヴィアさんの立ち振舞は対照的だ。
「あれ、ゼノヴィアさん。『くにへ　かえるんだな』されたんじゃないんですか？」
「誰が言うんですかそんな事」
「そりゃガイルさんが言うんじゃないですか？」
「なんでそこら辺ちょっと不確かなんです？」
「いやちょっと待ちましょう塔城さん、あちらのゼノヴィアさんがな

んだか不味いですよ。ほっとかれて今にも枯れそうです」
「……じゃあ芝生の上で辛いホットドッグでも齧りながら持て囃して持ち直してもらいましょう」
……こんな感じの距離が、一番合っていると思う。
軽口を言い合える、ちょっと裏の事も話せる。
これくらいが丁度いい、『まぁまぁいい友達』の関係で。
それを何処か物足りなく感じるのは、変な事で。
早く、調子を戻せたらな、と、切実に思う。

「はぁ？　忍者に邪魔されて？　お前、ネカフェから戻ってこないと思ったらまたＮＡＲＵＴ○一気読みを……え、違う？」
「……死んだ、殺されたか。そうなると……今代の赤龍帝は見どころがあるな」
「……は？　いや、疑っちゃいねぇよ。そういう事で嘘は言わねぇだろ、お前」
「……いや、いいさ。こっちで探り入れてみる」
目の前に相手の居ない会話が途切れる。
声の主が、暗闇の中で革張りのソファにどっかりと座り直す。
ガウンを着た、如何にも、と言った風体の美形。
「無数の聖剣で、コカビエルを生きたままミキサーにかける『何処にでも居る人間』ねぇ」
口元に、にやり、と、面白いおもちゃを見つけた猫の様な笑みを浮かべた。
「聖剣創造は、既に持ち主が居る……。さて、厄ネタで無ければ、大歓

迎なんだけどな」

停止教室のヴァンパイア
二十六話　世は緩やかに動き出し

～二十五，五話のあらすじ～

「それじゃあゼノヴィアさん、ちょっと購買寄ってからお話を聞きましょう」

「む、なんだ？　別にそこまで長話には」

「……仲間に遠慮は駄目、ジャムパン奢ってあげますからいきましょう。目指すは中庭です」

連れ立って教室を出て行く三人。

その姿が廊下の向こう、階段を降りていくのを確認して、教室内はざわざわと本来あるべき喧騒を取り戻した。

反射的に机の影にしゃがみ込み息を殺して気配を経っていた数名の暇人が、『ぷは』と二酸化炭素濃度の上がった空気を吐き出しながら立ち上がる。

「……一つ、言っていいかな」

腕を組み瞼を閉じ、再び開いて女子生徒が重々しく口を開く

「いや待て俺が先に言わせて貰おう」

それを掌を突き出し男子生徒が静止する。

そんな二人に視線をやらず、三人の消えていった入り口のドアを見ている一人がやおら椅子に座り、机に肘を付き、持っていた缶ジュースを口元にやり、呟く。

「人が恋に落ちる瞬間を、はじめてみてしまった。まいったな」

言いつつ、その頬は僅かに紅く染まっている。

そんな男に更にすかさずツッコミを入れる一人。

「お前が照れてどーする」

「あーくそお前ら！　それ誰が最初に言うか決める流れだったろ抜け駆けだぞ抜け駆け！　しかもお前小道具まで用意しやがって！」

「でもさでもさ！　あれでしょ見たよね！　凄い攻めてたよね小猫ちゃん！」

「これまでにない流れだった。直接的、っていうの？　アプローチの方向性が違った感じ」
「まぁカウンターの強烈なフックをジョーに食らって逆にぐらって来てたけどな」
「ぼっかおめ、あの読手があの場であいうカウンターしたのだって初めてだろ」
「……わりと好反応だよね、あれ。彼女と上手く行ってないのかな」
「昼休みに明らかに手作りっぽいお弁当をおかず交換しながら一緒に食べるカップルが上手く行ってないならこの世にカップルなんて居ないよ」
「ブティックで熱心に彼女の服選んでくれる彼氏と、それ更衣室で着てみて恥ずかしそうに見せてくれる彼女。これで上手く行ってないなら俺はなんだ……？」
「え、じゃあそういうの一切なしであの反応とあの行動とあの態度なの？」
「鈍感系……じゃないよね。でも二股掛けるタイプでも無いし」
教室に居残っていた暇人たちが集まりわちゃわちゃと好き勝手推論を交わし合う。
今、学校でまことしやかに流れている『塔城小猫が略奪愛に走っている』という噂の発信源。
それは言うまでもなくクラスメートの彼等彼女等に他ならない。
「だって、私、塔城さんに別れの挨拶したし、返事も貰ったよ。周りに人が居る事はわかってたって、絶対」
「……これまでにない直接的な攻めに加えて、衆人環視を恐れない度胸、いや、それすら計算済みだとしたら？」
「どういうことだ、説明しろ苗木！」
「……仮に、仮にだよ。『周りの目が在るからこそやってみせた』のなら……」
「言い触らされる事を前提としている……。つまり、遠隔地からの、彼女さんへの宣戦布告……?!」
ヒートアップする議論、飛躍する理論、斜め上を行く結論。

部活に行くでもなく、帰宅する訳でもない、時間を持て余した思春期の少年少女の群れ。

そんな彼等にとって、マスコットである塔城小猫の恋バナ、しかも、彼女一筋な相手に対する略奪愛などという話題は、絶好のゴシップの的、良い餌にしかならない。

ちょっかいは出さず、成り行きに任せるという基本方針故に、小猫も書主も気付けない。

しかし、その手の話が大好きな思春期の学生、噂話が学園中に広がるのは、そう時間がかかる話ではない

こうして、風化し始めていた塔城小猫略奪愛の行方の噂は、新たな燃料を投下され、再び静かに熱く一部学生の世間話を盛り上げるのであった。

最近、妙に視線を感じる。

害がない視線だからあまり気にはしていないのだけれど、こうまで視線を感じるのは変装術で日影さんの昔の友人になりすまして忍務の為に街を歩いている時以外では中々感じる事が無かったので新鮮な感覚だ。

いや、まぁ、クラスメイトとかからの視線は解るのだ。

塔城さんの態度がこの間の羽虫駆除から妙におかしくなっているから、それを見て何やら勘ぐっているのだろう。

だがそれは別にいい。

塔城さんの態度がおかしくなったのは吊橋効果とかその辺のせいだと、自宅自室で模写した本人に香術でマタタビ嗅がせて縄術で拘束して日影さんと二人がかりであちこち撫でくりまわして心の扉開いて貰って聞き出している。

わりとR元服な状態になるまでやっても『吊橋ぃ吊橋にゃんだからぁ』とか言っていたし、ほぼ間違いなく好感、好意でなく吊り橋効果による錯覚だろうから、放っておいても塔城さんの態度は元に戻る。

そうなれば、話題には事欠かないこの学園の事だから、一ヶ月もし

ない内に噂は沈静化するだろう。
……授業参観日が近いから、可能ならそれまでに噂が沈静化してくれると嬉しいのだが、それは高望みをし過ぎだろう。
問題がある視線は二種。
一つは、悪魔系の、親しくない連中からの視線だ。
なんというか、こう、ゴジラを見詰める一般人の目というか、なんというか、明らかに後を引きそうな予感がする。
彼等にとって脅威に成り得る、というのは確かだけど、ここまで警戒される謂れはない。
どういう相手を選んで害するかは決めているし、事実として学園に居る悪魔に害を及ぼしたことは一度たりともない。
というか、グレ森先輩まで此方を警戒するのは納得行かない。
彼女の眷属である木場先輩が本懐を成し遂げる事ができたのはかなりの割合で此方のおかげなんだから、感謝されてもいいのではないか。
やっぱり常日頃から戦争を警戒している連中はいけない。
疑っている間は敵を見つけられるが、信じてみなければ仲間は見つけられないという名言を知らないらしい。
勿論此方は彼等の味方でもないし仲間になる理由も動機も無いが、都合よく此方が日常生活を不便なく送れる程度には、適度に信じて、それでいて距離感を間違わないようなジャストな信用とか油断を持って貰いたいものだ。
まぁ、此方はある程度放置でいい。
同じ学内に居る訳だから、本格的に何か文句があるならあちらの方から呼びつけてくるだろうし、此方から何かをする程ではない。
人間に限らず、知性を持つ生物はある程度自分の精神の都合に合わせて忘れていくものだ。
あいつ下手に刺激したらヤバイんじゃね？　という意見が薄れた頃にでも声を掛けてくるだろう。
大きな問題があるのは、もう一つ。
あれ以来、帰宅時に感じるようになった気配と、その気配から感じ

る探るような感覚だ。
正確には視線ではないが、帰宅ルート付近に度々現れる不快な気配に此方のストレスは増し増し。
最近では早朝に山まで出かけての運動も中々出来ず、自宅地下のトレーニングルームに結界を貼って、出す相手の数も処理時間を考えて控えめにしなければならない（できれば運動の結果生まれた死体は母さんに見せたくない）ので、どうにも身体が鈍りそうでいけない。
「……ちっ」
舌打ち。
考え事をしている最中であろうとも、あの不快な気配はどうにも解りやすく気になってしまう。
あくまでも気配が一つだけで、全ての帰宅ルートが封じられる訳ではないし、家に押しかけてくる訳でもないから、気にしなければする話しではあるのだが。
ああ、嫌だ嫌だ。
この気配、しかも、濃い気配を出してる奴には期待を裏切られる予感しかしない。
薄めたカルピスみたいな下級の連中の方がまだ此方の欲求を満たせる用意をしていてくれた。
正直、この気配を出す連中の偉くて強いやつには関わりたくもない。
また手間暇掛けた挙句に肩透かしを食らう事を考えると不愉快でならない。
「さて、どうするか」
分岐路で立ち止まり、考える。
無視を続けるのは、恐らく得策ではない。
今は帰り道で待ち伏せる程度で済んでいるが、このまま回避し続けたなら、家や学校に押しかけてくる可能性だってある。
なるだけ家に面倒事は持ち帰りたくないのだ。
「……嫌だなぁ」
首をがっくりと項垂れさせながら歩き出す。

安全策を考えれば、早々に待ち伏せてる不審な気配に会ってどうにかするのがベストだ。

最初から押しかけたり、帰宅ルートに大量に人員を配置したりしない以上、相手は現状それほど強引な手を使おうと思わない程度には理性的だと推測できる。

一番早々に害になりそうで、それでいてこの相手が此方からの干渉でいち早く対処できる唯一の相手、というのも、皮肉な話しである。

……人の気配が消えた。

帰宅時、まだ夕方というには早いこの時間帯は、この辺はまばらながらもそれなりに人が通りかかる筈だというのに、まるで映画の書割の中に紛れ込んでしまったかのように人の気配が一つもない。

露骨過ぎて溜息が出る。

ちょうど近くに在った手摺に凭れ掛かり、もう一度溜息。

「どうした少年、冴えない顔して。女に振られでもしたか？」

待ってましたとばかりに声が掛けられる。

声は手摺の斜め下――橋の下の辺りで、不自然な程に自然体で釣り竿を垂らしている不愉快な気配。

ハグロトンボ男と同じ、堕天使の男だ。

「まさか。相性バッチリですから、そんな心配は欠片も必要ない」

「そりゃ羨ましい。じゃあ、なんでそんな湿気た面してんだ？」

「どうにも、ストーカーに合ってましてね。ここんとこ毎日毎日、帰り道に待ち伏せられて、溜まったものじゃありません」

おもいっきり皮肉を飛ばしてみるも、釣り針を濁った川に垂らした男は呵々と笑い。

「幸せに生きてるヤツってのは、他から妬まれるもんさ。なんならお兄さんが相談に乗ってやろうか？」

「生憎、親には知らないおじさんには付いていかない様にと言われてるんですよ」

「ガキかって」

「ガキですよ？　見ての通り、何処にでも居る幼気な少年ですから」

「何処にでも居る、幼気な少年ねぇ……」

橋の下の男が、釣り針を川から引き上げ、釣り竿を仕舞う。
ばさ、と、羽音と共に風が舞い上がり、橋の上へと飛び上がった。
そのまましばしの滞空時間を経て、隣に着地。
少し距離が開いているのは、多少の警戒心の現れだろうか。
「幼気な、『堕天使幹部を捻り潰せるだけの力を持っている』只の少年が消せないってぇ悩み、ちょっと聞かせて貰いたいもんだが、どうだ？」
ああ、嫌だ、嫌だ。
堕天使というのは、どいつもこいつも思わせぶりな態度が好きらしい。
それでいて、過剰演出に結果が伴わないのは恥ずかしい事だとイマイチ理解していないようだ。
「……思わせぶりな発言より、先に言うべき事があるでしょう。背中に翼生えるとその分脳味噌に栄養行かなくなるんですか？　え、どうです？　名前も名乗らない怪しいおじさん？」
翼の枚数が少ない方は弱いなりに手下を揃える程度の脳が在った辺り、この皮肉もあながち的外れではないのかもしれない。
此方の不躾な発言に、怪しげな男はくく、と呻くように苦笑し答えた。
「参ったな、あながち間違いとも言い切れねぇ。……俺の名はアザゼル。どいつもこいつも変な場所に栄養行き過ぎて堕天した連中の、頭ぁ貼らせて貰ってる。よろしくな、自称一般人の聖剣使い、読手書主」
ああ、今、そういう扱いなのか。
なんとなく接触してきた理由を察しながら、目の前の男の無駄に期待と好奇心と警戒を混じらせた不敵な視線を、適当に受け流した。

魔王様……私の命の恩人でもある、サーゼクス・ルシファー様が、人間界にやってきた。
何でも、三すくみのトップ会談にかこつけてリアス部長の授業参観に駆けつける為に先に駒王町の観光……視察に訪れたらしい。

理由と建前が逆？　別にそんなのはどっちでも構わないと思う。
この人は為政者としてはありえない程に情に厚い人物だから、妹である部長の授業参観に兄として駆けつけたい、というのも間違いなく本心の筈だからだ。
少なくとも三すくみの会談が終わるまではこの町に滞在するらしいので、少し気を引き締め直した方がいいだろう。
……と、前置きしては見たものの、どうしたって気は緩む。
何しろ文字通り神話の時代から生きている古強者の堕天使との死闘を乗り越えて訪れた日常だ。
あの張り詰めるような緊張感と、今の平穏な空気を比べたなら、いくらトップが来ているからといって気を引き締めきる事は難しい。
堕天使の親玉がイッセー先輩の上客だった、なんてハプニングもあったりしたけれど、相手が何かするつもりだったなもう既にイッセー先輩は何かされて手遅れな状況になっている。
今のイッセー先輩が無事なら、それはつまり、現状相手からは何もされていないと考えていい。
部長はイッセー先輩に露骨に気があるから過剰に心配していたけれど、少なくとも命がけの戦場に比べれば、現状は、緩い。
「……」
一人暮らしのアパート、リビングのソファに寝そべり、携帯を眺める。
基本的に、連絡は電話かメールだ。
呟くのも線のも、なんだか馴染めない。
連絡を取る相手もそれほど多くないし、誰かに呟きを聞いて欲しいという欲求もそれほど無い。
だから、誰かとのやり取りは、着信履歴を見ればだいたいわかる。
「……読手さんばっかり」
友だちがいない訳ではない。
少なからず、他の履歴だってある。
でも、たぶん、一番の友だちが誰か、と言われれば、読手さんと答えるのが正解になると思う。

少し前、エクスカリバー騒ぎが始まる少し前の、彼からのメールを開く。

『これこれ、これをですね、纏めてご飯にザバーってやっちゃったんですよ』

写メ付きで送られてきた、何気ないやり取り。

どうでもいいやり取りで、でも、何故だろう、なんと返したかも直ぐに思い出せてしまう。

別に、おかしくはない、と、思う。いや、ザバーはおかしいけれど。

偶然、このメールの内容が印象深かったから覚えていただけなのだから。

……そう、だと、思う。

「……」

メールの内容を確認していく。

何気ない話だけど、どれも楽しく、気楽にやり取りを楽しんでいる。

読んでいる内に、頬が緩んでいるのがわかってしまう。

最後の一通、教会事件の後、メアドを交換した直後のメールまで読み終えて、メールを閉じ、天井を見上げる。

電気も付けていない夕方の部屋は、薄暗い。

ついつい物思いに耽ってしまいそうで、嫌になる。

……たぶん、気は合うと思う。

互いに敬語が抜けないけれど、それでも、会話をする頻度で言えば多い方だし、その会話だって嫌にならない。

何故かって、気楽だからだ。

彼は、私の踏み込まれたくない秘密を知っている。

私は、彼が踏み込んで欲しくないラインを知っている。

条件は平等じゃないけど、それでも、互いに踏んではいけない部分を知っていて。

互いに踏み込まない様に、距離を置いた、浅い付き合いを心がけている。

それは、とても気楽で、心地良い。

緊張感も不快感も薄く、真夏の日陰のような居心地の良さがある。

「よみて、さん」
自分の手で、髪を梳く。
短くて、白くて、癖のない細い猫っ毛の髪。
指通りは良い方だと思うし、櫛で梳いても引っかからない程には気をつけている。
……どうだったろうか。
「どう、って」
心の浮かんだ疑問に、声を出して問い返す。
助けた礼代わりと、髪を触られた。
ドサクサで、耳も割と触られたと思う。
……普通に考えて、ただの友達に、そこまで許すものだろうか。
平気だった訳でも、気にならなかった訳でもない。
気の迷いもあった。きっと吊り橋効果だって凄くあった。
でも。
少し、少しだけ、思ったのだ。
『私の髪は、どうだったんだろう』
と、そんな益体もない事を。
「……日影さんと、比べて、どうなんだろう」
口に出して、どうしようもない事を口に出して。
少しだけ、胸がチクリと傷んだ気がした。
勿論、幻痛で、痛む理由なんて一つも無い。
日影さんは、彼の恋人だ。
広義の意味での恋人だとか言っていたけど、少なくとも世間一般の恋人がやっているような事は普通にしていると聞いた覚えがある。
なら、髪を触られた事もあるだろうし、耳を触られたことだってあるだろう。
その後、可愛いと言われる事だってたくさんあるし、それ以上の事だって、普通にしている筈だ。
そういう話も、少しだけ、聞いた。
惚気話はそんなにしない人だけれど、それでも、その話を聞いた。
私は、あの時、どう、返しただろうか。

呆れた表情で流して、ちょっとだけ茶化して。
「そういう話は、お腹、一杯です、って」
笑った。
笑えた筈だ。間違いなく。
こう、口の端が少しつり上がって、目尻も下がって。
あの時の私は、自然に笑えていた筈なのに。
……揺れている。
グラグラと、私の心が、揺れる吊橋の上から降りれずに居る。
高いところは、苦手じゃないのに。
降りた先が前と同じか、不安で橋から降りれない。

「……ん」
少し、寝落ちしていたようだ。
時計の長針が半周くらい進んでいるのを確認し、目覚めた原因に目を向ける。
テーブルの上に置いた携帯電話が鳴り響いている。
アラームじゃない、電話の着信。
発信者を見て、少し取るかを迷い、取る。
「……もしもし、どうしました」
『あ、塔城さん？　もう夕飯食べちゃいました？』
……電話の相手は、こちらの気も知らずにのんきにそんな事を言い出してきた。
正直、ここ最近の私の帰宅後の精神状態はそれどころではない感じになっているのだけど、こうして話している間は元通りに振る舞えるのだから、割と現金にできていると思う。
「いや、ちょっと寝てたので」
問いの内容を頭の中で転がすと、迷い惑う私の頭脳を無視して、胃袋が『きゅう』と切なげな鳴き声を上げた。
……冷蔵庫の中、何が入っていたかな。
『じゃあ丁度いいですね。ちょっとこれから飯食いに行きませんか。奢りますよ』

「……いいんですか？　知ってると思いますけど、結構食べますよ」
誘われる事も、一緒に夕飯を食べるという何気に初めてのイベントも何処か心を揺らす何かがあった気がするけれど、今は無視。
正直、部屋に一人で篭っているよりは、誰かと一緒に居た方が精神衛生上良い。
あと、奢りだし。
『それ了承って事でいいですよね。じゃあ――』
彼が口にした集合場所は、前に小耳に挟んだお店。
知る人ぞ知る名店、という感じで、値段も学生向けでは無かったから、行ったことはないけれど、密かに行ってみたいと思っていた。
……何しろ回らない寿司屋だ。
なんというか、種族的には狙い目というか、憧れなければ嘘という話になる。
「わかりました。じゃあ、ちょっと待ってて下さい。直ぐ行きます」
『ええ、それじゃ、待ってますんで』
通話を終え、ソファから跳ねるように立ち上がる。
お出かけ、外食。
グレモリー眷属にはそれなり以上の給料が出ているけれども、私はそれほど頻繁に外食はしない。
だから、なんというか、外食は特別なもの、という印象がある。
この間のライザー戦での祝勝会なんかもそれ。
しかもサイゼとかじゃなく、ちゃんとした店。
だから、そう、だからこそ、少し服装とかに気合を入れるのは、何もおかしいところがない普通の話だという事を、こう、覚えておいてもらいたいのだ。
決して他意はなく、疚しい気持ちから来るおめかしなどではない、という、こう、ね？
「何処に言い訳してるんですかね、私」
まだ橋は揺れている。
でも、今は、こうしている時だけは、この揺れを心地よく思える。

私は揺れる心に合わせるように、軽やかな足取りでクローゼットのある自室へと向かった。

――――――――――――――――――――

「……読手さん」

「はいはいなんでしょ。――あ、大将！　とりあえず何時ものお願いしますね！」

「あ、じゃあ私も同じ物を……って、そうじゃなくて」

私は隣に座る読手さん『だけ』を意図的に視界に収めて、ジト目を向ける。

当然読手さんは気にした風もなく何時もどおりの気楽な返事だ。

……長くない付き合いでも、ハッキリと分かっている、わかっていた筈なのに、思考の外に外れていた事を思い出した。

彼は、揺れる吊橋の上で震える人が居たら、橋を降りた地点から全力で応援するふりをして煽るタイプだったのだ、敬語で。

「なるほど、これが日本の寿司屋というものなのだね。ああ、店主、私と彼女も彼と同じものを」

「なんだお前、妹がこの町治めてるのに寿司屋も来たこと無いのかよ。まぁ俺もこの店は初めてだけどな。大将こっちもそれで！」

視界から意図的に外して、絶対見ないように心がけたとしても、どうしたって声は聞こえて来る。

認めたくない、ミトメタクナーイ！

……でも、認めざるをえない現実が、今、巷のプチ食通の間で静かな噂になっているこの寿司屋の中に存在している……！

「しかしお前さん、最初の態度もあれだったけどよ、まさか話聞く代わりに奢らせといて、女まで同伴するとか、心臓に毛でも生えてんのか？　あいや、聖剣でも生えてるのか？　割とマジで。挙句こいつまで相席させるとか、なぁ？」

「そこで此方に振られても困るな。でも、会談も近いからね。前もってこうして、騒ぎの種になっている彼に話を聞けるのはいい機会だ。できれば、先に私達だけで話をしてみたかった、というのはあるが」

「今更抜け駆けも無いだろ。ああ、序だ、後でどうこう言われるのもあ

れだし、ミカエルの野郎も呼ぶか」
　やめてくださいしんでしまいます。
　ハートが揺れている。橋がどうとかではなく単純に前の死闘とも比べられないレベルの生命の危機に。
　隣の席で楽しそうに待っている読手さんの袖をカウンターの下で必死で引っ張り、彼にだけ聞こえるように静かに叫ぶ。
「読手さん、読手さん……！　いいんですかこれ、私ここに居ていいんですか、っていうか何で呼んだんですかほんとに大丈夫なんですかこれ……！」
「それはですねぇ、『話してやるから飯奢れ』ってそこのはむ……堕天使さんに言ってみたら快諾されてムカついたんで、じゃあもっと人数増やしてやろうかなー、って」
「私しか居ないのは……?!」
「いやぁ、この時間で夕飯食ってないの塔城さんしか捕まらなくて……、マジで塔城さんの生活リズムには感謝ですけど、よく考えたら一人増えた程度でそこまで財布に負担掛けられないんですよねぇ、いや失敗失敗」
　てへぺろ、と舌を出して笑う。
　あ、駄目だ。怒りで金色に輝きそう。
　でも光ったらその瞬間人生終わりそう。
「じゃあ、魔王様が居るのは……？」
「ここに来る途中で出くわして、平和に自己紹介を終えたんですけど……前にレーティングゲーム観戦の招待をブッチした事でどうしたのかー、みたいな事を聞かれましてね。別に時間取るのも嫌だから、じゃあ一緒に飯でも食いながら話しませんかーって」
「……わたし、まおうさまに、だいおんが、あるんですけど」
「あ、じゃあ心象的に塔城さん居ると有利ですね。いやぁ、流石塔城さんタイミングいいなぁ」
　私的には最悪のタイミングですがそこんとこどうですか考慮の外ですねそうですね。
「ああ、そういえば、リアスの部下とは既に友人なんだったね。どうだ

い、暫く付き合ってみて、悪魔に興味が出てきたりは」
「おうなんだ小僧、もう悪魔の方にゃ手ぇ出してんのか、やっぱ若い内はそれくらいで無きゃな」
「生憎、塔城さんは悪魔がどうとか関係ない部分での友達ですから。あ、一応言っておきますけど、手は出してませんよ。ねぇ塔城さん？」
それ少し前ならまともに反応できたけど間違ってもこの場面でこっちに話振らないでくださいよ……！
必死で私を挟んで読手さんとは反対側に座る魔王様とグレイフィア様や、読手さんの向こうでニヤついている明らかにコカビエルよりも格上な雰囲気を漂わせてるのが気のせいだと思いたいチョイ悪の視線からの視線から逃れる為に身を小さく縮めて居ると、大将の調理が終わった事に気付く。
臨死に近い状況が生み出した超感覚の成せる技か、それに気付いたのは私が最初だったようだ。
助かった……。
とりあえず、ご飯に極限まで神経を集中していれば、危機が去ることはないにしても、ストレスから目を背ける事はできる。
何はともあれ、全てを無視して、今話題の寿司屋の寿司を……！
「へい、ミラノ風ドリア五人前お待ち！」
「サイゼですか!!」

……目立たないよう、気配を消して、食事に集中して、話を振られたら曖昧に相槌を打って。
そんな消極的解決法は、ストレスと共に爆裂したツッコミと共に、外の歓楽街の中へと、あっけなく紛れて消えてしまったのでした。

二十七話　水の中で繋ぐ手

晴れ渡った空、少し湿り気もありつつ澄んだ空気、熱気を多く孕んだ風。

人間にとってはいい天気かも知れないけれど、悪魔にとって見れば少し嫌な天気。

でも、そんな天気も今日は許しておこうと思う。

人もまばらな朝の通学路を歩きながら、ぐっと背筋を伸ばす。

……この間は酷い目にあったけど、無事に帰れて良かった。

いや、本当に、いくら三すくみで会談をする程度には互いの関係が静かになっているとはいっても、堕天使は消極的敵対勢力。

それも、先日のコカビエルを超えると一目見て解る程に力を持つ堕天使のトップと、大恩ある魔王様同伴で食事とか、胃が破裂して変死体になるところだった。

なんていうか、読手さんはああいうところ無頓着なのを是非直して貰いたいと思う。

いや、あんなシチュエーション中々無いからどういう風に対応するのがベストかは私も解らないけど、無作為に人を集めていいシチュエーションでない事は確定的に明らかだった。

でも、今、私は生きている。

あのツッコミの後、会話中に少しだけ私の方に堕天使トップと魔王様の意識が向く事もあったけれど、それでも今、私は生きて、こうして今年初のプールを楽しみに学校に行く事が出来るんだ。

顔を覚えられたかも、なんて、後ろ向きな考えはしない、ぜっったいにしない。

私は、これから、前向きに、全身全霊を持って、危険な可能性から目を背ける……！

拳をぐっと握りしめ、頷く。

「ほー。んで、前向きになって、何をするんや？」

「何時か唐突に死ぬとか、死ぬような危機に陥る時もあるって、気が付きましたから。目の前の出来事を一つ一つしっかり楽しんでいこう

と……って」

覚えはあるけど馴染みはそれほど無い声に振り向く。

そこに居たのは、Tシャツにダメージジーンズというラフな格好の日影さん。

「おはようさん」

「……おはようございます」

唐突に人の思考を覗いた様な発言を行っておきながら、マイペースな挨拶。

艶があり、それでいて癖の少ない緑髪で僅かに影が掛かった金というより黄色に近い瞳は、その蛇のような瞳孔も相まって表情が読み難い。

読手さんとかなら直ぐにどういう表情なのか察する事ができるのかもしれないけれど、残念ながらこの場に読手さんは居ない。

……いや、いやいや、特に残念という事はないんですが。

何しろ今日は、先日のプール掃除の報酬としてオカ研のメンバーにのみ通常のプール開きに先んじてプールの使用が許可されたのだ。

当然、オカ研のメンバーでない読手さんが来る理由も無く……。

「なんや、浮かない顔しとるな」

「……別に、そんな顔してないです」

「さよか」

気のない返事を返し、そのまま口を紡ぐ日影さん。

……別に、困る訳ではないけれど、会話が続かない。

よくよく考えて見れば、私は読手さん経由で日影さんの話を聞くことはあるけれど、日影さん本人との交流は殆ど無いに等しい。

と、いうか、仮に会話をする機会があったとしても、私と日影さんの相性はそれほど良くないと思うのだ。

読手さんから聞く惚気話と噂話を聞く限りでは、日影さんは人の話を聞くのが上手いタイプ。

クラスでは友人の長々しい愚痴を文句ひとつ言わず、顔色ひとつ変えずにちゃんと聞いて、求めれば独特ながらもしっかりと意見や答えを口にしてくれるタイプらしい。

基本的に、何かきっかけが無い限りは動かない人、らしい。
つまり、私と同じ、返事か合いの手で会話をするタイプ。
漫才で言えばツッコミしか居ない様な状態だ。
これで友好関係をスムーズに築ける筈がない。
「そういえばあんた、猫の妖怪やったな」
「……、ええ、まぁ、元ですけどね」
スムーズに友好関係を築けるワケがないとか思った側からこれだ。
もしかしたら本当に思考が読めたりするのかもしれない。
何しろあの読手さんの恋人なのだから、只者であると考えるほうがおかしい。
いや、もしかしたら、あっちも私と同じようにどう接するかに困って、自分から声をかけてくれたのかもしれない。
「いや、謙遜するこた無いよ。ほんまに、見事な猫っぷりや」
「そ、そうですか？」
まぁ、多少リアクションに困る話題ではあるけれど。
一見して褒められているようにも見えるかもしれないけれど、私にとって自分が猫？である事は当たり前の事だ。
言ってしまえば、人間に対して凄く人間っぽい、と言っているようなもので……。
「うん。本当にな、見事な……泥棒猫っぷりやで」
「……」
声がでない。
何を呑んでいた訳でも喉が渇いた訳でもないのに喉が詰まる。
別段、物凄い威圧感とか殺意とか敵意を向けられている訳ではないのだけど。
声を出そうとして、口を開いたり閉じたりして、何と言おうとも考えていなかった事に気付く。
というか、何を言えば良いのか、考えが、思考が纏まらない。
何を、誰に言われたか、という事だけが頭の中でぐるぐると回り続ける。
息をするのも躊躇われる沈黙が十秒ほど続く。

「冗談や」
沈黙がやはり日影さんの言葉で打ち破られ、大きく息をつく。
「……凄く冗談に聞こえないトーンだったんですけど」
「そか、やっぱり、冗談いうんは難しいなぁ」
もうちょい勉強してみよか。
そんな事を呟く日影さんを見て、私は改めてこの人が読手さんの恋人なのだなぁと、数日前のモヤモヤとはまったく掛け離れた位置で実感した。
なんというか……疲れる人だと、そう思う。
「義父さんと義母さんなら、もうちょい気の利いた事が言えると思うんやけど」
「なんか、発音おかしくないですか」
「……？」
相も変わらぬ呆けた様な表情、眠たげにも見える半眼のまま首を傾げる。
もしかしたら、コレが正真正銘の天然、というものなのかもしれない。
何気に眷属にも友人にも居なかったタイプだ。
正直、難しい。
いや、無理に話題を探す必要もないんでした。
「それじゃあ」
「ん、またな」
互いに軽く頭を下げて別れの挨拶とする。
挨拶は実際大事だ。
人間関係の潤滑油としては勿論、話を区切って終わらせる事もできる。
これから日影さんが何処に向かうにしても、流石に休日にも関わらず学校に向かう私と行き先がかぶる事も無い。
そうすれば自然、共通点が見つからない相手との話題を考える必要もなくなる。
そう思い、再び歩き出す。

さぁ、少し変な遭遇をしてしまったけれど、気を改めてプールに向かうとしよう。

……歩き出し、学校の更衣室で部長に指摘されるまで、日影さんが後ろ数メートルの位置から付いて来ていたのに気付かなかったのは、決して私の不注意だけが原因ではないと思う。

そして、おもむろに水着に着替えだした日影さんのプロポーションに気を取られて、セットで居るかもしれない誰かの事に気付かなかったのだって、誰に責められる謂れはないのだ。

「なんで居るんですか……」

「いやぁ、どうにも此方には理解し難い理屈が働いているらしくて……」

なんだか不機嫌そうな塔城さんに問われ、首を傾げる。

確かに塔城さんの言い分が尤もだ。

実際、この場に何故此方が居るのかという経緯を説明しても、何故そうなったのか、という理解には至らないのではないかと思う。

この先行プール開きはプール掃除を行ったオカ研にだけ許されたご褒美的なイベントであるらしい。

なら、ここに此方が居るのは明らかにおかしい。

オカ研がせっせと休日にプール清掃をしていた日に此方が何をしていたかと聞かれれば、日影さんとせっせとナニをしていたとしか説明できないのだ。

此方は日影さんとナニをアレコレするのは当然大好きだし至福の時間ではあるのだが、それが誰かに利する行いかと言われれば首を横に振らざるをえない。

「コカビエル撃退に対しての謝礼、と、まぁ、新入りとはいえ、下僕にそう提言されてしまえば、私だって考慮しない訳にはいかないもの」

「グレ森先輩」

「……リアス・『グレモリー』よ」

だからなんで生徒会の方と違って苗字そのまんまなんですかって。
「提言、ですか？」
「誰が態々そんな真似を」
正直、思い当たるフシはない。
グレモリー先輩は当然除外で接点少ない姫島先輩も除外、アーシア先輩は兵藤先輩にお熱だからそんな事を思いつくワケがないし、兵藤先輩だって態々プールの男性比率を上げるほど殊勝ではない筈だ。
木場先輩にしたってそれほど親しくない上に、この間の一件で色々したせいで警戒されているかもしれないので除外。
で、唯一僅かながら可能性があるんじゃないか、と思われる友人の塔城さんも違うらしい。
というか、彼女等の中で新入りと言えば兵藤先輩がアーシア先輩という事になるんだが……。
「私だ」
「貴方でしたか」
反射で返してしまったが、誰？
……ああ、思い出した。
そういえばこの間から学校に編入されたとかどうとか言ってたような気がするゼノヴィアさん改めゼノヴィア先輩だ。
「ああ、結果はどうあれ、あそこで君が介入しなければ、どうなっていたかはわからなかった……いや、恐らく、この町全てが滅んでいたかもしれないからな。改めて礼をさせて貰おうと思ったのだ」
「はぁ、そこまで気にすることでも無いとは思いますけど」
「いや、駄目だ。君が気にならなくても私は気になる」
「むむむ」
「君がむむむ、と言いたいのもわかる」
わかるのか……。特に何も考えずに適当に唸っただけなのに。
「あれほどの聖剣を自在に操る事ができる君だ。それが発覚した以上、悪魔との関係性も変わらざるを得ないだろう。そんな時に、レクリエーションとはいえ、悪魔の活動に呼び出された。困惑するのも当然だ」

「その子、あの日以降も普通にオカ研に遊びに来てたけど……」
「リアス、多分聞こえてないわよ」
「なんとも自分に都合のいい脳味噌をしていらっしゃるようですねぇ……。どうしました塔城さん、鏡とか向けられても日光の照り返しで熱くなるだけですよ？」
「もう目を開けろとは言いませんから精神的に自分を客観視しませんか」
「チャドーやってるからそこら辺は間に合ってます」
新宮さんには火の心が強すぎると言われたけれど、正直水の心だってまあまあそれなりに適度にできないでもないこともない訳ではない。
一人で勝手に此方の心境とか周囲の状況とかを想像して話を進めているゼノヴィアさんは、明らかに目の前で聞こえるように行われているひそひそ話が聞こえた素振りも無い。
羽虫の話で勝手に落ち込んで絶望していたあの時からは信じられない程にメンタルが強い。
「だが、君は以前からこのオカ研ともそれなりの付き合いを行っていたと聞く。それがあの程度の事で関係が揺らいでしまうというのは、悲しい話だ。私達は君に助けられた。君の思惑はそれとは別の場所にあったのかもしれないが、それだけは事実だ」
「あのままやっても、割といい線行ってたと思いますけどね」
「だが、犠牲は出ただろう。……我々が誰一人として欠けること無くこの場で遊んでいられるのは、間違いなく君のおかげだ。だから、新参の私が言うのもなんだが、これからも良い関係を続けていきたいと思っている」
なるほど。
此方に恩返しをする、という一点だけではなく、此方とオカ研の関係にも気を使っての事だったのか。
脳味噌に筋肉と信仰心だけ詰めて口からかっこいいセリフを吐き出すだけのカラクリムシャ生身版みたいな人かと思ったけれど、意外と考えて動いているようだ。

「そういう事でしたら、喜んでご招待をお受けしましょう。……まぁ、もう水着に着替えちゃったから、どんな理由だったとしても一泳ぎしていくつもりだったんですけどね」

「あの子はまたそういう……」

他のオカ研のメンバーや読手さん日影さんがプールで遊んでいる間に、部長に先日の寿司屋（誰も寿司を頼んでいなかったけれど、あの寿司メニューはダミーだったのでしょうか）での出来事を報告する。

本当なら当日の内に報告するべきだったのだけど、あの日は精神的疲労が限界に達していたし、それ以降はストレスからの開放で気が抜けて報告をすっかり忘れていた。

部長もそこら辺の精神状態を慮ってくれたのか、読手さんの所業に頭を痛める素振りをするだけで特に私へのお咎めはなかった。

「……でも、すみません。ちょっと、話の内容は覚えてなくて」

あとドリアの味も覚えてない。

美味しかったとは思うのだけど、それ以上に緊張で舌が麻痺していたという記憶しかない。

くやしい。

「仕方がない、いえ、その方が良かったのかもしれないわ。三すくみの内二つの陣営のトップの密談なんて、私達が聞いてもどうにかできる話ではないだろうし」

気にならないと言えば嘘になるけどね。

そう続ける部長に、私は少しだけ申し訳ない気持ちになる。

……一つだけ、一つだけ、あの寿司屋での非公式会談とでも言うべき世間話の中で、頭の中に残っている話があった。

いや、三すくみの話なんて、あの場では殆ど無かったということまで覚えている。

主な話題は、寿司屋なのに妙に美味いドリアへの賞賛（繰り返しになるが私は殆ど覚えていない）と……読手さんの話。

三すくみに対して個人で大きな影響を与える可能性すらあると看

做されてしまった読手さんの、スタンスに関する話だ。
言葉自体は、何処にでもあるものだった。
何処かで今も誰かが唱えているだろう、有り触れたスタンス。
だから、特に言う必要もない、と、そういう事にしておく。
沈黙が流れ、何となく、プールの方に視線を向ける。
照りつける日光が反射して、悪魔であることとは関係無く視界が焼き付くようだ。
きらきらと輝く飛沫、その向こうに、ぱっと見では読手さんと日影さんの姿は無い。
プールサイドでは彼が溺れたのではないか、と、少し不安そうなゼノヴィアさん。
それに対して、妙に自信ありげに彼はニンジャだから大丈夫だよ、と答える祐斗先輩。
ニンジャって凄いんですね、と驚くアーシア先輩に、恐らく水中での長時間活動をエロスな事に利用できないかと真剣に鼻の下を伸ばし続けているイッセー先輩。
皆の言葉の通り、プールの中をよく見ると、まるで海棲哺乳類にも似た動きで水中を高速で動き回る読手さんと日影さん。
よくよく見てみると日影さんの方が動きに無駄がなく、読手さんが彼女に泳ぎを教えてもらったのではないか、と、そんな想像もできるだろう。
なんというか、平和だ。
脳天気というか、これが少し前に死闘を乗り越えたメンバーとは信じられない。
「調子、戻ったみたいね」
「え……？」
「だって小猫、笑ってるじゃない」
笑っているつもりは無かった。
つまり、自然に笑みが浮かんでしまったのか、と、そう驚くよりも、先の言葉が意外だった。
「……バレてたんですね」

「そりゃあ、私のカワイイ下僕ですもの。不調を隠してるのくらい、わかるわ。……別に、イッセーだけしか見てない訳じゃないのよ？」

そういたずらっぽく笑う部長。

一回そこら辺読み間違えられて人間関係ファンブって危うく友人一人無くすとこでしたが、とは、今は言わない方が無難でしょうか。

だけど、うん、別に私だって、部長がイッセー先輩しか見てなくて、他の下僕に対して雑だなんて思ってはいない。

そもそも、部長の下僕への扱いは悪魔の中ではかなり慈悲深い方だ。

福利厚生もしっかりしていて、学生の身分でアルバイトもせずに普通に一人暮らしができているのだって部長のおかげ。

これで文句を言う方がどうかしている。

勿論内心で煽るくらいはするけど、表面上は割と物静かな忠臣をやれてるんじゃないでしょうか。

「……部長、その手鏡は？」

「え？　……なんでかしら、無性に今の小猫にこれを向けないといけない気がしたのよ」

首を傾げながら手鏡をベンチの上に置く部長。

不思議な事もあるものだと思う。

別に鏡を見るのは嫌いではないけれど、この真夏日にそんなものを向けられると悪魔としてとか関係無く普通に眩しいのでやめて欲しい。

「でも、ちょっと悔しいかな」

「？」

「だって、私は気付けたけど、元に戻したのは私じゃないもの。カワイイ下僕のメンタルケア一つ満足にできないなんてね……」

そう自嘲気味に呟く部長、その視線の先はプール。

プールの中で戯れるイッセー先輩にゼノヴィア先輩、祐斗先輩にアーシア先輩を見ているのだろうか。

……なんとなく、言わんとするところを察する。

「……祐斗先輩の場合は、特殊な事情でしたし、自分の力で乗り越えら

れるならそれに越した事はありません。部長は、私達にとって、良い王をしていると、そう、思います」

フォローになっているだろうか。

少し不安だ。言葉の選び方にはそれほど自信がない。

読手さんとの会話で、軽い掛け合いなら多少できるようになったと思うのだけど。

「……」

案の定、部長は私の言葉にキョトンとした表情を浮かべ。

がばりと私の頭を抱きしめてきた。

「嬉しいこと言ってくれるじゃないの、もう！」

私の顔に無駄に豊満な未使用胸部装甲をむにむにと押し付けながら、犬猫にするように頭を撫でくり回してくる。

それでも荒っぽくならずに髪を乱さないようにしている辺りが、部長の密かな美点というか性癖というか。

仮に犬猫をペットとして飼ってたら凄く独身ＯＬばりにかわいがるのかもしれない。

でも、悪い気分じゃない。

「……でも、ね、やっぱり少し悔しいわ。貴女が積極的に誰かを励ませる様になったのも、いつの間にか元気になったのも、たぶん、彼が原因でしょう？」

「――――え？」

「今、小猫と日常的に頻繁に話してるのも彼、話慣れたのか、最近は口数も多くなったわね。それに、小猫の調子が戻り始めた原因だって」

「……いや、でも」

そう、なんだろうか。

そう思い、入学前の自分と、今の自分を比較する。

……口数は、確かに増えた。

むしろ部長辺りからは余計なことまで言い過ぎると言われても仕方がないくらいに増えた。

でも、いくらなんでもこの間のストマック・グラインダーな突発飲み会まで、私を元気付ける為、というのは、無理があると思う。

元気になったというか、死に瀕して生存本能が余計な思考を掻き消しはしたけど。

「そりゃ、全部が全部小猫の為とは言わないでしょ。でも、少しはそういう思惑があった、とは思わない？　……彼は、友達が悩んでいる時、知らぬ存ぜぬを決め込むタイプかしら」

私はそこまで詳しくないけどね。

そう続けた部長の言葉に、これまでの彼との関係を思い返す。

彼は、友人、友達だ。

親友や盟友という言葉を使える程に重くないけれど、たぶん、裏と表を合わせた交友関係の中では、一番の友達。

仲間、という括りの外に居る、友。

……彼にとっては、どうだろう。

わからない。

口に出して、改めて確認できるだけの度胸はない。

私と読手さんの間ではっきりしている共通認識は、適度な距離でやりとりできる、『まぁまぁいい友だち』という程度のもので。

でも、彼が『まぁまぁ良い友だち』相手に、どの程度気を使うか、というのは、私には測りきれない。

……測りきれる程、彼を深く理解している訳じゃないから。

私は、『適度な距離』で付き合う『まぁまぁ』な友達でしかないから。

「傍から見てる分にはね」

顔と頭に感じていた部長の体温が離れていく。

プールを見詰める表情は複雑だ。

笑みになりきらず、睨みつけるというには視線に鋭さは無く。

部長自身は、たぶんまだ彼に対する警戒を完全に解けている訳ではない。

それは部長の直感もあるけれど、下僕を保護する王としての責務もあるんだろう。

「小猫も彼も、自分で思っているより、相手に気を許しているように見えるわ」

「そう、なんでしょうか」

「意外と自分ではわからないものよ、そういうのって」
そうだったらいいな、とは思う。
勿論、友達として、心を開いてくれるなら嬉しい、という程度の話だけど。
立ち上がる。
「あら、休憩は終わり？」
「はい、せっかくだから、泳ぐ練習をしてみようかと」
背後からかかる部長の声に答えながらプールの方に脚を向ける。
丁度水面から顔を出し、他のメンバーとのんきに話をしている読手さんの姿が見える。
一泳ぎを終えて、少し休憩、といったところだろうか。
「読手さん」
「はいはい？」
「……泳ぐの、教えて貰えませんか」
それなりの友達なら、少しだけ苦手を克服する手伝いをして貰ったっていい。
それが、今日はプールで、私が泳げないから、お願いするだけ。
これは、たったそれだけの話で。
別に、深い意味は一切無い。

そんな訳で、散々泳ぎを楽しんだ所で、塔城さんの水泳訓練を始める事になった。
此方も特殊泳法は日影さんに教わったものなので普通の泳ぎしか教える事が出来ないけれど、犬掻きならぬ猫掻きも満足にできない塔城さん相手ならむしろその方がハードルが低くていいだろう。
とはいえ、別に猫の妖怪だからといって、家族と別れる際に川に流されたとか、増水した川の近くの橋の下で必死に息を潜めて追手を巻いたとか、そういう体験がトラウマって泳げないというわけでもなく。
元々純粋な運動能力では群を抜いていると言っていい塔城さんは、順調に水中での動きをモノにしている。

「バタ足は足先まで力抜いて自然にしならせて……そうそう上手い上手い」

時折、『ぷは』と水面に顔を出して息継ぎをする塔城さん。

バタ足による推進力だって悪くない。

ぶっちゃけた話、純粋な運動能力だけで見れば、こうして手を繋いで誘導してやらなくても、ビート板一枚あれば普通に泳げるだろう。

ようは恐怖心の問題なのだ。

浮く板一枚よりは誰かに捕まっている方が安心感があり、冷静に自分の肉体を操る事ができる。

「ぷはっ……、すみません、遊んでいる途中でこんな事を頼んでしまって」

「大丈夫ですよ、もう結構遊びましたから。水泳の授業始まるのに泳げないってのは嫌でしょうし」

まぁ別に、男女合同でプールの授業をやるのかと言われれば、どうなのかは解らないのだけど。

でも流石に友人がプールの授業を何か適当な言い訳をして見学している、という状況は悲しくなる。

「ほら、あと半分、そのままそのまま」

ちょくちょく動きを助言して、それを素直に聞き入れてくれたおかげで塔城さんの速度は最初の頃と比べて格段に早くなっている。

こうまで上達が早いと教えている方も楽しくなってくるというものだ。

手を引きながらの後ろ歩きも気持ち早めになり、残りの半分はあっという間に泳ぎ切ってしった。

「はいゴール」

後半の堂に入ってきたバタ足の勢いのまま、抱きつくようにぶつかって来る塔城さんをそのまま抱きとめる。

避ける事も出来たけれど、この勢いのままでプールの壁に激突したら水中で混乱して最後の最後で溺れる、なんて可能性もある。

最後の最後でケチが付くのは水泳に対する苦手意識を除去する上で宜しくない。

まずは手を引かれながらでも『泳ぎ切った』という自信が重要なのだ。

「いい感じでしたよ。そろそろコツが掴めてきましたね」

「……ちょっと褒めすぎです。まだ、バタ足くらいしか出来てないのに」

「そうですか？　じゃあ……。まだまだですね。ちょっと力みすぎてる感が抜けないので力が入らなくなるまで特訓です！」

「私はいいですけど……日影さん、放っておいていいんですか」

「日影さんはそれぐらいで拗ねるタイプじゃないですし……ああでも、拗ねた日影さんもかわいいんですよ。貴重ですけど」

そもそも、今回のプールは予定に無かった突発的なものだ。

最初から、日影さんとは別の日に海に遊びに行く約束をしていたので、今日は友人を優先しても問題あるまい。

兵藤先輩に日影さんの新作水着姿を見せたくないからスクール水着だし。

……だけどスク水の日影さんもいいよね！

アンバランス感があって！

「……つまり、スク水着た状態で拗ねる日影さんてもしかしなくてもＵＲとかそんな感じなんです」

魔法のカードで人生溶けるまでガチャ回すレベルで。

「頭大丈夫ですか」

「大丈夫、この水泳特訓の有用性が今まさに証明されただけですから」

つまり、このまま塔城さんを構い続けていれば、貴重なスク水日影さんが拗ねた姿を見せてくれて嬉しい。

塔城さんは泳げるようになる。此方は日影さんの可愛さを堪能できる。

Ｗｉｎ―Ｗｉｎというやつだ。

「……私も、女の子なので、そういう理由で、こういうことをされるのは、いやです」

少しだけ怒りの込められた静かな声。

考えてみれば、先ほど抱きとめた状態のままで会話をしていた。

彼女に嫉妬されたいから、なんて理由で、恋仲でもない相手に抱きしめられて嬉しい女の子は居ない、らしい。
母さんの友達もそんな事を言っていた。
栗色の髪をツインテにした、女の子を語るのはどうかと思われる実年齢と語るに相応しい外見年齢を併せ持つ死体専門ハリウッド女優のいぶし銀さん。
本命の彼にはついぞ振り向いて貰えなかったらしいが、片思い歴が長いだけに乙女理論を語る発言には他にはない重みがあった。
あれだけ長い間片思いと乙女を続けていて、拗らせてヤンデレに転んだりしない辺り、流石母さんの友人だと思う。
「私じゃなかったら、セクハラで訴えられてますよ」
「すみません、抱き心地がいいもので、つい」
「っ、変な事言わないで下さい……！」
ぽかぽかという音が出そうなグーにした拳の底面での連打。
実際に出る音は格闘漫画もかくやというレベルの重い肉を撃つ打撃音だ。
受けているのがニンジャ耐久力を誇る此方だから良かったものの、そうでなければ胸骨が砕けて口から内臓を吐き出しているのではないだろうか。
でも、そんな打撃も甘んじて受け入れよう。
はっきり言って抱きしめたままだったのは態とだ。
吊橋効果が残っている内に、手触りの良い塔城さんを触ってみたい、そしてからかってリアクションを楽しみたいと思ってしまうのは仕方がない事だろう。
やり過ぎと思われるかもしれないが、これでも吊橋効果による錯覚状態で許されるギリギリのラインを攻めているのだ。
しかも、これで日影さんが拗ねた姿を見せてくれたりしたらそれはそれで儲けものだし、マイナスになる部分が見当たらない。
「ふむ、思っていたよりも、気が多いのかな？」

「おや、ゼノヴィアさん、どうかされましたか？」

「いや何、丁度水練も一区切りしたように見えたからな」
「ちょっと待ってください二人共なんでこのまま話進めようとしてるんですか」
スタート台の脇から私達を見下ろしつつ読手さんに話しかけたゼノヴィア先輩。
それに応える読手さんは私を腕の中に収めたまま、つまり、私が読手さんに抱きしめられたまま……っていうかこれ抱き止めた通り越して普通に抱きしめられてるんですけどなんですかこれどうなってるんですか。
しかし、それを二人共気にした風もなく会話を続けている。
「お楽しみのとこすまんなあ。なんや、こいつが書主さんに頼みたいことがある、言うから」
声の主はゼノヴィア先輩の後ろに居る、学校指定のスクール水着に不釣り合いな程グラマラスなボディを包んだ日影さん。
すまんなぁ、の声はなぜだか私に向けられているような気がしたのは気のせいだろうか。
待ってください違うんです。別に楽しんでないです邪魔なんてされてないです。私泥棒猫じゃないんです誤解です。
そんな『仕方ないのぉ』みたいな顔しないで下さい彼氏がこんなことしてそれとかどんだけ心広いんですか！
「頼み、ですか。よござんす、さぁ言ってごらんなさい。どんな願いも聞き流して差し上げましょう」
「叶えてはくれないのか」
「それは気が向いたら。ささ、何事も言ってみるだけなら只ですよ」
「そうだな、では……。読手書主、私と子供を作ってくれないか」
……
は？
「ちょっと待って下さい」
「すまない、塔城小猫。君の獲物を奪う心算は無いんだ」
「獲物じゃないです。友達です。恋人はそっちです」

「知っているよ、彼女には先に事情を話してあるんだ。そうしたら本人に言え、と言われてな」
その言葉に、日影さんを睨む。
いくらなんでも、それは、違うんじゃないだろうか。
恋人であるのなら、そういう輩が恋人に近づくのを嫌がって当然、そうでなければおかしい。
懐が深い、なんて言葉で表していいものじゃない。
いい加減すぎる。そんな態度では、読手さんが可哀想だ。
だけど、日影さんはどこ吹く風。
表情もさっきのわかりやすいものから、なにを考えているのか解らない何時ものぼうっとした表情に戻っている。
……もしかしたら、さっきのは私に伝わりやすくするために態と大げさに表情を作っていたのかもしれない。
「まぁ、わしがあれこれ言うより、本人に応えてもらった方が納得いくやろ」
「という事でな。どうだろうか、君との付き合いは無いに等しいが、肉体的にはそれなりに自信もある。勿論、君の恋人よりも良い体だ、などと言う積りはないが」
布面積の薄い水着を纏った体のラインを、強調する様に手でなぞって見せるゼノヴィアさん。
恥じらいの無い口調と表情とのアンバランスさは、同性の私から見てもセクシーさを感じる。
前にＴＶか何かで見たギャップ萌え、というものかもしれない。
「ううん、休日のプール遊びと油断してたら特大級の馬鹿が出た感じですね。塔城さんはあんなんになったら駄目ですよ」
「なりませんよ、あんなの」
困った顔の読手さん。明らかに断る雰囲気だ。
少しだけ安心し、日影さんが無表情にうんうんと頷いている姿が視界に入った。
……ああ、そうか。
ちゃんと断る、って、信頼があったから、ああいう態度でいられる

んだ。
　これが、読手さんと日影さんの、信頼の形。
　深く深く、互いの事を知っているからこその関係だ。
「馬鹿というのは失礼だな。一応、ちゃんと理由があるのだ。順序立てて話させて貰おう」
「あはは、馬鹿な理屈だったら焼けたプールサイドで聖別した地蔵抱かせて説教しますから覚悟して下さいね」
　少し憤った声で弁明しようとするゼノヴィア先輩と笑いながら怖いことを言い出す読手さん。
　読手さんの腕の中で、胸板に頭を預けてその会話を聞き続ける。
　頭の上から声が聴こえる姿勢。
　恥ずかしい、と感じるくらいに近くに居る。
　だけど、読手さんと日影さんの意図は少しも読めなかった。
　まぁまぁいい友達、という関係は、酷く広い距離を間に置くらしい。
　萎んでしまった胸の高鳴りに寂しさを覚えながら、そんな事を考えた。

二十八話　楽しい楽しい授業参観

なんだかんだで、オカ研＋ゲストによるプール開きは終わった。
色々と思う所もあるイベントだったけれど、無事に終わって良かったと思う。
……で、暑さで脳が茹だったような発言をしたゼノヴィア先輩が地蔵を抱かされたのか、という話だけれど。
「～～♪」
ご覧の通り、全くの無事でした。
この炎天下では耳が蒸れそうな、やや大型のヘッドフォンをしながら、機嫌よさ気に頭を振りながら歩いている。
無罪放免、いや、別に読手さんには裁く権利もなにも無いのだけど、とにかく、読手さんからゼノヴィア先輩に送られたのは聖別された地蔵ではなく、適当な音楽が詰めあわされたＭＰ３プレイヤーとヘッドフォン。
……まぁ、ゼノヴィア先輩のあの発言はともかく、そこに至るまでの葛藤に関しては少しわからないでもない。
縋る対象、道標が無くなった時の不安は、私だって覚えがある。
勿論、そこで『女の悦びを知る為に子供を産み育てたい』という結論に至る感性は間違いなく相容れないけれど。
「悪いわね、私の下僕なのに」
私の前を行くのは、珍しく読手さんに素直に謝る部長。
下僕が悪魔としての方針を決めかねた挙句に他所に迷惑を掛けたが故の謝罪ということなのでしょうか。
これが身内の間で収まっていれば謝る必要もなかったんですが、如何せん、読手さんはどこまで行ってもオカ研やグレモリー眷属にとっては外部の人で、しかも恋人が居る。
悪魔的に略奪愛は全然問題ないと普段から何故か私の方をちら見しながら公言している部長だけど、愛も恋も無く、とりあえず子供を作りたい、という短絡的な思考は悪魔でなく乙女（）としての部長的には駄目らしい。

これは部長的には略奪愛ではなく、無知ゆえの暴走に含まれるので、下僕の状況を把握しきれなかったが故の監督不行き届きから迷惑を掛けてしまった事に申し訳無さを感じているのだ。

……と、こんな情熱的な日差しの中でも一際陰影が薄くぼやけている副部長（ええと……そうそう、朱乃先輩）が密かに解説してくれた。

「んー、別にいいですよ。エクソシストから悪魔になったんだから、ああいう迷走もありでしょう」

で、読手さん的には、そういう暴走は許容できる範囲内らしい。

しかもとりあえずの娯楽として、種々様々な音楽をプレイヤーごと提供してくれる大サービス付きだ。

これまでもオカ研の部室に遊びに来るときに多めにお菓子を買って振る舞う程度の事はしていたけれど、個人に対するプレゼントでは私が知る限り一番高いものになるのではないだろうか。

いや、別に、それで何か不満があるのかと言われると、別に、そう、別に不満なんて無いのですが。

どうせ恋人の日影さんにはそれより凄いものをプレゼントしているんでしょうし。

「でも意外です。ゼノヴィアさん、あんなに音楽に夢中になれる人なんですね」

ふと思いついた疑問を口にしてみる。

教会で生きてきたというのなら、日常的に聞くことの出来る音楽と言えば聖歌を始めとした昔ながらの宗教音楽ばかりだと思うんですが。

現代音楽にそんなに早く馴染めるものなんでしょうか。

「……まぁ、これまでこういう文化には触れていなかったでしょうからね。どんな文化でもきちんと向きあえば面白味はあるものですよ」

「何、何なのその沈黙、何かしたの？」

「大丈夫ですよ些細な事です。ゼノヴィアさんの今後の指標になればなー、くらいのあれですから……」

「目を見て喋りなさいとは言わないからせめて顔だけでもこっちを見

ながら言いなさいそういうセリフは！」
「なんや、あんたのとこの王様は面倒なお人やなぁ」
「いいところもあるんですよ、ええ、もちろん、嘘じゃないです」
ちょっと解り難いし回りくどいし面倒なところもある方だけど、それでもその他大勢の悪魔と比べれば善良と言っていいと思う。
自然に反応できたけど、今日一日で日影さんともそれなりに話せるようになった。
勿論、私が自分から話を振れるタイプじゃないから相性が良いとは言えないけれど。
でも、こういう小さな交流を重ねていく事が友好関係を広げていく上で重要になってくるんじゃないでしょうか。
読手さんの恋人というだけあって、接触の機会も少なくはないし、できれば友好的でありたい。
……読手さん絡み以外での接触、結構非友好的な場面だったりしましたし……。
思い出すのは廃屋での遭遇戦、あれ、思い返すと腕が変な方向に曲がっていた気がするけど気のせいだったんだろうか。
そんな事を考えていると、視界の隅、学校の正門に、不審な人影が見えた。
濃い灰色、ダークグレーに近い銀髪の男だった。
同世代、と見えるけれど、その立ち姿には違和感がある。
学校で見る同世代とは明らかに体重のバランスが異なる、戦いに慣れているタイプの自然体。
こんな場所には似つかわしくない、という思いと、最近はああいうのと遭遇する機会が多いな、という思いが浮かび、その思考を遮るように視界を背中で遮られた。
読手さんがさり気なく横に動いたのだ。
庇ってくれている？　でも、読手さんに警戒の色は見えない。
でもそれは何時もの事で、私には危険度の有無よりも先に、厄介事の匂いだけが感じられた。
「やぁ、いい学校だね」

「そうですか？」
「ああ。……赤龍帝や、君のような存在も居るんだ。実に面白い場所だよ」
……一難去って、また一難。
梅雨を越え、プールでの水遊びも心地よい夏の日。
授業参観というイベントを目前に控えた今日このごろもまた、穏やかではない時間への準備期間にしか過ぎないみたいです。

初対面の人間に対して、爽やかな笑顔で『いい学校だね』と問われて、どう返すのが正答なのだろうか。
というか、どういう答えを期待しての言葉なのかがさっぱりわからないし、答えても恐らく速攻で本題に入ってしまい流される可能性が高いだけに考えるだけ無駄というのが答えなのだろう。
だがあえて言いたい。
この学校は割と危険な場所である。
何故なら、休日の学校でプール遊びをした帰りに、堕天使子飼いの神器使いが校門でおしゃれ立ちをして待ち構えている可能性があるからだ。
ついでに悪魔が支配していたりする。
しかも貴族で、最近は戦場として使用されたりする場面もしばしば見られる。
安全面で考えれば『いい学校だね』と言われたら『それはどうかな』と返すのが適切かもしれない。
だがそれを言っても仕方があるまい。
物事の善し悪しは安全さだけで決まる訳でもない。
そしてそれよりも一つ注意喚起しておかねばならない事もある。
「ホモはイカンですよホモは。非生産的な」
バトルジャンキーという輩はナンパの文句みたいなセリフを、強者とあれば男も女も関係なく口にするから困る。
そして、此方がこのようにボケても尚苦笑一つでスルーしてしまうのもまたジャンキーの厄介な所なのだ。

「なるほど、何も考えていないのか、考える必要もないと思っているのか……アザゼルの言うとおり、食えない男だ」

くつくつと笑いながらそんな事を言う男を、神器を展開した兵藤先輩と木場先輩が挟み込む。

アザゼルの、という辺りに反応したのだろう。少なくとも現状悪魔にとってアザゼルは味方に数えられる相手ではない。警戒も当然だ。

……しかし、何気なく此方を含めて三方向から男を取り囲む様な位置に立つのは止めて欲しい。

なし崩し的に此方を悪魔側にカウントしよう、などという知恵が働く二人ではないので悪意はないのだろうが。

まぁ、いざとなればあらゆる状況をガン無視して日影さんと帰るだけなので気にしないでおこう。

「そういう貴方もアザゼルさんに聞いた通りの面倒くさい男ですね。今まで見たドラゴン入った連中の中でも一番に面倒臭い。赤い方を見習ったらどうですか」

赤い方、赤龍帝である兵藤先輩は実際扱いが凄く楽だ。

とりあえず自分に好意的なおっぱい美人が近くに居れば余計な面倒臭い挙動や発言は一切無くなる。

黒い方は知らない。だってまともに話したことも無いし……。

しいて言うなら、彼を真っ先に殺して挑発すると残ったメンバーがかなり冷静さを失うので仲間内で慕われているのかもしれない。

あ、神器は地味だけど便利だと思います、地味に。

「生憎と性分でね、変えるつもりもないんだ。それに、今日は君の言う面倒な事はやらないよ。アザゼルの付添で来日した序、ただの退屈しのぎの散策さ」

「じゃあ気色悪いのでそのねっとりとした視線を止めて下さい。兵藤先輩と木場先輩だけで十分でしょう、そういう視線を向ける先は」

今現在、神器が禁手に至らない機能拡張状態で足踏みしている兵藤先輩はともかく、木場先輩ならこの男相手でもいい勝負ができる筈だ。

本人の技量は肉弾系の中忍並でしか無いが、何より彼の肉体には適

合したアヴァロンが組み込まれている。
　爆発的に火力を上げるスタイルの赤龍帝には時間経過で打ち負けるだろうが、相手を弱体化させていくスタイルの白龍皇相手なら普段のペースを保って戦えるだろう。
　……まぁ、あくまでも半減が効かない、防御と回復が凄いというだけで聖剣ビームは連射できないので結局はジリ貧か千日手がいいところだろうが。
「仕方がないだろう。君は実に興味深い存在だ。コカビエルを圧倒するだけの力を持ち、関わった者に不思議な力を与え、しかし、こうして相対しても、どうしてもそうは見えない。……見事な擬態なのか、本当に君自身はどうってことの無いヤツなのか」
　口の中で小さく舌打ち。
　あの羽虫を殺した事が想定以上に厄介な状況を招いている。
　どこか、そう、兵藤先輩辺りを使って、此方に注目している連中の興味を逸らす必要が出てくるかもしれない。
　丁度ネームバリューだけはある神器らしいから丁度いい。
「あの、何者なんですか」
　背後に居た塔城さんが、くい、と、服の裾を引っ張りながら問うてきた。
　正直此方も詳しくは知らない、というか、寿司を奢らせた相手から聞いた程度の情報しか無いのだけど、勝手に言っていいのだろうか。
　いくら相手が、とりあえず他人を見たら全身を舐め回すように視姦してどれくらい強いか測るバトルフェチの変質者であったとしても個人情報は勝手に広めていいものでもない。
　とりあえず本人の意志を確認する意味も込めて、瞼を閉じたまま、顔の動きだけで視線を向ける素振りをする。
　すると、視線を送るジェスチャの意図を読み取ったのか、あちらにも塔城さんの声が聞こえていたのか、改めて名を名乗った。
「すまない、名乗るのを忘れていた。――俺はヴァーリ。白龍皇、『白い龍（バニシング・ドラゴン）』だ」
　うん、知ってた。

だが、塔城さんを始めとした他の面々は当然知らなかったのか、此方と日影さん以外は例外なく驚愕と共に警戒レベルを引き上げたのがわかる。

特に顕著なのが兵藤先輩だ。

特におっぱいが出ている訳でもないし、現状仲間の誰かが危機に陥った訳でもないのに、人化が解けかけて半竜になりかけている。

警戒心、いや、生命の危機を感じての事だろうか。

それでも神器を変化させていないのは、恐らくは内部にある龍の魂が止めているからか。

戦えば、今の不完全な兵藤先輩では勝ち目がない事を理解しているのだろう。

「噂に聞くのと実際に見るのとでは大違いだ。……実力差が解る程度には力もあるか」

「何を」

「ああ、恥じなくてもいい。力量差がわかるのも、わかった上で誰かの為に立ち向かえるのも美徳だ。尊敬に値するよ」

兵藤先輩の声が、そして身体が震えているのがわかる。

それでも立ち向かえるのは、あの羽虫との戦いで鉄火場の空気を肌で感じた経験や、生来の気性からくる勇敢さもある。

正直なところを言えば、此方も兵藤先輩のああいう何かの為に勇敢になれるところは少しだけ気に入っている。

主人公気質とでもいうか、流石はこの星[本]の表紙を飾るだけの事はあると思う。

「それで、ライバルの様子は確認できたから、用事は終わりですか？」

無視して此方と日影さんだけ帰っても良かったのだけど、帰りにグレモリー先輩が塔城さんに水泳を教えたお礼にかき氷を奢ってくれる手筈になっているので少し迷う。

何しろ本格的な和スイーツの店で出る値段四桁に到達するリッチなかき氷だ。

こういう気になるけど自分で金を出して試すのはどうかなぁ、と思うものを食べる時はこの手に限ると相場が決まっている。

一応、この間の羽根わさわさしてる堕天使からいきなり襲い掛かってくる狂犬ではないと聞かされているし、面倒な事にはならないと思いたいが。

「ああ、見たいものは見れた。赤龍帝も思っていたよりは『良い』とわかったし、そこの騎士も中々のものだ。……君に関しては、また改めて」

「お断りします。そして、お断りします」

「楽しみにしているよ」

「聞けよ」

こいつホント人の話聞かないな。

脅威度が高くないのがせめてもの救いか。

「白龍皇、堕天使と繋がりがあるのなら、私達に過度の接触は――」

「……二天龍に関わった連中は碌な生き方ができないと聞くが、君は、君たちは、どうなるんだろうな」

警戒しつつも特に射線を確保するでもなく声を掛けたグレモリー先輩の言葉を、捨て台詞の様な不吉なセリフでぶった斬り、そのまま踵を返して去っていく。

他の連中も武器を収め、兵藤先輩も徐々に人型に戻りつつあるが、場の空気は最悪だ。

どうせかき氷を食べるなら、もっとこう、和気あいあいとした雰囲気で食べたかったのだが。

「……」

此方の服の裾を掴んだまま、口の中で呪文を唱えて準備していた塔城さんの表情も暗い。

というか、ファイティングポーズも取らずに人の背後に回って小声で詠唱を始める辺り、塔城さんは本格的に種族値全捨てで後衛への道を歩み始めている気がする。

いやまぁ、相手の神器の特性を考えれば、他所から力を借りて放つ塔城さんの魔法は相性が良いのだけど、それでいいのか元妖怪。

「じゃ、改めてかき氷食いに行きましょうか」

「君は……ぶれないなぁ」

少しだけ緊張を解き、呆れるように言う木場先輩。
だが待って欲しい、この場で一番ぶれないのは、ヘッドフォンを使って目を瞑って大音量で音楽を堪能していた為に白龍皇の出現に気付かず未だヘッドバンキングしているゼノヴィア先輩ではないだろうか。
彼女には後々グレモリー先輩からお仕置きが与えられるかもしれないが……実際、彼女ぐらいのリアクションが正しい。
二天龍と関わると碌な人生が送れないなどと言うが、転生悪魔になんてなっている時点で碌な人生ではない。
そもそも、この世界自体がろくなものではないのだから、悲観するだけ無駄なのだ。
悪いことが起こるのも、碌な人生にならないのも見越して、少しでも良い人生にしようと努力する。
それがより良い人生を送る秘訣だ。

そんなこんなで月日は過ぎて、一足早いプール開きから数日。
あれ以来、特に胃に来る衝撃的な事件が起こる事も無く、平穏な日々が続いている。
あえて何か起こりそうな要素があるとすれば、今日の授業参観でしょうか。
私は……見に来てくれるような身内が居ないからあれですが、なにせこの学校には上位悪魔で貴族の親を持つ方々が居るわけで。
というか、そもそも魔王様自体が妹である部長の授業参観を見に来られているわけで、それだけで十分な事件と言っても良い気がします。
ただ、それよりも不安を駆り立てる存在が、一人。
「～♪」
この朝の通学路を、鼻歌を奏でながら露骨な上機嫌で歩いている読手さん。
そりゃ、これまでだって機嫌が良さそうな日くらいはあったけれど、ここまで上機嫌なのは初めてなんじゃないでしょうか。

「――ああ、塔城さん！　おはようございます！　良い朝ですね！」
「ア、▪ハイ。おはようございます」
上機嫌ぶりが不気味さに変わりそうで変わらないギリギリのラインに不安を覚えて少し距離を置いていたら向こうから距離を詰められてしまった。
まぁよく考えたら普段から目を閉じて超感覚的なアレで生活している人相手に距離とっただけで隠れられるわけ無いですよね。
観念して、普段通りに並んで歩く。
歩幅はあちらが明らかに大きいけれど、こうして並んで歩く時は自然と速度を合わせてくれる。
……のだけど、今日はなんだか速度がおかしい。
早い訳でもないし、置いて行かれるわけでもないのに、妙に足取りが軽やかだ。
スキップになっていないのが一種の奇跡か何かなんじゃないかと思えてしまう。
「……なんだか、ご機嫌ですね。何かキメてます？」
「塔城さんは今日も辛辣だなぁ！　でも、そういうとこもカワイイですよ☆」
「お、おう……」
両目を閉じたまま、片方の瞼を少しキツ目に閉じてウインクの様なジェスチャーすら見せて来た。
古典漫画の様な『バチコーン！』という効果音と共に星が舞いそうな雰囲気すら感じる。
カワイイとか、このテンションでなければ言われて素直に嬉しいと思えたのに、今は戸惑いしか感じられない。
「っと、確かにちょっとテンション上げすぎてましたね。セルフコントロールセルフコントロール」
そう言いながら、徐々に何時もどおりのテンションに戻していく読手さん。
発する空気や足取りが目に見えて何時もどおりの落ち着いたものに変わっていく。

しかし、完全には戻りきらず、何処か浮ついた雰囲気が感じられる。
「……本当に、何かいいことでもあったんですか？」
「えー？　ん、んー……。……あれ、これ言っていいんですかね。ちょっと迷いますよ？」
聞きたい？　ねぇ聞きたい？　みたいな雰囲気を一瞬だけ漂わせた後、ふと真顔に戻り悩み始める読手さん。
普段はここまで浮き沈み激しくないだけに、このジェットコースターみたいなテンションの変化は見ていて不安だ。
「いいから言ってみて下さい。言っちゃなんですけど今日明らかにおかしいです」
「いや、ね？　今日、あれあるじゃないですか、授業参観」
「ありますね」
「母さんが来るんですよ」
「マザコンですか」
「何言ってるんですか。此方はマザコンでファザコンですよ」
自慢にならないんですがそれは。
……と、言いたい所ですが、マザコンファザコンになれる位に家族の仲がいい、少なくとも読手さんが両親を慕っている、というのはいいことだと思う。
気兼ねなく仲良く出来る、一緒に居られる家族が居る、というのは、それだけで価値があります。
「ちょっと、羨ましいです」
「……すみません」
「いいですよ。こっちが聞いたんですから」
少なくとも、読手さんはそこら辺に気付いて一度言うのを躊躇った。
だから彼は別に無神経な訳でもないし、私だってそこら辺の話をする度に落ち込むほど軟な積りはない。
今の私にとって、たぶん、眷属仲間が家族のようなもの。
血のつながった家族は何にも代えがたいけれど、私の持つ繋がりはそれだけじゃない。

友達だって居る。
こうして私の事情を慮って気を使おうとしてくれる優しみを持つ友達にも恵まれている
だから、私に関する話は別にいい。
「でも、そうですよね。お母さんが居るんですよね」
想像もしていなかった。
いや、いくら人間離れした強さを持っているとしても人間である訳だし、両親が居るのは普通の事なのだけど。
……あ、いけない、考え始めたら気になってきました。
「どんな人なんですか？」
「優しくも厳しい人。真面目そうに見えるけど、結構茶目っ気もあったりします。あとは……」
何かを言おうとして、腕を組んで天を仰ぎ、ううん、と唸る。
「あ、言い難い事なら別に」
「いえ、別に言い難くは……無い、んですかね？　親の事を誰かに話した事ってあんま無いので、ちょっと判断しかねるというか」
「……私は参考になるような意見も言えませんが、わからないなら後回し、でいいんじゃないですか？　言い難い部分も含めて、良いお母さんなんでしょう？」
今教えてもらっているのだって結局はただの好奇心なんだから、そこまで思い悩まれても困る。
「そう、ですね。ちょっと色々あるけど、素敵な親です」
笑顔でそう言い切った。
凄く自然な柔らかい笑顔だ。
きっと、本心から両親のことを慕っているんだろうと思える。
……しかし、ここまで絶賛される親となると、実際はどうなのだろう、と考えてしまうのは自然な事だろう。
読手さんの不思議な力の事を考えれば、子供が不思議な力を持っている程度では動じない程度に器の大きさはあるんじゃないかな、と想像できる。
結構な人格者で、読手さんが夜中に出歩くのを赦す寛容さもある。

柔軟な人だ。若いころ色々経験したのかもしれない。
が、それ以外の部分が謎だ。
何しろ読手さんの情報なものだから、外見的な特徴なんて一つも出てこない。
実際人格面も読手さんの申告だから身内贔屓がどれくらいかわかったものじゃない。
しかし、それで変なモヤモヤが残る心配は無い。
何しろ、今日は授業参観日。
私には誰が来るという訳でもないけれど、目下最も気になる相手である読手さんのお母さんの姿は確認できるのだ。
厳しくも優しい、とか、茶目っ気があるとか、そういう部分を見れるとは思えないけれど。
姿を表してくれるというのなら、一目見てみたいと思うのは人情というもの。
「……楽しみですね」
「ええ、楽しみです」

しかし、実際授業参観が始まってみると、これが中々、見られているだけあって何時もの授業には無い緊張感を感じる。
これで普段の教室での授業ともなれば、背後にはクラスメートの父兄の気配を感じつつ、しかし視線は前を向いて授業を受けなければならない。
まるで眉間の前に指を近づけられている様な気持ち悪さに似た感覚の中で行う授業は実にやりにくそうだと思う。
だから、今日の授業参観が美術で本当に良かった。
少なくとも視線と気配の主である父兄の皆さんの姿を脇目に捉える事ができる。
普通の数学とか英語とかの授業と違って張り切りようのない内容だから、読手さんの様に今日という日を楽しみにしていた人には物足りないかもしれないけど、そこは我慢して欲しい。
「はい、では、全員二人組になりましたね？」

唐突に行われるトラウマチェック。
しかしこのクラスは全員出席していれば人数が偶数なので一人余る事もない。
普段の教室では感じられない、絵の具や粘土、木材の匂いなどが漂う教室の中で、クラスのほぼ全員がスムーズに二人組を作る事に成功している。
……ほぼ、というからには、苦戦した末に最後の最後で組み合わされる余りのペアも存在する訳で。
屈辱的な事に、クラスでペアを作ってくれそうな相手に尽く先を越されてしまい、私は見事に最後の二人に残ってしまった。
しかも最後に残ったもう一人の人選からして、クラスで一致団結してハブられていた可能性もある。
「今日という日ほど塔城さんと友達で良かったと思う日はありませんでした」
「……大げさに言い過ぎですよ」
同じく、クラスメートの陰謀によって残されたと思しき読手さんが私のペア。
……いやとは言いませんが、ここまで露骨なのは、ちょっと。
でも、ペアを求めて不安そうにしていた読手さんの姿を見れたのは少しラッキーかもしれない。
珍しくオロオロとしている姿は少し可愛かった。
これが最近巷の一部で密かなブームになっているギャップ萌えというものかもしれない。
「今日は皆さん、これまでこの授業で地味ぃぃに学んできた技術を駆使して、ペア組んだ相手を題材に何か一つ作品を作って下さい。まぁ授業参観なんでね、ご家族の方にこれまでの集大成を見てもらおう、って事でぇ。材料は好きに使っていいからね」
と、教壇に山と積まれていた粘土や絵の道具一式を取りに来るように言う先生の言葉に従い、各ペア思い思いの素材を持っていく。
じゃんけんでどちらが取りに行くか決め、スムーズに負ける。
取りに行くのは良いけど、何を取ってこよう。

「何やります？」
「此方は、そうですね、絵でも描きますか。塔城さんは？」
「ちょっと、粘土細工でやってみようかと」
授業参観とは関わりなしに、少し粘土細工には興味があったりする。
読手さんから貰った魔術の知識の中に、鉱物を使った護符の作り方があったりするのだ。
ああいうものを作る技能がある以上、多少こういう立体系の美術センスを磨いておきたいと思っていた。
……というか、実は密かに護符を作る練習ついでに粘土をこねたりしていたので、少しだけ自信がある。
持ってきた針金と粘土、読手さんの画材をそれぞれ置いて、少しだけ気合を入れる。
「針金も使うとか、結構本格派ですね」
「集大成、って言われちゃいましたし。―やるからには本気です」
本気とはいえ、さぁ、いざ作るとして、どういう形で作ろうか。
ポージングは立像を作る上でかなり重要になってくるし、その格好だって疎かにはできない。
学生服か、ジャージか、前に少しだけ見た私服か。
刀持たせようかな。でも、学校では当然刀なんて使ってないし。
躍動感のあるポーズ、突撃前の、でも刀が無いと締まらないし。
「刀持たせちゃっていいですか」
「いいと思いますよ。どうせ美術で自由課題って時点でネタ枠は増えるでしょうし、刀の一本や二本ありでしょう」
「普段何本使ってます？」
「そこはほら、アレンジャーの腕でどうにか」
しょうがないにゃあ……ちょっと本気出しちゃうしか無いにゃあ……。
……こう、いっそ回天剣舞・六連的なあれにしちゃう感じで。
……あ、でもコートは似合わないし、ニンジャ装束にしましょう。
あれ、でもニンジャ装束って着て無い？

「ニンジャ装束って着ます？」
ざっ、ざっ、と、スケッチブックに荒々しく筆を走らせる読手さんに小声で訪ねてみる。
今まで見たことがなくても本人が着たことがあるならセーフの筈。
「忍者は着ないらしいですけど、此方はあくまでもニンジャですからね」
やっぱりニンジャって凄い。
じゃあ遠慮無く着せよう。
メンポは……つけるとペア相手だってわからなくなりますね。
後付にしましょうか。
……迫力が足りない。
吹き出しを別パーツで『ＷＡＳＳＨＯＩ！』と。
「でも実はあんまり着たこと無いんですよ。ほら、素性隠すなら変装で別人になる方が早いし確実なので」
「……言ってくださいよ先に。これじゃ只のニンジャ像じゃないですか」
「じゃあ、その内着ますからそれで」
ならよし。
知ってる人が見れば読手さんと解る良い出来です。
まぁ、何故か逆手にポン刀二本構えてＷＡＳＳＨＯＩ！とか言ってますけど、別に問題はないでしょう。
回りを見ると、チラホラと、パワードスーツを作って中にペアの人の像を載せてる人とか、狼人間を作ってペアの人の変身後の姿と言い張る人とかも居るし、十分許容範囲内。
……いい、いいですね、傑作ですよこれ。
護符要素が完全に消えたけど、別にいいんです。そんなのは、重要なことじゃない。
「やるじゃないですか。塔城さんがネタ枠作るのは意外でしたけど」
「日々進歩していますから」
「……うん、塔城さんが納得してるなら、別にいいですよ」
奥歯に物が挟まった様な物言い。

むう、読手さんは私作の傑作になにやら不満があるようで。
それでいて『仕方ないなぁ』的な雰囲気も出してる辺り、こう、上から目線な感じがして少し嫌だ。
「そう言う読手さんはどうなんですか。描けてるんですか似顔絵」
普段から目を瞑って生活しているのが読手さんだ。
それどころか今も瞼を閉じたまスケッチブックに筆を走らせている。
そして数ヶ月の付き合いの中でも未だ視覚がどうなっているのかという点には触れていないから、読手さんが似顔絵に出来るほどに私の外見を正確に認識できているかがわからない。
……今、私はどんな奇妙な状態で描写されているのだろうか。
考えるだに不安になってきた。
抽象画的な姿で見えていたりしたなら、出来上がるのも当然そういうものになる。
……手塚先生の作品でそういうのがありましたね。
「あー……、いや、まぁ、ええ。大丈夫ですよ?」
目線（というか、顔の向き）を私から逸しながら、描きかけの絵を庇う様に両手で縁を持つ。
怪しい。
ここまで来ると一度何が描かれているか確かめてみたくなる。
が、実力行使でどうにかできる相手でもないし、そもそも今は授業中だから暴れる訳にもいかない。
「……」
勿論、嘘じゃない。
授業中に、しかも相手の製作中の作品が気になるから実力行使なんて蛮人のやること。
私にはどうすることもできない。
「……」
どうすることもできない（迫真）
「あの」
「なんですか」

「……描きかけですけど、見ます？」
「わぁ、いいんですか、なんだかわるいですね」
誠意が通じました（断言）。
勿論、私は何も出来なかったので絵を描いている読手さんをじっと見つめていただけなので、特に疚しかったりはしない。
これはあくまでも読手さんが善意とか誠意で絵を見せようとしてくれただけなのです。
読手さんはいい人ですね。いいことだと思います。
「言っときますけど描きかけですから、笑わないでくださいよ」
「だいじょうぶ、内容によります」
何処が大丈夫なんですか！　という小さな叫びを聞きながら、差し出されたスケッチブックを受け取る。
……実際、好奇心と不安で半々で笑う余裕なんて無いんですけど。
せめて人型、百歩譲って猫型なら……。
そう願いつつ、受け取ったスケッチブックの絵を――――
「な……！」

渡した絵を見て、塔城さんが短く、しかし授業中に出してはいけない音量の声を発し、硬直する。
声はそれだけで途切れるが、ぱくぱくと口を閉じたり空けたりする音が聞こえる辺り、予想通りのリアクションが行われているらしい。
……こうなるんじゃないかなって思ってたから、見せたくなかったんだよなぁ。
絵を描く事自体には何も問題はないのだが、目の前にモデルを置いてのスケッチ、というのは難しい。
目を開いた時に挿絵になっている可能性は低い、というか、何もない場面ならほぼありえないし、仮に挿絵になっていたとしても常人がスケッチを完了するまでの時間それが保たれる事は更にありえない。
となると、此方は記述にある外見的特徴の部分を参考に想像で描くか、さもなければ過去に見たことの在る挿絵を思い出しながら描くしか無い。

が、基本的に挿絵というのは見せ場で現れるものであり、日常、椅子に座って特に何の表情を見せるでもなく絵のモデルになっているような状態とはかけ離れている。

更に言えば、此方が見た覚えの在る塔城さんの挿絵、となると……。

「な、なん、よみ、よみてさん、これ」

チラ、と瞼を開けると、そこにはやはり文字列から挿絵に変わった塔城さん。

漫画的な絵であるせいか、顔を真赤に染め、口を波線の様にしてあうあうと言葉にまで纏まらない声を吐き出している。

事ここに至って声を抑える、という機微は塔城さんの頭から抜け出してしまっている為、塔城さんの動揺がありありと滲み出している声は美術室中に響く。

今の塔城さんは（ついでに此方も）クラス中＋その父兄の視線を釘付けにしていると言っても良い。

瞼を閉じ、溜息。

このリアクションは見たかったけど、もう少し周囲の注目を浴びない、作品提出の段階の授業終盤でやりたかったのに……。

「……おお、読手。お前前から思ってたが絵ぇ上手いじゃないか」

動揺する塔城さんの手の中から、美術の先生がひょいとスケッチブックを取り上げてそんな事を言う。

「美術部には入らんのか？」

「コンスタントにそういう絵が描けるわけでは無いですから」

実体化対策で目を開けたまま描けないから、自分の描いた絵も普段は見れないし。

それに、観賞用でない絵なら、毎朝の運動の時に何枚も描いているのだ。

わざわざ放課後の自由な時間を消費してまで描こうとは思わない。

「だろうな。こういう絵は、描く相手に思い入れが無きゃ描けん」

なんだか、声色が嫌らしい。

第六感でしか感じられないが間違いなく気色の悪いニヤけ顔であることだろう。

そういう事でもないんですが、それで納得してくれるならいいや。
「これ、いいか？」
スケブを持ったまま教壇の方を親指で指差す先生。
嫌らしい表情と邪推が好きそうな嫌らしい雰囲気の先生だけど、こういう時に生徒に一言断りを入れる辺りは割と好感が持てる。
少しだけ、他の人に見せるのは惜しいかな、と思いつつ、目を閉じて大雑把に描いた絵にそこまで拘るのもおかしいか、と思い、頷く。
「あ、ちょ」
塔城さんが先生の持って行ったスケブに慌てて手を伸ばしかけ、言葉と動きを途切れさせた。
別に、美術の授業中にできの良い生徒の作品を例として他の生徒に見せるのはおかしなことではないし、そも持って行ったのは塔城さんの作品ではなく此方の作品だ。
冷静に考えれば描かれている側の意見も聞くべきではないかとも思うけれど、そこまで思い至らないなら此方が何かフォローを入れる必要もないだろう。
……というか、此方だって人間だ。手を抜いているとはいえ、自作を褒められて嬉しくない訳がない。
「はい、一旦手ぇ止めて注目ー」
先生の声と共に小声の犇めき合っていた美術室が静かになり、先生の持つスケブの中の此方の描いた絵が開示されると、『おぉ……』という感嘆の声が低く教室に響く。
あくまでもこれまで学んだ技術を駆使しての作品作りである事から、先生の言及は描かれた対象や状況でなく、描くのに使用された技法という部分に向けられている。
が、他のクラスメートたちの関心は間違いなく描かれている塔城さんの表情とポーズに向いているだろう。
「読手さん、読手さん……！」
向かい合う此方に助けを求めているのか抗議しているのか、ばしばしとうるさくなり過ぎないように間にある机を叩く塔城さん。
「塔城さん、授業中ですよ」

短く告げると、塔城さんは声にならない音にも出せない悲鳴を上げ、イカを食べたネコの如くその場にぐったりと項垂れてしまった。
六感を使うまでもなく、塔城さんの頭が熱を持ち湯気を出しているのが解る。
……そこまで恥ずかしいものかな。
別に、本心確かめるために模写した塔城さんのあられもない姿という訳でもない、普通の絵だ。
それこそ、日常の中の一枚を切り出したかのような。
頭を撫でていたら撫でていた相手がいきなり頭を上げたから驚いて胸元に手を引っ込めて、驚きと慌ての入り混じった少し紅潮した顔の塔城さんだ。
珍しいショットだけど、これでここまで恥ずかしがる、というのは、ううむ。
女心というものはわからないものだ。

終わった、私終わりました。
いや何が終わったかと言われると返答に困るし、本当に終わったのかと聞かれれば何も始まってすらいないんですが。
でも気分的には終わった。
あの絵自体はともかく、私と読手さんの関係を邪推している人には格好の餌になりそうな絵。
あんなものが晒し物になるだなんて……。
しかも、これが、いや、悪い訳ではないんですが。
……凄く、美人に描かれている気がする。
写真を絵に落とし込んだようなものではない、もっと、こう、描き手の主観が入り混じった美化要素というか。
何処がどう修正されているか、と聞かれると上手く説明できないんですが、オーラがあるというか。
あの絵を見た後に実物を見たら『ん?』と首を捻られそうなレベルで、雰囲気がプラスされているような。
……つまり、そう、見えてる、って事で、いいんでしょうか。

……かわいい、とか、言ってましたよね、そういえば。
「……っ」
ぶんぶんと頭を振り、おかしな考えを振り払う。
別に、いいじゃないか。
恋人が居るからって他の女性が美人に見えない、なんてことはないんだし、決しておかしなことじゃない。
……つまり、日影さんはこの際置いておくとして、他に比べれば美人に見えるって事で……。
「――――！」
壊れない程度に机をバンバンと叩き気を鎮める。
だめだ、なぜだか思考が堂々巡りに陥っている。
落ち着かなければ、せめて午後の授業までに……。
「わっ」
「こあぁっ！」
背後から、というか、耳元でいきなり声が聞こえ、自分でもよくわからない叫び声が出た。
振り返る、が、誰もいない。
もしやと思い前を見ると、いつの間にか読手さんが前の席に座っていた。
「……その叫びは、悪魔なだけに？」
「違います小悪魔じゃないです……」
意地悪そうに笑う読手さんから顔を背けながら小さく否定する。
私の懊悩も知らずに忍術まで使って誂ってくるその無神経さが少し頭に来ているというのもあるけれど、今は顔を真正面から見るのに少し心の準備が要る。
別に、読手さんの事をどうこう思っている訳ではないけれど、あそこまで美人に見られている、と思うと、乙女心的なアレが複雑に反応してしまうのだ。
「ところで塔城さん、ご飯まだですよね。一緒に学食行きません？」
そういった葛藤を知ってか知らずか、何時もの調子であまりしない提案をしてきた。

無神経な、と思いつつ、こっちが勝手に反応しているだけだから仕方ないか、と諦め、考える。

確かに、昼休みに入ってから授業参観の事で悩んでいたからまだ食事を取っていない。

ご飯も購買で買って食べる予定だったから、その提案を断る理由も特にないのだけれど。

「珍しいですね、学食なんて」

普段は弁当持込みだったり購買で買って済ませたりなのに。

「いやぁ、授業参観で浮かれてて、弁当持ってくるの忘れちゃって……」

恥ずかしそうに笑う読手さん。

それはちょっと浮かれすぎじゃないですかね、と思いつつ、そう思う程に家族が好きなんだろうと思えば微笑ましくもある。

「いいですよ。せっかくある学食ですし、偶には使いましょうか」

学食に向かう廊下は、普段とは少し違う賑わいがあるように思えた。

授業参観自体は終わったけれど、まだ学校に残っている父兄の方々が居るから、それに釣られて、ということでしょうか。

誰の親がどうとかこうとか、そういう話に紛れてなにやら魔女っ子がどうこう、という噂話がちらほら聞こえるけれど、こちとら魔法には一家言ある。

……でも何故でしょうか、魔法少女と呼ばれるよりは天才美少女魔術師の方が響きが良いと、頭の奥で何かに囁かれているような……。

気のせいだろうと思うのでささやきを無視し、お昼ごはんに想いをはせます。

「学食ってどんなのがありましたっけ」

「此方もあんまり使わないからそれほど把握してないですけど、普通の定食屋程度のメニューはあったと思いますよ」

「デザートは？」

「学食ですからね、あるでしょう。日替わりデザートとかあると面白

いんですけどね」
「そこまでいかなくても、季節毎にデザートが入れ替わるとか……」
余り使うことのない学食に関してあれこれ話しながら歩く。
見慣れた学校の廊下、見慣れた制服の学生の群れ、それに紛れてちらほらと見える、スーツやお洒落着に身を包んだ父兄の方々。
母親率が高いのは、父親の方は仕事で来れないという場合が多いからか。
そういえば、ふと思いつく。
「お母さん、来てました？」
「来てました来てました。……なんか、授業の様子見て溜息吐かれましたけど……」
溜息を吐いていた女性は……駄目だ、授業中はあれこれありすぎて父兄の方をよく見ていなかった。
「結局、どんな人なのか見れませんでした」
「あー、ちょっと父兄の中でも後ろに居ましたから」
「……しかもモデル見ながら作品作る授業でしたしね」
少し残念だ。
「授業参観は此方が貴方達を見るものですから、そちらから見る必要はありませんよ？」
「そうなんですけど……、って」
身構える。
凄く自然に会話に割り込んできたから普通に反応してしまったけれど、気配もなく一人の女性が読手さんを挟んで反対側に並んで歩いている。
……美人だ。
ぱっと見では日本人のように見えるけれど、身にまとう雰囲気は何処かエキゾチックで、よくよく見ると顔立ちは少し白人寄りにも見える。
日本語上手いけど何処の人だろう。
同い年くらいに見えるけど、駒王の制服は着てないから、少なくともこの学校の生徒では無い筈だ。

ネクタイに白いワイシャツ、学生服のようで、何処か神職を思わせる金糸の細工が入った緑のスカートスーツに緑色の帽子。
薄い紫色の髪を後ろで編んで纏めていて、絵に描いたような『できる女』といった風だ。
よくよく交友関係を見なおしてみても、こういうクールビューティーな人は知り合いに居ないので新鮮に映る。
「あ、母さん」
「……は？」
かあさん、って、母さん。
母さん?!
「どうしたの、なんでまだ学校に？」
「お弁当を忘れていったでしょう。そういうそそっかしいところは誰に似たのか……」
「わ、やった。ありがとう母さん！　……あ、でもどうしよ、学食……」
「心配いりません。こうなることは予測済みなので、そこのお嬢さんの分も用意しています」
「……え、あ、私ですか？」
思考を停止して目の前の光景をただただ眺めていたら矛先が此方に向いてきました。
どう見ても同年代にしか見えない、でも言われてみれば落ち着いた雰囲気がそこはかとなく大人びている、読手さんのお母さんであるらしい人。
その人が今、お弁当の包みを手に、こちらにうっすらと笑みを向けている。
「書主から話は聞いています。……一緒にご飯でも食べながら、お話を聞かせてもらえませんか。普段、うちの息子がどんな迷惑をかけているのかとか、ね」
母性を感じる優しげな笑み。
だというのに感じる妙に強い強制力に、私は笑みという物が本来どんな意味を持つ表情であるかを、ぼんやりと思い出すのであった。

二十九話　肩透かしの教会

そんな訳で休日である。
朝も早くからの呼び出しではあるが、まぁまだまだ常識的な時間の呼び出しなので問題はない。
逆に、『今夜、影絵の街にて君を待つ』みたいな抽象的な場所時間指定だったりしない分よほど良い。
問題があるとしたら会談場所だろうか。
態々こんなうらぶれた場所での待ち合わせというのは、どうなのだろうか。
「ここかぁ」
待ち合わせの場所は隣町の小さな教会だった。
別に堕天使のねぐらでも無ければ、はぐれエクソシストの溜まり場でもない。
こじんまりとした教会の前にはアクリル張りの掲示板が立てられている。
町内会のお知らせと並べるように、ミサの日程お知らせの張り紙がされている。
敬虔な信徒が集まる場所、というよりは、地域の寄り合いの場所として使われていると考えたほうが良いのだろう。
入り口の前に立つ。
呼び鈴の類は無いようなので、戸を壊れない程度に拳で数回叩く。
戸を叩いた時の音、その反響が、この教会の内部構造を教えてくれる。
普通の、本当に普通の教会だ。
聞いた話ではクリスマスには恋人たちの集いがどうとかで一般開放されたりもしているらしく、怪しげな構造物は一切感知できなかった。
「たのもー」
再びごんごんと両開きの扉を叩きながら、ご近所迷惑にならない程度の声で呼び掛ける。

数秒待つ。
返事は無し。
鍵や閂の類は掛かっていないようなので、押し開く。
空気が変わった。
と言っても、別に結界に囚われたという訳でも、プレッシャーを感じるという訳でもない。
単純に、教会という建築物が持つ外界との遮蔽性が作用しての事だ。
未だ早朝、雀の鳴き声が爽やかに響き、登ったばかりの太陽から地球に垂れ流される眩しい光。
それらが遮断され、機械的な空調を動作させていないらしい教会の中は、夜の間に冷えきった涼やかな空気と静謐さだけが支配している。
かといって、寒くて無音なのかと言えばそうではなく、ステンドグラスから差し込んでいるであろう、少しだけ減衰した光が教会内に適度な明るさを齎し、空気も涼しい程度で寒さを感じる程ではない。
いい環境だ。
神が死んだのどうので騒いだり喚いたりしている連中も居るには居るが、そういう連中の事を脇に置いて考えれば、教会という建築方式を生み出したこの宗教には生まれてきた価値がある。
祈った所で碌に届くことは無いだろうが、この並べられた木製の椅子に座り読書に勤しんだり、何をするでもなくぼうっと呆けてみたら快適かもしれない。
歩く。
祭壇に掲げられた、十字に磔にされた神の子に向けて歩く。
……若いころに植物を一つ永遠に実がならないような呪いを掛けても、他で善行を積めば祀られたりできるんだよなぁ。
「意外と、こう、実利的というか」
口にして思い出すのは、何時ぞやの絶望アーシアさん。
方方に献身を繰り返して人々を救ってきた聖女と言っても過言ではない彼女は、神の死を知り、神の愛が存在しないという事実に心を

折られた。
なんてことはない。
多くの献身や優しさの根底には、神が愛しているから、神が見ているから、何時か行いが報われるから、というバックボーンがあった。
無私、滅私の献身ではないのだ。
正直なところを言えば、あの場で神の死を知らされ絶望したアーシア先輩に、此方は少なくない失望を覚えていた。
有りもしないものを、見えず、感じられずとも有るのだと、心の底から信じられる心の強さ。
此方は、一般的に狂信者と言われる方々のそういう所には憧れてすら居た。
だが逆に、失望したが故に親しみを抱きもした。
自分が未だ成し得ていない強い心のあり方を体現する人格者ではなく、歳相応の少女であるという事実は、彼女を身近な人間として見せるには十分だった。
それに信仰を失い、何時か訪れる確実な報いが無いと知った少女の見せる優しさは、真実彼女の心根の優しさを証明する。
アーシア・アルジェントという少女は、神の死を知り、信仰を失い、それが故に真の慈しみを覚えるに至ったのだ。
まぁ、だからといってアーシア先輩と交流が生まれる訳ではないのだが。
だがそれでいい、それがいい。
彼女の慈しみは万人に向けられるものでは無くなった。
それこそ、彼女の中では明確なランク分けが無意識の内に行われているだろう。
それが、人間が本来持ちうる愛なのだ。彼女が悪魔と化していたとしてもそれは変わらない。
万人に向けられる愛。
常にあり続ける愛。
そんなものは無と変わらない。
人間が持つべきものではない。

……まぁ、元の教えからして、愛すべき汝の隣人という枠は酷く限定されたものではあった気がするのだが、そこは解釈次第というものだ。

ただ、言える事が一つある。

神は死んだ。万人に与えられる救いは無くなり、非業の運命に晒される人の何と多いことか。

だが、だからこそ、そこには人の本質が現れる。

善でも悪でも、ただ純粋に人の中から生まれた輝きが、今、この世界を照らしているのだ。

此方(俺)は、神には救われなかった。

此方(俺)を救ったのは、父さんに母さん、そして、それを支える多くの友人や仲間達。

人に救われた。

今、この世界最新の流行は人による人の救済だ。

神に縋るなんてもう古い。

フランダースの犬を見よ。

教会でなく女友達の家にでも行って土下座でもなんでもして一晩泊めて貰えば、それだけでネロは救われたのだ。

この宗教に馴染みの深い海外で作られた実写版映画ですら生存エンドを選んでいる。

そして、この世界に居るのは人だけではない。

声なき獣達だけでもない。

悪魔はどうだ。

堕天使はどうだ。

神の元に居た訳ではないだろう。

悪魔を救うのは？

堕天使を救うのは？

「神は死んだ。みんな生きていくのに必死だ。だから、そこで力を合わせて生きていこうと努力できるなら、それはとても素晴らしい事だ。愛がある。神の愛が無くても、此方には、愛がある。誰にも彼にも愛はある」

悪魔も堕天使も天使も妖怪も忍者も宇宙人も関係なく、愛は誰もが持つ。
仮に世界に未だ全能の神とやらが居たとして、それが全てを救い、正しき行いに正しき報いと救いを与えたとして、人と人はここまで愛で繋がれただろうか。
堕天使と人のハーフが居るという。
悪魔と人のハーフが居るという。
聖と魔の交じり合いは正常な世界ではありえないという。
世界に神の愛があれば、異なる者共が交じり合う愛も繋ぎ合う愛も無く、世界は正常に回っていたという。
なんと寒々しい、なんと理路整然として、なんとつまらない、なんと単調で浅はかな世界だろうか。
今の、この素晴らしい世界とは大違いだ。
だから、言える。
不用意に目を開ければ目を潰したくなるような、そんな形でしか世界を見れない此方ですら言える真理だ。
「神は死んだ。故に、世界は真に愛で包まれたのだ」
くるり、と、祭壇の前で振り返る。
そこに気配があった。
威圧するでなく、人を包み込むが如き寛容のオーラを纏う気配だ。
眩く輝く何かが舞い、瞼越しに光を目に叩きつけてくる。
輝く人。
土塊から作られた人でなく、火から作られた存在があった。
「……それもまた、信仰。貴方の中の信仰なのですね」
「ええ、これが、此方の信じる世界の理です。初めまして、もう死んだ誰かに似た者、剣と秤を持つ者、天使の王子、大天使ミカエルさん？」
にこり、と、テンプレートとして教科書に載せられるレベルの笑み。
自らの肉体を完全に制御下に置くのは忍者の必須スキル、最高で最適な表情を常に創りだすこの機能はあらゆる行動を補助する事ができる。
懐から手紙を、招待状を取り出す。

「今日はご招待いただき誠にありがとうございます。それで、ご用向きの方はこちらで？」

無人の教会内部を、ミカエルさんの先導で歩く。

木造の床板が僅かに上げる軋みは、人間換算で二人分か。

少なくとも実体はあるらしい。

気配を探っても、肉体と魂にズレがなく、どちらもミカエル本人のものである事がわかる。

……やっぱり、依代となる人間に憑依しなくとも下界での活動に支障はないらしい。

割とミーハー心から招待に応じたところもあるだけに、こういう些細な情報も面白く感じる。

辿り着いたのは小さな部屋、教会の関係者の詰所、事務所のような場所か。

事務机にストーブ、僅かに残り香の漂うコーヒーメーカーに小さな冷蔵庫と生活感丸出し。

神聖さの欠片もない場所だが、ここは何らかの神聖な力で隔離されているようだ。

人の気配が無いのは早朝だから人が居ないというだけでなく、この力によるところもあるのだろう。

「どうぞ」

ソファに座り、テーブルクロスの上に茶菓子が乗せられた小さなテーブルの上に、今回の話の種を置く。

窓から差し込む朝の日差しに照らされ輝く大天使の剣だ。

「では」

受け取り、しげしげと眺めるミカエルさん。

古物商の如き視線で短い剣を観察していたミカエルさんの気配は、徐々に真剣なものに変わっていく。

「なるほど、確かに、これは……」

「貴方のものでしょう？　覚えはないでしょうが」

「何処でこれを？」

「それは、秘密です」
指を立て、笑顔で追求を断ち切る。
此方が描いた、なんて言ったら、面倒な事になりそうだし。
……こうして最初から一線を引いた状態での交流を予め行っておく事で、相手側が一線を超えた時に畳んで片付ける正当性を得る事ができる、かもしれない。
だが、まぁ、一言二言付け加えておく位はいいか。
「その剣は貴方のものです。ですが、神は生きている間に貴方にそれを、あなた達大天使達にそれを渡さなかった。その意味は、考えておくのもいいかもしれませんけどね」
そもそも神様こんなもん持ってなかっただろうけど。
というか先日作ったばっかでそんな意味が含まれてるわけも無いけど。
「……その言葉、受け取っておきましょう」
す、と、ミカエルさんが大天使の剣をテーブルに置こうとしたのを手で制する。
「それは、貴方のものですよ」
「ですが……。いえ、そう、ですね」
そのままローブの中に大天使の剣を仕舞うミカエルさん。
追求されそうな物は先に相手に渡しておく方が干渉が少なくなって良い。
そして、あちらにとっては亡き神の忘れ形見の様な剣を譲り受けたという事で多少の貸しにできる。
面倒な繋がりに成り得るだろうが、今更だ。
「……しかし、こうなると何かお返しをしなければなりませんか」
思案するミカエルさんの声。
その声を聞きながら、極自然に、なんでもない風に瞼を開く。
「いえ、今は天界もそれほど余裕があるわけではないでしょう。お気持ちだけで十分ですよ。それでなければ、そうですね……」
僅かに視線を逸らしながら思案するふりをして、対面に座るごちゃっとした文字列の内容を確認する。

目の前に対象が居て、此方が読むという意志の元にその内容を視界に入れたなら、文量も文字の位置も余り関係ない。
視界に偶然収まった時とも、文字列の塊であると認識して眺める時とも違う。
この世界とは異なる時間法則を用いて、此方はその内容を数秒の内に完全に確認し終える事ができる。
肉体の、魂の組成、積み上げてきた歴史、習得した技術、思考形態、人格傾向、記憶、知識。
その全てが丸裸になり……。
「……そうですね、貸し一つ、と覚えておくか、そうでなければ情報か」
瞼を閉じる。
会話を分割した思考の一つに任せ、読了したミカエルさんの文章を解析していた幾つかの思考が落胆した。
あるか無いかで言えばどうせ無いだろうと思いつつ、心の何処かで多少の希望を持っていたのかもしれない。
全知全能の神に最も近い位置に居たと思しき大天使なら何か知っているかもしれないと思ったが、そう上手くは行かないようだ。
全知全能本神であれば何かわかったかもしれないが、今は死んでしまっている以上どうしようもない。
まぁ、ダメ元で確認しにきただけだから、そこまでダメージも無い。
「情報？」
「そう、情報。どこそこに凶悪犯罪組織がありますよ、とか、テロリストが襲撃してくる可能性がありますよ、とか、そんなんでいいです」
知りたかった情報は間違いなく天界には無い。
なら次に欲しい情報を貰えるようにしておくのも悪く無い。
「余り無益な殺生は推奨したくないのですが」
「殺すと決まった訳ではありません。見てから決めるから安心して下さい。まあ、返事は後々でも構いませんよ。ここで即答したら逆に天使っぽく無いですしね」
まぁ、メガテン的な天使程過激でないのは今読み終えて理解できたし、ここで天界に都合の悪い勢力を犯罪組織と偽って情報を流すとい

う事も無いだろう。
　というか、そうで無ければこの提案もしなかったし。
　場合によってはそういう選択ができるけど、損得を計算して此方には仕掛けてこないと見越しての提案なのだ。
「不躾ですが、返事をする前に、一つお聞かせ願えますか」
　顔を上げたミカエルさんの声色は真剣なもの。
「内容によりますが」
「何故、貴方は殺すのですか」
　ＺＥＮＭＯＮＤＯＵ的な問いだ。
　糾弾するでもなく詰問するでもなく、静かな声色のそれは純粋な疑問であるとわかる。
「貴方は殺しすぎる。人間にしては異常な戦闘力は良い、貴方は忍者だ。しかし動機がない。正義感で殺しているようにも、快楽を感じている訳でもないのでしょう」
「それは誤解です。此方にも多少の正義感はあるし、暴力に悦びがないと言えば嘘になる」
「ですがそれが全てではない。それで全てとするには、君の殺しは執拗過ぎる。もはや殺しでなく破壊と言ってもいい。何故貴方は壊すのですか」
　冷たくも強くもない。
　ただただ疑問に思っている。
　包容力すら感じる天使のオーラで隠し切れない、機械的な問いだ。
　世界を回すための歯車に刻まれた正しい機能の現れなのだろう。
　詰め込まれた方向性、積み重ねて形成した人格でも隠し切れない程の芯の部分。
　出したい面ではないのだろう。彼の人格はそういう面を望んでいない。
　だが出している。
　何故か。
　世界を回すためだ。
　何故だ。

そうあれかし、と願った誰かが居たのだ。
今は居なくともかつて居た誰かが彼に望んだから、この問いは発せられたのだ。
強制力ではない。彼が望まれた役目を果たしたいと思ったからだ。
ただ一つの大いなる愛だけが包んでいた世界を愛していた者が居て。
その遺志を忘れていないから、彼はその機能を真っ当しているのだ。
「ああ……そうですね、何故か、と、問われたのは、久しぶりですが」
嫌いではない。
彼が邪魔になる日も来るかもしれない、そう思いつつ、彼のその在り方が好ましくも思える。
だから、懺悔ではないが、教えておくのも悪く無いかもしれない。

少しだけ時間が過ぎ、昼の少し前。
心なしか気持ちが軽くなっているのは、普段誰に言うでもない事を誰かに言ったからだろうか。
別に秘密にしている訳でもないが、改めて聞かれる事もない様な事なのであまり話す機会が無かったのだ。
こうして考えると懺悔室というシステムは案外効果的なのかもしれないが、名称は悪いように思えてくる。
まず懺悔という言葉自体が重い。チラシの裏とか、ロバの耳と叫ぶ用のツボとか、そんな軽くて使いやすいネーミングに変える改革の時期が来ているのかもしれない。
「おーい！」
下らない事を考えながら家路に付いていると、駒王町に入って少しした辺りで覚えの有る声に呼び止められた。
オカ研の中では塔城さんの次、ゼノヴィアさんと並んで此方に対する警戒心が薄い兵藤先輩だ。
心なしか声が疲弊しているように思えるのは同棲している美少女二人と毎晩お楽しみだから……という訳ではないだろう。

先ほど見た記述の内容を鑑みるに、神社で聖剣を受け取った時に一悶着あったのかもしれない。

更に言えば、その神社の管理を任されている姫島先輩（姫神先輩だったかもしれない。どっちでもいいけど間違えると失礼なので後で塔城さんにメールで聞いてみよう）に迫られて、その場面をグレモリー先輩に見咎められて怒らせてしまったのかもしれない。

普通の人生送ってたところで堕天使に殺されて龍適正のある肉体に作り変えられて悪魔になってと波乱万丈な人生を送っておいて、彼は中々に真っ当な青春を送っていると思う。

「おはようございます、兵藤先輩。朝のトレーニング……という訳でも無さそうですね。何か事件でも？」

少し近所迷惑でないかと心配する程の声量でかけられた声の振動から考えて、今の彼はトレーニング用のジャージを装着していない。

意識を彼の走ってきた元の位置に向けてみれば、同じくジャージではない服装のグレモリー先輩が複雑な表情ゆっくりと此方に歩いてきている。

「いや、事件は……無いと言えば嘘になるけど、そっちは今は良いんだ。重要なことじゃない」

こいつ口から霧を……！

と、内心でボケてから、改めて考える。

兵藤先輩は以前に書き込んだ【読手書主という人間への警戒心が薄い】という追記のおかげで此方に対して気軽に接してくる。

が、それは警戒していないというだけであって、深い友好関係にあるという訳でもない。

悪魔関係の話もできると言えばできるが、彼の生活はそれだけで構成されている訳ではない。

親密度で言えば噂の三馬鹿だか三変態だかの他二人とか、言うまでもなくオカ研のメンバーの方が圧倒的に高い。

言ってしまえば知り合い以上友人以下、或いは友人未満程度の仲でしか無い。

街ですれ違えば挨拶くらいはするだろうが、遠くに見つけたからと

いって駆け寄り挨拶をする程ではないのだ。
「お前さ、魔眼の制御法とか知ってるか？」
「魔眼とな」
気になるワードだ。
力の宿った左腕とかに並び、実に厨二度の高いワードである。
言ってしまえば悪魔とか妖怪とかドラゴンよりも十四歳にとって魅力的なワードだろう。
正直な話、個人的にも忍者的にもドラゴンよりも魔眼や邪眼や浄眼の方が因縁深い。
「ちょっとイッセー、その子に話す気？」
ゆっくりと歩いて追いついてきたグレモリーさんの不機嫌そうな声に、兵藤先輩が慌てて反論した。
「いや部長、割と目がある話なんですよ。俺の神器も前から知ってましたし、木場のエクスカリバーだってこいつの上げたアイテムが原因でしょ？　小猫ちゃんに魔術を教えたのだってこいつなんだし、何か手がかりとか持ってるかも」
「だからって、安易に外部の人間に頼るのはやめなさい。あの子の人見知りは十分理解したでしょう」
「そこら辺も徐々に慣らしていくんだから丁度いいじゃないですか。なぁ、どうなんだ？　別に一発で制御できるようにとかそういう話じゃなくてさ、聞いたことがある修行法とかでもいいんだよ」
「無いなら無いって言って良いのよ。これは私達の問題だし、散々世話になった部外者のあなたに更に無理を言うのは不義理だしね」
なんだこいつらの息のあった不仲……たまげたなぁ。
こういうやつらがまだ結婚してないのが不思議でしょうがない。
はよ結婚しろ。あ、年齢的に無理なのか。
で、魔眼の制御法か。
実際、説明不足過ぎてどういうものなのかはわからない。
脳に原因がある『見えたものを認識する段階で発動する魔眼』と、眼球や視神経に原因がある『見るという行為だけで発動する魔眼』、更にこの世界特有の『神器の能力としての魔眼』の三つで大まかに分けら

れるとは思うのだが。
　思うのだが……、本人に制御を学ばせるのでないなら幾らでも対処法はある。
「確実ではないけど、視覚を起点にして発動する能力なら高確率で対処できる器具はありますよ。外付けの制御装置みたいなものだからノーリスクですし」
「マジでか!?」
「大マジです。今は手元に無いから、試すにしても明日以降になると思いますが」
　作るなら、家に帰って自室で作る方が気が休まる。
　唯でさえ縋った藁が本気で役に立たない藁で、見てわからないだけで少し落ち込んではいるのだ。
　帰って母さんの作った昼飯食べて、日影さんと一緒に午後の午睡を楽しんで心を癒やして、魔眼殺しを作るのはそれからになるだろう。
「……これまで、色々出鱈目をしてきた貴方を今更疑うのもあれだけど、本当にどうにかできるものなの？　その、少なくとも、一人はそれで駄目だった例があるんでしょう？」
　やや躊躇いがちに、此方の策に懐疑的であると告げるグレモリー先輩。
　なるほど、確かに。
　此方が用意するものの中で、『視覚に関する能力を制御するアーティファクト』なんて、信用出来ないにも程があるだろう。
　これまでに木場先輩に渡した鞘だの、塔城さんに教えた魔法だのが無ければもっと直接的に疑われていただろう事は想像に難くない。
「そうですね。大体の場合は対処できても、どうしたって例外はあります。でも、まぁ、その時は、話くらいは聞きます。人見知りに関しても対処はどうとでもなりますから」
「親切なのね。……一応言っておくけど、問題を抱えているのは、貴方の知らない相手よ？」
「そうですか。で、それが何か問題？」
「……いいえ。まぁ、期待はしておくわ。対価も、可能な限り用意す

る」
「そこまで気を使わなくても」
「メンツ、ってものがあるのよ。悪魔にもね」
じゃ、と、後ろ手に手を振り去っていくグレモリー先輩。
それに対し、此方に忙しなく別れの挨拶を済ませて付いて行く兵藤先輩。
「知らない相手、ね」
まぁ、知らない相手だろう。
少なくとも此方が見たオカ研の連中の中に制御出来ないレベルの魔眼を持つ悪魔は居なかった。
初対面ではある筈だ。
だが。
「知らないわけがあるか」
見知らぬ、会ったことがない相手だろう。
何かを通して話した事が有るわけでもないだろう。
だけど、知らない訳がないのだ。
その苦しみは知っている。
少なくとも、同類相憐れむ事ができる程度には。

三十話　魔眼とメガネと、時々女装

放課後、一人旧校舎へ続く道を歩く。
いつも通りの放課後、いつも通りの部活動の時間がやってきた。
最近はなんだかんだで部室に遊びに来る読手さんと一緒の時が多いけれど、彼が道同しないのなら、部で学校に通う唯一の一年である私の部室への移動風景はこんなもの。
頻度で言えばむしろこの少し寂しげな時間の方が多いかもしれない。
こうして歩いていて思うのだけど、彼は友人の数こそ少ない（私が言えた義理じゃあないけれど）が、友人に対しては割と口数が多い方だ。
なんでだろう、と考え、彼の母親の顔が浮かび、恋人の顔が浮かんだ。
理屈っぽい母親に、無口でマイペースな恋人。
なるほど、考えてみれば口数は自然と多くなりそうだ。遺伝的にも環境的にも。
そんな事も考えながら新校舎から出て、雑草の生えた土の地面を歩き、怪しげな雰囲気を発しつつも新築同然の綺麗さを保つ旧校舎に入る。
夏のじっとりとした暑さも相まって、旧校舎の薄暗い雰囲気は往年の怪談映画を思い出させる。
まぁ、私だって元を正せば怪談で語られる方なのだけど。
実際、旧校舎の一室を根城にする悪魔の一団なんて、怪談を通り越して有りがちな現代バトルファンタジーに出てきそうではある。
中途半端に家電やシャワーで近代化してあるところもそれっぽい。
だけど、あえて現状一番近代化っぽさというか、有りがちな要素を抜き出すとしたら、やはり冷蔵庫を推させて貰いたい。
冷蔵庫それ自体は、応用次第で普通にホラー演出にだって使える代物だ。
でも、その冷蔵庫の中にホラー要素を遥か彼方に置き去りにした普

通の中身を詰め込む事で解りやすく俗っぽさを演出できる。
そう、例えばこの間スーパーで買った保存料バリバリのスイーツとか。
今日の部活はこのスイーツを食べてから始めたいなと思う。
どうせ、近々行われる会合を警戒していつも通りの悪魔活動なんてできやしない。
ここは半ばプライベートに入っているものと考えて、よりリラックスしたオカ研タイムを楽しむのがベスト。
「お疲れ様、で、す……？」
静かにオカ研の入り口を開け、視界に飛び込んだ映像を理解しきれず、思考が鈍化する。
深呼吸。
視界の端に映るその他諸々を除外することで乱れた思考を整頓。
もう一度、目の前の光景を頭の中で咀嚼する。
金髪ショートの女の子にしか見えない男子――ギャーくんの顎を、真剣な表情の読手さんが掴んで、上を向かせて、顔を覗き込んでいる。
心なしかギャーくんの頬が紅く染まっていて、真剣な表情で顔を覗き込んでいる読手さんに向けられた視線は何処か期待を孕み、薄っすらと潤んでいた。
「どう、ですか」
ギャーくんの不安げな声。
どうって、何が。
「安心して。それほど難しいことじゃない」
難易度（意味深）とは。
リードするから、みたいな……？
いや、考えている場合じゃない。
状況はよくわからないけど、たぶんいろいろなものの危険が危い（あぶい）……！
「そこまでです。グッドルッキングなニンジャと吸血鬼の顔が近いなんて、世が許しても日影さんが許しませんよ……！」
たぶん許さないと思う。

許さないでいて欲しいなぁと思う。
……でもニンジャだし、任務の為に同性同士の耐性とかもつけてる可能性も……。
「……許しませんよね？」
「聞いちゃったよこの子……」
「むしろ誰に聞いてるのかしら」
「当事者に聞いてるとしたら、かなりシュールな状態ですね」
たぶん視界の端で意識の外に弾かれていたイッセー先輩と部長と祐斗先輩が何か言っている。
でもリアクションはできない。
何故って、今この時点でいっぱいいっぱいだからだ。内容は後で思い返して吟味しておこうと思う。
「そうですね……。たぶん、日影さんならそれくらい許してくれますよ」
「そんにゃぁ……」
少し予想しつつも外れて欲しかった答えを聞き、膝から崩折れる。
望みが絶たれた。
女じゃなくて男なら浮気じゃない的な抜け道的思考なのだろうか。
しかも日影さん相手じゃなくて読手さん相手だから、
《ギャーくん↓日影さん↑読手さん》
ではなく、
《ギャーくん↑読手さん》
《読手さん↑ギャーくん》
《日影さん↑読手さん↑ギャーくん》
みたいな背徳感溢れる組み合わせになってしまうのか。
それはあんまりじゃないかと思う。
と、ここで、既に瞼を閉じた読手さんがギャーくんの顎から手を離して距離を取っている事に気が付く。
読手さんも別に邪魔されたから手を離したとかそういうのではなく、もう用事は終わったとばかりの態度だ。
……一方のギャーくんの顔が何処か不安と期待に満ちている辺り、

未だ怪しくはあるのだけど。
「……で、どういう状況なんですか、これ」
誰でもいいから説明して欲しい。
そう思っていると、ほぼ毎日見ている筈なのになぜだか記憶から薄れ気味の副部長がここぞとばかりに前に出て説明を始めてくれた。
妙に長く身振り手振りの加えられた画面的に動きのある副部長の説明を要約するとつまり、ギャーくんの暴走気味の神器を、読手さんの持つ手段で制御できるかどうかを、実物と本人を見て確認していたらしい。
はっきり言って猥褻は一切ない。
顔が近いからって猥褻な考えを浮かべる輩も居るらしいけど、とんでもない話だ。
「信じてました」
胸元でぐっと拳を握って断言。
無償で困っている悪魔を助けようと態々急いで部室に駆けつける読手さんはニンジャの鑑。
さすよみです。マジリスペクト。
「本当に信じていた人は態々『信じてた』なんて言葉にする事は無いんですよねぇ……」
何故か読手さんが瞼を閉じたままジト目っぽい表情をしているけれど、視線が無いからきっと気のせいですね。
それにほら、私は妖怪から悪魔になったので普通の人とは違うので、そういうこともありうるのです。
いやでも、なんというか、凄く安心した。
……いや、変な意味ではなくて、そういう事があったら恋人の日影さんが可哀想だなーっていう話ですよ?
「はいはい、コントはそこまでにしておいてね。……それで、どう?」
「……そうですね、最初に立てた努力目標は直ぐにクリアできる、ってくらいですか」
「努力目標?」
「暴走を防ぐ、というか、発動を防ぐとこまでですかね。できれば完全

制御まで持って行きたかったんですが……そこまで行くと、一種の人体改造になっちゃいますから」

逆に、制御不可能で部屋ごと封印しておくしかなかったギャーくんの神器の発動を肉体に手を入れれば制御可能にできるって言ってますよね。

十分凄いじゃないですか、と、言おうとして言葉を止める。

軽めの口調に対して、読手さんの表情は少しだけ暗く重い。

読手さんは鞄から三つの包みを取り出した。

「これと、これが、魔眼殺しの眼鏡。こっちは魔眼殺しのコンタクトレンズ。どっちも付けてる間は余程意識を集中しない限りはその眼の神器は発動できない」

「……つまり、神器を封じれる程の力があるのよね」

「元は歴史のあるアーティファクトらしいですよ。まぁ、此方が持っているのは加工後のこれらだけですから元の素材に関しては詳しくないですが」

「十分よ。対価は……どうする？　小猫が欲しいなら、交渉くらいはさせてあげるけど」

「んぐっ」

シリアスな場面での部長のいきなりの言葉に、口の中の唾と空気が逆流してむせた。

何言ってるんですかこの純情ロマンチカは。

「必要だと思ったら、契約無しでお話しますよ」

「それもそうね」

「ごっふぉっ！」

呼吸を整えていたら更に別方向から不意打ちを食らい咳き込んでしまった。

何、何ですか、部長と読手さんで示し合わせて私をはめてるんですか。

隙を生じぬ二段構えの口撃によってすっかり呼吸を狂わされた私がどうにか息を整えようとしていると、ギャーくんが読手さんに近付いて、部長とのやりとりで少し明るさを取り戻した読手さんを見上げ

て口を開いた。
「あ、あの、ありがとうございます！　これで、安心して外に出られるんですよね！」
「まぁ、そうは言っても兵藤先輩が協力してくれてる時点で、外に出られる日は近かったしね。此方のしたことはちょっとしたお節介だから」
「でも！　本当に、嬉しいんです。これで、練習の時に迷惑をかけることもなくなるし、その、書主さんがくれたものだから……」
後半のセリフをもにょもにょと口の中で濁らせながら、頬を染めるギャーくん。
ん？　あれ？
「大したものじゃない、とは言わないけど、それでギャスパーの悩みが軽くなるなら安いもんだよ」
言いながら、ギャーくんの金糸の髪を優しげな手つきで撫で付ける読手さん。
ん、んん？
なんだろう、なんだか、なんだか、こう。
いいんですか日影さん。この場面を見てるかどうかはわからないけど日影さん！
「に、似合いますか？」
「うん、ちょっと知的に見えていいと思う」
「え、えへ、えへへ……」
嬉しそうに、だらしない笑顔を浮かべるギャーくん。
決して猥褻も無い筈の光景に、私は何故か焦燥に駆られて仕方がないのでした……。

善行を積んだ後は気持ちがいい。
特に、似たような悩みを持ち、それでいてどこかに八つ当たりするでもなく内罰的に閉じこもっていた子を助ける事ができた。
なんとも心地の良い話ではないか。
かの赤法師は無事に治った患者を見て『何故自分だけ治らないの

か』と憤りを感じていたようではあるが、やはり、共感できる相手の幸福を喜べないのは嘘だろう。

自分が上手く行かなくて、自分以外の誰かが上手く行って。

それで、その誰かの成功を素直に祝福してあげられるなら、それはとても良い生き方だと思うのだ。

「とりあえず、この件は一先ずは解決という事で」

「そうね、試してみた感じじゃあ、外部から神器に対して直接強い干渉が行われない限りは問題ないみたいだし……」

と、考えこむ様に黙りこむグレモリー先輩。

が、どうせ碌な事を考えている訳でもないだろうからこれは放置でいい。

「それじゃあ、使う方の制御に関しては引き続き兵藤先輩が行って下さいね」

「え、いや、でも、いいのか？　魔眼とかに詳しいお前がやった方が」

「そりゃ、此方も手伝ってあげたいって気持ちはありますけどね。生憎と、此方が知る限りの地道な制御訓練だと、兵藤先輩が行ってる訓練とさして変わらないんですよ。それなら、眷属仲間としての絆を深める意味でも先輩がやった方がいいでしょう？」

実際問題、あの魔眼殺しの眼鏡（おしゃれバージョンと地味太フレームバージョン）とコンタクトを渡した時点で、此方の善意の範囲内で出来る協力は完了してしまっている。

神器の名前を事前に聞いておいたお陰で機能を限定した制御技術習熟速度上昇になりそうな記述はかなりの確率で正常に稼働する筈だ。

最初こそ、任意での発動にこれまでの何倍も気力が必要になるかもしれないが、そこを乗り越えれば後は完全制御までは時間の問題と言っても良い。

追加した記述はあの神器を持ったギャスパー相手に限定しているから、あの魔眼殺しが習熟速度を上げた原因であると特定する事は理屈の上では不可能の筈だ。

追求されてもしらを切り通せる。

「……読手君、やっぱり、一度話を通すべきだと思うわ」
「はい？」
案の定、どうしようもない事を考えていたらしいグレモリー先輩が真剣な声色で話を切り出してきた。
「この間の聖剣もそうだけど、それに加えて制御不能だった神器をほぼ完全に封じる事が出来るアーティファクト……。そうでなくても、コカビエルを殺害した人間だなんて、あらゆる勢力からちょっかいを出される可能性があるわ」
「はぁ、まぁ、言いたいことはわかりますがね」
気のない返事をしてはいるが、少なくともこの時点でグレモリー先輩の内心には打算を大きく上回る純粋な此方の身を案じる気持ちがあること位は解る。
普通に考えて、このトラブル続きの駒王学園での学生生活数ヶ月で起きた諸々の出来事は、何処かの組織に捕捉されてしまえば目をつけられること請け合いだ。
……ここで、『貴方方が此方の存在に関して完璧に口を噤んでいてくれればこうはなりませんでしたよね』と言うのは意味が無い。
教会で堕天使とはぐれエクソシストを使って気分よく遊んだ時も特に口止めをしなかったのは此方も同じだ。
だが、考えて欲しい。
「……此方、この『力』……と言って良いのか、『これ』と付き合ってもう十数年になる訳ですが。例えば、はぐれ悪魔を相手にし始めたのは数年前からでして」
「そうね、これまで正確に捕捉できなかったのは、流石の隠蔽能力だと思うわ。でも、ここ最近のは規模が違う」
瞼の下の目を指さしながらの此方の言葉に首を振る先輩。
まぁ、解る。
野良の悪魔を殺すのと、たとえ救いようのない逆噴射式期待外れ羽虫であったとしても、組織の中では割と偉い立場に居たらしい馬鹿を殺したとなれば話は違ってくる。
が、グレモリー先輩は一つ思い違いをしている。

此方が、習得した忍術や魔術だけで殺害の痕跡や足跡を消し続けていたと思っているのであれば、それは買いかぶりだ。
派手にやり過ぎた場合、此方の処理能力を超える場合もある。
まして、この世に産まれ堕ちて十数年、親に様々な迷惑をかけつつもしっかりと話し合いを重ねてきた此方なのだ。
一体何故、此方の後ろに何らかの組織的バックアップが無いと思えるのだろう。
もしかして、社交性が無くて反社会的な行動しかできない輩だとでも思われているのだろうか。
だとすれば悲しい。
此方も、苦手なりに友人を作る努力は日々怠っていないのだ。
もうこの部室の中でメアドを交換していないのはグレモリー先輩と姫島先輩だけだというのに、何故この不器用なりに社交性を得ようとする努力が理解されないのか。
「んー、そういう事でもない、んですが……」
が、残念な事に此方もその組織に表立って力を貸してもらっている訳ではないのだ。
その組織にも表向きの世界での立場というものがあり、此方の持ち込む裏側の問題を処理できるという事実を迂闊に外に漏らす訳にもいかない。
あくまでも、親の……父のツテを頼って力を貸してもらっているだけで、まだ正式に卒業後の就職先として決っている訳でもない。
そして何より、此方にはスネオの如き親の七光りを自慢する時用のＢＧＭが存在しない……。
バックアップしてくれる組織があるから大丈夫、と、この場で公言するわけにはいかないのが現状という事になる。
「別に、眷属になれとも悪魔に与しろとも言わない。でも、これからもある程度平穏に生きて行こうと思うなら、何処かでハッキリと貴方の立場を表明しておくべきだわ。これは、あくまでも小猫の保護者として、小猫の友人の身を案じての話だと思って頂戴」
「部長……」

塔城さんが僅かに感嘆の声を上げた。
普段はグレ森先輩に対して、自分の尻尾を追いかけてぐるぐる回り続けるコーギーを見るような感情ばかり向けている塔城さんが感激して思わず尊敬の感情を向けてしまう程度には、今のグレモリー先輩の発言は真っ当なものだ。
さて、では、此方はどう返すか、と、そんな思考を遮る様に肩を叩かれた。
「もしも、君に不都合になりそうな話の流れになったら、僕達もできうる限りのフォローはするつもりだよ。……君には、随分と助けられたからね」
肩を叩いてきたのは木場先輩だった。
少し意外だと思う。鞘のお陰でパワーアップはしただろうけど、そこまで此方に肩入れするような出来事だったろうか。
「俺も！　……って言っても、そういう場で俺に発言権とかあるかわからないけど、出来る限りの事はする。何だかんだで、結構な付き合いになるしな」
「言うほど長く無いと思うんですが」
「長さだけで言えばグレモリー眷属の仲間と同じくらいだぜ？」
木場先輩の言葉にのっかる形で、兵藤先輩まで何か言い出してくるし。
次いで、眼鏡とコンタクトの入った包みを抱えたギャスパーがうんうんと力強く頷いている。
今日始めて会ったのにこの子も嫌に此方に肯定的だな、此方にはそうする理由もあるが、なんだろうこの子の妙な信頼は。
「読手さん」
部室の中に流れ始めて妙な空気に辟易していると、塔城さんがこちらの名前を呼んだ。
真剣そうな、と言うには少し足りない、いつも通り、静かで感情が解り難い気がする抑え気味の声。
「部長はああ言ってますけど、嫌なら嫌で、いいと思います。それで立場が悪くなっても……、私は、読手さんの友達ですから」

「う、ん」
……。
うっわぁ……何、この状況と空気と会話の流れ。
かゆい、背中がと言わず全身が超絶痒いんですけど。
夕飯に遅れるから後日改めて返事しますね、とか言って帰ったら、もう完全に此方が悪者というか、空気の読めないお馬鹿みたいな流れ、本当に止めて欲しい。
いや、そういう風に思われてる事が嬉しくないとは言わないけれども。
「慕われてますわね」
「ありがたい話ではありますけどね」
ありがた迷惑という言葉があるから、少なくともありがたいという部分は間違いない。
「それで、どうするの？」
ああ、クソ、見れないけどグレ森先輩がどういう顔しているか凄く簡単に想像できる。
ドヤァ……って感じの表情で此方に返答を促しているだろう先輩に、内心で頭からかけてみそつけてみそをぶちまけていると、懐からメールの短い着信音。
失礼、と、一度その他全員に手を翳し、メールの内容を確認。
送り主は……。

「……」
どことなくうんざりとした表情で応対していた読手さんの表情が、メールの文面を目で追う内に、真顔に、そして顰めっ面に変化していく。
「……今度の休みの日、偉い方々が集まる会合があるんですよね」
「ええ、どうせ貴方にも話は行ってるでしょうけど……って、まさか」
何かに気付き、驚愕の表情を浮かべる部長に、読手さんは苦虫を五十匹ほどまとめて噛み潰したような表情で頷く。

「はい、……出ます、その会合。そこでついでにナシ付けさせて貰います」
「……熱でもあるのか？　保健室に小猫ちゃんと一緒に行くか？　同衾するか？」
イッセー先輩ドサクサで何を言ってるんですか恥骨蹴り砕きますよ。
「ここにこの間保健室から借りてきた体温計があるよ。まずは熱を測らなきゃ」
それ私が入学した頃から既に部室に置いてあったんですけど何時返すんですか祐斗先輩。
「小猫ちゃん、ここに何故か長ネギがあるわ。これを読手君に」
副部長、ここぞとばかりに前に出るとかひな壇の若手芸人みたいなはしたない真似は止めて下さい。
そのネギ絶対こういうタイミング待って用意してたでしょう。
しかし、みんなのリアクションも尤もだ。
この話題、悪魔や堕天使、天使の三すくみに、その他様々な神話勢力に対する読手さんの在り方。
それは、最初にその話題で地雷を踏み抜いた事もあって、今まで誰もが意識的に避けてきた話になる。
そこに、仕方がないとはいえ改めて触れた部長。
そしてそれに、渋々ながらも答えた読手さん。
どちらも予想外、この状況を、私は一切想定していない。
想定はしていないけれど、読手さんが無理をしているのではないか、と、想像する事は十分にできた。
「無理なら無理って、断った方がいいですよ。逃げるのも手です」
まぁ、断っても追求がなくなる訳でもないけれど、最悪、姿を暗ます事くらいはできるんじゃないかと思う。
ニンジャスキルを親から仕込まれたにしても、その親が所属している組織的な……、ニンジャの里とか、忍者の里とか、こう、他にはその……そう、色んな忍者系の組織は存在している筈なんだし。
あそこまで嫌悪する悪魔とか神話関係のいざこざに組み込まれる

くらいなら、そういう道を取るのもありじゃないかな、と、そう思う。
……それで、読手さんに会えなくなるのは、少し寂しいけれど。
「確かに、巻き込まれるのは嫌です。でもそれ以前に、厄介事が来るからって、此方が逃げて場所を譲るのはもっと嫌です。……立ち塞がる物は蹂躙制圧、舗装して平らで平和な道を楽しく歩くのが、此方の忍道……！」
「それ忍者って言っていいのかしら……」
「舗装工事重機系忍者という新たな可能性……、やはり君は私と相性が良い気がするな！　どうだ、セックスしないか？」
「ゼノヴィアさんは後で気分が落ち着く系のお薬出すからちょっと黙ってて下さいね。……まぁ、色々言われましたけど、今回はそれほど無理して受けるわけじゃないですから、安心して下さい。此方にも利がある話ですから、そのついでです」
「利のある話、ですか？」
アーシア先輩の首を傾げながらの疑問に、
「貴方方にとっても、実のある時間になるのでしょうが……。まぁ、当日を待ちましょう。何、嫌な時間を乗り越えてしまえば、後は楽しい楽しいパーティー・タイムです」
読手さんはニッコリと笑顔を浮かべ、意味深な事を言うのであった。

三十一話　祭りの前、会議にて

部室に集まったオカ研のメンバーは、みな一様に緊張した面持ちで居た。

時計を見詰めるひとも居れば、窓の外を眺めるひとも、瞼を閉じて静かに佇んでいるひとも居る。

瞼を閉じていたひと――悪魔である部長がちらと時計を確認し、部室の中のみなを見回す。

それに合図にした様に、何かをして次巻を潰していた全ての面々が立ち上がる。

そんなみんなを眺めていた私もその一人、ゆっくりと立ち上がり、部室の外に向けて歩き出す。

『部長！　みなさぁぁん！』

部室の中に居ながら唯一私の視界に入っていなかった一人、ギャー君のくぐもった声が温州みかんのダンボールから響く。

不安そうな鳴き声――もとい泣き声に、部長が優しく諭す様に声をかけた。

「ギャスパー、今日の会議は大事なものだから、時間停止の神器を使いこなせていない貴方は参加できないのよ」

『は、はいぃぃ！　わ、わかってはいるんですけどぉぉぉ……』

たとえ、魔眼殺しなるアーティファクトで神器の発動を抑えられているとしても、現状のギャーくんが神器を使いこなせていないという事実に未だ変わりはない。

魔眼殺しのメガネなりコンタクトを外してしまえば、現状の何時どれだけ暴走するかわからないギャーくんの神器はあっさりと解き放たれてしまうのだ。

封印用の器具をつけっぱなしなのは息が詰まるだろうという読手さんの気遣いが裏目に出たというべきか、こういう面倒な行事に参加する必要がないのは少し羨ましいと言うべきか。

もしかしたら、読手さんはそういう場面に出ずに住む事も計算に入れてあの魔眼殺しをチョイスしたのかもしれないなどと考えつつ、

ギャー君とイッセー先輩のやり取りなどを眺め続ける。
……今日は、上手く行っても行かなくても、きっと冥界にとって、悪魔にとって記念すべき日になる。
それはたぶん、堕天使や天使にとっても同じこと。
長い長い闘争の歴史の中で、たぶん始めてだろうと思われる、完全な和平に関する会議だ。
勿論、誰も彼もが成功を信じている訳でもない。
周囲を偵察してきた祐斗先輩の話では、この会議場である駒王学園を取り巻く結界の外側では悪魔や堕天使、天使の軍勢が十重二十重に取り囲んで、何処の神話の最終戦争かと言いたくなるような光景を作り出しているらしい。
失敗した場合を誰もが考え想定している。
そのうち、どれだけの人数が本当に和平を望んでいるのだろうか。
旧校舎を出て、新校舎に入り、会議場である職員会議室へとたどり着く。
明日は休日、時刻は深夜とあって人気は無く、この中には『ほぼ』人外しか居ない。
……ほぼ、の、唯一の例外がどういう振る舞いをしているかを想像すると冷や汗が背中に浮かぶのは何故だろう。
巫山戯ていたら巫山戯ていたで冷や汗が出るし、真面目なら真面目でそれはそれで嫌な予感しかしない。
それでいて、たぶん、この場に居ない、という状態が一番まずい。
が、この場に居ない、という事はまず間違いなく無いのでその心配は無い。
なにしろ、私達の様な関係者からしても進んで出たいとは思えない三陣営のトップ会談なんて面倒な代物に、この学校の中でそういうモノに一番出たくないと考えていそうな読手さんが『出る』と宣言したのだ。
何かしら、出たくないという考えを一先ず置いておける程の何かがあるのだろう。
だから、出ているという前提で考えて、一番害のない状態というの

は、……どういう状態なんだろう。
巫山戯てなくて、それでいてシリアスになり過ぎない。
……悪魔や堕天使や天使のトップ会談の場で要求するのは無茶ぶりかもしれないけれど、普段通りの、授業中のような自然体で居てくれると、丁度いいのかもしれない。
そんな益体もない思考を、コンコンというドアをノックする軽やかな音で中断する。
「失礼します」
部長が声をかけ、ドアを空ける。
……声をかけて、中から返事が返って来てからドアを空けるべきじゃないかな。
こういう凡ミスが出る辺り、実は部長も内心緊張でガチガチなのか。
味のないドリアを食べた記憶と共に思い出せる堕天使と悪魔のトップの人格からして、そこまで細かいところにツッコミを入れてこないだろうけど、緊張で身が強張る。
部長が開けたドアの向こう、職員会議室の中は、明らかに普段とは異なる雰囲気を醸し出していた。
私自身、この部屋を何度も見た覚えはないけれど、明らかに学校には有るはずもない、学校独特の簡素な作りの部屋そのものに不釣合いなまでに高級感溢れるテーブルと椅子。
部屋の中から香ってくる芳しい紅茶の匂いは、それほど紅茶の銘柄とかに詳しくない私でも、部室で普段使われているそれなりに値の張る紅茶と比べてもなお天と地ほどに開きがあるんじゃないかと思える程の高貴な香り。
文字通り空気が違う。
高級感溢れ過ぎて絶対に触りたくないテーブルを取り囲む様に座っているのは、悪魔、堕天使、天使。
聖書にまつわる三陣営のトップが自然体で座しており、それぞれにお付きの方が付いている。
悪魔のトップである、サーゼクス様にレヴィアタン様。その付き

人、いや、給仕係としてメイドであり最強のクイーンであるグレイフィア様。
天使のトップである、黄金の羽を背負った大天使ミカエル。その付き人らしい普通に白い翼の天使。
堕天使のトップである、黒い十二枚の羽を背負ったアザゼル。そして、付き人というには豪勢過ぎる、白龍皇ヴァーリ。
見事に三大勢力トップ揃い踏み。
場違い感が危険域だ。
しかしイメージに反して、会議室の中の空気は険悪なムードではないようで、トップ三人含むヤバイ感じの方々が自然体で出すプレッシャーというか存在感が重すぎる点を除けば穏やかな雰囲気にすら見える。
まぁ、私のような弱小からすると、その自然体で発するプレッシャーで食べてきた夕ごはんの現状を確認するはめになりそうなレベルで胃がヤバイんですが。
「私の妹と、その眷属たちだ。先日のコカビエルの件で活躍してくれた」
「報告は受けています。改めてお礼を申し上げます」
魔王様の紹介とミカエルからの礼に対し、部長は努めて冷静な態度で優雅に会釈を返した。
こういう場面での振る舞いは本当に凄いと思う、素直に尊敬に値する。
きっと普段色々な面でこう、アレなのも、こういう場面での振る舞い方にリソースを振っている代償なんだろう。
私にはとてもできない。
「ウチのコカビエルが迷惑かけたな。じゃあ、ゲストも全員揃ったし、そろそろ始めたいんだが……」
ちらり、と、アザゼルが視線を会議室の端に向ける。
釣られて視線を向ける。
「……」
会議室の隅に置かれたソファの上に、一人の男が静かに横たわって

いた。
男、というか、読手さんだった。
「ＺＺＺ……」
寝ていた。
ガチ寝だった。
狸寝入りなんて言い訳が通用しないレベルで、この空間がどうなっているかなんて、欠片も関係ないとでも言いたげな眠りっぷりだった。
アイマスクを付けているなんてレベルじゃあ無かった。
枕と毛布を持ち込んで、それはもう威風堂々とした寝入りっぷりだった。
「……むにゃむにゃ……大丈夫ですよ塔城さん……これから膨らみますって……なんならこの秘薬を……塗るなり、注射するなりＺＺＺ」
私は目の前が真っ暗になった。
――――――――――――――――――――
ゆさゆさと身体を揺すられる感覚。
「読手様、読手様。時間ですのでお目覚め下さい」
折り目正し良い口調の目覚ましに、意識を覚醒させ――
「ん……おはようござい……ました」
――そのまま起き上がらずに意識を眠りの中に没入させる。
五感の幾つかを閉じ、未だ起こそうと声を掛けてくるメイドさんの干渉に無視を決め込む。
此方は嘘が嫌いだ。
勿論、自分で嘘を吐く場合もあるし、知性有る存在のコミュニケーションに嘘はつきものだと理解しているけれども、自分が嘘を吐かれる側になるのは嫌だ。
そもそも此方は忍者として一定の技能を保持していると幾つかの忍者系の機関から認定を受けている。
当然、此方に敵対する存在が周囲に居るのであれば眠気など一瞬にして掻き消えて戦闘態勢に入れる。

が、この身体は未だ眠りから覚めるのを良しとしていない。
つまり逆説的にこの場には外敵が存在せず、今日この場に来た最大の理由である一大イベントは始まっていないという事になる。
つまり、このメイドさんは嘘を吐いて此方を起こし何かしらの用事を言いつけようとしていると見て間違いない。
それに屈服するのはなんかこう、ポリシーとかそんな感じのアレが許さない気がする。
どういうポリシーかは知らない。
「……てください。……さん、起きて……えい」
ゴヅ、と、鈍い衝撃が半ば閉じていた触覚に頭部への打撃を伝えてくる。
まるでそう、腰の入った妖怪変化の振り下ろし気味の拳の様な、非ニンジャの一般人の肉体だったらそのまま首が外れていたのではないか。
衝撃が来る前の声も聴き馴染んできた友人の声のようで。
少なくとも、こんな偉い連中しか居ない場所で前に出て此方を起こすだなんて、割と社会的な立場の違いとかを大事にしているっぽい普段の彼女には出来ない筈。
となれば、何かしら、出来ないことをしなければならない事態なのだろう。
「んむ……おはようございます塔城さん……」
「おはやく無いです……！」
眠っているアピールのためのアイマスクを外し、周囲の状況を確認する。
無駄に高級な机と椅子の運び込まれた職員会議室に、魔王さん、アザゼルさん、ミカエルさん、コスプレイヤー、それぞれのお付。
あと、部下が一人死ぬ度に気力が１０上がるレベルで怒る生徒会の会長さん。
ここまではさっき眠る前と同じ。
で、新たにオカ研の連中が入ってきて壁際で立って待機している。
椅子くらい用意してやればいいのに、と思うが、基本的に体育会系

なのかもしれない。
「あ、もしかして会議は無事に終わっちゃいました？」
「まだ何も始まってねぇよ」
アザゼルさんの何故か呆れの混じった言葉に落胆する。
「えぇー？　じゃあなんで起こしたんですか」
「お前の話も聞かねぇとなんねえだろ」
「こないだ話したじゃないですか、ご飯食べながら。ミカエルさんにもメールで大体同じ説明しましたよ？」
「……こういうのは、形式ってのも大事なんだよ」
「はぁ、左様で」
瞼を開けずとも声だけでなんだか頭痛を堪えている様子が伝わってくるような声の調子だけと体調でも悪いのだろうか。
「まぁ、そうは言ってもそれほど格式張った話ではないから安心してくれ。グレイフィア、彼にも茶を」
「どうぞ」
「ああ、これはどうも」
茶の入ったカップを受け取り、香りを楽しんだ後、啜る。
作法の類は知らないので仕方がない。
実際、こういう高尚な趣味の持ち主は知り合いには殆ど居ないのだ。
だがそれでも、このお茶が茶葉が高いだけのブルジョワティーでなく、確かな技術を持って淹れられたお茶である事はわかる。
流石魔王付きのメイドさんの入れるお茶は違う。
「それでは、改めて話を始めようじゃないか」
魔王さんがドヤァ……という雰囲気をふんだんに練り込んだ真面目な声で会議の開始を宣言した。
それから暫く茶を飲みながら会議の内容を聞いてみたものの、結局は事実確認とこれからの関係性などの照らし合せのような、特に面白みもない事務的な話だった。
やることもなく暇なので塔城さんにもお茶を勧めようかと思ったけれど、塔城さんは此方がアザゼルさんと話ている間にオカ研の列に

戻ってしまっている。
暇だ。
さりとて宿題などを内職する程に時間がかかるとも思えないこの微妙な時間。
本当に何故此方は起されてしまったのか。
「読手さん」
「はい？」
つまらない会議を聞き流しながら襲撃待ちをしていると、ミカエルさんが此方の名を呼んだ。
「神の死についてはご存知ですね？」
「ええ、一応は」
それもメールで話さなかったっけ？
で、ミカエルさんは神の死に関しては重々しい追悼と哀しみの感情を込めた文章に泣き顔の顔文字を付けて説明してくれていた。
本当に今さらじゃないかなぁ、と思う。
というか、別に死んだのは主にお前らの神であって、日本人に馴染み深い八百万の神とか、その他神話の神は大体生きてるんだから、此方にとってはガチで関係ない。
母さん辺りは元はエジプトの方の人らしいので此方も聖書系の神とは然程関係無いし、父親に至っては……こう、神に縋る人間を嘲笑いそうだ。
「で、信じてる神が死んだー、なんて情報広めたら色々ヤバイって事で、今は大天使とか繋げたりして神の祝福とかを代行してるんですよね？　そして、もう神も魔王も死んでるのに何戦ってんの俺らー、みたいな感じで休戦、と」
「まぁぶっちゃけるとそうなるな」
「ちょっとぶっちゃけ過ぎじゃないかなー……」
「人間からしてみればその程度の話という事だろう」
アザゼルさんが頷く。
他のレイヤーさんとか魔王さんとかは色々と言っているけど、それらは人間である此方には一切関わりのない話だ。

「嘆かわしくはありますが、それが今の人間という事でしょう。勿論、今も信心深く信仰を捧げてくれる者達は居ますが」
「勿論、祈りも虚しく信仰が届かずに救われる事無く死ぬ人らも居ますが」
「痛ましい話ではありますが、神の残したシステムを我等熾天使のみで運用する以上、どうしても穴はできてしまうのです」
テロの人待ちの時間つぶしと割り切り会話を楽しむつもりで茶々を入れるも、ミカエルさんは沈痛な声色で項垂れてしまった。
神の残したシステムにも穴があるんだよな……別に嫌らしい意味ではないが。
それはともかく、此方の茶々に即答した辺り、この辺の話を突っ込まれる事は想定して返事を用意していたらしい。
この段取り力、メールで見たテロ屋の襲撃もかなり説得力が出てきた感じがする。
「あ、知ってると思いますけどその穴に落ちた人がそこに二、三人ほど」
伝えると、ミカエルさんは穴に落ちたっぽい三人に頭を下げ、何故落ちたかの説明をしてくれた。
要約すると、多くの信者の信仰が揺らぐと駄目、神の死を知っている人間が本部（具体的にどこ?）に近付いても駄目、との事らしい。
穴だらけだ。これはもう、何Ｐできるかわからないレベルで穴だらけである。
おっと、いけないいけない。ゼノヴィア先輩が送ってくるシモメールに釣られて思考が変な方向に寄りすぎている。
「貴方達が悪魔に落ちた事、それは我等の罪でもあります」
そしてその穴のせいで悪魔に落ちた三人……二人、アーシア先輩とゼノヴィア先輩にミカエルさんが頭を下げて謝罪した。
木場先輩は天使的にはノーカンなのだろうか。
「ミカエル様、私はいま幸せだと感じております。大切なヒトたちが沢山できましたし、その中で多くの事を学ぶ事ができました。それに、こうして憧れのミカエル様にお会いできて、直接話もできて、感

激で言葉もありません！」
　アーシア先輩の熱い感激の言葉（言葉はないらしい）に頷きながら、ゼノヴィア先輩が続く。
「私もです。勿論、多少の後悔はありますが……。こうして悪魔になってみて、今まで見えていなかった事が初めて見えてきたんです。日常の中で経験できる様々なものが、今の生活に彩りを与えてくれているのです。他の信徒達に言えば怒られるかもしれませんが……私は、今のこのセックス&ドラッグ！な生活に満足しているのです」
「ぜ、ゼノヴィアさん、せ、セックスって……」
「ん？　……ああ、すみません。セックスはまだでした。今のところは、オナニー&ドラッグ！で」
　今のところとは。
　恥ずかしそうに言葉を詰まらせながらのアーシア先輩のツッコミにゼノヴィアさんが頭を軽く下げながら恥ずかしげもなく訂正を入れた。
　でも訂正しきれてないんですがそれは。
　グレモリー先輩もこの場面で頭を引っ叩いて後ろに引っ込める事はできないようで、最早この場はゼノヴィアさんの独壇場だ。
「……すみません、あなた方の寛大な心に感謝します」
　おおっと、ここでミカエルさん、ゼノヴィアさんの必殺のボケに食いしばって踏みとどまった。
　これはファインプレー。ここで突っ込んだら此方にまで飛び火してきそうだったし。
「デュランダルは……、ゼノヴィアの預かりとなりますので、サーゼクスの妹君、監督の程を宜しくお願いします」
「全力で承ります」
　場の空気を意図せず支配した代償として、天使側からの信頼は魔王の妹よりも下の位置まで下がってしまったようだが、本人はどこ吹く風。
　この人、もしかしなくても教会でエクソシストし続けてた方が世界

は平和だったんじゃないかな。
しかしそれもシステムの欠陥のせいで許されない。
悲しい話だ。彼女の信仰が、まるで暴れん坊将軍の往生際が悪い悪役の様にコカビエルの言葉を出鱈目だと斬って捨てるレベルの盲信で無かったのが悔やまれる。
「あー、話が逸れたな。それで、読手、お前だよ」
何処か間抜けな空気が流れ始めていた空間に、アザゼルさんの言葉と共に緊張感が蘇ってきた。
緊張感を伴った空気を裂き、走る幾つかの強い視線は此方に向いている。
ここからが此方にとっての本題、という事なのだろう。

「君のスタンスに関しては、既に私達も知る所だ。平和に生きる、平和を乱す邪悪なものは殺す。少し過激な所を除けば、良い生き方だと思う。人として、社会に生きる知性有る存在としてそれなりに正しい在り方だろう。……だけど、それを君が一人で貫いていくのは難しいだろう」
「お前の言う平和が全てのものに受け入れられる訳じゃねえ。殺された連中にだって、奴らにとっての平和があった。それでも、お前が何の力も持たない人間ならそれで良かったが……」
「君は堕天使の幹部であるコカビエルを殺した。勇者でも英雄でもない、ただの人間がそんな偉業を成し遂げたと知れば、そういう思想で動いていると知れば、多くの組織、様々な神話大系の神々が君の力を付け狙うでしょう」
「まぁ、そうなりますかね」
会議室の中に居る全員の視線を浴びながら、読手さんは何時ものように飄々とした態度で答えた。
頭脳労働担当じゃない私でも、次に読手さんに求められる問いがどういうものなのかは解る。
……数カ月前、少し匂わせただけでちょっとした友人から絶交されて赤の他人になってしまうんじゃないかというレベルで拒絶された

ものと、方向性は同じ筈だ。
「君が、我々の様な存在から受けるいざこざを好まないという事も知っている。だが、何の後ろ盾も無いというのは余りにも危険だ」
「ふむふむ」
「広い目で見れば、貴方の活動は地上の平和にも繋がるでしょう。宜しければ、我等天使で援助を行う事も可能です」
「そですか」
あの時と比べて、かなり穏やかな対応だ。
話を聞いているのか聞いていないのか定かでない、教科書に載せられるレベルで悪い見本になれる失礼な生返事だけれど、少なくとも即座にキレて立ち去っていないだけましだろう。
……実のところを言えば、私自身、彼がどんな返事をするのか気になっている。
彼は友達だ。
たぶん、異性の友達の中では一番に仲がいいだろう。
そんな彼とも、たぶん、高校を卒業した後は疎遠になってしまう筈だ。
私自身が大学に進学するかどうか決めていないけれど、私が悪魔で、彼が人間である以上、何処かで離れる時が来る。
……もし、もしも、ここで悪魔からの援助を受けてくれる、となれば、末永く友達で居られる。
入学してからこれまで続いていた、どうしようもない、どうでもいい、でも、楽しい無駄な時間を共有していける。
これは、本当に他意の無い、友人としての純粋な願いだ。
だから、できれば、受けて欲しい。
「そうですねぇ……」
まるで世間話でもするような気安さで、読手さんが何かを言おうとして――

ぴたり、と、会議室の中を流れていた様々なものが止まった。
比喩ではなく、文字通りに会議室の中の空気の時間が停止してい

る。
明らかな異常事態。
つまり敵襲である。
「よしきた！」
忍転身で標準的なニンジャ装備に着替え、窓に向かい外を確認。
瞼を開く。
そこには、魔力や光力を始めとした様々な力で紡がれた結界の術式構成がびっしりと埋め尽くされ、その向こう側におびただしい数の文字の塊が犇めいていた。
一人一人の文字列に軽く目を通していく。
クソの様などうでもいい自尊心に満ち溢れ、他者を思いやる心に欠けた、絵に描いたようなテロリストだ。
何より素晴らしいのは、誰一人としてやむを得ない理由でこの場に居る訳ではないということか。
この場の誰もが、その力をもっとマシな場所と時間に使う事ができた筈の馬鹿ばかり。
世界が気に食わないからと、自分を変える努力もせずにテロに走った、脳味噌に血があまり巡っていないタイプの方々だ。
「いっぱい居ますねぇ」
次に素晴らしいのは数だ。
今ですら校庭に、その上空に犇めいているというのに、少し離れたところに召喚用の魔法陣らしき構成の文章が読める。
つまり、塗りつぶす速度を加減すれば、延々と塗料を作り出し、延々と染め続けられる、塗りつぶし続ける事ができるのだ。
ああ、ああ、実に良い。
こんな素晴らしいお祭りを教えてくれたミカエルさんには花丸を上げたい。
何時ぞやの羽が黒い馬鹿とは大違いだ。
「おい馬鹿そんな身を乗り出したら」
背後からの声。
そう、身を乗り出すと居場所がバレる。

つまりは敵の攻撃が飛んでくる訳だ。
破壊力を伴った、悪魔の使う魔力攻撃を模した文字列。
直撃すれば校舎の壁位は粉砕できるだろう。
結界を破れる程ではないが、身を乗り出した状態なら衝撃の余波くらいは受けてしまうかもしれない。
「――」
きゅる、と、昔懐かしい音声テープの早送り音のような、革と革を擦り合わせたような音が口から漏れる。
超高速詠唱により魔術が発動し，飛んできた魔術を相殺し、魔力の残滓が大気を構成する文字列を引き裂いて飛散した。
文字列と呼べるか怪しい程の短文と化したそれに、刀の先端を這わせ、切り裂く様に塗りつぶす。
後にできるのは真っ赤な塗料。
落ちた塗料が此方に飛来した時の勢いを残し、校舎にぶつかり、コンクリートの文字列を上書きする。
コンクリの文字列は消えず、しかし、塗りたくられた塗料のお陰で真っ赤な壁にしか見えない。
ああ、何色にするか少し悩んだけれど、やっぱり始めは赤がいい。
紅白は縁起が良いし、派手な祭りに赤は相性が良い。
「あは」
笑みが溢れる。
いい光景だ。
文字の校舎、文字の校庭、文字の空気、文字の木々、文字の結界、文字のテロリスト。
そんな光景の中に、一点だけ、校舎の一点にだけだけど、文字ではない純粋な色が存在している。
目に優しい、見やすい、心が安らぐ。
文字を減らして色が増えた。
随分と久しぶりな気がする。
「じゃあ此方は行きます。止まってる方々は任せました」
「おう、行ってきな。……ヴァーリ、お前も」

「そっちの護衛にでも充てておいて下さいな。こっちに寄越したらうっかり死ぬかもですよ」
「殺すかもじゃなくてか？」
「こさせるなら、一応、気をつけますがね。ああ、つまりこさせないで下さい」
せっかく、一晩中でもやり続けられる様にペース計算しているのに、此方以外の誰かなんて混ぜたら台無しだ。
「大した自信だな」
ちら、と、視線だけで声の主であるアザゼルさんのお付の人を見る。
……面倒な人だ。
そしてこういう目出度い場所では面倒事は後回しにするのが良い。
「自信のあるなしじゃないんですよ。……もう行きますからね」
会議自体には既に出席しているし、この状況で続けられるものでもないだろう。
この時間の為に会議が始まる時間まで会議室で時間を潰して待っていたというのに、ここからおあずけとかありえない。
さぁ何を使うか。
まぁなんでも使うか。
刀はある。
スリケンもクナイ・ダートもある。
四肢がある、指がある。
言ってしまえば全部筆だ。
「読手君、できればこの場は我々に任せて、旧校舎の部室に向かってはくれないか？」
「見ての通り忙しいんですが」
何を抜かしてるんだろうかこの魔王のおっさん。
何か用事とか忘れ物があるなら自分で行けばいいのに。
「落ち着け。お前がなんで動けてるかは知らんが、今、この空間は時間が止められてる。原因はハーフヴァンパイアの小僧の神器にある」
「……ギャスパーの神器に？」
「ああ、恐らく、譲渡系の神器で力を注がれて、強制的に禁手状態にさ

れてるんだろう」
「つまり外部から暴走させている？」
「そういうこったな」
……そうか。
ギャスパーの、あの臆病なギャスパーの。
あいつに、強制的に魔力を詰め込んで。
使いこなせていないと嘆いていた神器を。
皆に迷惑を掛けてしまうかもと恐れていた神器を。
外界との関わりを絶ってまで、使うまいとしていた神器を。
目を。
瞳を。
暴走させて。
無理矢理に。
大切にしていた仲間を、世界を停止させた、と。
そう、そうか。
そうかそうか。
そういう奴らか。
それはそれは。
軽く流し読みしただけじゃ、わからないものだ。
そんな奴らだったか。
「そうですか。わかりました」

『起きろ、相棒！』
意識を取り戻すのと、ドライグの声が頭に響いたのはほぼ同時だった。
視界に映る会議室の中の光景が少し変わっている事に気が付き、次いで、自分の身体が勝手に神器を起動させ、戦う姿勢を取っている事に気がつく。
いや、身体だけじゃない。
頭の中がビリビリと痺れている。
何か、恐ろしい何かに対して、戦わなければ、抗わなければという

気持ちが湧いている。
「……ああ、兵藤先輩、動けるようになったんですね」
静かな声。
入学して、悪魔になってから結構よく聞く様になった後輩の声だ。
声の出処も解る。あいつは校庭が見える窓の縁に立っていた。
良くマンガやテレビで見る忍者のそれと似た装束を身に纏った読手の姿。
――だけど、一瞬だけ、本当に俺の知る読手なのかわからなかった。
姿形は変わらない。
いや、しいて違いを上げるとすれば、『髪の毛が金色に輝いている』というところか。
見た目の変化はそれだけ。
ただそれだけなのに、なんでだろうか、返事をしようにも上手く舌が回らない。
「緊急事態です。ギャスパーが襲われているそうなので、至急オカ研の部室に来て下さい」
「ギャスパーが!?　わかった!」
状況は欠片もわからないけど、仲間がピンチなのはわかった。
急がないと不味いという気持ちに応える様に、身体がビキビキと音を立てて変化しているのが解る。
すると、次第に抗わなければ、という気持ちが薄れていった。
こっちを見て嬉しそうに笑っている読手の金髪が、元の赤っぽい黒に戻ったのと関係しているんだろうか。
「ほぉ、コレが今代の赤龍帝の変化か。噂には聞いていたが、こりゃまたとんだゲテモノだな」
ゲテモノ。
確かにそうかもしれない。
ここ数ヶ月で聞いた話では、禁手前でここまで過剰な変化を起こす赤龍帝なんてそう居ないらしい。
俺の身体に不備があるのか、相性が悪いのか。
でもそんな事はいい。

戦うには十分だ。
守るために戦うには。
「見た目なんぞどうでもいいんですよ。兵藤先輩はいいヒト、愛あるヒトです。それだけで全て帳消しになります。ではお先に」
何か恥ずかしい事を言いながら、読手が窓から飛び降りた。
視線で追う事すらできない速度で、あっという間に『無人の校庭』を走り抜けて行く。
一呼吸する頃には旧校舎の方から悲鳴と戦闘音が聞こえてきた。
今から行って何ができるかはわからないけど、世話を焼くと決めた後輩の為だ。
だけど、と、少しだけ不思議に思う。
なんで、魔王様もアザゼルもミカエル様も、動いているヒトたちは全員が全員、読手の方を向いて、まるで警戒でもしているような姿勢を取っていたんだろう。

三十二話　共に立ち、共に歩く為に

「そうですか。わかりました」

何処までも平坦な口調の、何の感情の発露も見出だせない返答。

この場でこの声を聞いているのが、並の上位悪魔や堕天使程度であれば、素直にそう聞く事が出来ただろう。

だが、運良く時間停止を免れる事が出来ただけのグレモリー眷属とリアスを除き、この場でこの声を聞いているのは、歴戦と言っても良い猛者揃い。

彼らにはわかった。

どうしようもなく煮え滾った感情を抑えこむ為の、鋼の如き自制心による擬態。

抑えきれないものを抑えこもうとしているが故に、常ならば感じられる、以前に会った時も、つい数秒前まで感じられた、人間が自然に持ち合わせている筈の感情のブレが消えている。

伝えたのは不味かったか。

このまま暴れさせて囮とし、残るグレモリー眷属の誰かに確保させに行った方が良かったか。

サーゼクスが、アザゼルが、ミカエルが、その場の最上位三者がそんな事を頭に思い浮かべる。

「なら、あそこら辺は邪魔ですね」

静かな湖面、いや、凍てついた金属の如き揺るぎの無い声。

つい、と、無手の指を窓の外に向け、虚空で一文字に滑らせる。

――何の脈絡もなく、校庭に居た全ての魔術師が、消滅した。

何かの魔術を使ったようにも、何らかの神器を使ったようにも見えなかった。

中級の悪魔程度の力はあった筈の魔術師達。

少なからぬ防御手段を持っていた彼らは、結露した窓に描かれた落書きを布で拭ったかのように、跡形もなく消滅してしまったのだ。

大した力だ、と、その場の誰かが思った。

言うだけの事はある、と、その場の誰かが思った。

あれがこいつの神器の力か、と誰かが思った。
誰もが、人間の規格からは外れた力だ、と、そう思いつつ、脅威を感じる程ではない、と、思考した。
……その意識とは、思考とは裏腹に、身体は臨戦態勢を整えていた。
その事に、本能に遅れて理性が気付いたのは数秒を後にしての事だ。
気付き、何故と思い、改めて、『それ』を見た。
目に見える変化は僅かなものだ。
目の前の忍者が金色に輝いている。
力を発揮する際に輝く戦士など、この世界には吐いて捨てる程存在する。
だが、違った。
目にした瞬間、力ある彼らは気付いてしまった。
それは黄金。
それは汚泥。
それは輝き。
それは深淵。
それは希望。
それは悪夢。
それは空。
それは海。
それは虚無。
それは世界。
揺蕩う混沌がそこにあった。
無数の杖が突き立つ混沌の海であった。
母であり、父なのだと、そう思ってしまった。
目の前の人型を通し、世界の真実が垣間見えた。
錯覚だ、と理性が叫んだ。
世界の『根本』を覗き込み、悟ってはならない真実から心を守る為、本能が己を捻じ曲げ、理性にそう叫ばせたのだ。
生きていたい、無くなりたくない。

そう思う理性とそう願う本能が、宿主である人格の認識を無理矢理にねじ曲げたのだ。

正気を消し去る様な現実の記憶を、生物としての自衛作用が白昼夢の様に薄れさせ、目の前に見えるものへの認識を改めさせた。

彼らの理解しえる存在の相似である、と。

許容できる範囲へと理解を落とし込んだのだ。

或いは神。

或いは魔王。

或いは龍。

それに似た気配を持つ人間であると。

警戒するに足る存在であると、その程度の認識を残す事で、強い警戒心により違和を誤魔化したのである。

そして――

「あれが、ニンジャ……か！」

額に汗を浮かばせながら、歓喜に顔を歪める。

一匹の龍にとって、それは歓喜と同義であった。

駒王学園、旧校舎。

学園を支配する上級悪魔、リアス・グレモリーが根城として使うこの校舎に、そんな彼女とは一切関係を持たない部外者が犇めき合っていた。

魔術――悪魔の使う魔力を用いた超常現象を人間が使用できる形に落とし込んだ技術――を用いる異能者、魔術師達である。

一本の廊下に十数人、たったこれだけの人数でも、通常の人間では数百人居ても太刀打ち出来ない大戦力。

身に纏う不気味な装飾の施されたローブは、彼らがその人生を掛けて研鑽した魔術を応用して作られた護りとなり、彼らが繰り出す魔術は軍隊の重火器にすら匹敵する。

完全な統率こそ取れていないものの、同じ方針を持ち動く超人、魔人の群れ。

彼らこそ――禍の団（カオス・ブリゲード）。

今ある世の在り方に不満を持つ彼らは、自らの力を発揮できる新たな世界を望み、今回の計画に臨んでいた。
悪魔、堕天使、天使。
神話の頃から存在する聖書の三大勢力の和平会談を破断に追い込む。
全ては新たな秩序、力の支配する世界の為に。
彼らは燃えていた。
彼等自信が崇高であると信じている理想の為に。
だが――
「イヤーッ！」
気合一閃。
術理を鍛え上げ、護りを硬め、理想を燃やしていた戦士達の頭がザクロの様にはじけ飛ぶ。
魔術か、神器か。
いや違う。
彼等の頭をネギトロめいた物体に作り変えたもの。
それは、スリケン！
高速で手のひらと手のひらを合わせる事で空気を押し固めて形成されたクウキ・スリケンである！
形を持たぬはずの常温の空気が、特殊な体術により温度を保ったまま固形になるまで圧搾され形成され、鋭さを持って深々と頭蓋の中へと突き刺さり――爆発。
術の使い手の手から離れ、頭蓋骨という頑強な壁を突き破った時点で圧縮が解かれ、頭蓋の中で解き放たれた大量の空気が、彼等の頭蓋を内側から破壊したのである。
「イヤーッ！　イヤーッ！　イヤーッ！」
放たれる、放たれる、放たれる。
回避も防御も許さぬ殺人技が、次々と超人である筈の魔術師達を屠って行く。
まるで無力な一般人と大差なく、練り上げた魔術の尽くを回避され、頑健である筈の護りを濡れた和紙の様に突き破られ――死ぬ。

無力に、無価値に。
これまでの研鑽が何だったのか。
そう考える暇すら無く、死んでいく。
彼等の目は自分達を屠殺場の豚の如く殺害していく襲撃者の影すら捉えられない。
この場には、一方的な戦場でしかないこの場には、無力を嘆く言葉も意志も無い。
あるのは、襲撃者への哀れみと、自らの力への自負。
超人たる魔術師たちは、それを抱えたまま、認識を改める時間すら与えられる事無く、彼等にとっての崇高な理念を抱えたまま、その思考と人生を閉ざされていく。
音すら置き去りに、衝撃波すら起こす事無く、聞くものの居ないシャウトのみを残し、襲撃者は走りだしてから僅か五秒で目的地へとたどり着いた。
シミひとつ、返り血一つ無いその忍び装束は、そのまま襲撃者と魔術師達の力量差を表していた。
殺さずに無力化もできたろう。
逆に、殺す事無く生の苦しみを一方的に与えることすらできただろう。
しなかった。
思い知らせるべきだと思い、しかし、それよりも重要なものがあった。
「ＷＡＳＳＨＯＩ！」
薄い旧校舎の壁を蹴り破り、目的地、オカルト研究部の部室へと突入する。
……通常、人間はどれほどの怒りに飲み込まれていようとも、部屋を出入りする時には扉を使う。
荒々しく空ける事もあれば、蹴破る事もあるだろう。
だが、彼はそれをしなかった、
扉を使う、などという無駄を許さなかった。
一秒たりとも、一ミリ秒たりとも無駄にするつもりは無かったの

だ。
「な」
壁が破壊された事に何事かと視線を向けた魔術師の首が跳ぶ。
数秒意識を保てる程に綺麗に切り飛ばされたその頭は、一呼吸の半分もしない内に血霞となり、遂には何の色も持たない水へと変わり、破壊された室内を濡らす。
そこで、襲撃者は初めて脚を止めた。
見慣れたオカ研の部室の内装。
未だ混乱から脱し切れていない禍の団の魔術師達。
それに、椅子に括りつけられた、金髪赤眼の美少女——いや、女装美少年。
囚われの身である彼の無事を確認し、襲撃者は顔の下半分を隠していた布を下ろし、素顔を露わにした。
「無事か、ギャスパー」

椅子に括りつけられたまま、壁を盛大に破壊して現れた男、読手書主。
その顔を見て、目を見開き、しかし、ギャスパーの視界は滲んでいた。
助けが来た。
これで迷惑を掛けなくて済む。
そんな事を考える事ができるほど、ギャスパーの心に余裕は残っていなかった。
「ふみぬし、さん」
ぼろ、ぼろ、と、頬を熱いものが伝う度、遮るものの無い視界がクリアになり、間を置かずに再び焦点を結べなくなる程に酷く歪む。
助けに来てくれた。
喜びよりも先に、碌に抵抗すら出来ずに拘束された無力さに、惨めさと悔しさと、申し訳無さが溢れだして来る。
「僕を……、こ、ころ、殺してください」
口を開けばこんな言葉しか出てこない。

自分の弱さに、自分の力すら碌に抑えることの出来ない不出来さに喉と鼻の奥がつんと熱くなり、みっともなく吐き出した逃避の言葉すらまともに言葉にできない。

……ずっと、ずっと、こうだった。

この目だけじゃない。

半分人間で、半分ヴァンパイア。

中途半端な血筋のせいで、親兄弟から蔑まれ、対等に扱われる事も無かった。

神器が発現してからはもっと酷い。

まるで手のつけられない化物でも見るような視線で見られ、誰と近づく事もできず、家からも追いやられ、その果てにハンターに殺されてしまった。

死んだ後、リアスに眷属として救われ、悪魔としての生を受けても、それが大きく変わる事は無かった。

神器を制御できる当てがある訳でもなく、部屋に押し込められた。

それでも、それでもよかった。

誰と友達になれなくても、ネットでの取引は成功し、命を救われた恩を返し続ける事ができていたからだ。

思えば、誰かの役に立つ事ができたのは、本当に嬉しかった。

誰かの役に立って、恩人の役に立って、それで褒められて、狭い部屋の中であっても、自分はここに居ていいんだと思えたから。

……それが、最近になって、変わり始めたと思った。

封印された部屋から出ても良いと言われて、自分の神器を恐れるどころか、本当に下らない、面白い事に使えるようにと考えて、制御するための特訓までしてくれる先輩ができた。

そして、出会えた。

新しい先輩が連れて来てくれた、同じ学年の、悪魔ではない、人間の男の人。

眼と眼が合った瞬間、同じだと思った。

深い深い、諦めにも似た暗闇を見た。

同じように眼の力で苦しんでいるのが、直感的に分かった。

目を合わせた瞬間、心が通じ合った。
似ていると、そう思って、でも、違うとも感じた。
瞳の中の闇に、輝きがあった。
まるで、暗い暗い宇宙の暗黒に散りばめられた煌星の様な輝き。
逃げるのでも目を逸らすのでもない、抗う意志があった。
自分と似て、でも、自分なんかとは違う。
抱いたのは、劣等感と、それと同じ位の憧れ。
「あんな、ものを、貰っても、僕がこんなんじゃ」
そんな彼から、眼鏡を貰った。
邪眼を制御する為の、聞いたこともないような珍しいアーティファクト。
自分の眼には効かなかったけど、と、そんな前置きと一緒に貰った
それは、まともに制御出来なかった、勝手に発動していた邪眼を完全に抑えこんでいた。
『それでギャスパーの悩みが軽くなるなら安いもんだよ』
その言葉が、本心からの言葉であると感じて、泣きそうになるのを堪えるので必死だった。
それからは特訓にも身が入ったのか、徐々に制御方法が分かってきたような気すらしていた。
――でも、駄目だった。
魔術師の人間達に捕まって、力を注ぎ込まれて、それでも暴走しないとなった時、制御しているのがそれだとバレて、壊されてしまった。
宝物になるかもしれなかった、自分を想って譲ってくれた眼鏡が。
結局、自分は何一つ成長していない。
兄弟たちに虐められていたあの頃から、何でもかんでも止めてしまう化物になってしまった日から、自分は一歩も進めていない。
死んでいたところに新しい命を貰って。
誰かに迷惑を掛けなくてすむ部屋を用意してもらって。
神器の制御の特訓までしてもらって。
神器を制御するための珍しい道具まで譲ってもらっても。
……自分自身は、一歩も前に進めていない。

「何も、何も変わらないんです。……臆病者で、誰かに迷惑をかけることしかできなくて……」

貰ったものを、何もかも活かせず、台無しにするだけ。

何の意味も無い。

辛いだけで、申し訳なくて。

「こんなの、もう、嫌……！」

瞼を閉じる。

何も見たくない、誰にも迷惑を掛けたくない。

でも、自分で死ぬ勇気も無い。

死ぬのは怖い。

だから、殺して欲しい。

こんなに迷惑を掛けて、それでも死ぬのが怖いと思う自分が、殺してなんて言う身勝手な自分が嫌いで――――

「馬鹿だな、ギャスパー」

瞼を閉じた暗闇の中、思考を遮る優しい声と共に、抱きしめられた。

――――――――――――――――――――

腕の中で震える、ハーフヴァンパイアの生涯と構成を綴った文字列――いや、ギャスパーの背をぽんぽんとあやすように軽く叩く。

「いいじゃないか、変わらなくても。まだ変わってないだけだよ。それは」

誰が、いったいこの世界の誰が、彼の事を責められるのだろうか。

魔神の欠片を宿し、異形として生を受けてしまった彼を。

碌に愛を受ける事無く育ち、放逐され殺されてしまった彼を。

絶望に歩みを止めてしまった彼を無理矢理に前に進ませる権利が、何処の誰にあると言うのだろう。

「迷惑なんてさ、此方（俺）だって掛けてるよ。誰だってそうさ」

当たり前のことしか言えない、自分の口下手さをこういう時にはひたすらに呪いたくなる。

生まれ変わって、この地獄の様な世界に産まれ堕ちて。

少し変わった形でのやり直しの人生の中で、此方は未だ誰かの心を大きく動かせる様な説得力も、説き伏せるだけの話術も持てていな

い。
生まれて、育って、生きて。
目に見えるこの世界に勝手に絶望して、何もかもを『無かったこと』にしようとして。
誰も彼もに迷惑をかけて。
その後に得たものは忍者としての力。
戦う力、誰かを否定する力、騙す力だ。
誰かに助けて貰ったのに、そこから何を学ぶでもなく、そんな事ばかりを学んでいる。
歩こうと思っても、前に進もうと脚を踏み出しても、碌にその場から動けない不器用な男だ。
だけど、そんな此方でも、誰かが言った事があるような陳腐な言葉だとしても、彼に伝えたい言葉がある。
「でも、迷惑をかけることって、そんなに悪い事かな」
「え……」
腕の中のギャスパーが、ぱちりと瞬きをすると、眼を覆っていた涙が透明な雫になって零れ落ちる。
それを指で拭ってやりながら、思い出す。
誰も彼もに迷惑をかけて、それでも、誰も彼もが、自分を止めてくれた。
父さん、母さん、路地裏同盟のヒトたち、父さんの会社の人達。
世界の為に、という人も確かに居た。多くがそれで、それを踏み抜いてでも世界を消し去ろうと思っていた。
でも、できなかった。
そうでないヒトたちの心を、気持ちを、此方を助けたいと、本心から想ってくれているのが読めて。
決して届くはずのない、どんなに計算を重ねたって止められない此方を『殺す』のでもなく、『助ける』のでもなく、『愛して』くれた父と母の心を、文章でなく、心で受けてしまったから。
「此方は、ギャスパーの事で兵藤先輩に頼られて、嬉しかったよ。だって、彼に頼られなければ、迷惑をかけられなければ、ギャスパーには

会えなかったから」
「……書主、さん」
呆けたような声で此方の名を呼ぶギャスパーは、いつの間にか、挿絵に切り替わっていた。
止めど無く溢れていた涙は止まり、涙の跡が残る頬を、泣きすぎて赤くなった目元を、くしゃりと歪めた泣き笑いの様な表情。
「勿論、誰も彼もが迷惑をかけられて嬉しいなんて事はないよ。……でも、ギャスパー。君の周りには、もっと君に頼られたい、寄り掛かって欲しいと想ってる仲間が、沢山居るじゃないか」
背もたれの後ろに回されていたギャスパーの腕を拘束していた、魔術的に強化された縄をクナイで切断。
抱きしめていた身体を離し、見下ろすギャスパーの表情は不安げなもの。
「進歩が無くても、前に進めなくても、同じところをぐるぐる回ることになってもいいさ。まず、立ち上がるんだ」
「ぼくに、できるかな。こんな、引きこもりの、駄目吸血鬼のぼくに……」
「できるさ。……もし君ができないと思うなら、立ち上がれないと思うなら、手を繋いで引き上げよう。立っていられないなら、肩を貸そう。力が足りないと嘆くなら――――」
クナイの刃を握りしめ、肉に押しこむ様にしながら引く。
パックリと裂けて肉の断面が見える手のひらから、血が溢れだした。
目を見開き驚くギャスパーに、血の滴り落ち続ける手を差し出す。
「この血をもって、君の力となろう。……それとも、ただの忍者の血じゃあ、不満かな？」

返答は、言葉でなく、笑顔と行動によって示された。
硬い蕾が花開く様な笑顔、そして、僅かな恥じらいと共に伸ばされた赤い舌。

震える舌が伸ばされ、流れ続ける赤い血を受け、熱い滴を喉の奥へと運んでいく。

こくり、こくり、と、白い喉が小さく嚥下の音を鳴らす度、その透き通る様な肌が上気していくのが目に見えてわかる。

敵に囚われ、緊張と恐怖から凍えていた肌が、性的な興奮にも似た熱に溶かされ、乙女のような柔らかさを取り戻す。

躊躇いがちに伸ばされていた舌は、既に傷口を直に捉え、唇は愛子に口吻を落とす様にして無骨な手を繰り返し啄む。

しばし後、傷口から溢れだしていた血が止まる頃、口惜しげに舌と唇を離した。

唾液にまみれた手のひらと血の赤の残る舌の間に銀のアーチが掛かり、落ちる。

「僕は、これでいいです。……これが、いいです」

唇に付いた赤い血を、人差し指で軽く拭き取る。

拭いきれずに唇に残った赤は紅を刺したように唇を鮮やかに彩った。

男から見ても女から見ても妖艶に映る誘うような仕草。

その仕草とは無関係に、壁の破壊された部室の中の空気が変わる。

不気味で、言い様のない不安感を感じさせられ、部室の中、ひとり残らず影にクナイを刺されて身動ぎ一つ出来ずに居た女魔術師達が恐怖に震えた。

無抵抗のまま、逆襲される。

何か、絶対にさせてはならなかった変化を遂げてしまった出来損ないのハーフヴァンパイアに、生きたまま食い殺される。

そんな時だ。恐怖に飲み込まれそうになった魔術師達の拘束が、相次いで解けた。

影に深々と突き刺さっていたクナイが、ひとりでに抜け始めたのだ。

しめた。

拘束から抜ける事ができれば、出来損ないと一般人如き、物の数ではない。

恐怖から逃れた反動で気が大きくなっていた魔術師が、まずは嘲りの言葉を口にしようとして、異変に気付く。
舌が、喉が、顔が痺れて動かない。
視界の半分が黒く染まった。
身体の一部感覚が消えた。
水風船の弾ける様な音と共に身体が軽くなった。
いつの間にか壁に寄り添っていた。
……魔術師達を見ていた側、書主や、元凶であるギャスパーからすれば、何が起きているかは一目瞭然。
全身の至る所を鬱血させ、内出血が悪化して皮膚を風船の様に膨らませ、血しぶきと共に破裂させ……ギャスパーの視界に入っていた全ての魔術師が、地に倒れ伏していた。
精密かつ局所的、意識的な時間停止により、彼女たちは全身の至る所に血液の通らない、時間停止箇所を作り、自らの血流の力で体内から肉体を破壊させたのである。
恐らく、脳内の血管もいくつも時間を止められて栓を作られ、脳内出血により、脳障害、そこから派生する視覚障害を始めとした神経障害をも併発しているのだろう。
血液を好む吸血鬼にふさわしく、時間停止の神器を完全に使いこなした、冷酷な戦い方。
しかし、この惨状を引き起こした張本人であるギャスパーは、彼等に最早一瞥すらくれていない。
溢れだした血液を啜るどころか、その血液に触れないようにすらしている。
「ぼく、うまくやれてる？」
舌っ足らずで甘えるような口調で、蕩けた瞳を書主に向けている。
最早無力化した魔術師達への興味は一切感じられない。
部屋の中の影に半ば溶ける様に輪郭を崩し、自らの一部である影を書主の身体に纏わり付かせながら、ただ無邪気に褒められるのを期待している。
「ああ、上出来だ。それじゃあ……先輩達と一緒に、校舎の外で待って

いてくれ」
その言葉に、形のない影の塊の中に出来た無数の目が、部室の中に置かれていた悪魔の駒に視線を向け、はっとした様にギャスパーの身体の中に引っ込む。
ギャスパーの身体が明確な輪郭を取り戻したところで、キャスリングを応用した転移により、リアスとイッセーが部室の中に転移してきた。
二人は部室内の惨状を気にも止めず、縛られていたと思しき椅子から離れているのを確認し、安堵の表情を浮かべる。
「ギャスパー！」
駆け寄り、ギャスパーを抱きしめるリアス。
ギャスパーの細い体を強く抱きしめるその姿は、迷子の子と再開した母の如き母性を感じさせた。
「良かった……無事だったのね」
「部長……」
母性を、自分を母の如き慈愛で持って想ってくれているリアスの思いを感じ、ギャスパーは柔らかな笑みを浮かべた。
ああ、何故、何故殺してくれなどと頼めるのだろう。
こうして自分を想ってくれるヒトが居る。
自分がもし死んでいたのなら、彼女が、彼等が、どんな顔をしていたか。
それを思えば、もう、死のうなんて、諦めようなんて思えない。
「ごめんなさい、部長。ぼく、沢山、沢山迷惑をかけちゃって……頼ることも、できなくて」
「大丈夫、大丈夫よ。貴方がどれだけ迷惑を掛けても、頼ってくれても、何度だって叱って、助けて、一緒に居て上げる。絶対、貴方を離さないわ」

此方の中でグレモリー先輩への信頼度爆上げな光景を涙ながらに眺めた後、グレモリー先輩に抱きしめられているギャスパーを安心したようなおっぱい押し付けられて羨ましそうな表情で見つめていた

兵藤先輩に声をかけ、一度部室の外に出て貰った。
言い訳として、これから此方で独自に情報を聞き出したいが、その時の光景や音声や臭いが囚われて弱っているギャスパーには刺激が強すぎるから、と言うと、最終的には生きている魔術師は生きたまま冥界に引き渡す事を条件に外に出て貰えた。
この言い訳に素直に頷いて、ギャスパーに気を使ってくれる辺り、グレモリー先輩は本当に部下想いの悪魔なんだろう。
「さて」
ギャスパーには刺激が強い、というのは嘘にしても、これから起こる現象は、精神衛生上余り宜しくないのは確かだ。
特に、今の血に酔っているギャスパーにはあまり良くない影響を残しかねない。
冷酷な吸血鬼として生きていくなら良いのかもしれないが、彼が生きていくのは温かい仲間も居る悪魔社会なのだ。
ここから先は、完全に此方の八つ当たりだ。
彼のこれからの健やかな成長を願えば、この場面を見せるなどという事はありえないし、此方の精神的な健康を慮れば、この魔術師たちに八つ当たりしないという選択肢も存在しない。
「良い姿じゃないですか、魔術師の皆さん」
見下ろし、挿絵にすらなって居ない文字列の塊に笑みを向ける。
視覚と聴覚が辛うじて此方の事を認識できるレベルで働いていた魔術師数名の文字列、その感情を司る部分が屈辱と恐怖に書き換わって行く。
自分達の思想を理解すらできない劣等が、とか、魔術師でもない人間ごときに、とか、何をするつもりだ、とか、殺される、とか。
まぁ、まぁ、この状況で色々と思えるものだと関心してしまう。
「肉体はボロボロ、脳も血管破裂して機能不全、これじゃあ、魔術師として復帰どころか、日常生活に戻るのに何年かかるか、いや、戻れるかどうか……悔しいでしょうねぇ」
普通に考えて、肉体の一部分の時間を止める、なんて事をすれば、この魔術師達と同じように体内で血流が遮られて一部が壊死するのが

普通だ。

これまでのギャスパーの時間停止でそれが起きなかったのは、ギャスパーの優しい心根を神器が無意識の内に酌んで発動していたからだろう。

そして、余程運が良くなければもっと重い障害が残るか即死するかの脳内出血で、この場に居る魔術師は一人足りとも死んでいない。

それは優しさから来るものか？

いや違う。

「ふふ、そう怯えないで下さいな。此方は、貴女達を殺しに来たのではありません。――――貴女達に、素晴らしい生を与えに来たのです」

魔剣を、配下であるドゥールゴーファを呼び出す。

別に、此方自信がかけてもいいのだけれど……それでは、苦しみはそう長く続かないだろう。

此方は、とりあえず人間として生きて、人間として死ぬと決めている。

生きてせいぜい百年そこら。

……その程度の短い苦痛と絶望で終わらせられる訳がない。

「これより貴女達に、永遠を生きる肉体と、決して狂わない強い心を与えます。……喜んで頂ければいいのですが」

あの優しい子を利用し、無理矢理に神器を使わせて、愛すべき彼の仲間を陥れ、あそこまで思いつめさせた。

ただそれだけで、と、そんな事を思うお前達には、この結末こそが相応しい。

単独では思考することも戦う事もできない配下である魔剣に、威力増幅の為の魔力と、命令代わりである此方の意を流し込み、倒れ伏す魔術師の一人に向け、呪を放つ。

「屍肉呪法（ラウヴヌト・ルシャヴナ）」

極々単純な作用を齎す、嫌がらせと拷問にしか使えないどうしようもない魔術。

対象となった魔術師の壊死していた肉体が、破裂した血管が、死滅していた一部の脳細胞が見る間に再生し、再生し、再生し……今の彼

女にとっての、あるべき姿へとたどり着く。
表面に元は人間であったと示す顔の名残が張り付いたおぞましい色をした肉塊。
完成と同時に肉の一部が蛇に、蟲に変化し、自らを生み出した肉塊へと喰らいつき、食い千切りながらぞぶぞぶと肉の中に潜り込んでいく。
絶叫、のつもりなのだろうか、縮小された声帯がか細い悲鳴を上げ、表面に張り付いた顔面が激痛から顔が崩れる程に歪む。
そこで見どころは終わったのだろう、肉塊が文字の塊に、まさしく塊と言っても過言でない文字の団子に変化した。
もう、この物体が挿絵に見える事はないだろう。
この物体は、限りなく頑強に作り上げたこのドゥールゴーファが死ぬ、消滅するまで、どれだけ時間が経とうとも他の姿に変る事はない。
「――ああ、そう焦らなくても、順番に、全員に行き渡りますから、安心してくださいな」
興味の失せた文字塊から視線を外すと、倒れていた、此方で何が起きたかを理解できた半死半生の魔術師達が、不自由な体を引きずり少しでも此方から遠ざかろうと這いずって逃げていた。
誰も彼もが恐怖に顔を歪めて、その人生最期とも言える一枚の挿絵を此方に見せつけてくる。
だが、こんな奴らの顔なぞ、たとえ挿絵になっていたとしても見る価値も記憶する価値も無い。
瞼を閉じ、安心させるように笑顔を浮かべたまま、魔力を充填したドゥールゴーファを手に下げたまま、ゆっくりと一人一人に歩み寄り、残る全員に見せつけるよう。
……数分の後、部屋の中は小さな絶叫を上げ続けるだけの文字団子だけ。
彼等の人間として発する最期の捨て台詞の数々を記憶の外に放り捨て、此方も新たな獲物を探しに、旧校舎の外へと脚を向けた。

三十三話　唆す者、救う者、或いは一線の向こう側

「魔皇霊斬（アストラル・ヴァイン）」

魔力をより攻撃的な形に先鋭化した魔術でグローブを覆い、空から振る魔術の弾幕を掻い潜りながら肉薄し、魔術師の一人を殴り抜ける。

振るった拳が普段の拳撃とは比べ物にならない程に容易く魔術的な防護が掛けられたローブごと魔術師を撃ち貫き、衝撃波が内部から肉体を破裂させた。

魔術の矛先が明確に私に向くのを感じるよりも早く、先の拳が着弾するよりも早く詠唱を始めていた魔術を開放。

「翔風界（レイ・ウイング）」

悪魔の翼ごと包み込む様に展開された風の結界が魔術を弾き乱反射させ、周囲の魔術師にいくらかのダメージを与えた。

そのまま加速。

風の結界を利用した体当たりで進行方向の魔術師を跳ね飛ばし、更なる密集地帯へ。

詠唱、呪文を刻む私の口元を見た魔術師達が結界を強化するも、それを無視。

翔風界を解除し、加速を消さない様に翼を広げ、風を捕まえ浮力を得て、再び翼を畳む。

結界を強化して受けようとした魔術師達の背後に回りこみ、私に意識を向けていなかった魔術師を魔術無しで殴り飛ばす。

「雷よ！」

更に高い空から副部長の声。

取り逃しは無い。

私一人が戦う必要はないのだから。

ダンッ、と、校舎の壁を蹴って地面に着地。

振り返れば未だその数を多く残す魔術師、テロリストの群れ。

どれだけ倒しただろうか、と考えて、終わるまで倒し続けるから数えるだけ無駄だと思考を切り捨てる。

悪魔として、翼を持ち空を飛び、人間と比べて多量に魔力を運用できるからこその魔術の使い方も理解出来てきた。
不謹慎な話ではあるけれど、ここで慣らし運転を済ませられるならそれもいい。
この場の負けは絶対無い。
そう確信できるだけの材料が私達にはあった。
三大勢力のトップ陣が居るだけで既に安泰と言っても良く、学校周辺を警護していたその軍勢も加勢してきている。
テロリストを無尽蔵に召喚していたらしい魔法陣も消えて増援も無く、状況は一方的だ。
「……不気味です」
ギャー君は無事に救出された。
イッセー先輩の話では、一足先に救出に向かっていた読手さんによって救い出されていたらしい。
つまり、今、読手さんは手隙の状態である筈なのだ。
だというのに、如何にも殺しても文句が出無さそうな、彼好みの敵が溢れている場所に彼が居ない。
部長が言うには部室でテロリスト達の尋問を行っているとのことだけど、この非常時、そして読手さんにとってのフィーバータイムにそんなことにこれほどの時間を掛けるだろうか。
さっさと終わらせて、笑いながらアメリカ人が考えた間違ったイメージの忍者みたいなハイスピード惨殺アクションを始めそうなものだけど……。
「霊呪法（ヴ・ヴライマ）」
思考の為に少し鈍った私に向かってくる魔術を、グラウンドの土とその下の粘土で作ったゴーレムを盾にしてやり過ごす。
「周りの攻撃から私を庇って」
手短に命令を下し、新たな呪文を唱え始めた所で、学校にも、そこに襲撃してきたテロリストにも似つかわしくない獣の咆哮が響く。
……この声は、イッセー先輩。
ゴーレムの影から見上げる空に、赤い龍と白い鎧が舞っていた。

まるで闘牛と闘牛士の様な迫力と技術がつめ込まれた戦い。
あのレベルの速度で動き回られると、何時ぞやのレーティングゲームのように周囲の味方を巻き込む覚悟で打たない限りは当てようもない。
レベルが違う戦い。
少なくとも、私が介入できるようなレベルには居ないのだろう。
「烈火球（バースト・フレア）」
空の魔術師達の間に生まれた光の玉が爆発し、光の玉を破裂させながら生み出された炎の舌に焼きつくされ、炭化した死体が地面に落下し砕け散ったのを確認しながら、思う。
彼なら、あの戦いに、どんな方法で横槍を入れるのだろうか。

が、と、大気を引き裂く大音声と共に赤い龍が空を登る。
人と龍の中間地点の様な姿ではあるが全体の印象に不和は無く、一種完成された独自の進化を遂げた生物特有の美すら感じられた。
その半龍が重力に逆らい、天に在る白い鎧の戦士へと肉薄する。
風を切り裂く翼が、その身を鎧う鱗が、その全てが加速を得ることで暴力に変わり、限界まで行われた倍加はその暴力を明確かつ阻むものの無い破壊力へと昇華させた。
それこそ、別の場所でアザゼルが戦っている魔王の血筋の者であれば、倍加からの突撃の一度で原型を留めない大量の死肉に変わってしまうだろう。
無論、当たりさえすれば、の話ではある。
いや、例えばそれは先に例に上げた魔王の血筋……カテレア・レヴィアタンであったなら考慮する必要すら無かっただろう。
イッセーの倍加は全身に満遍なく行き渡り、魔力に始まりその肉体の一片に至るまで能力を倍加されている。
無論、知性などの純粋に倍加の対象にしにくいものは例外ではあるが、少なくとも、魔力と筋力に依存する移動速度は明確に倍加の影響を受けている以上、破壊力だけでなくその速力もまた尋常のものではない。

今の半龍と化したイッセーは、軽く羽撃き空を行くだけで音の壁を容易く突破する。

驕り高ぶり実の伴わない血筋だけの悪魔であれば既にイッセーの敵足りえず、その破壊力の的でしかない。

だが白い鎧――白龍皇には届かない。

元々、白龍皇と赤龍帝の戦いは互いの能力の関係上、戦闘力が拮抗した場合は千日手になりやすい。

しかし、これはそんな次元の話ではない。

純粋に、赤龍帝であるイッセーの戦闘力が、白龍皇であるヴァーリに劣っているのだ。

例えば攻防における読み合い、例えば攻撃のバリエーション、例えば禁手の完成度……。

戦闘に必要な技能を総合的に比較した場合、イッセーの力はヴァーリには遠く及ばないのだ。

あらゆる面で負けている訳ではない。

例えば、身体能力。

筋力や骨格強度という面で言えば、イッセーの肉体は確実にヴァーリのそれを遥かに上回る。

白龍皇ヴァーリ・ルシファーが如何に魔王の血を色濃く継いだ戦いの申し子だとしても、種族としては魔王と人間のハーフでしかない。

魔王の血脈でありながら神滅具を宿すという奇跡こそ体現しているものの、それだけは変わることのない真実。

対するイッセーは、生まれこそ何の変哲もない、戦闘面では何の才能も持たない平凡な人間ではあったものの、今の肉体はほぼ人型に押し込められた龍そのもの。

神器に封印されたドライグの魂に影響を受けての細胞変異の結果ではあるものの、その肉体は通常の龍種と較べても格段に頑健だ。

巨大な龍の身体を支える為に必要なリソースが、そのまま人間相当の小さな肉体に注ぎ込まれているのだからこれは当然と言えるだろう。

純粋な身体能力という意味で言えば、今戦場と化している駒王学園

の敷地内で彼を上回る者は殆ど居ない。
……だが、だからこそ、イッセーはヴァーリに劣り、勝てない。
イッセーの肉体が龍化を始めたのは、いや、そもそも龍に影響されて龍に近づく体質になったのすら、ここ数ヶ月の話であり、その肉体運用に関する習熟は極めて低い。
対し、年単位でその肉体を、神器を、自分の持ちうるあらゆる力を振るう為の修行と実戦を潜り抜けてきたヴァーリは、自らのスペックを存分に引き出して戦う事ができる。
更に言えば、イッセーの龍化した肉体もまた、この場の戦闘において役に立つとは言いがたい。
確かに、イッセーの肉体は龍に限りなく近づいている。
外部から加えられている人型に収める縛りが無ければ、すぐにでもその肉体は龍の幼体の如き姿に変じていることだろう。
また、爪の振るい方、顎門でもって敵に喰らい付く為の動き、すれ違いざまの尾の当て方。
その全てが龍に影響を受けて変異した運動神経を司る小脳含む各所へと刷り込まれ、人として生まれ育ったイッセーに躊躇いなく龍の振る舞いをさせている。
習熟こそできていないだけで、イッセーはイッセーの思うがまま、龍としての肉体を操る事ができる。
だが、しかし。
「なるほど、まるで野生の龍だ！　ハハハ！　とても数カ月前まで一般人だったとは思えないな！」
獰猛に、しかし余裕を持って笑うヴァーリ。
イッセーの攻撃が、戦闘力が脅威でない訳ではない。
神器を開放した今のイッセーは、言ってしまえば機能が限定された赤龍帝ドライグのミニチュアだ。
そこいらに居る並の龍種を上回る程の脅威であり、その一撃を喰らえばヴァーリとてただでは済まない。
……喰らえば、そう、喰らえばの話だ。
このまま戦闘が続くとして、ヴァーリがイッセーから直撃をもらう

ことはあり得ないだろう。
何故か。
「GYAOOOOOOOOOOOOOOOOOOHHHHHHHHHHHHHHHHHH!!!」
咆哮と共に、倍加によりドラゴンブレスの如き威力に達した魔力砲がヴァーリに向けて放たれる。
吐き出された瞬間から更に速度を倍加され、追尾性を倍加され、威力を倍加された一撃。
しかし、ヴァーリは手慣れた様子でそのブレスを処理していく。
『Divide』
『Divide』
『Divide』
『Divide』
『Divide』
『Divide』
半減に継ぐ半減。
白龍皇の力により威力も追尾性も速度も落とされた魔力砲をはたき落とす。
どれほどの威力を持っていようと、それそのものが半減に対して耐性を持っていない限り、ヴァーリに有効打として届く事はない。
「君の事は調べていたよ。平凡な両親、平凡な血筋、平凡な人生。それが、ドラゴンと、赤龍帝の籠手と出会う事で……秘められた力でもあったのか、以前の平凡さが嘘の様な強さだ」
雑魚ではない。
それなりに手強く、余裕はあっても油断が出来る相手でもない。
戦ってみれば気分も高揚する。
まぁまぁの敵。
それが、白龍皇であるヴァーリ・ルシファーにとっての赤龍帝である兵藤一誠への評価。
高くなく、しかし低くも無い。
失望するほどでなく、戦闘意欲を削ぐ程の弱さではなく。

『ありふれた強敵』

というのが一番近い表現だろうか。

イッセーが弱い訳ではない。

イッセーは強い。

少なくとも、グレモリー眷属の中で、総合力では現在トップの座を木場祐斗と争う程には強い。

だがそれはあくまでも、元人間の平凡な悪魔であるイッセーが、ドライグというドラゴンの属性に近づく事で生まれる強さに過ぎない。

現在、そこにイッセー独自の強さや爆発力が加わっている訳ではない。

故に、有り触れた強者の域から抜け出る事もない。

並の龍種を上回る膂力を持ち、その一撃は白龍皇の鎧を通してヴァーリにダメージを与えられる程であり、限定的ながら倍加の力すら使用できる。

なるほど強い。

強いが、珍しい程の強さではない。

地上でも冥界でも、探せばそれなりに居るだろう。

まして龍種だ。

突然変異的にこの様な強さを持つ個体が現れる可能性は少なくないし、ヴァーリも幾度か遭遇した覚えがあった。

運命的にライバル関係である相手がそれほどの力を持っている事に少なからぬ喜びを感じてはいる。

しかし、それなりに高揚でき、それでいて将来性もある強敵、そんなライバルと相対し、ヴァーリの心にむくむくと新たな欲が湧き出てくるのは仕方のない事だろう。

「噂は聞いていたからね、こうして戦ってみて、期待外れにならなくて安心したよ。でも、まだまだ伸びそうじゃないか。……何が足りないか、と、俺もそう考えてしまう訳だが、そうだな」

ちら、と、視線の先に、校庭の隅で戦いを見守る少女――アーシア・アルジェントに向かう。

イッセーがその視線を追い、何をしようとしているか気付くより

も、ヴァーリの行動は早かった。
当たっても当たらなくても良い、防がれるならそれもいい。
挑発のつもりの、彼女にとっての致死の一撃。
魔王の血が齎す一撃は、何に遮られる事も無く、一直線にアーシアに向けて解き放たれた。

時を少し巻き戻し、もう一つの戦いは容易く決着へと向かっていた。
魔王の血族でありながら、魔王の役目を果たせない程度の力しか持たないカテレア。
対するは先代の、戦乱の世に相応しい実力を兼ね備えていた魔王達との戦を潜り抜け現代まで生き残った堕天使のトップであるアザゼル。
カテレアが如何に無限の龍神から与えられた力でブーストしたとしても、アザゼルがかつて戦ったことの在る魔王と並ぶ程度にしかならず。
対するアザゼルは、長年の研究の末に作り上げた人工神器の禁手、堕天龍の鎧を身に纏い、その力を更に増幅させている。
互いの身体が交差し、一瞬の接触の間に無数の攻防が繰り広げられる。
接戦とはいかない。
腕が、脚が、魔力が、交差し、鍔競り合い、喰らい合い――押し負ける。
一撃毎にカテレアは力の差を改めて自覚させられた。
無限の龍神、オーフィスの力を借りてようやく互角、しかし、それも容易く覆された。
万に一つの勝ち目もない、そう自覚して、改めて覚悟を決めた。
アザゼルの神器である槍の一撃を喰らい、鮮血が迸る。
逃げる事もできたかもしれない。
だが、カテレアの頭のなかに撤退の二文字は既に存在しなかった。
ただ、長生きだけをするなら、それでも良かったのかもしれない。

だが、カテレアは魔王の血を引いていた。
ただ長く、平凡に、幸せに生きるなどという道は獣と変わらぬものに思えていた。
自分は悪魔なのだ。
誇り高き、魔王の血を引く悪魔。
それがどうして凡百と同じ道を行けるのか。
新たな世界、新たな秩序、そこに新たな魔王、真なる魔王として君臨する。
そうでなければ自分は自分で居られない。
だからこそ、禍の団などという組織に付いたのではないか。
その為に、たかだか自分の命一つ、惜しむ理由になるものか。
カテレアは傲慢だったかもしれない。
分不相応な野望を抱く愚者だったかもしれない。
しかし、その心には華があった。
力及ばず魔王の座に座る事も許されず、犯罪者に身をやつしても枯れない華。
信じた道を迷わず歩む為の道標となる一輪の華。
残されたのはそれだけ。
たった三文字の不退転。
その心の華が、カテレアに最期の選択を躊躇わせなかった。
「ただでは、やられません！」
腕を触手状に伸ばし、アザゼルの左腕に巻きつける。
同時に自爆用の術式を起動。
もう後戻りはできない。
周りから、相手から自爆を中断させられる様な無様をさせないため、練りに練った術式だ。
そして、自爆する前に自分を殺せば、物理的に繋がっているアザゼルも死ぬ呪術も複合している。
そして、龍神の力だけでなく自分の命すら自分とアザゼルを繋ぐ触手に回し、決して離さない。
ただでは負けない。

勝てはしなくとも、魔王になれなくとも、ただでは絶対に負けてやらない。

それが、誇り高き魔王の血筋を持つカテレアの、最後の誇りだった。

――――故に、

「極彩と散れ」

その誇りをこそ、狙って踏み躙る者が現れる。

突如カテレアとアザゼルの間に降り注ぐ光の如き一閃、いや、一筆。

カテレアの命すら吸い上げている触手が、細切れに寸断された。

細切れにされた触手の肉片は即座に色とりどりの塗料の霧となり、その霧の中に、カテレアとアザゼルは乱入者の姿を視認し、ようやく何が起きたのかを理解した。

「魔王の道？　正しい世界？　自分達の理想郷？　不退転？」

忍び装束の乱入者、読手書主。

宇宙（そら）と星（きらめき）を宿した瞳に無機物の如き冷たさを宿し、誰が止める間も無くカテレアに飛びかかる。

スローモーションにすら見える鈍い動き。

しかしそれが、迫り来る死に対して脳が起こしたオーバークロック状態であるとカテレアが理解したのは、切り落とされた触手を咄嗟に書主に向けて突き出した後だった。

魔王級の、人間の限界値近くまで鍛えられた程度でしかない肉体など一撃で粉微塵にできる、同じくらいにスローな攻撃。

それを、同じくスローで動く男が『素手で受け流し、投げ飛ばす』のを見て、空中で目を見開く。

言ってしまえば、高速で走る新幹線を素手で触るようなものだ。

力の受け流し方を知らなければ、いや、知っていたとしてもそうできることではない。

彼が、忍者で無ければ。

そして忍者であるという前情報も、実在する古式の忍者の持つ脅威も知らないカテレアは驚きに飲まれて気づけない。

投げ飛ばされる瞬間、受け流された腕に【死なない】【狂わない】と指先で書かれた事に。

「貴様にそんな希望も、夢も、未来も必要無い」
そして、気付く。
投げ飛ばされる瞬間、腕からの微細な振動を増幅し僅かに揺らされ、一瞬だけ復帰の遅れた脳が、危険信号を受け取った時にはもう遅い。
男が居合い抜きの様に腰だめに構えた手の中にある黒い渦、ブラックホール。
そこから、何か、恐ろしい物が抜き放たれ――――
「い、嫌、いやよ。それだけは！　そこにだけは行きたくない！」
決意の表情が崩れ去り、カテレアの表情が恐怖に歪む。
この場において、彼女だけが知覚することができた、捻くれた神樹、封印された無限の宇宙に、そこに封印された数多の『何か』に、心に抱いていた全ての希望と決意と覚悟を打ち砕かれ、
「誰か、助け」
敵であるアザゼルにすら助けを求める様に手を伸ばし、この宇宙から完全に消失した。
既に『何か』も黒い渦も無く、そこには呆気に取られたままのアザゼルと、乱入者である書主だけ。
書主は手のひらをまるで汚いものでも触った後の様に忍び装束で拭いながら、言い捨てる。
「死なず、狂わず、獣未満畜生未満の玩具の道がお似合いだ」

と、勢いでやったはいいものの。
大丈夫だろうか、あれの中身が出てきたりしたら、フルパワーでもどうしようもなくなるんだが。
一応、ブラックホールに戻す時に【絶対に壊れない】【絶対に脱出できない】【絶対に召喚できない】って書いたけど、不安だ。
……ウルトラマンでも大量に描いておこうかな。たぶん旧神相当の存在だし。
「さて、後はギャスパーの様子を確認してから帰るか」
結局校舎を染め上げるのは失敗したけど、もっといい場所を染め上

げられたし、満足満足。
　予定より早めに終わったから、たっぷり眠っても昼には起きられるかな。
　そうなると休日も一日半は使える訳で、うん、少し得した気分だ。
「おいおい、いきなり現れて獲物横取りしといて、挙句もう帰り支度とかどんだけマイペースだよ」
「いやだって、もう終わりでしょう？」
　声を掛けてきた文字列、そこに更にゴテゴテと余分の覆い神器のそれに似た煩雑な文字列を被せたアザゼルさんを極力視界に収めないようにしながら首を傾げつつ答える。
　首謀者っぽいのは異世界の封印された邪神のおもちゃとして永遠に苦しみ続けるだろうし、魔法陣が無くなって新しい雑兵が増えないから絵の具の材料も無いし。
「そりゃお前さんにとってはそうかもしれんがな。例えば、あれは放置してくつもりか？」
　あれ、という言葉が音として向いた先からは、龍の咆哮と激しい戦闘音。
　兵藤先輩がアザゼルさんの付き人と戦っている。
　裏切る裏切ると書いていたけれど、これはまた見事な裏切りぶりだ。
「自分の息子の不始末くらい自分でどうにか……できませんよね」
「あ？　そりゃどういう意味だ」
「だってアザゼルさん、下半身の息子の不始末も雑に処理してそうな顔してますし……」
「うるせ。そっちでしくった事はねえよ」
　何千年何万年生きてきて一度もそういう過ちが無い、と。
　種なし南瓜かな？
　まぁ口にするには少し失礼なので言わないが。
「しかし、苦戦してますねぇ」
「そりゃヴァーリがか？　それとも赤龍帝の小僧がか？」
「どっちもですよ。見ていてまだるっこしいったらありゃしない」

見た感じ、付き人さんは自分の持つ力を使い熟している。
龍に対する適応力だけが特化した今の兵藤先輩では勝ち目がないし、勝負を引き伸ばされている感がある。
それでいて、兵藤先輩もだらしない。
兵藤先輩に追記した記述の中に、こういう文章がある。
【肉体的にドラゴンの影響を受け入れ易い】
【心は燃えても龍の激情に飲まれず】
【兵藤一誠の思考は龍に侵されない】
これは、こういう状況では恐ろしい爆発力を生み出せる力なのだ。
それこそ、この万が一にも勝てない戦力差をあっけなく覆せるだけの力を。
だというのに、未だ持って兵藤先輩は自らの殻を破れず、卵の殻を被ったヒヨコの様な姿で戦っている。
「ほう、じゃあ、小僧の方にも勝ち目はあると？」
「ありますよ。……そうですね、この状況じゃ、先輩に戦ってもらうのが一番楽ですし、そうしましょうか」
勝ち目はあるか、という文字列の端に、付き人さん――ヴァーリ某の命を心配する親心っぽい心情や、連れ戻せた時にどうにか減刑できるように、という思考が見え隠れしている。
ああ、いやだ、嫌だ。
裏切られた側に心配される、しかも、息子の様に思われている悪党とか、冗談じゃあない。
殺したら真っ当な立場の相手に恨まれる様な敵の相手なんて、真っ平御免だね。
アーシア先輩と迫る凶弾との間にオトモ忍を召喚しながら、頭の中で先輩の力を引き出す言いくるめの内容を組み立てる。
テクニカルな助言で兵藤先輩に後始末を押し付けてしまおう。

校庭で召喚されていた魔術師相手に戦っていたオカ研メンバーでは、小回りの効かない半龍形態のイッセーでは庇おうにも間に合わない。

事前に瞼を閉じた状態でヴァーリに封印されていたギャスパーも身を盾にする事も救い出し逃げる事も出来なかった。
また、ミカエルやサーゼクスと離れた位置に移動してしまっていたのも悪かったのだろうか。
アーシアを守れる者は、その場には誰ひとりとして残っていなかったのだ。
「アーシア！」
数秒前まで荒れ狂うドラゴンの如く咆哮を上げるだけだったイッセーが叫ぶ。
しかし、攻撃の着弾地点であるアーシアの周辺はもうもうと立ち込める土煙で覆われてその姿を確認すら出来ない。
自力で逃げられたかも、という希望と、駄目かもしれないという絶望から、誰もがその向こうを確認できない。
確認したら最後、全てが手遅れになってしまうかもしれないから。
だが、そんなオカ研メンバーの葛藤を欠片も考慮せず、暢気な声が土煙の向こうから吐き出された。
「大切な人を殺されれば、怒りで覚醒するかも、って感じですか」
オカ研の誰もが聞き慣れた声。
その声を聞き一部の者が顔を明るくし、しかし、暫くして土煙の中から現れた『モノ』の姿に、『ん？』と首を傾げた。
「残念でしたね。兵藤先輩は、その程度の刺激で真の力が出せるような真っ当な仕様じゃありません」
身の丈三メートルになろうかという巨体。
それを支える野太い四肢は不自然に捻じくれ、真っ当な動きをするとは思えない。
頭部には角が生え、背中には闇色の翼を持った何ものか。
しかし、その喉を通して出されている声と、その身を覆う簡素な忍び装束、胸に貼り付けられた『代理』と書かれた紙が、背後でそれを操るものとの関係性を否応なく想起させる。
「あの……読手さん？」
ヴァーリの攻撃から庇われた形になるアーシアが、人間としての生

でも悪魔としての数ヶ月でも見たこともない程逞しすぎる背に問いかける。
「ノン、ノン。この子は此方のオトモ忍ですよ、アーシア先輩」
「オトモニン？」
「ああー、この名前は翻訳効かないんですね。あれです、忍犬とか忍猫とか、そういうのの親戚ですよ。イッツ・ア・ジャパニーズ・ニンジャ・アニマル、オーケー？」
仮にこの会話を遠くで魔術師を屠っていた小猫が聞いたのなら『こんな忍者アニマルが居てたまりますか……！』と突っ込むところだが、この場にはボケとツッコミという穢を知らない無垢な素人であるアーシアしか居ない。
日本文化にも忍者文化にも造詣の深くないアーシアは、異形のニンジャ・アニマル、オトモ忍を柔軟な思考で受け入れる事に成功した。
悪魔としての知識を事前に教授されていたアーシアは、これがニンジャにとっての使い魔の一種なのかと、その逞しさに驚嘆し、そして即頭を下げる。
「助けていただいて、ありがとうございます！　……あの、この言葉、この子には」
「伝わりますよ。こう見えて（申し訳程度に）知性もありますから。きっと喜びます」
戦場（いくさば）にそぐわない陽気なやり取り。
それを最も真正面から見つめていたのは誰あろうアーシアに向けて凶弾を放ったヴァーリだった。
そして、そのやり取りを行っている片割れ、オトモ忍の戦力を飼い主である書主以外で二番目に正確に把握しているのも、またヴァーリであった。
戯れの一撃。
例えば、現在の半竜と化したイッセーならば大したダメージにもならない程度の一撃。
そして、同じように無傷でアーシアと談笑に興じているオトモ忍もまた無傷となれば、その護りの堅さの片鱗は容易く窺い知れる。

ヴァーリから溢れる龍の闘気が倍増した。
　仮に今戦っている赤龍帝――イッセーが今よりも弱かったのなら、今直ぐにでもオトモ忍に、ひいてはそれを操る書主を探しだし襲い掛かっていたことだろう。
　だがしかし、ただ戦いの為だけに堕天使預かりの立場から抜け出しテロリストに与する程に自らの戦闘欲求に忠実な彼は、現在相対しているライバル候補の強さとその将来性、そして、それを引き出せそうな書主の言葉に、ギリギリの所で踏みとどまった。
「随分と遅いお出ましじゃないか。しかも使い魔だけ出してくるとは、出し惜しみをするタイプなのかな？」
「いや、もう校庭の分はオカ研の方々とかが始末つけ始めてるだろうから、空いてる方に手を付けてきたんですよ。それに、これは出し惜しみじゃなくて節約。どうでもいい相手にリソース割きたくないので」
「連れないな。本当なら彼よりも君と戦ってみたかったんだけど、すまない、こっちの彼もとても楽しい相手でね。少し待っていて欲しい」
　ごう、と、風を引き裂きながら突撃してくるイッセーをひらりと避けながら語りかけてくるヴァーリに、オトモ忍越しに書主が舌打ちをした。
「相変わらず話聞かないなこいつ……。まぁいいですよ。これから兵藤先輩に勝てない貴方がどう言った所で気にもなりません」
「ほう、じゃあ君は彼をこの状態から更に強化できると？」
「先輩の真の力を引き出すだけです。……しかしその前に！」
　オトモ忍……正式名称、忍レッサーデーモン丸が捻くれた指で怪しげな印を結び、空で戦うヴァーリとイッセーの居る辺りを指差す。
　指差した腕が一瞬の内に数十回ほのかに赤く点灯し、蜂の羽音の様な『BBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBB』という音と共に、ヴァーリとイッセーの居る空間が霞んでいった。

グラウンドに降り立ち戦況を見守っていたギャラリーには何の影響も無い。

だが、知覚能力に優れた存在ならば気付けただろう。

空に居たイッセーとヴァーリは気付く、自分達がグラウンドの上空という狭い舞台から、いつの間にか地上も見えぬ何処までも続くかのような空の上に居る事に。

これぞ戦場というリングを己が思うままに作り変える、かつて存在したと言われる超人忍者のジツ！

テンショ・ジザイ・ジツである！

「これは……！」

地上も見えない程、ではない。

本当にヴァーリとイッセーの視界には地上が写っていない。

グラウンド上空で戦っていたヴァーリとイッセー。

二人を中心とした十数メートルの空間を忍び結界により隔離し、数十回の倍加により内部空間を拡大することにより作られたこの空間は、文字通り無限に続く空のリングだ。

「へへ、読手のやつ、嬉しい真似してくれるぜ」

「何？」

ヴァーリと向かい合うイッセーが龍の顔で不敵に笑う。

見ればその肉体から溢れ出る龍の闘気は先までよりも更に膨れ上がり、物理的な圧は大気を軋ませる程になっていた。

「これだけ離れてりゃ、校舎や部長たちに気を使わなくていい！　真の力って、そういう事だろ！」

「違いますよ何言ってるんですか少年誌のインフレバトル漫画じゃあるまいにご自分のジャンルを弁えて発言してくださいよ」

「え、えぇー……。じゃあ、なんだってんだよ」

姿の見えない後輩に冷ややかかつ平坦な口調でまくし立てられイッセーの闘気が僅かに萎える。

「いいですか。まず大前提として、この戦いは先輩にとってとても大事なものを守るための戦いでもあります」

「大事なもの……つまり」

「決っているでしょう。おっぱいです」
「待て、待て」
部長と仲間、と考えていたイッセーは、躊躇なく断言した姿なき後輩の声に静止を掛けるも、次の言葉が止む気配は無い。
「先輩にとって大事なものはおっぱいでしょう。別にグレモリー先輩やアーシア先輩の事が大事でないと言っている訳ではありません。彼女達も先輩にとって大事な守るべきもの。つまり、逆説的に彼女達は先輩にとってのおっぱいでもある、という事になります。違いますか？」
「え？　あ、う、ん。……そうなるのか？」
まくし立てられる、日常生活ではそうそう聞くこともない様な無茶な論法。
口にする後輩のあまりに確信に満ちた口調に、そしてイッセーに刻まれた【読手書主という人間への警戒心が薄い】という一文が、イッセーの正常な頭脳から疑う心を奪い去っていき、最後には自信なさげに同意してしまった。
「なります。そしてここからが本題です。あの付き人さん……ヴァーリ某の神器は真の力を発揮した際、周囲のあらゆるものを半減し、半減した分の力を自らの力に載せて戦います。つまり……」
「つまり？」
「もしこのままヴァーリ某が本気のまま駒王学園にまで戻ったなら……あそこに居るグレモリー先輩のバストも半分になり。彼の力として『消費』されます」

その言葉を聞いた瞬間。
頭の中が真っ白になった。
あのおっぱいが。
大きくて、美しい、おっぱいが。
部長のおっぱいが。
半分――――
「ですが」

自分の中で、今まで湧き上がったことのない感情が爆発する寸前、声が聞こえた。
「使い方次第では……」

腹話術（離れた場所から声を出す忍術の一種）で広大な結界内の遥か彼方に居る兵藤先輩に知恵を授け、経過を見守る。
見守る、と言っても、結果は見えたようなもの。
此方は兵藤先輩が何をどうされれば激昂するか、怒りだけがパワーアップになるか、何を起点にパワーアップするか、多くのパターンで実験済みなのだ。
今回の状況は初めてだが、今までの傾向から考えるに、煽り方はこれで合っている筈。
「おい、本当にあれで勝てんのか？」
背後で此方から兵藤先輩へのアドバイスを聞いていたアザゼルさんが疑わしげに聞いてきた。
さもありなん。
割と膨大な実験結果から導き出した最適解とはいえ、此方もなんでそうなるのか、と聞かれると説明はできても納得しかねる。
だが、一つ言える事があるとすれば……。
「馬鹿の一念、岩をも通す。と言いますでしょう？　兵藤先輩の馬鹿は、天駆ける龍をも貫く神滅具級の馬鹿だ、という事ですよ」
どれ、校庭の通常空間に残された面々も戦いの行く末は気になる所だろう。
忍び結界の設定を少し調節して、現場の映像と音声をはっきりさせてしまおう。
そう思い展開済みの結界に追記のために指をなぞらせている間に、空の戦いは一層激しさを増していた。

動きが変わった。
先までの龍の身体と神器による倍加に頼った野獣の如き動きではない。

そこには確かに、自分には理解できない何かを狙う知恵の気配があった。
当然と言えば当然の事だ。
兵藤一誠は赤龍帝である。
兵藤一誠の肉体は限りなく龍に近い。
しかし、兵藤一誠の魂は、頭脳は、悪魔に転生した人間のもの。
格上相手の戦いとなれば、仮に戦闘経験が乏しくとも相手の裏を掻こうとするのは当然と言える。
更に、動きの変化はそれだけに留まらない。
ごう、と、吹き荒れる風と共にイッセーのぶちかましがヴァーリに向かう。
その速度は先の戦闘時と較べても明らかに早い。
それこそ、イッセーが先に間違いだと言われた、本気の一端。
自らの肉体だけでなく、周囲を取り囲む大気、いや、自らの動きが生み出した周囲の気流への倍加譲渡による追加加速だ。
イッセーはお世辞にも頭がいい方ではない。
航空力学を学んでいる訳でもないし、当然この加速方法も効率的とは言えない雑なものだ。
しかし、イッセーはこの数ヶ月、自分の力を高め続けていた。
仲間との修行、空いた時間でのバトル漫画による新たな強さを得るための情報収集。
そしてマンガやその他雑多な情報源から得たヒントを元に生み出した小細工のような力。
しかし、それは今、確かな形となって対敵であるヴァーリに危機感を抱かせていた。
年単位で鍛えた者達には及ばないかもしれない。
俄仕込み、神器任せの強さかもしれない。
だが、イッセーに今までしたこともない様な努力をさせるだけの何かが、新たな悪魔としての生にはあった。
求めていたモノを手に入れられた幸福、死ぬ事で得たものを失う恐怖、未来への希望、過去へのトラウマ。

イッセーの中にあるそれは決して褒められた欲求ではないかもしれない。
下心に性欲に獣欲にまみれていたかもしれない。
だが、強さを求め続けるヴァーリのそれと比較して、決して劣ることのない強い想いだ。
「ドライグぅっ！　アスカロンにパワーを！」
『承知っ！』
『Ｔｒａｎｓｆｅｒ!!』
風に乗ったイッセーのぶちかましをヴァーリが寸での所で回避したその瞬間。
アスカロンを収納した『尾』がヴァーリ目掛けて振るわれた。
剣術なんて使えない、拳句、半竜と化した本気の身体では剣を振る事すらままならない。
そんな判断から半竜化と同時に形成される龍の尾の外殻に組み込まれたアスカロンが、その刀身を見せぬままに振るわれる。
勿論、全速でヴァーリにぶちかましを行っていた為、交差する時間は一瞬、加速状態から無理に繰り出した尾による一撃の振り幅はヴァーリに届くかすら怪しい。
しかし、そんな事は既にイッセーにとってもドライグにとっても織り込み済み。
肉体スペックにまかせて暴れていた先までは忘れていた努力の日々を思い出す。
全速でのぶちかましを避けられた時、すれ違いざまに相手に無防備な姿を晒してしまうかもしれない。
そんな時、限られた攻撃手段の中で一番融通の効く龍の尾による一撃の当て方を、イッセーとドライグは前もって決めていた。
全速での前進からの無理矢理な尾の一撃。
それにより乱れた気流の一部が、アスカロンと共に譲渡の対象に指定されていた。
強風レベルだったその乱れがまるで大型台風の如く風速を倍加され、アスカロンの収まった尾の軌道を引き千切らんばかの勢いで強引

に修正。
その一瞬の一撃に対し、ヴァーリは光の盾を展開し、更に両腕を交差させて防御の姿勢を取る。
だが、光の盾も両腕を包む白龍皇の鎧の装甲も、質量と速力が載せられた龍殺しの剣の威力にガラス細工の様に粉砕されてしまった。
受けた一撃の威力を消しきれず宙に舞うヴァーリ。
一時的に浮力を失い錐揉み状に吹き飛ばされながら、しかし、仮面の下でヴァーリは獰猛な笑みを浮かべた。
策が在るわけでも、この状況を読んでいた訳でもない。
ただ、ライバルであるべき男の思いがけぬ強さに、思わず笑みが浮かんだのだ。
禁手の鎧を砕かれ、腕はへし折れた。
身に受けた衝撃の強さから声も出ない。
並の強敵ではない。
これが、これこそが、ライバル！
切り札を切る時も近いかもしれない。
そう考えながら、未だ来ない追撃に疑問を懐きかけ、止めた。
ここまで神器を使い熟している男が、神器の中の龍とあそこまで通じ合った男が、何の意味もなく自分を放置する訳がない。
ヴァーリが態勢を立て直しながら、イッセーの姿を探す。
無限に続く様な空の中ではその姿は小さくなれども見失う事はあり得ない。
「見つけた」
燥ぐ子供の様に無邪気な声。
視線の先のイッセーは、砕けた白龍皇の鎧、その宝玉に向け、大きく口を開いていた。

弾き飛ばした無防備なヴァーリを尻目に、イッセー／ドライグは真っ逆さまに下へ飛翔する。
目指すは一点、砕けた鎧からこぼれ落ちた、白龍皇の鎧の宝玉。
「準備はいいな!?」

『良いのか相棒。危険な賭けだ。いくらお前の体質とはいえ死ぬかもしれんぞ？』
「死なねぇよ！　まだ部長の処女も貰ってない！　ハーレムだって作ってないってのに！　でも、俺はなぁ！」
『あの男の言葉を信用するのか？　あれは我等の事を知りながら言う言葉ではない。奴が正気でないか、さもなければ……』
「違う！　あいつが仮に正気じゃないとしても――これは、俺の望みだ！」
『……そこまで言うのなら、俺も覚悟を決めよう！　かつては力の塊と称された赤き龍の帝王！　そしてその相棒ならば、生きて乗り越え、辿り着くのみ！』
「行くぞ、ドライグ！」
『応！　征くぞ我が相棒、兵藤一誠！』
　イッセー／ドライグの顎門が大きく開かれ、無限の空を落ち続ける宝玉に追いつき、閉じる。
　白龍皇の鎧の一部、力の一片を含んだ欠片はイッセー／ドライグの凶悪な乱杭歯に噛み砕かれる事無く、舌の上を滑り、ごくり、と、喉奥へと飲み込まれていく。
　体内に取り込まれた異物を、天敵であり反存在とも言える敵の一部を吐き出さんと強烈な激痛と嘔吐感が生まれる。
　いや、それも一瞬の事だ。
　これから行う事が齎すであろう痛みを想像すれば、今ある痛みはまるで痛痒にも感じない。
『BoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoost!!!!!!!』

限界一杯の倍加。
肉体に掛かる負荷を考慮した上で行える最大の倍加だ。
これを――
『Ｔｒａｎｓｆｅｒ!!』
体内で苦痛を生み出す宝玉に、残らず譲渡した。

「おいおいおい、自殺行為だろそりゃ」
校庭上空に浮かぶ結界表面に映しだされたイッセーの姿を見ながらアザゼルは呆れるように呟いた。
赤龍帝と白龍皇の力は相反する力だ。
倍加する力と半減する力は打ち合えば拮抗し、混じり合わせれば消滅する。
無害という訳ではない。
物質と反物質が触れ合った時と同じように、消滅に際して生み出される力の波動は破壊的でもあり毒性のようでもある。
それは誰かが決めた事ではなく、あり得ざる事が起きるが故の世界の拒絶反応とも言うべき現象なのだ。
それを、龍化した程度の下級悪魔の腹の中で行えばどうなるか。
赤龍帝の籠手や、その禁手のなりそこない程度でどうにかなるものではない。
そもそもその破壊力を生み出す原因の片方こそが赤龍帝の力なのだから、悪化こそすれど緩和される事はありえない。
今代の赤龍帝、兵藤一誠は体内から爆発して死ぬ。
つまらない結末だ、と、自らが戦う準備をし始めたアザゼルに対して、結界を維持するオトモ忍を制御していた書主が口を挟んだ。
「そうでもありませんよ。ほら」
言われ、訝しげに結界に映しだされた映像を見直す。
絶叫を上げながら破滅的な波動を放っていたイッセーの肉体が、鎧が、膨張と収縮を繰り返しながら発光し始めた。
何かの前触れを感じさせる光、進化の光、それは、禁手へと至る神器の輝きに似ていた。

「……なんですか、あれは」
「まさか、また禁手化するのか？」
「何？　イッセーの神器は既に禁手なのではないのか？」
魔術師の殲滅を終えたオカ研のメンツが書主とアザゼルの姿を見つけ、近寄りながら疑問を口にした。
単純な疑問の小猫、新たな禁手の予感に驚愕する祐斗、イッセーの神器にさして詳しくないゼノヴィアの現状以前の疑問。
それに応えるように、視線を結界に向けたままの書主が静かに答えた。
「進化ですよ。赤龍帝の籠手だけじゃない、先輩だけの進化！」
ぎぃ、と、口の端が裂けんばかりの笑み。
「イッセーの、進化？」
「そう、これは神器の力じゃない。赤龍帝の籠手には無かった可能性（記述）、兵藤一誠という男が持ち得たからこそ生まれた、新たな進化（自己追記）！」
不安げに状況を見詰めるリアスに、興奮気味に語る。
「だが、あり得るのか？　赤龍帝の力と、白龍皇の力の、融合なんて」
「ありえるんですよ。あの先輩なら」
映しだされた映像の中で、イッセーの肉体が、半竜としての肉体が、それを覆う赤い鎧が、弾け、砕け、形を失う。
死。
それを連想した者は一瞬悲鳴を上げ、しかし、次いで一つの予感を得た。
それは――

それは、一つの奇跡の顕現であった。
それは、或いは必然でもあった。
神が死に、世界を動かすシステムのバランスが崩壊している今だからこそ叶う進化の形。
そもそもが、イッセーの想いの強さにあった。
【肉体的にドラゴンの影響を受け入れ易い】
【心は燃えても龍の激情に飲まれず】

【兵藤一誠の思考は龍に侵されない】

これらの記述はイッセーに良い影響を与えるばかりでも、悪い影響を全て防ぐものでもない。

イッセーの肉体は、自らの内にある神器、赤龍帝の籠手の影響を受け続ける事でほぼ龍と言っても良い構造になっている。

しかし興奮した所で龍の持つ強い怒りに流される事はない。

龍の持つ野生の強い獣特有の傲慢さや、永い時間を生きる者特有の気長さも持たない。

彼の姿は人から外れず、心が人から離れる事もない

だが、それでもイッセーの肉体は龍であり、イッセーの魂は人間から変じた悪魔のものなのだ。

本来であれば、龍と化した肉体は見た目を人間の様な形に取り繕ったとしても龍としての生理作用を行う。

消化器系は人間的な食生活を送っている今は関係ないとしても、そうでない部分は強い影響を受けざるを得ないのだ。

龍の肉体、龍の肉体を制御する龍に近付いた脳細胞。

それが齎す顕著な変化は――――龍への発情と、遠い種族への性的好奇心の減衰。

だが、イッセーの性欲は変わらなかった。

同居するリアスとアーシアの性的な誘惑に対し、身分の違いや恩義、保護する立場という責任感から鋼の意志で性的な行為を、セックスを行わなかった。

出来なかったのでも、するつもりが起きなかったのでもない、自らの意志で行わなかったのだ。

リアス、アーシア。

共に龍とは遠い人型の悪魔。

彼女達に対し、イッセーは強い興奮を得ていた。

はっきり言えば、それはもう、毎日困り果てる程だった。

特訓で疲れて勃たないなどという事はあり得なかった。

常に迫る誘惑に対し、自らのヤンチャ過ぎる子息の強張りをどう処理するか。

夢精したパンツを誰かに処理させるわけには行かず、そうなる前に、事前にあらゆる方法を持って適度に処理していた。

人気のない橋の下に一人孤独に白濁のガンジス川を生み出す程の、強い性欲。

イッセーの、肉体によらない、魂から生み出される強い人間の性欲！

その欲望が、心が、魂が、龍の肉体を凌駕していたのである！

そして、龍の肉体にも曲がることのない強い性欲――欲望とは、強い指向性を持つ意志である。

そこに、白龍皇の鎧の欠片が取り込まれた。

ドライグの意志により管理されているドライグの力である赤龍帝の籠手とは違う。

既にアルビオンの意志を離れた、意識という指向性を持たない龍の力の断片。

それが、一時的にとはいえ、元の神器本体に匹敵するほどに力を増幅させられたなら。

ドライグの力で増幅され、しかし、何の意志も持たないアルビオンの力の断片は、何の壁も無くイッセーの肉体に収められている。

その力の影響を、イッセーの肉体が余すところ無く受け止める。

しかし、それだけでは済まない。

神器という殻を砕かれたむき出しの、意志という壁すら持たないアルビオンの力。

その力が、龍に影響を受けやすい、龍と干渉し易いイッセーの意志の影響を受け、更にその力でイッセーの肉体が変化を起こし……。

『馬鹿な……ありえん、こんな事は！　ありえん！』

「あり得るのさ……俺なら、な」

アルビオンの驚愕に応える様に、形を失い光と化していたイッセーが応えた。

破滅的な波動が、目を焼かんばかりの光が収束し、一つの形を作り上げた。

半竜ではない、欠けるところも歪むところもない人型。

兵藤一誠。
龍に近付いた悪魔の姿ではない。
人から外れた龍のなりそこないでもない。
龍という形に縛られない、『兵藤一誠という龍』の姿が、そこに存在した。
大敵にして対敵であるヴァーリを目の前にして、イッセーは目を閉じて思い出す。
力の矛先を、力の使い方を、新たな可能性を見せてくれた後輩の言葉。
『白龍皇の力はあらゆるものを半減させます。例えば乳に使えばバストサイズが半減しますが……それは一面的なものの見方でしかありません』
『天龍の力は、概念にすら影響を及ぼします。つまり』
『胸の小さい女の子の胸にある、胸が大きくならない原因、胸が大きくならない可能性、それを半減させる事も、理論上は可能になる筈です』
『誰にでもできることじゃありません。これを成せるとしたら、それは人を超え、龍を超え、真に乳を愛する心を持たなければ』
『……先輩なら、もしかすれば、と、そう、此方は思います。何故なら貴方は――』
神の死んだ世界だと聞かされた。
神が居ないばかりに救われなかったアーシアを、木場を、ゼノヴィアを知っていた。
だから、無いものとばかり思っていた。
これが、これこそが天啓。
瞼を開け、手のひらを見つめ、ぐん、と、握りこむ。
それだけで、結界の中の空間が半減し、無限と思える空に果てが見えた。
「！　神器ではなく、自らに取り込んだのか、このアルビオンの力を！」
「ああ、まだ何度も出来る訳じゃないけどな」
ヴァーリの驚きに静かに応えるイッセー。

まだまだ、力は足りない。
距離という単純な概念ですら、一度の半減が限界。
未熟も未熟、後輩の言っていた可能性に、境地に達するのは何時の日になるか。
いや、まだこれでいい。
自分はスタートラインに立ったばかりだ。
これからの事を思えば、今の未熟は笑って受け入れられる。
イッセーは友を思った。
友と言っていいのか、と、そう思う後輩の姿を思った。
その後輩を想う、仲間で先輩で後輩の、塔城小猫という少女の事を思った。
彼女は、たぶん、読手の事が好きだ。
本人にその自覚があるかは分からない。
自分自身、そういう男女の機微に敏いわけじゃないけど、なんとなくそうだと思う。
でも、その道は苦難の道だ。
あいつは……大きいおっぱいが、好きだ。
少なくともあいつの恋人は恋人でない自分が見ても『尊い』と思える程の大きさと美しい曲線を持つ。
前に女性陣が居ない時におっぱいについて語り合った時、こいつがリア充で無ければ親友になれたかもしれないと思う程に熱く語り合うことが出来た。
塔城小猫は貧乳である。
百歩譲っても微乳である。
そのなだらかな曲線に、巨や豊という文字は連想できそうにない。
戦力差は圧倒的、寝取る事など夢のまた夢だろう。
だが、自分なら、その道を切り開けるかもしれない。
別に、それで小猫がイッセーに好意を寄せる訳でもないし、おっぱいを触らせてくれる訳でもない。
言ってしまえば人の乳。
世の中には揉んでいい乳と悪い乳がある。

小猫の乳を揉む事はイッセーにとってすら悪い事だった。
上手く行っても、人のものになるおっぱいだ。
救う意味があるだろうか。
そんな疑問は、もう、沸かない。
「これが、君の本気か」
「いや、まだまだ。もっと強くなるぜ」
そう、この程度で満足なんてしていられない。
揉めない乳がなんだ。
他人に揉ませる乳がなんだ。
乳は乳。
おっぱいは、おっぱい。
等しくエロく、尊い。
そして、そのおっぱいに悩む女性達を、おっぱいを、貧という哀しみから救う為に。
こんな所で立ち止まるわけにはいかない。
「何故なら俺は」
『何故なら貴方は』
記憶の中の後輩に頷き、重なる様に宣言する。
人を超え、悪魔を超え、龍を超え。
今こそ俺は――――
『ｂｕｓｔ ｂｏｏｓｔｅｒ!!』
『ｗｅｌｓｈ ｂｕｓｔ ｄｒａｇｏｎ ｂａｌａｎｃｅ ｂｒｅａｋｅｒ!!!!』
『ｂｕｓｔ ｍｅｓｓｉａｈ ｏｖｅｒ ｄｒｉｖｅ!!!!』
赤く、しかし、随所に白い文様の入った全身鎧。
仮初の、つぎはぎの禁手ではない、真の禁手。
いや、真の禁手すら超えた、イッセーの、イッセーだけの禁手。
宿主の求める山の頂きにも似た薄紅色、いや、桜色のオーラを舞い散る桜の花弁の如く吹き出しながら、叫んだ。
「おっぱいの救世主だ！」

「最悪！　最悪ですよ先輩！」
ゲタゲタと笑い転げる。
先輩をそう定義したのは確かに此方ではあるが、まさかこのシリアスな場面でそういう宣言をするとは思いもよらなかった。
兵藤先輩には芸人の素質があるのかもしれない。
いや、素でこれだから、芸人というよりはいじられ役の素質と言うべきか。
「なんででしょう、なんだか無性に先輩を殴りたくなってきました」
「ちょっと読手くん！　イッセーに何を吹き込んだの！」
塔城さんが不機嫌そうに結界の向こうの兵藤先輩に舌打ちし、グレモリー先輩が何故か此方を問い詰めようとしてくるが、些細な事だ。
結界の文字列に記された、映しだされる映像に関する文字列から推察するに、兵藤先輩の勝ちはこの場においては決まったようなものだろう。
今の兵藤先輩は、言わば赤龍帝と白龍皇のいいとこ取り。
本体である兵藤先輩自身の制御能力が上がったお陰で龍の膂力に引き摺られる事無く戦える。
白龍皇である付き人さんが真の力、覇竜とかいう暴走技を使おうとするも、中のアルビオンさんに止められて使い損ねている。
状況は既にほぼ完了している。
ここからこの場でのテロリスト側の勝利はあり得ないだろう。
結界も最早必要あるまい。
忍レッサーデーモンを送還し、結界を解く。
歪んでいた空間が正常化し、校庭上空では覇竜を使おうとしている付き人さんと、何か来るかと身構える兵藤先輩。
まさに最終決戦という状況なだけあって、実に気合の入った大写しの挿絵。
バックに演出から少し大きめに描写された月が描かれて実に美しい。
が、その一枚絵が一瞬で崩れ去り、再び見苦しい文字列へと変わった。

最終決戦風の一枚絵に相応しくない闖入者のおかげだ。
「いいところで悪いなヴァーリ、迎えに来たぜぃ」
付き人さんを庇うような位置に現れた、一匹の猿の妖怪。
面倒臭いのは、種族名が猿の妖怪なのに、外見説明の部分は壊れかけの中華風の鎧を着込んだ、傷ついた青年、という、明らかな人間風の説明になっているところか。
妖怪系の連中が結構な確率で人型に近づいていくラノベ的な進化方式なのはどうにかならないんだろうか。
例えば人外系や動物系主人公のお話なのに、主人公が人化を覚えてほぼ人間と変わりない動きをする、種族的持ち味を殆ど捨てた今の塔城さんみたいになってしまうような残念さ。
しかしこの面倒な記述、覚えのある文字列だ。
ついさっき読んだ覚えがあるが、こいつは絵の具にしなかったんだったか。
猿の妖怪というのは天運に恵まれていたりするのかもしれない。
それともご先祖様のご加護か。
「何をしに来た、美猴」
口に当たる部分から血液の組成が記された文字列を垂らしていた付き人さんが、それを折れた骨を神器の装甲で無理矢理固定した腕で拭いながら問う。
「それはピンチに颯爽と現れた相方にする態度じゃないぜぃ？　撤退だ撤退。カテレアが失敗したなら、こんなとこに長居する理由も無いだろう？　戻ったら、また別の勢力に一戦かましにいかないとならんしなぁ？　……そこに居る、誰かさんのおかげでよぅ」
視線を感じる……。
でもなー、ただの気のせいかもしれないしなー。
流石の此方のニンジャセンスだって、偶には勘違いでありもしない視線を感じるかもしれないしなー。
「……凄い視線ですよ。何したんですか」
「いやぁ、術式の解析はこれでお手の物ってやつでしてね？」
転移陣なんてあからさまなものがあれば、その座標だって記述には

含まれてしまう訳で。
本部、という訳ではないようだったけれど、控えていた人数は中々のものだった。
テロリストの癖に割と豪華で広々とした建物で、実に良いキャンバスになったと思う。
インクも大量に使えたし、いやぁ、禍の団最高だね！
「それにほら、悪人に人権はありませんし」
「そういえばそうですね」
「小猫?!」
植え付けられた知識の根底にある価値観に引き摺られた塔城さんが頷き、それに信じられないとでも言わんばかりに驚くグレモリー先輩。
場の空気はゆるゆるになってしまった。
気分的にも今夜はこれで終わりという感じになったので、瞼を閉じる。
「俺らもあいつらもテロリストなんてやってるから、こういう目に合うのは納得済みってやつだけどなぁ。あそこまで滅茶苦茶をやられたら、他で取り返さないといかなくてよぅ。ねぐらとか」
「そんな遠慮しなくても、ブタ箱でも地獄の封印の中でもゴミ捨て場でも保健所のガス室でも橋の下のダンボールの中でも好きな場所に居て下さって構いませんのに」
「ははははは！　まぁ、お前さんがどういうやつかは今回で十分に分かったさ。覚えておきな、俺の名は美猴、今代の孫悟空だ」
付き人さんを伴い地面に降り立った猿妖怪――美猴さんが地面に棒をとん、と付く。
異様な感覚と共に、異界に繋がる門が彼等の足元に開いた。
逃げるつもりなのだろう。
「それ、覚えてると何かいいことあります?」
「さてな。でも、『アイサツは大事』なんだろう?」
「む」
「じゃあな、日本のニンジャ。また会おうぜぃ」

ずぶずぶと沈んでいく。
一瞬で消える、という事ができない術なのか、それともアイサツの為に送らせているのか。
それに飛びかかるのは、一皮向けて紙一重の向こう側に旅立ってしまった兵藤先輩だ。
「逃がすか！　……って、あれ」
ぼすん、と、壊れたストーブが煙を吹き出す様な音を立て、兵藤先輩の鎧の隙間からエネルギーがもくもくと溢れ出てきた。
電池の切れた人形の様に兵藤先輩の身体が動きを止め、突撃の勢いのまま顔面からグラウンドに滑り込み、全身鎧が土を盛大に削る。
予想はしていたことだけど、よくここまで持ったと思う。
「なんで、って顔をしているだろうと思うので説明しますが。先輩の肉体は今さっき作り変えられたばかりです。で、肉体を作り変える材料は先輩の肉体、作り変える燃料も先輩の肉体から捻出された訳で……」
「ガス欠か。格好つかねぇなぁ」
アザゼルさんがそうぼやくのも仕方がないとは思うが、個人的にはあのおっぱいの救世主宣言のお陰でそれ以降の戦闘がどう頑張ってもシリアスに見えなかったので今更だ。
まぁ、あの状態でも白龍皇の暴走状態に勝てるかというとイマイチ不確定だし、大事な学校でそんな大怪獣バトルをさせるわけにもいかないから丁度いい頃合いだろう。
「今日は良い戦いだった。魔王の血筋で白龍皇の俺は一人相手にそう入れ込む訳にもいかないが、何時か必ず、この続きをしよう。その時はもっと、そして、そこのニンジャも混ぜて――――」
凄くうざい事を言いかけながら、付き人さんは美猴さんと共に小型の異界に沈んでいった。
……まぁ、少なくとも今回の事であの面倒な人のメインの標的は兵藤先輩に移った筈。
此方は予定とは違う場所だったけど大量に塗り絵出来たし、ギャスパーを陥れた主犯を無限地獄より恐ろしい場所に落とせたし、結果的

には＋になったと考えよう。
さあ、明日から今日になった土日の二連休を楽しむ為に、さっさと後片付けをしてお開きにしてしまおう。
「なぁ、ちょっといいだろうか」
「はい？」
壊した部室を直しに行こうとしたところでゼノヴィアさんに声を掛けられた。
今回の件で特に尋ねられる様な事はした覚えがないし、ゼノヴィアさんはそういう難しい事は考えないタイプだと思ったが、なんだろうか。
「……さっきの白龍皇の発言、聞きようによっては男三人による乱交の誘いに聞こえたのだが」
「ゼノヴィアさんはここらで一度悔い改めたらどうでしょうか」
或いは脳外科とか行くといいんじゃないかな。
向こうでミカエルさんが凄く不安そうにしている。
デュランダルも流石にそろそろ没収されるんじゃないか？
「いや待て、私も男同士は不毛だと思う。だが……もしかして、君と日影のプレイに私が混ぜてもらうという形なら許されるんじゃないか？」
「許されませんよ。絶対に許されませんよ」
「そうか……まぁ、考えておいてくれ」
オリハルコンメンタルかな？
でも、まぁ。
ギャスパーみたいに、瞼を開けたまま、文字列でもヒトなんだって、そう思えたら。
「ああ、でも」
ふと、思い出す。
少し状況は違うけれど。
「うん？」
思わず口に出た声にゼノヴィアさんが振り向き、何事かと首をひねる。

「いや、なんでもありません。さ、校舎の片付けに参りましょう」
ちょっと前、心根を聞き出す時に聞いた、塔城さんの喘ぎ声。
心と口を緩くするために弄り倒した肢体の感触、肌触り。
あれなら、普通にアリだな。
まぁ、塔城さんがそういう誘いをしてくる事は無いだろうけど。
なんとは無しに、そんな事を考えた。

三十四話　私と貴方の立ち位置

「これは……また、派手にやられたな」

色、色、色、色。

禍の団の拠点――拠点跡に転移したヴァーリは、心なしか嬉しそうにそう呟いた。

目の前にある光景を事情を知らない誰かに見せたなら、廃墟を利用した現代アートか何かとしか思えないだろう。

半ばから崩れ落ち、バケツに入れた塗料をひたすらぶちまけ続けたかの様に色とりどりに染め上げられた、大きめの鉄筋コンクリート製の廃墟。

だがしかし、この場所が禍の団の数ある拠点の内の一つで、ほんの数時間前まではマイナーな宗教団体の施設にカモフラージュされたそれなりに新しい建物であった事、そして襲撃担当の魔術師以外にも多くの禍の団の構成員が詰めていた事を知っていれば話は違う。

人の気配が無いのは、少し前にこの場からは全ての生き残りの構成員が逃げ出して行ったから、というだけではない。

そこも、そして、塗りたくられている塗料も、ある男の情報を知っていれば、自ずと答えが見えてくる。

「幹部連中がそれほど詰めていなくて助かったぜぃ。……俺っちが生き残れたのだって、あいつが気まぐれに標的を選んでいたから、ってだけだろうしよぅ」

「そこまでのものか」

「嬉しそうに言われても困るんだがなぁ……」

苦笑する美猴に、しかしヴァーリは気にもせず廃墟に降り立ち、乾きかけの塗料の水溜りの中を歩く。

すぅ、っと、冷ややかなインクの香りに満たされたそこで何があったのか。

聞いていたニンジャの情報を元に考えれば、実に一方的な戦いだったのだろうと想像できる。

戦わずに逃げたのはもったいなかったか。

しかし、戦えば無事で済んだかどうか。
理性と本能がせめぎあう感触を楽しみながら、壁だった瓦礫に塗りたくられた塗料を指先で触る。
血や肉、骨などの人体を想起させる記号は、匂いも感触も残っていない。
「これは、何なんだろうな」
不思議な力だ。
戦いに直接関係する能力ではない。
かと言ってニンジャ、もしくは忍者としての仕事に必要な技能とも思えない。
聞いた話では、この惨状を作り出している最中、終始笑いっぱなしであったという。
趣味にしても実に悪趣味だ。
「ここに残ってるのはただの塗料でしか無いニャン」
誰に問いかけた訳でもないヴァーリの疑問に応えたのは、気配もなく瓦礫の影から姿を表した、着崩して胸元を大きく露わにした和服を身にまとった黒髪の女。
居たことに気付かずとも、居ても不思議ではないと思っていたのか、ヴァーリは特に驚きもしない。
「人間を材料にした、か？」
ヴァーリの再びの問いに、黒髪の女はふるふると首を振った。
「塗料、ってことしか分からないにゃん。……石も花も、勿論、人間が使われてるようにも見えない」
巫山戯るような『にゃん』という語尾をつける事すら忘れ、塗料を見詰める表情には怪しげな笑みが浮かんでいる。
そこに仲間を殺された哀しみや悔しさ、怒りといった感情を見出す事はできない。
ただ、不思議なものに対する、未知に対する好奇心と、野性的な悪戯心だけがありありと浮かんでいた。
「お前の仙術でもわからないか」
「てなると、もう手がかりは無し、と。いやはや、強敵じゃないの」

「なに、その方が挑み甲斐もある」
「まったくだぜぃ。……さ、そろそろ引き上げだ。いい加減、悪魔や堕天使だってやってくるだろうしな」
未だ相対せぬ強敵との戦いに意気を燃やす男二人に溜息を付き、黒髪の女は空を見た。
視線は空に、しかし、思う先は男達と同じ。
「白音は随分と面白い男を捕まえたみたいにゃん。面白すぎて……お姉ちゃん、ちょっと心配だわ」
一度、確かめてあげないとね。
そう小さく呟き、猫の様にくしゃりと笑みを浮かべた。

終業式も近づき、一学期も終わりが近いある日。
いつもの様に読手さんを誘ってオカ研に夜までの時間つぶしに行くと、部室に見慣れないし別に見慣れたいとも思わない姿があった。
着崩したスーツに身を包んだ、堕天使総督のアザゼルだ。
「そんな訳で、今日からこのオカルト研究部の顧問になることになった。総統でもアザゼル先生でも、好きなように呼んでくれ」
「じゃあ種なしカボチャって呼んでも良いですか」
「……アザゼル先生か、総統かで呼んでくれ。あとな、出来なかった訳じゃないぞ。大体は寿命で先に死んじまったし、やりまくって落ち着いた後は避妊もし始めたからな」
「へー」
「自分で言い出しておいて興味なしかい」
目の前でおもむろに始まった自己紹介コントを見ながら、部室の中に居る皆が困惑している。
私が部室に入った最後のメンバーのようだけれど、元から中に居た他の人にはここまで自己紹介もせずに部室の中に居座っていたのだろうか。
私が部室に入るのを確認すると前置きも無しに自己紹介を始める辺り肝が太いというか、そこまで行くともう少し繊細に生きてほしいとも思う。

で、その後の話を聞いた限りでは、オカ研、というか、グレモリー眷属に関わる為に生徒会長に頼んでこの学校に教師としてねじ込んで貰ったらしい。

なんでわざわざ、と、理由を聞けば、貴重な神滅具に特殊な禁手化をさせたイッセー先輩や、聖と魔の垣根を超えた禁手化を果たした祐斗先輩など、見どころのある新人を鍛えて神器の研究をするためとの事だ。

この間の襲撃を境に本格的に表で動き始めた禍の団とかいうテロ組織へのカウンターとしてイッセー先輩を、ひいてはグレモリー眷属を鍛えあげるという名目もあるのだとか。

「戦争かぁ」

「何、始まるのは当分先の話だ。お前らが学生の間は……そうだな、大学を卒業するまではそこまでの話にはならねぇ。せいぜいが小競り合いが増える程度か。だが、時間があるなら備えておくにこしたことはない」

「うう、ん……」

難しい顔で首を捻るイッセー先輩。

まぁ、当分先だろう、なんて言われても、戦争が起きると言われて落ち着いて居られる程私達は修羅場なれしている訳でもない。

言われてしまえばどうしても何処かで意識してしまうのも仕方がないのかもしれない。

「部外者の此方が言えたことじゃないですけど、別に先輩が難しく考える必要はありませんよ。兵藤先輩はグレモリー先輩の部下、しかも兵卒です。手足みたいなものです。戦争が起きたなら、どう動くか考えるのは部長さんの仕事、先輩の仕事はその場その場でがむしゃらに働くこと。ね？」

珍しく読手さんが自分に利益の無い事でイッセー先輩に助言をしている。

明日はペンキでも降ってくるんだろうか。

というか、何気に読手さんはイッセー先輩に対してもそれなりに親切な気がする。

この間の会議の時もパワーアップのきっかけは読手さんの言葉だったと聞くし。

祐斗先輩には希少なアーティファクトを無償で渡して居るし、ギャー君なんかはまた新しく魔眼殺しの眼鏡を貰ったらしい。

対して女性に対して何かあげてるのか、と言えば、一番付き合いのある私ですら魔術を教えられた事を除けばお菓子を分けてもらう程度。

まさか、ほ……

「ふにゃっ！」

「人をホモ扱いすると、ノンケだという事を貴方の身体で証明させてもらうことになりますよー」

うなじを指先でなぞられるぞわぞわする感触と共に読手さんに思考を遮られた。

反射的に反撃しようとするも、ギリギリの所でひらりと身を躱されて避けられてしまう。

更にイラつくのは部長や副部長含む他のメンバーの視線だ。

今のやり取りに何処ににやにやといやらしく笑う要素があったのだろうか。

「以心伝心ってやつね」

「一撫でであんな声を出させるなんて、普段からどんな付き合いをしてるのかしら、不純だわ」

「伝わってないですし付き合ってないですし不純でもないです……！」

が、言い返すのが精一杯だ。

なぞられた首筋の辺りを手でさすって気を落ち着ける。

指一本、数センチも撫でられていないのに、奇妙な程に背筋からお腹の下辺りまでを突き抜けるような感触が残っていて、怒り気味な声で無ければだらしない声になってしまうかもしれない。

肉体的な接触なんて殆ど無いのに、なんでここまで的確にくすぐったいポイントを当てられるのだろうか。

「お楽しみの所悪いんだけどな、お前も人事では済まされないんだよ」

「はい？」
「今更な話ではあるんだけどな。お前の力を危険視する声が高まってる」
……そこら辺は、本当に今さらだ。
彼は既に自分が戦う理由に関しては表明しているし、堕天使や悪魔や天使が真っ当に動いている間は害にならないだろう、と、そういう結論に至ってもいる。
だけど……、その結論を素直に受け入れる事ができないヒトたちが居るのも事実。
力があるなら、何時か自分達にとって害になるんじゃないか、なんて考えてしまう馬鹿なヒトたちが多いというのも、この世界に不幸が多い原因なんだと思う。
「会議じゃ結局有耶無耶になっちまったけどな、早い内に何処かの組織に身を預けねぇか？　お前のその力を欲しがる連中は腐るほど居る。そして、その中には真っ当じゃない手段を使ってくる連中だって少なくはない筈だ」
「ああ、そういえばそんな話もありましたね」
「一応、真面目な話だからな？　……実際、適当なところに名前を預けておくだけでもかなり違ってくる筈だ」
「それなんですけどね？」
「あ、あああ、あの！」
アザゼル……先生と読手さんの会話に、部屋の隅で縮こまっていたギャー君が割り込んだ。
ここで何か口を挟むとは誰も思っていなかったからか、部屋中の視線が一斉にギャー君に集まる。
以前までのギャー君ならここで泣き叫びながらごめんなさいごめんなさいと謝り始めてしまうような状態。
でも、ギャー君は自分に突き刺さる視線に少し怯んで身体を小さくし、恥ずかしそうにするだけ。
何か、この間の会議の時から一気に成長したように見える。
友達としては嬉しいんですが……。

「書主さんが、悪魔の側に来てくれたら、う、嬉しいなぁ、なんて……」
言葉の最後に向かうに連れて声を蚊の鳴くような小ささにしつつも、しっかりと言い切るギャー君。
言い切った後に顔を真っ赤にして俯いてしまい、頭から湯気を出している所は、女の私から見ても思わず嫉妬してしまいそうになるほど可愛らしい。
まさにラブコメのヒロインといった王道のリアクションだ。
……彼が男で、その表情と仕草の原因が、同級生の同性の男の友人である、という点に目を瞑れば。
こういうラブコメ展開になる度に僅かな怒りと共に読手さんに嫉妬しているイッセー先輩ですら、どういうリアクションをしていいのか分からないといった複雑な顔で固まっている。
祐斗先輩はニコニコ笑いながら我関せず、一番安定している気がする。
通販で買ったゴテゴテした籠手を嬉しそうに磨いている事を気にしなければだけど。
部長は神妙に成り行きを見守っている……ふりをしている。
けれど、なんだか妙に興味深そうに瞳を輝かせているのはなんでですか学園のお姉さま（笑）。
副部長もあらあらとか言いながら嬉しそうに頬に手をあてている。
そのリアクション前にも見たけど前と同じ感じじゃないですよ男の子同士ですよ。
あとゼノヴィアさん、何か『閃いた！』みたいな表情してますけど閃かなくていいですきっと碌でもない思いつきですそれは。
そんな中純粋にハラハラと心配そうな表情で状況を見守っているアーシア先輩。
もしかして天使かもしれない。悪魔なのに聖女で天使とか、さすアーです。
「あー……ゴメン、ギャスパー。実は、もう大きめの組織に所属しているから、悪魔側に所属する訳にはいかないんだ」

「そ、そうなんですか？」
「うん、籍だけ置いてるようなものだけど、単純に学業を終えるまで仮ってだけで、事実上内定貰ってるようなもんだし、今も小さな仕事とか任されてるから。今更不義理はできないよ」
言われ、しょんぼりとダンボールの中に座り込んで落ち込んでしまったギャー君の前で膝を付き、読手さんがナチュラルに頭を撫で、柔らかく微笑みかけた。
たらしかな、と、ついつい勘ぐってしまうと同時に、同性の同級生にそんな行動を躊躇いなくできるという事実に戦慄を覚える。
「でも、所属が違っても、此方とギャスパーの関係が変わるわけじゃない。そうだろ？」
「う、うん！」
……ギャー君の表情に喜び以外にも、こう、複雑な……。
友達のままかぁ、でも、これから変えていけばいいよね！　みたいなものが含まれているように感じるのは気のせいでしょうか。
いや、それはひとまず置いておくとして、もう一つの方が重要だ。
「それを先に言っておきゃ、ここまで話を引っ張らずに済んだんだけどなぁ。……で、その所属している組織ってのは何処だよ。小さな組織、って訳じゃねぇんだろ？」
「何を期待されてるかはわかりませんが、悪魔とか天使とか、そういうファンタジーな勢力じゃないですからね」
「ハハハ、ニンジャが何か言ってるぜ」
「コントはいいですから。……それで、読手さんは何処に所属してるんですか」
できれば同じ陣営で、卒業後も友人として日常的に、と思っていたけど、少なくとも彼の所属はこれで明らかになる。
ギャー君が言われていた通り、会う機会が少なくなったとしても友人としての交流は残るんだ。
それに、まだ入学したばかりの今、そんな先の事を考えてうじうじするのは勿体無い。
読手さんが大きな組織から狙われやすい、立場の危ういフリーでな

い事がわかっただけでも儲けものと思う事にしよう。
「此方が身を置いている組織は――――」
――――――――――――――――――――
流石に『え、何処？』みたいなリアクションこそ無かったけれど、あの場に居た大半のリアクションは『え、其処？』みたいなものだった。
けど、仕方がないとも思う。
悪魔や天使などのファンタジーな連中に対しては極めて高いレベルでの隠蔽工作を行っていた筈だし、知っていたとして余程高い地位に居る、貴重な情報を預かる連中に限るだろう。
世間的に見れば、ただの世界規模の大企業でしかなく、裏の戦場に関わる組織とは思われていない筈だ。
首を傾げる大半の連中の中、『おお、大企業じゃないか！』と素直に感心してくれた兵藤先輩はなんだか癒し系の素養がある様な気がする。
グレ森さんが彼を気に入っているのは、ああいう素朴なところに可愛らしさを感じるからなのだろうなぁ。
「っと、そうだそうだ」
重ね書きされた挿絵で出来た机の引き出しから、仕事用の携帯を取り出す。
仮に身を置いている組織から渡されたものだ。
まだまだ此方からすればバイト感覚で仕事をさせてもらっている身でありながら、貸出でなく譲与されたこのやたらと高機能で頑丈な携帯だが、ここ数ヶ月ほど存在を忘れていた。
「矢文とか、口頭の方が機密性高いからなぁ」
これも様々な暗号化等の技術によってかなり安全に通信できるけど、傍受される可能性が無いとは言い切れない。
でも、まぁ、もうそろそろ夕ご飯の時間だし、偶には使わないと、もし要りようになった時にいつの間にか壊れてて使えませんでした、じゃ、話にならないしな。
「ええと、何処らへんの情報を売ろうか」
入学前までは滅多な事で買い取ってもらえるような情報は手に入

らなかったけど、入学してからは結構色々な話を耳にした。
何処までを上司に対する忠誠の証として売り渡すか、何処からを自分の武器として懐に収めておくか。
その取捨選択が社会で生きていく上で重要なのだ、と、父さんが言っていた。
母さんは組織を捨てて吸血鬼ハンターしたり路地裏生活したりネカフェ生活したりの自由人だから余り好まないようだけど、この考え方はニンジャが生き残るのには大切な心構えだと思う。
メール形式のアプリで、幾つかの情報を入力し、相手に送信。
あとは査定が終わるのを待つだけだ。
夕飯ができるまでの時間が少しあるので、宿題でもやっておくか。
そう思い、机の脇に掛けていた鞄に手を伸ばした所で、仕事用の携帯から着信音が鳴り響いた。
メールの着信音ではない、滅多に聞かない、仕事用携帯の電話の方の着信音だ。
「しかもこの着信音……はい、もしもし」
携帯から聞こえてくる、理知的な声。
丁寧に日本語で喋ってくれているけれど、どこか外国語の訛りがほのかに感じられるこの声の持ち主が、此方の、引いては父さんの勤め先の一番偉い人。
なんていうか、本当に滅多に掛けてこない人だ。当然だけど。
彼の妹とか弟ならたまに話すんだけど、彼本人が電話を掛けてきたとか、かなり査定に期待できる。
「はい、はい。……ええ、そうですね。もう和平は成立したそうですよ。……嘘じゃないですよぅ。白龍皇の……そうそう、テロリストに……旧魔王派とかいうとこも……おお、それは、ありがとうございます。……ええ、勿論……そうなんですよ。だから髪留めとか作りたくて、材料費が欲しかったんですよね」
しかし、それでいてまだアルバイト同然で、正社員である父さんの息子という立場の方がしっくりくる此方の人間関係とか、給料の使い方とかもしっかり把握し、オマケに話しやすい。

思わず偉い人と喋っているんだという事を忘れてしまいそうになり、口調も気持ち緩くなってしまう。
挙句それを笑って許してくれる度量もある。
これがカリスマという奴なのだろう。ニンジャ的にはともかく、忍者的には仕える主が有能なのは嬉しい限りだ。
しかも金払いも良い！
「そうですそうです。その先輩が実にエロくてですね」
現代の赤龍帝の話から、その人格、半ば世間話の様になって来た所で、ドアを開けて日影さんがひょこっと顔を出してきた。
「書主さん、義母さんが、ご飯できたから降りてこいて」
「ありゃ、もうそんな時間か。ごめん日影さん。すぐ行くから。……すみません。そんな訳で今日はそろそろ……ええ、はい」
通話先に軽く謝りを入れて、電話を切る寸前、ふと伝え忘れていた事を思い出した。
「そうそう、堕天使の方のアザゼルさんに会いましたよ。……いやぁ、見た感じはチョイ悪親父って感じで、でも威厳はともかくカリスマはあるみたいでしたよ？」
再び通話を再開した此方に、扉の隙間からじぃっと視線を向ける日影さんに片手を立てて頭を下げ、指先であと少しだけ、と伝える。
仕方ないなあ、みたいな呆れ気味の微表情で「先いっとるで」と言って扉を閉めたのを見ながら、早めに切り上げないとなぁ、と思いつつ会話を続けてしまう。
「いや、別に改名はいいんじゃないですか？　ほら、人間の女に絆されて力を貸しちゃう、ってとこは似たような……あはは！　そうですね、シルバーさんとかには怒られるかも」
「あ、そうだ、父さんは今そっちに……ああ、やっぱり。父さんに会ったら、あんまりグリーンおじさんを虐めるもんじゃないよって言ってあげてくださいな。グリーンおじさん、ただでさえメンタル弱めなんだから、色々引きずるし……ええ、わかりました。それじゃあ、また」
通話を終了し、仕事用の携帯をそのままポケットに突っ込む。

今回のお給料はかなり弾んで貰えそうだし、ブラックさんに言われたなら、仕事用の携帯を持ち歩く事も吝かじゃない。

いやホント、ここまで大金貰えたのって結構久しぶりじゃないだろうか。

「いやぁ、エグリゴリ様々だね」

何処かのグリゴリとは、一文字違いで大違い。

互いにある程度腹の中わかってるから回りくどい探りあいなんて必要ないし。

やはり長い付き合いというのは大きい要素になるものだ。

「フミヌシ、早く来なさい。ご飯が冷めてしまいますよ！」

「はーい！」

台所から聞こえてくる母さんの呼び声に答えながら、瞼を瞑りつつ部屋を出る。

……まぁ、悪魔だの堕天使だの組織立った部分は置いておくとしても、そこに出来た友達との交友は続けていきたいものだ。

そうして長い付き合いになれば、きっと今より良い関係を築けるだろうし。

プライベート用の携帯の入ったポケットに手を当てながら、そんな事を考えた。

冥界合宿のヘルキャット
三十五話　夏の決心

残り少ない一学期を消化するために、ジリジリと照りつける太陽の下、通学路を歩く。
隣にはいつもの様に読手さん。
思えば、一学期の間はかなりの頻度で彼と一緒に過ごしていた気がする。
部活の外、というか、クラスの中では一番に付き合いのある友人だし、通学路も途中から合流するから必然とも言えるのかもしれない。
でも、もう数日で夏休み。
「部長から話を聞いたんですけど、夏休みの間は眷属全員で冥界に行く事になるそうです」
「そうなんですか。まぁ、グレモリー先輩も元々は冥界の住人でしょうし、長期の休みに里帰りするのは自然ではありますよね。眷属が付きそうのはともかく」
「です。……冥界戻っても、私はやることが無いのですが」
実際、この世界は住みやすい。
悪魔だけの世界でなく、今では主に人間たちの世界と言っていい世界ではあるけれど。
それでも、元いたところに比べればマシだろう。
はっきり言ってしまうと、冥界は文化的に遅れている。
魔王様が日本の視察を楽しそうに行っていた事から解ると思うけれど、基本的に住みよい場所とは言えない。
それにこの世界で、人間の間で、私は塔城小猫だ。
犯罪者の身内、という認識で見られないのは気楽でいい。
だから、正直なところを言えば、夏休みの間中ずっと冥界、というのは少しでなくかなり気が滅入る。
勿論、私だけ置いていってもらう、という訳にはいかないだろうから、そういう考えは表に出さずにいる訳だけれど。

「まー、戻りたくない場所ってのはあるもんですよ」
「読手さんも、ですか？」
「いや、父さんがね、帰りたがらないんですよ。実家に。お盆とかも此方単独で行くか、さもなけりゃ母さんが父さんを引っ張っていく形になりますしね」
「……なんだか、ちょっと想像できませんね」
思えば読手さんの父親を見たことがないのだけど、それでもあのクールそうなお母さんが旦那さんを引っ張って動く、というのは。
行きたくないなら行かなくていい、くらいに考えてそう。
「あー、母さんあれで結構アグレッシブだから、父さんが動かないとそれ見てイライラして動き出すんですよ。いちゃつく時は父さんが攻めみたいですけど」
「なるほど」
そういう夫婦関係もあるらしい。
……私はまともな父母というものを覚えていないから、変わっているのか良くあるのかは分からないけれど。
「しかし、冥界ですか。そうなると、一ヶ月くらいは会えない感じになるんですかね」
「夏休みの間丸々、って訳じゃないみたいですけど、そうなります」
「寂しくなりますねぇ……」
反射的に、え？　と声が出かけて、別に深い意味は無いのだろうと引っ込める。
自慢になるけど、入学してからクラスの中で読手さんと一番仲良くなったのは私だという自負はある。
そんな毎日顔を合わせている友人と一月近く合わないというのは、まぁ、普通に考えて寂しいと言って差し支えない筈だ。
「でも、日影さんが居るなら大丈夫じゃないですか？」
「それとこれとは話が別でしょう。塔城さんは違いますか？」
「そう、ですね。……少し、少しだけ、寂しいかもです」
だから私の方のこの感想だって、友人として素直な気持ちで間違いない。

入学してから読手さんと一番仲良くなったのが私なら、私が入学してから一番仲良くなった相手だって読手さんで。
ほぼ毎日顔を合わせて、良くメールや電話でやり取りをして。
そんな相手と暫く顔を合わせられない、というのは、寂しさを感じても仕方がないし、特に不自然も問題もない正常な感情の働きだと思う。
少し、と言ったのは。
やっぱり、素直に『暫く会えないのが寂しい』と相手に伝えるのが恥ずかしいという、お、乙女心的な、ねぇ？
……やっぱり、異性として意識しようがしまいが、それなりに親しい異性にそういうことをストレートに伝えるのは、恥ずかしさが勝ってしまうのも仕方がないんじゃないかな、と。
そういう意味で言えば、やっぱり読手さんは凄いというか。
女性に対して、こんな感じに素直に気持ちを伝えられる辺りかなりの耐性を感じる。
やっぱり彼女持ちは凄いなって思います。
そこんとこどうですか勝手にイッセー先輩の家のリフォーム計画立てた上で自分の部屋をイッセー先輩の部屋の隣にしたりできるのにいざとなると自分から手を出せない部長。
男に手を出させてこそ、みたいな変な拘りのお陰で最近副部長から激しくインターセプト食らってる部長！
と、内心でイッセー先輩にとってラストエリクサーみたいな扱いになりつつある部長に当たる事で恥ずかしいセリフを言ったストレスを打ち消して冷静になった頭で考える。
確かに、夏休みの大半は冥界で過ごす事になる。
でも、イッセー先輩のお家のリフォームとか、冥界に長期滞在する為のそれぞれの準備とかで、最初の一週間弱位はこっちに居られた筈……。
「……そういえば、読手さんは夏休み、何か予定とかあったりするんですか？」
とりあえず探りを入れてみる。

読手さんほどのリアルリア充なら、初日から恋人である日影さんとデート旅行の予定とかみっちり入れたりするのかもしれないけれど、念のためだ。

しかし、笑顔で夏休みのラブラブな予定でも話しだすものかと思われた読手さんの表情はイマイチぱっとしない。

「んー、いや、なんとなーく、あれやろうかな、これやろうかな、ってのはあるんですけど……、たぶん、なんだかんだ言って最初の一週間くらいは家でゴロゴロしながらラジオ聞くとかしかしないんじゃないですかね」

「そう、ですか」

よっし、と、ガッツポーズ。

……いや、ガッツポーズする程の事じゃないけど。

でも、実際都合がいい。

互いに暇な時間が同じような時期にあるなら、うん。

「それじゃあ」

ととっ、と、早足で読手さんの前に出て、振り向く。

隣で並んで歩きながらでも良かったかもしれないけど、こういう時は正面少し下から、相手の顔を少し上目で見上げる様にしながら告げるのがいいらしい。

今では会えない、大切だった肉親から教えて貰ったテクニックだ。

読手さんが、こっちの視線をどれくらい感じられるのかわからないけど。

「夏休みの最初の一週間、一緒に遊び回りませんか？」

――――――――――――――――――――――――――――――

……というようなやり取りがあった事を、ついつい部室で漏らしてしまったのが運の尽き。

「くっ……」

「部長、なんですかその表情」

リアクション芸代表みたいになった部長が、トキメキと悔しさと申し訳無さと好奇心で顔面四分割という新たな芸を披露し始めた。

今は奇跡的に部室の中に男性陣が居ないけど、少なくともイッセー

先輩の前でその顔をするのは止めたほうが良いんじゃないかなって思いますよ？

「一夏の淡い思い出つくりを冥界行きで潰してしまった事に申し訳無さもあるけど、時間が限られたからこそ小猫が大胆になれたんじゃないかと思うと私ナイスゥ！　というか、夏の日差しで読手君が小猫に対して過ちを冒して、いえ、過ちで犯してくれるんじゃないかっていう事に気付けなかった私が愚かだったようで、結局オッケーして貰えたの!?」

「とりあえず部長は少し落ち着いた方がいいんじゃないですか」

あと、をとでは入れ替えなくていいです。

だけど、そんな冷静な私とは裏腹に、部室内に居るオカ研女性陣のテンションは変な方向に向かっている。

仮に今他の男性陣とかが部室の前、いや、旧校舎の入り口の前に居たとしても、部室から溢れだす女子が集まってとりとめもない話をする時特有の空気感をもろに食らって足踏みしてしまうのではないでしょうか。

実際、同性でもそういう姦しい感じの空気を作れないし別に作ろうとも思わない私は、この空気を意図せずに自ら作り上げてしまった事に果てしない程の後悔を感じている。

というか部長、こういう話題好きなら別に学園のお嬢様キャラを無理に維持せずに他の学生に混じればいいんじゃないですか？　言わないですけど。

「いや、確かに結果は重要だろう」

「ゼノヴィアさん……」

「いや、待て、何だその目は。別に私はまだおかしな事は言っていないぞ」

まだ、と言いましたか貴女。

でも、どうせ話の流れで言うか、いい話を最初に持ってきた上で台無しにする形でオチに持ってくるかの違い程度で何かしら言うだろうし。

「まぁ聞いてくれ。私がこの学園に入ってから集めた常識から言わせ

て貰いたいんだ」
　悪魔になってから今日まで部内全員ドン引き通り越して精神耐性出来るレベルの痴女ぶりしか見せてくれてない人が何か言ってますね。
「小猫、疑わしい気持ちもわかるけれど、信じる心が大切な時もあるのよ？」
　今がその時とも思えないんですが。
　とはいえ、確かに発言する前に意見を潰すのは良くない。
　とりあえず、聞くだけ聞いてみよう。
「いいか？　塔城小猫。君は、夏休みの間暫く会えない友人と、夏の思い出を予め作ることで寂しさとかを和らげたりしよう、と考えているんだろう？」
「そうですね。大体合ってます」
「これは、あくまでも、私がこれまで集めた一般常識の範囲内からの推測でしかないのだが」
　それ、デートという奴なのではないか？
　その言葉が私の頭の中をぐるりと一周して理解と結びつくまで、僅かばかりの時間が掛かった事は、たぶん、言うまでもないことなのでしょう。

「デートか」
「デートだね」
「ええ、客観的に見ると、そうなっちゃうんですよ」
　旧校舎の入り口付近でうろうろと入り難そうに屯している兵藤先輩と木場先輩を誘って、購買でアイスを買って校舎裏の日影で食べながら、今朝にした塔城さんとの会話内容についてなんとなく話し合う。
　出た結論は、個人的には余り歓迎出来ないけれど、たぶんそうなってしまうんではないかなぁというものだった。
「でも実際、夏休みで予定が開いている内に友人と遊びに行く、なんて、そこらの誰もがやってる事でしょうに、なんでこんな事を気にし

ないとならんのでしょうねぇ……」
と、言っても、普段から塔城さんと度々遊びに行っているという訳ではない。
だけど一緒に飯を食べに行ったり買い食いしたりというのはよくしている。
だから、これもその延長線上にあると考えれば、デート、という事にはならないのではないか。
……という理屈が通じないのだろうなぁと、そう予想できるが故にこんな話をしている訳だが。
「うーん、まぁ、気持ちはわからんでもない」
「どっちの？」
「どっちも」
昔ながらの懐かしの味、本塁打棒を齧りながら、悩んでいる様にも妬んでいる様にも感じられる声色で木場先輩の問に答える兵藤先輩。
「学校で結構仲良くしてる男女が、休日に二人だけで遊びに行っていたら、リア充死ね！　ってなるだろ？　……でも、例えば俺が部長とかアーシアと二人で出かけても、相手がそう思ってないからデートじゃない」
「あ、当たりだ」
「こっちも当たり……じゃない、当たれってなんですか当たれって」
木場先輩は薄利多売のゴリゴリ君だからたぶん当たりやすいんだろう。
でも此方のバラックモンブランだってさほど当たりをケチるような値段でもないと思う。
「いや聞けよ！　聞いてきたのそっちでこっちは答えてんだからさぁ！」
いや、余りにもツッコミ待ちみたいなネタ振ってくるからてっきりボケを殺して欲しかったのかと。
どうどう、と、兵藤先輩を落ち着かせている木場先輩の声を聞きながら、さっきの兵藤先輩のボケを考える。
考えるが……。

「結局、社会的な偏見の目からは逃れられない、って事ですか」
「いや、うん、なんか急に壮大な問題に聞こえてきた気がするけど、そうなんじゃないか？　大体、日影さんという恋人が居るのに小猫ちゃんという異性の友達と一週間も遊び呆けるのも確かに問題あるしな」
「むう」
ぐうの音も出ない。
神器の文字列の赤を全て乳に置き換える様な世界級エロスの癖にこういう時にする発言がまともなのはずっこいのではないか。
「そういえば、日影さんはなんて？」
「いや、勿論一緒に来ない？　って誘ったんですけど」
「誘ったのか……」
「そりゃ誘いますよ」
女の子二人で一週間連続でお出かけ、という時点で、これまでの此方の人生には無かった大事件でもあるのだ。
いや、嘘だ。
実の所を言えば日影さん以外の女の子の友人と二人でお出かけ、という程度の話なら多少ある。従姪の亜里須とか。
でも、ほら、滅多にあるわけではない重大な事件である事には変わりない訳だし。
その時はまだ肉体年齢的に幼かったから全然セーフだと思ってたっていうか。
……そのあと、日影さんが暫くそっけなかったのがかなり堪えたから、その時の反省を十二分に活かした選択を取ろうとするのは当然ではないだろうか。
「で、なんて言われたんだい？」
「ええんやない、って」
「ええんか」
「ええらしいんです……」
瞼を閉じたまま空を見上げる。
校舎で出来た影が日差しを遮り、瞼越しに届く光は薄い。
程よい薄暗さは今の此方の心の様だ。

「此方、なんか機嫌損ねる事したかなぁ……って」
　因みに日常的に日影さんと接していない人では少し理解が追いつかないかもしれないので解説すると、このええんやないは『(そんな無理にわし誘わんでも、二人で行ってきたら)ええんやない(か。別にわしは気にせんよ)』という意味になる。
　理解するには声のニュアンスとかを上手く汲み取る必要があるが、慣れれば然程難しい話ではない。
「……ギャスパーの件がバレたとか?」
「いや、ギャスパーの事は関係ないでしょう」
　兵藤先輩はおっぱい聖人の癖に平時はまともな事も言うが、おっぱいに関わらない部分での思考能力は常人の八かけ程度な部分も在るため、時々こういう的はずれな事を言う。
　ギャスパーは確かに可愛らしい声をしているし、肌もスベスベ、髪もさらさらで撫で心地も良いし、何故か体臭すら同世代の同性と思えない程良い匂いだが、男だ。
　この間の休みに一緒に隣町のショッピングモールに行って夏休みに使う水着を新調したりもしたが、別に休みの日に男友達と出かけるのは普通の事だろう。
　ギャスパーが女物の水着を買った事も、どんな水着が好きか参考として聞かれた事も些細な事だ。
　ギャスパーはホモやオカマでなく、あくまでも女の子の衣装の方が可愛くて好きだから着ているだけなのだから、自分以外から見て可愛らしく見えるか気にするのは当然の事だろう。
　まぁ流石に挿絵になる程の絵ではないだろうから見ては居ないけれど、ギャスパーは肌が綺麗だからお腹も背中も見せるタイプの方がいいだろう、というアドバイスに留めたが。
「ショッピングの帰りに映画を一緒に見に行ったり、昼食を一緒に摂ったり、その間手を繋いでいたりしても?」
「いや、隣町まで行って買い物だけして戻ってくるのは勿体無いですし、手を離してはぐれたら大変でしょう?」
　ギャスパーは吸血鬼に力に覚醒こそしているけれど、これまでの引

きこもり生活で体力的には最低値な上、身体の動かし方もなっていない。
　人混みの中でははぐれてしまうかもしれない、という、ギャスパーの自己申告から手を繋ぐ事に何の不思議があるのだろうか。
「あと、手を繋いだ云々は言ってあげないで下さいな。本人も恥ずかしがっていましたから」
　手を繋いで欲しい、と言う時の、ギャスパーの消え入りそうな程に恥ずかしがっている様子は、なんだか此方が申し訳なくなってしまう程だった。
　自分の体力と人間的身体能力が成虫になった蚕蛾レベルであるという自覚はあっても、それを踏まえて誰かに頼るのはとても恥ずかしく感じてしまってもおかしくない。
　自らの欠点を自覚しさらけ出し、誰かに助力を願う。
　勇気の必要な行為だ。
　尊敬に値するし、友人として誇りに思う。
「木場ぁ……」
「はは、大丈夫だよイッセー君。（僕達には）害はないから」
　情けない声で木場先輩の名を呼ぶ兵藤先輩に木場先輩が朗らかに答えた。
　不思議なやり取りだが、少々話が脱線しすぎている。
「話を戻すとですね。変な噂が立たないようにするための案はあるんですよ。実のところ」
「どんなのよ？」
「忍者技能を駆使しての女装。精度は控えめに言ってノレパン三世顔負けレベルの」
　因みに変装技術はまぁまぁだけど、そこは九ノ一術でカバーだ。
　女装状態ならひん剥かれて薬打たれて犯されて理性を失っても股間を見せない限り相手は此方が女装した男だという事に気づけないレベルと言えばどれくらい得意か解るだろう。
　……まぁ、股間に関しては男根やら陰嚢を内臓操作で体内に引っ込めるまでしかできないから、完全にひん剥かれたら流石にバレるのだ

が。
「精度にはもう突っ込まないけど、なんで女装？」
「いや、ほら、此方と歩いてなかったとしても、見知らぬ男と歩いていたら、塔城さんにだけ一方的に変な噂が付いちゃうじゃないですか」
「理屈が通ってるだけに一際面倒臭いなお前」
め、面倒くさくなんて無いし。
これくらい普通は考えて対策立てるレベルでしかないから神経質でもなんでもないし。
「忍術としては基礎レベルのものですけど、割と自信ありますよ。仕事用の別顔で何度かオカ研のメンバーと話したりしてたんですけど、気付かなかったでしょう？」
「……この間、ゼノヴィアが街で綺麗なイルカの絵を買わされたとか言ってたけど」
「それがこの話題に何か関係あるかは置いておくとして」
いやぁ、ちゃんと社会に適合した悪魔って、金持ってるんだなぁ、って。
臨時収入があるのは嬉しい限りだ。
その分ゼノヴィア先輩にはコンビニで投げ売りされていた千歳飴とか風呂に浮かべると垢が取れたりする玩具をあげたから多分プラマイはゼロになってるだろうし。
あ、あと１００円ショップで買った肩揉み器もいらないから譲ったんだっけ。
つまり此方が一方的に貸しを作っているという形になるな。
次はかけると何でも美味しくなる魔法の粉（鰹節粉）でも買ってくる事になるかもな。１０万くらいで。
「でも読手君、やっぱり女装とかそういう小細工は無しで行った方が良いと思うよ」
会話の合間に騎士特有の高速移動で当たり棒を交換してきた木場先輩が袋を開けながらそんな事を言う。
ちゃっかり自分だけコカじゃない方のコーラを買ってきている辺り実に抜け目が無い。

……あ、此方達にも一本ずつあるの？
木場先輩はいい人だ。エクスカリバーの主となるとやっぱり人格からして一味違う。
「それはまた、何故に？」
コーラを受け取りながら尋ねる。
「それが普通だからだよ。普通、友人と遊びに行くのに、他人に噂を立てられたくないからって変装までするものかな？」
「まぁ、時と場合によるとは思いますが……しないんじゃないですかね。基本的には」
「そう。それに、噂を立てそうな相手はクラスメイト達だろう？　それなら、後々で普通に遊びに行っただけ、とちゃんと説明すればわかってもらえる筈だよ」
「むむ」
一理ある。
ウチのクラスは多少そういう部分で悪乗りする連中が多いけど、きっちりメリハリは付けてくれる分別を持っている。
それ以外の噂となれば広めるのも受け取るのもそう多い数ではないのだから、気にする程の事ではないだろう。
日影さんは此方と塔城さんの間にある感情が友情でしかない事は知っている筈だし、此方が深刻に気にしなければならない程の問題ではない。
もしかしたら、神経質になりすぎたのかもしれない。
「小猫ちゃんも、普段は友達とそんなにたくさん遊びに行くわけじゃないから、きっと楽しみにしてると思うんだけどな」
……ふぅむ。
そこまで言われてしまえば、周囲に変な噂を立てられるかもしれないからこそこそ遊びに行こう、などというのは野暮の極みか。
「まぁ、色々と気にしないといけないとこもありますけど、しっかり楽しんで来ますよ」
「それがいいね」
勿論、日影さんにはフォローを入れてどうにか機嫌を直して貰うけ

ど、それとは別に、ちゃんと友達との夏休みを満喫するとしよう。
そう伝えると、嬉しそうに頷いた木場先輩の隣で本塁打棒の棒を地面に埋め終えた兵藤先輩が空を仰いで叫びだした。
「だな。……あー！　俺も部長とデートしてぇなぁ！」
先日一緒に買物行ったとか聞いたけど、どうやらこの暑さで脳味噌の中身が発酵してしまったらしい。
「あ、部室の方のピンクい雰囲気が薄まってきてますね」
「じゃあ戻ろうか。皆の分のジュースが温くなっちゃうしね」
「だからなんでそこでスルーするんだよ！」
だって返事するのが面倒な話なんだもん……。
そんな内心を押し殺し、何か言ってる兵藤先輩を適当に片手間で宥め、普段通りの空気に近付いたオカ研の部室に向けて歩き出す。
そこいら中からセミの鳴き声が響き、日差しは容赦なく大気と此方達を熱し続ける。
アイスとジュース一本づつでは誤魔化しきれない本格的な夏の始まりを四感で感じながら、塔城さんとのお出かけ先の候補を思い浮かべ始めるのだった。

三十六話　わたしのなつやすみ

じぃじぃじぃ。

耳にこびりつくんじゃないかと思うほどに喧しいセミの声を聞きながら、木陰になっているベンチに座り、空を見上げる。

憎らしい程の快晴。

雲一つない、という程でなく、遠くに大きく入道雲が見える。

夏、見るからに夏だ。

今の私の視界を適当に写真に収めるだけで夏を題材にした写真が一枚綺麗に完成してしまうだろう。

「……暑い」

まだ『熱い』にならないだけましとはいえ、中々に堪える暑さだ。

基本的に私達悪魔は太陽に弱い。

というのは、今はそれほど関係ない。

この暑さでは天使だろうと堕天使だろうと参ってしまうに違いない。

ちら、と、公園の中央に設置された、じりじりと熱を蓄え続けている時計を確認する。

――確認すると同時に、首筋に場違いな程の冷たさが走った。

「ひあっ」

飛び上がる様にベンチから立ち上がり、振り向く。

そこに居たのは、水滴の付いた缶ジュースを持った読手さん。

「おはようございます、塔城さん。待ちました？」

「そんなには待ってないです」

他愛のない悪戯、驚きはしたけど、怒るほどのものでもない。

缶ジュースを受け取り、小さく「ゴチです」と言ってからプルタブを開け、口を付け、傾ける。

自販機かコンビニで購入したばかりなのか、近々に冷えた炭酸が、日影に入った程度では逃れられない暑さに熱された身体を内側から冷やしていく。

美味しい。味はいつも通りだけど、この冷たさが美味しい。

「ぷあ……。それにしても、早いですね」
飛び上がる直前に見えた時計の針は、九時二十分程を指していた。
待ち合わせ時間から考えると三十分以上早い。
「先に待ってた塔城さん程じゃありませんよ」
「む……」
別にそんなに早くに来たつもりは無かったのだけど、言われてしまえば確かにそうだ。
待った時間は十分程だけれど、それでも本来の待ち合わせ時間の事を考えれば早くに来過ぎた感はある。
何故こんな早くに、と聞かれても、イマイチ原因は分からない。
何時もよりも早くに眠ろうとして、何故か寝付けなくて。
何時もよりも少し遅い時間にようやく眠れて。
なのに、何時もよりも早くに目が覚めた。
二度寝しようとしても何故だか落ち着かず、少しだけ出かける準備に時間を掛けて、少しテレビの前でぼうっと時間を潰して。
テレビも然程面白くなかったので、ゆっくり歩いて行けば待ち合わせの時間になるだろうと早めに出てしまったのだ。
どれもこれも原因なんて分からないから、聞かれて何か困るという訳でもないのだけど。
困る訳ではない、筈だけど、聞かれて、そのままに答えるのは、なんだか、まずいというか、恥ずかしい気がするのは何故だろう。
「じゃあ、どうします。適当にブラ付きます？」
「ノープランなんですか？」
「いやいや、おおまかに行く場所は決めてるんですけど、時間がね」
「なら適当に歩きましょう。その内に良い時間に成るでしょうし」
聞かれたくない事は聞かない。
そういう気配りが出来るのがこの人の美点だ。
そんな事を少しほっとしながら思いつつ、適当に物陰の多い通りへと歩き出した。

自慢じゃあ無いけれど、私は誰かと遊びに行く事が少ない。

……割と本気で自慢にならないけど、自分が社交的な悪魔でない事は自覚があるので負い目も無い。

だから、夏休みの最初の一週間を一緒に遊びに行こう、なんていうのも当然その場の思いつきで、具体的に何をどうするか、なんて事も深く考えては居なかった訳で。

何処に行くのか、という点については、ほぼ読手さんに任せきり、という形になっている。

「なっている、じゃなくて、誘った方も多少考えたほうが良いんじゃないかなって思いますけど」

「読手さんなら変な場所には誘わないでしょう？」

いや、勿論絶対に変な事をしない、と言い切れる訳じゃないけれど。

少なくとも、友人と遊びに行く先に、悪魔や堕天使や天使のお偉いさんが居る場所を選んだりはしないだろう、と思える程度には信頼している。

読手さんは少し頭のおかしい部分もあるけれど、日常生活の中では私の友人の中でも片手の指に入る程に常識を弁えている人だ。

友人の人数を聞いてはいけない。聞かれたら流石の私も冷静では居られないだろう。

「まぁ、いいですけどねー……、っと、到着です」

出来る限り涼しい道を選んで歩き続けて、辿り着いたのは駒王町の中では比較的賑わっている方に分類されるアーケード。

で、目の前にある建物は……。

「映画ですか」

「まぁ、妥当でしょう？」

「何か面白そうなのやってますかね」

「悪魔的にホラーものってありですか？」

「モノによりますけど、私は嫌いじゃないですよ」

普段それほど映画を見る訳じゃないけれど、映画と言えばアクションかホラー映画が安牌なんじゃないか、程度の拘りはある。

どっちも事件が起きてから解決までに時間や伏線が必要になるわけじゃないから、二時間程度に収めるのに具合がいい。

……という話を聞いて『なるほどなー』と思って以来、なんとなく映画と言えばアクション、パニック、ホラーのどれかばかり見ている気がするのだ。

まぁ実際、恋愛系の話を二時間枠に収めると誰も彼も急に恋して急に仲を深めて、という、話の都合でキャラが動いている感じがして受け付けないので、そう間違った意見ではないだろう。

「そろそろ始まりそうなのは……ああ、タイミング良いですね。三本くらいありますよ」

「『闇を行く者達の宴』に、『泥男は誰だ?』、あとは『冬咲く桜』ですか」

アクションホラー、ホラー、痛快グロテクスニンジャアクションラブコメディー。

「……3つめのジャンルって、どう受け取れば良いんでしょうね」

「こういうゲテモノ駄目でした?」

「いや、駄目か良いかの判別が難しいといいますか」

「最後にコメディーって付いてる場合、そこで全て許される感じがしますけどね」

「ああ……」

冗談みたいな話、という事だろうか。

実際、コメディタッチの話にしてグロさを緩和させる映画というのは海外に多いらしい。

日本では少ないのか、と聞かれるとどうとも答えられないけれど、どちらかというとそういうゲテモノは話題に登りにくいから知らないだけなのかもしれない。

「どうします?」

「んー、午後にやるハリウッドのやつなら自信持ってオススメできるんですけど……午前中のはさわりしか知らないので」

「午後のって?」

「あれです、あれ。大物死体役女優が出るんですよ」

大物死体役女優（哲学）

世の中には私の知らない世界がまだ多く存在しているらしい。

というか、なんで読手さんはそんなニッチな女優が出るという情報をキャッチしているのだろうか。
「じゃあ……冬咲く桜以外で」
痛快かどうかは置いておくとしても、グロテスクニンジャアクションは最近見飽きるレベルで見ているので除外。
ラブコメは……ギャー君……いや、やめておきましょう。
本人に自覚がないなら外野の私がとやかく言うのも野暮というものです。
「じゃ、宴の方にしますか」

実際、映画を目的として映画を見るのでないのなら、映画の内容の善し悪し、というのはそれほど問題にならないらしい。
余程悪くない限りは劇場の映像と音声の迫力で誤魔化しが効くし、実際今日見た映画はそれほど悪く無かったと思う。
邪神の復活を企む邪教と、それに立ち向かう探索者達の物語。
と、ここだけ聞くとかなりヒロイックな内容に思えるけれど、運命か偶然かで集まった探索者達にできた事はそう多くない。
最悪の未来は阻止した。彼等の冒険の結末を語るならその言葉がしっくりくる。
万事が万事解決して笑顔から青空でＦＩＮ、と行かないビターエンド。
「でも、こう……煮え切らないエンデイングでしたね」
「いやでも、あそこで斬ってもそれはそれでバッドエンドになりませんん？」
とはいえ、むしろ後味の良いハッピーエンドで終わる、爽快感が残るだけの映画よりは、かなり話の種になる。
パンフレットを買って、一緒に適当な喫茶店に入ってしまえば、あとは映画の内容でグダグダ喋るだけでもかなり楽しい。
視聴者に考えさせる、考えたく成る、話し合いたくなる結末を用意できた、という意味で言えばあの映画は間違いなく名作だろう。
「何処がいけなかったんでしょうか」

「味方魔術師の慢心、これに尽きる。やっぱり魔術師は慎重でないと」
身につまされるようなつまされないような話だ。
私が教えてもらった魔術師の戦術は基本的にガンガン行こうぜという感じのものだから、ああなる可能性も無いではないのかもしれない。
「まぁ、パンフ見る限り、慢心しなかったからってどうにかなってたのかなぁ、って疑問は残りますが」
「あー」
映画本編では断片的な情報しか出ていなかったけれど、パンフを見る限り、あの女の子が異形化していた時点で状況は積んでいたようにも思える。
高位の魔術師が味方に居た、なんてなんの慰めにもならない。
私に置き換えて言えば、未だ知識でしか知らない、赤眼の魔王やその配下を相手に戦え、と言われているようなものだ。
「まぁそれを抜きにしても、やっぱり最後の最後でスッポ抜けるのは……」
「でもその前の刑事さんの連続スナイプは……」

「あ、もう良い時間になりましたね」
言われて時計を見れば、もうこの喫茶店に入ってから一時間程が過ぎていた。
昼飯時にも関わらず客足は少ないけれど、入ってからずっとジュース一杯で延々駄弁っていたお陰で、店員さんが少し迷惑そうな視線を向けてきているのがわかる。
時間的に遅めの昼食にしてもいい時間だし、ここで適当に昼食を済ませてしまうのもいいかもしれない。
「じゃ、会計済ませて飯食いに行きましょうか」
「ですね」
いいかもしれないけれど、わざわざ静かなだけが取り柄の様な場末の喫茶店でご飯を食べる必要もないだろう。
時間的に昼のピークは過ぎているから、それなりに有名だったりし

て人の多い店に行ってみるのも悪く無い。
そう事前に決めていたので、私も読手さんも店員さんのちょっと怖い視線を完全に無視してスムーズに店を後にする。
……ジュース一杯で雑談して帰っただけであんな視線を客に向けるような接客でやっていけるのは少し不思議だ。
まぁ、ライバル店が少ないからかもしれないけれど。
さて、喫茶店を出て遅めの昼食を、という事になったけど、別にあてが在るわけでもなし。
ただ遊びに来ただけでそう大仰な店に入るのもおかしな話。
とりあえず適当に冷房が効いている店内で食べられればそれでいいんじゃないか、という事は決まったものの、これ、という決め手も無い。
「あえてのラーメンとか」
「いや、逆にカレーですよ」
冷たい蕎麦やら冷やし中華という結論にはどうしても至らず、熱いメニューを双方望んで、行き着く先は結局ファミレス。
ここでも適当にカレーとラーメン、デザート各種とドリンクバーを頼んでダラダラと駄弁る。
……なんともしまらない、如何にも適当に出歩いています、という風でしかない時間が過ぎていく。
それでも退屈、という訳でもなく、授業の開始時刻などに追われる事無くゆったりと過ぎていく友達との時間。
周囲からどう見えているかは分からないけれど、これはこれで心安らぐ贅沢な時間の使い方だと思う。
……そんな風に、誰かに茶化される事もなく誂われる事もなく、夏休み初日が平穏に過ぎていく。
そう考えていたのはほんの数分前の話だ。
「これなんかどうです？」
所変わって、所変わって……何故か、私達は呉服屋の中に居た。
呉服屋というのは基本的にそう人で溢れかえるような場所では無い。

しかも夏休み初日となれば一般的には余裕で平日に分類される日であるので、余計に人が居ない。

そしてアーケードの隅にひっそりと店を構える様な小さな店となれば尚更で、店内に居るのは何時から務めているのかも分からない様なヨボヨボの店員さんと私達のみ。

「いや、そんな持ってこられても」

「……いや、それもそうなんですけどね」

綺麗な浴衣を二着程手にした読手さんは困ったような顔で同意してくれるが、それでも浴衣を元の場所に戻さない。

何故私達がこんな場所で浴衣を物色しているか、と聞かれると、この場には居ない面倒な人が関わってくる。

本当の事を言えば面倒な人だなんて間違っても口にしてはいけないであろう相手ではあるんですが……やっぱり部長は面倒な人だと思う。

何せイッセー先輩のメールを介して私と読手さんに『夏休みの間に浴衣を使う機会があるかもしれないから、時間があったら小猫の分を見繕っておいてくれないかしら』といった旨の話を持ち出してきたのだ。

そういう真似をするなら、最初から自分もメアドの交換くらいはしておけばいいのに。

「でも、夏休みの間に使う予定があるんでしょう？　しかも冥界に行く前に用意しておきたい、と」

「だからって、何も読手さんに頼まなくても……」

これは別に、友人に浴衣を選んでもらう事が恥ずかしい、というだけの話ではない。

そもそもの問題として、読手さんは普段は目を閉じて生活しているのだ。

目を開けて接する日影さんを例外として、読手さんは人の服を選ぶのには適任ではない。

しかし、それ以上にデリカシーが無い。

そもそも彼は目を閉じて生活しているけれど、本当は目を閉じてい

たいと思っている訳ではない。
それくらいの事は、数ヶ月の付き合いしかない自分にだってわかる。
そんな彼に、似合う服を選んでくれ、というのは、どうかと思う。
「別に此方は構いませんよ。……それに、ちょっと楽しかったりしますしね」
「そうですか？　でも、目は……」
「普通に見える時もありますよ。瞼を開けた時と見える時のタイミングが合う事も最近は多いですから。それに……」
「それに？」
問いに、ニッコリと邪気の無い笑みを浮かべる読手さん。
「塔城さんの浴衣姿を一番に堪能できるなんて、役得じゃないですか」
「……、……は、恥ずかしい人ですね」
どうしてこう、こういう恥ずかしいセリフをサラッと向けてくるのだろうか。
恋人が居て、女性に慣れているから、というのも間違いなくあるのだろう。
まして相手があの色々と解り難い日影さんだ。
読手さんの方ではっきりと意思表示をするのも円滑なコミュニケーションを進めるのには必須なのかもしれないけれど。
だけど、
「そういう事言って、勘違いされても知りませんよ」
そういう口説き文句みたいなセリフは、それこそ日影さんにでも言っていればいいのに。
なんで、ただの友人の私にまでそんな事を言ってくるのだろう。
浮気症……という訳ではないのは、普段の彼の交友関係を見ていれば解るだけに、そこだけが不可解だ。
「大丈夫ですよ。此方だって、誰にでも言う訳じゃないんですから」
少しだけ真剣な口調に、言葉が詰まる。
気付かれないように大きく息を吸って整えて、勤めて平静な声を絞り出す。

「……どういう意味ですか」
「さて、どういう意味でしょう」
逸らかす様な、面白がる様な口調に、誂われている事に気付く。
なんだか言葉でじゃらされている様で、少しだけ負けた気分になる。
ムカついたので軽めに拳で小突く。
避けられる。
ムキになって再び小突こうとするも、手首を軽く押さえられて止められてしまった。
これがニンジャ特有のジュー・ジツ！　日常生活でも使ってくる辺り実に小癪だと思う。ズルい。
「小さい店なんだから、暴れたら周りの服がヤバイですって」
「ぐぬ」
ここで周りを巻き込む正論は更にズルい。
でも手首を取られて身体が近いので脛を蹴る。
片腕で二着の浴衣を持ちながらもう片方の手で蹴られた脚をさすってぴょんぴょんと跳ねる読手さんを見て少し溜飲が下がった。
……どのみち、部長が頼んで読手さんが引き受けた以上、一週間後までには浴衣を用意しないといけないのだ。
今後、時間を改めて浴衣を買いに行くとなって、大きくて他に客も居る呉服屋やらショッピングモールやらで選び直しになるよりは、今日人目の少ないここで買ってしまうのが一番妥当かもしれない。
「……それじゃあ、お任せしても大丈夫ですか？」
「ええ、これでも和服選びには一家言あるような無いような」
「どっちですか、もう……」
何でこのタイミングで不安に成るような事を言い出すのか。
……とはいえ、少なくとも今読手さんが手にしている二着の浴衣はどちらも悪く無いデザインで。
彼の言葉が照れ隠しなんじゃないかな、と、そんな事を考えれば、少し面白くもあり。
私は読手さんに促されるまま、試着室へと向かうのであった。

……普段の部長のカリスマ（）で学園のお姉さま（）な雰囲気からは想像もつかないかもしれないけれど、部長は策士で、頭も回る。
貴族教育がどうこう以前に、持って生まれた才能として頭の回転が早いらしい。
そこら辺の頭の良さというか小狡さとかを駆使すればアーシア先輩の猛攻なんて問題にならない程の速度でイッセー先輩を虜にして恋仲になれるんじゃないかな、と、思うのですが。
「ふんふん」
少なくとも今日のこの時間まで、それが真っ当に生かされている場面をレーティングゲーム以外で見たことがない。
挙句の果てに部長はその優れた頭脳を持って、公表するつもりなんて欠片も無かった部下のプライバシーを暴くのが大好きなんじゃないか、と思う時がある。
「それでそれで？」
腕を組み、嫌らしい笑顔で顔を寄せてくる部長。
夕方、日が沈んだ後の時間、悪魔としての活動のために部室に集まった私達グレモリー眷属。
それぞれ思い思いの夏休み初日を過ごした訳ですが、如何せん、他のヒトは初日からあちこち遊びに行ったりはしなかったらしく。
事前に初日から遊びに行くという情報を漏らしてしまっていた私は、話のネタとしてまたも部長の口八丁で生け贄に捧げられてしまった。
……というか、話題という話題なら、イッセー先輩を副部長と部長が取り合っている辺りの話とかを使えばいいのに、なぜ私なのか。
ギチギチギチ、という音がどこからともなく聞こえてくる。
「小猫ちゃん、手、手」
なんですか祐斗先輩、私の手がどうかしましたか。
この拳は別に何かを殴るために握っている訳じゃないですから大丈夫ですよ。
格好いい言い方をすれば、この拳は誰かを倒すよりも誰かを守るた

めの拳です。
　因みに守る対象は主に呪文詠唱中の自分ですが。
　つまり専守防衛なので無害だからノーマークでいて下さい。
　こんな真似を繰り返されたらあらぬ方向に飛んで行くかもしれないけどそれが誰に当たったとしても事故になるから大丈夫です。
「小猫、ねえ小猫。それで結局良い浴衣は選んでもらえたの？」
「はい。中々のものを」
　悪びれもしない部長に怒る気も失せ、頷く。
　自信満々に言うだけあったのか、読手さんの選んだ浴衣は派手さや奇抜さこそ無いものの、夏らしい涼やかさを感じる夕顔柄の白の浴衣。
　それは丁寧にラッピングされ、私の腕の中にあった。
　何に使うか分からない以上、今日使う可能性もあったので、一応この夜の集まりに持ってきたのだけれど。
「ちょっと見せてもらっていいかしら」
「……はい、どうぞ」
　今度はどんな事をやらかすつもりなのかと思うと素直に渡したくない気持ちが次から次へと溢れでて来るけれど、こんなのでも一応私の王。
　経験則によるちょっとの精神的苦痛を理由に渡さない、というのは無理だろうと思い、渋々渡す。
　ラッピングの一端を破れないように丁寧に剥がして中身を確認した部長は、顔に浮かべていた笑みを更に深くして頷く。
「やっぱり、良い趣味してるわ」
「どういう事です？」
「センスがいいって事よ。洒落てるし、それに……ああ、これ以上は言わぬが花ね」
　思わせぶりに何かを言いかけて止める。
　そういうのはもっと位の高い黒幕とかボスキャラがやるものであって部長がやっていいセリフ回しじゃないと思うんですが。
　もしかしたら、最近はこういう言い回しをする偉い人達とばっかり

関わっているからストレス発散に部下で遊んでいる可能性もある。
……負けても問題ないレーティングゲームとか近いうちにやりませんかね。
ライザーの時みたいな非公式非公開な感じの。
ちゃんとアーシア先輩だけは背後に庇っておきますからやりませんかね。
無理？　そうですか……。
「でも部長、浴衣なんて何時使うんですか？」
「そうねぇ、冥界でそういう催しを行うなんて話も聞かないし」
イッセー先輩と副部長の言葉も最もだ。
基本的に、冥界はそういう娯楽文化に非常に乏しい。
貴族、というか、数少ない純血悪魔達によるパーティ的な催しものはあっても、聖書の勢力という事もありどれも洋風で、正装とくればドレスになる。
一般の悪魔達のお祭りで浴衣を着るような情緒溢れる催しものなんて望むべくもない。
「最近はお兄様の視察の甲斐もあって、そういう文化も広まり始めては居るのよ？」
「じゃあ、これは荷物の中に仕舞っておいた方がいいですね」
冥界行きの日は決まっているけど、だらだらと準備を先延ばしにして直前で慌てるのはなんだか嫌だ。
一週間遊ぶだけ遊んで、その後はゆったりと冥界に行きたい。
自慢すると、宿題だって後回しにはしないタイプなのだ。
「ああ……そう、ねぇ」
つい、と、視線を虚空に向けた部長が少しの間考えこむような素振りを見せる。
「……ああは言ったけど、実際に向こうでそういう催しに参加できるかは、まだ分かってないのよ。だから、その浴衣は前日まで荷物とは別に分けて置いてくれる？」
「……ちょっと、予定がふわふわし過ぎじゃないですか？　部長が頼んだから選んできたのに」

「ええ、そうね。本当にごめんなさい。ふふ、私が頼んだのに、ね」
クスクスと笑いながらとても反省しているとは思えない謝罪をする部長。
なんでこのひとはさっきからずっと笑顔なんだろうか。
誰か理由を知っているかと周りの顔を見回してみるも、部長の腹心（）である副部長ですら不思議そうにしている。
私が不審そうな顔をしている事に気が付いた部長は、それでも悪戯を仕掛けた子供の様な笑みを浮かべたまま、立てた人差し指を『ちっち』と振りながら言葉を繋げた。
「慌てる必要なんて無いのよ、小猫。まだ夏休みは一日目、冥界に行くまで一週間もあるんだから。……こっちでの夏休みを、十分に堪能しておきなさい？」

三十七話　それは祭りのエスコート

古い歌の歌詞にある通り、夏休みはやっぱり短い。

私だって、元猫？の悪魔ではあれど、年頃の少女なのだから、やりたいことは沢山有り過ぎる位にはある。

しかも、部長の里帰りに付き合わなければならないから、この世界で過ごせる夏休みは更に短い。

……そういう意味では、夏休みの数少ない個人で自由にできる時間を、読手さんと共有して過ごす、というのは、悪くない選択肢だったと思う。

部のみんな、グレモリー眷属のみんなと過ごす時間とはまた異なる友人との時間は、今までの人生の中では考えられなかった様な充実感を感じる事ができた。

たぶん、私が一人で自由な時間を消費しようと思ったら、もっとどうでもいい時間の使い方をしてしまっていたんじゃないかと思う。

それはそれで悪くない過ごし方だとは思うけれど、やっぱり誰かと過ごす時間には別の楽しみがある。

やりたいことを全部詰め込んでいる訳でもなく、誰かと時間を共有するからこそ共にどう動くか考える事ができる。

誰かと過ごす事を念頭に置いたスケジュールの作り方。

充実して、でも忙しくない時間。

そんな素敵な時間を遅れたのは、間違いなく読手さんのお陰だ。

だから、だろう。

少し気が緩んでいたというか、考えが足りなくなっていたというか。

実際に来るまで、こういう気持ちになる事を予測できなかったのは、もしかしたら読手さんの長期的な罠にハマっていたのかもしれない。

「どうしました？　お腹すきましたか？　……あ、あっちに大阪焼きの屋台がありますよ」

彼のデリカシーに欠ける、しかし、普段の付き合いで私が見せてい

る一面からすれば仕方ないと諦めざるを得ない反応に項垂れる。
それでいて彼の、読手さんの言葉もあながち的外れという訳ではなく、私の割と鋭敏な嗅覚は粉物の焼ける匂いとソースの香りを察知して、丁度空っぽになっていた胃袋を刺激してきた。
……考えてもみれば、別に読手さんに何かしらの罪がある訳でなし、ここで溜息を吐いて空気を悪くする事も無いだろう。
「じゃあ、最初はそれにしましょう。……具は選べるタイプですか？」
威勢のいいテキ屋の掛け声、通行人の喧騒、祭り囃子を聞きながら、財布を取り出しつつ、読手さんの示した屋台へと向かう。
からころと聞き慣れない音を立てる自分の足音を聞きながら、私の頭は今日の始まり、一緒に遊びに行く一週間、その最後の一日の始まりを思い出していた。

「隣町、ですか？」
『そうですそうです』
電話口から聞こえる軽い口調の肯定。
オカ研、つまりグレモリー眷属の中で私はギャー君と並ぶ後輩組で、こういう口調で話す相手は居らず、当然電話口の相手は読手さんだ。
時刻は朝の九時。
最終日で、なおかつ私が翌日から冥界に向かう事を考え、何時もよりも遊ぶ時間は短めにしよう、という事で、今日は昼に集合という約束になっていた。
だからこそ、今の時間に行き先を告げておくというのは別におかしなことでは無いとは思うのですが。
「隣町……って言っても、何かありましたっけ」
大きなショッピングモールがあるのは知っているけれど、別にわざわざ遊ぶ時間の短い最終日に行く程珍しいものが在るわけでもない。
映画やゲーセン、スイーツショップ、その他買い物にしたって、今わざわざ行かなければならないものでもない。
……別に反対、というわけではなくて、なんでわざわざ隣町なんだ

ろう、という純粋な疑問ではあるのですが。
『いえね？　実は今日、隣町の方だと、縁日があるんですよ』
「おお」
思わず感嘆の声を上げる。
縁日。
ここ一週間で夏休みらしい遊びはかなりこなした方だと思っていたけれど、ここで群を抜いて夏っぽいイベントに遭遇できるとは。
なにより、このタイミングで、夏休みの序盤で縁日に行けるというのが驚きです。
別に詳しい開催の時期を知っている訳ではないですが、もっと8月の中旬とかにやるものだとばかり思っていました。
「いいですね」
『いいでしょう？　だから今日はその時間に合わせて遊びに行きたいんですが、どうですか？』
「そうで――」
そのまま了承しようとしたところで、キャッチが入った。
無視、しようにも、今掛けてきたのは部長であるらしい。
できればもう少しぐだぐだと話を続けたい気持ちもあるけれど、緊急性の高い話だったりしたら大変だ。
仕方がないので、とりあえず手短に返事だけを済ませてしまおう。
それこそ、隣町の縁日に行くの位は何の問題も無いのだから。
『キャッチですか、一端切ります？』
「いえ、大丈夫です。行きましょう。時間は、夕方くらいですか」
『ええ、それくらいに始まるらしいので。五時頃に向こうに到着すれば大丈夫な筈ですから、電車でもバスでも問題なく行けると思いますよ』
「じゃあ、それで。……楽しみにしてますね」
『ええ、此方も楽しみにしています』
通話を切り、そのままキャッチに出る。
まぁ、部長に話は通っているから、余程のことがない限り、予定を潰すような事は言ってこないでしょうが……。

「罠だったんへふかね」

屋台のある通りから少し離れた場所で、階段に座り込み、割り箸で半分にカットした大阪焼き（今川焼きの型を使って焼く粉物のしょっぱい系の料理。中に海鮮系、もしくは豚肉などを入れ、ソースを掛けて食べる）を食べながら、ふとそんな事を口走る。

「何がですか？」

同じく大阪焼きを頬張りながら何故か普段通りに声を出している読手さんに『なんでもないふぇふ』と返しながら、もう半分を口に運ぶ。

急がなくていいから、一度イッセーの家に来てくれないかしら、と部長に言われ、言われるがままにホイホイと向かったあの時点で油断は見えていた気がする。

冥界に行った後にどうするかの軽いスケジュール確認と旅の栞の配布など、一見してそれらしい内容の集まり。

イッセーの家に一杯部屋作ったけど、小猫は引っ越すつもりは無いわよね、など、なんで今さら大分前に断った話まで持ち出すのかと思えるような話までしてきた時点で警戒出来なかったのも惜しい。

「……アーシア先輩って、天使ですよね」

「まぁ、悪魔ですけどね。言っちゃえば天使より余程天使でしょう」

うんうんと頷く読手さんに、私も頷き返す。

そう、アーシア先輩は天使だった。

本人は何も知らされていなかったに違いない。

昼から始まったオカ研の集まりも終盤に差し掛かった頃、夕方四時を前にして『そろそろ行かないと遅れるかな』と時計を見た時だったでしょうか。

部長に頼まれて、コーヒーのおかわりを持ってきたアーシア先輩。

そのアーシア先輩が丁度私の前に来た辺りで、偶然にも、そう、恐ろしい偶然にも、アーシア先輩の脚を引っ掛けるような位置に脚を伸ばしていた祐斗先輩。

さして運動能力の高くないアーシア先輩がコケた事も、それでこぼ

れたコーヒーを避けられない程に緩んでいた私にも、特に罪はないと思う。

「……ところで読手さん、実は部長って悪魔だったんですよ」

「あー、頭脳派気取っておいて割と抜けてるとこがある辺り、人間の読み物に出てくる間抜けな悪魔っぽくはありますよね。リアル悪魔でもありますけど」

確かに部長は抜けている所もある。

でも、彼女の本質はきっとそこには無い。

都合四杯程のアイスコーヒーを纏めて被った瞬間の私が見た、あの光景。

脚を伸ばしながら申し訳無さそうにしている祐斗先輩。

そしてその向こうで小さくガッツポーズを取っている部長。

リアスったら仕方がないわねぇ、みたいな顔で、翌日忘れないようにとイッセー先輩の家に他の荷物と一緒に預けていた筈の浴衣を既に手にしていた副部長。

なんていうか、ギルティだと思う。

「……悪魔に対応してくれるオー人事ってありませんかねぇ」

割と真剣に、同僚はともかくとして、上司は変えたいと思っても仕方がないのではないだろうか。

私と読手さんを何故かくっつけたがっている、というのは、まぁわかる。

私にその気がないと何度言っても聞かないのは照れ隠しだと思っているのかもしれないし、逆の立場ならそう見えても仕方がないんじゃないかなとは薄々思っている。

人付き合いの多くない私が、常日頃から付き合いのある、異性の友人。

意識しているんじゃないか、と思われるのは、もう仕方がない事だと諦めるしかない。

有名税とかそういうものだ。

異性の友人と付き合う上では背負わなければいけないリスクの一つだろう。

だからといって、最終日に浴衣を着せて会いに行かせる為に、部下の服をコーヒー塗れにするだろうか。
「いやぁ、上司なんて余程当たりを引かない限りは何処も一緒ですって」
「ニンジャもそういうものですか？」
「雇われじゃない組織仕えの忍者は負け組なんて言われる時代ですからね。時代はハグレモノで大企業の契約社員で定年フィニッシュですよ」
言っている事は詳しく分からないけど、読手さんはそれなりに自由な勤め方をしている、という事だろうか。
すこしばかり羨ましい。
羨望の目で見つめようと顔を上げるより早く、視界に読手さんの手が入り込んできた。
私の膝の上、手元にあるのはからになった大阪焼きの入れ物だけ。
ゴミを捨ててきてくれるのかな、と、思っている間に、何を持つでなく空けていた手を握りしめられた。
そのまま、引っ張りあげられるようにして立ち上がる。
「え、え？」
「辛気臭い話は止しましょう。ほら」
戸惑う私に、読手さんは屈託のない笑顔で屋台の並ぶ通りを指し示す。
町内会総出で行われているらしい祭りは、それなりに多くの屋台が並び、人もまぁまぁ溢れている。
如何にもお祭り、という、楽しげな雰囲気だ。
「今日はお祭り、せっかくなんだから、楽しんで行きましょうよ。普段の事は全部、後回しにして、ね？」
瞼を閉じたまま、読手さんが笑う。
いつも通りの笑み。
でも、暗がりの中、屋台の光をバックにした読手さんの笑顔は、なんだか……。
「ああ、もうっ」

言いたいことは山程ある。
元気付ける為だっていうのはわかるけど、そういう仕草を誰にでもするものじゃない、とか。
ちょっとばっかり距離が近い、だとか、
でも、まぁ。
言ってしまえば、彼の言うとおり。
今日は祭りで、祭りの日にそれ以外の事で思い悩むものじゃない、のかもしれない。
祭りの作法なんて詳しく知らないけど、たぶん、そういうものなんだろう。
だから、握られている手を握り返して。
引かれていた手を、少し小走りになりながら引き返す。
「そこまで言うなら、今日はとことん付き合ってくださいよ」
屋台と提灯の明かりの中に駆け出す。
こうなったのなら、とことん、今日の祭りを楽しんでやりましょう。

と、言っても、祭りに誰かと二人で来た事がある訳でもなく。
楽しむと言ってもせいぜいが食べ歩きくらいで、後は勢いに任せるしか無いんじゃないかなぁという不安もあったりした訳ですが。
「……」
水槽の中でひらひらとした尾びれ背びれを揺らしながら泳ぐ魚を目で追う。
別に、ついつい目が追ってしまう訳ではないのです。
勿論私だって猫の妖怪でもあるわけで、そういう狩猟本能的なものが無いとは言いませんが、何しろほら私現代社会に生きる文明人ですのでそういうのホント極わずかっていうか。
「すみません、とりあえず一回」
「はい、まいどぉ」
しゃがんでビニールプールの中を覗きこんでいた私の頭上でそんなやり取りが行われ、ポイとおわんを渡され、狙いを定める。
……定めた所で辛うじて気付いた。正気に戻ったとも言う。

「……やりませんよ？」
別にやりたい空気を出していたつもりも無いし、金魚すくいの代金を代えてもらう謂れもない。
「またまた、ご冗談を」
手のひらをぱたぱたと前に振りながら笑う読手さん。
笑われたのは少し不快だけど……、うん、実は少しやってみたかった。
というか、思い出して見ればポイを受け取る直前の手は鉤爪のようなハンティングスタイルになっていたような気もする。
……いや、これも仕方がないことなのかもしれない。
逃れ得ぬカルマというか、私まだ未熟な育ち盛りだから本能が理性を凌駕しちゃうのもあるっていうか。
こんな思考をしつつ、私の視線はさっきからひらひらと無駄に豪華なヒレを揺らめかせている大物を追っている。
「もうちょい小さいの狙ったほうが良くないですか？」
「大丈夫、大丈夫ですって」
何しろほら、私は俊敏な猫の妖怪で悪魔に転生することで運動能力も抜群に強化されている。
良くテレビだのなんだので金魚すくいのコツがどうとか言っているけど、そんなつまらない理屈は圧倒的身体能力と狩猟者の本能で凌駕してしまえるのだ。
当然、こんな脆いポイを使ったからって失敗するはずが……。
「やっ」
……。
失敗するはずが……。
「えいっ」
……
まぁ、偉そうなヒレが付いてるだけあって大した回避能力です。
でも、そんなもの私が本気を出せば……！
「んにゃっ！」
……。

……。

「はーい、残念だったねお嬢ちゃん、もっかいやるかい？」

……。

「はっきり言ってウチのシマじゃノーカンですから」

何が悪いってまずポイが悪いんですよポイが。

水に叩きつけると破れるし。

叩きつけなくても魚乗っけたら破れるし。

「いや、だってそういうゲームですし……ああ、ええ、なんでもないです」

内心が読まれていたなんて事は些細な事だ。

きっと今の私はなんともわかりやすい顔をしているのだろう。

並んで人混みの中を歩く読手さんは諦めたように苦笑いを浮かべていた。

「それよりほら、なんか他にも食べましょうよ」

ほら、と指し示された先には、当然の如く色々な屋台が立ち並んでいる。

勿論食べ物以外の輪投げだとか紐クジだとかハッカ笛だとかよくわからないものも並んでいるけれど、まぁ比率で言えば食べ物の屋台がかなり多めに立っている。

思わず涎がジュルリ。

でも、

「読手さん、なんだか私の事、食べ物与えてれば機嫌良くなるって思ってませんか？」

「思ってない事もないですけど、そこまで単純という訳じゃないんですよね？」

「そうですよ。……あ、因みに後半に対するそうですよですからね」

「だいじょぶだいじょぶ、わかってますよ。はい串焼き」

「ありがとうございます」

受け取らず、そのまま読手さんが持った串焼きに齧りついて、先端の肉を幾つか口で串から外して咀嚼する。

うん、決して高い肉を使っている訳ではないだろうけど……美味しい。

焼き方が良いのかタレがいいのか。

雰囲気も味に含まれているのかもしれない。

「……！　雰囲気も調味料にしてるんですね、って言ったら、もしかして私詩人じゃありませんか？」

「ちょっとそれは難しいですね……」

「そうですね……あ、ちょっと待って下さい、さっきの話が途中で誤魔化された気がします」

別に、私は食べ物を与えられただけで機嫌が良くなるような意地汚い食い意地のはった子供ではないのだ。

それこそ十代後半、思春期真っ盛りの少女である事を忘れてもらっては困る。

「大体、食べ歩くにしても、食べ物系の屋台全部なんて回ってたら途中でお腹いっぱいになって動けなくなると思いませんか？」

「お腹いっぱいになるんですか？」

「なりませんけど、それはそれなんです」

「じゃあ、買ったものを半分こし続ければ大丈夫じゃないですか？」

「……やっぱり忍者には天才が多いんですかね」

そこに気付くとは、やはり天才……。

「まぁ天才で無い場合は大体が修行の途中で死ぬか大怪我するか廃人になるかでリタイアしますからね」

「そのガチ返しはちょっとリアクションに困ります……」

そりゃ、身体的に劣る人間から読手さんみたいなヤバイ生物に変化するなら、かなり目の大きい篩に掛けられるのだろうけど。

「あ、因みにこれ、ゾッとする話に見せかけた優秀アピールなので」

「知ってます」

などと軽口を交わしつつ、適当に屋台を冷やかしたりメニュー全部買いをしたり。

こうして誰かと一緒に祭りに来てみて解ることの一つは、一人が二人になっても手は二倍なので、調子に乗って買いまくると持ちにくい

という事。
対して、口数は二倍どころか二十倍でもすまないという事。
誰かと、気の合う友達と来ると、お祭りはこんなにも賑やかになる。
それが解った今日のお祭りは、とても実り深いモノなんじゃないでしょうか。

ああだこうだと話、立ち止まり買い食いし、小さな神輿を遠巻きに眺めたりしている内に、落ちるのが遅くなってきていた夕日もすっかり見えなくなり、夜。
祭りはここからが本番、という訳でもなく、神輿や盆踊りも一通り終わり、チラホラと明日に向けて店仕舞いを始めている。
「いやぁ、堪能しましたね」
「です」
半分こできるからと調子に乗って食べまくり、すっかりお腹が膨れてしまった。
カロリー的には運動量を増やせばすぐに消費しきれる程度ではあるけれど、明日の出発時間次第では夜眠るのが苦しくなってしまうかもしれない。
適度な腹ごなしも兼ねて、来た道をゆっくりと、通り過ぎてきた屋台を眺めながら並び歩く。
お腹が一杯になって歩く速度が落ちているのか、食べ物に目を奪われないからなのか、来る時には気にならなかった食べ物ではない売り物を出している屋台がかなり目に留まる。
「凄いですね、あの紐クジ、３ＢＳにＲＳ３、ＯＢＯＸ３６０って、全部引かれたら大損ですよ」
「あー……、あれは、ほら……中身、似たデザインの消しゴムとか、ゲームウォッチもどきでですね……」
「なんという欺瞞。殺伐です」
そして、そういうどうあがいても＋にはならないクジを引く客を見ながら悠々と歩いて行くこの爽快感。
これがたぶんランナーズ・ハイって奴ですね。

適度にゆるくなった脳がそんな戯言をを吐き出すのを感じていると、

「おねえちゃん、がんばって！」

「まかせなさい！　ぜったい、とってやるんだから！」

ふと、一つの屋台に目が止まった。

他の屋台と同じような、祭りの熱気に浮かされた客を騙すのが商売、と言わんばかりの有り触れた射的屋台。

如何にもチープな景品と、その間に並ぶ豪華過ぎてこれ落としようが無いでしょう、という豪華過ぎる豪華景品。

その屋台で、小さな身体に不釣り合いな程に大きいコルク銃を構える少女と、更に小さい、というか、幼い少女。

姉妹だろうか。

反動が来るようなものでもないコルク銃をしっかりと両腕で構えて、引き金を引く。

べしん、という音と共にコルク玉が直撃。

しかし一撃では小動もしない。

続けざまに二発、三発、四発、五発と直撃し、ターゲットだったと思しき二匹セットの猫のぬいぐるみがぐらぐらと揺れ始め……落ち、落ち……た！

「やった……！」

周りから気付かれない様に小さくガッツポーズ。

自分の事でもないのに、ああいう子供のチャレンジは成功すると嬉しい。

負けても残念と思うだけで実際は痛くも痒くもないから安上がりでもある。

「あ、塔城さんも何か当てたんですか？」

「いえ私は何も……って、なんですかその袋」

景品のぬいぐるみを抱いてはしゃいでいる姉妹から視線を読手さんの声のする方に向け直すと、読手さんが何か内側から押されてごっちゃりした袋を手に下げていた。

「いえね、塔城さんが射的の屋台を見たままじーっと動かなくなって

しまったので、近場の屋台を荒らして来ました」
「……す、すみません」
少女スナイパーがじっくり狙いを定める場面を息を殺して観察していたせいで時間を忘れてしまったらしい。
二人で遊びに来たのにすっかり読手さんを放置してしまった。
「や、謝られる程でもありませんって。じゃ行きましょうか」
促されるまま、その場を立ち去る。
少しだけ振り返れば、射的場の前で幼い姉妹が白猫と黒猫のぬいぐるみを抱えてはしゃいでいた。

もう夜も遅い為か、既に祭り囃子は聞こえず、通行人が生み出す喧騒も少なく、草原に隠れる虫のじぃじぃという鳴き声と、私の履いている下駄のからころという音だけが響く。
何かおかしいな、と思い、会話が無いのだと気付く。
でも、それほど不快じゃあない。
環境音以外に音のない夜道では互いの息遣いが聞こえ、一人でない事を意識できる。
「そういえば、射的好きなんですか？　さっき見てましたけど」
「……いえ、射的はそれほど」
じゃあ何故、と思い、子供のチャレンジを見るためかな、と思い、少しだけ違うか、と、想いを改める。
たぶん、だけど。
「あの姉妹を、見ていたんです」
「お知り合いで？」
首を横に振る。
「ちょっと、昔を思い出して」
昔。
まだそれほど経ってない筈なのに、遠い昔のようで。
でも、それでも、今でも鮮明に思い出せる。
親が死んで、あの人と……黒歌姉様と一緒に生きていたあの頃。
私達は猫の妖怪の中でも上位に位置する猫？ではあったけれど、早

くに死んだ親からは力の使い方を教えて貰えていた訳でも無く、頼るものの無い生活は、文字通り泥を啜って飢えを凌ぐ様な日々だった。
楽しい事なんて殆ど無くて、二人して死にそうになった事なんて何度もあって。
でも、姉様が居た。
あの時の私には姉様が居て、姉様には私が居た。
それだけで、世界は回っていた。
幸せだった。
「……」
なんて事を、口にするのもおかしな話だ。
私と読手さんは、互いの深い所には踏み込まないから、友達をやれている。
……そうなると、素直に『姉妹を見ていた』なんて言うのも不味かったかもしれない。
今日は楽しかったから。
誰かと二人で居て、満ち足りていたから。
仲の良い姉妹なんてのをタイミングよく見てしまったから。
だから、ふと、思い出してしまった。
余計な事を――――
「塔城さん」
思考を遮るように、普段よりも心持ち強い口調で名前を呼ばれた。
声が前から聞こえるのは、いつの間にか私が立ち止まって居たからか。
「すみません、変な事を言って。さぁ、帰りましょう」
努めて笑顔で、出来る限り明るく。
……今まで表情や声を作る事が少なかったからか、自分の今の声と表情に自信が無い。
ちゃんと笑えているだろうか、ちゃんと明るく聞こえただろうか。
あまり表情を見られたくない、読手さんよりも前に出るために、早足で歩き、
「わっ」

ぷつ、という軽い音と共に、前のめりにバランスを崩してしまった。
とっさに更に一歩踏み出し、寸での所で転ばずに済んだが、何故こんな何も無い場所で転んでしまったのだろう。
「大丈夫ですか？」
「ええ、でも、靴が」
足元を見てみると、履いていた下駄の鼻緒が切れてしまっていた。
濡れると切れやすくなる、って聞いたことがあるけれど、もしかしたら、最初に金魚すくいの屋台で少し脚に水をこぼしてしまったのが原因かもしれない。
「どうしよう……」
下駄の鼻緒を応急修理する話は聞いたことがあるけれど、下駄を履く機会なんてそれほど無いから実際にどう修理すればいいかわからない。
最悪の場合、裸足で帰るか、浮遊（レビテーション）で少し浮いて帰るか、のどちらかになるだろうけど、できればどちらも避けたい所だ。
「塔城さん、はい」
「はい、って」
名を呼ばれ目を向ければ、読手さんがしゃがんで背を向けていた。
「……大袈裟じゃないですか？」
「別に、そのまま家まで送るなんて言いませんよ。もうちょっと明るいとこまで行って、そこで修理すれば済む話です」
「……それなら」

「……」
「……」
読手さんに背負われて、夜道を行く。
じぃじぃという虫の音を除くと、殆ど何の音も聞こえない。
自分の下駄の音が無いだけで、さっきよりも格段に静かに感じる。
それでも何も感じないわけじゃなくて、背負われた背中から、読手さんの息に合わせて身体が動く感触と、温かい体温を感じる。
「……明るい場所に行かなくても、修理くらい出来るんじゃないです

か？」

一応一度は納得して彼の厚意に甘える形になったけれど、気恥ずかしさもあり、降りる理由を探す。

「そもそも、明るさとか、関係ないじゃないですか」

これだ、と思うが、それを言ったらさっきの私もそうだ。

別に、私が作り笑いに失敗していたとしても、この人に見える訳じゃない。

だから、無理に走る必要だって無かったのに。

……たぶん、それだけ慌てていたんだろう。

絶対に見られたくないなんて、相手が目を閉じている事を忘れて思ってしまうくらいに、私は酷い表情をしていた。

それこそ、友達と遊びに来た先でするべきじゃない表情を。

「別に此方、明るい場所に行かないと修理できないなんて言ってないですよ？」

「……そういえば、そうですね」

だからどうしたというのか。

開き直られて、なんと言えばいいかわからず、黙りこむ。

無理矢理にでも降りてしまえばいい、とは思う。

恥ずかしいという気持ちはあるし、背負わせて申し訳ない、という気持ちもある。

でも、不思議な話だけれど、このまま背負われていたい、という気持ちの方が強い気もする。

彼の背中は大きくて、温かい。

……もしかしたら、何時か背負われた姉の背に、彼の背を重ねているのかもしれない。

姉は、彼ほど大きな背中をしていた訳ではないけれど。

「今日は、すみませんでした」

「？　謝られる様なこと、されてません」

唐突に謝罪の言葉を告げた読手さんに、首を傾げる。

思い返してみれば、私の方こそなんだかはしゃぎ過ぎていた為に、結構な迷惑を掛けてしまった気すらする。

謝る筋合いはあっても、謝られる筋合いは無い筈だ。
「……実は、塔城さんに浴衣で来て貰えないか、グレモリー先輩に相談してしまったんです」
「……え、え？」
何故。
思い浮かぶのはまずそれだ。
今更確認するのも何だけど、読手さんは基本的に瞼を閉じて生活している。
詳しい事情を聞いたことは無いけれど、『見えすぎる』という視覚の異常の為に、ストレスを感じない為に視界を閉じているようにしているらしい。
勿論、目に何かの封印をしているわけでもないから、瞼を開けようと思えばいくらでも開けられる。
でも、彼が日常で自主的に瞼を開ける事は、恋人である日影さんを見る時以外では殆ど無い。
……私に、浴衣を着せたい、という、動機を持つことも無い筈なのだ。
「まさか、コーヒーぶっかけて物理的に浴衣を着ざるを得ない様にするとは思わなくて」
「いえ、それは読手さんのせいじゃないから、いいんですけど」
勿論あの部長の訳知り顔のニヤけ面は忘れないし赦すつもりも無いし何処かで必ず補填してもらうつもりではあるけれど、それはあくまでも部長の落ち度。
私が聞きたいのは、そんな的はずれな謝罪の言葉なんかじゃなくて。
「なんで、私に浴衣を着せたかったんですか？」
たしっ、と、今まで音になっていなかった読手さんの足音が一歩分だけ響く。
「……塔城さんって、こういう時ストレートに聞いてきますよね……」
困ったような声と共に、足音はどんどん小さく、さっきまでの無音に近付いて、でも、消えない。

動揺しているのだろうか。
そのまま、小さい足音を響かせながら歩き続け、暫くして、
「見てみたかったんですよ。……塔城さんの浴衣姿」
ぽつり、と呟くように小さく告げられた言葉。
何で、という言葉は、口に出る前に飲み込んだ。
小さい声で、少しだけいじけているような、拗ねている様な声で告げられた言葉の意味を考えて。
読手さんの、彼の人生が、重ねてきた、今も重ね続けているであろう苦労が、ほんの少しだけ垣間見えた様な気がして。
デリカシーが無いのは、重々承知だけれど――――、同情とか哀れみとか、そういう失礼なもの以上に、浮かび上がる感情があった。
勿論、気恥ずかしさもあるけれど、そんなものは、些細な事だろう。
「あぁ」
多分、読手さんも、こんな気分だったんだろう。
この、頬と耳が熱くなるような感覚も得ていたかは知らないけれど。
自然と口を突いて出る言葉が似るのは、付き合いがだんだんと長くなってきた証拠かもしれない。
目を細め、背中から見える後頭部と横顔に視線を向けながら、デリカシーを道端に投げ捨て、思うがままを口に出す。
「読手さんは、かわいい人ですね」
私が、特別な衣装を着ている姿を『見たい』と言った彼。
その一言に、目を閉じて、視覚を封じて生きる事を選んだ、これまでの彼の人生の苦難を知らない私が、どれだけの理解を持てているかは分からないけれど。
「……、……左様ですか」
何かを言い返そうとして、何も思いつかなかったのか、そんな事を言って黙りこんでしまった読手さんを見て、思う。
ああ、これが普段の読手さんが付き合う私なのか。
面倒面倒と言いながら、面倒な事情を持つ私との友達付き合いを止めない理由が、ほんの少しだけ解った気がした。

そうして、私達は町の貯水池も兼ねた公園にやってきていた。
近くで祭りがあったからか、設置されたゴミ箱には持ち帰られる途中で空になって捨てられた、屋台の食べ物のパックなどが大量に捨てられている。
人が全く居ない訳ではないけれど、それなりに広い公園であるためか、照明の近くにある屋根とベンチのある小屋の骨組みの様な休憩所の周辺には誰も居ない。
「はい、出来ました」
いざ補修を初めてみれば、出来上がるまではあっという間で。
完全に修理したという訳ではないけれど、五円玉と髪紐を使っての簡易修理は、見た目にもそれほど違和感無く、履き心地も悪く無い。
相変わらず小器用な人だ。
「ありがとうございます」
こんこんと爪先で地面を蹴り、感触を確かめてから、少しだけ読手さんから離れる。
屋根の下から出て、手すりの先に見えるのは貯水池も兼ねた大きめの池。
普段から手入れがされているからそれなりに清潔で、周囲に一定間隔で設置された街灯のお陰で湖面が僅かにきらきらと輝いている。
素敵な光景だ。
一緒に居る人と、一緒に見れたらな、と思える程度には。
だから。
「読手さん。……この浴衣、似合いますか？」
少しだけ、踏み込む。
度合いが合っているかはわからないけれど。
『見たい』と思ってくれた、『見たい』と言葉にして告げてくれた彼の一歩に合わせるように。
『見て欲しい』と、言葉にして告げる。
『見て欲しい』と思うから。
瞼を開けたい、と、言葉の外で願う彼に。

瞳を見せて、と、言葉の外で私が誘う。
「……」
沈黙が痛い。
実の所を言えば、私だって勇気を出している。
今、一歩だけ踏み込んだ『此処』は、彼にとっての聖域だ。
自分を『此方（こちら）』と言う彼の、こちらとあちら（誰か）を分かつ線の先。
爆発しても可笑しくない。
積み上げてきた交流も、私が確かに感じている親しみも、背中を押してくれた友情も、全て無くしてしまうかもしれない。
不安と緊張で心臓は痛いほどに激しく鼓動を刻んでいる。
この心臓の音を聞いて、少しは配慮してくれたらな、と、願いたく成る。
「前々から思ってたんですけど」
知らず、僅かに彼の顔から逸らしていた視線が、彼の言葉で元に戻る。
眉をハの字にし、安堵するような、困ったような表情を見せる読手さんの瞼は、しっかりと開いていた。
「塔城さんって、本当に猫ですよね」
「――――ええ、私、あく魔（悪魔）まで猫なんです」
悪魔として生まれ変わっても、私が猫？、猫の妖怪である事に変わりはない。
だから私はたぶん、誰かに攻められるより、自分で攻める方が上手いんだろう。
不安も緊張も、それが晴れた安堵も覆い隠して、不敵に笑えているという自身が何故かある。
攻める側は、攻められる側に弱い所を見せてはいけないんだ。
「……そういうとこ以外も、ですよ」
「はい？」
首を傾げると、読手さんが一歩、二歩と歩み寄って来た。
腕を伸ばせば肘が伸びきる前に手が届く、深呼吸すれば互いの息も届くような距離。

遠い、とも感じれば、近い、とも感じる。
普段、この距離で向かい合う事はそう無い。
しかも、今はこんな場面だ。
少しだけ、少しだけ、安堵で収まりかけていた胸の鼓動が強くなってしまうのを、誰が責められるだろう。
「塔城さんは、もう少し、図々しくなっていい。……重い話を聞くくらい、友達なら普通だよ」
「う……」
姉の話を避けたのを悟られていた。
その遠慮が、友人としては寂しい、という事だろう。
……という推論よりも。
自分に向けられた、敬語でない、馴れた間柄での口調に、私の身体は強く反応していた。
顔が熱い。
「これ」
ぐい、と、手を掴まれる。
しっかりと触れ合った、互いの手指の感触が良く解る接触に胸が一際大きく高鳴り、少ししてから、何かを握らされた事に気が付いた。
恐る恐る、手のひらの中身を確認する。
「……あの、これって」
頑丈そうな、でもゴツゴツしていない、高級そうな幅の細い靭やかな革のベルト。
腕時計の様にベルトの中ほどに埋め込まれているのは、黒とも黄金ともつかない、私の知らない不思議な色を湛えた綺麗な石。
魔力とも光力ともとれる混沌とした力が渦巻いている様で、でも、何もかもを飲み込み消し去る虚無の穴の様にも見える。
見たことも聞いたこともない、思い当たる節すら無い奇妙な、でも、間違いなく貴重だと判る石。
「呪符（おまもり）。明日からの冥界行きの、安全を願って」
さっきから続いている強気な口調に、先とは逆に、角度の緩いハの字を上下逆さにした怒っている様な眉。

改めて見てみれば、僅かに顔が赤い気がする。
それに加えて、敬語でないけれど、少し途切れ気味な言葉。
照れているのか、とも思うけれど。
照れながら渡されたからと言って、これは気安く受け取っていいものとは思えなかった。
「いや、でも、こんな、高級そうなもの」
「素材は手元にあったタダ同然のものしか使ってないよ。でも、効果は折り紙つき。これでもアトラス院上位の直弟子だから」
何その追加属性聞いてない。
……という、普段なら即座にできる様なツッコミも出来ない。
それくらい、この短時間で色々と衝撃を受けた。
そんなショック状態から回復するのを待つ様に、読手さんが一歩下がり、天を仰いで大きく息を吐く。
「まぁ、お姉さん云々の話は、したくなった時にでも言って下さい。……まぁまぁの友人からは、多少なりとも踏み込み合ってるつもりですので」
顔を下ろした時、瞼は閉じ、口調は何時もの敬語に戻っていた。
先までの緊張や照れは見えず、何時もの余裕が見える瞼を閉じた柔らかい笑み。
落胆と安堵を同量感じながら、頷く。
「……何時か、気持ちに整理が付いたら。必ず」
私の煮え切らない返事に、読手さんは笑みを深くして、一つ頷く。
そして、まだ戸惑いの中から抜け切れていない私に、当たり前のように手を差し出す。
「それじゃあ、帰りましょうか」
今度こそ、屈託のない明るい笑顔を浮かべながら告げられる、今日の終わりに向けての誘いの言葉に、
「……はい」
手を繋ぐことの距離感とか、そういう諸々を一度全て無視して、手を握り返す。
少し蒸し暑いくらいの夜、だけど、握った手の温かさは、不快さと

は無縁のものだった。

三十八話　Kの懊悩／懐かしい繋がり

列車に揺られ窓の外を眺める。
地下に設置された悪魔用のホームから出発したグレモリー家専用列車が走るのは、当然地下にある線路。
地下から冥界に繋がる異空間を通るこの路線は、冥界に出るまで窓の外を見ても面白いものは何も見えない。
見えるものと言えば薄暗い地下線路、明るさの無い異空間に、窓に映る車内の光景くらいか。
頬杖を突いて、窓に映る自分の姿を眺める。
顔立ちは間違いなく整っている、のだろう。
幼すぎるという欠点はあるけれど、少なくとも引け目を感じるような造形はしていない。
髪は癖の少ない艶のある白髪、まっすぐに降りているけれど、触ると細い猫っ毛。
髪の毛にワンポイントで黒猫の髪留め。
少し子供っぽいかな、とは思うけれど、変に背伸びをするつもりも無い。
これくらいの可愛らしいアクセは許されるだろう。
首から下は……まぁ、仕方がない。
顔立ちにしてもそうだけど、私は少し育つのが遅いのだと思う。
姉様は立派に育っていたから、今後の成長待ち、
総合的に見て、少し幼く見える美少女……もしくは、なけなしのプライドをかなぐり捨てて正確に言うなら、成長すれば美人になるであろう幼い少女。
高校生に見えるかと聞かれれば、悔しいけれど客観的には一発で高校生であると判断するのは難しい。
視線を鏡に映った自分の手首にスライドさせる。
家に持ち帰り、散々何処に付けるか迷った挙句、無難に手首に巻く事にした、呪符、お守り。
中ほどに付けられた小さな石は不思議な輝きを放っているけれど、

それと意識して見なければ悪目立ちもしない。
自己主張の少ないデザインで、どんな服装をしていても違和感なく付けておく事ができる。
くい、と、手首を少しだけ回すと、列車内の明かりを反射して石がきらりと輝いた。
「ご機嫌だね」
「そう見えますか？」
声を掛けてきた向かいの席の祐斗先輩の言葉に、振り向かずに返す。
鏡に映る顔は、何かの表情を浮かべている訳でもない仏頂面、ぼうっとしている様にも見える。
……と、いいなぁ、という私の気持ちを廃して言えば、なるほど、確かに私はご機嫌に見えるのかもしれない。
無理に無表情を装うとしているけれど、口の端も頬も少し釣り上がりそうで、それを無理矢理に押さえつけている為に、にやけるのを我慢しているようにしか見えない。
「なんていうか、だめですね、私は」
「そうかな？」
「そうですよ」
今朝から、というか、昨日の夜から、自分の表情を制御できない。
勝手に笑みが浮かんでしまうのを抑えきることができない。
お陰で今日の私はにやにやとニヤけながら歩く不審人物になってしまっていた。
悪魔の使う駅に辿り着くまでに一般通過人間のヒトたちに何度となく奇異の視線を向けられていたので間違いない。
挙句、列車に乗るまで私の表情に特に触れずに冥界行きを進行していた部長に、列車に乗って部外者が居なくなった途端、
『あらどうしたの小猫、今日はご機嫌ねぇ。昨日のお祭りで何かあった？　……あら、あらあら！　綺麗な腕輪、誰からのプレゼント？　ああいやいや！　別に無闇に眷属のプライバシーに立ち入ろうという訳じゃないのよ！　でもほら、プレゼントした側の好意とか好

感がよく現れてる素敵なプレゼントだなって思っちゃったからついね？　別に誰からのプレゼントなのかとか、どういう状況でプレゼントされたのかとかが聞きたい訳じゃないのよ？　何もそんな、プライバシーを、デートをの詳細を！　無理矢理に聞き出そうだなんて！

……ところで、罰ゲームアリでババ抜きとかウノとかしない？』

などと息継ぎ無しの長台詞を満面の笑みで向けられる始末。

因みに部長は望み通り罰ゲーム付きのスピードで負け、（全てハズレの）濃縮デスソース入りロシアンシューの一気食いをして顔面芸を披露した後にゆっくりとお休みになっている。

お陰で車内は実に平和だけれど。

「……顔、直らないんです」

「笑顔で居るのはいいことじゃないかな」

「本気で言ってますか？」

「さぁ？」

クスクスと笑って逸らかす祐斗先輩に聞こえないように口の中で小さく舌打ちをして、腕輪をもう片方の手で弄る。

何の革とも知れない、でも、指で触れば細かく刻印がなされていると判るベルト。

意味は私の知識では読み取れないけれど、たぶん、真ん中の石と合わせて呪符の効果を発生させるんだろう。

作るにしても買うにしても、似たようなモノを用意しようと思ったら、それなりに掛かるだろうというのは私でも判る。

『冥界行きの、安全を願って』

読手さんの言葉を思い出す。

……別に、冥界行きはそれほど危険という訳ではないのだけれど、部外者である読手さんからすると危険な場所に思えるのかもしれない。

それこそ、ただの友達――――まぁまぁの友人よりは踏み込んだ、結構いい感じの友達程度の相手に、安全を願ってお守りを渡して来るくらいに。

そう、そうだ。

お守りを渡してきたのは、単純に友人の身を案じての事だ。
だから、この腕輪の様なものは、ただのお守り、呪符。
なんか、こう、渡された時のタイミングとか、雰囲気とか、人に話したら誤解を招きそうな部分もあったけれど、特に深い意味がある訳じゃない。
「はぁ……」
溜息。
……深い意味があるわけじゃない、なんていうのは、理解できているのだけれど。
理解できている相手だからといって、そういう、思わせぶりな事をしても良い訳じゃない。
私だって、一端の思春期の少女なのだ。
ああいう雰囲気で、ああいう事をされて、何も感じない訳じゃない。
例えそれが、親しい友人相手であったとしても。
「……読手さんの、ばか」
親しい相手にしか、そういう事をしない人だというのも判る。
だから、彼が心を許してくれている、というのは、悪い気分はしないのだけれど……。
「……」
「……何してるんですか」
沈黙になりきれない、『んふーっ！』という鼻息に顔を向けると、列車の中を歩きまわって物珍しそうに見学していた筈のゼノヴィア先輩が、目を爛々と輝かせ、鼻息荒く携帯を向けていた。
「大丈夫、この携帯電話のムービー機能を試していただけだから、心配ない」
「大丈夫じゃないです」
「そうだな、このムービー機能も凄いが……塔城小猫、流石の乙女力だ」
聞いてない、まるきり聞いてないですよこの人。
私の発言を完全に無視して独自に話を進めながら、さっきまでムービーを撮っていた携帯を操作し始め……。

『……読手さんの、ばか』

瞬時に立ち上がり携帯に拳を振るう。

空気を裂く破裂音と共に突き出された拳はしかし、ゼノヴィア先輩が僅かに身を捩るだけで避けられてしまった。

「ビビッと来た。これが、私が子作りをお願いしても聞いてくれない、足りないものか」

「消して下さい」

「ああ。……少し、これで勉強して、それから消すさ。何、誰かに見せる事はないと約束しておこう。この保健の教科書に誓うよ」

携帯を奪う為に飛びかかる。

十割以上取り上げるよりも携帯を破壊するつもりで攻撃を加えても、ゼノヴィアさんには一切届かない。

届いた攻撃もいなされ、逸らされ、携帯を壊すには至らない。

ガチ前衛の長所を嫌な所で垣間見た気がする。

「何を恥ずかしがっているんだ？　これぞ青春という奴ではないのか？」

「青春だから、恥ずかしいんじゃないかな」

ゼノヴィア先輩の本気で疑問に思っている風の言葉に、横から答えながらも我関せずと何かの雑誌に目を落としている祐斗先輩が憎らしい。

早く、一番うるさく騒ぎ立てそうな人が目を覚ますよりも先に、ゼノヴィア先輩の携帯からさっきのムービーを消去するか、携帯自体を消去しなければ、これから夏休み開けまでの冥界での日々が危ない。

（ああ、もう、読手さんの馬鹿！）

元凶の様な、元凶と呼ぶには遠い原因である相手に心の中で八つ当たりしながら、ゼノヴィアさんを静かに無力化できそうな魔術の詠唱を始めるのであった。

温かく、柔らかい。

夏の暑さからか、少し汗ばんだ肌の感触を感じながら、目を覚ます。

「ん……」

しばしばと目を瞬かせ、最初に視界に映ったのは、キメの細かい肌。
顔を埋めた豊かな双丘を覆う、汗を吸ったシャツの匂いを鼻孔で感じながら、ゆっくりと状況を思い出す。
「おはよう。よう眠れたか？」
「んー……、うん、おはよう」
枕のように顔を沈めていた胸の持ち主、日影さんの声にぼんやりと答え、朝一番の日影さん分を補給するために、顔を見て、それから再び胸に顔を埋める。
「なんや、二度寝か？」
「いや、そういう訳じゃないけどー……」
眠い、という訳ではないけれど、日影さんに抱かれていると心地良く、つい起床が遅れてしまう。
だからこそ、普段はなるべく自重しているし、同衾していたとしても精神感応金属オリハルコンの如き意志で朝の日課を始めているのだけれど。
何しろ今は夏休み。
通学の時間に捕らわれて、慌ただしく朝の準備を始める必要もない。
少しくらい、朝から日影さんと一緒に無駄な時間を貪りたいという欲望に負けても良いんじゃないだろうか。
「もうちょいこのまま……」
「甘えたさんやな」
豊かな膨らみに比べて平坦な口調に、少しだけ優しさが感じられる。
軽く抱きしめるように後頭部に回された腕がぽんぽんと首筋を叩く。
眠くなる……という程寝不足ではないけれど、こうされると心が安らいで起き上がる気力がぐんぐん削れていく。
場合によっては別の場所に起き上がる気力が充填されてしまうのだけれど、それは昨日に散々発散したので今日は大丈夫だ。
「そういえば、先に起きてたけど」

「寝顔見とっただけや」
「なんで？」
「可愛いしなぁ」
「そうかぁ」
まぁ、別に可愛いと言われるのは良い。
親戚……とは、一部を除いてそれほど交流が無いけれど、母さんの昔の友人からは良く、静かにしている時は母親に似た顔立ちをしている、と言われることがある。
父さんの面影も見て取れるらしいけれど、母さんに似ているなら可愛いのも道理だ。
男としては顔面を可愛いと評価されるのは複雑な部分もあるけれど、母さんに似ている、というのは純粋に嬉しいのでプラスマイナスで言えば確実にプラスだ。
ドヤ顔をする時の雰囲気が父さんに似ている、という意見もあるので父さんにも似ているのだろう。
いい事だ。
此方は間違いなく父さんと母さんの血を継ぐ自慢の息子なのだと再認識できる。
そしてそんな自分の姿を日影さんが気に入ってくれている、というのも嬉しい。
惜しむらくは鏡を見て自分の顔を確認しても、中々挿絵で見ることができないという点だろうか。
実際、ドラマチックな場面で鏡を見る余裕なんて無い時の方が多いから仕方がないのだけれど。
「……朝ごはんってどうなってるんだろ」
「わしは作っとらんよ」
「気になるならさっさと起きろ！」
唐突に会話に割り込んできた声は、障子戸の向こうから聞こえてきた。
すると、ノックもアイサツも無しに、ノータイムで障子戸が勢い良く開かれた。

瞼を閉じる間も無く、しかし、視線の先に文字列の塊は存在しない。
そこに居た声の主は……狸。
デフォルメされた服を着た狸が、こめかみに井型を付けて解りやすく怒っていた。
「久しぶりの再会だから、このタヌ太郎様自ら朝飯を用意してやったっていうのに、朝っぱらからイチャツイてるんじゃねぇ！」

日本のとある場所、とある山。
無数に山の連なる、現代日本ではそう見られない未開拓の山々が、此処には存在する。
地図に乗っている土地ではない。
いや、実際に存在していないという訳ではないが、常人にこの山を発見する事は難しいだろう。
山は古い時代において、異界の象徴ともされた。
文明の火の外にある世界。
人の力の及ばない大自然という未知の領域。
世界と世界を区切る境界、世界と世界の境の世界、どの世界とも異なる世界。
それは、人間が木々を伐採し、山の土を削り平地へと作り変えた所で失われる事も侵略される事も無く、その姿を保っていた。
勿論、すべてが大自然の力という訳ではない。
この自然が、異界が保たれているのは、数百年前に偉大なる忍者マスターがこの土地の権利を所有し、子々孫々が定期的に手を加えているからという一面もある。
だが、勘違いしてはいけない。
忍者の力は強大ではあるが全能ではない。
山という異界を形作るのは、あくまでも山が元から持つ閉鎖性、内部に完結した循環、一つの世界としての構造を備えているからなのだ。
古代の忍者は、それに少しの力添えを行っていたに過ぎない。
しかし、現代の忍者の数は古の時代に比べて減少傾向にある。

忍者の末裔達は自らが忍者である事を捨て、忘れ、その力と権利を義務と共に放棄する事も多い。

この土地もまた、そういった忍者の末裔の衰退によって放棄されようとしていた『力』の一つだった。

知と才を備えた人ならざる獣。

それら自然発生的な忍者の卵を集め、エリート忍者教育を施し、忍犬や忍猫、忍蛙や忍龍といった使い走りではない、共に肩を並べて戦う一つのクランと成す。

代表的なクランである伊賀や甲賀を始めとした様々な忍者が教育者として招かれて獣をニンジャと化してきたこの山は、やがて人による教育を施さずとも、獣のニンジャマスターによる後続の育成が行われる閉じた社会として完成した。

伊賀、甲賀、そして、獣達の間で独自に発生、発展を遂げた『念雅』斜歯忍軍の末裔である、とある富豪の老人によって辛うじて経済を保っていたこの閉じた忍社会は、近年、老衰によって死去した老人の手から、とある企業の元に権利が移ることとなった。

その企業こそ、我らがエグリゴリである。

「ま、だからっておいら達の暮らしが楽になる、って訳じゃねえ」

「でも、楽になったら楽になったで疑ってただろ?」

「おう、『こんな贅沢でおいらを篭絡できると思ったらんほぉぉぉ!』ってな!」

「一行で篭絡されてんじゃないか!」

がははと狸腹を抱えて笑う狸、タヌ太郎と、それにツッコミを入れる、これまたデフォルメされた狐のツネ次郎。

二人……もとい、二匹の微笑ましいやり取りから、朝食に目を向ける。

基本的にはこの山で採れたもの、或いは栽培しているものを材料にしているが、変に野性的だったり無理に忍者食っぽい事も無い、極めて人間的な和食だ。

盛り付けは多少乱雑ながら、いや乱雑だからだろうか、実に食欲をそそる。

瞼を閉じれば鼻孔をくすぐる味噌と焼けた魚の匂い。
これを、見た目デフォルメされているだけの、獣そのものの手で創り上げるのだから、流石忍者である。
しかも、タヌ太郎の作る飯は美味しい。
此方が忍術修行の一環で此処に訪れた時、見学として一緒にやってきた母さんが驚愕した後、半日思い悩むレベルで美味しい。
現役主婦が自らの料理の腕と比較して凹むレベルで美味しい和食を作れる。
……実際、製造工程では、ちょっと味噌汁や何やをこぼしたり、包丁で指を切りかけたり、うっかり皿を落として割りそうになったり、まるで初心者の如き見ていてハラハラする様なグダグダな動きをしているにも関わらず、だ。
やはり、料理にはイカンともし難い才能による差が現れてしまうものなのかもしれない。
まぁ、現状作った料理を比較される側ではなく食べる側である以上、タヌ太郎が料理を作ってくれたというのは喜ばしい。
喜ばしいのだが……。
「……まん丸が居らへんな」
そう、この屋敷で一緒に寝泊まりしているもう一匹の忍者、まん丸が居ない。
現当主である七代目ネンガ様は生活リズムが違うから食事を一緒に取る事は無いけれど、まん丸はタヌ太郎やツネ次郎と同じ、念雅流の門弟としての生活リズムで生活している。
当然食事も一緒に取るのが常の事であるし、そもそも人懐こい部分のある彼は、来客とあれば食事の場は積極的に同席しようとするはずだ。
「アイツなら他の客の出迎えに出たぞ」
「他の客？」
「人間の学生の間じゃ、今は夏休みとかいう期間なんだろ？　おかしな話じゃないさ」
「ここ、一応隠れ里じゃなかったっけ」

まぁ、伊賀も甲賀も今じゃたこ焼き屋とお好み焼き屋を兼業するような時代だ。

此方だって正確に言えばこの山からすれば余所者なのだし、隠れ里にして異界であるこの山に客が来る程度、驚くほどの事ではないのかもしれない。

「良いじゃないか、遠野の連中は親戚みたいなもんなんだから」

「親戚ぃ？　ツネ次郎、それじゃお前、甲賀の連中や伊賀の連中はどうなるんだ？　親兄弟にでもなるってか？」

焼き魚の身を解し、大根おろしを載せて口に運びながら、会話の中から得た一つの単語について考える。

遠野、親戚みたいなもん。

念雅流、ひいてはこの山と関わりの深いクランと言えば……。

「天狗ノ忍衆かぁ、久々に名前聞いたなぁ」

この山で修業していた頃以来だから、もうかれこれ五年か六年ほどはその名前を耳にする機会が無かった。

「まぁ、都会に住んでればそんなもんだろ」

「ここよりはマシって言っても、あいつらも大概引きこも」

スコン、という、小気味いい音と共に、味噌汁を啜っていたタヌ太郎の頭部がある辺りから小気味の良い音が聞こえた。

音からしてクナイか。

察するに、綺麗に放物線に近い直線を描き、一回転しながら飛んでいったクナイがタヌ太郎の頭に突き刺さったのだろう。

通常の野生の狸であれば脳にまで達したクナイで即死するところだ。

が、タヌ太郎もこれで一端の忍者である以上、クナイの一撃程度で死ぬなどという事はありえない。

倒れて動かないし、何時までたっても丸太と入れ替わらないけど、別に命に別状があるわけじゃないのだ。

「確かに遠野の山からは余り出る事はないけれど……」

声と共に、すぅ、と、滲み出るように気配が濃くなり、庭の方に人ひとり分の気配が現れた。

人、というには僅かにズレた気配、しかし、紛れも無い忍の動き。
獣混じり、妖混じりの気配をさせる忍と言えば、大体が隠忍(おにのけっとう)の血統の連中だが、此方はこの気配に覚えがあった。
「御斎(おとぎ)の連中みたいに言われるのはあんまり気分が良いものじゃないのよ？」
ふぁさ、という音と共に気流が少し動いたのは、台詞と共に葉っぱで出来た扇で口元を隠したからか。
いきなりクナイを人の……狸の頭に突き刺したことなど気にもしていない風に、落ち着いた声色。
「だからって、いきなりクナイを頭に投げる奴があるかねぇ」
忍っぽい演出で現れた方とは対照的に、のんびりと廊下から歩いてやってきたのも、また覚えのある妖混じりの気配。
「悪いな、ちょっとウチの軍師様は気性が激しくてさ」
忍歩きの鍛錬の為に鶯張りになっている廊下を音もなく歩いてくる。
しかし、足音こそしないものの、耳が良いならば、そのすぐ後ろからわさわさという大量の毛がこすれ合う音が聞こえるだろう。
その音の出処、金色の毛並みを持つ九本の尻尾こそ、彼女に交じる妖の血の現れ。
……足音を消すのは癖になっているのに、気を抜いている時には尻尾の音を消し忘れてしまう、この癖。
此方も、やはり覚えがある。
「深里(みさと)ちゃんに、九魅(くみ)ちゃん？」
驚きと、僅かな期待を込めて瞼を開く。
二度三度と瞼を瞬かせた後、視界に映るのはまず、頭から血をぴゅーぴゅーとギャグの様に吹き出しながらテーブルに突っ伏すタヌ太郎。
吹き出す血やテーブルに溜まった血から守るように音もなく自分のご飯とおかずをタヌ太郎の側から離すツネ次郎。
「そのちゃん付けは止め……なくてもいいか。久しぶり、書主くん」
そして、庭からゆっくりと歩いてくるクールな軍師っぽさを心がけ

ているのが良く判るクールっぽい笑みを浮かべた黒髪ツインテールの少女。

「相変わらず湿気た面してんな。ちゃんと飯食ってんのか？」

更に室内では、身体のシルエットを覆い隠す程のもさもさとした尻尾を揺らしながら、予め用意されていた朝食の膳の前にどっかと座り込む金髪ロングの少女。

期待通り、数年ぶりの再会で女性としても忍としても成長している姿は、背景ごと見事なまでに綺麗な挿絵として此方の視界を埋め尽くす。

深里ちゃんと九魅ちゃん。

タヌ太郎、ツネ次郎、そして、九魅ちゃんの後ろから遅れて現れて、タヌ太郎の凄惨な状態を見て『ぴぃぃぃぃぃ!?』と鳴いているペンギンのまん丸。

全員が全員、まだ忍術もカラテも中途半端だった頃に出会い、共に学び、そして、天容の笛に纏わる一連の騒動に巻き込まれた、懐かしく、そして、大切な仲間。

再会の喜びと共に、まず、遅れて合流した、恐らく此方と日影さん以外の来客であろう二人に、思ったことをそのまま口にした。

視線を二人の顔から少し下にズラし、

「二人共、大きくなったねぇ」

スココンッ！

小気味の良い音と共に、額にクナイが連続して二本突き刺さった。

痛い。

「そういうのは日影さん相手に言ってなさい！」

「あ、わ、つい、ごめん書主！」

スカートの下から狸尻尾を逆立てて、赤面しながらの怒声を上げる深里ちゃんと、慌てふためきながら立ち上がり、此方に駆けて来る九魅ちゃん。

隣でむぐむぐとご飯を食べ続けていた筈の日影さんに倒れゆく身体を支えられ、薄れ行く意識の中で感慨に浸る。

再会を果たした仲間の中の、二人のくノ一。

小学校高学年の頃に出会った、平坦から抜けだそうとし始めていたあの二人。

数年ぶりに見たその胸は、豊満であった。

三十九話　Kの懊悩／変化を望んで

フットワークと共に軽いシャドー。
拳を振るう度、ステップを刻む度、トレーニングウェアの各所に仕込まれた枷が常に無い負担となる。
ボクシングにも似た軽やかな拳主体の動き。
仮想的の懐に潜り込む……ようにして脇をすり抜けながら、
「きくきりきくきり3きくきり　あわせてきくきり6きくきり」
早口。
呪文、混沌（カオス・ワーズ）の言語とはそも発音が異なるものの、要は舌を上手く回す事が重要なのでさして問題でない。
庭園を、室内を、山を、荒野を、駆け、飛び抜けながら。
シャドー、シャドー、シャドー。
私がイメージできる中で、私が想像できる範囲で最速と思われる相手を思いながら。
スウェイ、ジャブ、後退、唱えながら物陰に隠れ、解き放つ。
イメージの中で敵が弾け飛ぶ。
甘い想定、でも、甘くない想定を突き詰めるとどうしても死にながら逃げまわるか死にながら追いかけ回すかという現実ではありえない状況になる。
だから、こうすれば敵は倒れるだろうという想像の元で動く。
原始的な、地道なトレーニング。
基礎体力を造り、呪文の正確さを突き詰め、敵の動きを想像し、判断速度を上げる。
効果が出ない訳ではないし、他のメンバーのトレーニングが見事に実を結んだとして、私の力がそれに明確に劣る、という訳でもない。
『戦車』の耐久力を持った、敵の妨害も地形改造もできる魔術師。
それが今の私で、その性能は十分に発揮されている。
暴走する危険の無い、知性によって管理された力。
安定性もあり、最大火力では未だに部の中でトップ争いに加わることが出来る。

だけど、
「ああ……」
ふと、立ち止まる。
シャドーの相手、ぼんやりとした『敵』のイメージが、ふと一つの形を浮かび上がらせる。
和服を着た、黒髪の、私の、たった一人の――――
手を、伸ばす。
棒立ちで、拳すら握らず、呪文すら唱えず、ただ、幻の、イメージの中の存在に手を伸ばす。
あと少し、という所で、私の手は空を切り、実を持たない虚像が掻き消えた。
それもそうだ。
彼女が此処に居るわけがない。
彼女は、私の迷いが生み出した幻だから。
「姉、様」
虚像すら消えた虚空を、構わず握りしめる。
虚空を握りしめた拳を見つめる。
私の手の中には、確かな力がある。
過去の私とは比べ物にならない力。
戦う力、たぶん、届く力だ。
「……だけど、私は」
この力は、届く。
届かせるために強くなったのだ、とも思う。
だけど、私の心は届くのだろうか。
私は、どんな心をぶつけたいと思っているのだろうか。
「……」
口を開く。
誰に、何を言うかすらあやふやなままに口を開き、言葉になる前に無言が舌を、喉を硬直させる。
言うべき言葉も思いつかない。
そして、たぶん、言うべき相手も此処には居ない。

懐の携帯電話に手を伸ばす。
時計代わりに持ってきたそれは当然圏外、アンテナは一本も立たない。
手首のお守りに手をやり、石を撫でながら思う相手に、この場所からは届かない。
それは、寂しいことなんだと、今は強く思う。

聖魔剣ごと胸骨やその中の内蔵を砕かれた文字列、紅白の鎧ごと左右に真っ二つに成った文字列、滅びの魔力なるものを使えるらしい首にあたる部分のない文字列、特に特徴らしい特徴もない堕天使と人間のハーフから変化した悪魔のバラバラになった文字列、聖剣を握った手首から先が無くなり、脳天を割られた文字列。
見慣れた、殺し慣れた何時もの文字列達。
毎朝お馴染みの光景だが、今日は少し違う。
生命活動を停止した文字列に囲まれながら、ぴたり、と、動きを止める。
じり、と、光刃の熱が此方の首筋を焦がし、此方の刀の先端が相手の胸元、心臓の上に突きつけられる。
決着、ということで良いのだろう。
どちらが勝ったか、と言われると……。
「よっし、此方の勝ち」
「ああ、くそ、使っちまったもんなぁ、負けだ負け！」
悪態を付きながら九尾がもさもさとした音を立てる文字列……九魅ちゃん。
先までの忍者然とした冷たい雰囲気から何時もの少しヤンキーっぽい雰囲気に変わり、周囲の血生臭く、ピンと張り詰めた空気が解けた。
実際に怪我をするまで戦っても死なないかぎりは即座に回復できるのだけれど、鍛錬と言っていいかも分からない朝の軽い運動でそこまでやるのはバカバカしい。
それに、此方と九魅ちゃんなら、別にそこまでガチでヤラなくても

勝ったか負けたか程度は判断できる程度の実力もある。
そして、そんな相手から乱戦の中で勝ちをもぎ取れたのは、普段の練習の成果が実感できて素直に嬉しいのだ。
「まったく、だらしないったら無いわね」
「見学だけの奴からどうこう言われなくないなー」
「私は良いのよ、軍師だもの」
少し離れた場所から見ていた深里ちゃんが勝負の決着を確認してから近づいてきた。
呆れるというよりは誂う様な声に、表情を表す部分の文字列は『仕方ないわねぇ』と言わんばかりのもの。
普段誂われているからこそこういう場面でやり返すのかと思いきや、こういう場面で負けた仲間の調子を慮る反応、どうやら軍師として、というか、指揮官として昔よりもかなり成長しているようだ。
「……何よ、その眼」
「はい？」
眼、と言われても。
視線の先、九魅ちゃんの記述を参照すると、
【軽く柳眉を逆立てて怒りを露わにしている様で、顔の端々からは羞恥、照れの様な感情が垣間見える】
【照れを怒りの表情で見せないようにしているのだ】
と、書いてあるが……。
はて、深里ちゃんを照れさせる様な行為は一切していないと思うのだが。
もう少し読み進めればその理由も明らかになるかもしれないが、相手に許可も得ずに内心を読み進めていくのはデリカシーに欠けるだろう。
有象無象や、此方の眼のことを詳しく知らない相手ならともかく、深里ちゃん含む嘗ての天容の笛奪還チームは数少ない此方の【秘密】を知る相手だ。
バレるバレない以前に、心情的にそういう事はしたくない。
「優しい瞳で見つめられると照れちゃうってさ」

ケケケ、と、意地悪く笑う九魅ちゃん。
バヂッ、と、激しい音と共に小規模な雷が上空の蒸気や塵の記述で構成された小さな雲から九魅ちゃん目掛けて落ちてくる。
深里ちゃんの天候操作術による攻撃だ。
規模からしてツッコミや身内同士での軽いじゃれあい程度を想定したもの。
なお直撃した場合、非ニンジャの常人ならば即死する程度の威力である。
が、ガチ光速での戦闘が可能であるニンジャにとって、雷の速度は多少早く感じはしても対応しきれない程のものではない。
案の定、九魅ちゃんは尻尾のフサフサとした遺伝子情報や使用しているシャンプーやコンディショナーや生え変わった日付の記述の中から一本の折りたたみ式避雷針をその場に突き刺し、自らは軽い足取りで避雷針から遠ざかった。
当然、傍から見ていた此方もその場を離れる。
割と高い電圧なのが記述から読み取れる紫色をしているらしい電が避雷針に突き刺さり、周囲にぴりぴりと余波を撒き散らす。
「おお、怖い怖い」
茶化すように言う声に、もくもくと天上の雲が周囲の水分を吸収し巨大化していく。
「深里ちゃん落ち着いて、洗濯物乾かなくなっちゃうとまん丸が怒るよ！」
「後で散らすから大丈夫よ！　ていうか、貴方も関係ない風にしてないでよ！」

結局、幾度かの追撃の落雷が落ち、深里ちゃんを宥めて雲を散らして貰うまでに数分の時間を必要とした。
さっきはああ言ったが、こうして日が登り始めて日差しの強さを感じると、昼ごろに洗濯物を取り込んだ後に一雨振らせて貰って気温を調節してもらうのもいいかもしれない。
「でも書主くん、まだ続けてるのね、これ」

言葉と共に、乱戦風の運動のために描き上げた死体をぽいっ、と放り投げる。
どさりと音を立て、鎧に覆われているらしい文字列の身体が左右揃い、赤毛であるらしい生首と首のない死体の脇に並べられる。
二つの文字列はまるで仲睦まじく寄り添っている様に……は、見えないだろう。
死体は死体、魂はどこかに回収されても困るので既に回収して塗りつぶしてあるので、ここにあるのは何の意味も持たない死体に過ぎない。
【並んだ死体は双方共に損壊が激しく、どう贔屓目に見ても『死体が並べられている』という以外に表現のしようがなく、そこに何らかの感情を見出すには高い感受性が必要になる】
と、並べられた生命活動を停止している文字列の重なりあった部分に追記されている。
双方ともに、複写元はそれなりに交流があり、結構な頻度で言葉を交わしてもいる相手だ。
「あー、まぁ、習慣でね？」
呪文を受けてよくわからない何かに変化してしまった文字列の一つを軽く砕いてから、先に並べてあった鎧と赤毛の上にふりかけていく。
別に、この二人だけを一緒にしてこの一人を別にしておくのが可哀想、という訳でもない。
始末するなら一箇所に纏める方が楽なのだ。
「嘘つき」
どさどさ、と、手首の先の無い頭部の割れた文字列と胸部を貫かれた文字列を先の鎧と赤毛とよくわからない何かの上に荒っぽく重ねながら、九魅ちゃんが間髪入れずに此方の言葉を否定した。
深里ちゃんも九魅ちゃんも、抱えてきた文字列は実際に映像として見たらかなり凄惨な死体になっている筈なのに、特に嫌がる素振りも見せない。
当然だ。

二人共まだすべてのカリキュラムを収めた訳ではないにしても、世間一般で言う小学生の頃から忍者としての教育を受けているのだから、今更知らない誰かの死体程度に心が動く訳がない。

「うん、まぁ、嘘だけど」

忍者であれば、例え未熟だとしても死体に心動かす事はない。

だけれど、それが知り合いの死体であれば違う。

親しい相手であれば更に違う。

忍者には悲しみや怒りという激しい感情が無い、という訳ではない。

そういう心を表に出さない、行動や思考に反映させない訓練を積んでいるのだ。

忍者としての技能、刃とも言える技術の下に心を置き制御する。それが忍、しいては忍者、ニンジャとなる。

だけど、此方は違う。

「何時か本当に出来るように、続けているんだ」

例えば、間違っても描くつもりは無いけれど、同じクラスの愉快なクラスメイト達。

彼等はコミュニケーション能力に劣る此方に対しても積極的に接してくれる精神的イケメン揃いだ。

少しうわさ話というか、ゴシップ好きなところもあるけれど、それでも彼等の明るく協調性に溢れる健全な精神は尊敬に値するし、間違いなく好ましく思っている。

……だけど、彼等を仮に殺したとして、此方はショックを受けないだろう。

それどころか、何かの拍子にうっかりと殺してしまうかもしれない。

そして、それを発覚させないために、死体を消し去り、嘗ての姿を思い浮かべて複製を造り、何くわぬ顔で殺した相手の代わりとして元いた場所に戻し、日常に戻ろうとする。

何しろ、文字列だ。

人間の様な、生き物の様な、そんな素振りで日々を過ごしている、蠢

く文字列。
この世界の、此方以外のすべての存在が違うと言ったとして、違うと信じているとして、此方にとって、何処までもそれが真実なのだ。
世界が文字で出来ているとして、それを愛を始めとする様々な感情が凌駕する事を知っていたとして、この世界が誰か一人の絶望で滅んでいい軽い世界でないと知っていたとして、彼等の命や人生が誰かの手で不当に奪われていいものではないと理解していたとして。
ふと、本当に些細なきっかけで彼等を手に掛けてしまう可能性は此方には否定できない。
だからこそ、こうして日々の日課を欠かさずに行っている。
うっかり、此方の心が『文字の塊が、生き物みたいに振る舞うな』という方向に傾いて、ついつい罪もない誰かを殺してしまわないように。
予め殺す。
殺して、殺して、殺して。
命をこの手で摘み取って、彼等が死ぬことを確認するのだ。
彼等には摘み取られる命があるのだと。
生き物のふりをする文字の塊ではないという実感を、彼等の死から獲得するのだ。
もう十分だ、と、そう思えるまで殺すのだ。
もう今日は十分殺したと思えるほど殺すのだ。
罪も謂れもなく描き出され生み出され殺された彼等。
自分の都合だけで殺す此方は間違いなく悪党だ。
だから、彼等を非難するのも差別するのも蔑むのも怒りを覚えるのも恐怖を感じるのも違うのだと言い聞かせるのだ。
仮に、心の底から彼等の死に一切の後悔や哀れみや罪悪感を感じないとしても、社会的に見て、倫理的に見て、此方は既に彼等を殺した加害者なのだと。
そうして初めて、此方は安心して彼等と接することができる。
「信じてるのね」
「うん、信じてる」

頷きながら、生徒会のメンバーだったり、堕天使の偉い人だったり、天使だったり、魔王だったり、昔に会ったはぐれだったりの死体に鉤棒を引っ掛け、引きずり、投げ、積み上げて。

出来上がるのは文字の山だ。

死体の山でもある。

死体の山、の筈だ。

【死屍累々、積み重ねられた死体から流れ出る血が地面に染み込んでいく】

【流れ出るそれは命の証明でなく積み重ねられた彼等の命が肉体に留まれなかったという単純な死という事実を表している】

【どう言い訳をしようが、どう見方を変えようが、これは死体の山なのだ】

らしい。

そう書いてあるのならそうなのだろう。

この場にこの文字列が伝える事実を超克する何かしらの感情が無い以上、この事実は覆らない。

というか、早く始末しないと不味い。

いくら訓練を積んでいるとはいえ、心優しいまん丸にはショッキング過ぎる映像の筈だ。

日影さんとタヌ太郎達がまん丸を引き付けてくれている内に、さっさと始末してしまおう。

『海』の一部を汲み出し、死体の山にぶちまける。

ただの物質や魔力の塊でしかない死体の山は、あらゆるものの源である『海』に触れると共に抵抗すらなく蝕まれ、押し潰され、飲み込まれ、消えていく。

『海』と比べて存在の密度の少ない死体の山は、飲み込まれ取り込まれていく過程で質量を軽減し、結果として『海』の体積を殆ど増やす事は無かった。

汲み出した『海』の一部を元に戻し、後に残るのは戦闘の余波で少しばかり荒れてしまった草地のみ。

……因みに、此方が『信じてる』と言ってからこの処理が終わるま

での間、一切の発言が無い。
有り体に言って空気がとても重い。
誰のせいなのかと聞かれればこんな話題を振ってきた深里ちゃんのせいだろうか。たぶん。
此方は悪く無いので別にいい、と言える程空気が軽くないのが頂けない。
仕方がないので、少しフォロー。
「でもほら、最近、目を開けたままでも普通に接することができる相手も増えたんだよ？　それも二人」
「へ、へぇ？　貴方もあれからけっこう進歩してるじゃない。さっきの連中の中に居たのかしら」
空気を悪くした責任を感じてか、深里ちゃんが真っ先に反応してくれた。
視界の端で【ぴくり、と跳ねるように金毛に覆われた狐耳が立ち、ここからの会話をしっかり聞き取ろうとしている】という記述が現れたのが見えたけれど、【欹てるという言葉に相応しい耳とは裏腹に、その表情はそっけなく、繰り広げられる会話に興味が無い、という風を装う努力が見える】らしいので、その意を酌んで着にせず話を進める。
「いやいや、そういう相手はこの運動からは外してるって」
「あ、そういえばそうだった」
「そうそう。だから今じゃ九魅ちゃんも深里ちゃんも、タヌ太郎もツネ次郎もまん丸もネンガ様も描いてないしね」
「……最初に目撃しちゃった時は何事かと思ったわよ……」
最初に目撃した時、となると……。
「あー……、そういえば、あの後此方謝ったっけ？」
天容の笛騒動の時、七人……四人と三匹と一個でちょっとした旅をしていた時か。
ひっそり隠れて朝の日課を続けていたのだけど、怪しんだ深里ちゃんとタヌ太郎に後を付けられて、旅仲間である深里ちゃんら二人と三匹の写しを殺害している場面を目撃されてしまったのだ。
結局、激情が一周して冷静になった深里ちゃんに『四の五の言わず

に事情を話しなさい。無理ならこの旅はここで終わり』と押し切られる形で、とりあえず差し障りの無い事情を話していく事になった。

そこから、一緒に旅の中で苦楽を共にし、ネンガ様の弟の創りだした新たな忍軍である羅門衆との戦いを通して信頼できる相手になり、何やかやで此方の事情のほぼ全てを説明してある。

……信頼できる仲間で頼もしい友達、と、今では言い切れる相手なのだけど、最初はさして良い印象が無かったから、自分の写しを目の前で殺された事に関する謝罪はしていなかった気がする。記憶違いかもしれないが。

「別に良いわよ、そんな古い話。私ってば大人だし。寛大な心で許して上げるだけの余裕っていうの？　あるから」

との発言だが、

【フフン、と、鼻を鳴らしながら口元を葉っぱの扇で覆う】

【偉そうな顔、というより、自尊心に溢れたドヤ顔の様に見える】

【大人になりかけの十代後半の子供特有の自負がありありと浮かんでいる】

らしい。

大人……？

でも、うん、度量が大きいのは事実なのだろう。

「へーそーなのかー、すごいなー憧れちゃうなー」

いやホント、此方の様な社会にギリギリ適合できてるか怪しい相手の事情を知りつつ、昔の悪印象に対しても寛大に赦す器の大きさは確かに軍師向きかもしれない。

ポーズと表向きの感情表現に対する率直な感想というか、印象からこういうリアクションをしてしまうのは仕方が無いにしても。

「心が篭ってないわね……」

「やー、本心だって」

「……そ、それで、その二人ってのはどんな奴らなんだ？」

興味ない振りとは何だったのか、話が脱線に脱線を重ねた此方と深里ちゃんの会話に、九魅ちゃんが割り込んできた。

興味ない振りをしていたが、そもそも此方と深里ちゃんだけで話を

するものだから疎外感が湧いて来てしまったのかもしれない。
そこら辺の本心は彼女の名誉に関わる部分でもあるし、此方もそろそろ、目を開けているのが辛くなってきた所だ。
「そうだなぁ……」
瞼を閉じ、二人の友人の事を思い浮かべる。
思い浮かべて……、ううむ。
改めて考えて見るに、ギャスパーはともかく、塔城さんに対して目を開けたまま長時間接し続けることが可能か、と聞かれると、中々判断に困るところがある。
とっさに二人、と言ってしまったのは久しぶりに会った仲間、古い友人に対する見栄からか。
けれど、新たに二人、と言って真っ先に思い浮かんだのはやはりギャスパーと塔城さん。
「まず、一人はあれだ、此方とちょっと似た悩みを持ってる同級生の男子」
「へぇ……人間？」
「いや、吸血鬼と人間のハーフ」
でもそんなのはどうだって良いんだ、重要な事じゃない。
ギャスパーが同姓かつ同級生の友人である、という一点に価値があるのではないだろうか。
似た悩みを抱えている、というネガティブな共通点から知り合った仲ではあるが、彼とのユウジョウは最早生なかな事では崩れない盤石のものと言っても良いだろう。
「何より、サスケと違ってかなりまともな性格してる。これって凄くない？」
変にテンション高かったり、女子にお近づきになろうとして空回りして奇行に走ったりしないし。
後は、あれだ。
何処行くにしても忍び装束を外さない頑なさみたいのが無いから一緒に歩いてても恥ずかしくないし。
休日に友達と遊びに行くとか、近所に友人が少ない此方としてはか

なりのステータスなのだ。
　素直に嬉しい。
「私はあのコピペみたいな忍者男子の中からサスケをピンポイントで判別できることの方が凄いと思うけど」
「あれは音速丸先生とのやり取りが多いのを選ぶと大体サスケなんだよ」
　あれに関しては瞼開ける必要も他の感覚で判断する必要もない。
で、この方法で選んでサスケじゃなかったことがないというだけなのだ。
　実際にサスケが何処に居るかを正確に把握して呼びかける場面は殆ど無い。
　呼び間違えても別に問題になるほど繊細な奴じゃないしあいつ。
「めっちゃどうでもいいわねー」
「此方もそう思う。……あ、写メったから見る？」
　少し前に一緒にショッピングモールに行った時に自撮りしたのが何枚かあった筈だ。
　そう思い、メールに添付して二人に送信する。
「……ええと、別の写メと間違えてない？」
「大丈夫、ちょっと女装癖があるだけの普通の男子だから」
　気遣わしげに誤送信の可能性を問うてきた深里ちゃんにそう断言する。
　まぁ、確かにギャスパーの女装は似合っているから、男子高生として紹介されると面食らうのは判る。
　だが、彼は紛れも無く男性なのだ。
　遊びに行った時に、ちょっと冗談で『実は女の子だったりするんじゃないの？』と言ってみたら、『ち、違うよぉ……。……さ、触って、確かめてみる？』と言われ、軽いノリで彼の男の勲章を確認する場面があったりもしたが、彼の股間には小さくとも紛うことなき男の証が存在していた。
　確かめるのが目的である為に掴んで数度引っ張ってみたりしたので間違いない。

取れたりしなかったし、強い刺激にも弱い刺激にもしっかりレスポンスがあったので偽装という事も無いだろう。

……実は記述を乗り越えるレベルでの偽装であるという可能性も考えての事だったのだが、別に大した手間では無かったので問題はないだろう。

「親しげに肩を組んでいるのは？　顔が赤いのは？」

「自撮りで一緒に取るならひっついた方がいいし、この時ギャスパー、人混みに酔っちゃったみたいでなぁ」

ちょっと休憩していっていい？　と、自分の体力の無さを自覚した上でのギャスパーの提案もあったのだが、周囲に休めそうな場所がラブホしか無かったので、少し離れた公園のベンチまで肩を貸した時の写真だったか。

「んんー……」

悩ましげな（エロい意味ではない）唸り声を上げる深里ちゃん。

声の反響から考えるに、こめかみに揃えた指先を当てて、少し難しい顔をしているようだ。

「え、何、何かおかしなとこあった？」

「……いや、うん、日影さんとかにもこういう時の事は話してあるのよね？」

「そりゃね」

同級生の同姓のまともな奴と遊びに行く、というのは個人的には、こう、いい感じのイベントなのである。

それはそう、まるで幼き日に作り上げた秘密基地の如く……。

一部を異界化して猟犬代わりに悪霊とか放ったあの秘密基地の如く……！

そうなると、誰かに言いふらしたく成るものなのだが、この歳で同級生と遊びに行ったよ、と、母さんや父さんに報告するのも気恥ずかしい。

そうして、こういう話は日影さんに向けて行われる事になるのだ。

「なんかちょっと微妙な顔してたけど」

「そりゃそうでしょ……」

なぜ？
と、問い返そうとした辺りで、がっしと腕を掴まれた。
掴まれた、というか、抱えられた、というか。
腕に日影さんにも匹敵する豊かさの象徴がむにゅ、と、押し付けられた。
「何してるの九魅ちゃん、そんな事すると嬉しいよ？」
「ほら見ろ深里、こいつ巨乳派だから大丈夫だ」
しまった珍しい日影さん以外のパイオニウムについつい口が本音を。
大体、大丈夫ってなんだ大丈夫って。
ここまでの流れで巨乳派じゃないと不味い話なんて一個も無かったろうに。
「あんまりそういう事すると尻尾のもふもふに顔突っ込んで深呼吸するよ？」
「いいよ」
「え？」
「いいよ？」
『やらないの？　口だけなの？』みたいなニュアンスを含んだ再確認と共に、背後にある九本の尻尾をわさわさと揺らす。
筋肉の収縮や関節の動く音まで拾える此方の感覚からすると、その尻尾を動かす仕草は妙に蠱惑的で誘っている様に感じる。
……くそう。
距離感の近い相手はここ暫く日影さん以外近くに居なかったからやりにくい。
いくら親しい友人相手であっても、異性に対してそういう事をしたら、此方がただの変態になってしまうじゃないか。
本音を言えば仮に変態扱いされてもあの尻尾をもふもふしたいという欲求はある。
が、しかし、互いにいい感じに思春期真っ盛りなお年ごろになったのだ。
昔のように勢いと本能だけであの尻尾をもふもふなんてしたら、そ

の場面を写真なり動画なりに撮られて弱みにされる可能性だってある。
あと、変な感じに触っちゃって変な空気にするのも不味い。
つまり、触りたいけど色々な理由で触れん。
「覚えてろよ……」
今の此方ではこんな捨て台詞を吐くので精一杯だ。
「あはは！　覚えとくよ」
からからと笑いながら腕を離される。
少し惜しいと感じるのは、何も兵藤先輩に影響されたからではなく、思春期の男子としては有り触れた感情だろう。
が、それを顔に出すとあっちも調子乗って押し付けて誂おうとしてくるのでなるべく顔には出さない。
何故心を赦した友の前でこんな忍者技能を使わなければならないのか、とも思うが、友人同士のやり取りって割とそういう部分があるような気もする。
そういう意味で言えば、心を許している、の一歩手前位のまぁまぁ慣れた仲の友人、というポジションが本格的に楽な関係なのかもしれない。
……たぶん、塔城さんがこの辺だよなぁ。
多少踏み込んだし、まぁまぁと言うには、深入りしてもいいという気持ちに成り過ぎてる感はあるけど。
「お？　もしかしてもう一人の事考えてる？」
此方と九魅ちゃんのやり取りを傍から見ていた深里ちゃんが楽しそうに此方の思考を読んできた。
表情には出していなかったと思う……というか、仮に表情に出していたとしてももう一人の友人の事を考えているとは想像し難いんじゃないだろうか。
「何故わかるし」
「だって私、軍師だもの」
「なるほど」
なるほど？

いや、合ってるか。
忍者の集団の中で軍師ポジに居るならこれくらいの洞察力は無ければ務まらない。
仮面を付けた反骨の相のある将を真っ先に打首にするレベルの思い切りが時折必要になるのが軍師という職なのだ。
光を超えた速度で動く忍者の戦闘を指揮する以上、先読みや予知レベルの軍略が必要になる、たぶん。
少なくとも、此方の見学した幾つかの忍者教育機関で教官を務めていた忍者達は、超光速戦闘中の忍者の口にピンポイントでアイスクリームやパフェ、うな重や牛乳を投げ込み補給させる程度の事はやってのけた。
補給だけでもあれほどの技能が必要になるのだから、軍師となればそれは高い能力を要求されるのだろう。
「私の指揮能力の高さはこの際どうでもいいのよ。それで？　そのもう一人の友達っていうのは――」
「みんなーー！」
深里ちゃんの追求を遮るように、甲高い声が遠くから近づいてきた。
草地を踏む獣の、しかし尋常の獣ではあり得ないぺきょぺきょという漫画チックな足音と共に、忍者ペンギンのまん丸がやってきた。
短い足で一生懸命に走るまん丸の後ろからゆっくりとした足音も聞こえて来る。
足音の反響と匂いから、それがタヌ太郎、ツネ次郎、そして日影さんであることもわかった。
此方の状況を把握していただろう日影さんが、まん丸に見られたら不味い死体や血液の処理が終わるのを見計らって、足止めを止めたのだろう。
……と、そう結論付けるには何か様子がおかしい。
常からそれなりに甲高い声で喋るまん丸だが、此方に呼びかける声は何処か慌てている様にも聞こえる。
「おはようまん丸、何かあった？」

「あ、おはよう書主さん！　あのね、ネンガ様が、皆を呼んでこい、って」
「なるほど」
とても慌てるような案件には聞こえないが……。
顔を後ろの二匹と一人に向ける。
「甲賀の山の方に怪しい気配があるから、皆で調査してこいってさ」
ツネ次郎の返答。
まん丸の様に慌てている訳でもないが、常に比べて少し真剣な声色。
「へぇ、あのネンガ様が」
基本的に、ネンガ様は弟子には厳しいが優しい。
修行で手を抜く事は無いけれど、不測の事態に陥る可能性がある未知の案件であれば、自らが率先して見に行くのがネンガ様のスタイルだ。
そんな彼が、一人前に成る手前とはいえ、まだ師匠離れもできていない弟子を調査に出すとは。
「ふふーん、最近はオイラ達もまぁまぁ認められてきたからな。ネンガ様もこうして偶に仕事を任せてくれるのさ」
ふんぞり返り少し声が遠くなったタヌ太郎からツネ次郎に顔を向け直す。
「そうなの？」
「まぁ、お使い程度の仕事だけどな」
ははは、と、力なく笑う。
忍者の仕事としては穏便なものだし、この山の中に限った任務だから余計な柵に囚われる心配も無い。
伊賀も甲賀も天容の笛に対する執着は無いも同然なので奴らからの襲撃も殆ど無い。
自信を付けさせるのと、任務の雰囲気を軽く掴ませるのには持って来い、というわけか。
「で、日影さん？　そのお菓子は？」
「いや、手伝ってくれたらお菓子をあげよう、とか言われてなぁ……。

返事する前に押し付けられたわ。全員分」
どっさりとお菓子の詰まった袋を手に下げた日影さん。
ふむ……。
本当なら、夏休み一杯山で遊んで過ごす、くらいの気持ちで居たのだが。
あのお菓子の量から察するに、皆で分けて食べても数日持つ。
つまりネンガ様、昔なじみ全員で、ちょっとした旅行を楽しんでこい、くらいのつもりで任務を出したのかもしれない。
……前の騒動の時も、途中で川遊びくらいはしたしなぁ。
移動中は暇になるから、その時間での遊びがチームの距離を縮めていったところもあるし。
「二人はどうする？　何か他に予定ある？」
「別に無いわよ。……ていうか、そっち行ったほうが都合がいいし」
「あたしも。つか予定あるならこんな場所来ないって」
なるほど。
何やら深里ちゃんの方は含むところがあるようだが、特に任務に同行する事には異はないらしい。
勿論、此方も日影さんも特に用事がある訳でもない。
夏休みの宿題も一緒に持っていけばそれだけで準備完了だ。
「よし、それじゃあ、天容の笛奪還チーム、再結成だ」
「天容の笛奪還チーム改め、暇人チームやね」
「俺たちは暇だから行く訳じゃないんだけどなぁ」
「タヌ太郎様と愉快な仲間たち、じゃなかったのけ？」
「……チーム、アベンジャーズとか」
「お前、あの作品軍師もクソも無いのに参考にすんなよ？」
「い、いいでしょカッコ良かったんだから！」
「み、深里さん落ち着いて！」
和気藹々と、というよりは、グダグダとした雰囲気の中、昔を懐かしむように、旅の荷物をまとめに屋敷に戻る。
仮に何かが起こったとしても、此方もあの頃とは違う。
魔法もしっかりと習得して、錬金術の腕前も忍術の腕前も上がって

る。
ガチの赤色も切り札の金色も、今ならほぼ完全に使いこなせる。
日影さんだって、深里ちゃん、九魅ちゃん、タヌ太郎、ツネ次郎、まん丸、誰一人としてあの頃よりも強くなってる。
このメンバーなら、何が来ようが朝飯前、レジャーに行くつもりで、のんびり任務の手伝いを熟すとしよう。

今にして思えば、あの時はもう全ての歯車は回り始めていたんだろう。
でも、まだ誰も、何も気づいちゃいなかった。
その先に続く運命を、既に選んでしまっていたことを。
何かを成し遂げられる力を得たんだと、もう一人前になったんだと、誰もが信じていた。
でも一人前ってのは、なろうと思ってなるものじゃない。
ただ、未熟なままでいられなくなるだけ、未熟である事が許されなくなるだけのことだったんだ。
やがて始まる激しい戦いの中で、此方は、皆はそれを思い知ることになる……。

四十話　Sの本心／色褪せない心の華

巨大な岩が砕け散る衝撃と共に、数瞬消失していた意識が復帰する。

全身に走る激痛、あちこち骨が折れて、たぶん感触的には筋肉と皮膚を引き裂き外気に晒されているのだろう。

痛い、と、口に出そうとして喉が潰れている事に気が付いた。

喉に手を突っ込んでとりあえずの形を整えて無理矢理発声しようにも手が動かない。

脊椎をやられたのか、だが痛みが残っているから完全に麻痺している訳じゃない。

「良いザマだな」

聞き覚えのある、もう聞く筈の無かった声が聴こえる。

何か言い返してやろうと、取り敢えず神経と喉を治す。

赤や金に成る時間も余裕も無く喉が潰れては魔法も使えない。

故に使うのは、昔々にこの地球の写真（表紙）から読み取った回復能力。

記述を自分に移植するに辺り、いくつか文言を書き換え書き足したお陰でオリジナルと比べて格段に融通が効く。

治癒速度も段違いに早い。

……忍者の全力戦闘の中で使うには少々遅めだが。

瞬き一回分よりも速い、しかし戦闘中の回復手段としては遅すぎる速度で喉とへし折れた背骨、中を走る神経を元通りに修復。

発声、の前に、潰れた喉に溜まっていた血溜まりを吐き出す。

べしゃり、と地面に肉と歯の破片が混じった血を吐き捨てながら、襲撃者の姿を確認する。

「……あー、キャラ変わりました？　格下にアンブッシュなんて」

当然と言えば当然だが、片方が見えなくなった視界には、おどろおどろしい挿絵が広がっていた。

山という異界の中に現れた更なる異界。

山々の中に唐突に現れた『海に囲まれた巨大な島』の空は、今にも泣き出しそうな真っ黒な雲で覆い尽くされ。

その曇天を背景に、一匹の熊、忍者が存在していた。
「俺は、俺を一度は倒してみせた男を、格下と思うほどに自惚れてはいない」
「そりゃ、光栄なお話で」
元念雅流後継者、ギオ。
物理法則を無視して宙に浮かびながら此方を見下ろす視線から、一切の油断も感じ取れない。
残念な事に、この、此方が知る限り忍者の中で1、2を争う程に才能に恵まれ、その才能を十二分以上に引き出すための努力を惜しまなかった熊は、こと此処に至って、一切の慢心を捨て去ったようだ。
念雅流を極めた忍者は、ある意味では星の力を自在に駆使する、神にも等しい存在だと言える。
それだけでもこの敵は厄介だというのに……。
「その赤、お似合いですよ」
「ああ、前にお前がやっていたのを見てな、『やってみよう』と思ったので『出来るようにしてみた』のだ」
全身の毛をオレンジ混じりの炎の様な赤に染めたギオ。
岩をぶちぬいた程度では砕けない筈の骨格が砕けた、この不可思議な物理法則。
「写したか、秘伝忍法『紅』を」
「おおとも。『俺の念雅流』での名は、後に改めて考えるとしよう」
ギオが此方に手を向ける。
追記した第六感が、『紅』で使用する、第六世代型恒星間航行決戦兵器のセンサー類が一斉に悲鳴のような警告を伝えてきた。
反射的に封印が一段解け、視覚以外の感覚が次々に開けていく。
ギオの物理法則改竄と此方の物理法則改竄が打ち消し合う。
抜き打ちで勝てるのは当然、と言いたいが……。
「なるほど、『そう』するのだな」
対応が早い。
次々に変化していく殺意と害意に満ちた物理法則の変化を、どうにかこうにか打ち消してく。

その速度たるや決して此方のそれに劣っていない。
今、さっきと同じ状況になったならどうなることか。
これでギオが単純にフィジカルリアクターを搭載したというのなら演算力の差で此方が確実に押し勝てる。
だがギオはフィジカルリアクターの能力を真似しているのではない。
彼は異なる世界の異なる物語を知っている訳ではない。
この力が信じられないほどに高い科学技術によって齎されたものをモデルとしていると知らない。
彼が意念を持って再現しているのはあくまでも、此方が表向きに口にした『秘伝忍法・紅』だ。
純粋数学による物理法則の書き換えでなく、物理法則を自在に操る忍術であるとして使っているのだ。
単純な性能比較はできない。
「だが、うむ、なるほど。前はまんまと騙されたが、これは念雅流ではないな」
現神の術ではこうはいくまい。
そう呟くギオの声には余裕が滲んでいる。
悪態を吐きたくなるが、それで状況が良くなる訳ではないので考える。
あとは、『金』しか無い、無いが……。
「む」
降り注ぐナイフ大の魔力の群れ。
一本一本が龍破斬の数倍の精神破壊効果を持った広範囲攻撃。
ギオはそれを危うげ無く避けていく。
ギリギリ避けられる範囲だからこその回避。
これで密度が更に上がっていたらギオは力技でこの難を逃れただろう。
故にこの密度の薄い弾幕はブラフだ。
回避に時間を割かせ追撃を弱くするための。
「逃げるで」

案の定、此方に気付いて駆けつけたっぽい日影さんが現れた。
首根っこを掴まれ、ぶらぶらと揺れる破損した手足等を直しながら日影さんに尋ねる。
「他の皆は」
「あの雅とかいう吸血鬼相手に時間稼ぎや」
「なるほど」
首を跳ねても駄目。
白木の杭で心臓を貫いても駄目。
聖剣で浄化しても駄目。
燃やして灰にしても駄目。
次は燃やした灰を混ぜて１０分割して別々の場所に封印する、とか言ってたし、時間もかかるのだろう。
「あの吸血鬼のしぶとさはなんなんだろね」
中身が漏れる心配を考えればトラペゾは早々使いたくない、というか作りたくない。
不死の相手に肉玉の呪いが効くかも怪しい。
まぁあっちは此方が『海』を使えばどうにでもなる筈だが。
「後でちゃんと考えなあかんな」
恐らく、ギオの復活や変貌もあれが関わっている筈だ。
避けては通れまい。
逃げ出すなんて選択肢は既に無い。
あの力を得た、しかもあのわけわからん吸血鬼に力を貸しているギオを放置はできない。
「次は殺す。必ず殺す」
殺し合いの場で次を歌うのは恥、などという輩も居るが気にしない。
現に逃げる事が可能で、相手にどんな思惑があれ生き残って仕切り直せるなら、厳然と次は存在するのだ。
故に殺す。
「楽しみにしているぞ。外の忍者よ」
此方の捨て台詞に、僅かに声に嗤いを混じらせながら脚を止めるギ

オ。
　そんな様子に僅かな違和を覚えながら、日影さんに引きずられる様にして、アストラルサイドへと滑りこむようにして逃げ出した。

「そうだな。そのメニューを熟しておけば、特に問題なく活躍できるだろ」
「気付いてると思うが、そのメニューは今お前さんが使っている技術を効率的に運用する。それだけを目指したものだ」
「実際、それで特に害があるわけじゃない。聞いた話じゃかなりしっかりした技術だからな。『戦車』としての能力との相性も悪く無い」
「……だけど、言っちまえば、その力は誰しもが使える可能性がある。技術なんてどれだけ隠しても何処かで流出しちまうもんだ」
「お前さんの素養は、その技術と相性も悪く無い。そう、悪くない。良い訳じゃない」
「しいて言うなら朱乃か。まぁ、あのガキが教えるとは思えないが……」
「今はそれでいい。今は、な。だから、頭の片隅においておくだけでいい」
「お前には、お前だけの真の力がある。向き合おうと思えた頃にでも思い出しゃいいいさ」

　今朝、嫌な、地味に嫌な夢と共に目が覚めた。
　修行開始直前にアザゼル先生に言われた言葉。
　お陰で寝覚めの気分は最悪だ。
　嫌悪感のお陰で目ははっきりと覚めたけれど、朝からする思考でも朝から得たい感情でもない。
　遠回しな忠告、催促。
　そのどれもが間違っていないだけに、余計に私の心をかき乱す。
「ふっ！」
　全身の捻りを活かしての、型通りの正拳、テレフォンパンチ。
　申し分ない条件の元に繰り出された一撃は、トレーニングに使用し

ている森の木を一撃でへし折った。
拳が当たった場所は、綺麗に粉砕されて繰り抜かれたかの様に爆散して飛び散って行った。
迷いやストレスがあろうがどうだろうが、正しい型と共に突き出された拳は全身の力を対象に破壊力として伝達させる。
「すぅ……はぁ……」
立ち止まり、意識して深呼吸。
訓練メニューには無い動き。
だけど、今は訓練は関係ない。
どうせ、試合までにパワーアップできるタイプの修行ではない。
メニューを頭の外に放り出し、口元を隠しながら小さな声で詠唱を開始。
「氷結弾（フリーズ・ブリッド）」
突き出した手のひらの前に現れた青い光球が、弾丸の如き速度で目標の木目掛けて飛んで行く。
着弾地点を中心に大きめの木が一本丸々凍り漬けになった。
これも特に問題なし。
……生理とかは影響するみたいだけれど、この程度の嫌悪感なら術の発動にも威力にも影響は無い。
これが、今の私の力だ。
物理的に単純で純粋な格闘術。
術式的に複雑で精密な魔術。
どちらも、感情にそう簡単に左右されないし、感情や心に深く作用する事はない。
言ってしまえばどちらも技術だ。
感情や本能で振るわれる訳ではない、理性の力。
……だけど、これは私だけの力じゃない。
格闘術は地道に学べば誰しもがある程度の精度で身につける事ができる。
私は戦車の馬力と頑丈さを追加しているけれど、それは相手が戦車の駒の力を持っていれば、あるいは単純に頑丈で力が強ければメリッ

ト足り得ない。
言ってしまえば、部長とか副部長だって時間をかければ手に入れられる力。
魔術だってそうだ。
格闘術みたいに五体があればできる、というほど間口が広い訳でもない。
発動できる術にだって素養でかなりの差が出てくるし、格闘術なんかよりよっぽど習得に時間が掛かる。
一般的に、素人からギリギリ魔術師を名乗れるように成るまでには数年の時を必要とするらしい。
数年。
人間にとって見れば長い時間だ。
でも悪魔にとっては？
……私が教えてもらった魔術は広まると危険だからと誰かに伝授することは禁止された。
だけど、戦っている場面から得られる情報だけで盗めないのか、と言われると、わからない。
もしかしたら、本格的な解析チームなんかが結成されたら、私の戦う姿から魔術の理論を解析されてしまうかもしれない。
挙句、この魔術は私が苦労して習得した訳ではない。
読手さんから借りた魔剣の機能で植えつけたインスタントな力でしかない。
私がこの力を受け取ったのだって、読手さんの友達だからという浅い理由だ。
純粋に魔術の素養で言えば、副部長や、或いはギャー君だって私を上回っているだろう。
「ふぅ……」
溜息と共に、大岩に座り込む。
動くのを止め、静かに呼吸を整えれば、小さな生き物たちのざわめきが聞こえてくる。
周囲には誰も居ない。

私の修行は特に誰かが見ていなければならないような物でもないし、指導者が必要な内容でもない。
いや、指導できるだろう相手は居るけれど、その人は悪魔ですらなく、この場所には居ない。
だから今、私は一人だ。
「一人、独りですね」
何時か見たドラマで、こんな台詞があった。
『孤独は山の中でなく、街の中にある』
私は、孤独ではない。
街の中、人の群れの中、学園生活の中で、私は多くの隣人と関わりながら生きている。
誰かと誰かに囲まれて、その中で誰とも繋がれない事を孤独というのなら、街の中の私は孤独じゃない。
なら、今、この誰もいない森の中でも、私は孤独ではない筈だ。
仮に誰かを呼ぶとして、私が呼べる相手は、私を孤独にするタイプの相手ではありえない。
そう、あり得ない。
こうして、誰も話し相手の居ない森の中に居ると、なんとなくわかる。
私は無意識の内に、付き合いを許容する相手を選ぶ時、距離感を図りつつもしっかりと私とコミュニケーションを取ってくれる相手を選んでいる。
孤独である事を恐れているから。
人の群れの中で、孤独とは言えない生活を送りながら、私はどうしようもなく孤独を恐れている。
今もそうだ。
誰もいない、孤独という概念のない筈の無人の森の中で、私は孤独を感じている。
手を伸ばせば、そこに誰かが居ると思ってしまう。
遠い昔に無くしてしまった誰か、私を置いて、何処かに消えてしまった誰かが居ると。

何時も傍にいてくれた誰か。
姉様。
私を背負う背中の温もりを覚えているから。
繋いだ手の感触を覚えているから。
何時も一緒に居た姉様の事を忘れきれていないから。
私は、誰もいないこの森の中で、街の中に居るかの様に、孤独を感じている。
ふと、視線を下ろす。
自分でそうしていたつもりも無いのに、私の手は、手首に付けたお守りを、素っ気なく飾り付けられた石を撫でていた。
貰ってまだ一ヶ月も経っていないのに、すっかり癖になってしまった。
「読手、さん」
名を呟く。
きっと、こうして色々考えるようになったのは、彼のせいだ。
彼のお陰、というか、彼のせい、というか、実に迷う。
でも、そのどちらも私の本音なのだろう。
何の変哲もない人間だと思っていた彼。
堕天使も悪魔も物ともしない力を持って、でも、決して悪魔側に与する訳でなく、人間という枠から出ようとしない。
私達、グレモリー眷属の大半のメンバーの様に不幸な過去があるわけでなく、両親も健在で。
彼は、私にとって、どうしようもなく違う人種なのだと、そう思う。
思うのに、何でか馬が合う。
互いに、深く踏み込まないようにと一線を引いて。
それでも友達付き合いが続いている。
一緒にいて楽で、楽しくて、心地良い。
彼のスタンスは、色々と考えさせられる。
日常と非日常のオンオフがしっかりしていて。
たぶん、眷属のみんなよりも普段一緒に居る時間が長いのに、身内という訳ではなくて。

……でも、最近、少しだけ、前よりも近付いてきて。
身内ではない、他所の、悪魔でない、人間。
彼は、どうしようもなく、『孤独かどうかを分ける他人』の位置に居る。
一緒に居るのが自然に感じて、でも、一緒で居られる保証もない。
何時か別れる時が、必ず来る。
それも、悪魔で眷属仲間である他の皆よりも、余程早くに。
しかも、そのタイミングだって何時に成るかという保証も無い。
早ければ高校卒業で、なんて考えだって、目一杯甘く勘定した結果でしかない。
唐突な別れが来る可能性は決して否定できない。
それがどうしても、何時か居なくなった姉様と重なってしまう。
……今、そう感じてしまうのは、冥界に来る直前の、祭りの後の帰り道が原因だろう。
彼は、自分から私の線の内側に踏み込もうとしてきた。
思えば、目が『見えすぎる』なんて話だって、出会った直後じゃあして貰えなかった。
付き合いが長くなるにつれて、彼は少しずつ、壁を薄くしてくれていたのだ。
それが無意識か、意識的かはさておき。
「ああ」
そうか。
秘密は、自分の中に抱えたまま、外に出すつもりが少しも無いのなら、それほど辛いものじゃない。
絶対に誰にも教えない、と決めてあるのなら、後ろめたさも何もない。
自分の中で完結するなら、どんな秘密も心を動かさない。
だけど、誰かに知っていて貰いたいと思ったのなら。
彼のようになるし、私のようになる。
教えたくて、教えたくなくて、苦しくなる。
目を背けていた秘密と向き合う必要が出てくるから。

どう話そう、何時話そう。
上手く話せるだろうか、誤解をさせないだろうか。
そんな葛藤が、上手く話す為に、誤解をさせない為にと、心の目を抱えていた秘密に向けてしまう。
「私は、語りたいんだ」
誰でもない。
他ならぬ読手さんに。
私の秘密を話したい。
姉様の罪を、それでも優しかった頃もある姉様を。
知って貰いたいんだ。
塔城小猫は、語りたい。
猫?の白音は、語りたい。
人間で、忍者で、部外者で、でも、友人の、大切な友達の読手さんに、語りたい。
「お話、したいです。読手さん」
今、この場に居ない友人に、この場に居ないからこそ素直に願う。
「……え?」
願うと同時に、森の静寂を切り裂き、場違いな電子音が鳴り響く。
出処は、言うまでもない、私の携帯だ。
鳴る筈のない着信音。
そもそも電波の通っていないこの冥界で、何故?
「もしかして……」
お守りを見る。
よくよく目を凝らして見れば、お守りの石が僅かに輝いている、ような気がする。
微か過ぎてよくわからないのか、それとも気のせいなのか。
いや、このタイミングで光っているのが気のせい、という事はないだろう。
お守りの効果?
そういえば、どんな効果のあるお守りかは聞いていない。
友達からのプレゼント、というだけで、なんだか浮かれてしまって、

聞けなかったけれど。
でも。
それも、今から聞ける。
懐、内ポケットから携帯を取り出し、画面を見る。
掛けてきているのは、予想通り、期待通りの相手。
何故だろう、画面に浮かぶその名前を見るだけで、ほんの少し心が軽くなった気がする。
何を話そう、どう話そう。
考えはまとまり切っていない。
だから、いつも通りに話そう。
とりとめのない話をするように、何気なく。
少し重い話になるけれど、それくらいなら、普通の友達でも相談するらしいから。
「……もしもし」
携帯を顔の横に当て、恐る恐る、弾みそうに成る声を抑えて、久しぶりに話す友達に、いつも通りに声をかけた。

「あー、ようやく繋がりましたね。お久しぶりです、塔城さん。元気にやってます？」
人里の跡地の様な場所から離れ、季節感を一切無視してしんしんと雪が振る山、岩山に出来た横穴を使って作った即席のアジトの中。
既にやるべき事を終えた此方は、何故か塔城さんに電話を掛けていた。
『……それなり、ですかね。これでも色々、考える事があるもので』
「あら、里帰りの付き添いで気軽なバカンスとは行きませんでしたか」
『最近、そんな流ればっかりな気がしますから、今更ですけどね』
「ですねぇ」
思えば、塔城さんは巻き込まれる必要のない争いごとに、立場の関係からどうしても巻き込まれる場面が多い気がする。
なんだか猫っ気のある（猫だから仕方ないのかもしれないけれど）性格で素っ気無さそうに見えるけれど、根っこの部分で人がいいから

かもしれない。
『読手さんはどうです？　楽しい夏休みって感じですか？』
「あー、どうでしょね。途中まではのんびり満喫って気分だったんですけど……、色々トラブルに巻き込まれちゃって」
だいたい、この場所自体がおかしい。
山と山で構成された異界であるこの動物忍者の山の中は、他の大規模な空間干渉能力を受け付けにくい筈だ。
それを無理矢理に塗り替えるこの巨大な異界。
外見では小さめの孤島に見えたのに、内部で動くと明らかに外見と比べて広すぎる。
自分で作ったわけでもない異界の中に、更に異なる異界を詰め込んだ大きな異界をねじ込んだ？
「せっかく水着まで用意したのに……外は雪ですよ」
『どんなトラブルに巻き込まれればそうなるんですか……』
呆れるような声。
どんな、と言われても困る。
そもあの雅とかいう粘着系の吸血鬼は此方にも忍の山にも興味があるようでは無かったから、此方をターゲッティングしてきたのはギオなのだろう。
だがそのギオが居る理由も分からない。
ギオは、天容の笛の後継者から外され不死性を失い、空の彼方に飛んで行こうとした所を、ダメ押しで殺しておいた筈だ。
確実に死ぬであろう環境にフェードアウト、というのは、忍者にとって生存フラグ足りえてしまう。
だからこそ、確実に命を絶った。
……もしかしたら、それがいけなかったのかもしれない。
此方が、空に落ちていくギオを追いかけ、地球から脱出する前に殺した。
それを恨んでのことか？
生き残ったとしても、やはり最大のターゲットは後継者争いの相手であるネンガ様であった筈だ。

ギオが不死性を失い、ネンガ様が後継者としての不死性を持っているのであれば、いくら狙われても問題は無かった。
つまり、ギオが何故か此方を執拗に狙ってくるのは、あの頃の判断ミスが後を引いている、とも考えられる。
「なんていうか、過去が追いかけてきた、ってヤツですかねぇ……」
『過去が、追いかけてきた、ですか』
「まぁ、忍者として未熟だった頃の話ですよ」
今、あの時の判断ミスを後悔する意味は無い。
時を遡って過去を変えたとして、此方の記憶には失敗したという記憶が残るし、此方が歩んできた人生はその判断ミスを犯した場合の人生なのだ。
いきなり世界線がずれたり、過去が書き換わったりなんてしたら、それこそしょうもない。
失敗も含めて、この人生は大事に生きる。
だから、追いかけてきた過去は現在で止める。殺す。
はっきり言って殺すのは自信がある。
父さんが一流だったのは当然として、此方だって一応は夜顔としての顔だって持っているのだ。
超一流の殺し屋（エースキラー）の異名は恥ずかしくとも伊達じゃないって所を見せてやりたい。
『……読手さん。私も、少し、昔の話とか、しても良いですか？』
「勿論」
言葉のキャッチボール、会話のキャッチボールだ。
塔城さんの夏休みは変な潰れ方をして、此方の夏休みも似たようなものだった。
此方は過去のネタがトラブルになって現れた。
次は塔城さんの番だ。
携帯越しに聞こえる、常に無く神妙な声から、どんな話をするかは予想が付く。
でも、それに『面倒だ』という思いは沸かない。
彼女が抱える荷物を、話を聞くだけでほんの少しだけでも軽くでき

るなら、それは、とても喜ばしい事だ。
そして、そう思える程に彼女に心を許せた、というのも、同じくらいに喜ばしい。
「聞かせて下さいな。此方の知らない、塔城さんの昔の話」
互いに一線を引いてから、此方に踏み込む事も無く。
一線の前で、此方から一歩踏み込みたくなるまで、しっかり距離を置いて付き合いを続けてくれた、稀有な友人。
その一線の先の話を、塔城さんは深い深呼吸と共に、ゆっくりと語り始めた。

……なるほど。
猫？としての力を目覚めさせたがゆえに、力に飲み込まれて暴走した姉。
罪を被せられそうになった所を助けられ、今に至る。
しかし、何時かは必ず向き合わなければならない、姉と同じ、猫？の持つ種族本来の力。か。
面倒な、いや、難しい問題だ。
『私、私は、使いたく、無い、です。もし、使ってしまったら、姉さまと、同じに……、あんなのは、もう……いや、です……』
声だけでわかる。
塔城さんが泣いている。
いや、複製を泣かせたことはあるけれど、それとは違う。
塔城さん本人は、此方と接する中で、泣いたことなんて一度も無い。
それだけ、彼女は追い詰められているんだ。
何に？
決まっている。
「愛、ですか」
『っぐ、なんで、そこで、愛……』
泣きながら、途切れ途切れに此方の言葉に返す塔城さん。
だが、何故、などと、おかしな事を言う。
今の塔城さんの苦しみは、正しく愛故の苦しみなのだ。

違っている可能性もあるだろう。
だけど、此方が塔城さんの話を解釈するのなら、確実にそうなってしまう。
「だって、塔城さんは猫?の力を捨てたくないんでしょう?」
『……そんな、事は』
「あるんです。あっていいんですよ。……数少ない、お姉さんとの絆じゃないですか」
極論だけれど、塔城さんはこの問題に今すぐ向き合う必要なんて欠片もない。
塔城さんだけの力が必要になるとしても、それには少なくとも数年の猶予はある。
それだけの時間があれば、此方が刷り込んだ魔術の知識を駆使して独自の自己強化を図る事も難しくない。
猫?の力を使うか使わないか、そんな事は、これから時間を掛けて、自己強化の研究と平行して考えていけばいい。
……つまり、それが、泣きたく成るほど、涙がこぼれてしまう程に、悲しいのだ。
「猫?の力が、お姉さんとの、数少ない共通点が、繋がりが、必要なくなってしまうかもしれない。そう考えるのが、悲しいんでしょう」
『……』
話を聞く限り、確かに塔城さんはお姉さんに裏切られたのかもしれない。
お姉さんは力に飲まれて変貌し、唯一の肉親を切り捨ててしまったのかもしれない。
かもしれない、かもしれない、かもしれない。
そんな悲しくて辛い仮定の前に、決して揺るがない真実がある。
塔城さんは、裏切られ置いて行かれた今でも、お姉さんが大好きなんだ。
「優しかったお姉さん、守ってくれていたお姉さん、大好きだったお姉さん。そんなお姉さんと同じ、共有できる力を捨ててしまうのは、思い出も、絆も一緒に捨ててしまうようで、怖いんでしょう」

当時の姉の様になってしまう恐怖、周囲に危害を与えてしまう恐怖もあるだろう。

だけど、そこにはやっぱり姉とお揃いの力を捨ててしまう悲しみがある。

本当に、姉に対する情が完全に消え、今の仲間の心配だけをしているなら、更に強くなる為の力を捨てる迷いはあっても、悲しみを感じる事は無い筈だ。

力を諦める、捨てる事で、今度こそ本当に、姉との繋がりが完全に消えてしまうかもしれない。

そんな可能性が、塔城さんの心を曇らせている。

『そんな、知ったふうなこと、どうして言えるんですか』

えづきながら、しかし、少しだけ聞き取りやすくなった塔城さんの言葉に、即座に返す。

「此方が忍者になった理由だって、似たようなものだから」

『……？』

忍者でない、忍者の育成プロセスを知らない塔城さんには理解し難いのかもしれない。

が、冷静に、忍者ではない一般人としての記憶を持っていた此方からすると、忍者なんて職業は進んでなるものじゃない。

仮に順調に忍者になったとして、政府に仕えれば使い勝手の良い鉄砲玉、給料も安いし、死ねば屍を拾っても貰えない。任務に失敗すれば良くて重い懲罰、悪ければ始末される。

此方や父さんの様に大組織のお抱えになれれば話は違うが、政府から離れてハグレモノになったとしても扱いの悪さは大差ない。

最低限未満程度にはあった社会保障も無く、社会道徳がヘリウムよりも軽い世界で金勘定も保身も全て自分で行っていかなければならない。

「此方（俺）もね、ちょっと訳あって、父さん母さんと、しっかり親子をできている自信が無かったんだ。だから、親と同じ仕事を継いで、同じ技術を学べば、少しはしっかりとした繋がりができるかな、って、そう思ったのが、事の始まり」

だから、頑張った。
身体が別の何かに変わっていく様な感覚も、辛い修行も、対拷問の訓練だって、残らず熟した。
それもこれも、父さんを父さんだと、自分が父さんの子なんだと、胸を張って心から言える様に成るためだった。
だけど、普通は自分から望んでなるものじゃない。
訓練は辛い、成長途中で様々な薬物で肉体を造り変えるのは気持ち悪い。
挙句、男だろうが女だろうが、貞操全部一つ残らずドブに捨てないと一人前になれない、糞の様な職で、大体の忍者の卵がそれに疑問一つ覚えられない。
忍者になるのは素晴らしい事であると教えられるらしいし、他の道に行こうと考えられるような真っ当な教育は望めない。
万が一、一般的な価値観を手に入れてしまえば……余計にひどい。
思い出すのは、少し前のこと。
昔の友人に、『抱いてくれ』と懇願され、事情も感情も理解できるが故に、抱いてしまった。
……夏休みが開けたら、拷問耐性訓練が始まるらしい。
そう言われて察する事ができないほど間抜けじゃあない。
他ならぬ此方も、同じ訓練を熟したのだ。
男として女に、男として男に。
女として女に、女として男に。
動物に、虫に、化生に、機械に。
徹底的に嬲られ、貶められ、辱められ、傷めつけられ、詰られ、蹂躙される。
そこから無理矢理に精神を立て直し、またはじめからやり直し。
完全に心が砕けた状態からでも、即座に心を立て直せる様になるまで、延々と繰り返し。
処女を失う、童貞を失う、なんて、そんな軽いものじゃない。
男として、女として、人間として、生命としての尊厳全てを打ち砕かれるのだ。

だから、抱いてくれ、と言われて、涙で潤んだ瞳でみつめられて、断れる筈が無かった。

昔に好きだったかもしれない。今も好きなのかもしれない。

そんな曖昧な好意で、それでも、知らない誰かに、なんとも思っていない誰かに、嫌悪するような誰かに犯され失うのであれば、と、制限時間に背中を押される様に、震えながら懇願し、貞操を捨てなければならない。

そうでなければ、恋も愛も憧れすらも知らず、ただシステマチックに苦痛に快楽に屈辱に悦楽に擦り切れるまで慣れさせられる悲惨で酷薄な製造工程の果てに作り上げられるのが忍者だ。

抱いて、貫いて、背中に立てられた爪の痛みを感じて、泣き笑いの様に顔を歪める彼女の顔を見て、思った。

忍者なんて、進んでなるものじゃない。

だけど、此方は、忍者になった事に少しも後悔していない。

錬金術の素養が同じくらいあったらそっちを選んだかもしれないけれど。

この道のお陰で、此方は、父さんの子なんだと、心から断言できる。

父さんの血を引いた、才能も受け継いだ、間違い無い、父さんの子なんだと。

殺すのに慣れて、辱めるのにも慣れて、何をされても何をしても、直ぐに『いつも通り』になれる、そんな人でなしになってしまったけれど。

この力は、拠り所で、道標だ。

だから――――

『使ってみてもいいんじゃないかな。猫?の力』

「そんな、簡単じゃないですよ」

そう言葉にして、でも、もう心の中に、猫?の力を強く否定する感情が無くなってしまったのに気付く。

言われてようやく自覚できた自分の間抜けさに、少し笑いすら浮かんでくる。

私は、まだ、姉様が好きなんだ。
だから、この力を『使うべきか』と考えた時、とても悲しくなった。
使うべきか、という事は、『使わない＝無視する』という事で。
使わなくてもやっていける、無視しても何とかなる事実が、酷く寂しかった。
それは、私と姉様の絆の否定だ。
私が猫?の力を否定してしまえば、私と姉様の間にある絆は、幼い頃の朧気な記憶だけになってしまう。
それじゃ駄目だ。
いや、駄目かどうかは置いておくとして、私が、嫌だ。
でも、嫌だと思っても、どうしようもない部分はあるわけで。
「それでも、姉様みたいに、暴走するのは、皆に迷惑を掛けるのも、嫌」
『じゃあ、此方に掛けてよ、その迷惑』
「……その台詞、すっっごくクッサイの、解って言ってます?」
『塔城さん、これ、真剣な話ね?』
……真剣な話で、そんなストレートな台詞を吐かれる、こっちの身にもなって欲しい。
顔が熱い。
電話越しで良かったと心底思うし、電話越しで無ければ照れ隠しに一発殴っているところだ。
「本当に、ひどいことになるかもしれないのに? 今、私は冥界で、別々の場所に居るのに? ……元に戻れないくらい、変わってしまうかもしれないのに?」
『本気で塔城さんが求めるのなら。……此方は何処からでも駆けつけて、貴女の名を呼び、貴女の手を掴み、何度だって、引き戻すよ』
……そうしないと、ほら、学校でつるめる相手、居なくなっちゃうし。
と、続くとぼけた言葉に、照れが滲んでいるのを感じて、吹き出す。
『……そんな露骨に笑わなくても』
「じゃあ、っふふ、照れて誤魔化す様なこと、言わなければいいのに。台無しじゃないですか」

『言いたいこと言っただけだし』
いじけるような声。
それを少し可愛らしいな、と思い、気付く。
「……敬語じゃないと、そういう風に喋るんですね」
クラスの男子と喋っている時とか、日影さんと喋っている時に脇から聞いたりはするのだけれど。
こうして、自分との会話で使われると、また違った印象を受ける。
『……あ。あー、ごめ、すみません』
「いいですよ。……友達なら、そっちの口調の方が自然じゃないですか」
これが多分、彼の本当にプライベートな距離感なんだ。
少し緩い口調に感じた親しみは心地よく、今更距離を置かれるのは寂しい。
だから、私から、もう一歩。
「……冥界から帰ったら、お互い、呼び方も変えましょうか。せっかく、前より少しだけ仲良くなれたんですし」
一歩だけ、彼の側に踏み出しながら、考える。
帰るまでに、名前を呼ぶ練習をしよう。
照れる友達を誂えるように、彼の名を呼ぶだけで照れてしまわないように。
名前を呼ばれて、照れてしまわないかが、少しだけ心配だけれど。

「うん、それじゃ、また、学校で」
少しばかり恥ずかしい会話を繰り広げた後も、説明し忘れていたお守りの機能を説明したり、他愛のない話をし、別れの挨拶と共に通話を終えた。
時間にして数十分は話していただろうか。
……即席のアジトの中は狭くは無いが、十分に広いとも言いがたい
「プロポーズやな」
「冗談」
茶化してくる日影さんに軽く返す。

あれくらいでプロポーズに聞こえるならそいつにはロマンが足りない。
「学校の友達と雑談して、また今度ねって、それだけの話だよ」
「でも、それが大事なんやろ？」
「そういう事」
流石日影さん、解ってらっしゃる。
たぶん、此方がなんとなく理由もわからず塔城さんに電話を掛けた時点で、日影さんは理由を察していたんじゃないかとすら感じる。
塔城さんは、駒王学園に入学してから、たぶん、一番長時間付き合っている友人だ。
彼女と話していると、連鎖的に学校の空気を思い出す。
多少、悪魔とかが居たりするし、堕天使が攻めてきたりもするけれど、それでも、大半が平和で穏やかに過ぎていく、日常の場所。
平和で、殺し合いも無い世界。
塔城さんは、悪魔で、学校で起きた事件に完全に関わっているのに、平和な学校を連想させてくれる。
彼女は、たぶんもう、此方の日常の象徴になっているんだ。
ただの学生をしている時の此方にとっての、日常の象徴に。
「……倒そうか。ギオ」
「せやな」
金の力は、できれば使いたくない。
あの状態のギオを倒せるレベルで解放したら、反動がどうなるかわからない。
だけど、必要になったのなら……、ためらわない様に。
「書主さーん！　できた！　できたよ！　飛影の修理！」
「でかした！」
折り紙の術でジャンク状態だった機体を修復していたまん丸が叫んだ。
未熟な念雅流忍者が三匹、半妖忍者が二人、此方、日影さん。
それに、忍者伝説の五機が揃う。
ネンガ様に上手いこと連絡が取れれば更に追加だ。

「これで勝てなきゃ、軍師失格ね」
する、と、アジトの奥から出てきた深里ちゃんが呟く。
そのまま此方に滑るように近づいてきて、耳元で囁く。
「人の友達抱いておいて直後に別の女口説くなんて、なかなかやるじゃ無い。……後で話聞かせなさいよ」
ぽん、と肩を叩き、そのまま離れていく。
向かう先には、いつの間にか服装を整えて出てきていたらしい九魅ちゃん。
瞼を開けて視線を向ければ、挿絵になった九魅ちゃんははにかむようにして此方に小さく手を振ってきた。
同じように手を振り返す。
なんと、まぁ、やり辛い。
だけど、これで一応の役者は揃った。
「熊狩りだな」
ばしっ、と、拳？　を打ち付けるタヌ太郎。
背後には鳥っぽい意匠の赤い忍者ロボが付き従い。
「いやぁ、たぶん吸血鬼もまた居るだろ」
達観した様にそんな事を言うツネ次郎。
背後には虎っぽい雰囲気の黄色い忍者ロボが侍り。
「どっちにしても、やるしかないよ」
覚悟を決めた静かな言葉を呟くまん丸。
背後には青い、龍の様なデザインの忍者ロボが追従している。
それぞれ、数年ぶりでも見事に使いこなしているようだ。
白と黒の忍者ロボも、九魅ちゃんと深里ちゃんの近くで隠形を行いガードしている。
ここに、安全な範囲で本気の此方と日影さん。
「行こう。勝ちに」
勝って、殺して、過去の因縁に決着を付けて。
のんびりとした夏休みを、楽しい楽しい余暇の時間を。
平和な時間を取り戻そう。

通話を終えて、暫く、電話を眺めていた。
会話の内容が幾つか頭の中でリフレインして、その度に首を振って頭の中から追い出して平静を保つ。
……臭い台詞を言われてしまった。
それを誂う余裕こそあったけれど、茶化す相手が居ない今、思い返してその言葉がどうにも擽ったい。
何が擽ったいって、あんな臭い台詞を言われて、嬉しいと思ってしまう自分のチョロさが擽ったい。
私は何時そんな乙女乙女した女になったんだろうか。
いや、勿論私は乙女なんですが。
「……まぁ、私、ギャー君ほどちょろくないですし」
たぶん、同じような語りでギャー君を篭絡したのだろう。
だけど、私はこの世アレルギーでも起こしたかのように引きこもりっぱなしのギャー君ほど世間知らずじゃない。
読手さんには日影さんという恋人が居る、私の周囲では激レアと言っていいスーパーリア充人だ。
そりゃあ、まるで口説いているんじゃないか、っていう激励の言葉がなめらかに口からうっかり滑り出してしまう事もあるだろうというのは重々理解できる。
まったく、困った人だ。
「……」
そして、困った人をもう一人見つけた。
木の影から顔を出し、私の方を見てニヤァ……と悪魔的な笑顔を浮かべた赤髪の女性。
不思議だ。
私の王と凄く似ている気がする。
本人かどうかと言えば本人だろう。
困った人だ、と思いつつ。
屈んで、足元を這っていた小さな虫を拾う。
「部長」
「あら、どうしたの小猫。訓練は休憩中？」

すすす、と、滑るように、声を弾ませながら近づいてきた部長に、指先で摘んだ小さな虫を見せる。
「最近知ったんですけど、これ、毒を持った虫らしいんですよ」
「そうみたいね。私も正式名称は知らないけれど、お母様に注意された事があるわ」
死んだり激痛が走ったりというような強い毒ではないけれど、刺されると蚊に刺された痕のように赤く腫れ上がるらしい。
「たぶん、部長の頭にこの虫が付いてる気がするので、緊急性を考慮して叩いて潰そうと思うんです」
グッ、と拳を握る。
特殊繊維で編まれた指ぬきグローブがギチギチと音を立てた。
学園のお姉さま（）と呼ばれる程の美貌を持つ王に、虫一匹近寄らせないという、忠臣である私らしい素晴らしい提案だと思う。
流石私、こんな良い下僕を持った部長は王冥利に尽きるんじゃないでしょうか。
「ふ、ふふ、流石私の戦車ね小猫、何時迄も誂われてばかりじゃない、と。……でも私も誇り高きグレモリーの娘。容易く下げる頭は持っていないわ」
不敵に笑いながら、その場にハンケチを引いて膝を付く部長。
「容易く下げる頭は無い……、それを考慮した上で、私の土下座は貴女の目にどう映るのかしら……！」
「頭に付いた虫を叩きやすくしてくれる私の王は素晴らしい王だなって映ります」
「凄いわ小猫、躊躇わないのね！」
なんなんですかねこの部長のテンション。
叩いたら治るんでしょうか。
割れないように手加減するのは難しいんですが。
「まぁ冗談は置いておいて。……迷いは晴れたみたいね」
よっこいしょー、と、間違ってもイッセー先輩に聞かせられないおばさん臭い掛け声と共に立ち上がった部長。
……この人、恋愛脳のスチャラカスイーツと見せかけて、眷属のコ

ンディション管理はしっかりしてるんですよね……。
隠してるつもりも無かったけれど、このタイミングで通話を見られたという事は、心配して様子を見に来ていたんでしょうし。
まぁ、だから、この人の下でなら安心して戦えるんですけど。
「いえ、まだ、晴れてはいないです」
「あら、そうなの？」
「はい。でも、それでも進もうと、そう決めたので」
「そう……。良い友達を持ったわね」
心底安心したのだと判る部長の優しげな声。
慈愛に満ちた瞳を向ける部長に改めて向き直り、
「友達だけじゃなくて、部長にも、眷属の皆にも、迷惑を掛ける事が増えるかもしれませんけど。……よろしくおねがいします」
頭を下げる。
……姉様。
私は、やっぱり姉様が好きです。
だけど、姉様と同じにはなりたくありません。
周りに迷惑を掛ける事になるかもしれないけれど。
王と、仲間と、大事な友達に寄りかかりながら。
私は、私なりに、姉様と同じ力を、ゆっくり育てて行きます。
この力が、姉様と私の間に残った、数少ない姉妹の絆だから。

四十一話　Ｓの本心／貫くこころ

真昼の空に、大きな星が浮かんでいた。
真球と歪んだ球を押し付け結合したかのような不格好な星。
その星が齎すものは光でなく、破壊。
「おいおいおい、こりゃヤバイんじゃねーの!?」
地面に刀を突き刺し、片膝を付いて地面に座り込む黒獅子の中、ツネ次郎が叫ぶ
変形させた無数の雲球で杭を打つようにして地面深くまで機体を固定し、コックピットの中に居るにも関わらず、ツネ次郎は自らの身体が今にも浮き上がり空に向けて、空の星目掛けて飛ばされそうになっているのを感じていた。
「やばくない訳ねーだろ１０２４倍馬鹿！」
片腕を失い、コックピット周りの装甲が破壊され半ばコックピットがむき出しになっている風雷鷹の中、タヌ太郎は現神の術により自らの肉体組成を変化させ、重量を得てどうにか浮かび上がらない様に耐えていた。
それはタヌ太郎の先祖が多摩丘陵から追い出されるまでの騒動で復活させた?化の術に似て、継続にはやはり多くの精神的、肉体的負荷を与えるものだった。
タヌ太郎の精神を削りながらも『星』の吸引に耐えている風雷鷹を庇う様に、白い忍者ロボ、飛影が凭れ掛かっている。
単純な超過駆動の連続により全身の駆動系が破損し、一見して無事に見える飛影もこの場を離脱する事が出来ず、風雷鷹と共に飛ばされないように耐えるしかない。
耐える飛影の中、タヌ太郎と同じく肉体の大半を比重の重い金属へと変化させた深里が項垂れる。
「ごめん兄さん、私が、二人の念星の引力計算を間違ったから……」
「言っても仕方ねぇだろ！　おいらの妹ならもっとどんと構えとけ！」
話だけは聞かされていた、しかし言い出せず、つい最近まで兄妹で

ある事を明かせなかった妹を激励しつつ、タヌ太郎は内心で臍を噛む。

念雅流を鍛えて、鍛えて、かつてのような無様を晒す機会は無くなったと思っていた。

だというのに、この場で自分ができるのは耐えるだけ。

空に、遥か離れた空で、この山を、山を包み込む異界をまるごと飲み込まんとしている念星を、どうにかしようとしている奴らが居る。

自分がそこに混じれない事に悔しさを覚えると共に、何処か納得している自分が居た。

かつて旅の仲間を失って、がむしゃらに修行に励んだあの頃。

あの頃ならば、こんな風に落ち着いていることは出来なかっただろう。

守るべき家族を身近に得る事でここまで落ち着くことができた。

だがそれは、念雅流で求められるものではない。

家族を守るため、という感情は穏やかな様でいてしかし動きの強い正の感情だ。

静極念を使うスタンダードな念雅流であるタヌ太郎にとって、精神的成長を齎す家族愛は、念雅流忍者としての成長の頭打ちを意味していた。

家族を顧みない先代、家族を大事にする感情を持ちながら、子供のような無邪気さを失わず意念の操作に優れる現後継者。

タヌ太郎はそのどちらにもなれない。

いや、それを言えば今代の中では誰一人としてこの条件に当てはまる者は居なかった。

動極念、感情の激しい揺らぎを力とする、イレギュラーなまん丸を除けば。

タヌ太郎は空を仰ぎ、笑った。

異界そのものを飲み込まんとする念星の周囲で吸い込まれる事無く浮かんでいる四つの影。

その中でただ一人の念雅流の同輩に、エールを送る。

「頑張れ、まん丸、お前がナンバーワンだ」

「！」
「どないしたん？」
「いや、なんでもない」
今突っ込みどころが生まれた気がするが、今はそれを気にしている場合じゃあない。
ギオとネンガ様が互いに放った念雅流極意、『大念星の術』
膨大な意念を質量を得るまでに圧縮し作り上げられる擬似ブラックホールとでも言うべき星は、二つ連なりすでに術者の制御から離れてしまっている。
ネンガ様が念星の衝突の余波で吹き飛んでしまったのも悪いが、何より悪いのはギオだ。
天容の笛を手に入れた一瞬に隙を見せた雅とかいう吸血鬼の支配下から逃れ粉砕、駆けつけていたネンガ様と一騎打ちをして、ネンガ様を粉々にした後、哄笑しながら灰になって消えてしまった。
あの面倒臭いことこの上ない雅とかいう吸血鬼を念星に吸い込ませてくれたのは嬉しいが、それでチャラになる問題ではない。
せめてどちらかが念星の制御を解いて消していれば、もう片方も術者の意識が消えると同時に消えてくれたものを……。
「やっぱり横合いから突っ込んで殺しときゃよかったんだよ！」
「いや、それやるとまた復活した時殺した奴にターゲッティングしてくるからやめようって話纏まってたじゃん！」
禁じ手の大隔世遺伝で巨大な金毛白面九尾の狐へと変じた九魅ちゃんを宥めながら、対抗策を考える。
考えるが……。
「書主さん、さっきのずばーっていうの、何回か撃ちこんだら消えないかな」
九魅ちゃんの乗り捨てた零影と無理矢理合体させて作った海魔アナザーバージョンを現神の術で空間に固定したまん丸が問うてくる。
子供っぽいところがまだ多く残っているまん丸は擬音で表現する事が多いので解り難いが、このズバーというのは赤の力、超秘伝忍法

『紅』状態で放つ忍法『純粋数学式物理法則改竄バスタービームの術』の事だ。

通常は惑星上で撃つと偉いことになる術だが、異界という事もあって思い切りぶちかましてみたのだが……。

「駄目だ、あの不安定な二連念星にこれ以上撃ったら、どう変化するかわからん」

消し飛ぶどころか、念星の術式というか込められた意念がバスタービームのエネルギーによって変異を起こし、臨界状態の原子炉の様な危険な状態になりつつある。

最悪、込められた意念と打ち込まれたバスタービームが加圧された状態で解き放たれれば、異界を破裂させ、余剰エネルギーが地球の表面を焼き払い、日本列島を忠臣として地球という惑星の半分が人の住めない死の大地に変わりかねない。

かといって、『海』を使うのはもっとヤバイ。

単純に属性が似通っている為、念星と同質の属性を得て、周囲全てを吸い込むという状態を単純に強化してしまい、こちらの場合は地表どころか地球の質量の四割が吸い込まれてしまうという計算結果が出ている。

これで触れる相手なら追記することでどうとでも成るのだが、あの念星は触るどころか近づくだけで吸い込まれ追記するどころの話じゃない。

かといって、この状況を打破できる能力を持った誰かをこれから思いついて描いて記述を写して、というのも現実的ではなく。

飛び散ったネンガ様も天容の笛の元に僅かずつではあるが集まって再生を始めているが、それも間に合うかどうか……。

「……こういう時のお決まりで行くしか無いんやないか」

多色形成のオーラを纏いながら漂っていた日影さんが口を開いた。

「お決まり？」

「こう……全員の最強技を纏めてぶつける的なの、あるやろ」

「ああ、バトル物のラストとかであるあれか！」

「あれか、じゃないよ九魅ちゃん」

無茶苦茶だ。
ここに居るメンツでそんな真似をしたら、最悪、この異界どころか、空間がぶっ壊れて――――
「それだ！」
「え!?　本当にそれで大丈夫なの？」
「ああ、計算上、此方、日影さん、九魅ちゃんの力を合わせれば、あの二連大念星が何らかの変異を起こす前に空間をぶち抜いて『この世界の外側』に押し出せる」
この世界の外側には迷惑を掛けるかもしれないが、こちとら地球の命運が掛かっているのだ、なりふりかまっていられない。
「でも、そんな真似して大丈夫なの？　空間に穴が空いたら、凄いことになっちゃうんじゃ」
「なる。なので、まん丸はこの世界の側から穴を塞いでくれ。現神の術で……そうだな、でっかい絆創膏でも貼っておけば治る筈」
別に絆創膏そのものに意味があるわけではないが、取り敢えず何らかの強い力で封じておく必要はある。
そうすれば時間経過で自然と割れた空間も元通りに戻る、筈だ。
「この世界の側から……？　じゃあ」
九魅ちゃんの言葉に頷く。
「此方は大念星と共に穴の外に出て、あちら側から穴を塞ぐ」
「無茶だ！」
「無茶でもやるんだよ！」
時間がない。
ネンガ様の復活が早ければやる必要は無いのだが、天容の笛を掴む形で復活しつつあるネンガ様はまだ肘辺りまでしか無い。
やらなければ、地球が、この世界が、ヤバイ。
此方の命を、否、心を救ってくれたこの世界が、そこに住む、母さんが、父さんが、仲間たちが、友たちが、死ぬ。
それは、どうしても許せない。
散々、情が沸かない相手を勝手な理由で殺しておいて何を言う、と言われても、これだけは絶対に譲れない。

此方は、此方を愛してくれた世界を、愛してくれた人達を、絶望から救ってくれた何もかもを、失わせたくない。

「……一応、戻ってくる目処はある。死ににいく訳じゃない。だから」

頼む、と、言おうとした所で、忍者装束の襟を掴まれ、後に引き寄せられ――――

「ん……」

唇を奪われた。

慣れた温度、馴染み深い感触、いつもと変わらない匂い、日影さんの唇、目の前には至近距離から見える日影さんの顔面。

黄に近い金の、蛇に似た瞳孔が真正面から此方の瞳を見つめる。

互いに目を閉じない口吻。

「っ、ん……」

一方的に長い舌を口の中に差し込み、ずるり、と態と大きく音を立てて舌を絡ませながら口を離し、見せ付けるような舌なめずり。

「帰ってきたら、続きや」

「そりゃ、楽しみだ」

大念星に向き直る。

今更タイミングを口で言って合わせなければならないメンバーじゃない。

ので、毛を逆立たせて不機嫌そうにしている巨大な九尾の狐らしい文字列とか、恋人って事でやってるなら文句言う筋合い無いけど私の目の前でやるか？　書主も最近ヤッた相手の目の前で～、とかいう記述も目に入らないので。

改めて、杖を四本、此方を取り囲むように浮かべ、それを増幅器に、詠唱を開始。

《闇よりもなお暗き存在（もの）、夜よりもなお深き存在（もの）》

『海』そのものは駄目だが、出力的には低減しつつも魔法という確固たる方向性を得た重波斬なら、危険性は無い。

だが、これ単体ではバスタービームに純粋威力で劣る。

なので、この呪文を四本の杖で増幅し、光の剣に宿すようにしてバスタービームに載せる。

更に、
『Ｃａｒｒｙ　ｏｖｅｒ』
忍者マフラーに追記した倍加機能を機動。
これまでに倍加した回数を全て持ち越しでカウントする、これを、
『Ｔｒａｎｓｆｅｒ』
最適な形で全員で共有。
増幅され、日影さんの持つ忍者ではない力、まん丸の意念、九魅ちゃんの尻尾と同化した光の武器五本とニンタリティ、カラテ、雷嵐、槍の尾を限界まで強化。
過剰な威力だ。万が一にも地表に向けていい火力ではない。
だが、下手に弱い威力だと、逆にこの世界と外の世界の壁を大きく壊す事になってしまう。
綺麗に、適度に小さな穴を開ける為には逆にこれくらいの威力が必要になる。
増幅が完了し、誰が言い出すでもなく、力を解放する。
大念星が破滅を予感させる膨張を始め、しかし決定的な終わりを迎えるよりも早く空間が砕け散り、その向こう側へと落ちていく。
ごう、と、大気とも物理法則とも世界のルールとも呼べる物が、空間の穴から互いに溢れだし、混ざり合っていく。
「書主さん、絶対戻ってきてよ！　絶対だからね！」
そのまん丸の言葉と共に背を押される。
まん丸が現神の術で生み出した空間の破片で作り上げた巨大絆創膏だ。
絆創膏の真ん中、傷口に当てるガーゼ部分に背を押され、一直線に空間の穴へと飛ぶ。
ありがたい、自分で飛ぶよりかなり早い。
振り返らない。
返事もしない。
必要がない。
何故なら、必ず戻ってくると決めたから。
そうして、世界に開いた穴を通りぬけ、真っ逆さまに外の世界へ落

ちて行く。
さぁ、極めて迅速に終わらせよう。
ご褒美が待っている。

ドレスに身を包んでいるからといって、それで私の何が変わる訳でもない。
私は私、塔城小猫である。
最低限、恥ずかしくない振る舞いができるように教育は受けたけれど、だからといって、誰かとダンスを踊るような柄じゃあないのだ。
夕刻から始まったこのパーティでも、それが変わる事は決してない。
物好きにも私に声を掛けてくる少し変態臭い男性悪魔を躱しながら、用意された食事を摘みながら時間を潰す。
派手で華やかなパーティーだけれど、実際目的も無く参加してみれば退屈極まりない。
料理は美味しいけれど、それは別に特筆すべき事じゃない。
というか、悪魔は長生きなんだから、貴族の家のパーティーで使う施設のシェフならこれくらいは出来て当たり前。
まぁ食べますけど。
「……むぐ、むぐ」
食べるし、美味しいけれど、どうにも味気ない。
誰かと一緒にモノを食べる事に慣れてしまうと、一人の食事というのは些か物足りなさを感じてしまう。
勿論、美味しいものを食べる時に孤独と静けさが必要、という意見も分からないではないのだけれど。
「……ギャーくんでも誘えば良かったですかね」
そもそも、アーシア先輩やらゼノヴィア先輩やらが居る場所から離れなければ良いだけの話だったのだけれど、何故だか歩きたくなったのだから仕方ない。
なんというか、どうにも落ち着かないというか。
この極上っぽいローストビーフの味も、どこか舌の上を上滑りして

いく。
……だけど、これが正常な私なんだと思う。
これで、少し前のアンニュイな私だったら、このぼっち飯にも色々と思いを馳せて悩みに繋げてしまっただろう。
そういう意味で言えば、この退屈さは健全な退屈さだ。
――ニー
小さく、場違いな声が聞こえた。
パーティ会場の談笑の邪魔にならない音量の音楽とも違う。
この場で聞こえる筈のない声。
勿論、ペット厳禁というわけでないから、パーティー参加者のペットとか使い魔という可能性が無い訳ではないし、もしかしたら精巧な声帯模写という可能性もある。
だけど、違う。
根拠は無い、勘だ。
視線を辺りに彷徨わせ、参加者の足元を擦り抜ける様に移動する黒猫を見つけ、理屈ではない確信を得る。
黒猫は振り返る事無くするすると参加者の足元を擦り抜けて離れていく。
――逃がすか。
と、追いかけるのが少し前までの私だ。
だけど、今は違う。
明確に何が違う、と言われて挙げられる違いだけじゃない、違いがある。
言ってしまえばプレミアムな感じ。
……あれは手掛かりじゃない。
誘いだ。
誘いというなら、間違いなく、居る。
そして、私が来るのを待っている。
なら、急ぐ必要も無い。
「すみません、ちょっと良いですか」
私は走り去る黒猫に視線を向ける事無く、洗練された動きで参加者

にジュースやアルコールを渡して回っていたボーイさんに声を掛けた。

部長に声を掛け、気分が悪いしやることもないので、外で新鮮な空気を吸いながらご飯を食べてくる、と伝えて、パーティー会場から離れる。

手にはボーイさんに頼んで包んでもらったパーティー会場のご馳走。

ご丁寧にバスケットまで用意してくれたボーイさんには頭が下がる思いだ。

「……さて」

ホテル近くの森の中で立ち止まる。

これで、私の勘が的外れだったのなら、とんだ間抜けになってしまうけれど……。

ちら、とホテルの方を見る。

ホテルの近くと言ったけれど、森の面積とホテルのサイズから近くと言っただけで、実際の距離はそれなりにある。

多少大声を出した所で誰かに聞きとがめられる事もない。

「姉様、居るんでしょう」

叫ばず、しかし通るようにはっきりと呼びかける。

確認ではなく返事を期待しての呼びかけ。

直感であの黒猫が姉様の仕込みである事は察する事ができた。

その仕込みの猫があのパーティー会場で誰に見咎められる事無く私に声を届けられる場所まで侵入してきた、という事は、姉様は私を誘い出す積りの筈。

これで万が一、あの黒猫が偶然一流のホテルマンの目を全て掻い潜り上級悪魔のパーティに忍び込んだだけの猫なら、それはそれでもう諦めるしかない。

もしそうなら、私が無人の森の中で誰かを呼ぶただの痛いヤツになるだけだから、痛いけどそれほど痛くない。

何かが動く気配を感じ、視線を向ける。

少し離れた木の影。
「ハロー、白音。久しぶり」
そこから、黒い着物を着た、黒髪で、黒い猫耳を生やした女性が、軽い調子で現れる。
私の記憶の中にある姿よりいくらか成長したその姿はやはり、何時か別れた姉様その人だった。

数年の時を置いての再会に似つかわしくない軽い挨拶をしながら、内心で黒歌はほんの少しだけ驚きを得ていた。
勿論、最初から妹である白音を誘い出すつもりで来た訳だけれど、白音のリアクションが想定から外れていたのだ。
使いに出した黒猫に反応すれど慌てる様子も無く、ゆっくりと後を追いかけてきたと思えば、決して敵対的でない、冷静な態度で呼びかけてきた。
それ自体は、とても喜ばしい事だと思う。
悪魔の下で面倒を見られ、猫?としての力の使い方を指導できる教師すら居ない状態で、ここまで冷静で居られる事も。
それに、実の妹に悲しい顔や怒り顔をされるよりは、こうして静かに話ができる事も。
だが、
「わ、このお肉美味しい」
「……冷めても美味しいものを選んで包んで貰いましたから」
こうして、森のなかでシートを広げて、ピクニックの様にご飯を摘みながら話す事になるのは、完全に想定の外だった。
長々とパーティーを黒猫越しに見物していたからか、少し離れた場所に迎えに来たであろう美猴の気配を感じる。
白音はまだそこまで気配を感じ取れていないのかノーリアクションだが、黒歌にははっきりと、この状況を見てくつくつと笑いを堪えている美猴を認識する事ができた。
だけど、それもまだ軽めのリアクションだろう。
黒歌と白音――小猫の関係性を知っていれば、この白音の反応は意

外に過ぎる。
「それで、今日はどうしてここに？」
「ちょっと、今務めてるとこで野暮用があって、パーティー会場を見物していたのはそのついでにゃん♪」
「姉様、働いてるんですか？　勤め先に迷惑掛けてないですか？　サボったり遅刻したらいけないんですよ？　バレると怒られます」
「にゃはは、白音もきっつい事言うようになったにゃん」
信頼とはかけ離れ、でも心配していると感じられる返答と、そこに交じる猫らしい強かな言葉。
悪魔の下で成長した白音がどうなっていたか、どんな性格になったかが少しだけ心配だった黒歌は、言葉の端に滲み出る自分に似通った自由さに安堵を覚えた。
余計な見物人も居るけれど、黒歌はこの時間を楽しんでいた。
最初はパーティー会場から誘い出して攫っていくつもりだった。
その上で当時の真相を話すなり、誤魔化してしまうなりして、これからは姉妹一緒に暮らすのだと考えていた。
だけど、白音は攫うまでもなく、自分と穏やかに食事を楽しみ、軽口も叩いてくれた。
仕方ない事とはいえ、あの時置いていってしまった事を考えれば、破格と言っても良い程に友好的な接触。
「ねえ白音、お姉ちゃんと一緒に来ない？」
故に、当初の予定の様に問答無用で攫うのでなく、誘う形をまず取った。
来ない？　と、提案の様に言っているが、すでに黒歌の中で白音を連れて禍の団に行く事は決定事項であった。
誘う形にしたのは、誘ったら来てくれるかも、という目が見えたからだ。
どちらにせよ連れて行くにしても、白音が、妹が自分から自分に付いて来てくれると言ってくれたなら……。
「そうですね、それも、いいかもしれません」
「でしょ、でしょ!?　じゃあ――」

妹からの、了承とも取れる言葉にはしゃぎながら身を乗り出す黒歌。
「でも」
身を乗り出した黒歌の目の前に、身を反らして距離を取り、突き出した白音の掌が映った。
手首には、地味でも派手でもない、白音の静かな雰囲気に溶け込むような黒いブレスレット。
黒いようで白いようで、黄金に似た、猫の目にも似た石が嵌めこまれたそれを、黒歌は意識する事ができない。
だが、それでも視線が僅かにそのブレスレットに嵌めこまれた石に向かったのは、石に何らかの力を感じたからか。
「その前に、一つ」
やること、やっておきましょう。
その言葉と共に、世界が反転した。

ブレスレットに組み込まれた機能はしっかりと発揮され、私と姉様の居る森全体を、薄暗い半透明の膜が包み込んだ。
少し離れたところから私と姉様の事を見ていた禍の団の誰かはしっかりと膜――結界の外側に居る。
「にゃにゃん。なかなか面白い術だけど、なんのつもりかにゃ？」
焦る様子も見せない姉様。
だけど、それも仕方がない。
この結界の構造は実際簡素だ。
読手さんも『時間稼ぎにはなるけど、それ以上は望めない』と断言していた。
……でも、それで十分。
この結界を外から破られるまで此処に留まるとなれば、流石に部長も異変に気付く。
そうすれば他の皆も駆けつけてくれる筈だ。
「姉様、黒歌姉様」
「なあに、白音」

「私は、姉様の事が、大好きです。昔も、今になっても、久しぶりに会っても、それは変わりません」
幼い私を守りながら育ててくれた、唯一の肉親。
強さと才能には、危機感と共に憧れも確かに感じている。
美人だし、セクシーだし、私より年上と言っても、それを考慮しても凄く豊満で羨ましくもある。
尊敬するし、一緒に話して、一緒に食事をして解ったけど、そういう理屈を抜きにしても、私は姉様が大好きだ。
少し唯我独尊過ぎる部分もあるけれど、そういうところを愛嬌と受け取れるくらいに。
「私も、白音の事好きにゃん？」
「知ってます」
「にゃにゃ、言うじゃにゃい」
一緒に食事をして、少し言葉を交わしただけでも判る。
黒歌姉様は、今でも私の事を大切に思ってくれている。
私達姉妹は、姉妹の絆は、今も強く繋がっている。
互いに違う場所にいて、互いに違う立場になったとしても、それは決して変わらない。
それは、本当に嬉しい。
「小猫」
「にゃん？」
「塔城小猫、って、言うんです。今の名前」
塔城小猫。
私の新しい……もう、新しいと形容するには馴染みすぎた名前。
私の、悪魔として生活してきた、もう一つの名前で、もう一つの人生。
「ただの白音だったら、一緒に、行けたけど」
でも。
私は白音だけど、塔城小猫。
塔城小猫として生きてきた人生が、時間が、今の私を作っている。
人間の世界に悪魔として紛れ込む生活。

学校での他愛ない退屈な時間。
眷属の仲間のみんな。
間抜けで、おせっかいで、いらんことしいで、変にプライドが高い、不器用で、でも、優しい王。
それに。
「……なんて呼ぶか、まだ、決めてないけど」
友達が、待っているから。
なんでもない学校で、なんでもない時間を一緒に過ごす、でも、本人は全然何でも無くない、変な人、人間の、友達。
大事な大事な友達と、また、学校で会うと約束した。
全てを投げ捨てて、姉様と一緒に行くなんて、できないし、したくない。
だから。
「私は」

「まぁ、そうなるにゃあ」
黒歌が得たのは落胆でなく、納得。
妹、白音には白音の、これまで自分と別れてからの人生がある。
その中に捨てきれないものだってあるだろう。
それくらいは十分に理解できる。
が、
「それでも連れてくんだけどにゃ」
それはあくまで理屈。
黒歌は何も、姉妹は一緒に居るべき、妹は自分が守らなければ、という倫理観のみで動いている訳ではない。
もちろん、妹を悪魔のもとに置いておくより、自分の一緒に居させたほうが良い、という思いもある。
仙術だって教えて、猫?としての力を伸ばして、自分の身を守る力を持たせてあげる事もできる。
だけど、そんな理屈を超えた所で黒歌は動いている。
可愛い妹を手元に置いておきたい。

動物的な本能とも違う、妖怪的、悪魔的な欲望。
それで動いているが故に、黒歌は躊躇しない。
「色々聞きたい事もあるけど、それは後でゆっくり話しましょ？」
猫らしい捕食者の笑顔で、白音に仙術を仕掛ける。
生体エネルギーを揺さぶり意識を奪う単純な、しかし相手の肉体に余計な負荷を掛けない優しい術。
だが、強い優しさだ。仙術に精通している相手でなければ抵抗も難しい。
今の、仙術を習う相手の居ない白音であればこれで十分。
後は連れ帰ってから、これまでの話をしよう。
時間だけは沢山あるのだから。
「――んにゃっ！」
バチィッ、と、電気が弾ける様な音と共に、仙術が弾かれた。
抵抗されるでもなく、術そのものが拒まれたのだ。
挙句、術に使用した気まで一部持って行かれた。
黒歌の仙術を、白音が弾いた。
それが黒歌から見た単純な事実。
だが、違う。
「風魔咆裂弾（ボム・ディ・ウィン）！」
彼女が相対するのは、白音であり、それでいて塔城小猫なのだ。
「にゃっ、っ！」
強烈な暴風。
白音から吹き荒れる、丸太すら吹き飛ばす強烈な風に吹き飛ばされる。
互いに距離が開いた。
既に仙術で一撃で意識を奪える様な距離ではない。
が、白音はその場から逃げた訳ではない。
立ち上がり、ボロボロになったシートを蹴り飛ばし、ファイティングポーズを取る。
魔術を覚えるまでの攻勢の構えでもない。
魔術を覚えてからの守りの構えでもない。

そのどちらをも――――白音でなく、塔城小猫として戦ってきた経験を織り込んだ、全てを出し切る為の構え。

突き出した手刀、その手首に巻かれたブレスレットからは、黒とも白とも黄金ともつかない混沌とした色の靄がマフラーの如くたなびいている。

空中で身を捻り背の高い木に着地した黒歌は、その構えとたたなびく何かから、白音――小猫が戦うつもりなのだとはっきりと理解した。

「戦うの？　怪我はさせたくないんだけどにゃー」

仙術を弾かれ、吹き飛ばされ、それでも黒歌には余裕があった。

右から左に流れていった諸々の騒動の報告の中、しっかりと聞いていた小猫の戦闘力は、低くは無いものの、決して自分に勝るものでは無かったからだ。

勝てると踏んでいるし、それは一面の事実でもあったし、それは小猫にも十分に理解できた。

罪を被せられそうになったけれど、それでも保護者を得て、日常の中で戦闘を熟す程度の自分では、恐らく手配されてから多くの修羅場を潜り抜けてきた姉に、才能でも経験値でも届かない。

だが、この一対一の戦闘は長続きしない。

どこかのタイミングで禍の団の男は侵入してくるだろうし、部長達が駆けつけてくればイッセーや祐斗が無理矢理に結界を破って助けてくれる。

不利になるか有利になるかわからないけど、この一対一の殴り合い（語り合い）は長くは続けられない。

だから、勝てる負けるはそれほど気にしない。

「姉様、私も、色々と言いたいことが山程あるんです」

気にしない。

気にしないが、小猫の心には渦巻くものがあった。

向き合うと決心した力、しかしそれを嘲笑うかのように姉が現れ、自分を連れて行こうとしている。

素直に嬉しいという心、何を今更という心、それでも一緒に居たいという心、でもその為に誰かと離れるのは嫌という心。

小猫の心の中はぐちゃぐちゃだ。
「ついていくのも良いかなって思いますし、帰って会いたい人も居ますし、姉様と一緒に居られたらと思うし、その人に会えなくなるもの嫌だし……だから」
「だから？」
迷いはある。どうするかもまだ決めては居ない。
だから、だからこそ。
「だから――――」
だん、と、森の木々を揺らす程の震脚。
反動で、躊躇いなく、小細工無く、一直線に黒歌へと跳ぶ。
「諸々纏めて、私の気が済むまで、ぶん殴ります！」
どうするべきか、どうしたいか。
全ての迷いを飲み込んで、塔城小猫は拳を振り被った。

四十二話　打ち合い、交わる道

「まぁそれも猫？だにゃん♪」

結論らしい結論を出すよりも先に、なにはともあれ殴りたい、という欲求を優先した小猫を、黒歌は笑顔で受け入れた。

勿論、拳の一撃を受け入れる訳ではなく、理屈でなく本能で動く猫らしさを受け入れた、というだけなのだが。

「殺すつもりは無いですけど……一回死ねぇ！」

「どっちにゃ!?」

轟、と、風を劈く轟音と共に小猫が迫る。

激しい音は特殊な術理を用いずに大気の壁を引き裂くが故のパワーロスの現れであるが、それを自覚しつつも小猫は力を抜かない。

高速で黒歌に迫る小猫。

更にそこから減速無しの全力で繰り出される大振りな拳。

拳の端から漏れる白い蒸気は夏の高い湿度から生まれる小規模な飛行機雲か。

いや、違う。

少なくとも小猫と相対する黒歌がそれを見誤る事は無い。

白い蒸気は単純に大気中の水分が凝結したものではない。

それは白い霧の中に輝く細かな氷の結晶が証明していた。

「れいとう……パンチ！」

掛け声と共に拳が着弾し、込められていた『力』が解放された。

着弾点を端とした十数メートルほどの範囲から熱が奪い去られ、見る間に凍結していく。

拳に込められていた魔法の名は砕氷塵（グレイ・バスター）。

本来であればやはり多少の詠唱を必要とするこの術もまた、一言の詠唱も、力ある言葉による呪文名も無く、出鱈目な掛け声と共に発動した。

事前情報により小猫の使用する術の特性をある程度理解していた黒歌だからこそ引っ掛かる、不意打ち気味の広範囲攻撃。

「おっとと、危ないにゃあ」

凍結し切るよりも早く解けて霧散する黒歌の虚像。
声の出処は術の範囲の外。
声に現れる余裕はそのまま小猫と黒歌の戦力差の現れとも言える。
呪文詠唱を丸々省略する謎の技術を駆使したとして、やはり黒歌との戦闘力の差は歴然。
長引けば長引くほど、体力の回復手段の無い小猫にとって不利な勝負。
更に先の一撃も悪い。
詠唱省略という不意打ちに最適な技術を使っておきながら関係ない掛け声を付けての大振りの一撃、しかも減速も無く突っ込み、肝心の対象は術の効果の範囲外。
狙い撃ってくれ、攻撃を当ててくれと言わんばかりの残心の放棄。
「そんな隙だらけの攻撃――」
加速だけを考え、避けられた先の姿勢制御すら捨てていた小猫に、黒歌が流れるような動きで近寄り、鋭く手を伸ばす。
仙術により生命エネルギーを操る黒歌は、例え打撃として成立しない様な一撃だとしても、相手に触れた時点で有効打を与える事ができる。
空中で羽根を使っての姿勢制御すらままならない状態の小猫では避ける事は難しい。
「当たらないんでしょう、知ってます。だから」
小猫に触れる直前、小猫と黒歌の間に生まれた土壁が、黒歌の視界と接触を遮る形となる。
土壁、いや、単純に土だけを寄せ集めて作られた壁代わりの簡易ゴーレムを蹴り、小猫は崩れていたバランスを整え、空中で反転、更にもう一度強く土ゴーレムを蹴り宙へ。
土壁を隔てて反対側に居た黒歌に蹴り砕かれた土が降りかかりそのまま目潰しとする策だ。
勿論、遮られた時点で黒歌はその場から飛び退いているので当たる事はない。
しかし、単純に触れられる事と視界を防ぐことだけを考えて作られ

た土壁ゴーレムの範囲は広く、視覚的には黒歌も小猫も相手の姿を捉えられない。

無論、生命力を感知可能な仙術使いの黒歌にこの目眩ましは子供騙しも良いところだろう。

だが、子供騙し程度にはなる。

生命力を感知して居場所や大体の状態を感知することが可能だからといって、対象の全てを把握できる訳ではない。

「蓮獄火炎陣（ヴレイヴ・ハウル）！」

つまりそれは詠唱の時間を稼ぐ程度の事は可能であるという事だ。

着地と同時、今度こそ正規の詠唱を経て組み上げられた魔法が発動する。

地精へと干渉した魔力により、小猫の眼前の大地が広範囲にわたってグラグラと煮え滾ったマグマの海へと変貌し、大地に根を張っていた森の木々を焼き尽くしていく。

「にゃにゃ、無茶苦茶するわね」

炎上しながらマグマに沈んでいく木の上に立った黒歌が、額から汗を流しながら笑う。

流れる汗は冷や汗でも脂汗でも無い、純粋に大気温度が上がった事に対する汗でしかなく、黒歌は未だ余裕を持って小猫の先方を分析する余裕すらある。

一見して派手な魔法を振り回して力任せに動いているだけの様に見える小猫だが、その行動の多くに黒歌の仙術や妖術を封じる為の意図が含まれていた。

徹底的に動き回り距離を取り続けているのは勿論、黒歌との肉体的な接触を避ける為だが、この派手過ぎて周囲の被害を一切考慮していないようでもあるマグマにもまた理由はあるのだ。

木々を焼き続けるマグマはその熱気から上昇気流を生み出し、周囲に張り巡らせていた毒霧を上空高くへと押し上げている。

また、周囲の障害物を排除してしまえば後に来るのは単純な術や打撃のぶつかり合い。

攻撃的な魔術を得意とする小猫のホームグラウンドと言っても良

い。
　周囲への配慮の一切をかなぐり捨てているという点を無視すれば効果的な戦略だろう。
　小技のぶつけ合いとなった時点で小猫の元から薄かった勝機は更に薄くなるのだから、妨害を廃しての真正面からの火力勝負というのは小猫にとって唯一の勝機がつかめる道筋でもある。
　無論、毒霧の全てが空に飛んでいった訳でもなく、また、マグマと化した大地から出る熱は黒歌だけでなく術者である小猫ですら蝕む筈だが……。
「面白いもの持ってるじゃない」
「良いでしょう。友達からのプレゼントです」
　薄っすらと小猫を覆う白い靄。
　魔力とも気とも違う不可思議なエネルギーで出来たそれが、周囲の熱から小猫の身体を護っている。
　様々な術を収めている黒歌からしてみても珍しい、興味を引かれる力。
　ひょう、と、マグマに沈む木の上から飛び上がり、小猫の数メートル後へと回りこむ黒歌。
　振り返りマグマ溜まりを背後に置いた小猫に対し、にぃぃ、と、実に猫らしく口の端を吊り上げる。
「後で見せてね？」
　勿論、捕まえて、禍の団のアジトに連れて行った後の話だけど。
　言外にそう告げる黒歌。
　まだまだ余裕があり、素直に妹の成長を喜んでもいる。
　小猫は埋まらない戦力差に対する焦燥をおくびにも出さず、口の端を少しだけ釣り上げる小さな笑みで応えた。

　にぃ、と笑顔を浮かべて、形だけでも自分を奮起してみたはいいものの。
　――駄目、全然殴れません。
　正直、ここまで攻めればどこかで手足の一本目の片方くらいは獲れ

てると思っていたのに、相も変わらず姉様は無傷だ。
私に対して牽制程度にしかならない攻撃を繰り返す辺り、しかもそれでほぼ無傷な辺り、私はどうも、姉様との戦力差を少なめに見積もりすぎていたらしい。
いや、勿論、私と姉様が『自分の実力だけ』で戦っていたなら、一撃も当てられないどころか、私はもっと早い段階で意識を失い、あっけなく攫われていただろう。
私も魔法や地道な組手で育ってはいるつもりだけど、はっきり言って、姉様の仙術とは相性が悪い。
「……」
口の中で小さく詠唱を繰り返しながら、腕のお守りを撫ぜる。
すぅ、と、身体の中で巡っていた魔力が抜けて、お守りの中に吸い込まれていくのを感じた。
次いで、お守りから新たに白い靄が溢れてくる。
白い靄が仙術で作られた毒霧を、地球の血液とも言えるマグマの熱を吸収し、結果的に靄を生み出すのに使った分を補填し、魔法行使で減った分の魔力を補充する。
生命力と精神力、魔力と相互に変換するこの機能があれば、まだ学び始めたばかりの拙い仙術でも、ある程度は姉様の仙術を防げる。
そう、ある程度は。
それだって時間制限付きだ。
この靄がどういうものか、仙術に、生命力を操る事に長けた姉様なら、もう気付いていても可笑しくない。
姉様が私を殺さない様に手加減しながら捕まえようとしている以上、どの程度の仙術がどの程度弾かれるか、という点を理解されたら終わりだ。
仙術以外の、妖術などを織り交ぜて強めに強化された時点で詰みかねない。
「もう降参？　久しぶりの姉妹のふれあいなのに、白音はだらしないにゃあ」
数メートル先に姉様を見ながら、靄を出すという一見して守りの一

手しか無い私に姉様が笑う。
嗤う、という程に邪悪じゃなくて、それこそ、本当に、一緒に遊んでいた妹が先に疲れてしまったのを『仕方がないなぁ』と言う様な。
優しさすら感じる笑み。
「まさか」
あぁ。
なんて、なんて優しい笑顔だろう。
ずっと昔に、こんな笑顔を向けられた事を思い出す。
姉様はあの頃から全然変わっていない。
主である王を殺して犯罪者になったとしても、力に呑まれたなんて嘘みたいで。
「まだまだ、ここからが勝負」
お守りに込めてある魔法を思い出す。
つめ込まれた魔法は、見事に試打のことばかりを考えた脳筋ラインナップ。
修行相手が居なかった事もあって、影縛りどころか地精道すら入れていない。
入れていれば、もっと上手い立ち回りもできたんじゃないか。
なんともタイミングが悪い。
そのタイミングの悪さを、良かったと思う。
あるのだ。
たった一つだけ、上手い立ち回りを考えずに適当に魔法を詰めた今だからこそできる、姉さんに一発良いのを当てる手段が。
撃つかどうか、それは、今から決める。
決まる。
「姉様」
「なあに？」
一見して隙だらけで何も構えていない姉様。
それは、同じく隙だらけで何も構えていない私に対する余裕でもある。
何か奥の手があっても勝てる、という、力の差から来る余裕。

それは当然だ。間違いじゃない。
それに対する憤りなんて浮かぶはずも無い。
浮かんだとしても自分への不甲斐なさくらい。
だから。
「なんでですか」
「？」
私が怒っているとすれば。
「なんで、私を置いていったんですか」
「――――」
ふっ、と、一瞬だけ姉様の笑みが消える。
笑顔の剥がれた後に見えた無表情の様な顔。
それは後悔で、悲しみで、後ろめたさで、どういう顔をしていいのか分からないものでなく。
それら全てを含みながら、太い背骨となる決意が、明確な表情を作らせずにいるような顔。
そんな顔を見ればわかる。
力の暴走があったのかもしれない。
でも、私の事を置き去りにしたのにも、しっかりとした理由があった。
裏切られた訳じゃあなかった。
だけど。
「私は、姉様と一緒に居たかったです。何処かに行くなら、連れて行って欲しかった」
「でも、それをしたら白音は死んでたにゃ」
嘲るような語尾と笑み。
貼り付けたような笑みと誤魔化すような軽薄さ。
でもきっと、その言葉に嘘は無くて。
私を連れて行っても、弱い私ばかりが脚を引っ張って。
でも、それを庇って姉様が死んでしまうような事になってしまったのだろう。
何があったか、なんであなったのかは知らない、想像もできない。

でも、きっと、姉様はそれなりに正しい道を歩いた結果、ああなったんじゃないか。
奇妙な確信。
でも、だから？
だから、納得できるか、と言えば。
絶対に、ありえない。
「それでも、それでも、私は」
何か一言告げて言ってくれるだけでも良かった。
ほとぼりが冷めた後にでも別れと再会の約束だけでも残してくれれば、私はいくらでも待てた。
付いて行って、足手まといになるなら、そこで死んでも良かった。
庇われたなら、更に庇い返してもみせた。きっと私は命をかけてそれをした。
あの時代、塔城小猫が白音だった時代。
姉様が世界の全てだったから。
「姉様と、一緒が、良かった……！」

涙。
魔力を溢れさせ、仙術を弾く靄を纏い、闘気を漲らせながら、塔城小猫は、白音は、血を吐くような告白と共に泣いていた。
常の小猫を知っている者が見れば、誰もが驚く程に深く、重い、激情の吐露。
いや、この状態こそが、本来の小猫の、白音の心の在り方だったのかもしれない。
楽しければ声を上げて笑い、悲しければ泣く。
そんな素直な少女が、黒歌との別れから今までで、感情を大きく表に表さない物静かな少女へと変貌した。
「……大丈夫、これからは、ずっと一緒にゃん」
誰のせいだろう。
大本を辿れば、黒歌が王を殺す原因を作った相手に辿り着くだろう。

だが、黒歌はそう自分の心を誤魔化す事をしなかった。
そこに妖怪特有の自分勝手さがあるのは間違いない。
だが、この愛おしい妹を、今度こそ絶対に離さない、という決意も確かにあった。
「……それも、いいかもしれません。でも、私は」
「今まで一緒に居られなかった分、白音と一緒にいる、ぜんぜんおかしなことじゃ無いにゃ」
それがたとえ、今の白音の生活を壊す事になるとしても。
その考え方が白音の希望に必ずしも沿う訳ではないとしても。
故に、
「おかしいです。……おかしいんですよ！」
悲しみに怒りが混じり、劇的な化学反応を起こし、爆発する。
「あの日、私は置いて行かれた！　白音はあの日に、置いて行かれたんです！　その事実も！　悲しみも！　姉様が居なかった時間も！　これからどれだけ一緒に居たって！　無くならない!!」
白音を、小猫を覆う白い靄が、紅く、血の流れの様に紅く染まる。
此処に来て小猫の中の大切な何かが弾けた。
禁じ手とされた術、結界内とはいえホテル近くの森であるという状況。
そういった諸々のセーフティーは頭の中から綺麗に吹き飛び、今の自分ができる、唯一姉に一撃を確実に入れられる方法を実行に移す。
弓を引き絞る様な動きで、もはや靄というよりも流体の様ですらある紅を纏った拳を振り被る。
「白音は、一緒に居たかった！　今だって変わらない！　でも、今の私は、白音でも、塔城小猫だ！」
靄に込められた術の規模に、黒歌は迷わず前に出た。
この近距離で出していい術じゃない。
打てば間違いなく、余波で白音も冗談で済ませられないダメージを負う。
黒歌は白音を連れて行き一緒に居たいだけであって、白音を倒したい訳ではない。

そして、そんな細かい理屈を抜きにして、黒歌は白音を守りたかった。

後悔が確実にあり、力を付けた今、それを取り戻そうという意志が確かにあったのだ。

術が発動するよりも前に、全力の仙術で意識を奪うしかない。

黒歌にはそれができる自信があった。

だが、

「ビックバン・パンチ！」

小猫の動きは迅速で、黒歌の予想を遥かに悪い方向で裏切るものであった。

紅のエネルギー――竜破斬（ドラグ・スレイブ）を纏った拳を、あろうことか、全力で、自らの足元目掛けて振り下ろした。

余波で術者本人がダメージを食らう、などという生易しいものではない。

完全な自爆。

自らが巻き込まれる事を前提とした特攻。

これこそが、白音の、いや、塔城小猫が禁じていた奥の手。

理性的に考える事を良しとする小猫が、その理性を飛ばしてしまったからこそ放たれた諸刃の刃。

しかして、その効果は絶大。

ターゲットを無機物の大地として解き放たれた極大破壊呪法は、無情なまでにその威力を正しく解放した。

地面を殴りつける小猫、その小猫を止めようと手を伸ばす黒歌を中心に、都市破壊級の破壊的エネルギーが解放される。

それは大地を刳り、木々を吹き飛ばし、結界の内壁に反響し、繰り返し繰り返し結界内部のありとあらゆる物体へと行き渡り――

「――――」

最後に、その場に小猫が立っていたのは、ある種の奇跡か。

お守りの防護によるものか、ギリギリの所で服は残っているものの、全身の骨はひび割れ、砕け、僅かに吹き付ける風ですら激痛を誘う。

その激痛によって保たれる意識が、姉の姿を探す。
障害物が無い為か、黒歌の姿は直ぐに見つかった。
全身ボロボロで、艶やかに着崩した着物も見る影も無く、しかし、小猫に比べてダメージは明らかに少ない。
（ああ――――敵わないな）
原因なんていくつも思いつく。
そもそも猫?としての力を使いこなす過程で、妖物としての頑健さも増していく以上、姉は自分よりも確実に生命力があるだろう。
仙術で空間を渡れば、あのタイミングでも被害を少なくする事は不可能ではない。
勿論、結界内に封じ込めているから完全に逃げ切る事はできないけれど……。
それも、あの姉の隣で肩を貸そうとしている男……禍の団の孫悟空の援護が間に合った、と考えれば合点がいく。
どうにも、実に都合のいいタイミングで結界を抜けて助けに来たらしい。
黒歌が何か叫びながら自分に駆け寄ろうとして、男も何か口にしている。
明らかに叫んでいるのに、小猫には何も聞こえない。
鼓膜が破けているんだな、と、どこかはっきりとしない頭で考え、次に、これからどうなるのか、と、考える。
姉様が心配している、男も何か驚いた様子で、それでいて姉様を邪魔する様子も無い。
たぶん、ここで私は姉様に連れて行かれて、治療を受ける事になるんだろう。
姉様は隣の男の手を借りて、しっかりとした足取りで近づいてくる。
姉様は優しい。
さっきだって、私の狙いを読んで止めようとした。
そんな姉様と、これからずっと一緒、と考えると、悪くない気分になる。

でも。
でも。
本当に、それでいいのか。
脳裏に走馬灯の様に浮かぶ、これまでの生活。
オカ研での日々。
学校での時間。
何気ない日常。
白音の事を知らず、塔城小猫として生きてきた私を知る皆。
普段はぱっとしないけど、大事なところではきっちり締めてくれる、まぁまぁ頼りになる部長。
そんな部長を陰ながら影のように密かにさり気なくフォローし続ける気遣いのできる副部長。
スカした雰囲気も薄くなって、ちゃんと歳相応に馬鹿な所も出てきた、でもいざという時本当に頼れる祐斗先輩。
悪魔から見ても、本当に良い意味で天使の様な優しいアーシア先輩。
エロスに敏感で、でも変にヘタレで、変に義理堅い、おっぱい好きすぎる、それでも熱いイッセー先輩。
頭おかしいんじゃないかなって思うけど、それ以上に凄くオカ研に馴染んでいる、ゼノヴィア先輩。
最近目覚めた性癖を除けば、順調に外に出るようになり明るくなってきたギャー君。
それに――――
「――――ん」
そうだ。
まだ、まだ、姉様と一緒に行くわけにはいかない。
私は、私には、まだ、会わないといけない人が、逢いたい人が、居るから。
だから、私はまだ、これからも、塔城小猫として、あの場所に帰らなきゃならない。

あの学校で、あの教室で、通学路で。

「――――さん」

約束を、果たす為に。

私は、私の大切な友達の、大事な人の、名前を呼ぶんだ。

まだ少し、気恥ずかしい、新しい呼び方で。

呼ばれた時の、彼の顔を、見るために。

「書主、さん」

目の前にまで迫った姉様を見ながら、私は喉を、舌を、唇を震わせながら、ようやく決めたその呼び名を口にして――――。

浮遊感と共に、あり得ない姿を見た。

逢いたくて逢いたくて、そう思うから元気が出る。

そんな事を思える、思ってしまえる相手の顔が、目の前にあった。

まず、最初に目に映った光景が元の世界かどうか判断するよりも早く、身体が動いた。

巨大なクレーターの真ん中で満身創痍で立ち尽くす友人に、手を伸ばす女性。

誰？　という疑問には女性の隣に立つ先日四分の一殺し位にした男の姿が答え。

壁になる何かを間に投擲、するよりも早く、空間の縁を蹴り加速。

特殊な走法にて空間の隙間を走り、衝撃波一つ起こさず光速で友人の元へ。

ぱっと見た状態は明らかに瀕死で、例え衝撃波を殺しても光の速度に耐え切れる状態ではない。

減速し、友人を抱えて飛び上がる。

とっさの事で女性も男もこちらに視線を向ける事すらできないようだ。

好都合なのでそのまま空を蹴り距離を開ける。

「残しておいて良かった」

懐からげんきのかたまりを取り出し、友人に押し当てる。

物理法則を無視するように友人の身体にげんきのかたまりが飲み

込まれて行き、簡易結界の端に着地する時には全身の傷が塞がっていた。

傷が塞がってもダメージを受けた時のショックが抜けていないのか、腕の中の友人は呆けたような表情で此方の顔を見ている。

……これで、よく似た別の世界の別人でした、とかなったら悲しいけど。

「書主、さん？」

呼び方違うし、別人かな？

あ、……あー、そうだそうだ。

別の呼び名にする、とか、決めてたんだっけ。

流石に人の身の此方に５４クールとかは長かった。結構重要な約束だったのに思い出すのに少し時間が掛かってしまった。

まだ文字列で確認できてないけど、この太ももから膝裏、ふくらはぎにかけての手触り的には、多分、此方の知る友人本人で間違いないだろうし。

「うん、書主さんだよ。久しぶり、小猫さん」

「あ、え、……あの」

「なに？」

「……出待ちじゃない、ですよね？」

「此方もそれは思った」

タイミング良すぎない？　これ。

苦笑するよみ……書主さんの姿に、釣られて笑みが溢れる。

出待ちじゃないか、と、そう口にしたけれど、なんでこのタイミングで現れたか、という疑問に、私は少し、いや、かなりロマンチックが過ぎる答えを思いついてしまった。

『本気で塔城さんが求めるのなら。……此方は何処からでも駆けつけて、貴女の名を呼び、貴女の手を掴み、何度だって、引き戻すよ』

私が、名前を呼んで、求めたから。

だから今、書主さんは、私の名を呼んで、手を掴んでいる。

……乙女かっ！

いや、乙女、乙女だけど、こういう場面での乙女じゃ、いや、場面はいいんですど。

相手は友人、友人ですから！

書主さんは名前呼びくらいはする、たぶん親友的な位置に居るけど恋愛とかそういう、いや、誰も恋愛がどうとか言ってない。

シチュエーションは如何にも激的だし、事前の書主さんの言葉もロマンスな感じだけど。

……うん、大丈夫、大丈夫。

場の雰囲気に流されてる、だけ。

友人でも、異性なら偶に意識してしまう事があるのは仕方がない事。

うん。おかしくない。

おかしくないので。

「……書主さん、その、微笑ましそうな顔、止めません？」

「いや、小猫さんの百面相が楽しくて、つい」

「もう……」

毎度毎度、意地が悪くて、調子のいい人だ。

お陰で、なんだか私まで、何時もの調子に戻ってしまった。

ボロボロだった身体まで治ってるし。

「所で、この状況はいったい？」

「見てわかりません？」

「いや、今の視界だと……ぐ」

言葉の途中で書主さんが顔を顰める。

星の散る宇宙の様な瞳が、細められた瞼で僅かに遮られ、しかし、何故か完全に閉じきらない。

「……あー、クソ。本当に、この視界は久しぶりだっていうのに」

「目ぇ閉じたら良いじゃないですか」

「何言ってんですか。久しぶりに会った友人の顔を見るなとでも？」

久しぶり久しぶりって言うけど、まだ一月も経ってないんですが……。

まぁ、そこまで会うのを心待ちにされていた、と考えると、割りと

嬉しいような気もしてくるのだけど。
「そんなに見たいなら調子のいい時に見せてあげますから」
「その台詞なんだかエロいですね」
返事は拳で返した。
が、抱きかかえられたままだからか拳に勢いが乗らずに胸元を軽く叩く程度しかできない。
「いきなり出てきて人の妹とイチャつくなんて、いい度胸してるじゃない。誰？　キミ」
と、ここで、放置されていた姉様が私達の方に向き直り訝しげな表情で問いかけてきた。
さっきまでの怪我を隠そうともしない必死さが見えないけれど、それが未知の敵を相手にしての虚勢であることは私から見ても簡単に判る。
「それは此方の台詞ですよ。こんなクレーターの真ん中で、半裸でふらふらと半裸の小猫さんに手を伸ばすなんて、一体貴女は何処の痴女……小猫さんのお姉さん？」
「はい……わかるんですか？」
言葉を途中で区切って私に確認してくる書主さんに、頷きながら聞いてみる。
「そりゃわかりますよ。……それじゃあ、あの、全身痛くない所が無い位にダメージを負っていて、それでも妹に妙に馴れ馴れしい良く知らない男に弱い部分を見せる訳には行かない、みたいに気を張りつつ、小猫さんがエロいことされそうになったら取り敢えず死ぬ気で妨害、いやもしかしてこの子、白音のツガイ？　それならそれで見極めなきゃ！　とか考えてる割と妹煩悩な頭悪そうな半裸の痴女の方が、小猫さんのお姉さん？　あ、白音さんって呼んだほうがいい？」
はい、シリアス死んだ。シリアス死にましたよ今。
向こうで姉様が心を読まれた驚愕と隠していた内心を暴露された羞恥からか訳の分からない表情のまま赤面している。
私も姉さんがそんな事を考えていると言われて若干どういう顔をしていいのかわからなくなってきた所だ。

「小猫がいいです。……それと、その、姉様は本当に、そんな事を？」
「うん。この、小猫さんと似たような内容でいて方向性が絶妙に違う面倒臭さは実に小猫さんのお姉さんだと思うけど。あ、それ抜きにしても見ればわかるレベルで姉妹っぽいよ？」
それは、なんというか、嬉しい、と、素直に喜んでいいものか悩ましい……。
でも、書主さんがそう言うからには、少なくとも嘘ではないのだろう。
姉様が本気で私の事を気にかけている、そう考えれば、許してしまいそうになる。
というか、取り敢えず気が済むまでぶん殴る、という点で言えば、竜破斬自爆に巻き込んでスッキリしたから、まぁ、別にいいかな。
「……それで？　今度はお前さんがその娘の代わりに相手してくれんのかい？」
静かな、だけど、興奮を隠し切れないといった声色でそう問いかけ、ギラつく視線を書主さんに向ける禍の団の男。
さっきまでの、とりあえず仲間だから回収しに来た、という、やる気なさげな雰囲気は完全に消え失せている。
「……事情は今大体わかり（読み終え）ましたけど、その台詞なんだかレイパーっぽいですね。猿でレイパーとか最悪じゃないですか！」
特に根拠の無い誹謗中傷が禍の団の男の人を襲う！
いや、確かに穿った捉え方をするとエロ台詞に聞こえなくもないですけど。
「相変わらず、余裕かましてくれるねぃ。前は散々だったから、ここでリベンジマッチと洒落込ませて貰おうかぃ！」
ぶん、と如意棒を振る禍の団の人。
台詞が『死ねぇ！』と言いながら飛びかかるタイプの怪人ばりに死亡フラグの様に聞こえるけれど、たしか猪八戒の知り合いだか沙悟浄のファンだかいう感じの妖怪なだけあって、その実力は高そうな気がする。
以前三勢力会談の時にボロボロだった鎧や身体は万全のようだし、

もしかしたら書主さんも真正面から戦えば普通に苦戦する可能性もあるのかもしれない。
「ふぅん。まぁ、いいですよ。貴方はともかく、そちらの小猫さんのお姉さんには用事ができましたし、逃げられるよりは面倒が少ない……五輪書、キーオブザグッドテイスト（アメリカ大会レギュレーション）」
ばきん、と、金属をへし折る様な音と共に空間を割いて現れたのは、一領の甲冑と黄色いカブトムシの様な玩具。
一見して共通点の見当たらない二つから感じ取れるのは、奇妙なまでの力のうねりと存在感。
それが何なのか、言葉で説明する必要性を感じない、見ただけで脅威と判るエネルギーを感じる。
私を地面に下ろし、着ていた上着を脱いでかぶせてくれた書主さんは、甲冑を背後に置き、両手を広げながら薄く笑った。
「ここで良いお知らせです。此方は今、今生の中で最も心に余裕がある。……殺さないように相手をしてあげましょう」
「上等さぁ！　筋斗雲！」
禍の団の人の足元に金色の雲が湧き出し、天高く舞い上がり、くるりと一回転し、書主さん目掛けて急降下を始める。
「千日の稽古を劒（ちから）とし、万日の稽古を胄（まもり）とす」
書主さんの両手を広げたままの詠唱に背後の鎧が分解し、風を切り宙を舞い、書主さんの周囲を旋回する。
何が起こるのか、どうなるのか、気になりつつも小さく口の中で影縛りの詠唱を始めたところで、書主さんと禍の団の人の間の空間に亀裂が入った。
「そこまでです、美猴、黒歌。悪魔が気付きましたよ」
亀裂から飛び出た腕が持つ聖なる光の力を宿した剣によって、急降下の勢いの載せられた如意棒が受け止められ、美猴と筋斗雲が空中で静止した。
次いで、空間の亀裂をこじ開けながら、メガネに背広の真面目そうな男が現れた。

「あれは」
「知っているんですか？」
小さく驚いたような声を上げた書主さんに尋ねる。
書主さんは謎が多い上にバックに強大っぽい組織があるだけあって、ああいう謎の人物に詳しいのかもしれない。
「あの鬼畜眼鏡の持ってる聖剣、カリバーンですね」
鬼畜眼鏡……？
いや、確かにそんな雰囲気ですが。
「カリバーンですか」
ちょっと前に書主さんが使っていたカリバーンとはまったくシルエットが異なる訳だけれど、エクスカリバーが何本もあるのと同じ理屈なのかもしれない。
漫画原作のアニメと国産ドラマ、映画、海外ドラマみたいな関係かもしれない。
ラストはオリジナルストーリーで締めたけど名作になったアニメ版と、有名俳優のコスプレを楽しむことしかできない実写ドラマの違いのような。
……これは違いますね。
「たぶん、あっちのカリバーンの方が頑丈ですよ」
「じゃあ、迂闊に打ち合えませんね」
「そもそも忍者は聖剣で戦いませんから考慮する必要は無いんですけど」
「自分の戦いとか省みたりしないんですか？」
あの校庭での戦いはいったい何だったのか。
そんなやり取りを小声で行っていると、あちらの話も終わったらしい。
書主さんと軽口を叩きながら耳を欹てて聞いた限りでは、姉様と禍の団のメガネじゃない方が勝手に出て行ったままなかなか戻らないのを心配して迎えに来たのだとか。
やはり、正統派の聖剣使いは苦労人枠なのですね……。
あ、ゼノヴィア先輩とか書主さんは除外で。

「それで、お帰りですか？　できればそちらの痴女の方は置いていって欲しいのですが」
「そういう訳には参りません。彼女も我々の大事な仲間ですからね」
「左様で」
書主さんが気の抜けた声で返事をすると、周囲を舞っていた鎧の破片が元の形に組み合わさり、掠れる様にしてその姿を消す。
臨戦態勢、という訳ではなかったけれど、完全に戦う雰囲気では無くなったようだ。
「話の判る方で助かりますが、本当に良いんですか？」
「どうせ次の機会もあるでしょう。それに、さっきも言いましたけど、今は機嫌がいいんです」
「それは残念。聖魔剣使いとデュランダル使いだけじゃなく、貴方にも興味があったのですが」
「ただの雑談程度なら構いませんけど、どうせ手合わせしたい、とかそういうのでしょう？　生憎と忍者は戦闘職じゃありませんので」
「つれない人だ。……だけど、それもまた、次の機会待ちという事にしておきましょうか」
スーツの男がコールブランドを振るうと、先の空間の切れ目が広がり、数人が潜れる程度のサイズに広がった。
その裂け目に禍の団の人達が入っていき、姉様が裂け目に入ろうとした所で、書主さんの腕がぶれる。
「あいたっ！」
と思えば、姉様の額に丸い何かがぶつかりその衝撃で仰け反り、跳ね返った何か――紅白のボールから赤い光が放たれ、姉様の身体全体を包み込んだ。
反射的にボールをキャッチしようと二人の男性が手を伸ばすも、跳ね返ったボールはいつの間にか書主さんの手の中に戻っている。
「じゃ、そろそろ結界の方は解除しますね。結界の外、異常に気付いた悪魔の方々で一杯でしょうし」
にんまりと笑いながらの書主さんの発言に、先の赤い光が何なのか、姉様にどんな影響があるのか聞く事すらせず、全員が裂け目に消

えていった。

――――――――――――――――――――

……終わった？

全員帰って、姉様に逃げられたけど、一応、無事に終わりましたよね。

「……助かりました」

まるで出待ちでもしていたかのようなタイミングで出てきた書主さんが助けてくれなければ、私は姉様と禍の団に攫われてしまっていただろう。

その後に逃げる事ができたかと言えば絶望的だろうし、私が洗脳でもされて魔術の知識が盗まれでもしたら目も当てられなかった。

仮に、仮に、万が一にも無いだろうけれど、書主さんに何かややこしい企みがあって出待ちしていたのだとしても、ここは素直に感謝するべきだ。

「小猫さん、身体の具合はどう？　一応、さっきので怪我は治った筈だけど」

「はい。……ちょっと不気味なくらい怪我も無くなってます」

今更書主さんのイカレっぷりにどうこう突っ込みを入れるのは何だけれど、アーシア先輩の聖母の微笑並の回復を一瞬とか本当にどうなっているんだろう。

「じゃあ、ちょっとごめんね」

何がじゃあなのか、と問うよりも早く、顔が書主さんの胸板に押し付けられ、背中にガッシリとした腕が回される。

……ちょ。

「え、ちょっと、……え、待って、なんで」

有り体に言えば抱きしめられている。

いや、冷静にそう判断している場合じゃなくて。

「離し……」

「あー、良かった。本当、本当に、良かったぁ……」

腕の中から脱出しようと身体を動かし、文句の一つも言おう。

そう思っていたのに、書主さんの声があまりにも、感慨深げという

か、染み染みとしているというか。
半泣きっぽいというか、凄くほっとしているのがわかる声で、たぶん、私の無事を安堵してくれているのが解ってしまって。
……まぁ、別に、抱きしめられるくらいなら。
そこまで身を案じてくれるのは嬉しいし、そこまで身を案じさせるような真似をしてしまった私にも責任はあるわけで。
「……よしよし」
抱きしめ返して、書主さんの背中をぽんぽんと叩く。
少しだけ恥ずかしいけれど、まぁ、現状を考えれば、これくらいは別に、おかしな行動じゃない。
良かった良かったと繰り返す書主さんの背中を叩いたり撫でたりを数分続けていると、ふと、背中に当たる書主さんの手の中にあるボールが気になった。
「あの、そのボール、何だったんですか？」
「ん、ああ」
落ち着きを取り戻したのか、私の身体を放しながら、書主さんが手の中に握っていたボールを見せてくれた。
さっき姉様の頭にぶつかった時は野球ボールくらいあったそれは、今ではピンポン球くらいのサイズに縮んでいる。
「別に、ぶつけられた側に害があるようなものじゃありませんよ」
「まぁ、そこは信用してますけど」
姉様の事について相談に乗ると行ってくれたのに、いきなり姉様を害しようとはしないだろう、という事は判るのだけれど。
じゃあそのボールは結局何なのか、という問いの答えにはなっていない訳で。
「まぁまぁ、どういうものかは、後々のお楽しみ、という事で」
悪戯っぽく笑いながら逸らかされてしまった。
「あ、そうだ。小猫さん」
「はい？」
「今何か、食べたいものとかありますか？　猫っぽいもので」
「……何か意味がある質問なんですか、それ」

「いいからいいから」
意味深すぎて少し不安だ。
だけど、それが私の害になる問いとも思えない。
「猫っぽい食べ物……」
別に、ペディグリーチャムとかそういう話じゃないだろうし。
私が食べたい、猫っぽいもの……。
……別段、普段から猫っぽい食べ物を食べてる訳ではないのだけど。
「鯖の味噌煮、とか」
「渋い」
「いや、部長の家だと和食出なくて……」
直前のパーティーも冥界系だから和食無かったし。
あ、お味噌汁とかでも良かったかも。
こう、鰹だし香る感じの……。
「それじゃあ……鯖の味噌煮だと六文字になるから、サバミソかな。サ、バ、ミ、ソ、と」
「お味噌汁でも良かったかもしれ……あの、結局何の話なんですか？」
書主さんが小さなボールを弄りながら確かめるようにサバミソと唱えている場面を見て、ふと、なんというか、酷く取り返しの付かない事をしたのではないか、という不安が浮かび上がってきた。
「いや、ね。サトシくんに付き合って旅してるとさ、結構話の流れでリリースしちゃう場面が多くてメンバーが居着かないんだ。だから逆に、相棒枠半分固定で、残りにこういう流動的なメンバーを積極的に登用していくのも面白いかなって」
「誰ですかサトシ」
「十万ボルトの電流を浴びても死なず、時速六十キロ程度の速度で走る十歳くらいの少年かなぁ」
超人ってことしか分からないんですがそれは。
でも、まぁ。
「……なんだか、こういうやり取り、久しぶりな気がします」
「此方は十数年くらいぶりな気がしますよ」

「言い過ぎです」
「そうかなぁ」
「そうですよ」
結界が解ける。
元からお守りの機能で作られていた結界は、お守りの製作者である書主さんにとって解除に手間がかかるようなものでもないのだろう。
ズレた位相が元に戻り、少し離れたところにホテルが見える。
駆けて来るのは眷属の誰という事も無く、パーティーに出席していた眷属に、部長。
オカ研フルメンバーが慌てた様子で駆け寄って来ていた。
「大目玉ですね、たぶん」
「素直に話せば、でしょう？」
「……？　ああ、そうでした。この惨状、禍の団の猿っぽい人がやらかしたんでした。ええ、大変でしたね。おそるべしモンキーマジック」
「適当にざっくりその流れで話してくれれば適当にフォローはしますよ」
「残ってくれるんですか？」
「一応、現状では不法侵入扱いになっちゃうでしょうし、事情を説明して説得するまでは居ますよ」
「それなら、ついでに試合も見て行きませんか？　私も出るので。応援して貰えると、少し、嬉しいです」
「それくらいならいいですよ。あ、その前に少し姿晦ましますけど……」
「気にしませんよ、それくらい。いつものことじゃないですか」
久しぶりの、たぶん、現状一番の友達との、くだらない雑談。
それを、心の安らぎとかそういう重い理由無しに楽しめる程度に、今の私の心は軽い。
凝り固まっていた姉様への心の凝りは取れたのだ。
テロリストに身を窶してしまった姉様と、今後どう付き合っていくか、というのはまだ考えていないけれど。
難しい事は、また後々考えていく、という事で。

今日の所は、部長のお叱りを頑張って聞き流しに行くとしよう。

四十三話　素知らぬ顔の猫、冤罪の猿、囚われの鯖

「大失態ですな」

少し離れた所で、堕天使の偉い人が何やら文句を言っている。

言われている側である偉い方々も言われるがままという訳ではないが、どちらかと言えば聞く側に回ってしまっている。

それも仕方のない事だろう。

魔王様主催のパーティーの警備の隙を突いて、指名手配犯であるＳＳ級はぐれ悪魔の姉様が使い魔を忍び込ませて、挙句パーティー会場付近の森をその仲間である禍の団の美猴なる猿の妖怪が一部更地にしてしまったのだ。

これだけの好き勝手をされたとあっては、流石に何か言い訳をするにも苦しい。

特に付近の森が消し飛んだのもかなりの割合で問題らしい。

――おのれ禍の団の美猴、罪もないパーティー会場付近の森を戦闘の余波で吹き飛ばすとは。

きっとドラゴン波的なあれがそれな感じの凄い仙術ビームとか撃ったに違いないですよ！

猿系だからって調子乗りすぎてるんじゃないですかね！

きっと脳味噌も猿だから次遭遇した時は森を吹き飛ばした事すら忘れてますよ！

挙句その罪を他人になすりつけたり……とんでもない悪党！　悪い！

……ええ、ざっくり纏めると、参考人として同行してくれた書主さんがこういう結論で纏めてくれました。

細かい所まで覚えてないけど、ここまで言葉巧みだと逆に引くレベルでこの結論を信じさせてましたね……。

私も事情を知らなければ信じてしまっていたでしょう。ありがたいんですが、恐ろしい話です。

「ねえ小猫、本当に大丈夫？」

と、考え事をしていると、私の隣で付き添いをしてくれていた部長

が顔を覗き込んできた。
「具合が悪いならきちんと言いなさい？　別に、こんなパーティー無理して出る程のモノじゃないんだから」
「それ、問題発言じゃないですか？」
「私の下僕の健康に比べたら瑣末な事よ」
誰ですかねこの部下思いのカリスマ部長（戦慄）。
とはいえ、部長が普段のおちゃらけた態度を格納して王の器及び母性全開な聖人系悪魔になるのも仕方がない。
何せ、結界が解けた後の私の状態は、明らかに何かしたの大ダメージを負ったであろうと予測できるものだったのだ。
書主さんが偶然持っていたという回復系のアイテムのお陰で肉体的には完全に無傷だったのだけれど、爆発に巻き込まれて襤褸切れ同然になったドレスや、爆風で土埃やなにやでグシャグシャになった髪まではその場で誤魔化す事ができなかった。
「大丈夫ですよ。書主さんが治してくれましたから」
「その本人からも言われてるでしょう？　過信はしないようにって」
「……はい」
言われ、思い出すのは、メディカルチェックを受けた後に念押しして来た書主さんの言葉。
瀕死からでも完全回復できる薬……のようなものだけど、人間の為の薬ではないから、悪魔の体にどういう左様があるかわからない。
たぶん問題はおきないだろうけど、しばらくは誰かに付き添って貰って、何かあったら直ぐにチェックし直すこと。
そんな内容だったけれど。
「……ちょっと、心配し過ぎでは」
悪魔の体というのは総じて人間の肉体よりも頑丈にできている。
聖なるもの全般に弱いという人間には無い弱点こそあるものの、少し薬を取り違えた程度で危険な状態になるほどやわではない。
だから、書主さんの心配はほぼ杞憂になるのだけれど。
「その割に、嬉しそうじゃない」
拳を上げようとして、流石に殴るほどでも無いかと思い直し、ゆっ

くり、考えなおす。
私が、嬉しそうにしているとしたら、何故だろうか。
今回の件は嬉しい出来事がいっぱいあった。
姉様が暴走して主を殺して逃げた、というのが、なんとなく嘘なのだと解った事。
姉様が、私が死にかけの時に必死に助けようとするのだと解った事。
姉様が、一緒に暮らすようにと誘ってくれた事もだ。断ったし、今あらためて言われても断るけれど。
だから、その、なんですかね。
別に、書主さんが助けてくれた事とか、呼び声に応えてくれた事とか、そういう狙ったようなタイミングのあれこれが嬉しいってばかりじゃないというか。
「部長」
「なあに?」
「その笑顔、気持ち悪いです」
先程までの王としてのカリスマが全て剥がれ落ちて、下に控えていた下世話な話に夢中になる歳相応の何時もの部長の顔。
その笑みと来たら、向けられる方としては溜まったものじゃない。
「ふふっ！　小猫最近セメント過ぎない？　私、王よ?」
「不思議です」
「そこまで!?」
「あ、いえ、別に部長が王である事が不思議という訳では……訳では……。……ところで話は変わるんですが」
「そこで?!」
最近、部長のリアクションが激しい。
何が原因だろう、と、これが今とっさに思いついた話の逸らす先なのだけど、言ったらまた騒ぎ出しそうな気がするのでやめておくとして。
「まったく、小猫も少し前に比べてだいぶ言うようになったわね。あの子の影響かしら?」

「そうですね。……そうだと思います」
駒王に入学する前の私なら部長にこんな態度も取らなかっただろうし、こんな軽口だって気安く口には出来なかっただろう。
こういう態度と言葉が気軽に出せるように成ったのは、対等な立場で気軽に話せる相手が出来たからで。
その相手に影響されていないと言えばそれは間違いなく嘘になるし。
影響を受けたことを悪いだなんて思っていないのだから、否定する訳がない。
私は、今の私を、彼との出会いで生まれた私を、嫌いじゃあ無いのだから。
「所で、件の彼は？」
「一回元の世界に戻るとか言ってました」
禍の団襲撃に関する証言を終えたと思いきや、直ぐに姿を眩ませてしまった。
鬼畜眼鏡の聖剣使いと同じように空間に孔を開けて消えていったけれど、聖剣使いの間ではあの移動方法が流行っているのでしょうか。
そして聞いてきた部長はといえば、私の返答に大きくため息を付き、力なく頭を振った。
「本当は、気軽に行き来出来るものじゃないのだけど……。一応、此方の法律というものもあるのだから、友人として注意してあげなさい」
「わかりました」
そういえば領地問題とかがあるから地球に戻った事は言わないで欲しい、みたいに言われてましたね。
忘れてうっかり全部言っちゃいましたけど、別に問題は無いですよね。
話を聞く限りでは事故の様なものですし、冥界側だって書主さんを無理矢理に罰する事も無いでしょう。
迂闊に敵対するには、書主さんの戦力は未知数過ぎますし。
たぶん、彼が冥界に現れた、という事実も、一部の間で内々に処理

されて広まらない。
　せいぜいが口頭での注意くらいでしょうか。
「ところで……名前で呼ぶ事にしたのね」
　ニマニマと笑みを浮かべる部長。
　部長のこの態度も書主さんへの処罰が行われないだろうという確信を抱かせる。
　普通に考えて、悪魔の側に付いている訳でもない聖剣使い、しかも堕天使幹部を屠殺できる様なレベルの聖剣使いが冥界の貴族の土地に不法に侵入したとなれば、付き合いのある私にだってもう少しキツ目に忠告しておくように言う筈だ。
　なんだかんだで、部長も書主さんへの警戒心を緩めつつあるのかもしれない。
「……まぁ、友達ですから、名前呼びくらいしますよ。部長は、イッセー先輩に名前で呼んで貰わないんですか？」
　ふとした疑問を口にしただけで、部長は笑みを凍りつかせて楽しげな雰囲気を急速に沈め初めてしまった。
　いい感じの友人である私と書主さんと違って、部長とイッセー先輩の関係は複雑で面倒くさそうだ。
　何やら自分で自分の体を抱きしめながら、私の耳でも聞き取れない小声でブツブツと呟き始めた部長を見ると、恋愛というのは実に難しいものなのだな、と、そう思う。
　ホテルの窓から見える冥界の空を見上げる。
　この怪しい色の空の下に居ない彼なら、こういう恋愛事にも、何か実のあるアドバイスができたのかもしれない。
「でも」
　なんとなく。
　今、彼の口から、惚気話を聞きたくないな、と、本当になんとなく、そんな考えが頭の片隅に浮かんだ気がした。

　結局、日影さんが安心して此方を離してくれるまで、数日の時間を要した。

此方が外の世界で結構な年月を過ごしたという事はなんとなく察してくれたようで、そこら辺のケアも含めて、ということなのかもしれない。

……外の世界で起きたこと、やったことなどを寝物語で話す内に、何度か機嫌を損ねる場面もあったけれど、最終的に日影さんは寛大な心で許してくれた。

何だかんだで色々な人と出会い付き合いを重ねた長い長い夏休みだったけれど、この無限に等しい包容力はやはり日影さん特有のものだろう。

輪ゴムちゃんこと安心院ちゃんは、こう、包容力を発揮するタイプと見せかけて少し違うというか……いや、此方が心の弱った所で手を差し伸べたからこその反応だったのかもしれないが。

タヌ太郎ツネ次郎まん丸、そして深里ちゃんに九魅ちゃんにも心配をかけてしまった。

……と言いたいところだが、全員此方が無事に帰ってくる事を半ば以上確信していたらしく、それほど激しく心配はされなかった。

信頼されているのは良いことだし、特に九魅ちゃんのリアクションが然程激しくなかったのも嬉しい。

此方の体感ではかなりの間が開いているとはいえ、あんな事をした後にそれらしいリアクションをされてしまえば、なんとなく意識してギクシャクした関係になってしまいかねない。

貴重な気兼ねない友人を、成立したとして継続できるか怪しい感情で失ってしまうのは此方の求める所ではないのだ。

みんなとは復活のギオ、吸血ニンジャ熊丸太祭りのせいで夏休みを一緒に満喫出来なかったので、全員のスケジュールとかを確認しあって、改めて遊びに行けたらなと思う。

だが、その前に片付けておくべき問題を片付けて置いたほうがいいのかもしれない。

あの雅なる奇妙な程に不死性の高い吸血鬼。

ギオを回収し復活させたあの吸血鬼の出処は知れている。

生体改造を行える神器、聖杯。

この神器を用いて何事かしようと企んでいる組織は、此方の精神的な余裕が切れた頃にでも、きっちりと借りを返す為に使わせて貰う事にしよう。

「さて」

微妙に残っていた夏休みの宿題も片付け終えた。

あと数日で、応援に行くと約束した小猫さんの試合の日だ。

無許可での敷地内への転移は向こうでは違法とのことだが、今度は不法侵入にならない様に領地の外に出るように行けば問題ない。

長期滞在にならないどころか、ほぼ日帰りなので荷物に関しては考える必要もないだろう。

一つ問題があるとすれば……。

「これかな」

机の上に転がしてあるモンスターボールに目をやる。

此方が手を加えるまでもなく文字列に変化しないこの外の世界の素敵グッズは此方のお気に入りだ。

裏にある文字列……つまり、この絵に込められた設定を読もうと意識すれば読む事はできるが、この世界の道具の様に文字の塊にしか見えないという事も無い。

スーパーボールやハイパーボール、その他様々なバリエーションがあるのだが、やはり此方としてはこのシンプルな紅白のモンスターボールをおすすめしたい。

「できれば、レギュラーだけでも持ってきたいけど」

こないだ捕まえた一匹をそのまま放置しておくのは危険だ。

多彩な技術を習得しているようだし、自力で脱出して来かねない。

最終的にリリースするとしても、せめて指名手配のきっかけになった件だけでも物的証拠込で説明できるようにして、減刑の準備をしてからで無ければ。

それまでは此方のポケモンとして手元に置いておきたいけれど、もしも持ち歩いている時に自力で脱出されても困る。

この部屋から出れない様に細工はしたけれど、騒がれても困るし、母さんに迷惑をかけてしまう。

監視を置いておくとしても、そういう器用な真似が出来るのは臨時メンバーには当然居ないし、レギュラーメンバーでも一匹しかいない。

「……こうやって、ポケモンを持たないで歩き回る日常に戻っていくんだなぁ」

モンスターをけしかけられて、襲い掛かってきたモンスターを素手で引き裂くと怒られる文化はこの世界には存在しない。

調教したモンスター同士を道端で戦わせる奇妙な文化が無い以上、これから此方の意識はポケモンたちからどんどん離れていくだろう。

勿論、彼等も貴重な文字列でない仲間ではあるのだけれど。

これから意識を向ける頻度が少なくなる事がわかっている相手をこき使う、というのは、心情的に複雑なところだ。

「一応、簡単な説明だけでもしておこう。ボウイ」

呼び声にモンスターボールが独りでに開き、一匹のポケモンが静かに姿を現す。

全身血のような赤とそれにまだらに混ざった薄い黄金の金属結晶質、ぱきぱきと音を立てながら体の材質と同じ枝をあちこちから生やし、背の羽根すら動かす事無く地面から少し浮いている、色違いのハッサムだ。

「此方の後ろで控えて。逃げようとしたら『優しく』『止めて』な」

こくりと頷きながら、脳の底を爪でひっかくような不快な金属の擦過音に似た鳴き声で答えるボウイ。

なつき度及び忠義マックスなだけあって実に頼もしい。

そして、件のボールを手にして、中身を解放する。

ソフトボール大に膨らんだボールが紅白の上下で分かれ、赤光と共に一つの影が躍り出た。

正しく獣そのものといった動きだが、如何せん遅い。

破壊的な威力の込められたオーラを纏った一撃はボウイが視線を向けるだけで掻き消え、素早く窓から逃げようとしたその影はボウイが積層構造の鋏を向けるだけでびたり、と、空中に縫い付けられる様にして動きを止めてしまった。

驚愕の表情、視線は恨みがましく此方に向けられているが……。
「いや、お見事。ここで逃げの一手が打てるのは素直に良い判断力だと思いますよ。無駄ですが」
椅子に座ったままぱちぱちと手を打ち鳴らして賞賛の声を送る。
基本的に、モンスターボールの中というのは居心地が良く出来ている。
だから、傷めつけた上で捕らえられたポケモンも何だかんだで言うことを聞いてくれるように成るわけだけれど、それを乗り越えて、ボールから出された直後に捕獲者に牽制の攻撃を放ち即座に逃げ出そうと考える事が出来るのは、高いポテンシャル以上に多くの経験則が絡んでいるのだろう。
「そう警戒なさらず。しても意味はありませんし、どうせしばらくしたら解放させて頂きますから。だから、少し、『お話』をしませんか？
――――サバミソ」
「誰がサバミソよ!!　私にはサバミソっていう立派な……あれ？」
忍者特有の完全で幸福な身体制御能力によって組み上げられた教科書通りの温和そうに見える笑顔を向け、元の名前を思い出せず首を傾げるサバミソに対話を求める。
夏休みも残り少なくなってきた夏のある一夜。
友人の試合を後顧の憂い無く応援しに行くために、此方は無駄とわかりつつ、挿絵から徐々に文字列になりつつある自由気ままな頑固者の説得を試みるのであった。

体育館裏のホーリー
四十四話　残暑、秋を待ちながら

夏休みが明け、季節的には未だ秋というよりも夏に近い。
青々と茂る木々、瑞々しい土に、熱をゆっくりと吸い続けるアスファルト。
開いた窓から流れ込む風に乗るこれらの香りはしかし、夏真っ盛りという程に濃くも無く。
虫の声は未だ夏のものが多く、夜に鈴虫の声を聞けるまでは今しばらくの時間が必要になるだろう。
夏の命はゆっくりと休み始め、秋の虫は動き出す準備を始める静かな境目の季節。
だが、それも季節に命を委ねる自然の動物に限った話だ。
夏休みという長期の休みを終えたかと思えば、九月のメインイベント、体育祭が待ち構えている。
クラスメイト達が喧々諤々と出場種目を取り合う声を聞きながら、なんとはなしにモンスターボールを手の中で転がす。
なつき度を上げるための持ち歩きは基本なのだが、そうでなくてもこのボールの手触りは嫌いではない。
「暇ですか」
「そりゃね」
夏休み明けの席替えで偶然（カタギのちょっとした細工には目を瞑るのが優れた忍者である）隣の席になった小猫さんに短く答える。
コミュ能力に優れているという訳でもない此方ではあるが、クラスメイトとの親睦は出来る限り深めていきたいと考えている。
だからこそ、こういう場面では少なからず前に出てどの種目に出るか、なんて事を主張するべきかな、とは思うのだが。
如何せん、この身は忍者。
一般人を置き去りにする身体制御能力を持つ、一種の超人である。
どれに出たとしても活躍しようと思えば活躍できるし、何をやるに

しても多大な手加減が必要になる。
体を動かすのは嫌いでもないし、身体能力に制限を掛けることは今更何も文句はない。
無いが、疎外感は感じてしまうのだ。
親との繋がりを確かにするために選んだ忍の道ではあるが、こういう時には少しだけ不便さを感じる。
寂しさ、というべきか。
だからと言って、よその世界の逸般人達と一緒くたにするつもりも無い。
子供向けホビーをかざして必殺技を呟くだけで爆発と共にチンピラを吹き飛ばせる様な逸般人はそう転がっていないのがこの世界の現実だ。
この不満は、此方の選択の末に生まれたどうしようもないものだ。
同じ目標に向けて情熱を滾らせる事のできない無為な時間も、甘んじて受け入れよう。
たぶんその内クラス対抗の合唱コンクールとかもあるだろうし、そういうイベントに期待したい。
「小猫さんは何に出る？」
「私も、特に狙ってるものは無いので」
小猫さんは、単純に体育祭というイベントにそこまで積極的になる理由が無いからか、言葉からやる気は感じられない。
まぁ、実際大体の学生はそんなものだろうと思う。
クラス一丸となって、というのだって、単純にクラスメートと集まって騒ぎたいが故の方便の様なもので、本当に体育祭に情熱を燃やしているのは一部の連中だけだろう。
孤立している訳ではないけれどクラスメートと積極的に絡みに行くタイプでない小猫さんならこれが自然だ。
「球技大会は楽しかった気がするんだけどなぁ」
「あの楽しみ方は問題有りますよ」
何を言うのか。
文系の部活が前向きに体育系イベントを楽しむあの在り方は、全力

を出せない此方にとって実に参考になるというのに。
　映研が編集に編集を重ねて作った球技大会の映画なんかも度々画面が大写しの挿絵になるレベルで面白かったし、非運動部にとって球技大会を楽しくしてくれるのは間違いなく文系部の連中だろう。
　まぁ、テニヌしていたグレ森先輩と生徒会長が最終的に独自のテニヌリーグを作ろうとする為に留学することを決意し、アフリカ！　の大きな書き文字と共にグレモリー先輩と会長が顔を突き合わせるクソコラで終わるアストロ系尻切れトンボだったのは頂けないが。
　たぶん、本人に見せたらキャラ崩壊するレベルで爆笑するか笑顔でテープを消滅させるかの二択にしかならないだろうけど、自主制作映画なんてのは大体そのようなものだから問題はあるまい。
　ちょっとカルトな方が作ってる方も楽しいのだろうし。
「徒競走で殺傷能力の無い地雷仕込むとか……一発踏むと＋１００点、一位通過で２００点みたいな形で勝ち方を選べる感じのルールをねじ込んで貰って」
「生徒会に直談判して説教されれば良いんじゃないですか？」
「やですよあそこ知らない人達がいっぱいいるし……」
「子供ですか」
「子供ですよ」
　逆にエグリゴリの本社ビルレベルなら、知らない人が大量にいるのが前提だから開き直れるのだけれど。
　生徒会の面々は多少顔を知ってるだけにどう接していいか分からないというか……。
　これ、社会に出る前に直した方が良いよなぁ。
　ほぼ就職先が確定しているとはいえ、万が一切られて行く宛が無くなった場合、普通の忍者として草をする可能性だってあるわけだし。
　いや、忍者としての資格は取得してるから、逆に錬金術系の仕事を探すのもありかもしれない。
　今度母さんに相談してみよう。
　いや、入学一年目の二学期初頭に考える事でもないか……。

彼は自分の事を子供だという。
言われてみれば、別に彼は大人びている、という訳でもない。
例えば今、本気を出せないが故に積極的になれない体育祭の話し合いに混ざれず、手の中で明らかに授業に使わないであろう何かを転がしてふてくされている様は、正しく子どもと言っていいだろう。
じゃあ、どういう人を指して大人と言うのか。
……こんなことを授業中、しかも体育祭の出場種目決めの話し合いの最中に考えている辺り、私も書主さんの事をどうこう言えるほどまじめに取り組んでいる訳ではないのだろうけれど。
ただ、最近ふと考えさせられる事が多いのも事実だ。
私の周りには、これぞ大人、という大人が見当たらない。
一番近い位置に居る大人となれば魔王様やそのメイドであるグレイフィア様なのだろうけれど、あのお二人は大人というよりも魔王とメイドとしか感じられない。
それ以外の人付き合いと言えば眷属のみんなと王、部長くらいしか居ない訳で。
「大人って、なんですかね」
大人と思われる、少しだけ私達よりも年上で社会で働いているのだろうな、と思う悪魔の方（と、一応敬う形にしておいた方がいい立場なのだと思う）が、アーシア先輩にちょっかいを出して来ている。
が、あの振る舞いを大人である、と言い切るのは躊躇ってしまうし、あれも大人のやり方なのではないか、という諦めもある。
大人の経済力を利用しての怒涛のプレゼント攻勢、相手が相手ならコロッと行ってしまうのではないかな、とは思う。
しかし如何せん、アーシア先輩はイッセー先輩に心の底から惚れ込んでいて、他から好意を示されても戸惑うばかりだ。
……そんなアーシア先輩の表情を見ても引かない辺り、大人かどうかは置いておくとして、人格的に相性は良く無さそうなのだけれど。
「人格面で『完全に大人』になるなんてそうそう出来る事じゃないって」
「書主さんも見たことはないですか、大人」

「母さんも父さんも、あれで子供っぽい部分はいっぱいあるし……いや、心当たりが無い訳じゃないんだけど」

ほほう。

重度のマザコンかつ重度のファザコンである書主さんをして、ご両親を差し置いて『大人』に見える相手が居るとは。

「少なくとも、私の知ってる相手じゃないですよね」

共通の知り合いには人格どころか年齢とか社会的立場での大人すら少ない。

というか、書主さんがそこまでべた褒めする相手なら、流石に私だってこの人大人っぽい、くらいの印象は抱けているだろうし。

「んー、小猫さんが人生に迷って、知らない街の場末のバーで管を巻いたり、チンピラ相手に八つ当たりしてヘマこいたりしなければ、遭遇はしてないと思う」

何ですかその迷える主人公やその仲間を舞台裏で導いて立て直すお助けキャラ。

大体、

「そんな状態になるならその前に書主さんのとこ行きますよ。お菓子持って」

「来る時は電話かメールで先に知らせて下さいね。片付けとかしないとだから」

「いやらしい……いやらしくないですか？」

「そういうのは最初から見えないとこに置いてるし」

「そこー、イチャつくのは休み時間か放課後にしなさーい」

いや、別にイチャツイてる訳ではないし、この程度でイチャつきとか言われたらこのクラス、クラス内カップルが大量に発生している事になりかねない。

……無いですよね？　いくら夏休み明けって言っても。

ちらりと視線を書主さんに送る。

「いや、夏休みの間に出来たクラス内カップルなんて、せいぜい……ひのふのみのよのいつ……あれ？　クラス内で合コンでもしてたのかな？」

「教室の中が熱いと思ったら」
発情期でもあるまいに。
……と、思ったけど、夏は情熱の季節と言うし、一般的な学生となれば、それこそカップルが成立するようなイベントは目白押しなのかもしれない。
こう、海とか山とかレジャー系の土地で見た異性は魅力的に映るって言いますし。
え？　夏祭り？
夏祭りは友達とも行くでしょう？
行くんですよ！　一緒に浴衣着て二人で夏祭り行って帰りにプレゼント貰うくらい……ほら……あの、ねぇ、友達同士なら、良くある……よく有りますよね？
「なんだかクラスメイトから生暖かな視線が小猫さんに向かってる気配が」
「気のせいじゃないですか？　体育祭の話し合いの途中にまさかそんな……」
「そういえば縁日に小猫さんと一緒に行ったかって聞かれたんですけど、あれってやっぱり適当にはぐらかしてた方が良かったかな」
「い、いや、大丈夫、大丈夫ですよ、やましいことなんて一つも無いんですから……」
「まぁあの縁日、結構クラスメイトとすれ違ってたし、写メも取られてたから今更なんだけど」
「わざとやってます……？」
「あ、わかります？」
この爽やかな笑顔……！
羞恥と怒りを込めて殴りかかろうとした所でまたも委員長に止められてしまった。
そしてふて寝している間に私と書主さんの余り物コンビが二人三脚に割り当てられてしまうのでした。
……いえ、別に、不満があるわけじゃないんですけど……。

そんな訳で、恐らくクラスメイト達の目論見通り、此方と小猫さんが二人三脚で一緒に出場する運びとなった。

身体能力的には問題なくとも、タイミングを合わせるという面ではある程度の練習が必要だろうという事で、現在は小猫さんと此方の暇な時間を調整している。

早朝集まって校舎裏とかを使って練習すればいいのではないか、という、兵藤先輩のありがたいお誘いに乗るという手も無いではない。

何しろ、此方は最近、朝の日課をサボっても問題ない程度には精神的余裕がある。

というのも。

「いや、いや、やっぱり未開地というのは楽しいものですねぇ」

現代日本ではそうそう遭遇する事の叶わない人種、所謂野盗というものに分類されていた塗料の中、大きく伸びをする。

深呼吸して肺に入ってくる空気は何やら瘴気を含んでいて大変体に悪そうだが、取り込む寸前に地球の大気と同じ組成に作り変えている為に此方の体を侵す事はない。

ぱちゃぱちゃと塗料でできた水溜りを渡りながら、ゆっくりと目的地に向けて歩く。

「確か、こっち辺でしたっけ」

冥界という土地は、現地人――悪魔の手の付けられていない未開地の様な場所が妙に多い。

インフラが整備されきっていないというか、文化レベルが実際低い。

教育も行き届いていないし、孤児も多く、その成れの果てであろうゴロツキや犯罪者が普通に徒党を組んで悪事に手を染めたりするし、そういう輩が割りとゴロゴロ転がっている。

つまり、身なりを綺麗にして、少し見目のいい女性に化けてしまえば、あちらから斬り潰されに来てくれる。

ほんの少し扇情的な格好をしておくとなお良い。

海綿体がビンビンに膨張した分だけ、斬り刻める量も完成する塗料の量も増えるというものだ。

結界を貼る手間も必要なく、しかも場合によっては近隣住民に感謝されたりもする。

移動に少し手間が掛かるので普段から来ようとは思わないけれど、ちょっとした用事で来ざるをえない時にはそう悪くない場所かもしれない。

「サバミソ、この辺りの風景に見覚えとかあります？」

此方の呼びかけに、背の低い群生する植物の文字列の塊の中で『伏せ』をしていたサバミソが起き上がる。

顔形、髪型と本体は一切いじっていないが、服装に関しては着物の構造を見事に無視した崩れる前提の着崩し着物ではなく、常識的な範囲でのほんの少しセクシーな雰囲気を醸し出す洋服に身を包んでいる。

捕まえる前とリリースした後ならともかく、現在此方の手持ちポケモンである以上、あまり恥ずかしい格好（痴女的な意味で）でぶらつかれても困るのだ。

もっとも、現時点では格好もクソも、ただの文字列の塊に過ぎないのだが……、まぁ、イカれた服装よりは真っ当な服装の方が与し易い一般人に見えやすいので、何のメリットもないという訳ではないのだが。

「昔の事過ぎて、覚えてないにゃん」

素っ気ない言葉と共に、文字列の頭部にあたる部分が蠢く。

外側の縁の変化から察するに、顔を背けた、というところだろうか。

【ふい、と顔を背けしらを切りながら、思い出すのは主を殺し、追手から逃げて暫くの頃の記憶だ】

【覚えていない、という言葉はある意味では嘘で、ある意味では本当の話】

【人里でない森の中、整備されているとは言いがたい荒れた道】

【それは数年の年月を経ても全く変わらず元と同じ情景を保っているはずも無く、仮に当時の記憶がはっきりしていたとしても判別は難しかっただろう】

【だが、今の主（勿論、【検閲済み】……サバミソが心から認めている

訳でもないし、主の方も一時的な仮のものであるとしている）への悪戯心と、日に日にわかりやすく削れ始めている反抗心による抵抗から、ある情報を伏せているのも確かだ】

【その情報とは、植生】

【嘗て殺した主は様々な方法で眷属やその血族を強化していたが、その過程で様々な材料を必要とし、或いはそれは一般には流通しない、意図的に栽培した場合法に触れるものも多く存在した】

【つまり、偶然森の環境が整い禁止薬物の材料と成り得る植物が育ってしまった、という名目の元、カモフラージュされながらも人工的に栽培されていた幾つかの植物】

【真っ当な自然環境ではそうそう群生する筈のないその植物が多く目に入る植物は、嘗て主に飼われていた頃に身を置いていた場所とそう遠くないという事を示している】

【もっとも、自分を信頼しきっていない筈の使い魔である筈のサバミソに案内させるほど冥界に詳しくない今の主に、そんな細かな違いが判るわけはないので、説明しない限り気付く事はないのだが】

なるほど。

植物の分布か。

特殊な薬の製造なども仙術の内に含まれる筈だし、そういうところにも目が行くか。

此方も地球の植物でなら似たような真似ができるのだが、やはり冥界に詳しく、なおかつ当時の主が密かに森の中に紛れさせながら栽培させていた植物に関する知識を持っているサバミソを連れてきたのは正解だったらしい。

「そうですか。まぁ駄目だったら駄目だったで、当時の新聞なりなんなりを参照して殺された主さんの事を調べればいいだけの話ですしね」

ぶっちゃけ、それが一番早いのだが、図書館などを利用して変に足がつくのも気持ち悪い。

そもそも早く済ませたいなら魔王さんなりなんなりに話を聞けばすぐ済む話だ。

「にゃあ、なんで、こんな真似してるにゃん？」
「ん……そうですね、一応、小猫さんと話している時に、前々から思ってた事があるんですよ。で、実際貴女を見てみて、ああ、これはどうにかなるな、と思いまして」
「何言ってるかわからないにゃあ」
「少なくとも、小猫さんや貴女にとって悪いことではない、という事だけは保証しますよ」
「……今更そこを疑うつもりも無いにゃん。白音とは仲良くやってるみたいだし、扱いも悪く無いしにゃ」
　常識的に考えて、突如として謎の球体に押し込められて、名前を奪われて、扱いが悪く無いというのは何の皮肉だろうか。
【皮肉、という訳でなく、これはサバミソにとっての正直な感想だった】
【弱った所を捕まえられ、妹の近くに居ながら会うこともできない】
【だが、今の仮の主が何をしているのか、段々と朧気な全容が見えてきたサバミソにとって、今の主は力の強大さに反して妙に道徳的で理性的に映る】
【社会的でもあるのだろう。目的の事を考えれば恐らく、今の調査をほっぽり出して、コネクションのある魔王にでも直訴し、或いは脅しつければいい。それができるだけの力がある筈だ】
【油断ならない相手ではある。異常な力の使い手でもあり、何より自らの力を隠蔽する術に長けている当たりは胡散臭くもある】
【だが、それらが自分や、大事な妹を害する事に使われる事は無いだろうという確信が持てる程度には、その人間性は把握できたつもりだ】
【彼は情の人だ。勿論、情を向ける相手を選ぶ事はするだろうが、その基準も然程厳しくはないのではないかと思える】
　瞼を閉じる。
　斬り潰し塗料にできる相手が居ない以上、瞼を開け続ける理由など無いのだ。
　……決して、なつき度の上昇を超えるレベルで高評価である事に、妙に背中が痒くなってきたからではない。

「……」
「んにゃーん？　あ、照れてる？　照れてるのにゃ？　毎晩毎晩恋人とあそこまでやりまくっておいて、可愛いところもあるみた」
「ボウイ」
遮るように旅パの名を呼ぶと、ボール操作を介さず自力で赤い結晶に包まれたハッサムのボウイが飛び出してきた。
こいつはその兇悪な外見とは裏腹に穏やかで紳士的な性格をしているので、勿論出てきた途端に何かに襲いかかるなどという事もなく、静かに佇んでいるだけだ。
なので、サバミソが台詞を中断してその場で仰向けに寝そべり腹を見せて完全降伏野生敗北飼い犬バンザイ大服従のポーズを取ったことには何の因果関係も存在しない。
サバミソは煽り癖こそあるものの、基本的に臆病なのだ。
哺乳類というのは痛がりで臆病なのだが、まぁ、野生で生きていく上では大事な生存戦略なのでどうこう言うつもりもない。
「待つにゃん、待つにゃん先輩。私は主にすっごく忠実なしもべにゃん。神でも悪魔でもブッダでも今夜の夜食でもなんにでも誓っていいから大回転コースは勘弁するにゃん」
「――――」
金属の軋むような独特な鳴き声には呆れが含まれている。
繰り返すがボウイは紳士的だし穏やかな気性をしているため、別に虐待も暴力も何も無い。
一度サバミソが『どれくらいのものか試させてもらうにゃん』とかいう死亡フラグを丁寧に立てた後に軽めの模擬戦を一度行わせただけなのだ。
ボウイは一切直接的に怪我をさせるような攻撃はせず、中空の一点に座標固定した上で全方向にぐるぐるとサイコキネシスで回転させ続けただけだ。
勝手に突っかかって勝手にトラウマを手に入れるとか器用な猫だと思う。
「そろそろ夜食の時間だから呼び出しただけですよ」

「……そういうとこ、やっぱり信用しきれないにゃあ……」
「――――」
「ひぇ……」
「いいよボウイ、気にしてない。信頼は時間を掛けて勝ち取るものだし、そういう風に取られる振る舞いをした此方も悪い」
「――――」
キシ、と、小さく頷く音だけを発してその場に着陸するボウイ。
習うようにして座り込むサバミソ。
位置的には此方ともボウイとも等しく距離を取っている。
此方に意識させないように一定の距離を保っているのは彼女の警戒心の現れだ。
記述に見える内心を誤魔化している、という訳ではなく、此方の行動に一定の理解を示しつつ、それでも最低限の警戒心を残しているのだ。
妹である小猫さんと違い、彼女は野良猫気質なのだろう。
「一応、簡単な弁当と、キャットフードと、ポロックがありますけど」
「青かピンクなら食ってやってもいいにゃん」
「……弁当、割りと多めに作りましたし、毒も入ってないですよ？」
「？」
あ、駄目だこれ、もうポロック食べるのが自然な感じになり始めてる。
そろそろ証拠を纏めて魔王さんに『お願い』して解放してあげないと、ニックネームではない種族名に聞こえる鳴き声か、安っぽい電子音声の組み合わせ染みたノスタルジックな鳴き声を発するようになってしまうかもしれない。
今日はもう遅いし、明日も学校があるから、もう少しだけ調査したら帰らなければいけないけれど、今週末は泊まりがけで調査を一気に進めたほうがいいかもしれない。
日影さんにお願いして手を貸してもらうのも視野に入れておくべきか。
「もうちょっとだけ、頑張るかな」

頑張りすぎる必要はないが、サバミソが元に戻れなくなっては意味が無いので、適度に。

学業や日常生活の妨げにならない程度に、がんばろう。

「――――」

「にゃ、にゃ」

月明かりすらエネルギーに変換しつつ静かにポロックを喰むボウイと、かしかしと知性の感じられない咀嚼音を出しながらポロックを齧るサバミソ。

本格的にサバミソがポケモンの一種と化してしまったら、繁殖の為に実験用のメタモンを解凍しないとなぁ。

日影さんが作ってくれたおにぎりを頬張りながら、なんとはなしにそんな事を考えた。

四十五話　青春、度が過ぎて

ポロックと呼ばれるお菓子のようなもの（木の実を複数組み合わせて作らえており、見た目よりも素朴な味がする）を齧りながら、サバミソは優れた五感で周囲の状況を確認する。

獣道よりはまだマトモといった程度に整えられた人通りの少ない道の脇、星明かりだけが照らす薄暗い道の中、二匹と一人、もしくは二人と一匹が座り込み、思い思いに食事を口に運んでいる。

野営と言えば多少なり火を起こしたりするものなのだが、今の主は夜の活動においても火をあまり必要としないらしい。

瞼を閉じ、恙無く食事を済ませる姿は自然体そのもので、視覚に頼らずに生活する事に慣れきっているのが良くわかる。

改めて、今の仮の主の姿を見る。

長く、癖のない黒髪を背まで伸ばし、腰に大太刀を佩き、白いぴっちりとした軍服の様な服に身を包み、しかし豊満な胸の膨らみが兇悪なまでに軍服の生地を張り詰めさせている。

鼻筋の通った和の美を感じられる、しかし、よくよく見れば造形の端々に幼さが感じられる、将来美女になる事が約束されているかの様な美少女。

美少女……に見えるが、男だ。

しかも女顔の男が多少の化粧を施して女装しているというわけでなく、顔面まで完全に別人の皮をかぶっているかの様な『変装』は、主の元の姿を完全に覆い隠している。

趣味……という訳でもないだろう。

この宛のない調査を始めた頃はもう少し大人しめの、顔と体の輪郭を隠す程度の軽い変装だけで済ませていた。

しいて言うなら……、この辺りの野盗の類いの趣味だろうか。

襲われているところに遭遇した、或いは襲われた後にアジトと思しき場所に監禁されていた被害者達の特徴を調べていった結果導き出された『最も襲われやすい』人相と格好である、らしい。

普通に考えれば、追い剥ぎ野盗の類が出る様な人通りの少ない道を

歩く時に、態々目立つ、それも相手が襲いかかりたく成るような格好をして行動する、というのには、何かしらの理由がある。
例えば出没する野盗が何かしら、此方の必要とするような情報や物品を所持している場合。
例えば、この辺りに出没する野盗を懲らしめる、というか、討伐するような依頼をどこからか受けている場合。
だが、この男には勿論そんな理由は無い。
少なくとも本人から聞いた話ではそれは間違いない。
というか、襲い掛かってきた野盗に対する行動を考えれば、何をするためか、というのは聞かなくても理解できる。
彼は殺人狂だ。はっきりと言ってしまえば。
……でも。
それだけではないだろうにゃ。
少なくとも、サバミソにはそう思えた。
ほんの僅かな、一月にも満たない、彼の生活を垣間見ただけではあるが……。

空中に固定された状態から部屋の中に連れ戻され、サバミソの頭の中が疑問と危機感で一杯だった。
何かがおかしい。
サバミソ、鯖味噌とは誰だろう。
少なくとも名前ではない筈だ。
日本への滞在期間も長く、鯖味噌というのがこの国の伝統的な料理の一種である事は知っているし、それが誰か、或いは何かの名前に使われる事は無いという一般常識も知っている。
だが、そう、それは知っているのだが、知っているのだが……。
「あれ、私の、名前……」
サバミソだ。
たぶん、漢字ではなく、カタカナでサバミソ。
間違いない、間違いない筈、間違いない？
もっと、この猫？のサバミソは、白音の姉であるサバミソは……。

何か、何か大事な事を忘れ去っているのではないか、そんな不安が頭の片隅から離れない。

いや、ギリギリで離れていない。

離してはいけない、そんな思いがある、気がする。

「うーん……なるほど、魔術だの仙術だの呪術に似たものが無いという事は無いでしょうしね。聞けば、貴女は仙術や妖術、その他の術にも長けているという。対抗術の十や二十は仕込んでいてもおかしくはない」

「何、何を、言ってるにゃ」

対抗術、何に？

違和感、そう、違和感だ。

この違和感の元がそれで、頭の中にある痒さにも似た感触の原因がそれだ。

だから、そう、その『対抗術さえ消してしまえば』……。

「ああ、無理に消さなくていい……いや、いいか。『その対抗術は維持し続けて下さい』」

「にゃあ。……！」

命令に一つ頷き実行し、思考が一気にクリアになり、総毛立つ。

その言葉はお願いという形を取っているようで、明らかに命令だった。

そして、自分はそれが命令であるという事に気付きながら、何の疑問も持たずに従ってしまった。

それに違和感が無い。

今この瞬間ですら、『それが何かおかしな事なのか』と思ってしまう。

「ふぅ……ん、なるほど。抵抗できる方はこうなるんですね。やはり妖怪の類は一味違う」

瞼をしっかりと閉じたまましげしげと眺めるような仕草を見せる男。

サバミソはこの男の事を知っている。

禍の団の方ではしっかりと調査が行われていた為に、彼の個人情報

はある程度までは手に入っていたのだ。
サバミソはその資料に珍しくしっかりと眼を通していた。
妹に色々と世話を焼いている、という話を聞いてもいたし、純粋にこの男……この少年のこれまでの行動を考えれば、危険視してしかるべき相手であると考える事ができたし、猫?としての本能が彼に注意を向けなければならないと教えていた。
……他の大半の禍の団のメンバーと違って。
「にゃは、貴方も、なんだかとんでもないヤツ……にゃん?」
そう、とんでもない相手の筈だ。
神器や錬金術によるコピーではないオリジナルの聖剣を大量に操り堕天使の幹部を殺害。
無数に湧き出る中級悪魔に匹敵する戦闘力を持つ禍の団の魔術師達を半壊させ、転移の魔法陣を乗っ取りアジトの一つを潰されもした。
挙句の果てに、妹である白音に未知の魔術を教えこんだのもこの少年であるという。
弱い筈がない。
脅威でない筈がない。
だというのに。
「……本当に、凄いやつなのかにゃ?」
「さぁ、凄いの基準がどこかもわかりませんので、なんとも」
小さくもそれと判る露骨な愛想笑いを浮かべて逸らかす。
その姿は余りにも自然で、何かの脅威に備えているようにも、何かの力を持っているようにも見えない。
いや、そう見えない訳ではない。
服の上からでもわかる、人間の肉体を効率的に動かすのに適した機能的な筋肉の付き方、ふとした動きから見える体幹の安定。
それに、先日の白音との喧嘩に割り込んできた時もそうだ。明らかに常人が可能な動きでは無かった筈。
だが、最終的に、彼は、どうみても、どこにでも居る一般人の少年であるとしか感じられない。

脅威である、と、『感じさせてもらえない』という脅威。
今のこの思考すら、理性的に分析して辛うじて結論を飲み込めては居るが、どこまで持つかと言われると疑問だ。
こいつの能力は危険だ。
古から生きている堕天使を殺すだけの力がある。
こいつの行動は危険だ。
殺しても良いだろうと判断したが最後一切の躊躇いなく殺す。
間違いない、間違いないが……。
『こいつは何処にでも居る一般人だ、なにかやろうとしても、自分ならどうにでもできるだろう』
そう思う。本心から。
絶対におかしい筈なのに。
こいつの使役する使い魔にすら勝てそうにないというのに。
結論に至るまでの計算と、胸に収まり納得を与える結論がまるで異なる。
「にゃあ……」
へにゃり、と、尻尾と耳が倒れ、闘志が萎える。
これが、過度の興奮状態にある戦闘狂や殺人狂であるなら、相手が一般人だと感じたとして、殺意や敵意を萎えさせる事はないだろう。
或いは、そこらに居る極普通の一般人ほど油断ならない、という経験則でもあれば話は別かもしれない。
だがサバミソは本能に忠実だとしても暴力的な嗜好を持っている訳ではない。
しかも、相手は対話の姿勢を取っている。
絶対にそんな筈はないのに、こうなるともう、『何かの間違いで自分を捕まえてしまったただの一般人が、取り敢えず話し合いをしようとしている』ようにしか思えない。
そうなると、『ただの一般人相手に何を警戒しているんだろう、自分は』という、一種の自己嫌悪すら湧き出てくる。
ぺたり、と、地面に脚が付く。
空中で逃げる態勢を保ったまま固定されていた身体が、部屋の床に

降ろされたのだ。
既にサバミソを物理的に拘束するものは何もない。
だが、それが何だというのだろうか。
それは逃がしてもらえるとかいう話ではなく、自分を捕まえていたであろう赤い金属質の化物はその場で佇んでいる。
そして、既にサバミソの頭の中に『逃げなければ』という切迫した感情は残されていない。
逃げる事は出来ないし、逃げようと思う事すらできない。
そうすると、張り詰めていた緊張感が抜け、身体に蓄積されたダメージが重い疲労感を与えてくる。
仕方のない事だろう。
何せ、こうして攫われて来る直前には、都市破壊級の魔法を至近距離で受けてしまったのだ。
妖怪としての最低限の肉体強度こそ持っているものの、悪魔としての性質は純粋な魔術型であるサバミソにとって、このダメージはそう無視して元気でいられるものではない。
「怪我をしているんでしたね」
「白音がここまで出来るとは思ってなかったから、お姉ちゃんとしては嬉しい限りにゃ」
警戒しようとするのは無駄だと割り切り、普段通りに話す。
怪我はそれなりに重い。
致命傷という程ではないが、この状態で明確に敵対している相手に出会ったならそれこそ逃げの一手以外は打てないほどの負傷だ。
直前でどうにか防御が間に合ったけれど、それを超えてコレほどのダメージを負うとは思わなかった。
だからこそ、嬉しくも思う。
悪魔の下で育った白音は、自分とは違う道を歩めど、立派に成長してみせたのだ。身体以外。
「……そういえば、まだお礼を言ってなかったにゃあ」
「お礼？」
「白音を治してくれて、ありがとう」

思えば唐突な横槍だった。
だが、目の前の極普通の一般人に見える怪しげな男が、それこそあの場で命を繋げる事ができたか怪しいレベルのダメージを負った白音を治した事だけは事実だろう。
どうやって、という疑問は残るが大した問題ではない。
自分を攫った動機も、どういう人格の人間なのかもわからないが、妹の命の恩人である、という一点だけは間違いない事実なのだ。
「礼、礼ですか。……それを言うなら、此方も貴女に礼の一つも言っておいた方がいいかもしれませんね」
「にゃん？」
「貴女が仮に……あー、いや、これはやめておきましょうか。結果として示せなければ意味が無い」
言葉を途中で濁らせて打ち切る。
礼を言われる心当たりもないサバミソとしては首を捻るばかりだが、無理に聞き出せる雰囲気でもなければ無理が通せる相手でも無い事は承知している。
それに何より、今の自分は万全とは程遠い。
仙術や妖術の類を駆使したとしても難しい事を、この満身創痍の身体でやろうと思うほど向こう見ずではないのだ。
「それで、君はお姉さんを捕まえて何を話したいのかにゃ？」
できれば手短に済ませて欲しい、という言葉を飲み込み話を促す。
余裕の態度も崩せない。態度だけの余裕を崩してはいけない。
心の底から湧き上がってくる『この程度の相手なら隙を見れば余裕で逃げきれるだろう』という、理由の無い心の余裕に身を委ねたが最後、自分はこの相手に対し、本格的な警戒心を抱くことが不可能になるのではないか、という不安。
そして、そうして気を張らなければ、例え手短に済ませてくれたとしても、意識を保っていられなくなってしまう。
だが、そんな不安を閉じた瞼の下から見抜いてでもいるかのように、男は首を振った。
「本当ならこの場でもう少し話を進めてしまいたかったのですが、ど

うやら貴女の怪我は思ったよりも大きいようだ。治療を済ませて、しっかり休息を取り、それなりにちゃんと頭が回るようになってから、改めて、お話をさせて頂きます」

男が手を翳す。

小さく、サバミソの妖怪としての聴覚をもってしても完全には聞き取れない程の小声で成された詠唱が、一つの魔法を発動させた。

サバミソが最後の意地で保っていた意識が薄れていく。

眠りの魔法。

多芸な男にゃん、と思いつつ、サバミソは魔法に抵抗する事すらできず、意識を手放した。

「……」

食後のお茶を飲みながら、サバミソが虚空を見つめてぼうっとしている。

考え事から何かを思い出して回想に入ってしまっているのだろうけれど、此方の前でこういう無防備な姿を晒すのはやはり順調に精神が侵されているからだろうか。

なつき度が上がったせいで警戒心を抱けないのだろうが、元の人格に変化が生じてしまっては目も当てられない。

最終的には野生にリリースするか、無理なら譲り渡して手元から居なくなるのだから、あまり野生から遠ざけるような真似をしてはいけなかったのかもしれない。

かといって、今直ぐボールから解き放てばすぐさま逃げ出して禍の団に戻ろうとするだろう。

少なくとも、あそこに居る数名はこの野良猫気質が同じところにとどまり続けたいと思える何かを持っている。

だからこそ、それ以上の何かを提示出来るようになるまでは、彼女の拘束を解く訳にはいかないのだ。

「さて、一服し終わりましたし、わかりやすい目印があるところまで進んでしまいましょう。そしたら今日はお開きです」

「別に構わないけど、なんだかちょっと早くにやい？」

「多少無理しても結果は変わりませんよ。それに、明日はちょっと早めに学校に行くので」

早朝の訓練と言っても何処までやって良いのかが不明瞭なのだ。

最悪、ニンジャ速度で特訓するという手も無いではないのだが、その場合は小猫さんが高い確率で置き去りになるのであまり意味が無い。

ニンジャ速度で片足繋いだ小猫さんを引きずり回しながらの二人三脚は間違いなく顰蹙を買うし、小猫さんに何を言われるかわかったものじゃない。

兵藤先輩の提案を受けるにしても断るにしても一度しっかり下見をした方がいい。

「にゃー……。もしかして、白音も来る？」

「さぁ？　……でも、そうですね、ちょっと連絡してみますか」

朝の登校時間は同じようなものだし、別段朝に弱いという事も無いだろう。

それに、ボール越しとはいえ妹である小猫さんとの接触を多めに取っておけば、精神面での変化も遅くなるかもしれない。

もう少し行った先に小さな街があった筈だし、そこに向かいながら、お誘いのメールでも入れる事にしよう。

書主さんから、体育祭に向けての練習を早朝にやらないか、という提案を受けた。

前々から思っていたけれど、書主さんは割りとこういう学校行事に対して意欲的だ。

人の輪に進んで入っていくタイプではないけれど、人の輪の中に入れるのは嫌いじゃないのかもしれない。

「いっちにーいっちにーいっちにー」

練習そのものは実に順調に進んでいる。

私は元が猫の妖怪だけど、駒が戦車という事もあり鈍足、それでも並の人間、クラスメイトよりは早い。

それに、彼のタイミングというか、呼吸はなんとなく掴めている。

後は何度か練習を重ねれば、少なくとも私の全速力程度には合わせられるようになるでしょう。
ただ……。
「ううむ……」
少し離れた場所から私達の練習を見ていたゼノヴィア先輩が腕組みをしながら悩ましげに呻く。
「どうしましたゼノヴィアさん。やっぱり何処かズレてました？」
「いや、そういう訳ではない、そういう訳ではないのだが……。身体と身体を、つまり肌と肌をくっつけて激しく身体を動かしている訳だろう？」
「……ゼノヴィア先輩、シャラップ」
なんだかもうオチが読めたので静止の言葉をかけるも、ゼノヴィア先輩は止まらない。
グッと握りしめた拳を掲げながら力強さすら感じる口調で止めて欲しい続きを口にした。
「つまりこれは一種のセックスという事になるのではないか？」
頭か脳か心の病気かな？
「二人共ジャージだから肌と肌ではないんですがそれは」
書主さんちょっと突っ込むとこずれてますよ。
そんな言葉にならない突っ込みに誰一人として反応するはずも無く、ゼノヴィア先輩はむしろ書主さんの少しズレた突っ込みにこそ頬を僅かに赤らめ激しい反応を見せた。
「ジャージ越し、つまり、着衣でのセックス、略して着ックス……！
噂では男子学生なら十五割が憧れるという伝説の！」
「ニンジャ業界も大概ですけど、ここまでのキジルシはそうそう見ませんねぇ」
「それニンジャ業界が比較的マトモだったのを喜べばいいんですか、それとも眷属仲間がこんなんな事を悲しめばいいんですか」
練習を見てくれているゼノヴィア先輩が、まぁ、度々頭のおかしい発言をするのが悩みの種でしょうか。
もう一組のイッセー先輩とアーシア先輩組の時にはこの手の

ちょっかいを出していない辺りは納得行かない。
まぁ、それほど離れた場所で練習している訳でもないからゼノヴィア先輩の発言は二人にも届き、アーシア先輩なんかは顔を真赤にしてもじもじしているんですが。
あとイッセー先輩が自分たちに飛び火しないようにアーシア先輩を連れて少し離れた位置にこっそり移動している辺りもムカつきますね。道連れにしてあげたい。
「ふふ、安心してくれ、半分はジョークだ」
「何処を切って半分にしても安心できないって逆に凄いですよね」
「もうこの話題に突っ込みたくないレベルで凄いと思います」
「まぁ、なんだ、夏休み明けてからオカ研の方は面倒事が続いているからな。そういう柵のない部分では愉快で居たいじゃないか」
そこで真っ先に身体ネタ振ってくるのはホントどうにかならないんですか。
……とはいえ、ゼノヴィア先輩の言いたいことはわかる。
それなりに偉い位置に居る貴族さんがアーシア先輩に粘着ストーカー紛いの事を延々続けている昨今、何の柵もなく馬鹿をやれる場面というのは重要だ。
アーシア先輩に粘着していると言っても普段の授業中に突撃してきたりはせず、アーシア先輩の訪れる場所、部室や家の高額なプレゼントを押し付ける偏執的ながら多少の理性が残ってる風の振る舞いだけに逆に質が悪い。
一度でも犯罪的な方法でアプローチをしてこようものならどうにか曲解して暴力的な手段で解決できるというのに。
「す、すみません……」
と、少し離れた位置にいたアーシア先輩がしゅんと縮こまってしまった。
猥談が聞こえるのだから、当然この話も聞こえてしまうという事を失念していた。
「別にアルジェント先輩が謝る事じゃ無いでしょう。ほらほら、しょぼくれてないで景気づけに一発勝負しましょう。負けた方が勝った

方にジュース奢りという事で」
「お、なんだか自信ありげじゃないか。よし、アーシア！　俺達のチームワークを見せてやろうぜ！」
　落ち込もうとしていたアーシア先輩に呆れたような態度でフォローを入れる書主さんに、それに乗っかる形でアーシア先輩を励まそうとするイッセー先輩。
　ここに祐斗先輩でも居れば更に追撃で応援のコメントを入れてジェットストリームな励ましになっただろうことは想像に難くない。
　何だかんだ言って書主さんがオカ研男子と仲が悪く無い事の表れでもあり、アーシア先輩の素直さとか可愛らしさが人間関係を潤滑にすることの証明でもある。
　この体育館裏は日影になっているから少しわかりにくいけれど空は見事に晴れ渡り、登り始めたばかりの朝日も眩しく、まさに青春。
「うんうん！　これぞ正しく青春よね！」
　皆で共に青春を謳歌していると、やけに嬉しそうな声が割り込んできた。
　声の方向を見てみれば、そこに居たのは元教会エクソシストのイリナさん。
「あれ、イリナ、お前も来てたのか？」
「ええ、ゼノヴィアに『早朝の学校というのも乙なものだぞ！』とか誘われてね。……まぁ、顔出そうとしたらゼノヴィアがいきなりあんな事言い出すものだから、あっちの方で他人のふりしてたんだけど、そしたらなんだか一瞬で爽やかな雰囲気に変わったから」
　残当。
　しかし、そんなイリナさんの当たり前の判断に納得出来なかったのか、ゼノヴィア先輩が不満気に頬をふくらませるという、学園に入ってからクラスメイトに教わったというあざとアクションで切り返す。
「そんな他人行儀な事をしなくてもいいじゃないか」
「なら昔ほどじゃなくても一般人並の羞恥心と常識を持って喋ってよね」
「いやこれは、元エクソシストというハンデを乗り越えて悪魔の仲間

に馴染む為の私なりの……」
「その今の仲間の悪魔にもドン引きされてるじゃない……」
この人の突っ込み……出来る人ですね、間違いないです。
と、かつてコンビを組んでいた二人の相性の良さに頷いていると、書主さんが私の耳元に口を寄せてきた。
「知り合いですか？」
「……前に一度顔合わせてませんでしたっけ？」
「いや、少しだけ聞き覚えがある気もするんですが……脅威度が低くて交流の少ない相手ってそれほど覚えておこうと思えなくて」
「もうちょっと社交的になりましょうよ」
「頑張ってはいるんですよ？　最初の接触が敵対的でない相手に限りますけど」
「あー……」
顔合わせたのは二回、しかも一度目は喧嘩腰な雰囲気で、二度目は明らかに他のことを考えながらの接触。
しかもそのままフェードアウトした上に、悪魔化した後のゼノヴィア先輩のインパクトも強かったから、仕方がないんでしょうか。
「ほら、エクスカリバーがどうこうの時の、ゼノヴィア先輩の相方で」
「……あー、居ましたね、なんか、いつの間にか消えてた人」
「うぐっ」
特に悪意も無く放たれた言葉の刃がイリナさんを襲う！
まぁ、確かに印象は薄いですよね……。
たぶん部室でのアーシア先輩を巡るやり取りとかも特に関係ないから覚えてないでしょうし。
しかも割りと事実だから否定も反論もできない。
「でもなんでこんなところに？　しかもなんだか天使になってるみたいだし」
「色々あったそうです」
「なるほど」
「あ、あれ？　それだけで済ませちゃうの？　私もここに至るまでに

色々と挫折とか苦悩とか新たな救いとか」
「いや、知らない人の苦労話とか聞きたいかっていうと別に」
「私含むオカ研メンバーはもう一度聞いていますし」
二度三度聞く必要のある話でも無いですしね。
イリナさんはそこら辺の苦労とかを話したかったのか、しばし納得いかないという表情で唸っていたけれど、暫くして溜息と共に諦めの表情を浮かべた。
「ミカエル様の言った通りの人ね……。まぁ良いわ。人格態度はどうあれ貴方も迷える子羊で同じ学校の生徒の一人、これからよろしく」
「はい、よろしくお願いします。……それじゃあ、友好を深める意味で貴女も勝負に加わりませんか？」
「いいけど、ミカエル様のエースたる私に勝負を挑んだこと、後悔しても知らないからね？」
「あはは、お手柔らかにお願いします」
――このあと滅茶苦茶ジュースをおごって貰った。

朝の特訓を終え、後片付けの時間。
「正直、ライン引きまで使う事はありませんでしたよね」
「いやいや、練習は本番のように、本番は練習のように、って言うだろ？」
「兵藤先輩は稀に良いことを言いますね」
「い、イッセーさんは何時も良いこと言いますよ！　……エッチな事以外は」
本番で走るコースまで再現する為に試用した諸々の体育用具を片付けるため、グランドの隅にある体育倉庫に訪れていた。
練習の参加者が殆ど全員前線で戦うメンバーだった為に体力的な面での疲れは殆ど無い。
本格的にタイミングを合わせて最高の速度を叩き出せるように練習するのでもなければこの程度で丁度いい。
何しろこれから授業が始まるのだから、変に疲れを残しては色々と問題がある。

幸い、肉体的な疲労は殆ど無い。肉体的な疲労は。

……別にゼノヴィア先輩の言葉じゃあ無いけれど、二人三脚は基本的に肩を組んで片足を紐で結んで走る関係上、肉体的に接触する面積が割りと多い。

少なくとも、日常生活する上で、友人とがっしり肩を組んで脚までぴったりくっつけるのと同じかそれ以上の接触をする事はそうそう無い。

しかも身長の差のお陰で肩は組めず、胸元背中側に腕を回してしがみつく形になる訳で。

走っている間は割りと真剣なので気にならないけれど、これはかなり、恥ずかしいというか、羞恥プレイというか。

並程度の身長の書主さんとぴったり並ぶことで小ささが浮き彫りになった挙句、外見ではまるでお父さんに抱き着いている娘のようではないでしょうか。

……いや、これは少し自虐が過ぎるかもですが。

それに……、身体をくっつけて初めて判る、相手の肉体的なあれこれも問題がある。

捕まってみて、『あ、見た目よりがっしりしてる』とか、『筋肉の動きが靭やかですね……』とか、『なんだか最近嗅いだような懐かしい匂いがする』とか。

走っている時にそれらはただの思考のノイズだけど、こうしてふと思い返すに、何を考えているんだろうと恥ずかしくなってくる。

いつの間に私は筋肉フェチや靭帯フェチや匂いフェチになったというのか。

部で格闘技の練習をする時とかに祐斗先輩やイッセー先輩に関節技を掛ける時なんかはこんな事、思いもしないのに。

私の無意識の嗜好を反映しての思考なのだとしたら、これはある意味体目当てなのか、体目当てだとしても意味が違う上に違わない時と較べても遜色ないレベルで人に知られたくないというか。

二人三脚は男女の仲でやっても気恥ずかしいけれど、そうでなくても心臓に悪い。

変な意味ではなくドキドキする。変な意味では無く。
今から着替えて教室に向かうのは早すぎるので、部室で少し気分をクールダウンさせてから教室に向かうべきでしょうか。
そう考えた所で、ガラガラという音と共に倉庫の中が薄暗くなった。
見れば入り口の金属戸を、ゼノヴィア先輩が後ろ手に閉じていた。
何事だろう、と、ゼノヴィア先輩を除く全員が首を傾げる。
「なぁ、みんな、こんな時になんだなとは思うが、少し頼まれてはくれないか」
「？　はい、構いませんけれど……」
あ。
しまった、アーシア先輩が何時までたってもこういう場面で無警戒なのを忘れていた。
見れば止める間も無く頷いてしまったアーシア先輩を見ながら、イッセー先輩があわあわと口元に手を当てている。
「ありがとう、アーシア。君のその優しさには何時も救われる」
「今の良い台詞でしたね。……それじゃあちょっと部室に用事ができたので開けてもらえますか？」
「まぁ待ってくれ小猫。君に何か無茶な頼みをするわけじゃないんだ。ただ、できれば見届けて欲しい」
……まぁ、見届けるだけなら。
彼女はそれなりに義理堅いので、何をするにしても私が損害被るわけじゃないでしょう。
「じゃあ、改めて、読手書主」
「はい」
「私に、いやらしい事をしてくれるな？」
「嫌ですが？」
――ここまでテンプレ――
ちなみにこのやり取りはここ数ヶ月で繰り返し過ぎたせいで、アーシア先輩ですら殆ど顔を赤らめる事すらしなくなってしまった。
何度も何度も言っている通り、書主さんには既に日影さんという相

手になる恋人が居るんだから、了承する理由が無い。
それはゼノヴィア先輩も承知している筈だし、最近はこういうひねった理由も無い突撃は少なくなってきていたのに……。
だというのに、ゼノヴィア先輩の眼からは不敵な輝きを感じる。
「わかっている、わかっているが……、最近、日向日影の方から少し話を聞いてね」
「日影さんから？」
「ああ。なんでも、夏休みの間に、自分以外の女に手を出したらしいじゃないか。しかも二人も」
……。
……。
……。
へぇ。
「なん、だって……！」
イッセー先輩が、書主さんの方をものすごい視線で睨みつけている。
今にも血の涙を流し始めそうな表情だ。
普段から巨乳な恋人が居る書主さんに妬みの視線を送る事はあるけれど、それだけで済ませて普通にやり取りができているのは、書主さんがその恋人さんに一途なんだと知っているからだ。
そこで、実は恋人以外にも手を出してる、なんて言われて、黙っている筈がない。
でもイッセー先輩が手を出せないのはただのヘタレからですよね？
黙っている事ができないのはわかりますけど話の筋がずれるからだまりましょうか。
覚えたての仙術でイッセー先輩の脳幹付近をバチィしようと手を伸ばしたところで、ゼノヴィア先輩の視線がイッセー先輩に向き直った。
「そしてイッセー、君もいい加減、身の回りの誰かに手を出しても良い

頃じゃないか？　いや、出すべきだ」
「ちょ、ゼノヴィア！　俺とアーシアはそんな関係じゃ」
「君とアーシアの関係だけを言っている訳じゃない。今私は普遍的な世の常識を語っている。同じ屋根の下で年頃の男女が、一つ部屋の中一つベッドの中に収まって、何もナニもしないとは何事だ！」
「ぐ……」
割りとぐうの音も出ないゼノヴィア先輩の言葉に、イッセー先輩が口元、もとい血の溢れだした鼻を抑えながら呻く。
ベッドに潜り込んでくる部長や副部長、アーシア先輩のあられもない姿を思い出しての事でしょうか。
エッチな事ばかり考えて、行動もエッチな癖に、余りに実物に耐性が無い。
ヘタレ、と、言ってしまえば一言で済むところに、ゼノヴィア先輩は慈しむような笑みを浮かべた。
「だがな、イッセー、アーシア、それも今日でおしまいだ。これはクラスメイトから聞いたのだが……世の中には、ダブルデートという制度があるらしい。それに習って、二組の男女が同じ場所でまぐわえば、きっと難易度は下がる筈だ」
「どの世界のダブルデートでも、同じラブホの同じ部屋に入ったりはしないですけどね」
どういうシチュなのかわからない……。
というか明らかに難易度が上がっているんですが、今はそんな事はどうでもいい。
「……それ、私が見届ける意味あります？」
「ある。私達が致している間、入り口が外から明けられないように見張っていてくれ。勿論乱入も歓迎する」
無視して、視線を書主さんに向ける。
「視線が冷たい気がするんですが」
「気のせいです。……で、どうするんですか？」
結局、全ては書主さん次第だ。
イッセー先輩だってアーシア先輩だって、場の雰囲気に流されなけ

れば、まだこんな場所でいやらしいことができる程の関係じゃない。
そして、夏休みの間に恋人以外の女性と関係を持ったという少し下半身が緩めなのかもしれない書主さんなら、この場を脱する手段はいくらも持っているでしょう。
そうでなくても、言葉を尽くして説得すればゼノヴィア先輩だって納得して引いてくれるかもしれない。
書主さんは肩をがっくりと落とし、溜息を吐く。
「……二人共、それなりに理由があっての関係だよ。その理由も日影さんには説明してるし、納得もしてもらいました。だから、そういう眼でみないでくださいな」
「どうせ、『せやな』とか、『ならしゃあないなぁ』とかそんな返事でしょう」
「もうちょっと長かったですよ。説教もされました」
「ちょっと聞いてみたいですねそれ。……で、どうします？」
ちらりと視線をゼノヴィア先輩に戻す。
眼を爛々と輝かせて、既にジャージを少し脱ぎかけ、見せ付けるように肌を露出している。
「さぁ！」
声に気合が篭っている。
なんでこの人、エロい服の脱ぎ方とかダブルデートとか知ってるのに、そういう事をするための空気作りとか学んでないんでしょう……。
「本番無しでもいい。まずは異性の触れ合いに慣れるべきとも聞いたからな。なんなら先っちょだけでもいいぞ。ピルも用意してるんだ。無論アーシアの分もあるぞ」
一度引き下がると見せかけて半歩前に出るスタイル。
これが前衛（意味深）のテクニック……。
しかし、大概の一般人なら怯むその姿を前に、書主さんが一歩踏み出した。
「書主さん？」
「言葉だけで迫られるなら軽口ですけど、今後これをネタに何度も同

じことヤラれても面倒だし、ね」
　男女逆にするとそれをきっかけにどんどん落ちて行くシチュで聞かれそうな言葉ですが。
　それが分からないでも無いでしょうが、浮かぶ笑みは不敵だ。
「ゼノヴィアさん、貴女を相手取る程度、右手一本で十分過ぎる」
「舐めてもらっては困るな。指や手を使ったものなら自分でやり慣れている」
　書主さんの台詞だけなら普通の強者っぽい台詞なのに……。
「三十秒」
「ん？」
「三十秒、此方の手に耐え切れたら、本番だろうがなんだろうがお手伝いしますよ」
「……なるほど、受けて立とう」
　普段のゼノヴィア先輩なら、『ん？　今なんでもするって言った？』と返すところにこの反応……。
　で、私は三十秒間友達と仲間のそういう場面見てないといけないんでしょうか。
「直ぐ終わるから、あっちの物陰で眼を閉じて耳を塞いで置いて貰えれば」
「……いえ、友達がこれ以上不貞を重ねないように、ここで、見張ってます」
　何か間違いがあったら日影さんが悲しむし。
　友達が悪の道に転がり落ちないようにしてあげるのも友情というかですね。
　だから……別に、少し、少しだけそういう事に興味があるとか、軽めのものならショック少なそうだから後学の為に、とか、そんな事は全然思っていないので。
　勘違いはしてほしくないです。
　いや、本当に、ね？

四十六話　友人、意識する程度には

「ちょっとー！　いつまで片付けしてるのよー！」

大きなビニール袋を手に下げたイリナが柳眉を逆立てながら、勢い良く体育倉庫の戸を開け放つ。

体育祭の自主練に付き合い、結果として相方共々全員にジュースをおごる事になった為、勝者達の指定のジュースを買いに行っていたのだ。

「おや紫藤さん、お早いお帰りで」

「コンビニのプライベートブランド頼んどいて何言ってるのよ白々しい……って、何、この雰囲気」

入口側を背にしてタオルで手を拭いている書主の向こう側、体育倉庫に積み上げられた体操マットの上に、彼女の元相方であったゼノヴィアがへたり込むように座っている。

すわ、悪魔的な淫らな行為が行われていたのかと疑いもしたが、一見して着衣に乱れはない。

頬を赤らめ、口を半開きにして惚けるように書主を見上げている元相方に声を掛ける。

「どうしたの、何かあった？」

「え！　あ、い、いや、何、なにも、なかった、ぞ？」

声を掛けられ、初めてイリナの存在に気が付いたとでも言わんばかりに驚き、それを取り繕うゼノヴィア。

荒い吐息を押し殺すような声。

いかなる時も溌剌と、凛とした態度を崩さずに居た嘗ての姿を知るイリナは首を傾げ、視線を同じく体育倉庫の中に居た小猫に向ける。

視線を受けた小猫はゼノヴィアと同じような、しかし多分に照れの混じった表情でゼノヴィアと書主を見比べた後で、ぷい、とそっぽを向いてしまった。

何事が起きたかは分からないなりに、何事かは起きたのだと察し、イリナは顔を赤く染め、コホンと態とらしく咳を払う。

「……別に、やるなとは言わないけど、場所は選びなさい。不衛生だ

わ、ここ」
「別に衛生面に気を配らないといけない程の事はしてませんよ？」
「それでも、よ」
「それなら、あっちに言ったほうが良い気がしますけど」
ちら、と、書主が視線を向けた先は、不自然に移動された跳び箱などで仕切られた体育倉庫の奥のスペース。
完全に仕切られていないせいか、隙間から押し倒された形のイッセーと、馬乗りになったアーシアの姿が見える。
二人の表情は完全に陶酔しきっており、完全に二人の世界に入り込もうとしている。
服こそ脱いでいないが、それも時間の問題か。
イリナが言葉を叫ぶようにしながら柵を越え二人を止めに入りに行くのを見送ってから、書主は力なく座り込むゼノヴィアの首筋に指を添える。
「あ」
まるで楽器の様に、肌に触れられたゼノヴィアの喉が上擦った音を鳴らす。
たったそれだけ、たったそれだけで、ほんの数分前までの事を思い出し、背筋が震える。
反射的に身を反らし逃げようとして、止める。
喉をなぞり上げ擽るような指先を、自分の意志で受け入れる。
指先一つで自らの身体を弄ぶ男を見上げ、ゼノヴィアの瞳は熱を帯びて潤んでいた。
そこに歴戦の戦士としての強靭な意志も、新たな体験に心を躍らせる少女の瑞々しい好奇心も無い。
ほんの少し前に受けた未知の感覚への恐れと、それに屈する事への悦びだけが、熱を孕む身体に満ちていた。
「気軽に男を誘うとどうなるか、ちょっとは理解出来たでしょう？
せっかく好きに恋愛できるんだから、もうちょっと考えて、自分の身体を大事にしなきゃ」
にこり、と、悪意の欠片も無い笑み。

目を閉じ、白々しくも諭すように振る舞う姿に、ゼノヴィアに対する欲情は見て取れない。

ゼノヴィアにとっては未知の感覚だった。

自分でするのとは比較にもならない。

後遺症も残らないと言われ使ったその手の薬を併用した時でさえ、これほどのものではなかった。

どんな苦痛や絶望にも膝を屈することのない戦士として育てられたゼノヴィアが、為す術もなくへたり込み、僅かな時間を置いて立ち上がる事すらできない。

いつも通り喋るのにも力を溜め、ゆっくりと絞りだすようでなければまともな声も出ず、普通に声を出そうとすれば力が抜け熱だけを帯びた吐息が漏れてしまうだろう。

へたり込んだ脚がガクガクと震えていないのも、短時間に与えられた過度の疲労が限界まで達しているからか。

たった三十秒の、衣服すら脱がさぬ、腕一本、掌一つでの慰撫。

肺の中にある空気を根こそぎ絞り出し、今まで上げたことのない、あられもない艶声、知性の欠片まで残さずかなぐり捨てた獣の嬌声が、ゼノヴィアの意志を離れて喉から溢れだした。

五秒と保たず達し、そのまま降りることすら許されずに続けられた責めに脚が力を失い、しかし立て続けに重なるように訪れるそれが脚の付け根からつま先までを全力で張り続ける極度の緊張状態に置き、その疲労は刺激から逃れた今も甘い刺激の残滓に浸らせ、立とうという意志すらも取り払っている。

優しく子を労るように撫で上げられ、物でも扱うように荒々しく揉みしだかれ、嬲る様に捻り上げられ……。

ゼノヴィアの意識は自分が何をされているのか、何をされたのか、自分の身体がどうなっているのかを理解できない程に混濁し、イリナから声を掛けられるまで真っ当に何かを考える事すら出来ない放心状態にあった。

それまでは、溶け落ちた理性の下から顔を出した生物の原始的な本能が、自らを貫き種を植え付け子を孕ませるのだろうと思われる相手

に、期待を込めた視線を向けさせていた。
しかし、ゼノヴィアをそのような状態に追い込んだ男は、そんなゼノヴィアの様子を視覚以外で確かに認識しながらも、まるで欲情している様子を見せない。
それはとりもなおさず、男、書主にとって、ゼノヴィアに行った程度の行為は性交を感じさせるに値しない程の、程度の低いお遊びの様なものだったという事実を表している。
三十秒。
たった三十秒の間、文字通り片手間に、片手で行われた、ゼノヴィアが生まれて初めて受けた他人からの愛撫。
それは十数年掛けて積み上げたゼノヴィアの人生、人格、意志、能力を一つ残らず溶かし尽くし無意味なものとして廃した。
仮に、あのまま止めること無く責めが続いていたなら。
仮に、あのゼノヴィアの持つパーソナリティが全て残らず丁寧に毟り取られた状態で、犯されていたなら。
後に残されるのは『ゼノヴィア』ではなく、ただ悦びのままに男を受け入れ子を孕むだけの人間の残骸が残されていただろう。
元エクソシストではない。
悪魔の眷属、騎士の悪魔でもない。
齢十数歳の少女ですらない。
意志も思考も未来も可能性も、人間性が齎す何もかもを捨て去り、ただ快楽を受け入れるだけの器。
それは決してゼノヴィアの臨んだ未来ではない。
それは悪魔に堕ちたゼノヴィアが夢見た可能性ではない。
だが、何よりも恐ろしいのは。
『そうなってもいい』
『そうなりたい』
『続きが欲しい』
『他の何もいらない』
『欲しい』
『ほしい、ほしい、してほしい、ほしい』

怖くないのだ。
その、理性で考えれば恐ろしいと思ってしかるべき結末が。
辛うじて理性と人生の積み重ねを取り戻したゼノヴィアが否定すべき顛末が。
華やかに彩られた栄光の道、辛い旅路の果てに辿り着いた安息の地の様に思えて。
否定しようという意志すら、数分前の何もかもが溶けて抜け落ちていく感覚を思い出すだけで、薄皮を剥ぐように心から容易く離れていこうとする事が。
恐ろしい。
恐ろしい、と、思い続けなければ、今にも服を脱ぎ捨て、恥も外聞も無く慈悲を乞い、股を開き、涙を流しながらでも貫いて貰う事を強請り初めてしまいそうな自分が。
受け入れ難い破滅を受け入れたいと思う、雌雄に別れた頃から根付き続けていた生物としての原初の欲求が。

……事の顛末、というには大袈裟かもしれないが、此方は無事に、痴女い発言を繰り返すゼノヴィアさんの事を退ける事ができた。
ニンジャ学校で習った技術、日影さんと共に日影さんで磨いた技術、錬金術的な人間の神経系研究をも応用した超時間短縮形の軽い愛撫。
洗脳前に一度脳味噌を綺麗に洗い流すのにも使える少しキツ目の技術を脅しとして使ったお陰で、ゼノヴィアさんの攻勢も鳴りを潜める事だろう。
元より放課後や昼休みなどを除けばあまり接触がある方ではなかったけれど、それでも人目がある場所での接触がない訳ではない。
大っぴらに此方に性的なネタを振られると、此方の数少ない交友関係がズタボロになりかねないし、今回の様な強攻策を何度も繰り返されては、いくら回避や離脱が容易いとしても手間が掛かる。
そもそも、約束の三十秒を終えてからの数分、ゼノヴィアさんのぐしゃぐしゃになった下着や体操着を魔法や忍術を使用してまでなん

とか綺麗に見えるように証拠を隠滅したのも此方。
結果が伴わないのなら、こんな真似を何度もやっていられない。
……これで、ゼノヴィアさんの最終目的が強い男の子供を孕み、育てて母としての、女としての人生の悦びを見出す、などという大層なものでなければ対処のしようはいくらもあるのだ。
単純に気持ちいい事をしたいから、というのなら適当な相手をあてがってもいいし、それこそ此方が適当に相手をするのでもいい。
基本的には日影さんが相手をしてくれるにしても、此方の都合だけで日影さんの時間を奪うのも気が引ける。
実際どうなるかは日影さんに聞いてみないことにはわからないが、許可が出たなら特に問題なく性的交友を結ぶ事ができるだろう。
後腐れなく性的な欲求をぶつけ合う事ができる相手は割りと必要だ、と、そんな事を言っていた父さんは母さんにエーテライトで締めあげられていたが。
その夜に父さんと母さんの寝室に遮音結界が張られていた事を考えるに、それはそれで夫婦が燃え上がるためのスパイスなのかもしれない。
だが、最終目的が子作り妊娠からの子育て、というのは不味い。
こういう相手は、避妊するから、とか、安全日だから、とか、そういう言葉が一切当てにならない。
偽の妊娠検査薬、偽のピル、孔の開いたコンドームならまだ可愛げがある方で。
普通にコンドームをしてセックスをした後、そのコンドームを適切な方法で中身ごと保管、特殊な施設で相手の同意を得ずに受精、という事例はそれこそ無数にある。
特にニンジャ業界ではそれが顕著で、対エロ、エロ拷問訓練の際などにはしつこいほどに言い聞かせられる。
余談だがこのしつこく言い聞かせてきた講師には何人かの娘と息子が居て、ニンジャとしての教育を終えて任務に付き、互いに同じ任務で顔を合わせ、秘密を探りあう内に互いに兄妹である事に初めて気がつく、という、しつこく言い聞かせる理由が酷くわかりやすく察せ

られるエピソードをお持ちであった。
母親は勿論全員違い、中にはその講師と身体を重ねた事すら無く、一方的に懸想した挙句に夢精した際のそれをちょちょいと採取して自分に植え付けるというエクストリーム妊娠を決めたご婦人も居るのだとか。
実に恐ろしいことだ。
それに比べれば騙し討的に避妊しつつ致した相手が子を孕む位はなんてことのない様に思えるが、それは比較対象が悲しいほどに恐ろしいラブ・モンスターだったというだけのこと。
自分の意図しない相手との子供、というのは、仮に相手が認知しなくていい、と言い出して、実際に何ら法的な闘争を始める気配が無くとも、どうにも気になってしまうものだろう。
相手が納得しても、子供の方が歪曲して解釈し、後年父親に対して母を捨てた復讐を目論む、などという泥沼話も多く聞かれる。
「それも特にニンジャの間で顕著なんだね」
放課後、廊下で待ち伏せてオカ研に向かう所を捕まえた木場先輩が何処か他人事では無さそうな青ざめた表情で話のオチを掻っ攫っていった。
「わかります?」
勿論先の講師の話である。
子供の誤解が解ける頃には、父子共に四肢切断級の大怪我を負っていたらしい。
ニンジャなので今では全快して元気に任務に臨んでいるらしいが。
思えばあの先生も美形だとかいう評判を聞いた覚えがあるし、こういう話は美形特有の悩みなのかもしれない。
あ、勿論此方の顔面造形が美形ではない、と言っている訳ではない。
自分で見る機会もそうそう無いが、少なくとも母さんにも父さんにも似ていると言われる此方の顔が悪い、という事もあるまい。
こういう被害に遭う連中というのは何処かコミュ力が高すぎたりして、人当たりが良すぎる上に向けられた好意に対してもやんわりとした対応しかしないので、人間関係を拗らせやすいのだ。

「わかるけど、なんでそんな長い上に空恐ろしい話を僕が聞かされるのかがわからないかな」
「今朝から小猫さんがちょっと余所余所しいというか、距離を感じるというか……そんな感じでしてね。言い訳しようにもこれ、本人に聴かせるのもどうかなって内容ですし」
小猫さんが男性経験無い処女どころか異性や同性とお付き合いした事のない未開拓地である事は勿論知っているけれど、今朝の光景はそこまで刺激的だったろうか。
今日は少しオカ研に用事があったから一緒に行こうと思ったのに、小猫さんは『今日の放課後も用事があるんですよねそれじゃあまた明日』と告げるなり、此方から逃げるように教室から飛び出していってしまった。
「ううん……、どっちかっていうとさり気なく出てきたエロ訓練とかエロ拷問なんて単語の方が衝撃的な気もするけど、そういう場面を目にした女の子にする話ではないかもね」
「でしょう？　でも、一応あの行動に至るにはそれなりの理由があるんだよ、っていうのを、誰かに言っておかないと、どうにも」
エロい光景に対する耐性なんてのは個人差がある。
その光景を繰り広げていた相手と話難くなる、というのもわかる。
だが、そもそもあの場面を見るという選択をしたのは小猫さんなのだ。
それであんな態度を取られてしまう、というのは、理解はできても受け入れがたく感じてしまう。
学校の中では数少ないニンジャだの悪魔だの魔法だのまで話せる相手であるし、気兼ねしない相手、という意味では日影さんを除けば学内でもトップスリーに入るレベルでもある。
知り合い、友人、まあまあな友人と来て、中々に親しい友人になったのだ。
避けられると悲しいし寂しい。
これは帰ってから冥界に調査に行く前に日影さんに一通り慰めてもらわなければ！

或いは冥界での調査は一時キャンセルして日影さんに甘えなければ！

一日分サバミソがポケモンっぽく変異していく様を一切手出しせずに見逃す事になるけど、傷心を癒すためならば、日影さんと一緒にリビングや自室でぼーっとしたりして緩やかな時間を過ごす為ならば、致し方ない事ではないだろうか！

「……なんだか勝手に元気になってきたみたいだけど、一応僕の方からもフォロー入れておこうか？」

「ありがとうございます。今度何かお礼を考えておきますね」

「そんな気にしなくてもいいよ。同じグレモリー眷属の仲間のことでもあるからね」

そう言って朗らかに笑う木場先輩。

なんだ悪魔って天使揃いか。

ていうかリアル天使の影が薄すぎてリアル天使がどんなもんかさっぱりわからないのだけど。

ミカエルさんは記述読んだ限り、決して綺麗なだけの存在ではなかったしなぁ……。

「お兄様……魔王様に会いたい？」

「はい。メールで済ますのは難しい話になってしまいますので、できれば近いうちにお目通り叶えばなぁ、と」

祐斗先輩と連れ立って、久しぶりにオカ研の部室に顔を出した書主さんは、ギャーくんと軽く雑談を楽しんだ後、徐ろに部長に無茶振りをしはじめた。

部長は上級悪魔グレモリーの当主で貴族、しかも現魔王であるサーゼクス・ルシファー様とは実の兄妹。

この学校から魔王に対するアポイントメントを取ろうと思ったなら、確かに部長を頼るのが一番の近道でしょう。

ですが、当主とはいえ一介の貴族、しかも現在は学生の身分である部長では、直ぐにどうこうできるものではないでしょう。

「どうしたの、小猫」

「別に、どうもしていません」
「せっかく読手君が来たのに、行かなくていいの？」
「……真の友達はそんなベタベタした感じじゃないので……」
この副部長は本当に、姿を表したと思ったら余計な事を言い出す。
私含め、家庭環境に問題があるオカ研部員はこういう場面で空気を読まなさ過ぎて困ります。
そりゃあ、私だって、別に書主さんに含む所があるわけではないんですが……。
「別に、喧嘩をした訳じゃないのでしょう？」
「……」
耳から聞こえてくる副部長の言葉も、今の私の頭には残らず何処かへ上滑りしていく。
私だって、書主さんと一緒に居ると楽しい。
でも、なんというか、今日は、駄目だ。駄目だった。
今日は朝から、あの光景が繰り広げられた朝から、まともに書主さんの顔を直視できない。
どうしても、ゼノヴィアさんに片腕を伸ばし、手の動き、指先の動きだけでゼノヴィア先輩を楽器のように自在に操っていた姿が思い返されて。
……凄い声でした。
声だけではない、匂いだ。
猫は特に匂いに敏感ということもないけれど、普通の悪魔や人間に比べれば断然鼻は利く。
触れられて数秒で派手な音と共に体操服の下から溢れだした、小水とは違う液体。
知識としては知っている。
別にいやらしい本とかで、という訳でもなく、純粋に学校で習う保健の授業の範囲で知っているだけのものだ。
たった三十秒の出来事が終わった後、書主さんが魔法や何やを駆使して殆ど残らず消し去った筈のそれの匂いが、鼻の奥に残っている気がする。

そして、今朝の光景を思い出しそうになるたびに、その匂いが鼻の奥から顔を出してくる様なきがしてならない。
光景も、音も、匂いも、まるで今まさに目の前で起きているかの様に脳裏に鮮明に思い浮かんでくるのだ。
そんな状態で、どんな顔をして書主さんに接すれば良いかわからない。
それに……、
『二人共、それなりに理由があっての関係だよ』
それなりに理由があれば、恋人でなくても。
それなりの理由って、どれだけの理由なら？
二人、という相手を庇っているようにも、慮っている様にも聞こえた、その二人は誰、いや、どんな人？
私よりも、親しい友人だったり、するんでしょうか。
それとも、私程度に親しい相手なら、『それなりの理由』で……。
首をぶんぶんと振り、頭に浮かんだ下らない妄想を打ち払う。
別に、私と書主さんはそういう関係じゃないし、そういう事をする理由だってぜんぜん無い。
『塔城さんは、可愛らしい人ですねぇ……』
な、無い……筈、ですよね……？
あの時の、優しげな視線だって、あの時、髪を掻き上げて頬や耳に触れたのだって……。
触れ……、夜の森の中で、胸に、ゼノヴィア先輩と、同じような場所……。
しかも、わたし、自分から……。
あれ、してほしい、って、言ってるみたいなものじゃ……。
私が、私も、書主さんの手で……？
「にゃあ……」
頭が、くらくらする。
熱くて……。

ばたん、と、わりと遠慮のない大きな音が鳴り響く。

音の反響から判るのは倒れたのが駒王学園の制服を来た背丈の小さな女性だという事で、この場でそれに該当するのは一人しか居ない。

「小猫!?」

誰よりも早く反応したのはグレモリー先輩だ。

先まで此方の無茶振りにウンウン唸りながら考え込んでいた先輩は一瞬で意識を切り替え、倒れこんだ眷属へと駆け寄ろうとしていた。

なるほど、これが王、いや、これがグレモリー先輩の中の王なのだろう。

小猫さんや木場先輩がなんやかんやいいつつも信頼を置く理由が判る気がする。

ニンジャ速度で先輩を追い抜き、倒れた小猫さんをしゃがみ込んで抱き起こそうとしていた姫島先輩を手で制し、小猫さんの身体に触れた。

触れた箇所から此方の血流によって生じる振動が伝わり、小猫さんの身体の中を反響し手元に戻ってくる。

未成熟な部分が大きく、わずかに純正の人間とは異なる部分があるが、どの臓器も神経系も問題なく作動しているのが判る。

「どうなってるの?!　小猫は大丈夫なの?」

一番に駆け出しながらも気付かぬ内に追いぬかれたことなど微塵も気にせず、ただ小猫さんの安否だけを確認するグレモリー先輩。

彼女が下僕想いである事を除いても当たり前の反応だろう。

何しろ先ほどまで普通にしていた相手が唐突に意識を失い倒れこんだのだ。

「……知恵熱、ですかね」

「知恵熱?」

「正確に言えば、心因性発熱、或いはストレス性高体温症とでも言いましょうか」

慢性的にストレスを抱えている人に良くある症状なのだが、今回はそれに極度の緊張状態が重なったような状態の様だ。

まぁ、慢性的なストレスに関しては以前に比べて少なくなっているようではあるけれど、どうにも、今朝の光景、そしてそこから想起したであろう何がしかの考えが、小猫さんの許容量をオーバーしてしまったらしい。

あれだ、初めて無修正のポルノビデオを見た清純な少女、みたいな状態なのだろう。

「アーシアに急いで部室に来るように伝え……」

「この手の熱は別に怪我でも病気でも無いから、あの神器では回復できませんよ。横にしておくのが正解です」

慢性的なものならともかく、今回のは短期的なもの。

こういうのは、受けたストレスが抜けると拍子抜けする程に熱が下がって元通りになる。

「そう……、それじゃ、お願いね」

「はい？」

「寝てる間、小猫の事を診ていてあげて欲しいの」

「なんでまた」

「私も朱乃もそういうのは向かないし、そういうのが解ってそうなアーシアとイッセーはまだ部室に来ていない、ギャスパーは昨晩遅くまで悪魔の仕事を頑張っていて今は眠っているし、祐斗は……そう！これからちょっとお使いがあるのよ。先立って契約した悪魔としての仕事がそろそろ始まる時間帯でね、外さないといけなくて」

沈黙を溜めにしてからの（。д。）彡そう！とは一体何なのか。

グレモリー先輩の発言の後に『えっ？』と言いかけて飲み込んだのを聞き逃す程此方は鈍感ではないぞ。

優れた忍者は足音から相手の感情をある程度読み取る事など造作も無いのだ。

魔法陣を使わずに部室の出入り口に向かうのも不自然だし、その足取りから察せられる心情は恐らく『ああ、また部長の悪い癖が始まった。でもたぶん小猫ちゃん的にはいい感じの展開になるだろうし、ちゃんとした活動が始まるまで近くの本屋で立ち読みでもしてこよ

うかな』といった感じだろう。
溜息。
これまでの人生、人脈豊富とまではいかないまでも多少の人付き合いはあったけれど、このグレモリー先輩の様な取り敢えず男と女が出会ったらラブコメが始まると思っているレベルのカプ厨は見たことがない。
小猫さんや木場先輩から聞く話や振る舞いから想像するに、公式の場などのきちんと締めるべき場所では王に相応しい振る舞いとカリスマがあるのだろうけれど、彼女に付き従う小猫さんはじめオカ研メンバーの苦労が忍ばれる。
「いいですよ、でもその代わりさっきの話、よろしくお願いしますね？」
そう念押しして、熱っぽくなった小猫さんの頭を撫でつけた。

温かい、誰かの体温を肌で感じる。
柔らかいような硬いような、でも、頭を預けていてもさほど不快には感じない生き物の身体の感触。
人肌……肌ではなく布の感触だけれど、だからこそ、遠い昔に身体を預けた背中を思い出す。
記憶も曖昧な親の背中か、僅かに覚えのある姉様の背中か。
それはどちらにしても遠い記憶、覚えているか覚えていないか、思い出そうとしても記憶に無いか、思い出そうとしても記憶が薄いかの違いでしかなくて。
自分が眠っていたのだと理解し、意識がはっきりしていくと同時に思うのは、今の自分にはどちらも縁遠いものだ、という現実。
もう居ないだろう親と、今は会えない姉。
私に温もりをくれた家族は、今の私には触れることもできない。
勝手な話だ、と思う。
どんな理由があったとしても、せめて会いたいと思えば会える場所や立場に居て欲しいのに。
……そんな自分の感情も勝手なものだ、と、理解しても止められな

いものです。
だけど、この安らぐ感触が記憶の中にしか無いというのは、やっぱり客観的に見て不幸なのかもしれない。
「ん……、んぅ？」
心地よい温かさに顔をこすりつけるように寝返りを打ち、気付く。
夢か幻覚か、と思ったけれど、温もりも柔らかさもしっかりと感じる。
誰だろう、部長、ではない、副部長、も違う。
でも、間違いなく覚えのある匂い、親しみを感じる匂いだ。
誰に身体を預けて眠っていたのだろう、ぐっすり眠ってしまっていたならかなり迷惑をかけてしまったかもしれない。
「つまり、見学に行け、と？」
「どうせこの事を伝えれば招待状の一通くらいは書くだろ。それが一番手っ取り早いし、あいつのスケージュールを崩さずに会える。だろ？」
「……そうね、確かに、前々から誘おうかどうか相談はされていたから、難しくはないと思うわ」
頭の上から聞こえてくる声に応えたのはアザゼル先生と部長。
二人の声は少し離れたところから聞こえて、一番近くに聞こえた声が誰のものかを理解して、顔が熱くなる。
頭を擦り付けた何かが、親しみのある匂いの染み付いたただの温かくて柔らかい普通のクッションである事を祈りつつ瞼を開ける。
視界に入ったのは駒王学園の制服のお腹の辺り。
「あ、起きました？」
視線を横に、地球規模で言えば上にずらして見えるのは、いつもどおり、瞼を閉じた書主さんの顔。
「起きましたけど、……これは」
「膝枕ですね」
「膝枕ですか」
「はい」
はいじゃないが。

「何故膝枕を？」
「いきなり倒れてしまったので、介抱として」
「そうですか……すみません」
これが仮にドタバタラブコメの主人公とヒロインだったら反射的に拳の1つ2つが飛びそうなものだけど、あいにくと私は理性的なつもりだ。
だから、照れ隠しで暴力に訴えるような非文明的な真似はするつもりは無い。
恐らく書主さんは１００％善意で介抱してくれたのだから、例え膝枕という結果に落ち着いたとしてもそれは仕方のない、そう、言ってしまえば緊急避難的なあれだから大丈夫ですよ。うん。
「……太もも、柔らかいですね」
二人三脚の練習の時は割りとがっしりしていた気もするんですが。
「忍者ですからね。変装術の応用で身体の柔らかさくらいは変えられるんですよ」
どういう変装で身体の柔らかさを変える必要が出てくるかがわからないし、解ったらいけない気がするけれど。
こういう場面で便利だから別に問題はないのかもしれない。
「小猫さんは、寝てる時は本当に猫みたいに動きますね」
「……まぁ、猫なので」
「可愛らしくていいと思います」
「……それほどでも、無いです」
なんですか、今もしかして口説かれていますか私。
なんだか顔もやたら熱くなってきたのでいい加減拳とか使って黙ってもらうべきじゃないですか。
彼女さんである日影さんのためを思えば一二発くらいは許されませんか。
でもたぶん普通に頼めば黙ってくれそうなんですよね。
諭せば反省もしそうですし。
じゃあ殴れないじゃないですか！
「んっ、んぐ、んぐ！」

「おーおー、彼女が居るってのに良くやるねぇ」
書主さんのベルトにこっそりと括りつけられていた謎の紅白柄の球体を毟り取り声の方に投げつける。
あ痛ぁ！　という悲鳴と、かっかっか！　という余裕そうな声を聞きながら身体を起こす。
身体を起こすと視界に入った、何故か額を抑えて蹲る部長とニヤニヤと気持ちの悪い中年臭い笑みを浮かべるちょいワルオヤジなアザゼル先生がどうにも気に食わない。禿げればいいのに。
「さ、全員揃った上に面白い見世物も終わっちまったからな、真面目にレーティングゲームの勉強でも始めるか」
全員揃った……。
言われ、視線を部室内に巡らせれば視線を向けられた先で何時ものオカ研メンバーが勢揃いしているのが見て取れる。
ニヤニヤしている人も居れば恥ずかしそうにしている人も、興味深そうにしている人も居る。
誰が誰とは言わない。
とりあえず睨みつけたら全員目を逸らした。
しかし目を逸らしつつもそれぞれの態度はさほど変わらない。
何ですか、何か言いたいことがあるなら言って下さい。
あと羨ましそうな顔してるギャー君はもうそろそろ悔い改めて下さい。
悪魔でもその性癖は後戻りできない系で危険です。

――――――――――――――――――――

――――の時は居なかったので関係ない筈なのに、外からの評判が……

――――果として当主は死んだがそれで誰が得をしたかと言えば……

――――い話だ。何か怪しげな実験を繰り返していたとい……

――――忌々しい事に、資料の多くはこの家から流出し、当時に協力していた……

「当たりだ」

目当ての情報を持っているものを除き、接続していたエーテライトを勢い良く引き抜く。

途端、虚ろな表情で整列していた身なりの良い悪魔たちが一人を除いてその場で崩れ落ちた。

乱暴に引き抜いたせいで少しばかり脳神経を傷つけてしまったけれど特に問題は無いだろう。普段からそれほど脳味噌を働かせて生きている訳ではない事は、記憶を探る中で十分に察している。

重要なのは、必要な証拠を現在握っているであろう悪魔の足取りがつかめた、という一点のみ。

「……そう遠くない、か。サバミソ」

「にゃあ」

適当に見張りをさせていたサバミソに声を掛けて、付いてくるようにジェスチャのみで促す。

特に反駁も無く、短い返事のみで此方に付き従う姿は実に従順だ。

別にこれは知能が退化して人語を話せなくなったとかいう話ではない。筈だ。

記憶走査を始める前までは普通に話していたし、いい加減慣れてきた、という事だろう。

良い傾向だ。

ここまで来るとこいつの協力が必ずしも必要という訳ではないが、こうして捜査に協力させておけば後々に多少プラスにできる。

割りと長引いた捜査も大詰め。

二時間サスペンスで言えば犯人を崖に追い詰めるシーン程度には煮詰まってきている。

魔王さんのアポも取れたし、先延ばしにして延々放課後の自由な時間を費やすのも馬鹿らしい、今日中に全て揃えて、後は突き付けるまでの時間でわかりやすく整理させて貰おう。

気安く、仮のものであるらしい名を呼ぶ主の背を追う。

仮にも上級悪魔がぞろりと揃っている屋敷に堂々と潜入した上で、一人残らず抵抗も許さず無力化した男は、必要な何某かを手に入れた

らしく、次の標的を定めて動き出している。
同じことができるか、と言われれば、出来ない事もない。
だが、自分がこの男と同じ立場だったとして、それを積極的にやろうとするか、と言われれば首を横に振るだろう。
好き好んでそんな真似をする意味も理由も無いし、リスクも高い。
自由な野良猫というのは、自由であるが故にある程度のリスク管理も必要になってくる。
それは自分とこの男の性格が違う、という事もあるだろうが……。
「にゃあ」
「なんです？」
一人残らず一室に集められた上で意識を失っている為に無人となった屋敷を歩く。
来る時と同じように、何を恥じることもないと言わんばかりの堂々とした振る舞いを見せる男は、振り返る事も無く応えた。
この男は気安い。
口調こそ丁寧ながら、重要な部分以外ではそれなりに明け透けに答えてくれるのは、これまでの短い期間で理解できた。
恐らく、聞けば、問えばあっさりと答えが得られるのだろう。
この男が今現在、何をしようとしているか、というのは聞いている。
その結果は、自分にとっても悪く無い未来へと繋がるかもしれない。
だけど、何故、という、その一点だけを知らない。
聞けば何時でも答えるだろうと思いながら、自分がそれを聞いて良いのかがわからない。
捕らえられた当初の様に、この男が脅威でないとは思っていない。
この男に『持ち運ばれて』居る間に、この男の生活を垣間見て、人間性を、人となりを知った今では、この男の脅威も理解できる。
脅威も、人となりも、それなりに理解できるが故に、聞けない。
危険な男で、だけれど、間違いなく、この男も白音の友人で、白音の日常の一部で。
だからこそ、もしかしたら、決定的な破滅を齎すかもしれない問い

かけを躊躇してしまう。
「大丈夫、貴女は正しい」
呼びかけるだけ呼びかけて二の句を告げずに居ると、背を向けて歩き続ける男が、諭すような声色で語りかけてきた。
「此方が貴女の意図を無視して連れ回している以上、信用しろ、とも言えませんし、逆の立場なら信用もできません。例え、後に結果が出ても疑うでしょう」
「いいのかにゃ？　自分でそんな事を言って」
「ええ。何しろ、此方の求める結果に、貴女の信用や信頼はあまり必要ありませんので」
「君、面倒な奴って言われにゃい？」
「不可抗力ですよ。そう簡単にいかないと思いませんか？　自己満足って」
なるほどなるほど。
で、あれば、この男の動機も、なんとなく見当がつく。
勿論、好意的に解釈した上での希望的観測でしかないのだけれど、その予想はそれなりに的を射ているんじゃないだろうか。
口元がにやける。
白音は面白い男を見つけたものだ。
既に番（つがい）が居るようだけど、その程度の障害はスパイスの様なもの。
「にゃにゃにゃ」
背後からじゃれつこうとして、するりと躱される。
つれない男だ。
性欲がない訳ではないという事は、ここ暫くボールの中から私生活を覗いていて十分に理解できている。
そういう行為に慣れていない訳ではない、という事も、今朝に白音と運動をした後のあれこれで察するに足りる。
難物だ。
飢えても居なければ経験が少ない訳でもない、獲物を選ぶタイプの捕食者（プレデター）、しいて言うなら、自分に近い。
そんな男と白音が親しくなっている、というのはどんな因果か。

そんな男と白音が今後、どんな関係へと進んでいくのか。
害はあるまい、なら、純粋に見世物として面白そうだ。
妹の青春にそんな視線を向けてしまうのはどうか、とも思うのだが、これぱっかりは野良の性分なのでどうしようもない。
だけど、こうしてこの男を近くから見続ける事ができる時間も残り僅からしい。
だけど願わくば、白音がこの男と『どう』なっていくのか、見物できる位置には居たいものだ。

四十七話　観察、傍らより

「小猫さん、おはよう」
「おはようございます。……なんだか眠そうですね」
朝も早い時間から、学生服を身に纏った二人の男女が歩いていた。
勿論、今の時間がこの国の平均的な学生の標準的な登校時間からそう離れていない、という程度の事を知らない訳ではない。
しかし、二人の内、男の方の学生服の下、ベルト付近に据え付けられた、ピンポン球程度のサイズしかないボールにどうにも説明し難い、奇妙な、しかしそれでいて不自然さを感じさせない、安らぎすら感じる収まり方をしている一匹の悪魔にとって、それは知識の上でのことでしか無い。
自由な生の中に生きるその悪魔にとって、この時間は普段であれば余裕で眠りに付いている時間なのだ。
猫は夜行性、これは当の猫達にとっては当たり前過ぎて、疑問を差し挟む事もできない事実だ。
故に、男が並んで歩いている少女、自分の妹に対して、大変だにゃぁ、という他人事の様な同情と、それほど辛そうにしていない事への感心と安心のどれをも等しく抱く。
なるほど、わかってはいたことだけれど、白音は私とは違う。
こういった『決まり事』に自分を収める事ができるだけの柔軟性は、自由で無い事に耐えられない自分とは異なる適正の顕れなのかもしれない。
誰に知られる事もなく、吐き出していたのは安堵の溜息だった。
事前に少し知ってはいたけれど、白音は悪魔の下でも健やかに生活を送っているらしい。
これなら、少なくとも、見ていて辛い、という事は無さそうだ。
さして重要でない世間話をしながら歩く白音と男を見ながら、元猫？の悪魔、暫定名サバミソはそう結論づけた。

『端的に要求を言ってしまえば、これから貴女には幾つかの調査を手

伝って頂きたいと思っているのです』
『それに対するリターンとしては、そうですね、悪魔や禍の団の目を完全に欺いた状態で小猫さん……妹さんの普段の生活の一部を見守れるようにしましょう』
『調査が終わるまでの期間限定ではありますが、仮に隠蔽が失敗した状態でも、貴女が逃げるまでの身の安全くらいは約束しましょう』
『悪い話では無いと思いませんか？』
何が悪い話では無い、だ。
むしろ話が旨すぎて信じるのが難しいじゃないか。
結局全ては口約束で、この男はその気になればあの恐ろしい使い魔や自分の手で密かに始末を付けられるというのに。
捕まえて、それを誰にも知らせず、武器を突きつけながらの交渉に誠意を感じろとでも言うのだろうか。
……そう、悪態を吐くのは難しくない。
それこそ、今の現実に目を向けなければ、という話になるが。
「隣の席、ですか」
「なんとも作為を感じるけど、まぁ不便という訳でもないし」
「ですね」
に、と、男の声に頷きながら小さく笑みを零す妹。
嬉しそうに、楽しそうに男と言葉を交わすその姿に嘘がない、という程度の事は理解できてしまう。
きっと、妹はこの男の事を心底信頼している。意識的か無意識的かはともかくとして。
そして、そのどちらだったとしても、それは自分よりも余程付き合いが長いだろう妹が、この男の人間性をある程度理解した上での反応な訳で。
……その点を意識した上で考えると、確かに今の状態は高待遇と言えなくもない。
調査を手伝ってくれ、と言われ、しかし実際に行っているのは曖昧な記憶からの具体性のない道案内程度。
そして、こちらから姿を見せる事こそできないけれど、いや、見せ

ないからこそ、今の白音のありのままの普段の生活を垣間見る事ができている。
この男の言う通り、私は多少の手伝いで、やろうと思えばそれなりに手間になるだろう妹の観察を行えている。
少なくとも、今の時点では。

……さて、私は気ままな野良猫気質ではあるけれど、決して頭が悪く知識が少ない、という訳ではない。
仙術も妖術も、その他の様々な技術にしても、その大半は先人の積み重ねた知識を学んで身につけたもの。
所謂、白音が今通っているような学校に身を寄せたことはないけれど、それは学ぶ機会が無かったということにはならない。
学はなくても馬鹿じゃない、という奴だ。
インテリぶる訳ではなく、それが野生に生きるという事なのだ。
生きていく上で、学ぶことをせずに生きていける、『腕力家』とでも言えるような連中というのは所詮一握り、いや、一摘み程度しか居ないだろう。
お化けには学校も試験もなんにもない、というのは、ただ楽な暮らしをしているというだけの話ではない。
誰に測られるでもなく自分の力量を把握し、生きていく上での知識や力を自発的に手に入れていかなければならないという、自由であるが故に不自由とかどうとか言われる部分を表していると私は思う。
だから、新たな知識を学んで自らの力にする時には、モチベーションがとても大切だ。
この知識でこういう事ができるようになる、この場面ならこういう選択肢が増える。
自衛だけでなく、狩りを、戦いをする時に様々な選択肢を選べるというのは楽しいものだ。
獲物を嬲るのだって、猫の本能なのだから、そこを否定する理由は一切無い。
そして、そういった意味で言えば、この授業で学べる知識がどう役

に立つか、と言われると、中々に難しいものがあると思う。
「ふぁ……」
『んにゃ……』
授業を受けている白音も、本音を言えば私と同じ感想なのだろう。
少なくとも、この授業単独で考えてモチベーションを上げていくのは難しい。
だけど、それが無駄である、とは思わない。
私が知る限り、この国の子供達にはとても多くの、それこそ、悪魔や天使、堕天使、妖怪などと言った連中とは比べ物にならない程に多岐にわたった未来がある。
だから、この授業内容が将来的に必要になってくる職業というのも間違いなくある訳で。
逆に言えば、将来の夢に重なる部分の無い、或いは将来の夢に必要になると理解できないのならば、この授業は酷く無意味なものに思えてしまうのだろう。
そう思えば、多くが退屈に感じられる授業を、無駄なのではないかと思える程に多岐にわたる知識を半日ほど掛けてじっくりと教えこむ、というのは、恐ろしく贅沢な話といえる。
理屈の上で考えれば、この学校で教えている知識を余さず学び取る事ができるのなら、より多くの未来への選択肢を手に入れる事ができるのだから。
つまるところ、白音は実の姉が兇悪な犯罪者として指名手配されているにも関わらず、一般的な下級悪魔では考えられない程の高待遇を受けている、と言い換える事ができてしまう。
なんともはや、噂に聞く現魔王というのは本当に情け深い。
「小猫さん、小猫さん」
「ん……にゃ」
「そろそろ順番ですよ、起きて、起きてって」
本人はその恩恵を、十分に受け取れるだけの勤勉さは持ち合わせていないようだけれど。
白音がそれなりに良い環境で生活できている、というのは解った。

じゃあ、その場で白音は楽しくやれているのか、という点を疑問視したい。

したいのだけれど、したいのだけれど……。

傍から見て、その一点に疑問を持つのは難しい、と、そんな結論が出るのに、そう時間は掛からなかった。

見ていて分かる範囲だけで考えれば、この学校に通っている連中の大半は、知識を得ることに悦びを感じて学校に通っている訳ではないらしい。

そしてそれは、私の妹もまた同じ。

それぞれ多少の違いはあれど、この場所に通っているという事自体が目的でもある。

それは自分の経歴に箔をつけるためであったり、この場所で会える誰かのためだったり。

非常に、非常に納得のし難い話ではあるのだけれど、納得せざるを得ない部分もあるので、悩ましい。

だってそれは、ここから白音を攫ってしまえば、どうしても白音の心を曇らせる事になるという事だ。

力を得て、自分も白音も護り、鍛える事ができる程度に強くなった今こそ、一緒に暮らせると、そう思っていた私からすれば、どうにも素直に受け取れない。

白音は、塔城小猫という少女として、人間の中に紛れた悪魔として、割りと幸せにやれている。

少しは知っていたつもりだったけれど、自分の目で確認するのとでは大きく違う。

何も知らなかった幼い白音では見せなかった表情は、自分が居なかった間の成長を実感させるには十分すぎた。

別に、白音と再会して一緒に過ごすことを目的にしていた、という訳でもない。

基本的には生きるのに必死だったし、必死にならなくても自由に生きていけるようになってからも気ままに生きるだけだった。

だから、白音に会いに行ったのだってただの気まぐれが半分くらい

はあった。
攫って一緒に暮らそう、なんていうのもほぼ思いつきだ。
ただ、思いついた時点では、間違いなくいい考えだと思っていた。
今の生活があっても気にしないでいられると思っていた。
馬鹿げた話だ。
本当なら、こうして自分の目で確かめるまでも無く、わかっていなければならなかったのだ。
既に、白音は一度、家族と共に穏やかに生きる、という道を誰かに奪われている。
今、白音が手にした『穏やかな世界』を奪う事の意味を、少なくとも、誰が理解しなくとも、私は自覚しているべきだった。
何日も、何日も、短くなく、長くない時間、白音の今の生活を見て、私は欲しくもなかった納得を得てしまった。
欲しくはなくとも、もしも得ること無く進んでいたら、取り返しが付かなくなっただろう理解。
私の思いつきは、もしかしたら、ずっと前から心に抱いていたのかもしれない願いは果たせない。果たすべきではない。
でも、お陰で私は、白音に悲しみを強要せずに済んだ。
その点だけは、感謝するべきかもしれない。
「にゃあ、なあ、にあー」
意味もなく叫びだしたくなる衝動に任せ、鳴く。
授業の真っ最中、だけど、この球体の中から外には音は漏れない。
誰に聴かせるべきでもない鳴き声は、狭いボールの中を反響する事もなく、ただ私の鼓膜だけを震わせた。

どうしようもない、少なくとも、私の願う一つの未来は手に入れるべきでないと理解してしまった後でも、現状は続く。
それに異は無いけれど、以前ほどの意欲が湧かなくなったのも確かだ。
私は私が姉である以上当然備えているべき妹への愛情は持っているけれど、一日中妹を眺めているだけで心も身体も満たされる程に愛

情を拗らせている訳でもない。

……どうにも悲観的に聞こえるかもしれないけれど、つまるところ、私は改めて白音以外の諸々にしっかりと目を向ける事ができるようになっていた。

周囲に焦点を当てる事ができるようになった私は、白音を取り巻く環境、悪魔、人、そういうものに興味がそそられるようになっていた。

深く関わっている人間は少ないものの、概ね善良そうな連中である事はとても喜ばしい。

そして、そういった人間達を見回して、最後に目に入るのは……やはり、ある一人の少年だった。

私の名を奪っている……筈で、このサバミソという偽り……だったと思う名を与えて、私を縛り付けている、謎の多い少年。

読手書主という名の一人のニンジャ、いや、一人の人間は――――

―――――

「あ、小猫さん、おつかれ」

部室に入ると、何故か書主さんがソファに座ってリラックスしていた。

何故か、という程に不思議ではない程度には書主さんもオカ研の部室に訪れているのだけど。

「用事は?」

「一段落かな」

どうやら、最近急いで家に帰ってまで取り掛かっていた何がしかのトラブルは無事に解決したらしい。

だからといってオカ研に来る理由もそうそう見当たらないのだけれど、しいて言うなら居心地が良いのかもしれない。

これは別にここが一番のお気に入りとかいうポジティブな理由ではなく、書主さんの他の友人の部活などでは真っ当に部活動を行っているので、部員でもないのに部室で屯っているのは気が引ける、という程度の話だと思う。

放課後に来れば大抵誰か一人は居るし、それがギャーくんや木場先

輩であればそれなりに会話も弾むのでしょう。
　部長とはあまり話さないようだけど、イッセー先輩やアーシア先輩とも世間話やちょっとした誂い程度はするし、実は副部長ともそれなりに話せたりするらしい。
　……正直、ここまで来たら眷属にならないまでも、幽霊部員としてオカ研に席を置いても良いんじゃないのかな、とは思う。
　もちろん、まっすぐ帰る日の方が多くはあるけれど、それでもここに顔を出す頻度はそれなりに高い。
　悪魔含む神話関係のややこしい派閥争いだのに巻き込まれたくない、という、現状それほど意味があるとは思えない書主さんの主張を考えれば、仮にでも悪魔と同じ派閥に入るのはあり得ないのだろうけど。
「日影さんは？」
「女子セパタクロー部の練習試合の助っ人に行っちゃった」
　ああ、新設されたばっかりだから人手が足りてない、とか言ってた覚えが。
　それにしても、
「日影さん、割りと顔が広いですよね」
「ああ見えてかなりコミュ力があるから」
「書主さんより？」
「凄いでしょう」
　ここで恥じることなく胸を張れる書主さんもある意味凄いですけどね。
「それなりに人の往来のある道路でいかがわしい本とか落とした女子に拾って渡して『なぁ、これ、面白いんか？』とか声も小さくせず本を隠したりもせず話し掛けたりできるレベルのコミュ力、とても此方には真似できません」
　それは真似をしないであげてください死んでしまいます。
　という言葉を飲み込み、鞄を置いて書主さんの隣に座る。
　これは別に隣りにいるのが習慣づいているとかいう事ではなく、書主さんの手の中にあるものが気になっただけなので勘違いしてはい

けない。
「何読んでるんですか?」
　というのも、書主さんはさっきから私と話しつつも、手の中の一冊の雑誌に目を落としたままなのだ。
　別に会話をする時は目を見て話しなさい、なんて事を言うつもりは無いけれど、そこまで集中して見る本とはどんなものなのか、気になる。
「普通の週刊誌かなぁ」
「週刊忍者とか?」
「それは先週合併号だったから今週は休み」
「あるんですか週刊忍者」
「先週の付録の忍シュリケン、直前にオークションで落としたモデルの復刻版で……。消えていった諭吉は何だったのかっていう……」
「ご愁傷様です」
　忍シュリケンとは何なのか、という疑問を軽くスルーしながら、身を乗り出して雑誌の中に目を通す。
「冥界の字、読めるんですか?」
「そりゃ、こうして丁寧に纏められてるからね。読めない理由も無い」
　これも見れば判る、というものなのでしょうか。
　尋ねる程の事でもないか、と思いつつ、雑誌の中身を横から一緒になって読む、
　……ふりをして、バレないように少しだけ、本を読むために薄っすらと開いた瞼の奥を見る。
　そこにあるのは何時も通りの不思議な瞳。
　宇宙を押し込めたような、というのが一番端的で解りやすく、でも、それだけでは説明の付かない不思議な輝きを宿した瞳。
　平時であれば、日影さんと居る時でも無ければ見ることも中々無い。
　平時でない時、鉄火場であれば、この星の海の様な、光沢の代わりに底のない奥行きがある黒曜石の様な瞳は、まっすぐ見るには辛い苛烈な感情を宿してしまう。

それを、こんな何気ない学校生活の中の一ページで独占できるのは、中々贅沢な事だ。

別に、変な意味ではなくて、あの輝きは、どうにも心が惹かれてしまう。

光り物を好む猫としての本能かもしれない。

そういった、野生の本能とか、これまで得た知識とかから考えれば、少なくとも、今まで見たどんな宝石よりも、書主さんの瞳は……。

「あ、小猫さん、特集組まれてる」

「え……え？　本当ですか？」

少し変な事を考えていたせいで反応が遅れてしまった。

書主さんは終始視線を雑誌の中だけに落としているから、見つめられていた事には気づいていないだろうというのが救いか。

「ほら、このページ、丸々小猫さん特集」

「なんというか、これは」

テレビのインタビューはこの間受けたけれど、何故だかあの時よりも恥ずかしい。

それが友人に見られているからか、紙面に起こされてその場で何度でも読み返せてしまうからかは分からないけれど。

内容は、主にこの間のシトリー眷属とのレーティングゲームでの活躍に焦点が当てられている。

「『期待の新星、新たな大魔導師、塔城小猫の秘密に迫る』かぁ、いや、如何にもって感じの記事じゃないですか大魔導師さん」

「や、やめてくださいよ……」

大魔導師、という称号は、如何にも事実からかけ離れている。

大体、それを言えば私よりもこの魔術に関して造詣の深い筈の書主さんは何になってしまうというのか。

……そこら辺の話は実は何度かしているのに、何故か夏休みの前と後で答えが違っていたんですよね……。

前は、『ニンジャで錬金術士だから魔法も嗜みの内なんですよ』とか言ってたのに。

『実は魔術結社で幹部のバイトをしていた事が』とか、夏休みの間に一

体何が……。

「でも、なんかこう、単純に褒めそやすでも持ち上げるでも無い、微妙に奥歯にモノの挟まったような内容ですね、煽りの割りに」

特集の中身を読み進めていた書主さんが首を捻る。

記事をざっとななめ読みしてみれば、使う魔術の幅広さを褒めているようでいて、その術の制御がどれほど正確であるか、暴発、或いは暴走して味方に向けられた場合の危険性なども書かれている。

勿論脈絡なく書かれている訳ではなく、年若い下級悪魔であるが故の技術の未熟さがあるのではないか、という疑念からスライドしてそこに至っているのだけど。

やっぱり、違和感は否めない。

むしろ逆に、最初の術の多彩さと運用の上手さ、などのプラス要素すら、後半の疑念に繋げようとしているようにも読める。

「……まぁ、仕方ないんじゃないですか？　ほら、活躍したって言っても公式戦は一回しかしてない新人ですし」

一応、魔王様直々に保護されている上に名前も変えてはいるけれど、判る相手には判る、という事なのでしょう。

こんな雑誌の編集の中にも事情を知るひとが紛れていたか、さもなければ、何処からか圧力が掛かったか。

半々、いや、どっちもという可能性だってある。

そんなのは今更の話なので、別段気にもならない。

……というのは、少しだけ、嘘だ。

私に当たって来る事よりも、むしろ、その大本、姉様の王殺しについて。

こうして今もこういう扱いを受けるという事は、結局は誰一人として真相を知らないのだろうな、という、それだけが、少しだけ、嫌だ。

冥界にとって、姉様は今も力を暴走させて本能に飲み込まれ主を殺した極悪な犯罪者でしかないらしい。

実際のところ、私だって、姉様の本当の事情なんて知りもしないのだけど。

それでも、違うと私は確信している。

でも、違う、という事を、たぶん、誰にも証明できない。
「小猫さん」
「……何ですkむぐ」
雑誌から顔を上げると、返事を遮るように口の中に何かを押しこまれた。
硬い、乾いている、舌に触れると少し甘み、酸味も同時に来て……、じゃなくて。
「はにすふるんへすか」
「いや、ぼーっとしてたから、眠気覚ましをね」
「む」
別に呆けていた訳でも、眠いわけでもないです。
……と、言わなくても書主さんは理解しているだろうから、口の中に押し込まれた何かを軽く咬みながら舌の上で転がす。
ドライフルーツ、たぶん苺だろうか。
少しだけ高級感があって、スーパーや量販店に行かなければ無いようなイメージがあるけれど、最近ではとあるコンビニのプライベートブランドで展開しているために気軽に手に入るものだ。
割りと万人受けする味で、私も書主さんも揃って気に入っている。
「美味しい」
「もっと食べる？」
「ん」
「はい」
掌を差し出すと、その上にコロコロと乾燥した苺が転がってきた。
……私も大概だけど、書主さんも大概不器用な人だと思う。
私の様子がおかしくなったのを見て、元気づけようとしているのかもしれないけど、それが餌付けというのは、女の子を単純に考えすぎではないでしょうか。
女の子の扱い全般がこれなら、日影さんは苦労しそうだ。
「……ありがとうございます」
私は割りと単純だからいいですけど。
「どう致しまして。……しかし、他の人ら来ないねぇ」

本を閉じ、瞼を閉じて顔を部室の入り口に向ける書主さん。
時計に目をやれば、もう授業が終わって結構な時間が経っている。
レーティングゲームも近いから通常の部活は中止、という可能性もあるけど、それなら逆に皆で特訓、という流れもありえる。
なのに、部長や副部長どころか、かなりの確率で部室に居るギャーくんすら居ない……。
もう一度、視線を入り口に向ける。
部室の中は電灯もあり明るいけれど、廊下はあくまでも使用されていない旧校舎というていで通している為暗く、中から外を確認するのは難しい。
視線を向けた時に入り口のドアが『ガタッ！』と揺れたとしても、ドアの外を中から確認するのは難しいのである。
「書主さん、何か投げるもの持ってません？　石とか」
「生憎と鉄の手裏剣くらいしか」
貸して、と言う前に一枚差し出してくれた。
さすが親友的なレベルに達した友達、中々にツーカーでちょっとうれしい。
「急に手裏剣が投げたくなりました。どうせ旧校舎ですし、廊下に向けて投げれば誰にも迷惑かけませんよね」
「ですね、旧校舎ですし。居るとしたらオカ研メンバーでしょうが、オカ研の人らは気配絶ったり足音消したりして廊下で部室の中聞き耳する理由も無いでしょうし」
「ですね……で、手裏剣ってどう投げればいいんですか」
「サイコ――、スリケンは心で投げるんですよ」
ヒューッ！
テクニカルかつスピリチュアルなアドバイスに従い、ソファから立ち上がり、先日古本屋で立ち読みした古い野球漫画の如く大きく振りかぶり、投げる。
高速で回転し空気を引き裂く音を立てながら手裏剣が飛んで行く。
ギュン、と、弧を描く様に飛んだ手裏剣は、さほど分厚くない部室のドアを貫いて姿を消していった。

……その瞬間に廊下から「ひゃわぁ！」とか、「い、いま、耳、耳に、チュンッて！」とか「だからやめておきなさいって言ったのに……」とか、「ぶ、部長、今からでも素知らぬ顔で入りましょう！」とか、「早く入りませんか？」とか、そんな声が聞こえてきた様な気がしましたが。

勿論気のせいです。私のログには何もありませんね。

それにしても思ったよりまっすぐ飛びません。

「まっすぐ飛ばすつもりならそんなに回転数は必要ないよ。当てるだけならもっとリラックスして、腕の振りは靭やかに、でもリリース時の指先はソフトに」

「奥が深い」

「色んな力学も絡んでくるからね。しっかり技術を納めれば光速で移動する標的にも当たるから、拘りある派閥もあるし」

はい、と追加で手裏剣を渡される。

別に何処を狙って投げている訳ではないけれど、幻聴の大本の位置は把握できた。

日々健康な生活を送っているのに幻聴が聞こえるというのは気味が悪いので大本を絶ちましょう（使命感）。

腕を鞭のようにして手裏剣を投げ、廊下から『すこんッ』という小気味いい音と共にイッセー先輩の声に似た悲鳴が上がる。

惜しい、じゃない、幻聴が酷いですね。

とはいえ、コレ以上は事故では済ませられないので話題を切り替える。

「そういえばそろそろレーティングゲームの開催日なんですけど……」

「応援しにいくよ。まぁ、他の用事のついでになっちゃうけど」

それは良かった。

用事だけ済ませてレーティングゲームを見もせずに帰られたらそれはそれで寂しい。

「物販とかあります？　顔写真入りうちわとかあるなら買った方がいいですかね」

「そこまで一般向けではありませんし」
「小猫のプロマイドとかなら撮影許可はここで出せるわよ」
ガラッ！　と、勢い良く戸を開けて優雅ポーズを決めながら澄ましたお姉さま顔で言う部長。
誰が許可を出すんですか？
そう言葉にするよりも早く、髪を掻き上げる大物ポーズにシフト。
「ただし！　水着以上の露出は本人との要交渉よ。……まぁ大丈夫でしょうけどね！」
書主さんを指さしながら、バァーンッ！　と効果音が付きそうな程のキメ顔。
もしかしてもっと手裏剣が必要なのかもしれない。魔法だと足がつきますし。
「ほら、リアス。ボケるもいい加減にしないと、愛想つかされちゃうわよ？」
そう言いながら部長の背中を押しながら部室に入ってくる副部長、何故かビクついているアーシア先輩やイッセー先輩、四人から一歩下がって苦笑を浮かべている祐斗先輩。
最後に、他人事の様に声を殺して笑う書主さんを見て、毎度の事か、と、さほど深刻でない諦めと共に、一つ溜息を吐く。
こうして、私のいつもとさほど変わらない、放課後の一時が始まるのでした。

四十八話　提案、多くを望めば

レーティングゲームは冥界全土に中継され、一般家庭でも視聴される事が多いメジャーな競技である。

貴族、上級悪魔達が眷属を率いて行う『戦争ごっこ』という大まかな括りこそあるものの、その試合形式は多種多様。

人類の文化で近いものを挙げるとすれば、古代ローマのコロッセオにて行われていた剣闘士同士の戦いのようなものだろうか。

悪魔の歴史の長さを考えればレーティングゲームこそがオリジナルである可能性もあるが、古代ローマのインチキ臭い程高い文化レベルを考えるとどちらが先でもおかしくはない。

ともあれ、様々なルールに則り行われる、優れた技量を持つ戦士達の血沸き肉踊る戦いは大衆受けも良く、それなりに多くのストレスを抱えて生きている連中のガス抜きにもなっている。

人間に限らず悪魔に限らず、生きていく上でストレスとは無縁で居られない以上、ガス抜きとも無縁では居られない。

そのため、レーティングゲームは悪魔社会において上から下まで、それこそ魔王様から一般下級悪魔に至るまで、広く親しまれている娯楽なのだ。

では、レーティングゲームを会場近くで観戦するのもそうかと言えばそうとも言い切れない。

撮影、中継技術が発達したとして、『特等席で見る』という特別感を満たしたいと思い、実際に満たすことができるのはそれなりに立場のある貴族や来賓などに限られてしまう。

更に言えば、高い能力を備えた悪魔の派手な戦いとは別に、貴族達のメンツを掛けた戦い……というか、『うちはこうきでちからがあるすごいいえなんだぞっ！』という感じの満足感を与えるという部分もあるのかもしれない。

なので、試合を直近で観覧する事ができる場所というのは自然とＶＩＰが集まる、下々からすると実に入りにくい場所になる。

「こちらをどうぞ」

「ありがとう」
　如何にも美形！　と言った風貌のボーイさんからグラスを受け取る。
　こういった小間使いの所作一つ取ってみても洗練されており、上流階級の雰囲気が感じられる。
　遭遇した回数こそ少ないものの、魔王直属のメイドであるグレイフィア某と比べてもそれほど見劣りしない。
　逆に言えばこういったＶＩＰが集まる場所でせっせと動きまわるボーイさんと大差ない技術しか無いのが魔王のメイドという事になってしまうのだが。
　……まぁあちらは魔王の妻でもあるらしいので、従者としてのランクは控えめなのかもしれないが。
　談笑する貴族（上級悪魔？　結局どういう基準で貴族が決まるのか分かりかねる）の間を擦り抜けながら歩き、目的の場所に辿り着く。
「お久しぶりです」
「君は……」
　目当ての人物（悪魔だがややこしいので人で良いだろう）に声を掛け、ＴＰＯに合わせてそれらしい動作で礼をする。
　潜入する時に必要になる『かも』しれないという事で、一応最低限の教育は受けているし、冥界でそれなりの立場に居る貴族から礼儀作法の知識も得ているので問題はないだろう。
　ようは一時を乗りきれる程度に不自然で無ければ問題は発生しないのだ。

「魔王様に於かれましてはご機嫌麗しく」
　す、と、スカートの端を持ち上げ一礼してくるブロンドの女性に、魔王、サーゼクス・ルシファーは柔らかな笑顔を向けたまま内心で困惑していた。
　冥界という土地は広く、悪魔の統治する土地も広大ながら、貴族に分類されるほど上等な悪魔の数はそれに反比例するように少ない。
　現役を退いた隠居を含めれば多少増えもするが、それでも決して多

くはなく、その大半をサーゼクスは頭の中に記憶していた。
悪魔という身内にも多くの敵を持つサーゼクスとしては必須と言っていい知識だ。
勿論、末端まで全員の顔と名前を完全に覚えているか、と聞かれれば首を横に振らなければならないが、少なくともこういった社交場に出てくる程度に立場のある貴族であれば覚えていない筈もない。
知っていて当たり前と思う知識を思い出せない不覚を顔に出すこと無く、サーゼクスは頭の中に言葉を幾つか思い浮かべる。
だがその言葉の大半は誤魔化してこの場を乗り切る為の言葉でなく、相手の持っているであろう貴族特有の自尊心を傷付けないように自らの不覚を詫び、相手の名を問う為のものであった。
魔王となる経緯が経緯であったサーゼクスは、自分にできる範囲で誠実であろうとしているのだ。
勿論、それが万事において正しい選択である訳もないのだが、この場でその選択が正しいかどうかを問われる事は無かった。
淑女然とした振る舞いで挨拶を行っていたドレス姿の女性が、喉を震わせてくつくつと笑い始めたのだ。
「……いや、失礼。悪戯が過ぎましたね、魔王さん」
開いたドレスの胸元から、人差し指と中指で一通の便箋を取り出す女性。
「用事のついでになりますが、今回はお招き頂きありがとうございます」
に、と、悪戯に成功した子供の様な笑みを浮かべる女性に、それでも心当たりが思い浮かばない。
が、女性が取り出した便箋には見覚えがあった。
それは妹の恩人である、とある人間に当てた手紙だった。
「君は……読手書主君の仲間かね？」
招待状を同梱した手紙ではあるが、会場に入る際に当然招待状と入場者の確認は行われる。
一般的なレーティングゲームの観覧室はそれほど厳重な警備がされている訳ではないが、この試合は事前の調査で『何事か』が起きる

事がほぼ確定している為、通常時よりも厳重な確認が行われている。
　全くの別人であるこの女性がこの招待状でこの会場に入る事はできない筈なのだ。
「まさか。此方は招待状を捨てる事はあっても、譲るなんてするつもりはありませんよ。後々問題が起きて文句を言われるのもつまらないですからね」
　口元に手を添え、ころころと笑う。
　発言の内容を鑑みれば、この女性こそ、幾度か顔を合わせたことのあるあの少年という事になるのだが……。
「その格好は、趣味かな？」
「脳味噌湧いてるんですか貴方は。……今更な話にはなりますが、好き好んで貴族（馬鹿）に顔を売って、下らない勢力争いに組み込まれたくないんですよ」
　一瞬だけ真顔に戻った女性――書主が笑顔を貼り直しながら吐き捨てる。
「しかし君は既に幾度か私達に協力して禍の団と敵対しているし、古参の堕天使とも事を構えている」
　それこそ既に三大勢力のトップ陣には知れ渡っている事だ。
　コカビエルの引き起こしたエクスカリバー事件での助成に、三大勢力の平和条約を締結したあの会議での共闘。
　それ以前に行われた、とある下級悪魔への肩入れの件も含めて、既に彼が悪魔の勢力下に半ば身を置いていると見ている者も少なからず居るだろう。
「有害なテロリストや制御装置（あたま）の壊れた（イカれたバカ）爆弾を処理しただけですよ。仮に貴方がたがあの場に居なくとも、此方が同じ場面に出くわせば、同じ行動をして同じ結果を出しました。協力云々は結果論、此方の力の向かう先が偶然にも貴方がたの敵だったというだけの話、というか、善良に生きていればゴミ拾いくらいはするでしょう？」
「なるほど」
　肩を竦める彼の言動を頭の中で咀嚼し飲み込み、納得の頷きを返す。

確かに、本人からも以前に確認しているスタンスからすれば、三大勢力の助成のあるなしに関わらず、彼は人道に悖る犯罪者などを見れば同じ行動を取るだろう。

そしてそれは何処の勢力にも所属する動機が無いというだけでなく、条件さえ満たしてしまえば何処の勢力であれ彼に取っての敵（あるいは的）に成り得る事を示しても居る。

考えようによっては、下手に懐に入れて弱みを見せるのは危険な存在とも取れるだろう。

それは彼の戦闘力の強大さという意味ではなく、どのような組織であれ少なからず抱えている暗部が、彼の標的足りえるかもしれないという将来的な面での危険性だ。

「出来れば偶然同席したボランティアというだけでなく、良き隣人としてありたいものだが」

「それこそ貴方のあり方次第。友情は個人と個人が結ぶもので、個人をグループが縛るものではありませんよ」

「これは手厳しいな」

「当たり前の話です。まぁ、あえて当たり前を避けて話を進めたくなる、というのも解らないではありません。聖書の勢力も手が足りないでしょう。だから、という訳でもありませんが……」

にこり、と、扮した女性の姿に似合う朗らかな笑みを浮かべ、各勢力の個室がある部屋を指差す。

「脚を引っ張る馬鹿を切り捨てて、使える『猫の手』を拾える素敵なお話があるんです。……少し、お時間頂けますね？」

魔王さんが此方の変装に気を取られた為に聞かれなかったが、此方は入場するために招待状を使用していない。

冥界への行き来も容易になり召喚陣を利用する必要も無く、入り口での入場者チェックははっきり言ってザルそのものだ。

聖書の陣営だけでなく、その他の友好的な神話勢力も招いている為、友好と信頼の意を示しているのだろう。

勿論、仮に今よりも多少警備が厳重になっていたとしても、忍者と

してそれなり以上に優れた技術を持つ此方からすれば、忍術である『彷徨』を使うまでもなく楽に忍びこむことは出来ただろう。

だが、如何に今回の目的があるとはいえ、頭が悪そうでモラルの低そうな、それでいてプライドだけは成層圏を余裕で突き抜けて行きそうな程に高い悪魔の貴族の方々に素顔を晒したくはないのである。

まかり間違っても誰かに情報を漏らすつもりはないが、此方の目の障害は、彼らに取っては貴重な能力であるように映るだろう。

どのような理由であれこの目の、この視界の齎すあれやこれやを無思慮に利用されたくはない。

まして、相手はレアな神器や能力を備えた人間を手元に集めてレアカードを手に入れたＴＣＧプレヤーの如く仲間内で見せびらかし合う悪趣味というか下劣で品性に欠ける嗜好を備えているのだ。

その不快感を味わうくらいなら、完全に素顔を隠す変装程度ならいくらでもやってみせよう。

別に女装が趣味になっている、という訳ではない。

勿論、女装が似合わないから嫌という訳でもなく、母親譲りの少し女性らしいパーツも顔にはあるし、肉体そのものをかなりの割合で変形させる忍者式の変装であれば元の顔はあまり関係ない。

元が男性である場合、やはり完全に女性に化けてしまったほうが正体が発覚する危険性は少ないのだ。

……などという言い訳を内心でしている間にも、魔王さんは此方の用意した資料に目を通してくれている。

ここ最近の放課後を費やして調べた情報は、魔王さんに真剣な、それこそ本当に心を痛めているのだと判る雰囲気を出してもらう事に成功していた。

「……それで、どうです？　軽く読んだだけでも、お家一つが軽く完全にお取り潰しになるには足りると思いますが」

「まだ、これに関する情報はあるのかな」

「紙資料だけでは不足というなら、あちらさんが残していた実際の『標本』とか、記録映像なんかもありますよ？」

残念な事に生き証人は実験を行っていた側の連中だけになるが、彼

らには既に正確な証言を素直に行って貰うための追記を施している。
そして、一番の成果とも言えるサバミソ（今更ながらこの名前は無い。知らずの事とはいえ、小猫さんには後日反省を促すべきかもしれない）に首謀者を殺されながらも未練がましく残していた標本に関しては、十分すぎる程の量を手に入れている。
勿論、物理的な部分だけでなく、標本――彼ら、または彼女等の死体に残された霊魂の残滓、残留思念も、証言ができる程度に此方で保護、保持を行っている。
冥界の法律についてはこの調査を行う過程で幾らか調べては居るが、これは明らかに法に準じた正当な実験ではない。
しかるべきところに出れば、貴族がどうのというだけで誤魔化すには無理がある程に重い罪だ。
「集められるだけの証拠は集めてあります。これでも裁けないというのなら、まぁ、なんですか、冥界も魔王も『知れたもの』なんじゃないですかね」
「少なくとも、この資料は正当に扱われ、彼らは罪に準じた罰を与えられる事は約束しよう。……確かに冥界は理想的な世界とは言い難いが、君に今見限られる程に終わっている訳ではない。だが……」
だが。
そう、『だが』から続く、ここからがこの話の本題になる。
極端な話、此方は冥界の貴族が冥界の中でどれだけ好き勝手しようが知ったことではないのだ。
もしも彼らが、というか、冥界が明確に人間の世界に対して大きな害を成そうというのなら、それこそこんな細かい真似をする必要はない。
冥界でぶいぶい言わせている馬鹿をどうにかしようと思うのなら、もっと大雑把で簡単で足がつかない方法が幾らでもある。
元から数千年前とか数百年前から緩やかに衰退している世界なのだ。
彼らが人間の世界に齎す利益と不利益を天秤に掛けても恐らく不利益の方が多い。

遠慮する必要もない。
例えば、ある日突然、この世界と冥界の繋がりが完全に断たれたら？
例えば、ある日突然、悪魔や天使、堕天使、神々が一斉に魔力も特殊能力も保たない無力な人間に成ったとしたら？
例えば、冥界に存在する、魔力やなにやを使う、人間の知る物理法則に反する機能を有する、力ある、もしくは使用者に力を与えるアーティファクトが一つ残らず消滅したとしたら。
たったそれだけで、冥界が此方の認識する範囲を害するのはとても難しくなるだろう。
勿論、そんな真似を態々する必要は今のところ無い。
別に、冥界の会ったこともない悪魔の皆さんに何か恨みがあるわけでもなく、かかわり合いにならない範囲で起きるのであれば、何をしていようと知ったことではない。
「この事実を知らせて貰えたことは素直に有り難い。この情報は冥界にとって、冥界の秩序と平和に良い影響を齎すだろう。だから、教えてほしい。この情報を私達に齎した君が、望む事は何なのか」
そう、これは取引だ。
それも、悪魔との取引の様に単純なものではない。
彼等に対価を与えて願いを叶えるだけの取引では手に入れられないものを得るための。
彼等では叶えられない部分を予め此方で叶えた上で、彼等にしか叶えられない願いを叶える為の、取引。
「何、それほど難しい話じゃあ無いですよ。まず先の話を、今も何処かで似たような事をしているであろう連中への戒めも含めて大々的に公表すること。そっちがしなけりゃこっちで勝手にばら撒きます」
『怪文』は優秀。古事記にもそう書いてある。
「約束しよう」
「その約束が果たされるよう願います。で、もう一つ、此方が本命です」
「それは？」

「それは……」

「今日は会談に応じて頂き、ありがとうございました」
「いや、こちらこそ礼を言わせて貰いたい。私の王としての未熟が招いた過ちを、また一つ自覚する事ができた」
「いえいえ」
レーティングゲームの貴賓席にて、やたら座り心地の良い椅子に座り、手にしたノンアルコールドリンク（薄目で読んで毒や薬物が入っていない事は確認済み）を舐めながら魔王さんの礼を軽く受け流す。
「だが、良かったのかね？　もう一つの願いは、もう少し欲を出す事も出来た筈だが」
「まさか。確かにもうちょっと良い条件にしたくはありましたが、情状酌量の余地を含めて考えてもあれが落とし所としては適当でしょう。願いを大きくして追加で対価を出せと言われたくもありませんでしたしね」
「……君は、不思議な人間だ。情が深いのか浅いのか、図りかねる」
「でも、珍しい人間じゃあない。そうでしょう？」
「ああ、昔から知っていた事さ。人間は不思議だ。それはきっと、堕天使も天使も思っている」
「鏡を見ろ、と言ってやりたいですがね、人間からすれば」
「難しいものだよ。なにせ、鏡に映らない種族も多い」
「映っても見えない連中も？」
「負けないくらいにね。困った話だが」
この場に居るのが側で控えているメイド奥さんと此方しか居ないからか、それとも普段からこういうノリなのか、魔王さんの口はよく滑る。
思えばこの人（悪魔だが）と言葉を交わした事はそれほど多くない。まともに会話をしたのは例の寿司屋でドリアを奢らせた時か、いや、奢ったのはアザゼルさんだったか。
数少ない会話を思い返せば、彼の人格というのがどういう方向性を持っているか、というのもなんとなくわかってくる。

恐らく、この魔王さんはそれなり以上に善性のある人格者なのだろう。
他人の不幸を悲しむ事もでき、自分の不出来を自覚すれば恥じ入る事ができる程度には。
つまり、魔王向きじゃあない。
勿論、人間からすれば魔王向きの人格の魔王の方が危険ではあるのだけれど。
「苦労しますね」
「なに、立場相応のものさ」
瞼を開けずとも、彼が小さく笑みを浮かべている、という程度の事も、実際に負う苦労が魔王という立場であれば当たり前と言えない程度には重いものであるということくらいは判る。
言葉を重ねたことは少なくとも、彼自身の性能事態は既に熟知している。
その気になれば彼はもっと自由に振る舞える程度の力は持っているのだ。
まともに殺そうとすればフィジカルリアクターを使わざるを得ない。
それこそ、暴君として君臨したとしても、少なくとも現状の聖書の勢力の中で逆らえる者は居ないだろう。
苦労性、貧乏くじを引くタイプだ。
その出生故に、その力故に、彼は秩序と平和を重んじようとする。
自らのあり方を自分の心から生まれた願いから決め、その為に自分の力を律して生きていこうとするタイプ。
正直な話、嫌いではない。
カリスマがある、という点ではなく、その人格とあり方に好感を抱く。
「貴方が慕われている理由がわかった気がします」
「それは良かった」
ここで、悪魔の勢力に加わらないか、と誘わないところもいい。
主と仰ぐには善人過ぎて失格だが、知人として交流を持つには良い

相手だ。
まぁ、魔王と知人とか噂されると恥ずかしいし厄介事にしかならないので嫌だが。
彼が魔王を辞めた後に此方が生きていれば友達にでもなれるかもしれない。
「なんじゃ、相変わらずモテるのう。この乳もいずれはお主のものか？」
少なくとも、ひっそりと入り口から入ってきて音もなく此方の乳を揉んでいるこの老人よりは余程その目がある。
この卑猥極まりない揉み方、中々の熟練者と思われるが……。
溜息。
この乳を男のものと理解せずに揉んだか、男の変装と知った上で揉んだかによって評価は別れる。
未熟者か異端者、どちらにせよ、断りもなしに人の乳に触れる時点で紳士とは言えない。
この世には二種類のおっぱいがある。
女のものか男のものか、ではない。
揉んでいいおっぱいと、揉んではいけないおっぱいだ。
少なくともこの胸は揉まれる為に膨らませている訳ではない。
「魔王さん、侵入者ですよ。殺していいんですか？」
取り出すのは一丁の拳銃。
刀は無しだ。素性がバレる。
銃口を声と気配のする方に向けると老人は此方の胸から手を離し、戯けるように両手を上げた。
「おおっと、乱暴な嬢ちゃん……いや、少年じゃな。その物騒なもんをしまってくれんか」
「神族なら拳銃くらいどうってこと無いでしょう」
「ただの拳銃ならの。だがわしゃそんなもんは知らん」
「ただの『コルト』ですよ。後でカタログをお送りしますか？」
この世界では、まだ倒産していない筈だし。
と、胡散臭い神っぽい爺に座ったまま銃口を向けて遊んでいると、

驚いたように魔王さんが椅子を鳴らしながら立ち上がった。
「オーディン殿、何時から此処へ」
「何、試合まで多少の時間はあるとはいえ、メイドと背景に溶け込むような気配の娘と控室に戻るお主が見えたのでの。少し気になって後を付けてみたのよ」
おお、此方の隠行を見抜いたとは、流石厨二の憧れ北欧神話の首魁。
馬鹿みたいに多い呼び名は伊達じゃないのかもしれない。
「すまない、どうやら話を聞かれてしまっていたようだ」
「別に、構いませんよ。元から公表する予定の話です」
「じゃが、お主からこの話が始まった、という事は知られてもいいものかのう」
「おや、脅しですか？　仮にも北欧の主神が、たかだか一人の人間に？」
「ただの好奇心じゃよ。お主は恐らく、ワシも知らぬものを多く知り、多く持つのじゃろう？」
なるほど、要は、なんか珍しいものを見せろ、と。
当然、此方から出た話である事を黙っていて貰う方がいい。
そこは呪術の一種という事で追記させて貰うとして……。
ちら、と、瞼を開けて老人――オーディン、縮めておでんの姿を確認する。
特に激的な場面でもない為、そこにあるのは何時も通りのクソッタレな文字列の塊。
お、グングニルの記述発見、ちょっとうれしい。
だが本題はそこではなく、おでんさんが知らず、おでんさんが好みそうな対価とくれば……。
「その内、貴方のとこのロキさんが反逆かましてくるんですが」
「何？」
「ほほう」
驚く魔王さんと、興味深そうに、それでそれで？　と聞きの態勢に入るおでんさん。
「その時にロキさんは死ぬ事になると思いますので、現状にそれほど反感を抱かず、しかし能力的には完全に元通り、それでいて露出度の

高いグラマラスなセクシー美女な僕っ娘と化した新たなロキさんを新たに用意しましょう」
「ふうむ、言葉だけじゃあわからんのう、写真とかあれば判断のしようもあるんじゃがなぁ」
わがままさんだなぁ。
「紙とペンあります？」
「こちらに」
「ありがとうございます」
メイドさんから手渡されたメモ帳とペンを手に、瞼を開け、ささささっと描き上げていく。
青髪ショートカット、下半身が際どいパンツのみ、メロンの如くたおやかな胸の大半を惜しげも無く晒す大きく前の開いたファンタジックな上着。
艶やかな笑みの浮かんだ整った顔、手には当然鞭。
因みに足先まで書くのは立ち絵の関係で難しい為、自然と描きかけにしかならず、この場で実体化はしない。
実体化させる時はどうするか？
行為中のシーンで全身が映ってるのがいくつかあるので、拘束が済んでるものを選んで描こうと思う。
この世界のロキと同じ記述を追記するのにもその方が便利だしね。
「こういう感じの娘です。まぁ仮にも人外ですし此方が娘って言うのもおかしな話ですが」
瞼を閉じ、切り取ったメモを渡す。
「達筆だね」
「それほどでも」
「どうやって用立てるつもりじゃ？」
「その情報は課金コンテンツになります」
「金で買えるんか」
「期間限定ガチャで引き当ててくださいな。ピックアップだから確率はそれなりにありますよ。ええ、勿論、嘘じゃありません」
「おうサーゼクス、このガキ実は悪魔じゃろ」

「失礼ながらオーディン殿、悪魔は契約を守ります」
「失礼な、ガチャだって何時かは当たります。ほらほら北欧神話預金をひっくり返す時が来ましたよ」
期間限定戦乙女ヴァルキリーピックアップガチャ、好評開催中です！
ほら回せよ、当てなきゃここまでつぎ込んだ金は全部無駄になるぞ。
宝くじだって確率的に当たる事はあるんだからそう疑うなって。
「まぁええわい。たかが小僧っ子一人の事を一々言いふらすよな趣味は無いしの」
メモを仕舞い、どっこいせ、と、おでんさんがいつの間にか用意されていた椅子に腰掛ける。
どうやらこのままここでレーティングゲームを観戦していくつもりらしい。
まぁそれはいいんだが。
「疑わしいのでちょっと手ぇ貸してください」
「なんじゃ、握手か？　言っとくがワシは呪術の達人じゃぞ？」
「たぶん貴方も知らない術ですよ？　興味ありません？」
「ほう、まぁ見せてみぃ」
「私も見せて貰って構わないかな？」
「理解できなくても文句は言わないで下さいね？」
小説の登場人物は、自分が文字にて描写される事を自覚できるものだろうか。
よしんばデップーのごとき能力を備えていたとしてもそれは演出上の能力でしかない。
少なくとも、此方が文章を追加する場面を見て、何か文字を書いているという事に気付けた存在は今まで居ない。
例外が居たなら居たでそれは嬉しい。
北欧のビッグネームの手を取り、追記のために指先を当てる此方と、それを横から覗き込む魔王さん、そして脇目でちらりと視線を向けるメイドさん。

……老人の手を全員が興味深げに覗きこむ場面は、少なくとも挿絵になる程度にはシュールな絵面であったらしい。

さて、念の為の情報規制を終えた今、用事らしい用事と言えば、小猫さんとギャスパーの参加するレーティングゲームの観戦のみ。

「そういえば聞いてなかったんですけど、グレモリーさんのチームが戦う相手ってどんなとこ何ですか？」

「リアスから聞いて来なかったのかい？」

「小猫さんから、ストーカーが王様ってのは聞きましたけど」

別に、レーティングゲーム自体はどうでもいいかなぁって。

小猫さんとギャスパーの応援はするけど、別に相手チームの情報が応援に必要って訳でもないし。

「リアスお嬢様の対戦相手は、ディオドラ・アスタロト。最近になって急激に力を伸ばしたレーティングゲームのベテランプレイヤーです」

一歩引いていたメイドさんが主の魔王さんに代わり応えてくれた。

魔王さんではないと進められない話の時は沈黙を守り、魔王さんの答えるまでもない些細な問いには代わりになって応える、まさにメイドの鑑だ。

「へー、急激に。何か裏ワザでも使ったんですかね」

「はい。三陣営トップで調査をした結果、彼がとある存在から力を与えられているのではないか、という疑いが」

なるほどなー。

まぁ誰かから力を与えられてパワーアップというのは兵藤先輩だってやっている事だしそれこそ小猫さんなんて魔法を使う度に他所から力を持ってきている。

そも自分以外から力を借りるのがアウトなら召喚系の術は全禁止になってしまうだろう。

じゃあなんで三陣営トップが揃って調査なんてしてるのって話だよね。

「もしかして、借りちゃいかんとこから借りたり？」

「その通りです。力を与えた存在は恐らく、『無限の龍神』オーフィス。

禍の団のトップと目されている存在です」
　爆発音。
　勿論、メイドさんの衝撃発言を強調する為のエフェクトではなく、現実に聞こえる爆発音だ。
　衝撃がビリビリと伝わってくる。
　この部屋は頑丈だから衝撃だけで済んでいるが、そう遠くない部屋が攻撃を受けているのは伝わってくる衝撃でわかる。
　悲鳴と怒声、断続的な魔力や何やによる攻撃音。
「魔王さん、さっき渡した資料を作るのに、冥界を暫く旅していて思った事があるんです」
「聞こう」
「冥界って治安面クソですわ。嬉しい限りですね」
「気にいって頂けて何よりだよ」
　平静な中に抑えきれない申し訳無さとヤケクソさを同居させたサーゼクスさんの言葉を聞きながら椅子から立ち上がる。
「戦えば素性がバレるんじゃないかな？　君の戦った後の戦場は、何というか、独特だ」
　立ち上がった此方に後ろから声をかける魔王さん。
　確かに、今回ばかりは塗料をぶちまけるのは悪手だろう。
　だがかの名医、偽りの天才はこうも言った。
『ケンシロウ、暴力は良いぞ！』
　と。
「ご心配なく、今回ばかりは普通に戦いますよ。それに」
「それに？」
「これとは別の外装で戦いますので」

　ぱんっ、と、サーゼクスとグレイフィア、オーディンの耳に掌を打ち付ける破裂音が響く。
　ドレス姿の女性、いや、女性に扮した書主が合掌する様に掌を鳴らす。
　音に合わせるように、空間がガラスの様に割れ、一領の鎧が姿を表

した。
いや、それは本当に鎧なのだろうか。
見た目は明らかに日本鎧。
だというのに、それを見たその場の全員が思い出したのは、各々が知る限りで最も古く、悍ましい記述の成された魔導書だった。
「千日の稽古を劔（ちから）とし、万日の稽古を宵（まもり）とす」
キンッ、という涼やかな金属音と共に鎧がバラけ、広い貴賓室へと広がる。
観察者と化した三人の脳裏に浮かんだ、風に舞う魔導書の頁。
「以って此れ我がツルギなり」
両腕を広げた書主の身を覆うように、風に舞う頁が身体に纏わりつくように、鎧は一つの形へと結実した。
「――――武州兵法五輪」
武力の威と同時に、どこか神々しさすら感じさせる鎧姿。
背面に円の様に広がった装飾に威圧以外の意味、機能が込められているのは明白。
それはこの世界における日本で使われた鎧兜に似て、しかし決して異なる武の象徴。
「ほう、これが五輪書か」
感心したようにオーディンが呟く。
無論、この世界における五輪書は真っ当な書の形態を取っている。
だが、この世全ての知識を得ているオーディンは、この僅かな時間の邂逅にて、書主の持つ未知の力の一片が、この世ならざる場所、すなわち、異世界由来のものである可能性に思い至っていた。
自らを生け贄にして知識を得ようとまでしたオーディンは未知への探究心が旺盛であり、それは容易く一般的なモラルを上回る。
書主が好戦的な姿を見せたのをこれ幸いに、どっしりと腰を据え、見学の態勢に入ってしまった。
「グレイフィア」
「は」
サーゼクスとグレイフィアはこの場を収め、侵入者を鎮圧するため

に動き出す。
　書主も止める事はしない。
　この場の責任者として二人が動かなければならないという理屈は理解できていたし、現状、獲物を横取りするな、と言うほど精神的に切羽詰まってもいない。
「よみ……、君は試合会場の方に向ってくれ」
「諒解です。因みに、今はメアリでいいですよ」
「素敵な名前だ」
「それはどうも」
「どういう意味じゃ？」
「恥知らず、ってとこですかね。それでは」
　書主／メアリの纏う鎧の表面に未知の文字列が薄く輝く。
　魔力とは異なる力、いやさ、オーディンの知識の中に存在しない力が複雑な術式を組み上げ、書主／メアリの姿を掻き消す。
「わしゃあっちを見たい。こっちは任せたぞい」
　未知の術、未知の力、オーディンは喜々としてその後を追う。
　未知の術式とはいえ、転移先を探るだけであればさほど難しくはない。
　しいて言うならば、試合会場と客席を隔てる結界の強固さ、難解さに、更に術者である少年への興味を深めた程度か。
「それじゃあ、こちらも早々に片付けるとしよう。勿論、お客様の安全を優先でね」
「承知致しました」
　歴代最強とも目される、超越者である魔王。
　その妻にして最強の女王。
　二人の足取りは早い。
　言葉通り、彼等の向かう先は、速やかに収束に向かうだろう。

　戦端は開かれ、即座に戦況は動く。
　決して拮抗する事無く、この戦いは幕を閉じるだろう。
　だが、

「……」

戦場にて、一つの影が蠢く。

「……加減してる？　でも、直ぐに来る。ここに届く」

影――戦場に似つかわしくないドレスを纏った黒い少女は、熱のない声で、しかし、どこか期待を込めて、歌うように口ずさむ。

「楽しみ……、楽しみ？　……うん、たぶん、楽しみ」

口ずさむのは未発達な心の内訳と、待ち人の名。

デートの待ち合わせの最中であるかの様に、その名を、称号を舌で転がす。

「……混沌の海、たゆたうもの」

無限を司る龍は、まるで少女の様に無邪気に、この世ならざる名を歌う。

四十九話　蹂躙、するもされるも

魔法陣の眩い輝きに目を瞑り、再び瞼を開けた時、転移は完了していました。
開けた場所、たぶんどこかの建物の中、でも、完全な閉鎖空間という訳でもない。
見上げれば大きく穴が空き、偽りの空が映る天蓋。
嘗てはギリシャの神殿の様な作りだったのでしょうか、半ばから砕けた巨大な石柱の残骸が同じく石造りの床に倒れている。
それほどレーティングゲームの経験があるわけではないけれど、珍しい設定のステージだと思う。
見世物である関係上、形あるものが壊れるカタルシスも重要、という事で、基本的に地形や建築物は完全な状態でスタートするのが常道であるらしい。
攻め込み、攻めこまれて激しい戦場となる互いの拠点ともなれば尚更だ。
「あれは？」
祐斗先輩が黒カリバーを構えながら空を見上げる。
淀んだ色味の偽りの空がどす黒い雲に覆われていき、稲光が走っている。
いいや、それだけじゃない。
雲の中心に、何か、人型の……いや、鎧を纏った誰かが居る。
開始早々の奇襲か？
そう身構える私達が見えていないのか、その鎧武者は笑っていた。
「泣け！　喚け！　そして……死ぬが良いっ！（ＣＶ，堀江由衣）」
轟、と、天が逆巻く。
生まれたのは無数の巨大な竜巻。
しかし、その竜巻は明らかに自然界ではあり得ない軌道を描き、空を飛んでいた悪魔達を飲み込んでいく。
「声めっちゃかわいい……イテテっ！」
イッセー先輩が部長につねられた。

まぁ、確かにやたらかわいい声だったけれど、あのドスの入れようと言葉の内容でよくそんな感想が出るものだと感心する。
ただ、解ったことが一つ。
「祐斗先輩」
こういう時の確認は戦闘の時には冷静沈着で外見相応の活躍が約束されている我らが騎士に限ります。
「うん、たぶん金髪で巨乳で赤い感じだと思う。……負けていられないな。やっぱり何時の時代も蒼、もしくは黒だよ」
なんで祐斗先輩こんなんなっちゃったんですか。
「みんなしっかりしなさい。私達とは無関係に戦っている連中が居る。レーティングゲーム中なのよ？」
「部長……！」
そう、それが言いたかった。
やっぱり我らが王が我らが王ですよ！　その赤髪もスイカバーみたいで素敵です！
……ともあれ、問題はそこなのだ。
例えばあの鎧武者が転移直後のこちらに攻撃を仕掛けてきたというのなら、互いの開始地点が近い速攻戦という線もありえた。
でも、あの鎧武者は私達を無視し、その場に居た他の悪魔を叩き始めた。
グレモリー対アスタロトのこのゲームで、だ。
「！　みんな、構えろ！」
普段使わずにせっせと貯蓄しているシリアス声を此処ぞとばかりに吐き出した、この場で正常な方に分類されているっぽいゼノヴィア先輩がデュランダルを構える。
何事かと思いつつブレスレットを起動し、魔法を待機状態にしながら拳を構える、よりも先に、轟音を立てながら目の前に鎧武者が勢い良く着地。
二メートルはあるだろうか。肩から生えた巨大な角の様な飾りを含めれば更に大きい。
「退け、邪魔だ（ＣＶ，堀江由衣）」

奇妙に愛らしい、しかしドスの効いた声。
近くで聞いて感じるのはその声に乗った感情が怒りや嗜虐でなく純粋な喜悦だろうと思える点か。
鎧武者は身構える私達を意にも介さず、装甲を激しく変化させ、一振りの奇妙な形の剣を生み出した。
切っ先のない曲刀、薄い板を何枚も張り合わせたようなそれを無造作に前方に投げる。
「超攻勢防御結界、霊験あらたかなる刃よ！（ＣＶ，堀江由衣）」
手印と共に唱えられる聞き覚えのない詠唱。
それに重なるように、無数の魔法陣が現れた。
たぶん、鎧武者とは関係の無い、転移の為の魔法陣。
どれもこれも、揃いもそろって悪魔の文様。
勿論、どれもアスタロトの文様ではありません。
……基本的に、魔術というのは効率を重んじて運用されなければならない。
だからでしょうか、私にはこの後に何が起こるのか薄々理解できてました。
「吾に背く諸悪を以下略！（ＣＶ，堀江由衣）」
転移陣が求められる機能を果たし、術者をこの場に呼び出すのと、鎧武者の放つ術が完成するのはほぼ同時。
勿論、狙っていたのでしょう。
数百、いや千にも届きそうな程に展開してた転移陣から現れたのは見覚えのない悪魔の方々。
一様にやる気と殺意に満ち溢れた表情で現れた彼等の何割かが、表情を変える事すら許される事無く、無数に分裂した高速で回転する曲刀に切り裂かれ元悪魔の死体に成り果てた。
強い、そしてそれ以上に迷いが一切無い。
だけどなるほど、効率的だ、と感心してしまった。
確かに転移陣が現れてから実際に転移が完了するまでに時間があるのだから、予兆を見た時点で術を用意しておけば即座に相手を始末してしまえる。

勿論、転移してくるのが敵である、という確信がある場合にしか使えませんが、効率的ではあるでしょう。

「馬鹿な、貴様、何も」

がしゅ、と、果物を潰すような音と共に、誰何の声を上げた悪魔の頭が半分になった。

と思えば、見る間にその姿を消していく。

まるで見えない獣にばりばりと貪り食われているようだ。

修行の一貫のサバイバルで多少慣れつつ、しかしまだ経験の浅いイッセー先輩はそのグロテスクな死に様に顔を顰めている。

ひっ、という小さな悲鳴を上げたのはアーシア先輩か。

その神器の能力ゆえに怪我人を多く見てきたアーシア先輩だけど、こういう、手遅れで、なおかつ超常的な死に様には触れ慣れていないのかもしれない。

「アーシア！」

イッセー先輩が叫ぶ。

アーシア先輩を気遣って、ではない。知らない気配が後ろにある。

振り向けば、アーシア先輩はディオドラに捕まえられ、空へと連れ去られていくところだった。

「イッセーさん！」

胴を後ろから抱かれ捕まえられながらイッセー先輩に手を延ばすアーシア先輩。

詳しい状況は把握できていないけれど、

「烈閃槍（エルメキア・ランス）！」

当たればタダでは済まないけど当たっても頑張れば冗談で済む程度の術を打つ。

狙いは勿論万全だけど、精神ダメージのみのこれなら万が一アーシア先輩に当たっても大丈夫だ。

数日間虚脱感で立ち上がる事もできなくなるだろうけど、冥界にはそういう部分を回復する技術も無いではないと思うし、アーシア先輩は優しいし心を込めて謝ればきっと許してくれる。

ブレスレットに登録していた魔術が詠唱無しで解き放たれ、アーシ

ア先輩を捕らえたディオドラへと飛ぶ。
「小猫ちゃん!?　いや、そうか！　敵か！」
『Ｔｒａｎｓｆｅｒ』
脳味噌が混乱していたイッセー先輩が一瞬で思考を切り替えた。
いや、逆に混乱していたから一瞬で思考が切り替わったのかもしれない。
戦う時のイッセー先輩の脳味噌は、邪念が入らなければ野良ドラゴンもかくやというシンプルさを持っている。
もしもアーシア先輩を捕まえたのが男のディオドラでなく女の悪魔だったら難しかったかもしれないけれど。
試合開始前から継続してチャージしていた倍加の力が光の槍に加わり、より強く輝き、加速。
お陰で万が一アーシア先輩にかすりでもすれば冗談では済まない威力になってしまったけれど、逆にディオドラにかすりでもすればその場で墜落させられる筈です。
うまいことディオドラにだけ当たれ！　あとアーシア先輩当たったらごめんなさい！
「おっと、危ないな」
軽い、危機感をまるで感じていない、そんな一言と共に。
光の槍はディオドラの魔力を込めた腕の一振りであっさりと打ち消された。
……やっぱり駄目か。
そんな考えが頭を過る。
勿論、私の心情としては、赤龍帝の力で倍加された烈閃槍をあんな事も無げに打ち消すなんて、というショックがあったりはするのですが。
こう、この魔術には何故かそんなイメージがあるといいますか。
前のレーティングゲームではそれなりに通用したから、敵の強さが問題なのでしょう。
それはとりもなおさず、ディオドラの耐久力とか魔力とかが、それなり以上に高い、という事実を表している。

少なく見積もっても、一般的な上級悪魔（部長や生徒会長）を大きく上回るレベルの……。

「アーシアを離せ！　糞野郎、死ね！」

「待ちなさいイッセー！　アーシアに当たるわ！」

「ぐっ……」

鎧背面のブースターに魔力の光を湛え今にもディオドラに飛びかかろうとしていたイッセー先輩を止める部長。

イッセー先輩は確かに強い、強いけれど、女性の胸に関わらない問題の時にはそのパワーの制御が甘いらしい。

さもありなん、その異常なまでの赤龍帝の籠手との、あるいはドラゴンの力への親和性の高さからメキメキと頭角を表しているイッセー先輩だけど、その力の源がドラゴンとの相性の良さにあるため、細かい制御とは基本的に無縁なのだ。

唯一、女性に対して淫らな行いをする時のみ、イッセー先輩の変態性が人間特有の器用さを表出させるらしいのですが……。

根本的に、イッセー先輩は人質を抱えたままの敵と戦うのに向いていないのです。

仮に今、以前の白龍皇との戦いの様に動けば、三発中二発はアーシア先輩に直撃しミートソースを製造してしまうでしょう。

そして勿論、それを許容する事ができる様なひとはグレモリー眷属には一人も居ません。

では、この場に居るグレモリー眷属でない人はどうか。

ちらりと鎧武者に視線を向けるも、曲刀を使った時に変形させていた部分を元に戻し、静かに成り行きを見詰めていました。

都合がいい、というより、どこか不気味さを感じさせます。

ついさっきまでの荒々しい振る舞いから考えれば、人質など知ったことかと動いていそうなのですが。

「さっきの魔法陣に、この状況……貴方、禍の団に通じて、連中をこの場に引き入れたわね？」

「ははは！　ご明察、今日のこの日にのんきにゲームが始まると思っていた割には察しが良くて助かるよ。まぁ？　アーシアをこの場に

連れて来てもらう為にギリギリまでバレないようにこっちも頑張っていたんだから当然だけどね」

「させると思っているの？　ゲームを汚し、あまつさえ私のかわいいアーシアまで奪い去ろうだなんて……！」

ごう、と、部長の周りに赤いオーラが吹き荒れる。

別にあのオーラ自体に何かの効果があるわけでもないけれど、その気合だけはしっかりと伝わってくる。

だけど、それが現状を好転させてくれる訳もなく、アーシア先輩を捕らえたディオドラは怒りで爆発寸前の部長を、私達に嘲笑を向けます。

「出来ないことはしない主義でね。まぁ、だからこそ色々好きにできる彼等に付くことにしたんだけど。僕はこれからアーシアと契る。意味はわかるね？　お楽しみってやつだ。どうしても見たければ神殿の奥においで。見学くらいは許してあげよう。……まぁ、来れたら、の話だけど」

「待て！」

叫んだのはイッセー先輩かゼノヴィア先輩か。

だけれど、二人が何をするよりも早くディオドラとアーシア先輩の姿は歪み、消えた。

空間転移だ。

行き先はさっきの言動からしてこの破壊された神殿の奥……レーティングゲームの会場で自在に転移してみせている辺り、この会場も禍の団によって手を加えられていると見ていいでしょう。

「アーシアァァァァァ!!」

イッセー先輩が叫んでいる。

そんな事をしている場合ではない、などと言える空気ではないけれど、実際そんな事をしている場合ではありません。

周囲には、依然として無数の敵対的な悪魔が犇めいている。

鎧武者さんにかなりの数を殺されて尻込みしているのか、先のやり取りの間だけ空気を読んでいたのか、今更になって手に魔力光を集め攻撃態勢に入っています。

中級から上級だと思われる悪魔からの魔力弾の一斉攻撃。
避けるも防ぐも決して容易い状況ではないのです。
「兵藤一誠、『落ち着け』（ＣＶ，堀江由衣）」
鎧武者さんの声に、転移して消えたアーシア先輩に手を伸ばして叫んでいたイッセー先輩がぴたりと止まる。
威圧された訳でも、何か説得された訳でもなく、しかし、イッセー先輩は確かに激化した感情を沈めてみせた。
勿論、動揺や怒りが完全に収まっているわけではありません。
叫ぶのをやめながらも身体は僅かに震え、部長のオーラの如く怒気が滲んでいるように見えます。
「今の貴様がするべきは叫ぶことではあるまい。行け（ＣＶ，堀江由衣）」
「行け、って、言っても、これじゃあ」
イッセー先輩の代わりに祐斗先輩が、神殿の奥に続く道を見て呻く。
鎧武者さんの攻撃でかなりの数が減ってはいるけれど、それでも広い神殿の中は禍の団の悪魔で犇めいている。
蹴散らせない、という訳ではないけれど、真っ当に進んでいたら間に合わないようにも思える。
何か考えがあるのか、と考えていると、突然副部長が短く悲鳴を上げた。
「うぅむ、良い尻じゃ。若さゆえの張りと青い未成熟な香り。手付かずの処女雪、新雪に覆われた丘の様じゃ」
ちょっぴり叙情的な表現で副部長の処女性を表現しているのは、帽子に白ひげ、隻眼のご老人でした。
あの見た目で処女厨とか最悪なので死んだほうが良いんじゃないかな、と、可能なかぎりの軽蔑の視線を向けてから、この老人に少しだけ見覚えがあるのを思い出す。
「オーディン様、何故此処に!?」
「ワシはそこの……鎧のを追っかけて来ただけじゃよ。つまり野次馬じゃな？」

「今はセクハラ以外に悪いことはしない爺だ。捨て置いていい（ＣＶ，堀江由衣）」
「なるほど」
扱いが悪いけれど、別に副部長のお尻は撫でられて減るものでもない。
それに、北欧神話の主神がこの場に居るだけでも割りとプラスの効果がある。
魔力弾の一部は確実にオーディン様の方を向き、功を焦って飛び出してきた悪魔も多い。
そして、魔力弾による攻撃をオーディン様は事も無げに無力化し、飛び出してきた悪魔は鎧武者がいつの間にか構えていた拳銃に貫かれ、顔面の穴という穴から眩い光を放って消滅した。
「このゲームは禍の団に乗っ取られた。ディオドラとかいうのが手引したらしい。結界が弄られて応援は来ないが禍の団の応援は来る（ＣＶ，堀江由衣）」
引き金を連続で引き、迫る悪魔を一撃毎に殺しながら説明する鎧武者さん。
オーディン様は拳銃と打たれて死ぬ悪魔を見て、見たことのない玩具を見つめる子供のように目をキラキラと輝かせながら『おお、怖い怖い』と嬉しそうに呟いている。
オーディン様は本当に最低限の働きしかしないけれど、鎧武者さんはやる気満々だ。
「……だが、あなた方だけでこの場をどうにかできるのか？」
「あなた方ではない（ＣＶ，堀江由衣）」
ゼノヴィア先輩の問に、再び鎧武者さんの鎧が変形する。
煙を上げて蠢く装甲の中に鎧武者さんが腕を突っ込み、引き抜くと、そこには一本の槍が握られていた。
次いで、次々と同じ形状の槍が鎧の各所から生え、前方、悪魔のひしめく道に向けられる。
オーディン様の息を呑む音が聞こえ、全ての槍から恐ろしい程に濃密で莫大なオーラが放出され……、

「そこのおでんは見学だ（ＣＶ，堀江由衣）」
視界の中にある悪魔の八割消滅した。
勿論、こうしている間にも新たに敵が転移し続けてきているのですが……それでどうにかなるようにはとても思えない。
あれだけの攻撃をしかけ、まるで消耗した風に見えない鎧武者さんがちらりと兜に覆われた視線を向け、顎をしゃくり神殿の奥へと私達を促した。
「呆けている場合か。この奥であの優男が下半身裸でさっきのシスターに跨がろうとしているんだろう？　それとも寝取られ好きか？（ＣＶ，堀江由衣）」
言われるや否や、イッセー先輩は軽い会釈と共に神殿の奥へと文字通り飛んでいく。
部長も鎧武者さんとオーディン様に礼を告げて後に続き、私達もそれに続く。
見知らぬ相手であるはずの二人、その内の一人に、奇妙な信頼を感じたのは気のせいか。
そんな考えを振り払い、新たに現れた悪魔を背に、後ろを二人の助っ人に任せ、走る。

よし、行ったな。
これで邪魔者は居なくなった。
「よしオデンさん、ちょっと前出て名乗り上げてください。連中馬鹿だからネームバリューだけでヘイト稼げますので」
「おうおう、それくらいお安い御用だわい。……で、本当に援護は必要ないんじゃな？」
「もし余計な手出ししたら、貴方が今一番気に入ってるヴァルキリー攫って洗脳調教してアヘ顔ビデオレター送付しますよ」
「そりゃ良い事を聞いたわい。もしもの時の最終手段として覚えておくかの。銀髪巨乳は好きか？」
「女は見た目じゃありませんよ」
「その心は？」

「手触りと匂いと性格。究極的には全部改造できるからどうでもいい」
「お主実は糞野郎じゃったりする？」
「売れ残りの新古品押し付けようとする爺よりは善良なつもりですが？」
そも此方には日影さんが居るから別に好き好んで見ず知らずの女性を調教したいとは思わないし、あくまでも報復活動の一貫なのだ。
でも全身にピアスつけたり淫紋を刻むのは楽しいよね、プラモ作ってるみたいで。
忍者学校でもこの授業は人気だったなぁ……。
まぁ卒業までに全員受ける側も体験するから色々と印象は変わるけど。
此方がおでんさんとこんな話をしている間に、無数の転移陣は正常に機能を果たし、先に消し去った分を補充するように無数の悪魔が目の前に犇めいている。
襲撃に際して目標としてグレ森さんとオカ研の連中を狙っていたのか、転移直後の彼等には戦闘に際する興奮と僅かな戸惑いが感じられた。
そんな彼等の前に、劒冑に内側から記入した記述を元に術理再現で雑に再現したグングニルの石突を地面に打ち付けて音を鳴らしながら一歩進み出る。
構えていない背後に控えるおでんさんを片手で指し示しながら。
「さあさあ、時代遅れの悪魔の皆様、時代に取り残された未練がましい貴族の皆様、此方におわす北欧の主神様、ぶち殺がせば多少の満足感とさして意味のない名声が手に入る！　これを逃す手はありませんよ！　今なら本人はろくに抵抗せず、護衛はちっぽけな人間ただ一人！」
悪魔は人間を遥かに凌駕するスペックを持っており、知能指数だってそれほど低くない。
だが、無駄に長く別に有効活用もできていない寿命に比べて危険過ぎるレベルで精神的に未熟かつ不完全であり、長い悪魔生の中で培っ

た知恵を絞って策謀を練るなりしていない彼等の頭は人間と同程度でしかない。

そしてそこに悪魔として、貴族として、といった自負が加わり、なんというか……非常シンプルに扱いやすい思考で動く。

「わしゃ餌か？　年寄りは労らんといかんぞ」

「はっ」

セルフ生け贄が実質ノーコストでリターンのみなんてクソインチキがまかり通る奴を労れって？

おでんさんの言葉を鼻で笑い飛ばし、グングニルコピーを真ん中からへし折り、幾度か繰り返した後に手の中で丸める。

この武器は駄目だ。火力が高すぎてつまらない。

おでんさんと此方に突っ込んできた悪魔に丸めた元グングニルを投げつける。

命中した悪魔が頭部にある内部に繋がる穴から臭い匂いの液体を撒き散らし倒れ、だいぶ減速しながらも手元に金属球が戻ってきた。

瞼を開けて確認。

死体……文字列。

周囲の悪魔ども……文字列。

変化、死に様と年齢から享年になった部分、神槍の力に寄らず単純に物理的に殺された事に怯む、あるいは人間に殺された同胞への蔑みなどの感情の記述のみ。

瞼を閉じる。

溜息。

これで外部へと映像が中継されていなければ、と思うが、場所が場所、タイミングがタイミングだ。

もう一度溜息。

手の中の金属球を上書き。

学校で見た何の変哲もない砲丸投げの球に。

瞼を閉じる。

「さぁ、メアリ君、ボールを構え、第二球を……投げた」

投げた瞬間に衝撃。

特殊な投法により投げられた球は普段よりも空気の抵抗を多く受け、激しく空気をかき混ぜながら、極めて正しい物理法則を撒き散らしながら飛ぶ。
軌道上に居た悪魔の生命の音やオーラが消えた。
溢れ出る臓物と血と糞尿と諸々の内容物の匂い、フレッシュな破裂音が耳と鼻を刺激する。
「ふむ」
投げた後の残心を取っていた此方目掛け、無数の魔力弾が殺到する。
生身で直撃すれば流石に五体満足では済まないだろう。
中々の威力だった為か、武州五輪の全身に旧神の印（エルダーサイン）が浮かび上がった。
流石、上級悪魔も混じっているお陰だろうか、総合的に見れば姫や鬼の砲撃にも迫る威力。
何よりビジュアルが派手だ。魔力光というのだろうか、瞼越しでも少し眩しい。
下手に反撃の余地がある攻撃をするからこういう煩わしい事になる。
ビームを放とうとして、薙ぎ払うと移動中のオカ研連中に当たる事に気がつく。
面倒な奴らだ。
黄金の剣を展開し、刀身を伸ばして薙ぎ払う。
戦端が十字架であるため悪魔に対して特攻だったりするのだろうか、それとも連中が脆すぎるのか、軌道上に斬られずに耐え切れた奴は居ない。
弾幕に隙間が出来たので一応そちらに滑りこむ。
弾幕も追いかけてくるが時間的余裕は十分に出来た。
「ホーミングミサイル」
フィジカルリアクターによって組み替えられた装甲から誘導光学弾頭が高速で射出されテロリストどもを光に包んでいく。
「ううん、手緩い」

この辺の武装は、使ったことがない、とは言わないが、使い慣れている、とは間違っても言えないせいか練度が低い。
スリケンなら同じ時間で十倍は投げられる。
十字剣でなく刀なら、或いは種々の忍者ツール・ウェポンなら、もしくは杖なら、魔術なら、せめて財団神拳なら、と。
だが、こう、このもどかしさは新鮮さがあるようにも思えて少しだけ楽しい。
誰か巨大化しないか巨大化、デモンベインの写しを用意してあるから使ってみたい。
「む、どうした」
劒冑の内側、ドレスの下に女スパイ形式で収納していたモンスターボールが揺れている。
位置的にも、このお楽しみの時間に空気を読まずに出たがる不慣れさも、間違いなくサバミソだろう。
この悪魔の攻勢を見て、小猫さんが心配になったといったところか。
でも現状、出たら出たで死にそうではある。
なので、もいちど術理再現。
かつて会った露出狂かつスピード狂の少女のお付きを装甲から作り出す。
「（４６センチ三）連装砲ちゃん、波動砲ちゃん、ディグミーノーグレイブちゃん、パニッシャーちゃん。守ってあげて」
計四体の連装砲ちゃんバリエーションズを呼び出し、その中にサバミソを解放する。
自分を取り囲む四体の愛らしいマスコットに一瞬だけびくりと身を竦ませるサバミソだが、此方を見上げる視線はまっすぐとした意志に満ちている。
「無茶はしないように」
「ネーコ、ショーウ！」
威勢のいい鳴き声一つ。
心なしかポップなデザインになったサバミソが、四門の砲に守られ

ながら走り去る。
科学的に正しい火力による爆風キャンセリングに守られて、向かう先には、遠い昔に別れた妹。
魔王に匹敵する敵に立ち向かわんとする小猫さんを助けるため、走れ、サバミソ、走れ！
「見たこともない生き物じゃったが、お主のペットか？」
「ええ、たぶんまだこの世に一匹しか居ないんじゃないですかね、種族名も決められてないでしょうし」
何時かオーキド博士に連絡をつけて登録して貰う事になるか、それとも、どうにかして元に戻れるか……。
どうせなら、いい感じの再会ができますように。
走り去るサバミソの背を見送りながら、そんな事を
「見つけた」
――ずむ、という、鈍い音。
聞き覚えがない訳ではないが、久しく聞いていなかった、胴体を鋭くない何かで勢い良く貫かれる音。
身体の中から伝わる痛みの様に近すぎる音の向こうに聞こえる少女の声に瞼を開く。
黒いドレスを纏った、やはり覚えのない顔の少女。
中学生くらいだろうか、ローティーン程度に見える美しい少女は、口元に楽しげな、無邪気とすら感じられる笑みを浮かべ、涼やかな音色の声を放った。
「遊ぼう、遊んで」

関節をあらぬ方向に曲げながらクレーターの中心にめり込んでいる禁手を発動させたイッセーの姿を見て、グレモリー眷属の誰もが絶句していた。
圧倒していたのだ。
道中のゲーム仕立ての戦いなど物ともせずにディオドラの元に辿り着き、無間龍から力を与えられたというディオドラを相手に、反撃の一切を許さない一方的な戦いを繰り広げていた。

元から戦力差から考えれば当然の結果だった。
リアス・グレモリーの元には聖魔の属性を併せ持つエクスカリバーを使いこなす最高の騎士に、異界の魔王から力を借りて戦う戦車も、現時点で並の魔王を圧倒する実力を誇る兵士も居た。
ディオドラただ一人がオーフィスの力を得て魔王級になっていたとしても、それで結果が変わる訳もなく、しかし、そんな事をつゆとも知らないディオドラは真っ向からイッセーと戦い、惨めとすら言える一方的な敗北を喫した。
最後の一撃がディオドラを吹き飛ばす瞬間、彼の目を見た者が居たとすれば、彼が二度と戦いの場に出る事が不可能な程に精神的に打ちのめされている事に気が付いただろう。
アーシアは依然として捕らえられたままだが、少なくともディオドラ自体は完全に無力化出来ていた。
だが、今、それとは真逆の結果がこの場には存在している。
元から備えていた力も、オーフィスから与えられた蛇の力も半減されて、無尽蔵とも思えるほどに倍加を繰り返したイッセーに完膚なきまでに叩きのめされていたディオドラ。
瞳から欲望の力を失い、生ける屍と化した筈のディオドラ。
そのディオドラが、拳で撃ちぬかれた顔面を激しく変形させ、口腔から歯や肉片や吐瀉物を撒き散らしながら、まるで苦し紛れの様に放った一撃。
拳もまともに握れず、腰も入らず、魔力すらまとわない。
ただ腕を振り回しただけの、攻撃とみなす事も難しいような一撃。
その一撃を、その場に居る誰一人として視認する事が出来なかった。
そして、ほぼ無傷で、完全に臨戦態勢に入っていたイッセーに防御も回避も許さず、一撃で無力化してみせたのだ。
「そん、な」
誰の呟いた声だったか。
信じられないとでも言いたげな声に、彼等の目の前に広がる光景が無慈悲に現実を押し付ける。

ほぼ完全に龍と化し、二天龍の力をその身に纏ったイッセー。
しかし、その姿は見る影もない。
赤に白の紋様の刻まれた全身鎧は蜘蛛の巣のようにヒビ割れ、砕け散った兜と面からは、血に塗れたイッセー自身の素顔が垣間見える。
龍の耐久を持っている筈のイッセーは、余りにも強烈なダメージに、その衝撃に、完全に意識を失っている。
力を隠していたのか。
そう疑うには、イッセーを打ち負かしたディオドラの姿は余りにも違和感があった。
顔面の骨格は殴られた衝撃に耐え切れず歪みきり、顎に至っては中身の骨格は完全に粉砕されているのだろう、噛み合わず、体液を垂れ流しながらだらりと垂れ下がっている。
いや、それだけではなく、明らかに頭蓋すら正常な形を保っていない。
内部に収まっているデリケートな器官である脳細胞がどれだけ無事かなど、考えるだけ無駄だろう。
生きていたとしても、良くて植物状態で、マトモに肉体を動かせる訳がない。
手足をダランと力なく揺らしながら宙に浮かぶその姿に、残りのグレモリー眷属の誰もが追撃を躊躇うほどの惨状。
だが、
「わ――は、我、吾、私、わ、は、あ、わ、わ、わたし、は、あ、あ」
ディオドラの砕けてマトモに声が出るはずもない口から、音が、意志が溢れだす。
発声器官が破損しているからではない、不確かな何かを思い出すように、その言葉は拙くも紡がれようとしていた。
死んでいない、あの状態でも生きている。意識すら失っていない。
それを確認し臨戦態勢に入ったリアス達の目の前で、それは起こった。
ごぼり、と、血が溢れだした。
いや、それは血ではない。

ディオドラの全身から、穴という穴から、穴すら無い肌から、血のように赤い朱が、宝珠の如く艶やかな紅が滲み、その全身を覆い尽くす。

「我は」

赤い、ディオドラの肉体を構成していた物体の色が全て塗りつぶされた後の残ったのは、赤いローブを纏った何か。

唯一染まりきっていなかった、ディオドラの砕けた顔面に異変が起こる。

ぐるりと白目を剥いていた眼球が、まるで水揚げされた深海魚の様に、体外に押し出され、ずるりと眼窩から脱落したのだ。

そして、その奥に、ルビーにも似た紅玉が現れる。

この世のものとは思えない、恐怖すら感じるほどに美しい紅玉（ルビーアイ）の瞳。

次いで、顔の肉も、骨すらこそげ落ち、口も鼻もない白磁の面が現れた。

そして、怖気を震うような邪悪、いや、虚無の気配。

神の、聖なるものの対と成る存在ではない。

それは、これは、悪ですら無い破滅と虚無の使者。

「赤眼の魔王（ルビーアイ）、シャブラニグドゥ……！」

小猫（魔術師）が血を吐くようにその名を呟けば。

紅玉を嵌めこんだ白い面の如き顔面が、喜悦に歪んだように見えた。

五十話　覚醒、良くも悪くも

赤眼の魔王、シャブラニグドゥ。

その名を聞き、リアスは驚愕し、しかし、次の瞬間には訝しげな視線を宙に浮かぶディオドラであったものに、そして小猫に向ける。

「シャブラニグドゥ？　あれが？」

異界の魔王であるらしいシャブラニグドゥについて、リアスが知る知識はそう多くない。

小猫の操る未知の魔術における奥義とも言える術において、その力を貸している存在であるという事。

そして冥界や、あるいは地球上に存在する他の神話勢力の中には確認できない、実在すら怪しい存在であるという事だ。

だが、その知識量の少なさ故に、自らの知らない異界の魔王について思索を巡らせた事はあった。

何せ、学べばほぼ誰でも覚えることのできる魔術という技術によって行使される術が、高い不死性を持つフェニックスを一撃で再起不能にまで陥らせているのだ。

いつぞやのレーティングゲームでかの魔王の力を借りて放たれた竜破斬（ドラグスレイブ）なる術をその身に受けたライザーは、未だ持って正常な精神活動を行えない程度に精神的に衰弱している。

術者の意向を酌んでのことか、あるいは純粋にフェニックスの不死性が勝ったのか、完全に復活できないという事もないが、現状、時間経過により緩やかに精神を癒やしていく事しかできていないらしい。

つまり、たかが、たかが一分にも満たない準備で発動する魔術が、精神面にのみ限定するとはいえ、主神級の攻撃に準じる威力を持っているという事だ。

それほどの力を術者に何の見返りもなく授ける程の力を持つ魔王ともなれば、それは冥界の歴史に存在する並の魔王を遥かに上回る力を持っているのではないか。

「本当に、あれが？」

そんな危惧を抱いていたリアスからすれば、その魔王らしきもの

は、些かプレッシャーに欠けているように感じられた。
濃密な魔力を感じる訳でなく、強者特有のプレッシャーも感じない。
こうして警戒できているのも、リアスの一番のお気に入りであり最強とも言える下僕のイッセーが不意打ちとはいえ一撃で沈められたが故だ。
そうでなければ、せいぜいが上級悪魔か何かにしか見えないだろう。
寒気を感じる奇妙な雰囲気こそ纏っているが、その雰囲気は直前まで相対していたディオドラと大差ないとすら思える。
「いや、君の気持ちもよくわかるがね？　余り甘く見ないほうが良い」
突如として聞こえてきた声。
聞くものの身体から熱を奪うような声、そして、オーラ。
軽鎧にマントを付けた男がシャブラニグドゥの隣に降りてくる。
「偽りの血族を『材料』にして作った紛い物とはいえ、それなり以上に力はある」
「……誰？」
リアスの問いに、恭しく、いっそ尊大さすら感じられる程にオーバーに一礼してみせる男。
「お初にお目にかかる、忌々しき偽りの魔王の妹よ。私の名はシャルバ・ベルゼブブ。偉大なる真の魔王ベルゼブブの血を引く正当なる魔王の後継だ。オーフィスの玩具にしかなれぬ先の偽りの血族とは違う、ね」
隣に浮かぶシャブラニグドゥの頭を気安く、安物の置物でも叩く様に小突くシャルバ。
それに対し、シャブラニグドゥは一切動きを見せない。
「さて、サーゼクスの妹君。貴公等にはこれから纏めて、順繰りに死んでいって貰う事になる。理由は言わずともわかるだろう？」
そう、言わずとも判るほど、旧魔王の血族と現魔王の間の溝は深く広い。
現魔王達は旧き魔王の血族達を納得させた上でその立場に居ると

は言いがたく、旧魔王派とも呼べる彼等が冥界での現政権下に置いて大人しくしているのは『そうせざるを得ない程の力の差』があるからに過ぎない。

現政権を覆せるほどの力を得ることが出来たのなら、どうなるか、というのが、現状であった。

つまり、あのシャブラニグドゥもまた、現状の冥界のパワーバランスを崩す事ができる程の力の一端なのだ。

少なくとも、シャルバがそう考えているという事だけは間違いようのない事実だった。

「出自も知れぬ他所の神話の魔王の紛い物ではあるが、あの偽りの血族が呑んでいた蛇とは比べ物にならない量のオーフィスの力が込められている。もっとも、力だけで知恵も何も無い木偶ではあるが……貴公等全員を捻り潰すのに不都合は無い」

す、と、シャルバが見下ろす先、リアス達を指差す。

「やれ」

短い命令。

その言葉にリアス達は素早く身構える。

少なくとも相手は、ディオドラから完全に肉体を乗っ取る前から、禁手状態のイッセーを殴り飛ばし、一撃で気絶させるほどの物理的な攻撃力を備えている。

その上で魔王と称されるだけの能力を秘めているのだとしたら、何が飛び出しても不思議ではない。

それこそ、竜破斬の様な攻撃が悪魔の放つ魔力弾の如く雨あられと降り注ぐ可能性だってある。

そうなれば逃げるのも不可能だし、防ぐ手段すら思いつきもしないが……。

「……？　おい、どうした」

しかし、その予想は覆される。

シャルバに命令を下されたシャブラニグドゥは、その命令とは裏腹にぴくりとも動こうとしない。

置物の様な、いや、まるで放心しているように見える。

「おい、聞いているのか」
一切の反応を示さない自らの手駒にしびれを切らしたシャルバがシャブラニグドゥに指を向け、その指先に光を宿す。
悪魔の魔力とは異なる輝き、天使の用いる光の力にも見えるそれを打ち込まんとし……、
「………あ？」
光を宿した指が、消えた。
より正確に言うのなら。
シャルバの『肩から先』が、前触れ無く消えたのだ。
遅れて、ごぼりと血があふれだす。
「っっ………!!!　あ、あああぁぁあぁぁぁぁぁぁっっっ!!!!」
絶叫しながら肩口を抑えてもその勢いを止める事は出来ない。
生物として頑丈な作りをしている悪魔ではあるが、身体の中には血管も神経もあり、見た目上の基本的な構造は人間と大差ない。
綺麗な断面ではあるが、それこそ肩の関節周辺から根こそぎ消失している。
助からない訳ではないが、平常心を保てるほどの軽症ではない。
突然の出来事に、その場の誰もが事態についていけていない。
ただ一人、紛い物と称されたシャブラニグドゥだけが、小さく笑い声を上げている。
笑い方、いや、声の出し方すら知らないようなぎこちない笑い声。
「貴様、貴様か！　この私に、何のつもりで」
魔力で傷口を塞いだシャルバが食って掛かる。
が、その言葉すら途中で途切れてしまった。
当然だろう、顎が消し飛んだのではまともに声を上げることはできない。
だが、今度は綺麗に消失させられた訳ではない。
シャブラニグドゥが、その手の中でシャルバの下顎を弄んでいる。
「――――――――!」
声にならない怒声。
苦痛、屈辱、怒りに染められた表情でシャブラニグドゥに光を放つ

シャルバ。
文字通り渾身。
魔王級と言って差し支えない程の威力を備えた一撃を。
「……」
避けもせず、防ぎもせず、シャブラニグドゥは受ける。
いや、その攻撃に気付いているかも怪しいほど、小動もしない。
真紅のローブすら、まるでそよ風を受けた時の如くたなびくのみ。
通じていない、いや、意にも介されていない。
「……違う」
この場において、種族的な特徴として狩猟を嗜む小猫だけが、眼前に君臨する魔王の紛い物、そのオリジナルの性質を多少なり理解している小猫だけが、違和感に気付く。
シャブラニグドゥはシャルバを気にしていない訳ではない。
むしろ今、シャルバこそがシャブラニグドゥの興味を引いている。
恐らくは、何らかの条件付けを施され、シャルバの命令に従うように調整されていた、いや、したつもりだったのだろう。
だからこそ、シャルバ曰く知性の欠片もない力だけの紛い物は、シャルバにのみ執着を抱いている。
いや、執着という程に重い感情ではない。
無に等しい知性で、シャルバという、自分以外の他者を認識している。
その程度の理由でしかないのだろう。
だからこそ、あの有様なのだ。
小猫の有する知識の中で、魔族という存在は、生物の負の感情をエネルギーとして、直接的に言えば餌としている。
だからこそ、彼等が自分以外の誰かに対して行う行動というのは、最終的に不快にさせる方向に帰結する。
誰かに従うことこそあれど、それはそのように精神を形作られて生まれてくるか、或いは自分よりも強い、自分を消滅させるだけの力を持っているからこそ、という理由が必要になる。
下級、中級の魔族を特殊なアーティファクトを用いて契約で縛る事

こそ不可能ではないが、少なくとも、魔王を契約で縛り命令に従わせるなどという話はついぞ聞いたこともない。
そもそもの話、だ。
あれが無限の龍神オーフィスが作り上げたものであるとして。
……本当に、仮の部下であるシャルバにまともな手綱を預けるだろうか。
無限の力を持つというのであれば、常人では計り知れない程に雑な、大らかな基準で縛っているという可能性は無いか。
曖昧な命令を受け付けるだろうか。
その命令の隙を付く事ができるのではないか。
いや、或いは。
存在の法則自体が異なるが故に、掛けられていた枷が、実質的に何の意味も成していないのだとしたら。
もしくは、ベースと成った生物の頭脳や魂から、新たに知性を構築する可能性があるのではないか。
「部長」
「何？」
「逃げましょう」
腰が引けた、いや、見る者が見ればそれと判る、走りだす一歩前の獣の如き姿勢で、小猫が言い切る。
了承を受ければ、直ぐ様踵を返し背後に向って全力疾走を始める為の構え。
戦力差を鑑みての、小猫にとっての最善の一手がそれだった。
「何馬鹿な事を言ってるの、アーシアがまだあそこに、それにイッセーだって」
「逃げる前にイッセー先輩を拾う位の時間は稼げます。アーシア先輩は……まだ、大丈夫な筈です」
大概、希望的観測が過ぎる予測ではあるが、これが小猫にとっての最大の妥協点だった。
少なくとも、現状であのシャブラニグドゥには勝てない。
自分たちには注意が向いておらず、敵であるシャルバを嬲って負の

感情を作り出す事に夢中になっている今、少しでもこの場を離れて時間を作らねばならない。
対処法が無いとは言わない。
リアスにできるかは解らないが、少なくともサーゼクスであれば、小猫のアドバイスを元にシャブラニグドゥのアストラルサイドに存在するであろう本体へと滅びの魔力をぶつける事ができるかもしれない。
そうでなくても北欧神話の主神が居る以上、そちらに知識や力を借りるという手もある。
一瞬、ここに書主が居れば、とも考えたが、如何に彼でも魔王を相手にするのは難しいだろうと小猫は考えを改める。
自分の使う魔術は全て使えるとの話だったが、だからといって魔王を殺せるかは別の問題だ。
もしもあの魔王がこの場の全員を全滅させて野に放たれた時、彼がどうにかしてくれるかもしれないという希望が残るから、今この瞬間にこの場に来ていなくて良かったとすら思えた。
そう、現役の魔王や主神に頼るという手を選べる現状で、しかし、小猫は既に全滅を想定に入れてすらいた。
「こ、の、この、作り物の、紛い物の、木偶風情があぁぁぁぁぁぁぁ!!」
しかし、リアスが小猫の提案内容に思案している間に、状況は一つの終わりを迎えようとしていた。
何らかの強化手段があったのか、魔王に匹敵するレベルの魔力を迸らせ、引きちぎられていた肉体を無理矢理に再生したシャルバが、再び全力の一撃を放ち、
「あ」
またも防がれる事すら無く、傷一つ無く受け切られ、今度こそ、その顔が絶望に染まる。
漲る魔力もシャルバの意志が折れると共に、向けられる先を失い虚しく萎れていく。
シャルバが自信の源としていた力は全て通じず、後に残されたのは徹底的に踏みにじられた、古の魔王の血を継いでいるという誇りの残

骸のみ。
激しい怒り、憎しみ、屈辱、そして、絶望と共にシャルバの感情がフラットに近付き……。
「いぎ」
全身を捩じ切られ、苦痛の絶叫の頭だけを残し、音もなく、その生命を終えた。
残る布と金属の混じった肉の塊が、嘗て魔王と呼ばれた悪魔の子孫であると誰が理解できるだろう。
尊厳を完全に踏みにじられ、敵であろうとも思わず同情してしまいかねない無残な最期だ。
ここまでするか、と、見る者に思わせるほどに残酷で残虐な仕打ち。
それは結局のところ、その仕打ちを受けるのが自分たちと同等の、同種の存在であるが故の事だ。
あの魔王もどきが行ったのはつまり、魔族という種族にとっての食事に他ならない。
単純に物質的生命体の食事と同じという訳ではないが、方向性は似たようなものだ。
手に入れた獲物を潰して、食べられる部位に分けて食べた。
食べ残しが出ないように、残骸まで綺麗に腑分けした。
旧魔王の子孫、シャルバ・ベルゼブブ。
本来蹂躙し食らう側であった彼の最後は、骨の髄までしゃぶり尽くされる餌という、目指した場所とは正反対の立ち位置であった。
「……祐斗先輩、ゼノヴィア先輩」
じり、と、小猫が後ずさりしながらシャブラニグドゥに向き合う。
リアスの言葉に従い仲間を助けるためではない。
仲間意識から自発的に思い直したのでもない。
危機に瀕した生命としての本能が、植え付けられた魔術師としての知識が、そうせざるを得ない状況であると判断させたのだ。
それは生命体としての本能にて、ほんの少しだけ劣っている、人間上がりの悪魔である祐斗とゼノヴィアも同じだった。
小猫が声を掛けるよりも先に、エクスカリバーやデュランダルを構

え、油断なくシャブラニグドゥに向き合っていた。
油断なく、いや、油断ができるはずも無かった。
リアス、朱乃、ギャスパーの反応が遅れたのは、産まれながらの種族的強さが原因だろうか。
本来的に支配者であり蹂躙者であると遺伝子に、魂に刻まれているが故に、その危機感を受け入れるのに僅かに時間が必要になってしまった。
その危機感とは。
「我、は、私、は」
視覚か、いや、それはどの五感とも異なる精神生命体特有の感覚だろうか。
文字通り魂、精神に向けられたその感覚を、物質世界でのそれに置き換えるとしたなら。
「ま、お、まおう……、魔王、シャブラニグドゥ」
餌を喰らい、しかし、未だ空腹を抱えた、肉食獣（プレデター）の視線。
「ふせ――」
小猫が叫ぶ。
伏せろ、か、防げ、か。
その言葉が最後まで形を作るよりも早く、戦場に稲妻が走る。
負の感情から沸き立つと言われる、異世界における魔力。
余りにも単純に、雷光などの属性が付与された訳でもない、ただ電撃を迸らせただけの一撃。
悪魔に向けるには余りにも純粋で、聖なる力を宿すでもない物理的過ぎる力。
「ああっ！」
それを、その場の誰もが防ぐことも避ける事も出来ず、受ける。
防ぐのが遅れたのでも、避けるのが遅れたのでもない。
何の属性も神秘性も含まない純粋な雷撃が、上級悪魔の、或いは堕天使混じりの結界を、覚醒した吸血鬼の時間停止防壁を貫いたのだ。
ただの、単純な火力のみで。
「――――よくもっ！」

最初に動いたのは祐斗。
魔力による雷撃を受けなかった訳ではない。
ただ、体内に埋め込まれたアヴァロンの効力は確実にダメージを減らし、魔力と引き換えに受けたダメージを即座に回収した。
腰部から生えた黒い翼を羽撃ち、しかし飛ばず、駆ける。
筋肉の全力稼働による断裂すら回復力により無視できる祐斗の脚力は肉体派の妖獣魔獣に匹敵する速度を与え、翼による加速は一方向への瞬間的加速において爆発的な効果を発揮する。
正面から全力で加速して突っ込んでくる祐斗に的確に反応できるのは、過去の大戦の生き残りの中でも限られた実力者のみだろう。
そしてその手の中には異世界において星そのものが鍛えたとも言われる聖剣のコピー。
聖剣の因子保持者の意志を束ねた剣はその性質上、精神生命体への有効な打撃が可能である。
黒塗りの聖剣は過たずシャブラニグドゥへと振り下ろされ……。
「せい、けん。せいまけん、聖ま、剣」
その刃を掴み取られた。
必殺必滅の意志を込めたエクスカリバーの刃を、何の工夫もなく片手で握りしめて受け止めるシャブラニグドゥ。
握られた刃は、込められた聖なる力は、シャブラニグドゥの掌の薄皮に浅く食い込むのみ。
赤いフードを被った白い仮面が祐斗に向けられる。
「せいなる、力、人のいし、意志の乗る、つるぎか」
辿々しく、だが、明らかに文章として成立し始めているシャブラニグドゥの言葉には余裕が伺えた。
「この世界の悪魔をころす、殺すのなら、足りたのだろ、う、な」
それが意味する多くの危険性を誰が把握するよりも早く、
「破弾撃（ボム・スプリッド）！」
爆発。
丁度、シャブラニグドゥと祐斗の中間地点、やや祐斗寄りの位置で発生した爆発は、シャブラニグドゥから祐斗を遠ざける形で吹き飛ば

す。
小猫の魔術。
とっさに、この状況で敵の情報を一番多く知り、対抗策を持っているであろうと直感的に察したゼノヴィアが、デュランダルと自らを盾にして小猫を庇っていたのだ。
シャブラニグドゥが握りしめていたエクスカリバーが、爆発の衝撃で祐斗が吹き飛ばされると同時に形を失い空に溶けて消える。
吹き飛ばされた祐斗はそのまま着地と同時にシャブラニグドゥから距離を取った。
そのまま、倒れたゼノヴィアの代わりに小猫やリアス、朱乃を庇うように立つと、エクスカリバーとは異なる聖魔剣を二本作り出し構え直す。
「手荒ですみません」
「いや、助かったよ小猫ちゃん」
状況は振り出しの一歩後ろ程度にまでは巻き戻された。
グレモリー眷属はその全員が多少のダメージを負い、しかし、シャブラニグドゥの初撃で意識を失っていたイッセーも先の雷撃で意識を取り戻していた。
意識を失いながらも禁手状態を維持していたイッセーが、霞む視界や意識を正すようにフルフェイスの割れた頭を振る。
「部長、あれは」
「強敵よ。ディオドラとは比べ物にならない程にね」
直前に意識を失っていた為、未だ魔王シャブラニグドゥの覚醒を知らないイッセーに、リアスは簡潔に答えた。
強敵、それ以外に説明が必要だろうか、説明が可能だろうか。
リアス自身が知るシャブラニグドゥの情報は少なく、小猫もまたこの状況で長々と敵の性質を説明する事もできない。
少なくとも、この場で警戒するのに改めての説明は不要だろう。
イッセーもまた、リアスが強敵と断言した時点で一切の油断を捨てた。
尾を振り、中に格納していたアスカロンを満身創痍のゼノヴィアに

向けて投げ渡す。
余分な錘を捨て、改めて拳を握る。
決まりきった構えの存在しないドラゴンの戦闘態勢。
復活したイッセーが完全に戦う用意を済ませるまでシャブラニグドゥに一切の動きはない。
いや、明らかに全員の戦闘態勢が整うのを待っていたのだろう。
余裕を滲ませ、構えすら取らずに宙に浮かんでいる。
「大儀、で、あった」
「何？」
「わたし、に、復活の……誕生の機会を、与えた、事だ」
その姿は戦うに臨む者の姿ではなく、配下に褒美を与える王の様で。
戦う意志がない、というより、戦いになるとすら考えていない。
「ささやか、な、礼、として……、このわたしに、従うのなら、天寿を全うする事を許そう」
「……嫌と言ったら？」
「そう、さな。そうであれば、ゲームの続きを、始めるとしようか」
ちら、と、リアスが小猫に視線を向ける。
全身を総毛立たせ、顔面を蒼白にした小猫は小さく、しかし素早く首を振る。
異界の魔王に従うという事がどういう事か、一時的にでもその傘下に入った場合に何をする事になるのかを理解できないリアスの視線だけの問いに、小猫はその全身で以って否を返した。
（それだけは、駄目です）
小猫は知っている。
異界の魔王、ひいては魔王を含む魔族という存在は、短期的に見れば生命体の負の感情を食らう為に動いているように見える。
だが、魔族の長たる魔王ともなれば、その行動は魔族の真の目的に直結する。
即ち、この世全ての破滅、滅び、消滅、無への帰結。
魔族の母と言われる金色の魔王、ロードオブナイトメアの元へと帰

るための使命。
　従う、という事は、これまで出会った全ての存在への、これから出会う全ての存在への裏切りだ。
　偽りでも、従うという選択肢は破滅にしか続かない。
（どうする、どうすれば）
　小猫は思考を、脳に刻まれた魔術の、魔族に関する知識をフル回転させる。
　元々魔術向きの脳構造をしている訳ではない小猫だが、魔王への対抗策ともなれば、逃げるための一手であっても思いつく事は絶望的だ。
　返答を濁すリアスに何時魔王がしびれを切らすかもわからない。
　時間制限すら解らない選択式ですらない難問。
「そこの」
　その制限時間は、唐突に尽きる。
　しびれを切らしたわけでもなく、しかし、シャブラニグドゥの紅玉の視線がイッセーに突き刺さっていた。
「赤の龍神（スィーフィード）……では、無い、な。ドラゴンの小僧、何をしている」
「……」
　イッセーは応えない。
　どう応えても意味が無いと考えているのか、だんまりで時間を稼ごうとしているのか。
　だが、傍目にイッセーが何を目指して動いているかは明らかだ。
　未だ謎の装置に囚われたままのアーシアに、ゆっくりと近づこうとしていた。
　見る者が見れば、その全身鎧に埋め込まれた宝玉に宿る力が、既にかなりの段階まで力を倍加させている事もわかる。
「あの小娘か」
　そして、シャブラニグドゥの視線が囚われたアーシアへと向けられた。
　……仮に、この場に居るシャブラニグドゥが、全く関係ない、何の因縁もない相手であったのならば、イッセーの行動は気にも止めら

れなかっただろう。
復活、いや、誕生させてくれた礼として、或いは気まぐれの一つとして助ける事すらあったかもしれない。
心優しい聖女の悪魔が、自分を助けるために想い人が異界の魔王に従い世界を破滅へと誘う。
そんな未来に味わえる負の感情を想像して、見返りの一つとして提示する事もあったかもしれない。
だが。
ここことは異なる世界において、人の身から復活した二柱の魔王と同じように、この模造品の魔王もまた、わずかに元の宿主の性質を残していた。
いや、そんな残滓に影響を受けたわけでもなく、生まれたばかりであるが故の、幼い悪戯心でしかないのかもしれない。
「……ふふ」
シャブラニグドゥが小さく笑う。
「！　止め……」
直感的に何かを察したのは誰だったか。
とっさに手を伸ばした先は囚われたアーシアか、僅かに動いたシャブラニグドゥか。
だが、そのどちらもが無意味。
シャブラニグドゥがローブから出した拳を握り締める。
たったそれだけ。
そんな小さな挙動と共に現れた光の柱は、アーシアを飲み込み、消えた。
後には何も残らない。
リアス・グレモリーの眷属。
元聖女の悪魔、アーシア・アルジェントは、この世から消滅した。
囚われ、嬲られる恐怖に耐えながら助けを待った少女は。
救われる事無く、再び愛しい人の姿を見ることも無く、消えたのだ。

「あ、……あ？」

イッセーの声が虚しく響く。
「アーシア？」
ふら、と、寸前まで張り詰めるほどに込められていた全身の力は抜け、まるで夢遊病者の如き足取りで、アーシアの居た場所へと近づく。
それを誰も止めることはない。
リアス達も、シャブラニグドゥも、どちらもが異なる理由でイッセーを見守っている。
「アーシア、何処に行ったんだよ、ほら、怖い奴は、あのディオドラとかいう奴はもう居ないんだ、帰れるんだよ。母さんも父さんも、心配してるぞ？」
ふらふらと、おぼつかない足取りで、周囲を見渡しアーシアを探す。
いや、その視線は本当にアーシアを探しているのか、周りを本当に見ているのか。
揺れる眼球は虚ろな光を宿している。
「なんだよ、隠れてたんじゃ、帰れないだろ。早く、早く帰って、一緒に練習しよう。体育祭で、一緒に、二人三脚に出るんだろ」
漏れる嗚咽は誰のものか、溢れる涙は誰のものか。
リアスを始め、イッセーの仲間の誰もが悲しみに暮れる。
そんな中、イッセーの顔には虚ろな、誤魔化すような笑みが張り付き、嗚咽も涙も無いからこそ、余計に見るものの心を揺さぶる。
感極まったリアスが泣きながらイッセーを後ろから抱きしめるも、イッセーの表情は虚ろだ。
「部長、部長、アーシアが、居ないんです、何処にも、早く、帰らなきゃ、もう帰れるのに、父さんと、母さんも、アーシアを本当の娘って、アーシアも、本当の両親みたいだって、俺、俺達、本当の、家族に……大切な家族で」
抱きしめたまま、赤子をあやすように、体温を移すようにイッセーの頬を撫でるリアス。
しかし、イッセーの心が癒える事はない。
未だイッセーの心は喪失を、悲しみを受け止める事が出来ずにいる。

「許さない……、絶対に、許さん！」
叫びとともに走りだしたのはゼノヴィアだった。
これまでの人生、教会のエクソシスト、聖剣使いとして培ってきた戦闘の基本を著しく欠けさせていた。
後退を、回避を、防御を考えない、ただ自らの全力を叩きつけるだけの突撃。
文字通り、怒りに任せた一撃。
威力だけで言えばこれまでの人生で一番と言って良い、普通なら出してはいけない捨て身の一刀。
デュランダルとアスカロンという一流の聖剣の、威力だけなら１００％近く能力を引き出した必殺の斬撃。
「あぁ……、思い出した」
受け止められる。
素手ではない、手に構えた杖によって、余波すら撒き散らすこと無く渾身の一撃は込められた威力を殺された。
いや、全ての威力が通った上で、単純に通じていないのか。
じゃれつく小動物でも払うように気軽に振った杖でゼノヴィアを吹き飛ばし、シャブラニグドゥは世間話でもするような軽い調子で続ける。
「あの娘は必ず助けが来ると信じていたが……」
「震えていたな」
「目を閉じ、貴様の顔を思い浮かべていたのだろう」
「健気な話だが……何故、助けてやらなかった？」
楽しげに、問う。
その問いかけがイッセーに向けられたものであると、誰よりも先に、イッセー事が理解した。
問いではないのだ。
問いではない。
紅玉の瞳が嵌めこまれた白面はその形こそ変えていないが、それでもわかる。
笑っている、笑っている。

イッセーの無力を、イッセーの失意を、そして、アーシアの死を。
それを理解し――――――

――――――――――――――――――――

『リアス・グレモリー、今直ぐにこの場から離れろ。命が惜しいのならばな』

響き渡る声の出処はイッセー、いや、イッセーが身に纏う全身鎧。
赤龍帝の籠手に封じられたドライグが、与えられた役目を越え、持ち主以外に聞こえるように警告する。

『今回ばかりは、どうなる事か』

だが、その声は何度か聞いたドライグの声と比べて何処か遠く、ノイズが混じっているように思える。
神器に力を与えるドライグの意志ですら、完全な形で機能できていないとでも言うように。

ぴし、びき、と、卵の殻が、瀬戸物が、金属が割れる不快な音が聞こえ始め、徐々に大きく、騒音の如く鳴り響き始めた。

『だが魔王よ、異界の魔王よ』

破滅的な音に押し潰されるように、ドライグの声が響く。

『――――少なくとも、貴様だけは道連れとなるだろうよ』

掻き消えるようなドライグの声がふつりと消える。
そして、決定的な破砕音。
卵を握りつぶすような、巨大なビルが崩れるような、紙を勢い良く引き裂くような、張り詰めた弦が切れ弾けるような。
取り返しの付かない音と共に――――――イッセーが割れた。

『我、目醒めるは――』

ガラスのカップを割るように、全身鎧の人型が崩れる。

『覇の理を神より奪いし二天龍なり――』

兵藤一誠という龍への進化、それが齎していた奇跡の様な人型は、致命的なまでにヒビ割れ、

『無限を嗤い、夢幻を憂う――』

開く、

『我、赤き龍の覇王となりて――』

中身が、溢れだした。

『Juggernaut Drive!!!!!!!!!!』

五十一話　虚剣、魂すらも打ち砕き

砕け、打ち捨てられた卵の殻の様になっていたイッセーの肉体が、内側から噛み砕かれた。

　あらゆる物理法則を無視して現れた、一本一本がイッセーよりも巨大な乱杭歯の間に挟まり、奥へと飲み込まれていく。

　兵藤一誠の肉体を裏返すようにして現れた顎門、飲み込まれた元兵藤一誠の肉塊が飲み込まれる軌道をなぞるように喉が、胴が現れる。

　赤い、赤い鱗に包まれた巨大な龍。

　まるで未開部族のシャーマンが施す化粧の如く斑に白が混じったその姿は、他に例えようもない程に龍でありながら、どうしようもない程の異形であった。

　明らかな龍の腕、しかし、まるで人の腕を撚り合わせた様に不自然な筋肉の流れ。

　龍翼は無い、いや、背中に張り付き、代わりとでも言うように悪魔の羽根が生え。

　自らの肉体を噛み潰した顎門は龍としては短く、人間との間の子のようですらある。

『――――――――――――――――――――――――――――――――――!!!!!!!!!!!』

　咆哮。

どんな言語でも文字化出来ない、空気を引き裂く音の暴力。

人間らしさ、知性、いや、ドラゴンとしての知性すら怪しい。

悲しみ、怒り、そんな感情は欠片すら見えない。

「イッセー……」

　リアスは呆然とその名を呟く。

　だが、だが、どうしても目の前の龍がイッセーの転じたものであると思えない。

　仮に神器の暴走だとしても。

それほどまでに、イッセーが砕け散る前に発していた感情と結びつかないのだ。
目の前の龍が持つ意味。
それは感情の爆発ではない。
例えるなら、それは自然現象のようなものだ。
ただ、暴力を、暴威を、破滅を振りまくだけの現象。
意味も理由も無い、いや、必要としない。
だが。

「――――――――――――――――――――！」

ごう、と、赤い龍が飛ぶ。
誰一人としてその動きを目で追えない。
飛び立った後に吹きすさぶ瓦礫を纏めて吹き飛ばすような風でのみ、何が起きたかを理解できた。
そして、龍が何処に飛んだかを最初に理解したのは、ただ一柱。
「ほう」
標的であるシャブラニグドゥのみ。
短い顎門を開き迫る赤い龍に、杖――錫杖を構え、振りぬく。
勢い良く振りぬかれた錫杖は龍の短い顎門を捕らえ、薄皮のようになった頬を容易く引き裂いた。
しかし、頬を引き裂かれた赤龍はそのまま錫杖を持つ腕を巻き込み腕に喰らいつく。
だが、噛みつかれていた筈のシャブラニグドゥの姿が掻き消える。
かと思えばその姿は赤龍の背後に現れていた。
赤いローブには傷一つ無く、手に構えた錫杖の先には魔力光。
滅びの力の様な目に見えるほど特殊な力ではない。
ただ、膨大な魔力に攻撃的な指向性を与えただけのもの。
ぶん、と、錫杖を振るい赤龍の背に叩きつける。
轟音を上げながら赤龍が魔力に打ち据えられ地面に墜落する。

「――――――――――――――――――――

――――――――――――！！」

それでも赤龍にダメージは無い。

地面に叩きつけられながら、振り返りながら異形の腕を振り被る。
明らかに爪が届くような範囲でもない。
しかし、赤龍がその身から赤と白の輝きを放つと同時、シャブラニグドゥは赤龍の間近に移動させられていた。
かつてイッセーが取り込んだ白龍皇アルビオンの半減の力を赤龍帝ドライグの力で倍加し、双方間にある距離を適正な距離まで半減したのだ。
振り下ろされる爪がシャブラニグドゥを捕らえ、しかし、当然の様にその姿は健在。
繰り返される焼き直しの様な魔力砲撃による打ち下ろし。
再び赤白の輝き。
魔力撃は赤龍に届く前に幾度とない半減を繰り返され赤龍の鱗の上で弾ける。
次いで、絶叫。
赤龍の苦痛を現すような絶叫の理由は切り裂かれた悪魔の羽根にあった。
見ればシャブラニグドゥは錫杖に赤い光を宿し、羽根の根本に立っていた。
魔力撃が半減された時点で攻撃を切り替えていたのだ。
「逃げます」
その戦闘を遠くから見ていた小猫が断定的に呟く。
額にじっとりと浮かぶ脂汗、表情に余裕は一切ない。
「待って小猫、イッセーが」
トン、と、リアスの首筋を祐斗が手刀で叩き、その意識を刈り取ると、意識を失ったリアスの身体を肩に担ぐ。
僅かに逡巡していた朱乃もそれを見て黙り、残った全員が一目散にその場を離れる。
発見されないように低空を高速で飛びながら、祐斗が短く小猫に問う。
「何処まで？」
「出来れば外、無理なら鎧武者さんへ」

「無理なら？」
しばしの沈黙。
仮に無理なら、対抗策が無いのなら、自分たちは死ぬだろう。
現時点での最高戦力であったイッセーは暴龍へと化け、聖剣も聖魔剣も通じない。
そして負の感情を食らうという性質は、最終的に敵対者に、いや、ありとあらゆる存在に恐るべき最後を約束している。
だが……、
「……作戦が、あります」
「何をすればいい」
ダメージを負いながらも高速で飛翔するゼノヴィアが問う。
どういう作戦なのか、その作戦が本当に通じるのか、そも勝つための作戦なのか逃げるための作戦なのか。
それを問うのはゼノヴィアの管轄ではない。問うてどのような答えが帰ってきたとしても意味が無い。
エクソシストを辞め、悪魔となりながらも生まれて初めて年頃の人間らしい生活を送って多くを学んだ。
それは世界を知ることであり、自らの中に未知を見出す有意義な時間だった。
最近自覚するところでは、もしかしたら恋心というものすら自分の中にあるかもしれない。
だが、それでも変わらないことがある。
ゼノヴィアは戦士だ。
戦うべき場において、そのあり方は一切変わらない。
一握の火薬で、一発の弾丸で、一振りの刃で、聖剣の担い手だった。
考えるべきは信を預ける相手のみ。
それも見定めるのは戦場に入る前、戦場では戦うのみ。
故に、ゼノヴィアはこの戦場における自らの担い手に視線を向ける。
どう振るわれるのか、何をすればいいのか。
「手短に話します。部長にも聞いてもらわないと」

意識を取り戻し、説明を受けたリアスは小猫の作戦を一言で断じた。
「無茶よ」
「私もそう思います。あくまで、外に出る方法が見つからなかった場合の話しです」
勿論、小猫とて好き好んで魔王と、いや、魔王すら粉砕する筈の伝説の天龍とプロレスをして無傷ですむような相手と戦いたいとは思わない。
はっきり言って事態は最悪の方向に進みつつあるのだ。
シャルバの言葉が確かならろくに知識を持っていなかった筈の魔王のコピー。
それは今、確実に、しかも急速に、その力に相応しいだけの知性を獲得しつつある。
恐ろしいほどの学習能力を備えているのか、宿主の持っていた知識を奪っているのかは不明だが、全うに考えて戦う程度の知識を手に入れた今、自分たちの様な未熟者が相対するべき相手ではない。
「外には？」
首を振る。
まともなレーティングゲーム用のフィールドならばいざしらず、この場は禍の団の手によって改竄されたフィールドだ。
しかもあのようなバケモノを解き放つ事を考えていたのであれば、容易な手段では外に脱出することはできまい。
そんな事はリアスの眷属の誰しもが理解できていた。
だからこそ、全員が全員、必死で元来た道を飛んで逃げ戻りつつ、自力での侵入に成功していた鎧武者とオーディンを探していたのだ。
探していたのだが……。
「出れそうな手段は、見当たりません」
探すだけ探した、などとは口が裂けても言えない。
だが、考えてもみて欲しい。
イッセーが神器を暴走させ龍へと転じ、その暴威を存分に振るって

いる。
あの大騒ぎに、一切反応せず近づかない、という事があり得るだろうか。
遠く離れたこの場所ですら、リアスも、眷属も、誰もがあの不毛な暴力のぶつかり合いの衝撃を感じているのだ。
遠雷の如く響く地響き、空間はかき回され風が吹きすさび、絶え間なく鳴き声として成立しているかどうか危うい暴龍の出す爆音が耳を叩く。
いっそ単調ですらある、世界の終わりを感じさせる破壊音。
それが一切変わっていないという事は、あの鎧武者やオーディンですら手を出しかねているか、それとも、別の場所で別の問題にとりかかっているか、さもなければ自分たちだけで脱出してしまっているか。
自分たちと同じように隠れている、という可能性もあるが、そうなれば探す意味は殆ど無い。
脱出手段も対抗できるだけの力もないというのなら、追加戦力として見ることも難しいだろう。
勿論、草の根分けても探しだす程の時間的猶予が無いという理由もあるのだが。
「……決して、危険の無い作戦だとは言いません。いえ、あれに相対する以上は」
死ぬ可能性がある、いや、死ぬ可能性が高い。
そう口に出す事もなく、小猫は口をつぐむ。
小猫が提案した作戦は、安全面を考慮したものではない。
辛うじて繋がっている、いや、繋がっているように見える勝ち筋を、存在するものと信じてたぐり寄せるための決死の作戦だ。
グレモリー眷属は小猫にとって第二の家族。
提案こそしたものの、小猫にはそれ以上はできなかった。
「僕はやるよ。イッセー君をあのままにも出来ない」
「私もだ。アーシアを、私の友を殺したツケは必ず払わせる」
祐斗とゼノヴィアは迷うこと無く頷く。

僅かな交戦でダメージを受け、決して無傷とは言えない二人だが、目には強い闘志が宿り、それに答えるようにその手の中にはそれぞれの獲物が握りしめられている。

「ぼ、僕も、どれくらい力になれるかは、わからないけど」

次いで手を上げたのはギャスパーだった。

上げた手は震え、声にも僅かに怯えが見える。

ギャスパーが変わるきっかけになった相手は此処には居ない。

勇気を出すには足りず、気合を入れるには届かない。

停止の邪眼は既に試し、まるで意に介されなかったのを確認している。

自分の持つ力はほぼ無意味で、役に立つかはわからない。

だが、それでも、仲間を見捨てて逃げようと思えるほど、救いを得た少年は、臆病では居られなかった。

溜息。

困ったような表情で頬に手を当てた朱乃だ。

涙の跡が見て取れるが、努めて普段通りに振る舞おうとしているのが判るだろう。

「……イッセー君の事も、アーシアちゃんの事もそうだけど、女王の私が知らんぷりは出来ないわよね」

「朱乃」

戸惑うリアスに、朱乃は振り向き、その目をまっすぐに見据える。

「リアス、貴女は、どうする？」

女王としては、王を逃がすように促すべきかもしれない。

だが、朱乃はあえてリアスに対して何の提案もする事無く、選択を迫った。

女王としては失格かもしれない。

だが、こんな時だからこそ、女王としてではなく、友人の朱乃として、ただリアスの意志を尊重したかった。

意地っ張りで世間知らずなお嬢様の、情に深すぎる箱入り娘の意志を、わずかでも捻じ曲げる事をするべきだとは思わなかったのだ。

「う……、～～～～っ！　解ったわよ！　そうよ、私だって、戦いた

いわ！」
「部長……！」
そも、リアスこそがあの場に最後まで残ろうとしていたのだ。
一度その場を離れて、僅かに冷静になった頭が残った眷属を守る方向に働いていただけで。
戦意かと言われれば首を横に振るだろう、それは龍と化したイッセーを、あるいは消えたアーシアを諦めきれない未練と言ったほうが近い。
小猫の提示した作戦、いや、作戦とも言えないような筋書きに無茶と言ったのは、一度遠ざかった未練よりも、今間違いなく生きている眷属を優先しようという理性が放たせたものだ。
だが、その残った眷属達までもが、自分と同じく、あの絶望的な存在に立ち向かおうと腹を括っているというのであれば。
「小猫」
「はい」
「勝てるのね」
「勝ちます」
あえての断言。
それは王であるリアスの言外のオーダーに応えたものか。
いや、或いは今、全員の心が一つに纏まったからか。
言ってしまえば何の根拠もない、テンションに任せた出任せとも言える。
だが、小猫の目には光があった。
やらなければならないという強迫観念ではない。
やってみせるという、強い意志の力だった。
「ほう、随分時間が掛かったが、なるほど」
「！」
声に反応し、全員が空を見上げる。
神殿の瓦礫に隠れるようにしていたリアス達を、赤い闇が数メートル上空からいつの間にか見下ろしていた。
全身を赤いローブに覆った白面、紅玉目の魔王、シャブラニグドゥ。

いつの間にそこに居たのか、誰一人として気付く事が出来ずにいた。
「イッセーはどうしたの!?」
「イッセー……あれの名か。肩慣らしにはなるが、あそこまで狂っていては味気なくてな。今頃は私の影に戯れている頃だろう。……さて」
ぶん、と、手の中に再び錫杖が現れる。
再び姿を表したシャブラニグドゥは、その威容を些かも衰えさせていない。
白磁の仮面には表情こそ浮かばないものの、その雰囲気は楽しげですらある。
「生まれたばかり故、どうも動きがしっくり来なくてな。慣らしに付き合ってもらおうか」
「豪勢な話しね。魔王のトレーニングに付き合えるなんて」
「気にするな、どうせ全員に付き合ってもらう事になる。順序の違いだ」
全員、という言葉の意味に、軽口で応えたリアスの背に冷や汗が浮かぶ。
なるほど、此処でこの魔王が自分達を殺して進んだとしたなら、そうなる可能性もあるのだろう。
浮かんだ絶望的な未来に、しかし、浮かびかけた恐怖を飲み込む。
それが敵の力となるなら、敵に喰らわれる餌となるのなら、絶対に恐れてはやらない。
最善手ではない、勝ち目の多い味方に合流すらできていない。
命をチップにした賭けのような戦い。
だからこそ、リアスはにやりと笑みを浮かべてみせた。

「祐斗!・ゼノヴィア!・」
リアスの叫びに、祐斗とゼノヴィアが駆ける。
現れたシャブラニグドゥまでの距離はそう近くなく、速度に優れる祐斗であっても一息では辿りつけない。

シャブラニグドゥもまた、素直に騎士二人を近づけさせるつもりは無いようだ。
僅かに魔力を杖に流すと、廃墟と化した神殿の無数の柱がうねるように起き上がり、鎌首をもたげる。
崩れた石柱の断面であった筈の位置にあるのは禍々しい蛇の頭。
石の硬さを残しながら、砕けること無く身をしならせ騎士二人に迫る。
「木場祐斗！」
ゼノヴィアが足を止める。
視線は前に、しかし、迫る石蛇ではなく、更にその向こうへ。
石蛇の胴体の隙間から見える視線の先には、迎撃する構えすら取らずにシャブラニグドゥへの最短ルートへ、石蛇の口の中へと駆ける祐斗の姿。
ゼノヴィアの手の中には使い慣れたデュランダルのみ。
逃げることも防ぐ事も考えない。
一歩、力強く踏み込み、振り下ろす。
斬っ、と、まるで巻藁でも斬るかの様な小気味いい切断音と共に、視界が開けた。
デュランダルを振り下ろした軌道上、斬線の先が綺麗に切断され、切り離されている。
当然、視線の先であった祐斗の行く手を阻む石蛇すら。
たった一言での連携。
ゼノヴィアとデュランダルではなく、祐斗と聖魔剣、いや、祐斗とエクスカリバーを前に出す事が事前に決まっていればこそ。
「見えているぞ」
杖を構え、待ち構えるシャブラニグドゥ。
当然、戦場を俯瞰する側からすれば、石蛇を切り裂いて進む祐斗が見えない訳がない。
そして無策で来るとも考えていない為、素直に受けるという選択肢も無い。
だが、

「雷光よ！」

一際巨大な雷光が赤い魔王に降り注ぐ。

一本一本が先の石柱の蛇の如く、だが、それは一度では収まらない。

続けざまに、絶え間なく降り注ぐ雷光。

その光景は正しく神の雷（怒槌）が如し。

しかし、聖なる光を乗せられた雷槌もまた、シャブラニグドゥに痛痒を与えることはない。

そもそもの法則が違うのだ。

悪魔は邪悪であり、聖なる光に焼かれる。

この世界の常識は通じない、魔族は聖なる力で焼ける訳ではない。

それを知らないのか、と、内心で嗤うシャブラニグドゥも、気付く。

感知能力に優れているわけではなくとも、自分の攻撃が通じていないこと位は、数発打ち込んだ時点で気付く。

それでも攻撃を辞めないという事は、ダメージを期待しての攻撃ではなく……、

「目眩ましか」

降り注ぐ雷槌は視界を塗り潰し、大気を引き裂く轟音はそれ以外の音を掻き消す。

これなら本命の攻撃を防ぐ事は難しいだろう。

通常の生物であれば。

精神生命体であるシャブラニグドゥは、物質的な肉体を得た今でも変わりはしない。

彼等にとっての視覚や聴覚は人間や悪魔にとってのそれほどに重要なものではない。

「エクス――」

しかし、それを見越した上での目眩ましだ。

この場には、この世界に存在しない筈の魔族についてある程度の知識を持つ小猫が居る。

だからこそ、視覚を封じればアストラルサイドからの知覚で距離を測るだろうという推測もできた。

全力で突っ込む祐斗、それを受ける、迎撃するシャブラニグドゥ。

であれば、剣で無く光撃を、全力での突撃（チャージ）からの砲撃であれば。

「――カリバー！」

極光。

白とも反転した黒とも取れない、光としか言いようのない力の奔流。

異界のエクスカリバーが備える機能を再現し、魔力と共に神器の持つ力、聖剣の因子が齎す力まで込められた万能属性と言っても過言ではない文字通りの必殺技。

聖剣の因子の残滓によって形成される祐斗のエクスカリバーは、この世界で最も的確に魔族にダメージを与える聖剣だろう。

「褒めてやろう。この私に、痛みを与えた事を、だが」

マーブルカラーの光を引き裂き、杖を握りしめた腕が祐斗の眼前に出現した。

それと判るほどに焼けただれた腕。

しかし、明らかなダメージを負いながら、杖を握りしめた拳がエクスカリバーを捕らえ、粉砕、そのまま祐斗の顔面を殴り抜ける。

表面上のダメージはあっても、シャブラニグドゥの戦闘力を下げる事すらできない。

「そうだね、知っているよ。通じないってさ」

エクスカリバーの破片が顔面を切り裂き、拳に鼻を砕かれ、しかし、祐斗は下がらない。

顔面に拳を受けたまま静止する。視線は強く紅玉の魔王を睨みつける。

切り札は、無い。

祐斗の持ち札はここまで。

仮にここでシャブラニグドゥが何か、一つでもまともに魔力を駆使した攻撃を加えたのなら間違いなく助からない。

だが、その視線に込められた意志に、わずかにシャブラニグドゥの動きが止まる。

怯んだわけではない。

精神が折れていない事を、他ならぬ精神生命体であるからこそ察知

し、だからこそ、何かあるのかと期待した。
警戒ではない、新しい余興を楽しむ程度の考え。
「滅びよ……！」
だからこそ、それ以外の行動に注意が向かなかった。
いや、それもまた作戦を考えた小猫の計算の内だ。
確かにシャブラニグドゥの、いや、シャブラニグドゥ・コピーの学習能力は高く、知性の無い状態からあっという間にここまでの知性を獲得した。
だが、シャブラニグドゥ・コピーが魔族と同じ精神生命体である以上、決して逃れられないハンデが存在する。
それは、リアス達がシャブラニグドゥ・コピーから見て明らかな格下だからこそ得られるハンデ。
精神生命体である魔族は、格下相手に全力を出す事ができない。
格下相手に全力を出すという事はつまり、格下である相手を自分と同等か、それ以上の力を持っていると認める事になる。
強い屈辱は精神生命体にとって強いダメージであり、また、格下である相手より下であると認めるという事は、自分自身の強度に矛盾を産み、自己崩壊へと繋がってしまう。
人間、もしくはそれに類似する存在と相対する魔族は、すべからく注意力を失い、攻撃手段に遊びが生まれ、詰めが甘くなる、いや、甘くせざるを得ないのだ。
それこそが、リアス達が、いや、物質生命が突くことのできる魔族の弱点。
リアス自体はその場から一切移動していない。
放たれた滅びの魔力もまた、命中させるために何かしらの工夫をしている訳ではない。
一見して何の変哲もない魔力攻撃。
避ける理由はない。
いや、知識として理解はしているのだろう。
あらゆるものを消滅させる滅びの力、ある意味では魔族のそれに近い属性とも言える。

狙い場所さえ確かならば致命的なダメージを与える可能性は十分にある。
避けることができない速度でもない、身体を押さえつける騎士はその気になれば直ぐに退かせる事もできる。だが……。
《闇よりもなお暗きもの　夜よりもなお深きもの》
朗々と唱えられる詠唱に、シャブラニグドゥ・コピーが大きく身を震わせた。

「馬鹿な、その詠唱は、何故」
驚愕する魔王を視界の真ん中に捉えながら、意識を集中する。
全神経を、それこそ、猫?として生まれ持った動物的に優れた感覚を総動員して魔力の流れを抑えこむ。
しかし、それでも抑えきれない魔力が、通常の魔術を行使する時と同じように、周囲に魔力障壁を作り出す。
とてもではないけれど、制御しきれているとは言い難い。
しかし、それは仕方がない事だと思う。
この術は本当に本当の、奥の手中の奥の手で、可能な限り使うのは避けたほうが良いとすら考えていた。
《混沌の海にたゆたいし　金色なりし闇の王》
これこそは、私の脳に、記憶に刻まれた魔術における最大の禁術。
異界の魔王であるシャブラニグドゥですら及ばない超越存在へのアクセス。
魔王の中の魔王、天空より堕(お)とされた『金色(こんじき)の魔王』への祈り。
力を借りている、という言葉すら痴がましい、その影の一端に微かに触れる程度でしかない感触。
《我ここに汝に願う　我ここに汝に誓う》
判る。
人間では理解出来たか、感知できたかわからない。
今、私は、触れてはいけない領域に触れている。
竜破斬とは比較にならない。
人間、悪魔、猫?、そんな違いに意味なんて無い。

《我が前に立ち塞がりし　全ての愚かなるものに》
この術を使わなければ、私たちは今度こそ全滅するだろう、逃げることすら出来ず殺されるだろう。
それを踏まえた上で、呪文を唱えきって良いのかという疑問が浮かぶ。
生物としての本能、動物としての強い生存本能が警鐘を鳴らす。
それを、理性でもって無視し、唱える。
《我と汝が力もて　等しく滅びを与えんことを！》
私を取り囲むように、闇が産まれた。
闇より暗く、夜より深い闇。
それは深淵、奥の見えない穴、世界に、あらゆる場所に何かが存在し続ける世界を穿つ穴。
満たされる事はない、救われる事もない虚無、無明の闇。
術式は安定している。このまま気を抜かなければ暴走させる事は無いだろう。
だけど、ああ、だけど。
恐ろしい。
わかる、力の流れを操る仙術を学び始めたから？　猫？のポテンシャルがあるから？
これは、違う、駄目だ。
力を借りているというのは他の術と同じだ。
だけど、借りて、大きな器から力を掬い取って終わりじゃない。
繋がっている、底知れぬ何かに、私の中の魔力が接続されている。
丸裸で宇宙空間に放り込まれてもここまでの不安は感じられないだろう。
滅びでもない、破滅でもない。
無いのだ、そんなものは。
この闇は、そんなものではない。
これに比べたのなら、部長の操る滅びの力のなんと満ち足りて救われている事か！
仮に、仮に私がここでこの術の制御を失敗すれば、手綱を放り投げ

れば。
死ぬ、などという生易しい最後は迎えられないだろう。
「だが、たかが悪魔風情が使ったところで！」
無数の魔力弾が迫る。
人間の魔術師が力を借りるそれとは違う、赤眼の魔王シャブラニグドゥそのものが放つ魔力攻撃。
もしかしたら一撃一撃が竜破斬と同等かそれ以上の威力を備えているのかもしれない。
が――その尽くが、私を取り囲む闇の中に消えていく。
「なんと!?」
これこそ、部長にもナイショにしていた私の本当の切り札、重波斬（ギガ・スレイブ）。
竜破斬が使用禁止にされたから、もしもの時にぶっぱする為に取っておいた秘中の秘。
……知識の上でしか知らなかったので、軽く見ていたという点もあるので見逃して欲しい。
もしもこんな事態に陥らず、レーティングゲームとかでピンチになってこれをぶっぱしていたらと思うと流石に気分が高揚――もとい、血の気が引く。
レーティングゲームの安全装置程度でどうにかなるとは絶対に思えない、危うく主殺しで味方殺しで大量殺悪魔で姉様に賭けられた賞金を上回る賞金首になるところだった。
さて、この呪文だけでも、シャブラニグドゥに確実にダメージを与える事ができる。
が、これだけではそれだけに留まってしまうだろうという事も解るのだ。
力の出処こそあれだけど、それをこの世界に顕現させている、所謂蛇口は私という小さな器でしかない。
異界のものとはいえ、魔王と一介の下級悪魔ではそれほどに器（キャパシティ）に差がある。
だから、そう、だから、私は手首のお守りを、拳に巻き直す。

「お守りよ（タリスマン）――――！」

叫ぶ。

仙術でも、力ある言葉（カオス・ワーズ）でもない、ただの呼びかけ。

しかしお守りはそれに応えるように、私の意を汲んでくれる。

「……なんだ、なんだそれは！」

シャブラニグドゥの悲鳴のようにすら聞こえる叫び。

それも無理からぬ事だと思う。

私が拳に握り直したお守り、その中心に据えられた、小さな飾り石に、重波斬が、闇が収束していく。

いかなるキャパシティなのか、苦もなく、まるでそうあるべくして作られているとでも言うかのように、展開していた魔力の霧と交じり合いながら、禁呪はお守りの中へ。

安定している、当然の如く。

そうしてくれる、と、それだけは確信できていた。

お守りに唇を軽く当て、離す。

《汝が欠片の縁に従い、我にさらなる魔力を与えよ》

増幅。

込められた重波斬へ、ではない。

これから唱える術の為。

あの魔王を殺す為だ。

だんっ、と、荒々しい音から始まった。

踏み込み、疲労からか少し余分な力が込められた、最初の一歩。

小猫が走りだす。

重波斬という、ある種最悪と言って良い爆弾をその拳に宿したまま。

小細工はない、羽根すら広げない、そんな加速の仕方は練習していなかった。

ただ、小猫が持つ身体能力だけで、駆ける。

一直線に、シャブラニグドゥ・コピー目指して。

「やらせはせん」

重みのある声、遊びの色は無い。
魔力が激しく迸り、しがみつくようにおさえていた祐斗が天高く吹き飛ばされる。
もろに食らったからか、ゆっくりと頭から墜落する姿は受け身を取る素振りすらみせない。
吹き飛ばされ、地面に激突した祐斗の脇を通るように滅びの力が迫る。
意識の外にあった攻撃、明らかに遅すぎる弾速。
いや、速度自体はそのままで、途中で減速した訳でもない。
だが、シャブラニグドゥが小猫の詠唱に意識を取られている間に、滅びの力は空中でぴたりと静止していたのだ。
それが、祐斗が吹き飛ばされると同時に運良く解除されたというだけの話。
いや、運良く、というのは語弊があった。
「行って、小猫ちゃん……」
視界の外、シャブラニグドゥの認識の外に外されていた細い身体が崩れ落ちる。
全力で能力を行使したせいか、その神器を宿した瞳は毛細血管が破れ目尻からは血の涙が溢れていた。
滅びの力は運良くタイミング良く動き出したのではない。
シャブラニグドゥを止められる程に能力を制御できていないギャスパーが、意地で、気合で、仲間と共に生き残るために、タイミングを合わせられるまで止めていたのだ。
着弾。
完全に小猫に意識を向けていたシャブラニグドゥは滅びの力を防ぐことも避けることもできない。
いや、しない。
ダメージがあるのか無いのか、自分に降り注いだ力を無視し、詠唱を始める。
混沌の言語なのかどうかは理解できない、
だが、止めなければならないだろう。

魔王であるシャブラニグドゥが、覇竜ですら殺せない超越者が、態々詠唱を行い放つ攻撃。

並大抵のものである筈がない。

《天空（そら）の戒め解き放たれし　氷れる黒き虚無（うつろ）の刃よ》

ほぼ同時、駆ける小猫が詠唱を始めた。

待機状態の重波斬が制御から離れ、お守りの石が熱を持ち輝き始める。

二つの呪文を、まして、金色の魔王の力を借りた禁呪を同時に制御できるだけの力は小猫にはない。

ただお守りだけが封じ続ける重波斬は直ぐにでも解き放たれるだろう。

小猫の顔には焦り。

余裕は一切無い。

この術が完成しなければ万に一つの勝ち目も消える。

が……、小猫に刻まれた知識は、小猫の備える直感は、相対するシャブラニグドゥの詠唱が先に完成するだろうと告げていた。

防ぐ手立ては無い。

避ければ最短ルートを外れ自分は何も残せず無駄死に。

恐怖に、僅かに脚が止まりかけ、

「小猫！　走れ！」

声が背中を押す。

ゼノヴィアの声、仲間の声だ。

聖剣使いであるゼノヴィアに遠距離攻撃の手段も、防御の手段も無い。

先のデュランダルの一撃もシャブラニグドゥの渾身の攻撃をどうにかできるレベルでは無かった。

それでも足を止めず、走る。

「デュランダル！　許せよ！」

たった一言の謝罪と共に、ゼノヴィアは躊躇いなくデュランダルを投擲した。

大気を引き裂き、走る小猫を追い抜いて詠唱中のシャブラニグドゥ

へと迫るデュランダル。
シャブラニグドゥは一瞥もくれない。
その聖剣が自分を傷付ける程の力を保たない事を本能的に察していたのだ。
「アスカロン！」
叫ぶゼノヴィア。
片足は天を突き、振り上げられた足先には土煙が軌道を描く。
その手にはイッセーより借り受けた聖剣アスカロン。
振り上げられた脚がギロチンの如く振り下ろされ、大地に叩きつけられる。
連動し、大上段から弧を描く腕が、アスカロンを鉞の如く振り下ろし――――
「行って来い！」
投げる。
聖剣使いにあるまじき、元エクソシストにあるまじき、聖剣を扱う上でありえない程の大振りかつ全力のスローイングフォーム。
アスカロンにかかる運動エネルギーは先のデュランダルのそれを遥かに上回り、しかし、全く同じ軌跡をたどる。
音の壁を破り、アスカロンの剣先が過たずデュランダルの柄尻を貫く。
「なにぃっ！」
閃光。
主の意を汲みアスカロンの助力を受けたデュランダルが爆ぜる。
自らに込められた力の全てを、本来ならどうやっても一撃には込められなかった全ての威力を、自らの破壊と引き換えに絶大な破壊力へと変換したのだ。
「小癪な！」
詠唱を途切れさせ、赤いローブをボロボロにさせたシャブラニグドゥが無数の光弾をばら撒く。
シャブラニグドゥの詠唱は中断された、直撃を食らっても死にはしないかもしれない。

しかし、新たな禁呪を詠唱中の小猫にはその程度のダメージでも致命的だ。
一撃で殺される事が無かったとしても、詠唱を中断された時点で勝ちの目は無くなる。
（速い）
走りながら目の前に迫る光弾の速度に驚く。
避けれるか避けれないかで言えば避けれないかもしれない。
加速した思考は走馬灯の前兆か。
（部長、副部長、祐斗先輩、ギャー君、ゼノヴィア先輩）
この場の全員を思い浮かべ、覚悟を決める。
これを防ぐ手段は誰も持っていない。
《我が力　我が身となりて　ともに滅びの道を歩まん》
（残り一節）
シャブラニグドゥを、迫り来る光弾を睨みつける。
（避けるのは最小限）
（顔と喉と肺は避ける）
（唱えきる。後の事はしらない）
言ってしまえば文字通りの決死。
死ぬつもりはない、が、死んでも、に変わる。
猫？として産まれた事に、戦車という耐久力のある駒で生まれ変わった事に感謝を捧げ――――
「ネェェコ……」
視界いっぱいに、黒い背が映った。
それは一匹の美しい毛並みの猫。
いや、猫？
実在する猫と比べ、些かポップな、ぬいぐるみのような、怪物のようなデザイン。
ある種作り物めいたデフォルメされた、尻尾の先に幽鬼めいた鬼火の付いた何か。
「ショォオウッッッ!!!」
小猫、黒猫風の何か、光弾。

その黒猫と光弾の間に光の壁が生まれる。
鑑の如き輝きを持った壁が光弾の幾つかを跳ね返し、砕け散る。
そして、光の壁を粉砕し小猫に迫る光弾を、黒猫が身を挺して庇う。
「にゃっ」
くぐもった鳴き声。枯れ木を折る音、水音。
内臓が入っているとは思えない程にひしゃげた胴体、口からは赤黒い何かがこぼれ落ちる。
しかし、目は死んでいない。
烈火を宿した瞳がシャブラニグドゥを睨みつけ、そのまま地面に落ちる。
投げられたゴミの様に無残に地面に散らばったマスコット風の姿が砕け散り、見覚えのある姿に変わるのを見て目を見開き、喉が絶叫を上げようとして、止まる。
黒猫の、彼女の視線は死んでいない。
最早死に体、しかし、視線だけは優しく、小猫を見詰めていた。
「っ」
悲鳴を、絶叫を、疑問を、怒声を、飲み込み、
目の前、一歩先のシャブラニグドゥ目掛け、
《神々の魂すらも打ち砕き！》
拳を、打ち付けた。
《神滅斬（ラグナ・ブレード）》
ずん、と、拳から、拳に巻いたお守りから生えた虚無の刃がシャブラニグドゥを貫く。
アストラルサイドに存在する本体ごと貫かれ、シャブラニグドゥの意識が一瞬だけ断絶した。
「これで」
虚無の刃の根本、お守りに込められていた重波斬が解放され、一切の漏れ無くシャブラニグドゥの中へと注ぎ込まれ――
シャブラニグドゥから解放されたディオドラの残骸が塵となり、風に流されていった。
「……おしまいです」

拳を振りぬき、石の砕けたお守りを拳に巻いた小猫がその場で崩れ落ちた。

五十二話　疑問、答えは柔らかに

ばん、ばんばん。

破壊力を伴わない競技用の空砲が鳴り、グラウンドに競技内容を知らせるアナウンスがこだまする。

『次は、特別種目、二人三脚自由形です。参加する皆さんはスタート位置にお並び下さい』

「特別種目……？」

「ほら小猫さん、行こう」

書主さんに促され、首を傾げながらコースに向かう。

自由形という響きは校庭で行う競技で使われるもので無い、というのもそうだけれど、特別種目という冠が気になる。

態々特別種目なんて言葉を付け足す以上、普通のありふれた二人三脚ではないと思うんですが……。

同じコースに集まりつつある他の競技者達を見ても、それほどおかしな事にはなっていない。

何処らへんが自由型か、という点もやはり不明だ。

「自由形というのは脚を紐で互いに結んでさえいればどんな結び方でもある程度は自由、ということだったんだけど、最終的に一番有利なのが普通の結び方だったのでこんな感じらしい」

「実行委員は何を考えてそんな真似を……」

「毎年毎年同じ競技じゃ飽きるんじゃない？　それより、本命が来る」

開いていた隣のコースに並ぶのは、翠の髪と豊満なバストを誇る、書主さんの家族である日影さん。

そしてそのパートナーを務めるのは赤毛に近い茶髪を長く伸ばし、ツインテールに纏めた勝ち気そうな女子生徒。

書主さんの話では、彼女がパートナーになった事で、日影さんはかなり本気に近い状態で走れるようになってしまったらしい。

……日影さん、オカ研メンバーで一番動体視力の高い祐斗先輩の目にも映らないくらい早いんですけど。

「日影さん、改めて言うけどさ」

「なんや？」
「体育祭でパートナー厳選とか大人げないわ」
私自身、詳しく聞いたことはないのだけれど、なんでも文武両道で知られている結構な優等生らしい。
実家がボブ術の道場だとか、実は鬼斬の血筋だとか、妖怪退治でよく知られる古い武将の末裔だとか、悪魔的には割りと恐ろしい話が伝わっている。
部長が前に眷属に誘いたがっていたのだけど、どうやら血筋やら魂の属性的なあれで悪魔との相性が良くなく、泣く泣く勧誘を諦めていた。
……つまり、神器も特殊な力も無いのに、部長に眷属の候補として目をつけられる程度には、スペックが高い、という事だ。
「せやな。けどまぁ、クラスのみんなも勝ちに行っとるし、手ぇ抜くのもおかしな話やろ」
「童子切さん、そこんとこどうですか」
「別に体育祭に拘る心算は無いけど、負けるよりは勝つ方がいいでしょう？」
ふふん、と笑って好戦的に見せる童子切さん。
なんで二人揃ってこんな乗り気で勝ち気でやる気なんですかねぇ……。
「そうですね、負けるよりは勝つ方がいい。こういう場所なら尚更だ」
ちらり、と、書主さんが顔を私に向ける。
同意を求めての事だろうけど……。
「勝つ方がいい、とは言いませんけど」
別に、体育祭程度で本気で勝ちに行く必要なんて無いんだけど。
視線を観客席に向ける。
「しぃろねぇー！　がーんばーるにゃー！」
観覧している生徒の家族の中、ぴっしりしたスーツに身体を押しこまれて窮屈そうにしながら、ぶんぶんと手を降って応援してくれている姿に笑みを返し、
「今日は、勝ちます」

「うん、勝とう」
ぎゅう、と、書主さんの腰に回した手に力を入れる。
今日ばかりは、頑張ろう。

戦々恐々、という言葉が実に様になる光景だった。
途中で見つけて拾ってきたオカ研メンバーもそうだけれど、結界が解除されてこの場に駆けつけた偉い方々の表情も何処か強張っている。
だけれど、此方としては彼等の心情を慮る理由は無いので、当初の予定通り、いや、当初よりも材料が揃った状態で話を進めさせて貰った。
「……という訳で、サバミソ……もう黒歌さんですか。彼女の指名手配は解除、という事でよろしいですね？」
「今直ぐ、というのも難しい話だ。当然完全に無罪放免というわけにも行かない。それは分かってくれるだろう？」
「でも、全面的に彼女を加害者のままにはしておけない。というのも、理解してますよね」
兵藤先輩を治療施設に叩き込んだ後に設けられたこの会談。
今更もったいぶる必要もないか。
小猫さんの姉である、S級指名手配犯であるサバミソ改め黒歌さんの減刑についての話し合いだ。
「そうだね、今更、真実の全てを隠しておく、というのも難しい話だろう。反発する家はあるだろうけれど、民意というのは無視できるものではない」
「反発する家も少ないと思いますよ。そっちにも手は回してありますし」
あの、小猫さんがゼロ距離竜破斬自爆をやらかした直後、黒歌さんの記述を読んだことから始まった話も、もうそろそろ決着だろう。
冥界の法律に従わない違法な肉体改造を、本人たちの許可無く施す、非人道的な（悪魔だから当然ではあるが、一応今の冥界は表向き人道的な法を敷いている）実験。

これを記述と現地調査、殺されなかった嘗て実験を行っていた連中の関係者の脳内捜査やがさ入れ、過去視なども含めて証拠を集めて回った。

彼女の捕縛、あるいは殺害にやっきになっている連中の大半はこの実験の関係者、あるいはその遺族だ。

これらは違法実験の証拠を提示して黙らせるだけでなく、『かつての凶行に罪を感じて、証言を求められれば素直に証言する』ようになっているし、『罪が曝露される事で名誉が傷つけられる事も許容する』筈だ。何しろ今はそう書いてある。

まぁ、禍の団に所属していたとか、どうとか、そういう部分で問題も多くあるのだが、それはさして問題にならない。

既に本猫（ほんにゃん）からの司法取引の材料として、知る限りの禍の団の情報を吐いているし、所属していた理由も小猫さんを盾に脅されて仕方がなく、という事にしてある。

というか、細かい部分の調整はあちらで勝手にやってもらう手はずになっている。

やらなければ、民衆の間にはかなりの不信と不満がたまる筈だ。

溜まらないなら溜めるし、問題ないのなら問題が起きるようにもしよう。

今回はその為に態々骨を折ったのだから。

「まさか、既に多くの民の間で知られていたとはね」

「がんばりましたから」

何しろ、非道な実験の被害者が、唯一の家族を守るため、自らの危険も顧みずに邪悪な主を殺し、妹に罪を被せないために、何もかもを捨てて、弁明すらする事無く指名手配犯として生きてきた、という話は、冥界ではかなり広まっている。

悲劇性の高い話であり、娯楽に乏しい冥界においてはかなり話題に登りやすく、広まりやすかった。

それがただの噂話であれば問題は無いのだろうが、今回は少し違う。

興味を持った連中が少し調べ回れば、その噂が真実である、という

確かな証拠があちこちにばらまかれているのだ。
もとい、ばらまいたのだ。
「監視は必要になるだろうが……君は手を貸してくれるのかな？」
「それくらいはしますよ。彼女が何か起こした時の責任まで取れ、と言われたら難しいですけど」
それなりに正しくあろうとする魔王さん、何故かこれまでひた隠しにしてきた自分達の身内の罪を素直に告白してくれる貴族達、事実を知って黒歌さんに同情的な民意。
と、まぁ、これだけでもそれなりの結果を望めたのだろうけれど、今回はそれを覆い隠して余りある、黒歌さんの減刑をしなければならない、いや、此方の要求を呑まなければならない理由があった。
「それで、話はこれで終わり、って事でいいのかな？」
隣から聞こえる、歌が上手そうな声。
ちらり、と瞼を開けて視線を向ければ、長い黒髪を根本と先の方で束ねた綺麗な顔立ちの少女が椅子の上で脚を組んで退屈そうにしている。
「ああ、待たせてしまったようで申し訳ないね」
「別に僕は構わないよ。長い人生、こういう寄り道もあるさ。でも……」
する、と、腕を取られる。
「彼の人生、時間は貴重品らしくてね。それじゃ、ちょっとお話しようぜ。無粋な邪魔の入らない場所でさ」

結論から言ってしまえば、今回のレーティングゲームのオチは全て彼女が持って行ってしまったのだろう。
暴れまわる兵藤先輩が？化した蜥蜴もどき、それを抑えていた中身に実験用のメタモンを入れて引き続き動かしていた武州五輪。
文字通り天地鳴動する怪獣大決戦を一息で終わらせたのは、巨大なドラゴンに乗って空間を引き裂いて現れた輪ゴムさんだったのだ。
「その輪ゴムさん、っての、いい加減止めない？」
並んで歩きながら、輪ゴムさんが

「なじみさん、安心院さん、どっちで呼んでもちょっとしっくり来ないし」

結局、この世界でものをいうのは力、という事なのだろう。

覇竜というらしいあの暴走形態を一撃で粉砕する、というのもそうだが、乗り物に使っていたドラゴンが、この世界に於ける最強の存在であるらしい。

そんなものを気軽にタクシー代わりに使うような相手が、よりによって此方に付いてしまったのだから、あちらとしては堪ったものではない。

今回はうらみを買うのを避けるために控えめに、最初に提示した条件に見合うだけの要求にとどめたけれど、彼女が居る状態なら、かなりの無茶を押し通せたかもしれない。

まぁ、そんなのは結局、この世界に定住している此方が最終的にしわ寄せを食らうのが目に見えているのでやろうとも思わないけれど。

「でも、そういう呼ばれ方は新鮮でもある。君になら、許してあげよう」

相も変わらぬ尊大な物言いだ。

死んでいたところを修復され、此方への敵対や攻撃を封じられた状態でめだかボックス全巻を読了し、大笑いした後に勢い自殺までしてしまった情緒不安定な輩には不相応な態度ではないかと思う。

此方に無理やり復活させられて、便利機能があるからと元の世界に帰るまでのガイド代わりにしていた頃を思えば失笑モノだ。

初期にやけっぱちになって寝込みを襲ってきたり、それから旅の終わりまでずるずると関係を続けて、みっともない姿を見せまくったのは自慢のスキルで記憶から消し去ってしまったのだろうか。

「それはどうも。それで、これからどうするの？　泊まってく？」

「なんだ、まだ寂しくて一人じゃ眠れないのかい？」

「いや、今は一人寝じゃないので。うちなら客間も空いてるし、泊まってくなら宿代わりにどうかなって」

「君って奴は、本当に薄情だな」

「薄情ってんなら……いや、まぁ、いいけど。それで？」

「いや、時期的にもうそろそろ卒業してる頃かなって。良ければ一緒に行かないか、誘おうと思ってさ」
「あー……」
そういえばそんな話もいつかした覚えがある。
外に文字ではなく常に絵で見える世界があるなら、そちらで過ごした方が気が楽かな、という程度の話ではあったのだけれど。
「言い難いんだけど、まだこっち戻ってから何ヶ月も経ってない」
「やっぱりね」
「やっぱり？」
「この世界は特別なのかもしれないって話さ。物語の中心、みたいな。案外、君も主人公って奴なのかもしれないぜ？」
「そりゃあいい。その内表紙が貰えるかもしれない」
軽口で言ってみたが、それはないだろう。
この世界に表紙があったとしても、恐らくはこの世界のベースになっている作品の表紙でしか無い。
この世界で誰が主役だろうが、そこに反映される事はないだろう。
まぁ、地球に自分が描かれた絵が大写しで重ねられるというのも恥ずかしい話だから別になりたいとも思わないが。
「ていうか、やっぱり、っていうなら、何で来たのさ」
「ダメ元で取り敢えず誘ってみようかなって」
「少なくとも、直ぐに行くって選択は無いよ。友達もそれなりに居るし」
「そりゃ意外だ」
「でしょう？　それにね、この世界で、この世界生まれの両親に産んでもらって、育てられた訳だし。一応、死ぬまではこの世界で生きてみようかなって」
この世界をどうにか受け入れようと頑張っているのだから、せめて父さん母さんから貰った命を使い切るまではこの世界で頑張るのが筋だろう。
一応、行きたい大学なんかもぼんやりと考えてはいるのだ。
忍者としての仕事も本格的に熟してみたいし、錬金術の研究だって

しっかりしたところでやってみたい。
後半は他所の世界でもできるだろうけれど、いわばけじめというか、自分ルールの問題なのだ。
「ふぅん、まぁ、そこまで決めているのならどうこう言うつもりもないよ。待つのには慣れているんだ、これでもね」
「別に、待ってなくてもいいのに」
「連れないことを言わないでくれ。それに、聞いてみたいじゃないか」
「何を?」
「君の人生。作り物とわかっている世界の中で生きると自分で決められた君のお話だ。正直、気になって仕方がないのさ」
「面白いかは保証しないけど」
「内容なんて無くてもいいんだよ、寝物語なんて、子守唄の様にぼんやり聞ければ。まぁでも」
立ち止まる。
レーティングゲーム参加者用の医務室だ。
ぽん、と背中を押された。
「別の女の話は少なめで頼むぜ」
たたらを踏むように医務室の中に押し出された。
抗議をするように振り向けば、舌を出しひらひらと手を振りながらその場から離れていく。
帰るのか、それとも暫くこの世界で旅行でもするのかは解らないが。
「気を使った、のかな?」
面識のない友達の友達と何を話せば良いのかわからないのかもしれない。
何しろ彼女は何億人と居ても、友人が多いかと言われるとそうでもない。
勿論、此方だって同じ状況ならどうしていいかわからない。
所謂似た者同士でもあるのかもしれないと考えながら、部屋の奥に進む。
広い病室の奥でベッドに寝かされていたのは、魔力枯渇で気絶した

小猫さんだ。
病人服に着替えさせられ、消耗から猫耳を出しっぱなしにしてすやすやと眠っている。
安らかな寝顔だ。
強敵を相手に、やれるだけの事をやりきった満足感があるのかもしれない。そういうのが寝顔に反映されるかは知らないが。
少なくとも、綺麗で印象的な寝顔ではあるのだろう。挿絵として目に映る程度には。
「……」
眠って意識が無いのをいいことに、頭を撫でる。
手触りの良い髪質だが、狙いは勿論猫耳だ。
柔らかい軟骨の感触。
状況が状況なら味も見ておきたかったが、今後の友人関係に支障を来すのは間違いないので自重しておく。
「よくやるもんだ」
戦いが終わった後に駆けつけて聞いた話では、部下Sに相当する存在が現れたらしい。
この世界のまっとうな攻撃が通じる相手でもない。
小猫さんは不完全版の禁呪二つだけを頼りに、見事に打ち勝ってみせた。
此方のお守りがあるとはいえ、中々できることじゃない。
勿論、お守りの隠し機能の事を考えれば、そこまで無理をしなくても生き残る事はできたのだろうけれど……。
「でも、頑張ったね」
その戦いの過程が産んだものは決して無駄ではない。
戦闘経験もそうだけれど、滅びの力も聖剣も龍の力も通用しない魔王級の存在を相手に戦い、被害を最小限に収めたのは間違いなく評価される。
そして、その戦いで自らの身を投げ出して勝利を導いた、という事で、黒歌さんの減刑はかなりやりやすくもなる。
悲劇的なエピソードに加えてのこの英雄的な自己犠牲。

言ってしまえば、小猫さんは黒歌さんの自由を勝ち取ったとも言えるだろう。
結果的に、互いに助け合う形になっている。
美しい姉妹愛、家族愛だ。
手をつくした甲斐がある。

……あの戦いの後の詳しい顛末に付いては聞かされていない。
結界のせいもあって、あの場で起きたことを殆ど誰も正確に把握出来ていないからだと言われているけれど、要するに緘口令が敷かれているらしい。
イッセー先輩の神器の暴走もそうだけれど、異界の魔王の存在、それが禍の団によって完全ではないとはいえ使役されているという事実も、公にするには難しいらしい。
だから、私が知っている事と言えば、あの戦いで私を庇ってくれたのが間違いなく黒歌姉様であり、過去の暴走の件が冤罪であり、そこら辺も纏めて減刑されて、一応の監視付きとはいえ、自由の身になった、という事くらいか。
勿論、他にも色々と話しは聞いた。
アーシア先輩が実は生きていて、親切な誰かに助けてもらえたこと。
イッセー先輩がすんでのところで暴走を解除して貰い、寿命を大幅に減らしつつも生き延びれた事。
砕けたデュランダルはゼノヴィア先輩が地道に欠片を拾い集めて、接着剤で取り敢えずの補修を試みている事。
顔面に大きな傷を負った祐斗先輩が『かっこいい感じに傷を残せないかな、鼻の上に横一文字な感じとかで』と医者に言ってみたら、即座に麻酔を打たれて黙らせられた事……。
本当にどうでもいい後半の部分を置いておくとしても、殆ど私が気にするべき問題ではないと思う。
ので、私としては、多少の困惑は残るものの、姉様の無事と減刑を喜びたい。

喜びたいのだけれど、私にはどうしても気になる疑問が残っていた。

それを聞く機会が無く、結局体育祭までずるずると聞けずに居たのだけれど……。

（無事にゴール出来たら聞こう）

素直に、今日までの暇な時間に聞いておけばよかった。

数十メートル下に見えるゴールを、上空から見下ろしながらそんな事を思う。

まさか、スタートと同時にコースが爆発するとは思わなかった。

「因みに自由形の自由、最終的に実行委員会が好きに競技内容を改ざんできる、という意味での自由に纏められたらしいよ」

足首に結ばれた紐で繋がった書主さんが呑気に言う。

「先に言いましょう。先に言いましょうそういう事は……！」

「言われてもこの内容は予測できないし……。それはともかく、走ろう」

「足元に地面が無いんですが」

「他の組はもう走りだしてるよ」

「そんな馬鹿な話が」

と、周りを見れば、自由落下中の他の組も、様々な方法で空中での加速を試みている。

漫画のように空中で泳いでみるもの、飛ばされたグラウンドの破片を蹴って加速するもの。

更に言えば、日影さんと童子切さんのペアは普通に何もない空中を蹴ってゴールに走り始めている。

物理法則さんは本日お休みですかそうですか。

「みんな人間でしたよね。この学校、メインはみんな普通の人間でしたよね!?」

「人間だけが神を持つって言うし」

「死んでますよ神様！」

「日本には宗教の自由があるので」

「人間ってきたない……！」

普通の人間相手の競技なんて楽勝とか思っていた時間が懐かしい。
翼を出すのは不味いので、飛翔か浮遊の詠唱をしようとしたところで、姿勢を直した書主さんにがっしりと腰を掴まれた。
「さぁ走ろう」
「せめて飛びましょう」
「詠唱してる間にゴールされる。さあ、右足が空気に沈む前に左足を踏み出して、次は左足が沈む前に右足で踏み込むんだ」
「無理です。忍者じゃないので」
「魔王殺し（デモン・スレイヤー）ならやれるって」
「できてたまりますか……！」

できた。
死に瀕した肉体が限界を超えてみせた感がある。
たぶん再現性は薄い。というか、できてもやりたくない。今度は普通に飛ぶ。
因みに日影さんのチームとは同着だった。
あそこまで頑張って同着というのも納得行かないけれど、たぶん私より先に躊躇いなく空中を走ろうと試みたであろう事を考えれば、同着でも良いほうなのだと思う。
「生きてるって素晴らしい……」
「大げさな。あの高さなら普通に着地できるでしょうに」
「いや、気持ちの問題なので」
戦闘中とかならともかく、体育祭の競技であの高さに吹き飛ばされると心の準備がどうにもならない。
スペック的にできるからって、私は普段からビルより高いところから落ちる心構えなんてしていないのだ。
校舎裏の日陰にぐったりと座り込む。
本当ならクラスメイトのところにいって応援に加わるべきなのかもしれないけれど、今は少し、静かに休みたい。
「はい」
「ん」

差し出されたスポーツドリンクのペットボトルを受け取る。
結露で水滴が付くほどに冷やされたボトルが気持ちいい。
少しだけ顔に当ててから、蓋を開けて中身を口の中に流し込む。
「ふぅ……」
少しだけ、落ち着いた。
体育祭の歓声も、スピーカーから流されるＢＧＭと実況もここからは小さく聞こえる。
競技を終えて休憩中の生徒も此処には他に居ない。
この場に居るのは、私と書主さんだけだ。
思えば、あのレーティングゲーム以来、登下校の時間を除いて、二人きりでゆっくりと話せる時間は無かったようにも思える。
「聞いていいですか」
「んー？」
隣に座り込み、ペットボトルを傾けていた書主さんに、それとなく、聞いてみる。
たぶんだけど、私が抱いている疑問の答えは、書主さんに直接聞くのが正しい。
姉様を秘密裏に匿って、放課後や休日に密かに冥界まで行って何年も前の実験の証拠を集めて、姉様の罪が軽くなるような材料まで集めて、散々断っていたレーティングゲームの観覧に来てまで魔王様に直々に頼み込んだのは、他ならぬ書主さんだ。
魔王様とか、姉様とか、日影さんとか、他の誰かに言っているかもしれないけれど、やっぱり、こういう話は本人から直接聞いたほうが良い。
「なんで、姉様の為に、あんなに頑張ってくれたんです？」
「んー……」
だって、理由がない。
姉様と書主さんの面識は無かった筈だし、あの初対面で姉様を助けたくなる様な理由もない。
姉様は美人だけど、美人である事は書主さんの琴線に触れるほど重要なものではないだろう。

そもそも、異性として見たら性格にわかりやすい程難がある。
私の姉様である、という点で見ても、せいぜいが友人の姉、そこまで手間を掛けて助けようと思うものだろうか。
次の台詞を待っていると、書主さんが何かを思い出すように顔を斜め上に向けて語り始めた。
「昨日さ」
「はい」
「母さんがゲン担ぎのためって事で、夕食にカツカレー出してくれてね？」
「すごく日本的」
「移住してからそれなりに長いらしいから。で、そのカレーのレシピ、路地裏時代に執拗に命を狙ってきた教会のエクソシストから教わったレシピだって、なんだか自慢気でさ」
「なんでエクソシストに狙われてたかって聞きたいんですけど聞いて良いんですか」
「それはおいおい。で、カツを余分に作ってたから、お弁当にも何らかの形で流用すると思うんだよ。おにぎりの具がカツとか」
「肉々しい……。でも、美味しそう」
「でしょう？」
……。
「あれ？」
「はい？」
顔と顔をあわせて互いに首を傾げる。
「いや、姉様を助けてくれた理由……」
「？　今、話したじゃないですか」
きょとんとした顔でそういう書主さん。
さっきの話では
姉様は教会のエクソシストだった……？
いや、むしろ、
「カツが姉様肉のカツ……!?」
「猫食う文化は母さんの地元でも無いと思うなぁ」

「冗談ですよ。……で？」
「いや、だから、今みたいな話をしたかったんだって」
「？」
「これからは小猫さんも、家族の話、気兼ねなくできるでしょ？」
「……それだけ？」
「大事だよ？　家族のネタ話せるって。何しろ此方は家族大好きなので」
「前々からしてたじゃないですか」
「でも子猫さん、家族の話になると寂しそうだったし、気兼ねはしてたんだよ、これでも」
……。
ええ、と。
それじゃ、つまり。
「私のため、ですか？」
「結果的には」
「じゃあ、原因的には？」
「小猫さんと、楽しく色んな話がしたかったから、かな」
結局それ、徹頭徹尾私のため、って事じゃないんですか？
口に出しては言えない。
言えばきっと、『此方の楽しみを増やす為だから此方の為じゃない？』とか、そんな事を言われてしまう。
それが間違いなく事実だとしても……。
彼が、私の抱えていた問題の為に、力を尽くしてくれた、というのが、助けてくれたということが嬉しかった。
「ありが……と」
辛うじて、感謝の言葉を絞り出す。
もう、疑う必要も無くなる。
私は、姉様に捨てられた訳じゃないって。
私が、姉様に愛されているんだって。
嫌わなくても、憎まなくてもいい。
私が、私は、姉様の事が、大好きでいていいんだ。

胸を張って、姉様を姉様と呼べて、姉様が好きだと言えるんだ。
それが、どうしようもなく、嬉しい。
視界が滲みそうになり、瞼を閉じる。
胸の中の暖かさを噛み締めて、漏れそうになる嗚咽を飲み込む。
「う……？」
身体が傾く。
肩に腕が回され、隣に座る彼の胸に頭を預ける形になっていた。
頭を掻き抱く様にされて、顔が半分書主さんの胸元に埋もれてしまう。
……少しだけ、自分から身体を預けたような気もするけれど。
「あの」
鼻声になってしまっている。
「うん」
静かに頷いてくれた。
頭の上から聞こえる声が、いつもより少しだけ優しい。
「少し、騒がしくしてしまうかもしれません」
「たぶんグラウンドが騒がしくて聞こえない」
「服、少し、汚してしまうかも」
「いいよ、どうせ体育祭だし。涙くらい――」
「涙じゃないです」
「そうですか」
ぽんぽんと、頭を軽く掌で叩くように撫でられる。
同級生で、それなりの友人で、対等なのに。
まるで子供をあやすような手つき。
でも、たったそれだけで、私の我慢は限界に達してしまって。
「う、ううぅぅぅぅっ」
低く唸るように漏れだした声は、グラウンドから聞こえる音楽にかき消される事無く。
私を泣かせてくれた書主さんの耳を少し痛くしただけで、そのまま校舎裏の空に消えていった。

放課後のラグナロク
五十三話　かくも穏やかで平和な日常

雀の美味しそうな鳴き声、カーテンの隙間から降り注ぐ少し体力を奪う光に、ゆっくりと布団から身体を起こす。
朝が来た。
夜更かしをした訳でもないけれど、朝の寝起きはやっぱり少し気怠い。
自分でも自覚できるくらいにのっそりとやる気のない動きでベッドから身体を起こす。
今日も今日とて学校に出なければならない。
顔を洗い、身だしなみを整え、朝食を食べて、制服に着替えて。
これだけなら寝起きのノロノロとした動きでも遅れることはない。
シャワーは……。
「うん」
大丈夫。
寝汗を少しだけ吸ったシャツさえ交換してしまえば気にならないだろう。
取り敢えず、洗濯カゴにでも入れておけばいい。
そう思いながら、ベッドから降りる。
「ぶみゃ」
ぐにゅ、という奇妙な感触を足裏に感じると共に、豚ともウサギとも取れない鳴き声が聞こえる。
あれ、と思いながら足元を見れば、
「姉様」
漫画チックな足跡を後頭部に付けた、姉様……姉様？
二頭身のぬいぐるみのようなデザインの怪生物が転がっていた。
しゃがみ込み、ころんとひっくり返してみる。
「う……にやっ！　にゃうぉぅぅぁぅ……むにゃぁ」
小学生でも書けそうな程簡単なデザインの猫顔で鼻提灯を膨らま

せ、口の端からだらしなく涎を垂らし、短い前足を虚空に向けてシュッシュと振るう様は普段の姉様が見せることのない……色んな意味で見せることのない醜態だ。

なんというか、普段の人間とそう変わらない姿の姉様に目を奪われている方々には非常に申し訳なくなる有様に、思わず笑みが溢れる。

こんな姿が見れるのは、多分、この世で私だけかもしれない。

無警戒で、リラックスしきって……。

何に怯える事無く眠る姉様。

私は、私を構成する何かを失う事無く、白音として、そして塔城小猫として、姉様と一緒に暮らせている。

それが、凄く幸運で、幸せなことなんだと思う。

「姉様、もう朝ですよ」

「うにゃうぁぁう……」

野良気質は何処に消えたのかという程に眠り続ける姉様。

今日は取り調べも他の用事もないから寝かせておいて上げても良いのだけど……。

せっかく姉様と一緒にいるのだから、たまには一緒に朝ごはんを食べたい。

眠り続ける姉様の後ろ足を掴んで持ち上げ、洗面所に向かう。

顔を洗って、シャツを洗濯カゴに入れるついでに姉様を起こしてしまおう。

「そしたら、姉様怒っちゃって」

通学路を歩きながら、書主さんに姉様との喧嘩とも言えない些細なじゃれ合いについて話してみる。

話してみる、といっても、詳細まで話すわけではない。

姉様も私も女性である以上プライベートな部分では男性に話しにくい部分もあるし、別に私の取った行動を事細かに精査して評価してもらいたいわけでもないのだ。

恐らく、朝シャワーを浴びる時の癖で洗濯物と間違えて姉様を頭から洗濯機に入れてスイッチを入れてしまったところまで話をしたら

ドン引きされるか大爆笑されるに違いない。
　脱水完了するちょっと前に気づけたからセーフなのだから別に言う必要もないだろう。
「あー、やっぱり運び方が？　首の後ろの皮を持つ感じがベスト的な」
「あれ、大人の猫は苦しいだけだから止めた方がいいですよ」
「へえ、まるで猫博士だ」
「ええ、でも、猫博士じゃあないですよ」
　どちらかと言えば猫そのものなので。
　因みに私は猫の姿になる事は殆ど無いので苦しいかどうかはわからない。
　……まぁ、今の身体の成長具合から考えると、猫の状態なら別に苦しくはないと思うんですが。
「……まぁ、あの形の姉様はどういう生き物かイマイチわからないってのもあるんですよ」
「似たような形状の妖怪を参考に考えるとかなり頑丈だと思うよ。トラックに跳ねられたり轢かれたり程度なら大丈夫、だったかな？」
「すごいですね、まるで猫博士だ」
「いや、ただの猫博士じゃないよ」
　姉様のあの姿は書主さんが匿う上での副作用のようなものらしいけれど、それを踏まえても知識量がある。
　というか、姉様の生態への理解が深い。
　まるで猫博士……ではなく、やっぱり、それなりの期間姉様を匿っていたからかもしれない。
　少し妬けてしまう。
　妹の私よりも姉様の事を知っている書主さんにも、姉様にも。
「実際、あんな見た目だけど生態は対して小猫さんと変わらないしね。猫に関する知識より、重要なのはサバミソ……黒歌さん？　個人の趣味嗜好とか生活形態とか、一緒に暮らしてみてどうか、とかじゃない？」
「そういう部分は詳しくないんですか？」
「んー……」

瞼を閉じたまま空を見上げる書主さん。
「香り付きのそれなりに高級な猫砂とか消化を助ける猫草の植木鉢とか買ったんだけど、ああいうのはお気に召さないみたいだなって」
「なるほど」
頷き、私も空を見上げた。
青い青い空に白い白い雲。
暑さも治まってきたけれど、晴れやかな日差しは容赦なく肌と目を焼いてくる。
「……野良生活長かったから、土に近いほうが良かったのかもしれませんね……」
「なるほどなー……」
青空に、猫砂を前に怪訝な顔をする姉様の姿が浮かんだ気がして。
姉妹でも、もう少し気を使ってあげないとな、と、そんな事を考えた。

平穏な時間が過ぎゆく、学び舎に通う人間達は、いや、悪魔達ですら、闇の世界で蠢くものどもの事を意識すらしていない。
勿論、此方も意識しない。
例えばの話だが、校舎内に侵入した幾人かのニンジャが常人に察知されない速度で戦闘していたとしても此方の知る所ではない。
此方は今、学生として学校に通っている。
即ちニンジャとしてはオフの期間なのだ。
そして、ニンジャとしての生活を切り離して考えたなら、最近は実に平和な日々が続いている。
「ちょっと、聞いているの？」
「聞いてないですけど」
新校舎の放課後の様に生徒達の生み出すざわめきの少ない旧校舎には、実に穏やかな時間が流れている。
しかもなんと、オカ研で使われている紅茶の茶葉は結構な高級品だったりもする。
挙句、タイミング次第では、オカ研の副部長さんが紅茶を振る舞っ

てくれるので自分で淹れる必要すらない。
個人的には、新校舎で稀にスペースを借りている木工ボンド部に比肩するレベルで落ち着くカフェスペースだと思うのだがどうだろうか。
「……貴方の活動が、この街の治安維持に一役買っている、というのは理解しているわ」
さて、では何故、全ての授業とＨＲを終えた此方が、放課後に学校に留まって時間を潰しているのか、と言えば、やはり日影さんが原因なのだ。
日影さんは口数も多くないし、時たま空気も読まない部分があるが、踏み込んではいけない最後の一線は大体護るし、それでいてギリギリのラインでズケズケと物を言う事もあるのでコミュ能力がそれなりに高く、友人もそれなりに多い。
そこに、付き合いの良さと運動神経の良さが加われば、放課後に部活動の助っ人に借り出される事も多くなってくる。
そうすると、一緒に家に帰る為には日影さんの助っ人活動が終わるのを待たなければならない。
「でもね、禍の団の神器使い達が何の目的でこの町に訪れているかはまだ判明していないの」
勿論、毎日毎日一緒に帰るというわけでもない。
が、あまり別々に帰る日々が続くと、日影さんが拗ねてしまいとても可愛らしい。
気持ち程度にむくれている日影さんの姿の、その可愛らしさを誰が知るだろう。
それでいて、途中から拗ねながらも此方にちょっかいをかけて構って貰いたそうにするところとか。
それでも構わずに居ると唐突に引っ付いてきて、『機嫌直したいから、構ってや』と直球を投げてくる。
それもうある意味機嫌治ってない？
そんな疑問が吹き飛ぶ程に拗ねデレ状態の日影さんが可愛い。
……いや、可愛らしいは重要だが今は関係ない。閑話休題。

とにかく、日影さんとの円滑な関係の為にも、そして日影さんと一緒に帰る楽しい帰宅時間の為にも、此方は放課後にある程度時間を潰す必要が出てくる訳だ。

「だから、出会ったテロリストを皆殺しっていうのは控えてもらえないかしら」

じゃあ、此方が日影さんを待つ為に、放課後を友人が多少居る楽しいスペースでおしゃべりしたりお茶やお菓子を楽しんだりしているだけかと言えばそれも違う。

学生としての時間は休息の時間もふくめて学生だが、放課後の自由時間の全てを学生として過ごしているという訳でもない。

かといって、休業中のニンジャとしての活動をしている訳でもない。

放課後、オカ研見学、友達との談笑、お茶とお菓子、これらを同時に楽しみつつ、ＴＰＯに反しない活動を行っている。

「書主さん、それ、何してるの？」

「んー、内職」

森先輩からの説教をＢＧＭとして聞き流し、隣に座ってきたギャスパーの質問に答えながら、点字式タブレットを操作し続ける。

覚えている限りの挿絵を持つ存在を複製できる此方ではあるが、現実的に考えれば、人間大の生物を一つ作るのだって、結構な手間が掛かるものなのだ。

人間も悪魔も、今やクローンである程度は簡単に複製できてしまう時代ではある。

が、それはあくまでも、人間や悪魔が本来男女間で行う性交渉の結果から、誕生、成長までの過程を、生体の外で機械を用いて再現しているに過ぎない。

元からある製造工程をなぞる、というのは、ある程度科学技術が発達していればそう難しい事ではない。

なにせ明確な成功例の手本があり、それをなぞればいいのだから。

そういう意味で言えば、錬金術から発生したホムンクルスの製造工程というのは、非常に独創的であると言える。

生物の誕生にまつわる様々な現象が未解明な時期に、未解明なりにどういう工程を経る事によって生物が誕生するかを推理し、理解できない部分を別の技術で補った結果が詰まっている。

原始的な、というより、古い時代のホムンクルス製造法の文献などは読んでいて非常に面白い。

精液を何ＣＣ用意して煮詰めて、など、実際にやったらご近所迷惑な事になりかねない珍製造法を始めとして、手探り感溢れる様は先人の苦悩が垣間見えるようだ。見えないが。

そして、その面白さは科学技術をある程度取り入れた現代の錬金術でも変わらない。

知らないままにある程度の成功を収め発展し続けてきた様々な技術は、現代科学にはない神秘との密接な関係が残されている。

なんというか、知的活動でもあり、求道でもあり、或いは懐古でもあり。

科学とはまた違った楽しみがある。

なにより、此方の母は錬金術士だ。

それだけで此方が科学でなく錬金術を深く学ぶ理由になるだろう。

「……それって、今やるべき事なんですか」

ギャスパーとは反対側に座ってきた小猫さんに、同じくタブレットを操作しながら応える。

「うーん、ほら、ソシャゲとかでスタミナの自動回復が無駄になるのが嫌いな人とか居るじゃない。あれと大体同じ」

ある程度は放置してもいい、というか、自動化がかなり進んでいるのであまり手を入れる必要は無い。

無いと言えば無い、のだが……。

個人的な、それこそ、どこに提出するでもない単純な錬金術の研鑽に使う実験用のものである以上、ふと思いついた使い道の為にスペックを調整する場合もあるのだ。

そうでなくても、朝や夜の運動兼ストレス発散で練習できる忍術に較べて錬金術を研鑽する時間はそう多く取れていない。

実は夏休みの間に何日かアトラス院を始めとする錬金術士の居る

施設に忍び込みエーテライトで色んな人の研究成果をゴニョゴニョする計画があったりもしたのだが、それは１０＋αのリマジな感じの世界を巡る旅とか輪ゴムさんのスカートの中に頭とか頭（意味深）を突っ込んでｐｒｐｒしたりｍｇｍｇしたりの旅とかで消えた。あとボーグバトルの世界大会観戦。

とある世界で人造の鬼械神を作る為の技術としての錬金術とかも学べたと言えば学べたのだが。

「……あの、小猫さん？　ギャスパー？」

「はい」

「は、はい」

「なんで二人共此方の腕を抓るの？」

ギャスパーは、まぁ、控えめにつまむ感じだけれど。

小猫さんのは、こう、洒落にならない。

首がねじ切れていようとも絞められた結果なのだから絞殺だろう、みたいな威力だ。

電車に轢かれて中身の肉と骨が完全に潰れても切れない事もある程に人間の皮膚は頑丈なのだが。

もうそろそろビリィツ！　っていきそうで怖い。

ニンジャだから兵糧丸食えばそれくらい治るけど、痛いのを完全に受け入れている訳ではないのだ。

というか、実際なんでつねられているのか皆目検討もつかない。

「なんだかいやらしい顔をしていたので」

「ご、ごめんなさい……」

堂々と言い切る小猫さんに、小さくなって謝るギャスパー。

二人の性格が如実に現れているが……。

「いやらしい顔したらつねられるなら、兵藤先輩こそつねられるべきじゃないかな。常に」

「え、俺?!」

部屋の隅っこでアーシア先輩と一緒に気配を殺して怒れる森先輩から遠ざかっていた兵藤先輩が驚いたような声を発しているが、貴方以外に誰が居るというのか。

そもそもいやらしい顔と言えば兵藤先輩、兵藤先輩と言えばいやらしい顔だ。

此方をいやらしい顔をした罪で裁くというのなら、まず兵藤先輩から裁くべきではないか。

そしてそれで満足して此方のいやらしい顔は見逃してもらうべきではないか。

「イッセー先輩は今更です。それにそれだとイッセー先輩のいやらしさと並べて比較される事になりますけど」

「なるほど、それは屈辱的……。解った。このつねりは大人しく受け入れよう」

「扱いが酷い！　扱いが酷いぞ後輩ども！」

「すみません一年ほど先に生まれてきたという事実以外で先輩として敬う理由が見当たらなくて……」

「やめろよ！　なんか言い返そうとしても言い返す言葉が上手く浮かばないだろ！」

つまり割りと事実……、いや、止めておこう。むやみに人を蔑むべきではない。

あ、でもコミュ能力は割りと高いんだっけこの先輩。

エロ活動で産まれた悪い評判でそこら辺打ち消しマイナスになっているから分かりにくいけど。

やっぱり表紙の人だからなぁ、主人公気質というやつなのかもしれない。

でもそういう積極性って素直に見習って真似るのは難しいものなので。

多少敬おうと思う。

素直に謝って敬うと調子に乗りそうなので、貢物を捧げる事で尊敬を表現しよう。

「まぁまぁ、今度この間言ってたやつあげますから」

「あれって……あれか？」

「あれです」

「俺、お前ほど先輩思いの後輩は見たこと無いわ」

「そうですか」
ゲロクソチョロいわこの先輩。
この素直さも魅力の内なのだろうか。
女性の好感度の上がり方というのはいまいち理解し難い。
「あれって？」
部室内の状況に我関せずと黒に赤いラインの入っているらしいイカした顔半分を覆う仮面を磨いていた木場先輩が聞いてきた。
兵藤先輩が少し単純でチョロくても、一発でここまで機嫌をよくできるものとなればやはり気になるものだろう。
浮かれている兵藤先輩以外の視線が此方に向いているのを感じる。
「グラビアですよ。ニンジャ系列のニンジャ出版社がニンジャ向けに出しているニンジャグラビア。一般の流通に乗らないから貴重でしてね。前に少し話に出したらどうにか手に入れられないか、って言われていたので」
「ニンジャがゲシュタルト崩壊を起こしそうね……」
副部長さんが呆れる様に言うが仕方がない。
ニンジャ以外に知られていないのにも幾つか理由があるし、出版社名もある程度は伏せなければならないのだ。
「それで、なんて本なんですか？」
「あ、いや、それは別に気にしなくても」
純真そうなアーシア先輩が聞いてくる。
それを兵藤先輩が止めようとしてくるが、聞かれたならば答えなければなるまい。
わりと貴重品なのだ。部屋の掃除をしている最中に間違って捨てられてしまったら可愛そうだし。
「『２０××年度対魔忍捕縛者目録～感度３０００倍になった程度で私たちは屈しない！～』ですね」
しん、と、部屋の空気が停止した。
余りに話を聞かず、別の話を続けていた此方を怒鳴りつけようとしていた森先輩までもが、叫ぶ一歩手前の状態でピタリとその動きを止めている。

呼吸音すら聞こえない。
此方の耳に聞こえる部室内の音は、家電の作動音を除けば彼等の心臓が血流を生み出す音のみ。
誰も動けない。
いや、動かない。
それが動き出す為の停止である事は明白だが、動き出した後の矛先は此方で無いので知らない。
「なるほど、『２０××年度対魔忍捕縛者目録～感度３０００倍になった程度で私たちは屈しない！～』か」
「ええ、『２０××年度対魔忍捕縛者目録～感度３０００倍になった程度で私たちは屈しない！～』です」
動き出したのは、そういう方面に理解の深いゼノヴィア先輩だ。
処女の匂いが消えていないので、適当な相手と実戦を行った訳でもなく、あくまでも知識上での理解ではあるのだろうが。
因みに、本の中身は捕縛された対魔忍が洗脳調教を受けている姿の無修正版である。
音声記録なども付録ＣＤに収録されており、実際に見たならリアクションは大きく変わるだろう。
児戯にも等しい戯れで腰砕けになるような人だし。
「……タイトル通りの本ですか？」
「いや。屈さないって言うのは嘘。屈してる」
何処の馬鹿だったろうか、自分が３０００倍の感度に慣れることが出来たから、他の対魔忍も同じ事ができるとか考えた馬鹿は。
出版直後に速攻で検閲入って対魔忍達から出版社自体が襲撃を受けた為原本は吹き飛んでおり、今や初版本が僅かに残るのみ。
さもありなん。
この本は調教過程も書かれている為、対魔忍をどうすれば従順な生トイレにできるかという知識が詰め込まれていると言って良い。
対魔忍は少しばかり特殊な立場にあるためエロ拷問訓練の過程を省略する事も可能なので、通常の忍者に通じる訳でもないが……対魔忍にとっては割りと危険な代物だ。

そんなものを放っておいていい筈がないと考えたからこその襲撃だろう。

そこまで恐れるなら人道的見地からの訓練過程省略とか考えなければいいのにとは思うが。

「イッセー？」

「いや、えっと、違う、違うんです部長！」

「何が違うんだろう」

「Ｒ１８じゃなくてＲ元服だから読んでも違法じゃないって言いたいんじゃないですかね」

因みに捕縛した対魔忍への尋問とか洗脳の過程で行われている行為は表社会なら確実に違法だし、一般流通に載せようとしたら速攻で差し止め食らって店頭に並ぶ前に回収される内容だ。

そこを踏まえた上でエロい関係に持っていきたい森先輩に下手な言い訳をしようとするのは悪手だと思うのだがどうか。

逆に一緒に見て『こういうプレイがしたいです！』とか言えば一発で仲が進展するか破局するかで話が進んで良いんじゃないだろうか。

ほら、もう捧げるような童貞は失くしちゃっている訳だし、初めて同士を交換した相手さんなら照れながらも受け入れてくれるだろうし。

「……書主さん、何処でそんなモノを手に入れたんですか」

「離して貰えれば話しますが」

「このままでも話せますよね」

何故だか小猫さんの視線と指が痛い。

悪魔補正か何かで格闘してるとは思えない程柔らかくてさわり心地の良い指なのに凄い威力だ。

もったいないのでもう少しソフトに摘んで欲しい。

まぁ、別に勿体ぶるような話でもないから話すけど。

「あれは、そう、受験を控えた去年の春の事だったかな。中学の時もそうだったんだけど、学校に通っている間は学業優先って事でニンジャとしての仕事は半ば開店休業状態だったんだけど、それを知らない知り合いのユキカゼってのが……」

「書主さん、上がったで。帰ろ」
と、話し始めた所で日影さんが戻ってきた。
聞いている側からすれば触りも触りの部分だけになってしまったけれど致し方ない。
「それじゃ、此方はこれで。小猫さんも皆さんもまた明日」
「あ、ちょっと」
常人なら千切れかねないレベルの力で掴まれていた脇腹の辺りの服と肉の摩擦力を忍術でファイファイして拘束から逃れ、入り口から顔を出していた日影さんの元に、そしてそのまま部室の外へ。
詳しい話は次に聞かれた時でいいだろう。
実際、本の製造工程はともかく、対雷遁用の罠への対策の杜撰さは笑い話を通り越して愚痴になるから聞かせるのも忍びないのだ。
そう、ニンジャだけに、忍びない……！
「……」
「……何？」
日影さんの半眼から視線が突き刺さる。
「いや。書主さんの家系は冗談のセンスは無いなぁ、ってな」
「両親譲りだからね、仕方ないね」
エルトナムさん辺りなら、もうちょいユーモアがあったのかもしれないけれど。
親戚筋の中でも狂人扱いだから交流もそんなに無いしなぁ。
それはさておき。
「それで、今日はどんな部活の手伝いをしてきたの？」
「脚でやるバレーみたいの。練習試合で人が足りんからとか頼まれてなぁ」
「あー、セパタクローはハードル高いからねー。メジャーじゃないし」
「でもそれなりに楽しかったで」
「そのうち、知り合い集めてやってみる？」
「今時期、集まるか？」
「どうかなぁ……？」
帰れば丁度夕ご飯の時間だ。

それが終われば予習復習、日影さんと夜の散歩にでも行こう。
何事もないけれど、満ち足りた時間だ。
今日がそうであったように、明日もこんな風に過ごせたらな、と。
掌に伝わるひんやりとした日影さんの体温を感じながら、そんなことを考えた。